

# 伏見城跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 伏見城跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび総合庁舎整備事業に伴う伏見城跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成19年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 伏見城跡
- 2 調査所在地 京都市伏見区竹中町640番地
- 3 委 託 者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2005年6月3日～2006年9月1日
- 5 調査面積 4,435m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 山本雅和・大立目一・櫻井みどり・能芝妙子・加納敬二
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「丹波橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 1区・2区・3区それぞれで通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。  
一つの遺構を複数に分割して説明する場合は、番号の後にアルファベットの  
大文字を添えた。
- 13 遺 物 番 号 遺物種類ごとに通し番号を付した。瓦は「瓦」、木製品は「木」、金属製  
品は「金」、銭貨は「銭」、石製品・ガラス製品は「石」、骨角製品は「骨」  
を通し番号の前に付けた。また、複数の素材で作られた遺物は、適宜、  
いずれかの遺物種類に振り分けた
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は調査担当者が行った。
- 15 基準点測量 宮原健吾が担当した。
- 16 本 書 作 成 山本雅和・大立目一・櫻井みどり・能芝妙子・山口 眞（執筆の分担は  
目次に記した）
- 17 編 集 ・ 調 整 山口 眞・児玉光世

# 目 次

第1章 調査の経緯	(山本)	1
1 調査にいたる経緯		1
2 調査の経過		1
3 整理・報告書作成の経過		3
第2章 遺 跡	(山本)	5
1 遺跡の位置と環境		5
2 周辺の調査		7
第3章 1区の調査		9
1 1区の遺構	(能芝・櫻井・山本)	9
(1) 基本層序と遺構の概要		9
(2) 第1面の検出遺構		11
(3) 第2面の検出遺構		18
(4) 第3面の検出遺構		26
(5) 墓地		32
2 1区の遺物	(大立目・櫻井・山本)	63
(1) 遺物の概要		63
(2) 主要な遺構出土遺物		64
(3) その他の遺構出土遺物		87
(4) 墓地出土遺物		88
第4章 2区の調査		130
1 2区の遺構	(能芝・櫻井・山本)	130
(1) 基本層序と遺構の概要		130
(2) 検出遺構		132
(3) 墓地		138
2 2区の遺物	(大立目・櫻井・山本)	140
(1) 遺物の概要		140
(2) 主要な遺構出土遺物		140
(3) その他の遺構出土遺物		154
(4) 墓地出土遺物		156
第5章 3区の調査	(山本)	159
1 3区の遺構		159
(1) 基本層序と遺構の概要		159

(2) 第1面の検出遺構	160
(3) 第2-1面の検出遺構	161
(4) 第2-2面の検出遺構	164
(5) 第3面の検出遺構	166
2 3区の遺物	167
(1) 遺物の概要	167
(2) 主要な遺構出土遺物	168
第6章 まとめ	169
1 遺構の変遷 (山本)	169
(1) 室町時代	169
(2) 桃山時代	171
(3) 江戸時代	173
2 墓地の変遷 (櫻井)	175
付論1 京都市伏見区出土人骨の人類学的所見 (藤澤珠織・片山一道)	188
付論2 出土漆器の材質・技法に関する調査 (北野信彦)	191

## 図 版 目 次

図版1 遺跡	1 調査地遠望(西から)
	2 調査地遠望(東から)
図版2 遺構	1 1区第1面全景(北から)
	2 1区溝130(上から)
	3 1区溝529・土壌530(西から)
図版3 遺構	1 1区竈98・112(南から)
	2 1区竈53・54検出状況(南南東から)
	3 1区土壌645枡検出状況(西から)
	4 1区土壌706A・B(西北西から)
	5 1区土壌1020A・B(西から)
図版4 遺構	1 1区第1面墓地全景(東から)
図版5 遺構	1 1区第1面墓地西部(北から)
	2 1区第1面墓地東部(北から)
図版6 遺構	1 1区埋葬340(東から)
	2 1区埋葬313(南から)
	3 1区埋葬351人骨出土状況(北から)

- 4 1区埋葬190掘形人骨出土状況(北から)
- 5 1区埋葬200掘形遺物出土状況(北から)
- 6 1区埋葬403・404(東から)
- 7 1区埋葬416(北から)
- 8 1区埋葬595(埋葬263・264)(西から)
- 図版7 遺構
- 1 1区埋葬288人骨出土状況(北から)
- 2 1区埋葬560人骨出土状況(西から)
- 3 1区埋葬421(埋葬341)遺物出土状況(北から)
- 4 1区埋葬323遺物出土状況(北から)
- 5 1区埋葬237遺物出土状況(西から)
- 6 1区埋葬243人骨・遺物出土状況(東から)
- 7 1区埋葬627人骨・遺物出土状況(南東から)
- 8 1区埋葬342人骨・遺物出土状況(北から)
- 図版8 遺構
- 1 1区埋葬413蓋板検出状況(東から)
- 2 1区埋葬413人骨出土状況(東から)
- 3 1区埋葬413完掘状況(東から)
- 4 1区埋葬413下部構造(北西から)
- 5 1区埋葬450蓋石検出状況(北西から)
- 6 1区埋葬450完掘状況(北から)
- 図版9 遺構
- 1 1区埋葬187方形木棺縄痕(北から)
- 2 1区埋葬193方形木棺縄痕(北西から)
- 3 1区埋葬207方形木棺縄痕(北から)
- 4 1区埋葬188方形木棺縄痕(北から)
- 5 1区埋葬403・404円形木棺縄痕(西から)
- 6 1区埋葬298掘形遺物出土状況(北から)
- 7 1区埋葬410(東南東から)
- 8 1区埋葬410据え付け状況(南東から)
- 図版10 遺構
- 1 1区第2面全景(北から)
- 2 1区溝786(北東から)
- 3 1区土壌1372(西から)
- 4 1区土壌855遺物出土状況(東から)
- 図版11 遺構
- 1 1区土壌1197(西から)
- 2 1区土壌1378(北東から)
- 3 1区土壌1311A・B上部(南から)
- 4 1区土壌1311A・B下部(南から)

- 図版12 遺構
- 1 1区土壌1133(東から)
  - 2 1区土壌1133断面(西から)
  - 3 1区土壌1133東端(西から)
  - 4 1区井戸1189(北から)
  - 5 1区石敷1295(北東から)
- 図版13 遺構
- 1 1区第2面墓地全景(西から)
  - 2 1区第2面墓地西部(北東から)
- 図版14 遺構
- 1 1区埋葬1573・1574人骨出土状況(北から)
  - 2 1区埋葬1029人骨・遺物出土状況(東から)
  - 3 1区埋葬1178人骨・遺物出土状況(南西から)
  - 4 1区埋葬1635方形木棺墨書(北から)
  - 5 1区埋葬1635遺物出土状況(西から)
- 図版15 遺構
- 1 1区埋葬1574遺物出土状況(北西から)
  - 2 1区埋葬1159人骨出土状況(北から)
  - 3 1区埋葬1580遺物出土状況(南から)
  - 4 1区埋葬1140・1140B(北から)
  - 5 1区埋葬1532人骨出土状況(北から)
  - 6 1区埋葬1532円形木棺箍痕(西から)
  - 7 1区埋葬1621掘形遺物出土状況(南から)
  - 8 1区埋葬1542人骨出土状況(北から)
- 図版16 遺構
- 1 1区埋葬1833人骨出土状況(北西から)
  - 2 1区埋葬2213遺物出土状況(南東から)
  - 3 1区埋葬1677人骨出土状況(南から)
  - 4 1区埋葬1541人骨出土状況(北東から)
  - 5 1区墓地セクション断面(北西から)
  - 6 1区埋葬277・2016・2057断面(西から)
  - 7 1区埋葬1180・1181、土壌2120B断面(西から)
- 図版17 遺構
- 1 1区第3面全景(北から)
  - 2 1区第3面全景(南から)
- 図版18 遺構
- 1 1区溝1660(北から)
  - 2 1区溝1357・1731・2006・2007・2111(北から)
  - 3 1区井戸2021断ち割り(東から)
  - 4 1区柱穴2174・1875・1876・1831(西北西から)
- 図版19 遺構
- 1 2区全景(北から)
  - 2 2区土壌51(東から)

		3	2区土壌51褐色泥土検出状況(東から)
図版20	遺構	1	2区土壌49(北から)
		2	2区土壌49遺物出土状況(北から)
		3	2区土壌48(南から)
		4	2区土壌48遺物出土状況(北東から)
図版21	遺構	1	2区土壌20遺物出土状況(北東から)
		2	2区土壌30遺物出土状況(西から)
		3	2区井戸40断ち割り(南から)
		4	2区井戸50(北東から)
図版22	遺構	1	2区柱穴23・24(北西から)
		2	2区柱穴257(東から)
		3	2区柱穴251(東から)
		4	2区土壌55遺物出土状況(西から)
		5	2区井戸10(北から)
図版23	遺構	1	2区段差と墓地(北西から)
		2	2区埋葬77人骨出土状況(西から)
		3	2区埋葬216人骨出土状況(東から)
		4	2区埋葬214人骨出土状況(西から)
		5	2区埋葬201人骨出土状況(西から)
図版24	遺構	1	3区西壁(南東から)
		2	3区第1面全景(東から)
図版25	遺構	1	3区第2-1面全景(東から)
		2	3区落込み400西端(北北東から)
		3	3区南部柱穴群(北東から)
図版26	遺構	1	3区第2-2面全景(東から)
		2	3区段差(北西から)
		3	3区竈800(北から)
図版27	遺構	1	3区第3面全景(東から)
		2	3区溝931・940(北から)
図版28	遺物	1	区溝130出土土器
図版29	遺物	1	区溝180出土土器、土壌711出土土器(1)
図版30	遺物	1	区土壌711出土土器(2)
図版31	遺物	1	区溝280出土土器(1)
図版32	遺物	1	区溝280出土土器(2)
図版33	遺物	1	区土壌754出土土器(1)

図版34	遺物	1区土壙754出土土器(2)
図版35	遺物	1区土壙754出土土器(3)、土壙746出土土器(1)
図版36	遺物	1区土壙746出土土器(2)
図版37	遺物	1区土壙783・1311・855出土土器
図版38	遺物	1区土壙1372出土土器(1)
図版39	遺物	1区土壙1372出土土器(2)、井戸1189・土壙1133出土土器
図版40	遺物	1区土壙1313出土土器
図版41	遺物	1区土壙2120出土土器(1)
図版42	遺物	1区土壙2120出土土器(2)、第2層出土土器
図版43	遺物	1区溝1660出土土器
図版44	遺物	1区溝1357・2006・井戸2021出土土器
図版45	遺物	2区井戸40・土壙51出土土器
図版46	遺物	2区土壙48出土土器
図版47	遺物	2区土壙49出土土器(1)
図版48	遺物	2区土壙49出土土器(2)
図版49	遺物	2区土壙49出土土器(3)
図版50	遺物	2区井戸10・土壙55出土土器
図版51	遺物	1区埋葬施設出土土器棺(1)、土壙855出土信楽甕
図版52	遺物	1区埋葬施設出土土器棺(2)、土壙746出土信楽大壺、第1層出土焼塩壺
図版53	遺物	1区埋葬施設出土土器(1)
図版54	遺物	1区埋葬施設出土土器(2)、土壙711・920出土埴塼
図版55	遺物	1区埋葬施設出土土人形(1)
図版56	遺物	1区埋葬施設出土土人形(2)
図版57	遺物	1区埋葬施設出土土人形(3)
図版58	遺物	1区埋葬施設出土土人形(4)
図版59	遺物	1区埋葬施設出土土人形(5)
図版60	遺物	1区埋葬施設出土土人形(6)
図版61	遺物	1区埋葬施設出土土人形(7)
図版62	遺物	1区埋葬施設出土土人形(8)、3区土壙55出土土人形
図版63	遺物	1区出土漆器
図版64	遺物	2区土壙48出土漆器(1)
図版65	遺物	2区土壙48出土漆器(2)、土壙51・井戸40・50出土漆器
図版66	遺物	2区土壙49出土漆器(1)
図版67	遺物	2区土壙49出土漆器(2)
図版68	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(1)

図版69	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(2)
図版70	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(3)
図版71	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(4)
図版72	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(5)
図版73	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(6)
図版74	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(7)
図版75	遺物	1区埋葬施設出土木製品墨書(8)、土壙783・855出土木製品墨書
図版76	遺物	2区土壙48出土木製品墨書(1)
図版77	遺物	2区土壙48出土木製品墨書(2)
図版78	遺物	2区土壙49出土木製品墨書(1)
図版79	遺物	2区土壙49出土木製品墨書(2)
図版80	遺物	2区土壙49出土木製品墨書(3)
図版81	遺物	2区井戸40出土木製品墨書
図版82	遺物	瓦(1)
図版83	遺物	瓦(2)
図版84	遺物	1区溝1660・土壙803・井戸2021・2区土壙48・49出土土器
図版85	遺物	1区土壙2120・2区土壙48・49出土土器
図版86	遺物	1区土壙1133・埋葬施設・2区井戸40出土土器
図版87	遺物	1区埋葬施設出土土器棺(1)
図版88	遺物	1区埋葬施設出土土器棺(2)・土製品・木製品
図版89	遺物	1区埋葬施設出土木製品他
図版90	遺物	1区埋葬施設出土木製品
図版91	遺物	1区埋葬施設出土木製品・石製品・金属製品他
図版92	遺物	1区埋葬施設出土金属製品・墓石
図版93	遺物	1区埋葬施設地出土墓石・漆器
図版94	遺物	1区土壙855・747A・613、2区土壙48・49出土木製品
図版95	人骨	埋葬591出土(骨110) 熟年男性(頭蓋)
図版96	人骨	埋葬591出土(骨110) 熟年男性(上半身・下半身)
図版97	人骨	埋葬1541出土(骨151) 壮年男性 埋葬342出土(骨60) 老年男性 埋葬410出土(骨73) 壮年女性 埋葬1165出土(骨135) 熟年女性
図版98	人骨	埋葬1635出土(骨222-3) 乳児 埋葬2172出土(骨195) 幼児 埋葬2154B出土(骨217-2) 胎児

# 挿 図 目 次

図 1	調査地点図	1
図 2	調査区配置図 ( 1 : 800 )	2
図 3	調査前全景 ( 北西から )	3
図 4	作業風景 ( 南西から )	3
図 5	調査位置図 ( 1 : 5,000 )	6
図 6	1 区西壁断面図	9
図 7	1 区北壁断面図	10
図 8	1 区第 1 面遺構平面図	12
図 9	1 区溝 130 A・B、土壌 645 実測図	13
図 10	1 区溝 529、土壌 530 実測図	13
図 11	1 区竈 53・竈 54 実測図	14
図 12	1 区竈 98・竈 112 実測図	15
図 13	1 区土壌 1020 A・B 実測図	18
図 14	1 区第 2 面遺構平面図	19
図 15	1 区溝 786 実測図	20
図 16	1 区土壌 855 実測図	20
図 17	1 区土壌 783 実測図	21
図 18	1 区土壌 1372 実測図	21
図 19	1 区土壌 1378 実測図	21
図 20	1 区土壌 1131 A・B 実測図	22
図 21	1 区土壌 1197 実測図	23
図 22	1 区土壌 1133 断面図	23
図 23	1 区井戸 1189 実測図	24
図 24	1 区第 3 面遺構平面図	25
図 25	1 区溝 1660 断面図	27
図 26	1 区土壌 2120 A・B 実測図	29
図 27	1 区井戸 2021 実測図	30
図 28	1 区柱穴 1716・2087・2259・2247、柱穴 2174・1875・1876・1831、 柱穴 825・826・2266、柱穴 1054、柱穴 2028、柱穴 2125 実測図	31
図 29	1 区墓地整地層断面図	32
図 30	方形木棺側板組模式図	33
図 31	1 区埋葬施設実測図 ( 1 )	38

図32	1区埋葬施設実測図(2)	39
図33	1区埋葬施設半截断面図(1)	40
図34	1区埋葬施設半截断面図(2)	41
図35	1区埋葬人骨・副葬品出土状況図(1)	42
図36	1区埋葬人骨・副葬品出土状況図(2)	43
図37	1区埋葬木棺部材顕微鏡写真	44
図38	1区溝786出土掘鉢	66
図39	1区土壙783出土木製品	73
図40	1区土壙1311・747A・613出土木製品	74
図41	1区土壙855出土櫛	76
図42	1区土壙1372出土木製品	79
図43	1区土壙803出土土器	81
図44	1区土壙1779出土土器	83
図45	1区出土瓦	88
図46	1区埋葬施設出土土器棺(1)	90
図47	1区埋葬施設出土土器棺(2)	91
図48	1区埋葬施設出土泥面子	93
図49	1区埋葬255出土棟端飾瓦	95
図50	1区埋葬施設出土木製品(1)	111
図51	1区埋葬施設出土木製品(2)	112
図52	1区埋葬施設出土木製品(3)	113
図53	1区埋葬施設出土木製品(4)	114
図54	1区埋葬施設出土数珠	115
図55	1区埋葬施設出土金属製品・ガラス製品・水晶製品	116
図56	1区埋葬施設出土銭貨(1)	122
図57	1区埋葬施設出土銭貨(2)	123
図58	1区埋葬施設出土銭貨(3)	124
図59	1区埋葬施設出土銭貨(4)	125
図60	1区出土墓石(1)	127
図61	1区出土墓石(2)	128
図62	1区出土墓石(3)、3区出土墓石	129
図63	2区東壁断面図	130
図64	2区南壁断面図	130
図65	2区遺構平面図	131
図66	2区土壙51実測図	133

図67	2区土壌20実測図	134
図68	2区土壌30実測図	134
図69	2区土壌48・土壌49実測図	135
図70	2区井戸40・井戸50実測図	136
図71	2区柱穴24・23、柱穴257、柱穴251実測図	137
図72	2区井戸10実測図	137
図73	2区井戸62出土土器	141
図74	2区土壌45出土土器	142
図75	2区土壌30出土土器	143
図76	2区土壌20出土土器	143
図77	2区土壌48・49出土木製品	149
図78	2区井戸50出土漆器	154
図79	2区出土軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦	155
図80	2区埋葬施設出土土器	156
図81	2区埋葬施設出土銭貨	157
図82	3区西壁断面図	159
図83	3区第1面遺構平面図	160
図84	3区第2-1面遺構平面図	161
図85	3区第2-2面遺構平面図	163
図86	3区竈800実測図	164
図87	3区第3面遺構平面図	165
図88	3区溝931・溝940断面図	166
図89	遺構概要図(室町時代)	170
図90	遺構概要図(桃山時代)	172
図91	遺構概要図(江戸時代)	174
図92	墓地変遷図(1期)	178
図93	墓地変遷図(2期)	179
図94	墓地変遷図(3期)	180
図95	墓地変遷図(4期)	181
図96	墓地変遷図(5期)	182
図97	墓地変遷図(6期)	183
図98	近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法	193
図99	漆塗り構造の分類	193
図100	漆器木材顕微鏡写真	198

# 表 目 次

表 1	遺構概要表 .....	62
表 2	遺物概要表 .....	63
表 3	1 区土壙783土師器法量分布 .....	72
表 4	1 区土壙783出土土器比率 .....	72
表 5	1 区土壙855土師器法量分布 .....	76
表 6	1 区土壙855出土土器比率 .....	76
表 7	1 区土壙1372土師器法量分布 .....	77
表 8	1 区土壙1372出土土器比率 .....	77
表 9	1 区土壙1313土師器法量分布 .....	80
表10	1 区土壙1313出土土器比率 .....	80
表11	1 区土壙803土師器法量分布 .....	81
表12	1 区土壙2120出土土器比率 .....	82
表13	1 区土壙1660出土土器比率 .....	84
表14	1 区埋葬施設出土銭貨一覧表( 1 ) .....	125
表15	1 区埋葬施設出土銭貨一覧表( 2 ) .....	126
表16	2 区土壙45土師器法量分布 .....	142
表17	2 区土壙30土師器法量分布 .....	142
表18	2 区土壙20土師器法量分布 .....	142
表19	2 区土壙48土師器法量分布 .....	146
表20	2 区土壙48出土土器比率 .....	146
表21	2 区土壙49土師器法量分布 .....	146
表22	2 区土壙49出土土器比率 .....	146
表23	2 区埋葬施設出土銭貨一覧表 .....	157
表24	埋葬施設個数 .....	177
表25	埋葬施設出土銭貨数 .....	184
表26	出土人骨の死亡年齢・性別構成 .....	189
表27	ろくろ挽き物の用材分類一覧表 .....	193
表28	漆器成分分析表 .....	195
表29	時期・樹種別出土漆器の組成、桃山時代他遺跡出土漆器の組成 .....	196

## 付 表 目 次

付表 1	埋葬施設一覧表 .....	202
付表 2	出土人骨一覧表 .....	250
付表 3	漆器一覧表 .....	282

## 釈 文 目 次

1区出土木製品の釈文 .....	301
墓石釈文 .....	295

# 第1章 調査の経緯

## 1 調査にいたる経緯

今回の調査は、京都市伏見区総合庁舎整備事業に伴う伏見城跡埋蔵文化財発掘調査である。

調査地は伏見城跡の城下町西部にあっており、周辺の調査成果から桃山時代以降を中心とする遺跡がのこされていることが推測されたため、京都市埋蔵文化財調査センターは京都市文化市民局市民生活部区政推進課に対して埋蔵文化財発掘調査の指導を行った。これを受けて区政推進課は財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託するはこびとなった。(図1)

## 2 調査の経過

**調査範囲** 調査区は開発対象予定範囲にあわせて調査地のほぼ中央に設定した。ただし、作業の進行に合わせて北西側調査区(1区)・東側調査区(2区)・南西側調査区(3区)に分割して発掘調査を実施した(図2)。調査面積は1区が約1,910㎡、2区が約1,960㎡、3区が約565㎡で、総計は4,435㎡である。

**調査目的** 発掘調査の目的として次の4つの課題を設定した。1:伏見城城下町造営の痕跡を明らかにすること。2:桃山時代から江戸時代の伏見城城下町に関わる遺構を検出すること。3:周辺の調査で見つかった、伏見城城下町造営以前の奈良時代から室町時代の遺構の検出を目指すこと。4:これらの成果をもとに調査地周辺の歴史の変遷を明らかにすること。

**調査経過** 2005年6月3日より開始した事務所設置などの準備作業ののち、発掘調査は1区・2区・3区に分けて、順次、実施した。

1区は機械掘削を2005年6月21日から開始したのち、3面に分けて精査を行い、2006年1月10日に埋め戻しを終了した。2区は機械掘削を2005年12月22日から開始したのち、1面で精査を行い、2006年3月31日に埋め戻しを終了した。3区は発掘調査に先立ち、既存の伏見区役所の施設の解体・撤去を行った。また、南辺は伏見区役所庁舎内の通路を確保するため若干の凹凸がある。機械掘削を2006年6月5日から開始したのち、4面に分けて精査を行い、8月30日に埋め戻しを終了した。

各遺構面では遺構の重複関係に留意しながら遺構検出・遺構登録を行い、遺構実測図を作成した。遺構実測図は手測りによる実測図を基本とし、必要に応じて航空測量・オルソ測量を実施した。写真撮影は遺構面の全容が明らかになった段階で全景写真を撮影するとともに、

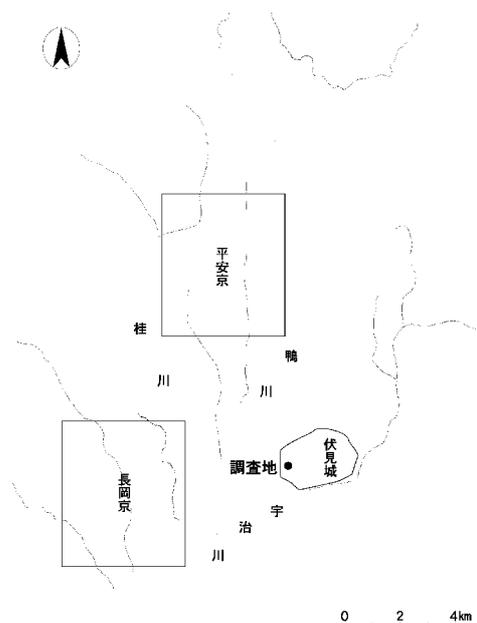


図1 調査地点図

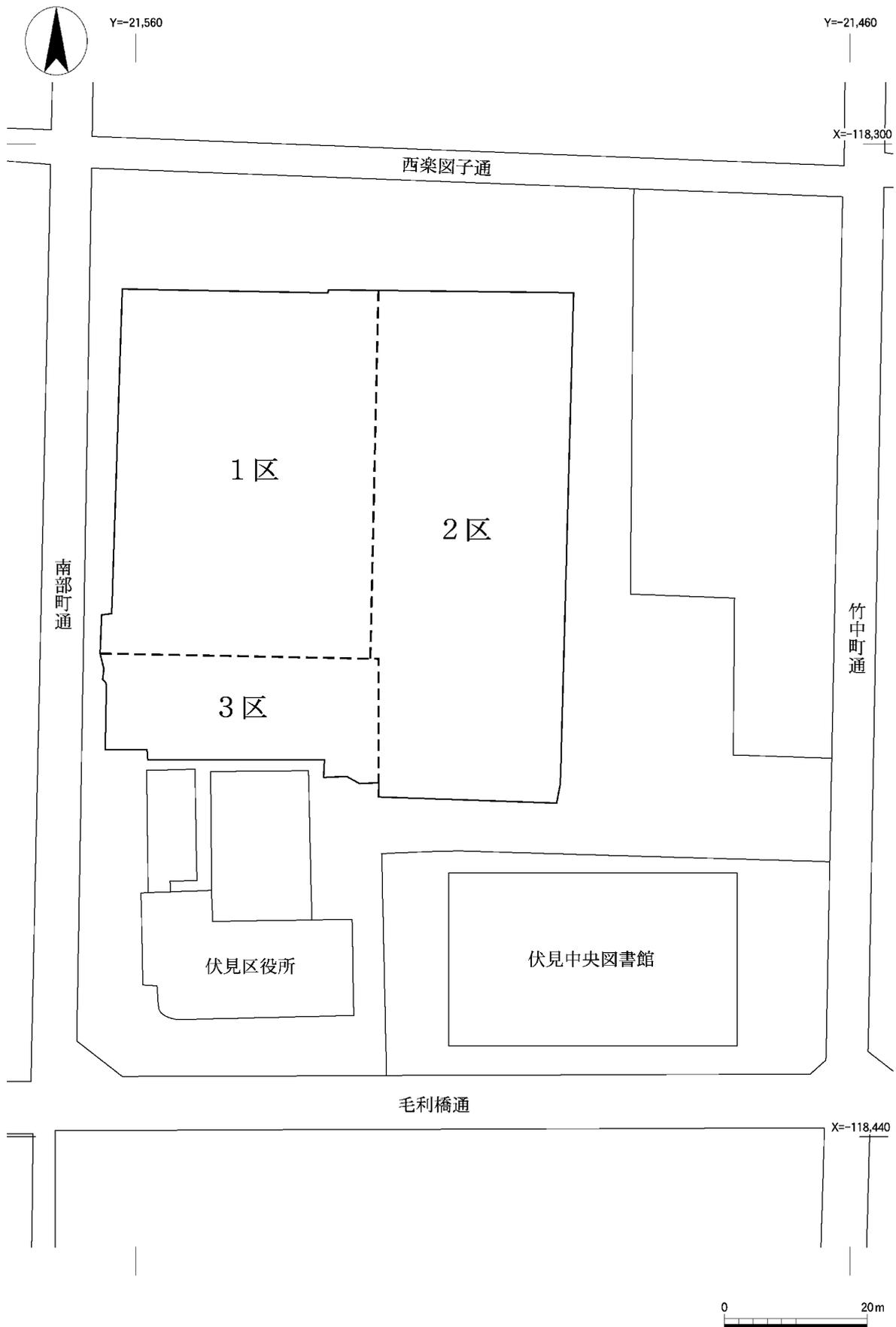


図2 調査区配置図(1:800)



図3 調査前全景（北西から）



図4 作業風景（南西から）

必要に応じて個別に遺構写真を撮影した。出土遺物は遺構を単位として採集し、遺物包含層については4 m四方の区画を基本として採集した。

また、調査期間中の2006年3月9日に報道発表を行い、3月11日に現地説明会を開催し、調査成果の公開につとめた。調査事務所の撤収、調査機材の片付けは9月1日に終了した。

### 3 整理・報告書作成の経過

作成方針 報告書作成の方針として次の3つの課題を設定した。1：調査で明らかとなった調査地の室町時代から江戸時代の遺構変遷を分かりやすく報告すること。2：調査で検出した墓地について遺構・遺物および人骨から総合的な検討を行うこと。3：豊富に出土した桃山時代から江戸時代の遺物についての報告に努めること。

作業経過 2区の埋め戻し終了後、2006年4月1日から本格的な整理作業を開始し、途中、3区の発掘調査中も並行しながら進めた。作業期間は約11箇月間で、2007年2月末日に終了した。

遺構については調査時に作成した遺構実測図を調整するとともに、遺構の重複関係を整理した。これと並行して採集した遺物内容を点検し、遺構の時期を判別した。遺物については洗浄作業ののち、重要と判断した遺構から出土した一括性の高い遺物を選別し、破片数の数量化・接合を行い、その中から重要な個体を抽出して実測・拓本・写真撮影を行った。遺物では陶磁器類・土人形・漆器・墨書木製品についてデジタル画像を利用した実測図を掲載している。これらの作業ののち、遺構・遺物それぞれについて実測図図版・写真図版を作成し、原稿を執筆した。

謝辞 出土人骨については藤澤珠織氏(京都大学理学部大学院)・片山一道氏(京都大学理学部)また、出土漆器の製作技法については北野信彦氏(くらしき作陽大学・京都市埋蔵文化財研究所客員指導研究員)に分析・検討いただき、玉稿を給わった。これらは付論1・付論2として掲載している。

また、墓石・1区墨書木製品は勝田至氏(芦屋大学)・西山良平氏(京都大学総合人間学部)2区墨書木製品は宇佐見英機氏(滋賀大学経済学部)・尾下成敏氏(京都大学文学部)・西山良平氏(京都大学総合人間学部)に釈読していただいた。なお、墨書木製品釈文は現在も検討中で、

本書には積読できたもののみ掲載した。

そのほか、発掘調査および報告書作成に際して、下記の方々の助言・協力をいただいた。記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。

五十嵐健行（京都大学大学院）、石村智（奈良文化財研究所）、井上貴央（鳥取大学）、追川吉生（東京大学）、尾野善裕（京都国立博物館）、大藪由美子（京都大学大学院）、加賀谷美幸（京都大学大学院）、高正龍（立命館大学）、斉藤進（財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター）、佐藤隆（財団法人大阪市文化財協会）、澤田純明（聖マリアンナ医科大学）、鈴木伸哉（早稲田大学）、鈴木敏彦（東北大学）、瀬田勝哉（武蔵大学）、奈良貴史（国際医療福祉大学）、兵藤不二夫（総合地球環境学研究所）、丸山真史（京都大学大学院）、村上由美子（総合地球環境学研究所）、山田邦和（花園大学）、湯本貴和（総合地球環境学研究所）、吉川義彦（関西文化財調査会）、米田譲（東京大学）、Ismail OZER（アンカラ大学）、Basak Koca OZER（京都大学大学院）

なお、後に詳述するように、発掘調査では江戸時代から戦前にかけて調査地に営まれた墓地を検出し、多数の人骨・副葬品が出土することとなった。被葬者の方々に深謝し、ご冥福をお祈りしたい。

## 第2章 遺 跡

### 1 遺跡の位置と環境

調査地の地理的・歴史的状況について概観する<sup>1)</sup>。

調査地の立地 調査地は京都盆地東側を画する東山南端、桃山丘陵の西側斜面に立地する。調査地の現在の標高はおよそ14～17mで、北東から南西に向かって傾斜している。周辺には伏見城城下町造営に伴い整備された南北街路である京町通・新町通・竹中町通・南部町通とこれらに直交する東西方向の街路により、南北方向に細長い長方形街区が形成されている。これらの街区は街路を境界として段々の平坦面を形成しており、旧地形は伏見城城下町造営に伴い大規模な改変を受けたことが推測できる。

室町時代以前 伏見城城下町造営のため、より古い時代の遺跡の痕跡は少ない。調査地の北約250mの位置には板橋廃寺があったと推定されている。板橋廃寺は採集された瓦から奈良時代前期の寺院跡と考えられているが、明確な遺構は検出されていない。西楽図子通をはさんだ調査地北側には金札宮がある。城下町造営以前の集落である久米村の社で、城下町造営後も同じ場所に位置しているとの伝承がある。現在、境内には京都市指定天然記念物のクロガネモチのほか幾本かの樹木が繁っている。

桃山時代 伏見城は文禄元年（1592）に豊臣秀吉が指月山に城郭を構築したことにはじまる。指月山は宇治川に臨む風光明媚な場所で、当初は秀吉の隠居所としての屋敷が造られたとも伝えられているが、間もなく本格的な城郭として増改築が行われた。ところが、この城は慶長の大地震（1596）で倒壊してしまう。そこで秀吉は直ちに指月山北側の木幡山全体に大規模な城郭を構築する。本丸・天守閣は最高所である現在の明治天皇陵の位置にあり、地形を利用して二の丸・山里丸など複雑に曲輪を配置した大城郭であった。慶長3年（1598）秀吉はこの城で終焉を迎える。

その後、伏見城は実質的に徳川家康の支配下におかれ、関ヶ原の合戦（1600）前夜には、西軍の攻撃を受け落城する。しかしながら、大坂・京都を結ぶ立地の重要性から慶長6年（1601）に再建が開始され、あらためて徳川氏の拠点として整備される。やがて大坂夏の陣（1615）で豊臣氏が滅亡し、また、京都の拠点として二条城が造営・整備されることにより、伏見城の政治的な意義は失われ、元和9年（1623）徳川家光の將軍宣下を最後に廃城されるにいたった。

調査地は伏見城跡の城下町西部にあたっている。城下町の整備は文禄3年（1594）頃には着手されていたと推定できる。木幡山西麓を中心に町割が行われ、南北方向に細長い長方形街区が形成された。また、丘陵斜面裾には城下町の中心部を囲むように濠が掘り廻らされた。同時に伏見港の整備や宇治川・巨椋池の改修も行われ、これらの工事により広大な城下町が建設されたのである。また、秀吉の死後も徳川氏により引き続き城下町の整備が行われた。

伏見城城下町には豊臣氏・徳川氏配下の武家屋敷が多数造営され、有力大名の屋敷は城郭周辺

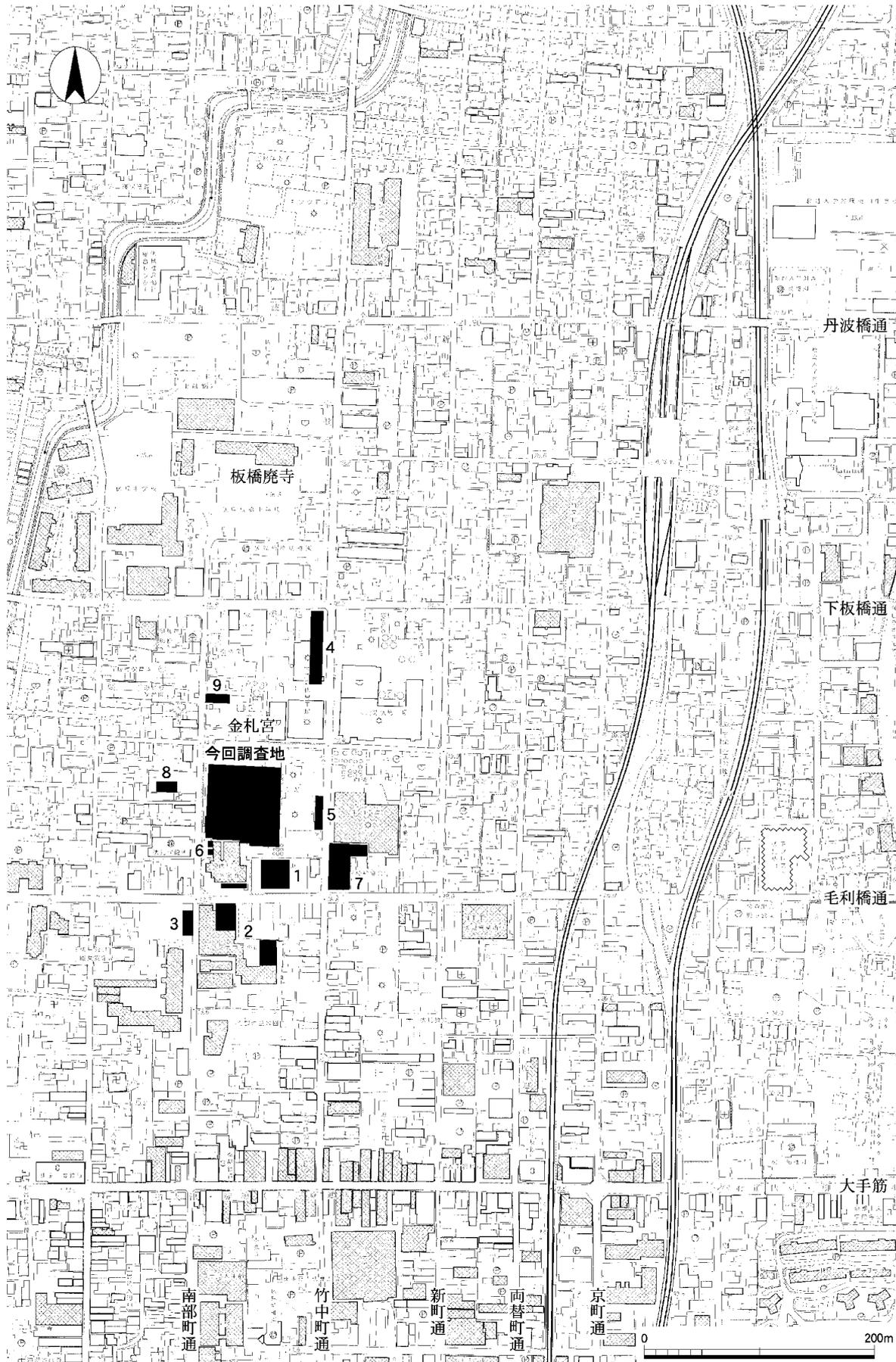


図5 調査位置図(1:5,000)

に集められた。町人の居住区は南北方向に縦貫する京町通・両替町通を中核としており、その西側には寺社が配置された。城下町の様子は後の時代に絵図に描かれ、中には調査地に岡田善同・仙石忠政の屋敷があったことを示す絵図（「伏見城下総絵図」）もある。同じ絵図には調査地東側の竹中町通（常盤通）に沿って南北に細長く町屋が建ち並んでいた状況が描かれている。

江戸時代 伏見城廃城後、城郭内の建物は各地の城郭や寺社に移建、あるいは破却されるにいたった。石垣の石材は新たに築城中の淀城に利用された。城下町の武家屋敷の多くも移転した。しかしながら、伏見の町は徳川政権下にあっても江戸時代を通じて、京都・大坂を結ぶ水陸交通の要所、商業都市として栄え続けることとなる。街路に沿って町屋が建ち並び、武家屋敷が移転した跡地や未開発のまま残されていた空地には新たに町屋が建てられたり、また、耕作地としての利用が行われながら、全体としては徐々に市街地が拡大・充実していったと推測できる。

調査地を含む街区には、西部中央に真福寺という日蓮宗寺院があり、その周囲には街路に面して町屋が建ち並ぶ状況が絵図（「山城国伏見街衢並近郊図」）に描かれている。

## 2 周辺の調査

調査地周辺では、これまでに多くの発掘・立会調査が行われているが、ここでは主要な調査の概要を記す（図5）。

調査地南東側に隣接する伏見中央図書館建設工事に伴う発掘調査（図5 - 1）では、平安時代前期の溝・土壇、桃山時代から江戸時代の建物・柵・井戸・土壇・柱穴などを検出した。出土遺物には平安時代前期の土師器、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、磁器、瓦、漆器・箸・籠・人形・木簡・下駄・建築部材などの木製品、簪・刀子・金具などの金属製品、硯などの石製品がある。木製品は東西約4m・南北約5m・深さ約2mの大規模な土壇からまとまって出土した<sup>2)</sup>。

毛利橋通を隔てた調査地南側の共同住宅建設工事に伴う発掘調査（図5 - 2）では、平安時代後期の溝、桃山時代から江戸時代の多数の井戸・土壇・柱穴などを検出した。桃山時代から江戸時代の遺構の中には大規模な土壇が2基ある。一つは直径約8m・深さ約4m、もう一つは一辺約10m・深さ約4.5mで、底部より時計回りに登るスロープが作り出される。出土遺物には平安時代の土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、磁器、瓦、漆器・箸・籠・櫛・木簡・下駄などの木製品、金属製品、石製品がある。木製品は大規模な土壇からまとまって出土した<sup>3)</sup>。

毛利橋通・南部町通を隔てた調査地南西側の共同住宅建設工事に伴う発掘調査（図5 - 3）では、室町時代の溝、桃山時代から江戸時代の堀・土壇・柱穴・庭園などを検出した。室町時代の溝は3条あり東西方向で西側でやや北に振る方位をとる。出土遺物には平安時代の須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、磁器、瓦、木製品、銭貨などの金属製品がある<sup>4)</sup>。

西楽図子通を隔てた調査地北側の共同住宅建設工事に伴う発掘調査（図5 - 4）では、奈良時代の竪穴住居・土壇、桃山時代から江戸時代の柵・溝・井戸・土壇・柱穴などを検出した。奈良

時代の遺構を検出したことは板橋廃寺との関連も含めて注目できる。出土遺物には奈良時代の土師器・須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦があり、このほかに鞆羽口・埴塙・鉄滓など製鉄に関連する遺物がまとまって出土した。<sup>5)</sup>

調査地東側に隣接する工場敷地で実施した立会調査（図5 - 5）では、地表下約0.5mで桃山時代から江戸時代の遺物包含層を検出した。<sup>6)</sup>

調査地南西側に隣接する伏見区役所敷地で実施した立会調査（図5 - 6）では、地表下約0.7mで桃山時代から江戸時代の遺物包含層、江戸時代の土壌を検出した。<sup>7)</sup>

竹中町通を隔てた調査地東側で実施した立会調査（図5 - 7）では、地表下約0.3mで江戸時代後期から末期の土壌を検出した。<sup>8)</sup>

南部町通を隔てた調査地西側で実施した立会調査（図5 - 8）では、地表下約0.5mで江戸時代以降の遺物包含層を検出した。<sup>9)</sup>

西楽図子通を隔てた調査地北側で実施した立会調査（図5 - 9）では、地表下約0.4mで江戸時代の土壌を検出した。<sup>10)</sup>

立会調査で検出した遺構は桃山時代以降の土壌・遺物包含層である。調査地の西側・南側ほど地表面より深い位置で遺構が検出されていることから、桃山時代の旧地形は現在よりも南西に向かって傾斜していたことが推測できる。

#### 註

- 1) 歴史的状況については次の文献を参考にした。『伏見町誌』伏見町役場、1929年（1974年復刻）、京都市編『京都の歴史』学芸書林、1968～1976年。『京都市の地名』平凡社、1979年。『図集日本都市史』東京大学出版会、1993年。『豊臣秀吉と京都』文理閣、2001年など。
- 2) 「伏見城城下町」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1989年。
- 3) 「伏見城跡1」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1988年。
- 4) 「伏見城跡発掘調査終了報告書」古代文化調査会、2004年。
- 5) 『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-18』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2005年。
- 6) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局、1995年。
- 7) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局、1993年。『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局、1995年。
- 8) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局、2003年。
- 9) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局、1998年。
- 10) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局、1997年。

# 第3章 1区の調査

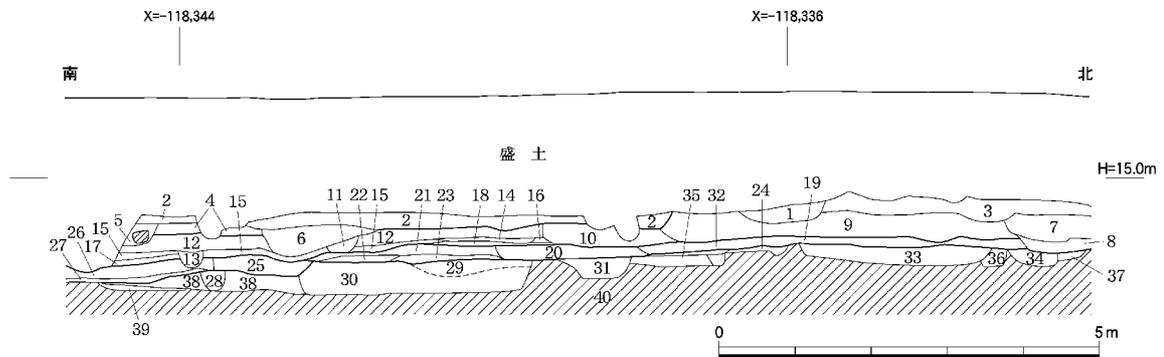
## 1 1区の遺構

### (1) 基本層序と遺構の概要 (図6・7)

基本層序 調査地は北側を西楽図子通、東側を竹中町通、南側を毛利橋通、西側を南部町通に囲まれた長方形街区内の北部・中央部の広い範囲を占める。桃山丘陵の西側斜面に立地することから、北東から南西に向けて傾斜しており、現況では北側の西楽図子通と南側の毛利橋通では北側が高く約0.7mの高低差、東側の竹中町通と西側の南部町通では東側が高く約2.5mの高低差がある。

1区は調査地北西側にあたる。1区の基本層序は厚さ約1.2～1.6mの盛土と次の3層に分けることができる。それぞれの土層は調査区西部では重なりが明瞭であるが、東部では徐々に不明瞭となる。また、北東部には大規模な攪乱があり、遺構は残っていない。

第1層は黒褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥からなる整地層で、調査区内のほぼ全面に広がる。東部・北部では厚さ約20cmであるが、南西部に向けて徐々に厚くなり約50～60cmとなる。第2層は礫を含む灰褐色砂泥や褐色砂泥からなる整地層で、北西部から中央部にかけて広がる。西部では厚さ約20～30cmであるが、東側はY=-21,545m付近、南側はX=-118,355m付近では断続的とな



- |  |   |
|--|---|
| 1 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (炭を少量含む)                | 21 7.5YR6/6 橙色砂泥 (堅く締まる 第3層)            |
| 2 7.5YR5/4 にぶい褐色砂泥 (第1層)                 | 22 7.5YR5/6 黄褐色砂泥 (φ0.5～1cmの礫を多量含む 第3層) |
| 3 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭を少量含む 第1層)             | 23 7.5YR4/4 褐色砂泥 (堅く締まる 第3層)            |
| 4 10YR5/6 黄褐色砂泥 (φ3～5cmの礫を少量含む 第1層)      | 24 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト                    |
| 5 7.5Y4/2 灰褐色砂泥                          | 25 7.5Y4/2 灰褐色砂泥 (粘質 第3層)               |
| 6 7.5Y4/2 灰褐色砂泥                          | 26 7.5YR4/6 褐色細砂 (第3層)                  |
| 7 7.5YR3/2 黒褐色シルト (炭・瓦を多量含む)             | 27 7.5Y4/2 灰褐色粘質土 (炭を少量含む 第3層)          |
| 8 10YR4/4 褐色砂泥                           | 28 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 (粘質 柱穴2287)         |
| 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (炭を少量含む)              | 29 5Y7/3 浅黄色粘質土 (土壙1969)                |
| 10 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5～1cmの礫を多量含む)    | 30 10YR3/3 暗褐色砂泥 (粘質 土壙1969)            |
| 11 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥                      | 31 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (溝2111)              |
| 12 7.5Y5/2 灰褐色砂泥 (φ2～3cmの礫を多量含む 第2層)     | 32 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (柱穴2135)           |
| 13 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 (柱穴1219)             | 33 10YR3/2 黒褐色砂泥 (溝1357)                |
| 14 7.5YR6/6 橙色砂泥 (φ1～2cmの礫をわずかに含む 堅く締まる) | 34 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (土壙2105)              |
| 15 10YR4/6 褐色粗砂 (堅く締まる)                  | 35 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト                    |
| 16 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥                      | 36 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (土壙2108)            |
| 17 2.5Y5/6 黄褐色粗砂 (堅く締まる)                 | 37 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂                     |
| 18 10YR7/6 明黄褐色粗砂 (φ1～2cmの礫を多量含む 堅く締まる)  | 38 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土                     |
| 19 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (第3層)                | 39 10YR3/4 暗褐色砂泥 (土壙1899)               |
| 20 10YR5/6 黄褐色砂泥 (φ0.5～1cmの礫をわずかに含む 第3層) | 40 10YR5/6 黄褐色砂礫 (堅く締まる 地山)             |

図6 1区西壁断面図

る。西部壁際では第2層下部に直径1～2cmの礫を含む堅く締まった砂泥層があり、整地が2段階以上行われたことがわかる。第3層は粘質の灰褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥からなる整地層で、北西部から西部中央の範囲に広がる。西部中央では厚さ約10～20cmであるが、東側はY=-21,450m付近で途切れる。第3層の下層は調査区北部では明黄褐色粘土、南部では黄褐色砂礫や礫を含む暗灰黄色粘土となる。非常に堅く締まっており、遺物を含んでいないことから地山と判断した。なお、墓地の層序は基本層序とは異なるので、別に項を改めて述べることとする。

調査では第1層の下面を第1面、第2層の下面を第2面、第3層の下面を第3面とした。第1面は18世紀中葉～19世紀、第2面は16世紀末～18世紀前葉、第3面は16世紀後葉の遺構が主体をなす。第1面の検出高は、北東部が北西部よりも約0.4m高く西に向けて傾斜し、北西部が南西部よりも約0.6m高く南に向けて傾斜する。北東部と南西部では高低差は約1.0mとなる。第2層・第3層は調査区中央部から西部に偏って堆積していることもあり、第3面では北東部が北西部よりも約0.4m、北西部が南西部よりも約0.8m高く、北東部と南西部の高低差はより大きく約1.2mとなる。整地が行われる以前は現況よりもさらに大きく北東から南西に向けて傾斜する地形であったことがわかる。

遺構の概要 検出した遺構総数は2287基である。遺構密度が高く、複雑に重複するため、各遺構面では目的とした時期の遺構のほかに前後する時期の遺構を検出することも多かった。ここでは調査段階の検出状況にしたがって各遺構面に分けて報告する。また、検出遺構は多数におよぶため、ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構、特殊な構造をもつ遺構を中心に報告する。なおまた、検出遺構が集中する墓地については、別に項を改めてまとめることとする。調査地全体の歴史の変遷については第6章第1節で総括する。

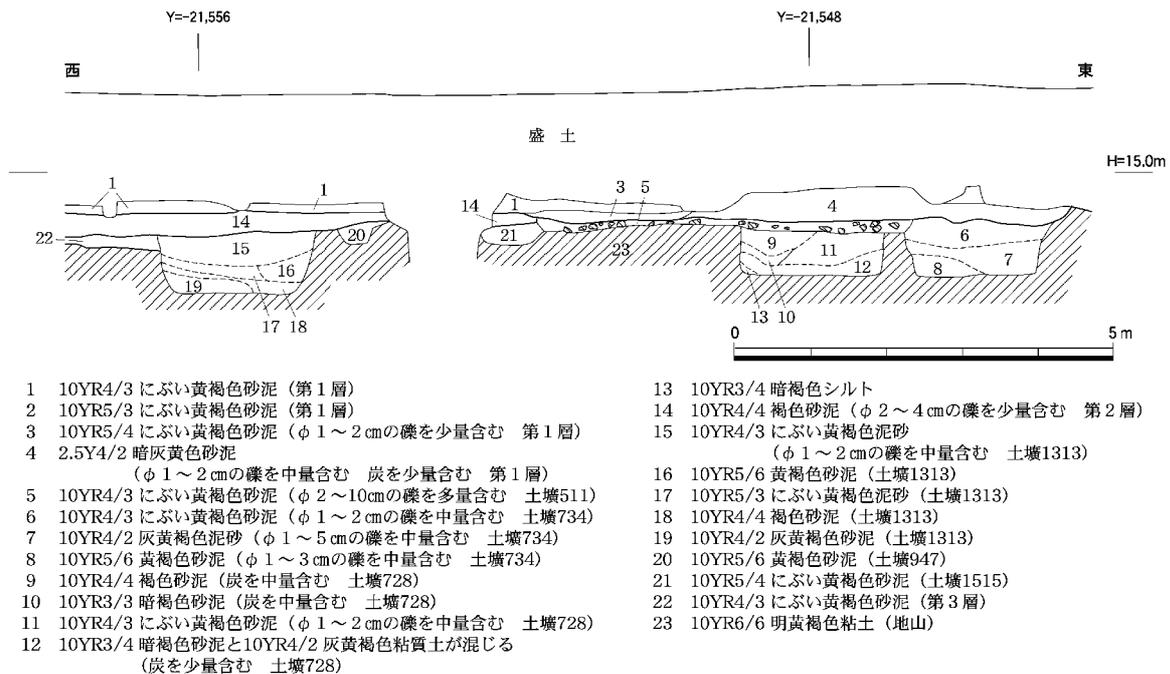


図7 1区北壁断面図

(2) 第1面の検出遺構(図版2・3、図8)

溝・竈・土壇・井戸・柱穴・墓地などを検出した。北東部を除く調査区全域に分布する。

溝130A(図版2-2、図9) 東部で検出した南北方向の溝である。北側は攪乱され、南側は溝280につながる。また、途中で溝130B・溝529・溝532とT字形につながるが、溝529・溝532よりも溝130Aの方が新しい。断面形は浅いU字形で、長さ31.3m以上、幅約0.5~1.0m、深さ約0.1~0.2mである。底部は南に向けて傾斜する。漆喰や板で補強する部分がある。埋土は褐灰色泥砂などで、18世紀後葉以降の遺物が出土した。

溝130B(図版2-2、図9) 中央部で検出した東西方向の溝である。東側は溝130Aにつながり、西側は屈曲して溝130Dになる。また、途中で溝130Cとつながるが、これらの溝の埋没に時期差はない。断面形は浅いU字形で、長さ10.0m以上、幅約0.8~1.0m、深さ約0.2mである。底部は東に向けて傾斜する。埋土は褐灰色砂泥などで、18世紀後葉以降の遺物が出土した。

溝130C(図版2-2) 中央部で検出した南北方向の溝である。北側は溝697、南側は溝130Bにつながる。溝130Cの方が溝697よりも新しい。断面形は浅いU字形で、長さ15.5m以上、幅約0.8~1.1m、深さ約0.1mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は灰黄褐色泥砂などで、18世紀後葉以降の遺物が出土した。

溝130D 中央部西寄りで検出した南北方向の溝である。北側は攪乱され不明瞭となり、南側は屈曲して溝130Bになる。断面形は浅いU字形で、長さ4.1m以上、幅約0.5~0.6m、深さ約0.2mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は灰黄褐色泥砂などで、18世紀後葉以降の遺物が出土した。

溝180(図版4) 南部で検出した東西方向の溝で、墓地の南を区画する。西側は調査区外に延びるが、東端は不明瞭となる。断面形はU字形で、長さ33.0m以上、幅約0.7~1.3m、深さ約0.4mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土は黒褐色砂泥で、18世紀後葉~19世紀前葉の遺物が出土した。

溝280(図版4) 南部で検出した東西方向の溝で、墓地の北を区画する。西側は調査区外に延びるが、東端は不明瞭となる。断面形はU字形で、長さ33.0m以上、幅約0.4~1.2m、深さ約0.4mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土は黒色砂泥などで、東側は何度か作り替えた痕跡を示す。18世紀中葉の遺物がまとまって出土した。

溝528 北部中央で検出した東西方向の溝である。東側・西側とも攪乱され、南側は溝697に接する。断面形は浅いU字形で、長さ6.5m以上、幅約0.6~0.7m、深さ約0.2mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は褐色砂泥で、底部には大きさ約20~30cmの石を平坦な面を上にして据える。18世紀後葉以降の遺物が出土した。

溝529(図版2-3、図10) 中央部で検出した東西方向の溝である。東側は溝130Aにつながり、西側は攪乱される。断面形はU字形で、長さ14.2m以上、幅約0.7~0.9m、深さ約0.3mである。底部は西に向けて傾斜する。西側の一部は瓦・石で護岸する。埋土は黒褐色砂泥で、18世紀後葉

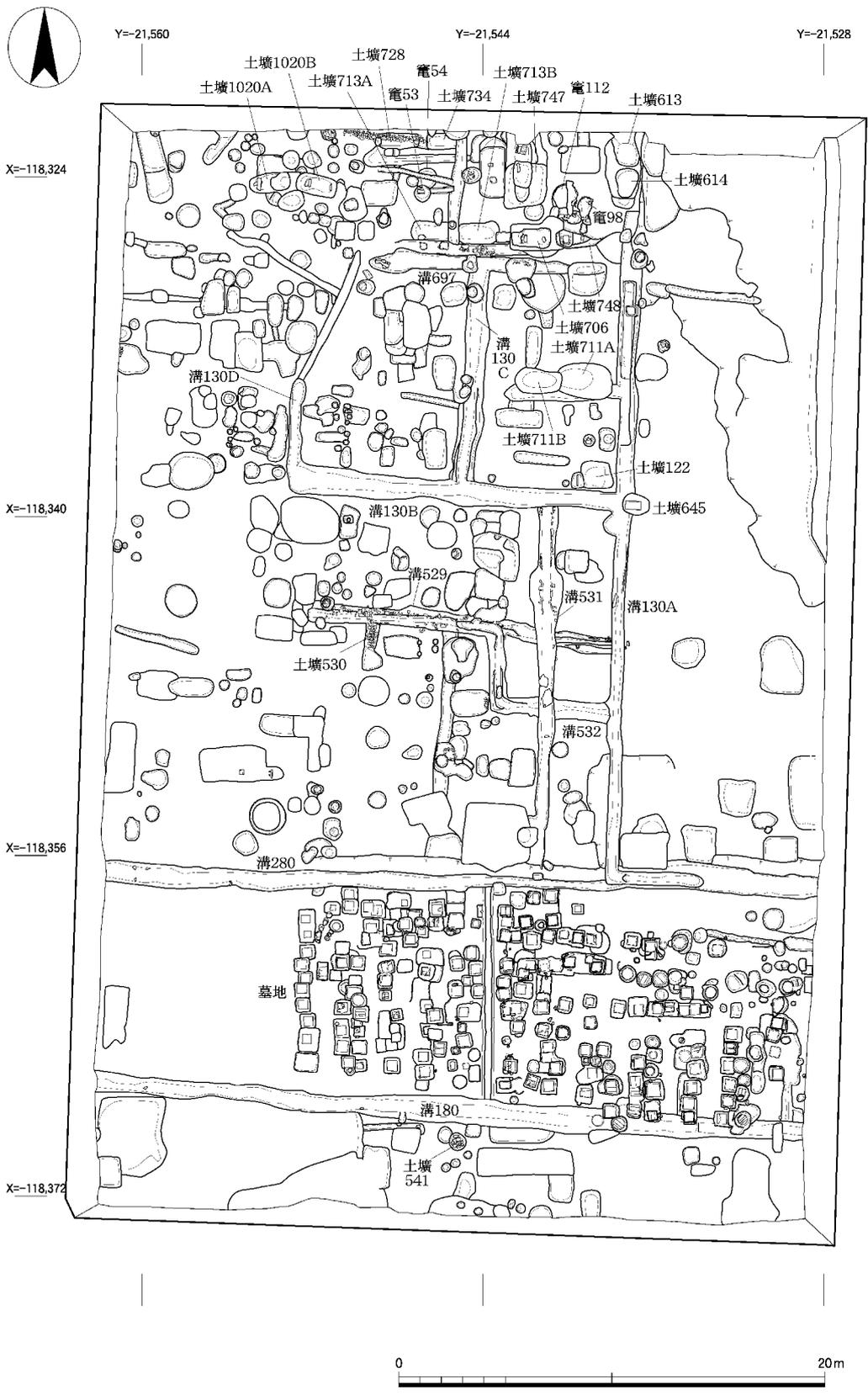
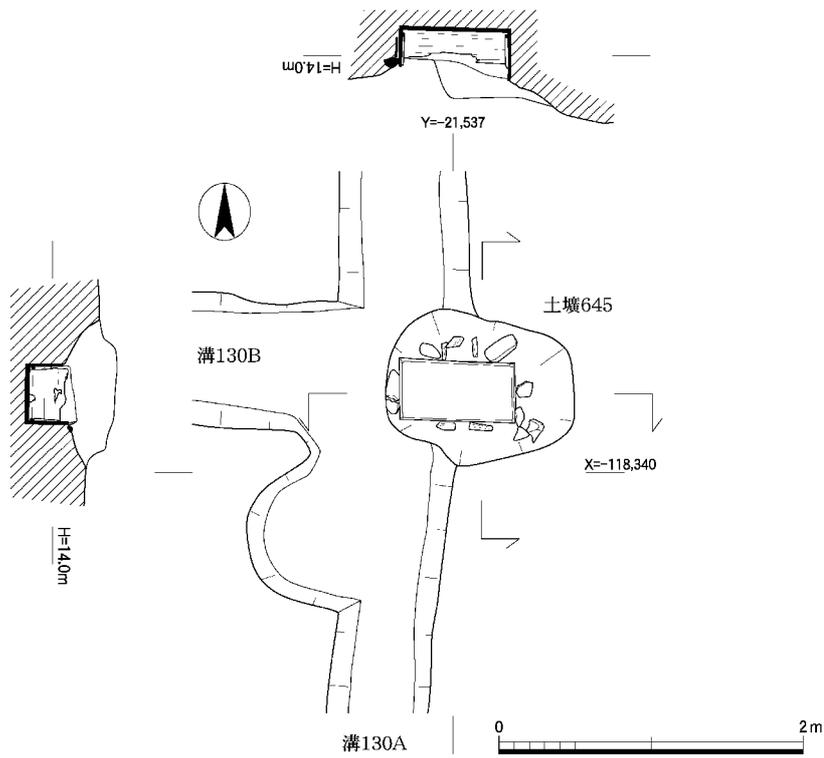
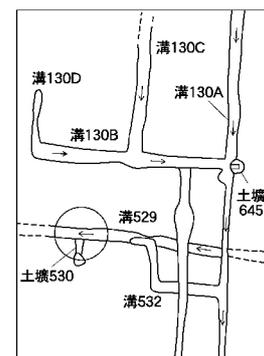
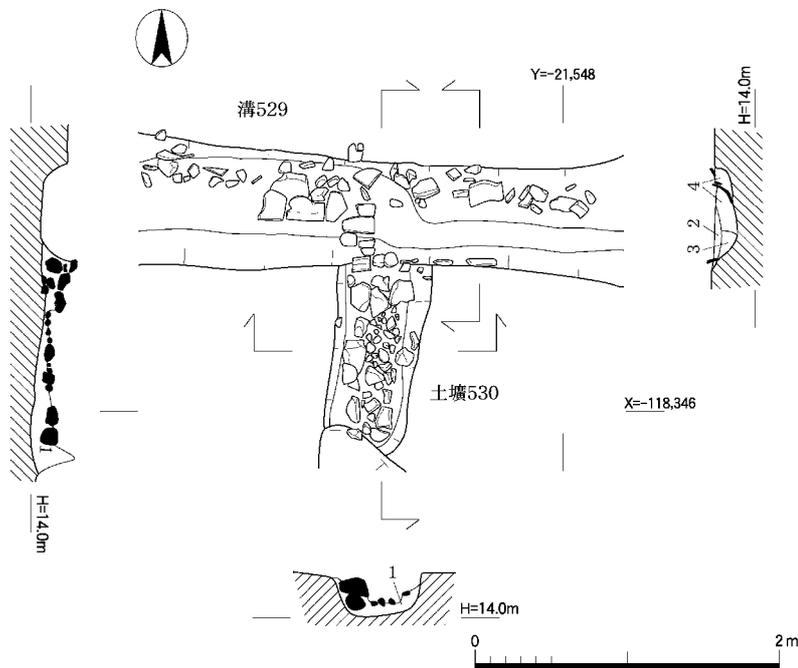


图8 1区第1面遺構平面图



区画溝模式図 (1 : 1,200)

図9 1区溝130A・B、土壌645実測図



区画溝模式図 (1 : 1,200)

- 1 5YR3/2 暗赤褐色砂泥 (炭を少量含む 土壌530)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 (溝529)
- 3 10YR3/2 黒褐色泥砂 (溝529)
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 (溝529)

図10 1区溝529、土壌530実測図

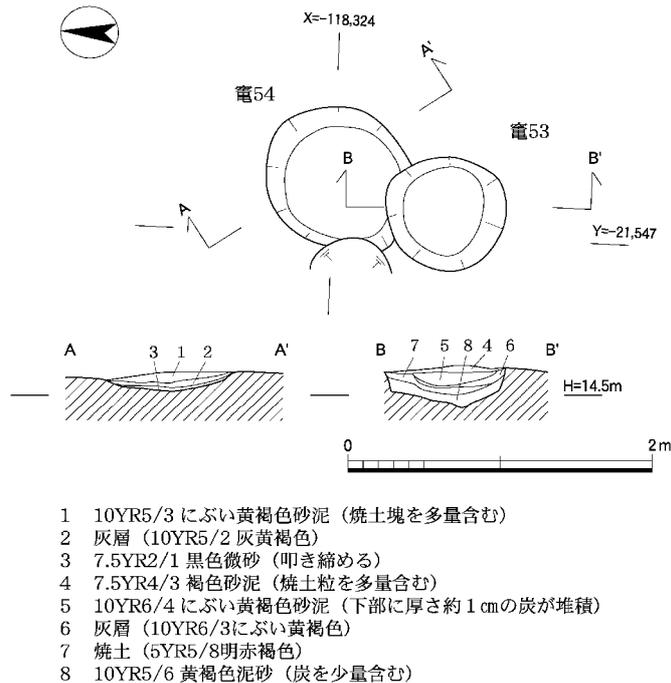


図11 1区竈53・竈54実測図

れ、北側は溝528に接する。断面形は浅いU字形で、長さ7.0m以上、幅約0.6m、深さ約0.1mである。底部は西に向けてわずかに傾斜する。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、18世紀後葉以降の遺物が出土した。

竈53（図版3-2、図11） 北部中央で検出した。上部が削平されたため、炉床部下部しか残っておらず、焚口の詳細は不明である。残存炉床部は直径約0.5mの円形である。埋土は焼土・炭・灰を含み、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物が出土した。北側は竈54に接するが、時期差は不明である。

竈54（図版3-2、図11） 北部中央で検出した。上部が削平されたため、炉床部下部しか残っておらず、焚口の詳細は不明である。残存炉床部は直径約0.8mの円形である。埋土は焼土・灰を含み、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物が出土した。

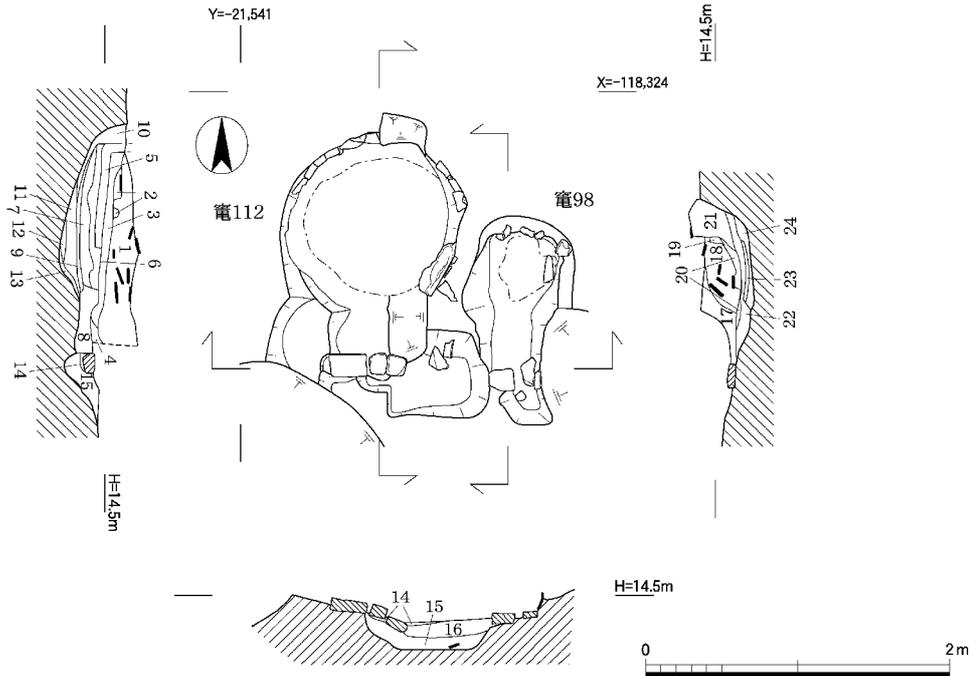
竈98（図版3-1、図12） 北東部で検出した。上部が削平され、南東部は攪乱されるが、南北約1.3m、東西約0.8m、深さ約0.4mの楕円形に掘り窪めた土壇北側に1基の壁体を構築する。炉床部の平面形は直径約0.6mの円形で、壁体は厚さ約0.1mで瓦・加工痕のある石・河原石で補強する。床面はわずかに南に向けて傾斜する。焚口は南側を向き、幅約0.4m、奥行き約0.6mで、南側に棧瓦・大きさ約15～20cmの石を据える。断面の状況から少なくとも1回は作り替えていることがわかる。埋土は焼土を含んだ砂泥が堆積しており、下層からは18世紀中葉の遺物が出土した。なお、西側は竈112と接しているが、焚口が並ぶ状況からみて同時期に使用されていたと考えられる。

竈112（図版3-1、図12） 北東部で検出した大型の竈である。上部が削平されるが、南北約1.7m、東西約1.3m、深さ約0.5mの楕円形に掘り窪めた土壇北側に1基の壁体を構築する。炉床

～19世紀前葉の遺物が出土した。

溝532 中央部で検出したL字形に屈曲する溝である。南北方向の部分は溝529に取り付き、東西方向の部分は溝130Aにつながる。溝529との時期差は不明である。断面形はU字形で、南北方向の部分は長さ約2.0m、幅約0.7～0.8m、深さ約0.2～0.3m、東西方向の部分は長さ約6.0m、幅約0.7～0.8m、深さ約0.3mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は黒褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物がまとまって出土した

溝697 北部中央で検出した東西方向の溝である。東側・西側とも攪乱さ



- |    |  |    |                             |
|----|--|----|-----------------------------|
| 1  | 7.5YR4/3 褐色砂泥 (焼土塊・瓦を多量含む)                         | 13 | 10YR3/4 暗褐色砂泥               |
| 2  | 灰層 (5YR7/2明褐色)                                     | 14 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥              |
| 3  | 灰層 (10YR5/2灰黄褐色)                                   | 15 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 (炭を多量含む)      |
| 4  | 7.5YR5/3 にぶい褐色砂泥                                   | 16 | 10YR3/1 黒褐色砂泥               |
| 5  | 漆喰   | 17 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥              |
| 6  | 2.5Y4/6 赤褐色砂泥と7.5YR3/3褐色砂泥が混じる                     | 18 | 7.5YR4/2 明褐色砂泥 (焼土塊・瓦を多量含む) |
| 7  | 5Y6/2 灰オリーブ色粘土                                     | 19 | 漆喰                          |
| 8  | 2.5Y4/8 赤褐色砂泥と<br>10YR4/3 にぶい灰黄褐色砂泥が混じる (焼土粒を多量含む) | 20 | 焼土 (7.5YR6/8橙色)             |
| 9  | 7.5YR2/1 黒色微砂 (叩き締める)                              | 21 | 7.5YR6/6 明褐色砂泥 (焼土粒を少量含む)   |
| 10 | 10YR3/4 暗褐色砂泥                                      | 22 | 焼土 (5YR6/8橙色)               |
| 11 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (粘質)                              | 23 | 10YR6/6 明黄褐色砂泥 (叩き締める)      |
| 12 | 7.5YR5/6 明褐色砂泥                                     | 24 | 焼土 (5YR4/6赤褐色)              |

図12 1区竈98・竈112実測図

部の平面形は直径約1.0mの円形で、壁体は厚さ約0.2mで瓦・加工痕のある石・河原石で補強する。床面はわずかに南に向けて傾斜する。焚口は南側を向き、幅約0.4m、奥行き約0.5mで、南側に大きさ約15～25cmの加工痕のある石を据える。石の表面は熱をうけて赤変する。断面の状況から少なくとも1回は作り替えていることがわかる。新しい時期の炉は壁体を厚さ約10cmの漆喰で構築する。埋土は焼土・灰・炭を含んだ砂泥が堆積しており、上層からは18世紀後葉以降、下層からは18世紀中葉の遺物が出土した。竈98・竈112の周囲の土壌からは、鞆羽口・坩堝・金属滓が出土しており、竈が金属製品の加工に用いられた可能性を示す。

土壌530(図版2-3、図10)中央部で検出した。北側は溝529につながり、南側は攪乱される。溝529の方が新しい。平面形は南北1.2m以上、東西約0.6mの長円形に復元でき、深さ約0.3mである。埋土は暗赤褐色砂泥で、大きさ約10～30cmの石を多量に含む。18世紀後葉～19世紀前葉の遺物が出土した。

土壌541 南部中央で検出した。平面形は直径約0.8mの円形で、深さ約0.2mである。埋土は暗褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀前葉の少量の土器類とともに河原石・五輪塔の石材などがまとまって出土した。また、下面では埋葬541Bを検出した。

土壙645（図版3-3、図9） 調査区東部、溝130Aと溝130BがT字形につながる部分で検出した。掘形は南北約1.0m、東西約1.2mの楕円形で、深さは溝130の底部から約0.4mである。西寄りに柵に転用した長櫃を据える。柵は短辺43cm、長辺78cm、残存高約35cmである。埋土は黒褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物が出土した。

土壙754 北東部で検出した。周囲を攪乱されるが、平面形は南北約1.7m、東西約2.2mの楕円形に復元できる。深さ約0.8mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、18世紀中葉の遺物が出土した。

土壙613A・B 1区では細長く深い土壙が長軸方向に2基一組で並ぶ遺構を多数認めた。土壙底部には石や加工材を据え付けており、何らかの特定の機能をもった遺構と推定できる。

土壙613A・Bは北東部で検出した南北方向に2基一組の土壙が並ぶ遺構である。北側は調査区外となり、西側は攪乱されるが、南北3.2m以上・東西1.3m以上の楕円形に掘り窪めた両端に、それぞれ土壙を掘り下げる。北側の土壙613Aは平面形は南北1.5m以上、東西約1.2mの不整形な楕円形で、深さ約0.7mである。段はない。南側の土壙613Bは平面形は南北約1.4m、東西約1.1mの不整形な楕円形で、深さ約0.6mである。段はない。土壙613Aと土壙613Bの間は幅約0.6mの土手状の壁になる。また、土手状の壁の上面西側には南北約0.8m、東西約0.3m、深さ約0.2mの細長い窪みがある。土壙613A・Bとも石材などは据えられていないが、土壙613Bの埋土からは長さ約100cm、太さ約40cmの丸太や金具の付いた扉片、桶の底板などが出土しており、これらが部材として据えられていた可能性が高い。埋土はともに褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀中葉の遺物が出土した。

土壙706A・B（図版3-4） 北部中央で検出した東西方向に2基一組の土壙が並ぶ遺構である。北東側が攪乱されるが、南北約1.2m、東西5.0m以上の方形に掘り窪めた両端に、それぞれ土壙を掘り下げる。西側の土壙706Bは平面形は南北約0.6～0.9m、東西約1.8mの細長い隅丸台形で、深さ約1.0mである。西寄りには高低差約0.3mの段を作る。東側の土壙706Aは平面形は南北約0.6～0.8m、東西約1.7mの細長い隅丸台形に復元でき、深さ約1.1mである。攪乱されているが、東寄りには土壙706と同じような段が作られていたと考えられる。土壙706Aと土壙706Bの間は幅約0.3mの土手状の壁になる。また、土手状の壁の上面北側には南北約0.5m、東西約0.9m、深さ約0.4mの方形の窪みがある。土壙706A底部東寄りには大きさ約10cm×20cmの板材、西寄りには大きさ約10～30cmの板材を4枚以上重ねて据える。板材には焼け焦げたものや鉄釘が付いたものがある。土壙706B底部西寄りには大きさ約15cm×30cmの平たい石、東寄りには大きさ約15cm×30cmの木片を据える。埋土は暗褐色砂泥で、18世紀中葉～19世紀前葉の遺物が出土した。

土壙711A・B 中央部北東寄りで検出した東西方向に2基一組の土壙が並ぶ遺構である。南北約1.4m、東西約5.3mの方形に掘り窪めた両端に、それぞれ土壙を掘り下げる。東側の土壙711Aは平面形は南北約1.0～1.3m、東西約2.3mの細長い隅丸台形で、深さ約1.1mである。東寄りには高低差約0.3mの段を作る。西側の土壙711Bは南北約0.8～1.0m、東西約1.7mの細長い隅丸台形で、深さ約1.1mである。西寄りには高低差約0.1mの段を作る。土壙711Aと土壙711Bの間は幅約0.3mの土手状の壁になる。土壙711A・土壙711Bとも石材などは据えられていない。埋

土はともににぶい黄褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物が出土した。

土壌713A・B 北部中央で検出した東西方向に2基一組の土壌が並ぶ遺構である。土壌706A・Bの西側に長軸を同じくして並ぶ。土壌713は2基の土壌が独立しており、上部が削平された可能性がある。東側の土壌713Aは平面形は南北約0.9～1.0m、東西約1.9mの細長い隅丸方形で、深さ約1.2mである。段はない。東側の土壌713Bは平面形は南北約1.0～1.1m、東西約1.9mの細長い隅丸方形で、深さ約1.4mである。段はない。土壌713Aと土壌713Bの間は幅約0.5mの土手状の壁になる。土壌713A底部東寄りには大きさ約20cmの平たい石を壁に立てて据える。埋土は暗褐色砂泥で、18世紀中葉～後葉の遺物が出土した。

土壌728A・B 北部中央壁際で検出した東西方向に2基一組の土壌が並ぶ遺構である。北側が調査区外となるが、南北0.7m以上、東西約4.1mの方形に掘り窪めた両端に、それぞれ土壌を掘り下げる。東側の土壌728Aは平面形は南北約0.7m以上、東西約1.8mの細長い隅丸方形に復元でき、深さ約0.8mである。段はない。西側の土壌728Bは平面形は南北0.7m以上、東西約2.0mの細長い隅丸方形に復元でき、深さ約0.7mである。段はない。土壌728Aと土壌728Bの間は幅約0.5mの土手状の壁になる。土壌728A・Bとも石材などは据えられていない。埋土は暗褐色砂泥で、17世紀末～18世紀中葉の遺物が出土した。

土壌747A・B 北部中央で検出した南北方向に2基一組の土壌が並ぶ遺構である。北側が調査区外となるが、南北3.5m以上、東西約1.5～1.8mの方形に掘り窪めた両端に、それぞれ土壌を掘り下げる。北側の土壌747Aは平面形は南北1.1m以上、東西約0.8～1.0mの細長い隅丸台形に復元でき、深さ約0.9mである。段は調査区外のため不明である。南側の土壌747Bは平面形は南北約1.8m、東西約0.6～1.0mの不整形な楕円形で、深さ0.4m以上である。南寄りには高低差約0.2mの段を作る。土壌747Aと土壌747Bの間は幅約0.2mの土手状の壁になる。また、土手状の壁の上面東側には南北0.5m以上、東西約0.4m、深さ約0.2mの窪みがある。土壌747A底部南寄りには大きさ約10～60cmの加工材・木片を据える。加工材には転用した簀子がある。土壌747B底部南寄りの段の上には大きさ約15cm×30cmの石、北寄りには大きさ約10～40cmの加工材・木片を5枚以上重ねて据える。埋土は土壌747Aが暗褐色砂泥、土壌747Bがオリーブ褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀中葉の遺物が出土した。

土壌1020A・B（図版3-5、図13） 北西部で検出した東西方向に2基一組の土壌が並ぶ遺構である。土壌1020は2基の土壌が独立しており、上部が削平された可能性がある。西側の土壌1020Aは平面形は南北約1.0～1.1m、東西約1.7mの細長い隅丸方形で、深さ約1.2mである。西寄りには高低差約0.3mの段を作る。東側の土壌1020Bは平面形は南北約1.0m、東西約1.8mの細長い隅丸方形で、深さ約1.2mである。東寄りには高低差約0.2～0.3mの段を作る。土壌1020Aと土壌1020Bの間は幅約0.4mの土手状の壁になる。土壌1020A底部西寄りの段の上には大きさ約20cmの石や大きさ約10～60cmの板材・棒状の木材を積み上げる。土壌1020Bの底部東寄りの段の上には大きさ約20cm×30cmの平たい石を2つ重ねて壁に立てて据え、西寄りには大きさ約20cm×30cmの薄い板材を据える。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、18世紀中葉の遺物が出土した。

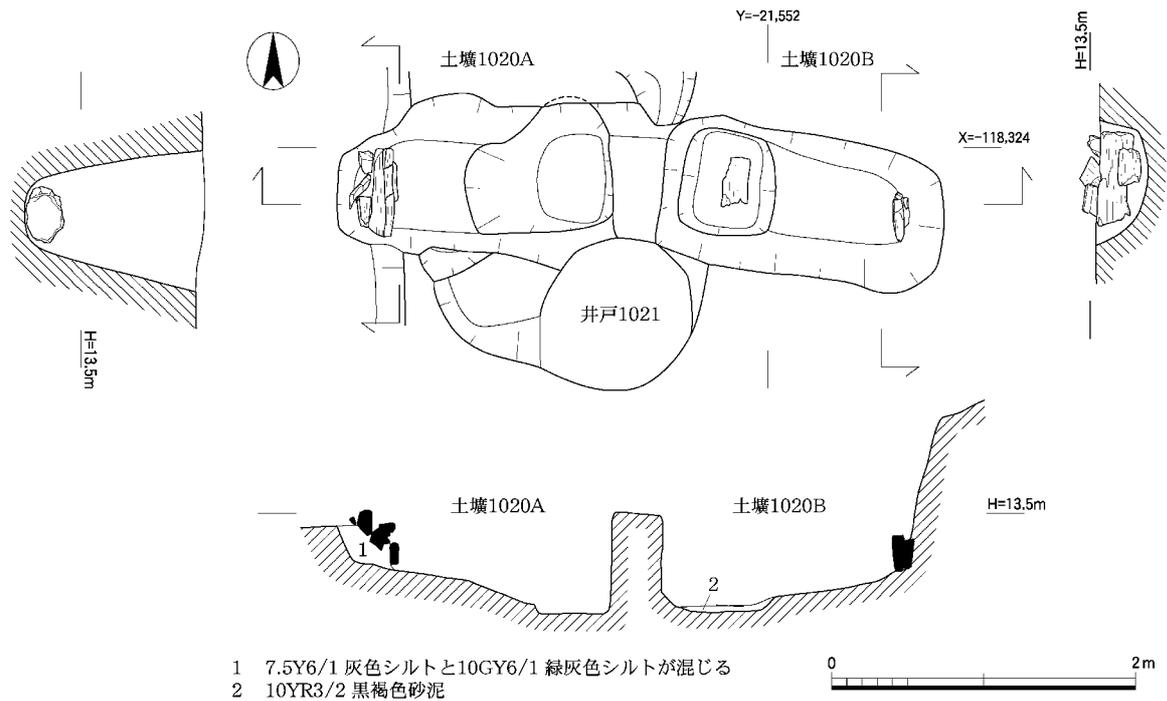


図13 1区土壌1020A・B実測図

井戸3 北西部で検出した。平面形は直径約1.0mの円形で、深さ1.5m以上である。井戸側の痕跡はないが、埋土より漆喰が出土していることから漆喰作りであった可能性がある。埋土は褐色砂泥で、18世紀中葉の遺物が出土した。

井戸163 中央部南寄りで検出した。平面形は直径約1.0mの円形で、深さ1.3m以上である。井戸側は厚さ約10cmの漆喰作りである。埋土は黒褐色砂泥で、19世紀後葉の遺物が出土した。

井戸1050 南西部で検出した。平面形は直径約1.6mの円形で、深さ1.5m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであった可能性がある。埋土は黒褐色砂泥で、18世紀前葉～中葉の遺物が出土した。

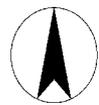
柱穴群 柱穴は散在し、まとまりを認めることができない。

### (3) 第2面の検出遺構(図版10～12、図14)

溝・土壌・井戸・柱穴・墓地などを検出した。

溝786(図版10-2、図15) 東部で検出した南北方向の溝である。第1面溝130Aに重複し、西側の上部が攪乱される。また、北側は攪乱され、南側は溝280につながる。断面形は浅いU字形で、底部中央がさらに窪む。長さ18.0m以上、幅1.0m以上、深さ約0.4mである。底部は南に向けて傾斜する。長さ60～80cm、幅10～20cmの細長い板を並べて杭で支えた護岸が残る部分がある。断面の状況から少なくとも1回は補修していることがわかる。埋土は黒褐色砂泥などで、18世紀後葉の遺物が出土した。

溝868 南東部で検出した東西方向の溝で、墓地の北を区画する。溝280と重複しており、輪郭は不明瞭である。断面形は浅いU字形で、長さ23.0m以上、幅約0.8～1.0m、深さ約0.4mである。



Y=-21,560

Y=-21,544

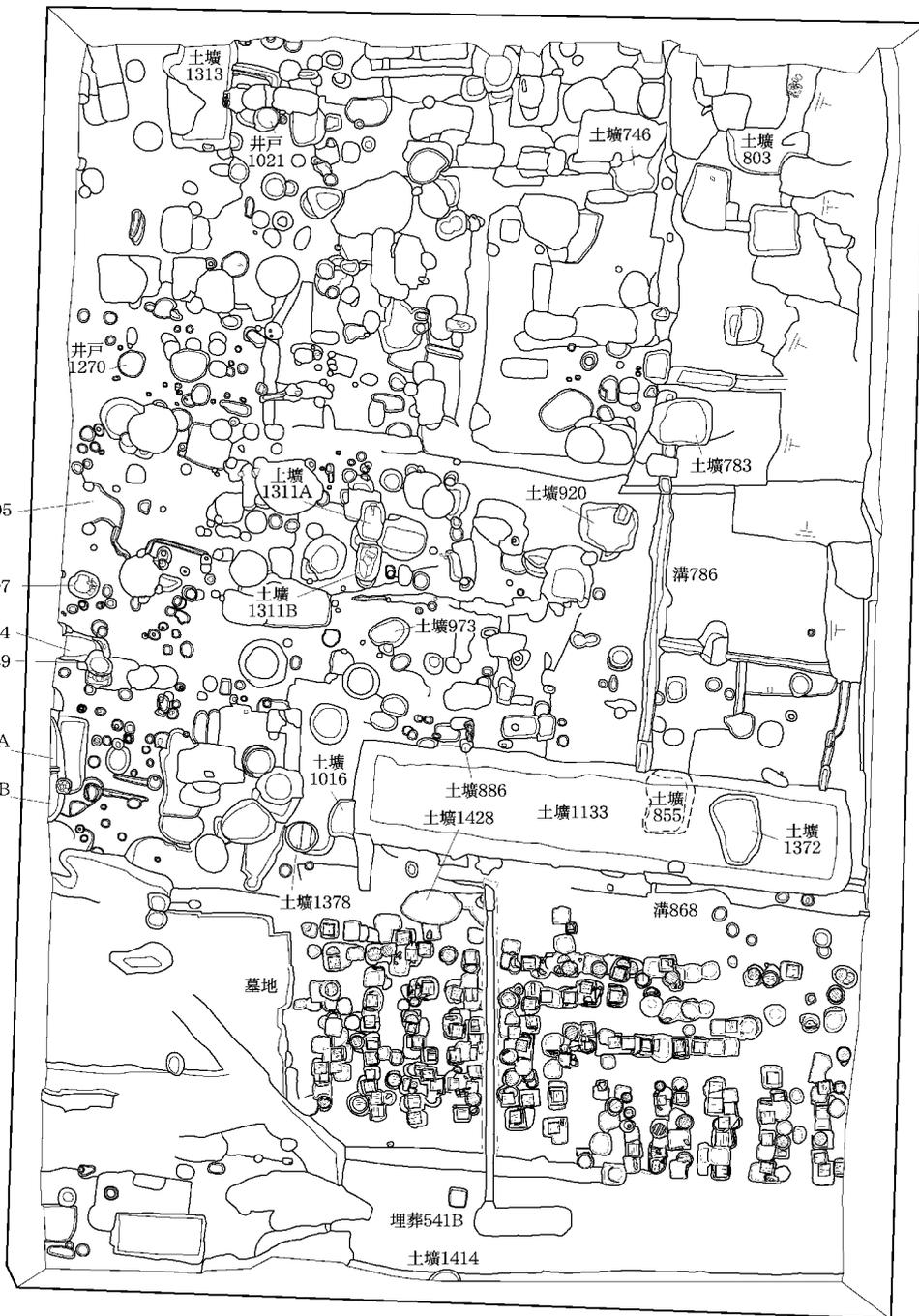
Y=-21,528

X=-118,324

X=-118,340

X=-118,356

X=-118,372



0 20m

图14 1区第2面遺構平面図

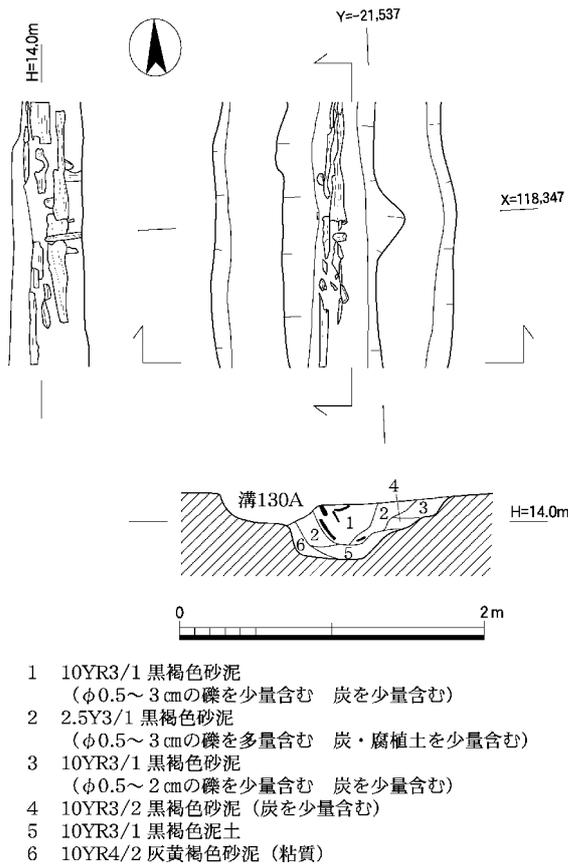


図15 1区溝786実測図

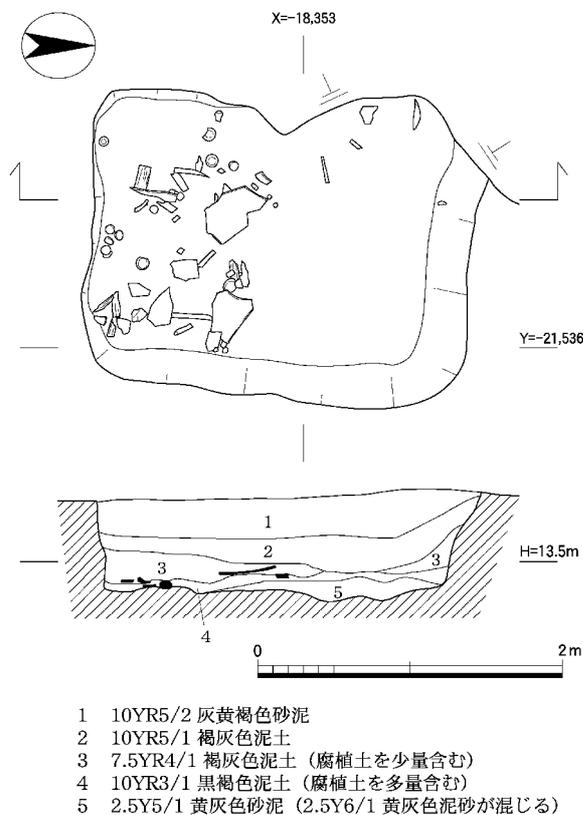


図16 1区土壌855実測図

底部は西に向けて傾斜する。埋土は暗褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物が出土した。出土遺物が溝280よりも新しいことから、溝280の東側を作り替えた溝の一つと考えられる。

土壌746 北西部で検出した。北側を攪乱されるが、平面形は南北2.2m以上、東西2.0m以上の隅丸方形に復元できる。深さ約0.7mである。埋土は黒褐色砂泥で、18世紀中葉～後葉の遺物が出土した。

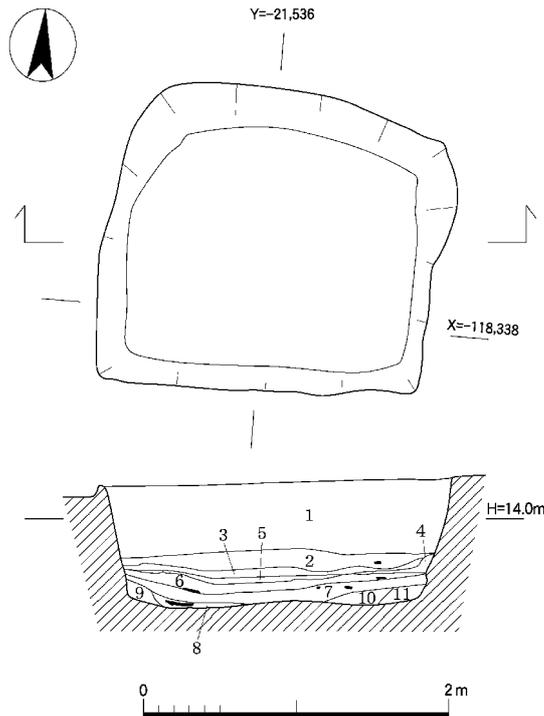
土壌783 (図17) 東部中央で検出した。平面形は南北約2.0m、東西約2.2mの方形で、深さ約0.8mである。埋土は腐植土を含む黒褐色砂泥などで、下層から18世紀前葉～中葉の遺物がまとまって出土した。

土壌803 北西部で検出した。周囲を攪乱されるが、平面形は南北2.0m以上、東西3.4m以上の隅丸方形に復元できる。深さ約0.3mである。第3面溝1660の最上層に相当する。埋土は褐色砂泥で、17世紀前半の遺物が出土した。

土壌855 (図版10-4、図16) 東部中央、土壌1133の上部で検出した。西側が攪乱されるが、平面形は南北約2.5m、東西1.9m以上の方形に復元できる。深さ約0.6mである。埋土は腐植土を含む黒褐色泥土などで、下層から18世紀前葉～中葉の遺物がまとまって出土した。

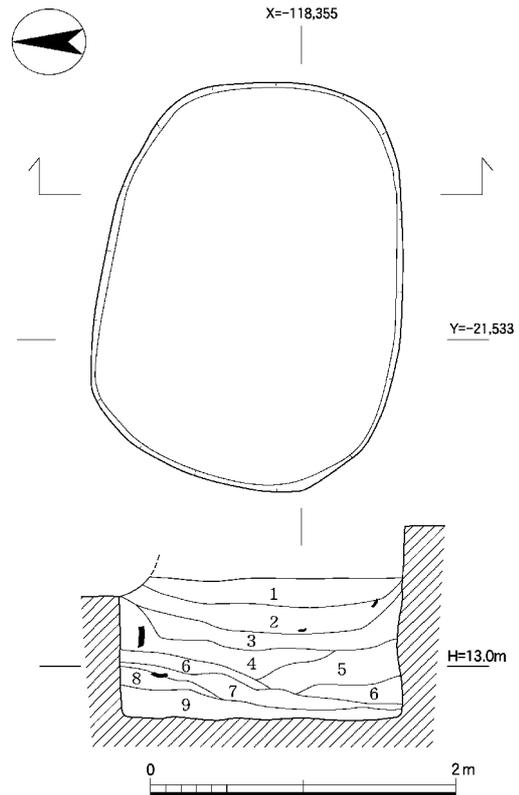
土壌1016 中央部南寄り、土壌1133の西端上部で検出した。東側が攪乱されるが、平面形は南北約2.9m、東西約2.1mの楕円形に復元できる。深さ約0.3mである。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、18世紀中葉以降の遺物が出土した。

土壌1313 北西部で検出した。北部は調査



- 1 10YR2/2 黒褐色砂泥
- 2 10YR3/1 黒褐色砂泥 (粘質 焼土を少量含む)
- 3 10YR2/1 黒褐色砂泥 (腐植土を多量含む)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (粘質)
- 5 2.5Y2/1 黒色細砂
- 6 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
- 7 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 8 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
- 9 2.5Y5/1 黄灰色粘土
- 10 2.5Y4/1 黄灰色泥砂
- 11 10Y5/1 灰色泥砂

図17 1区土壌783実測図



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (粘質)
- 2 10YR4/1 褐灰色砂泥 (粘質 φ2~4cmの礫を少量含む)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色砂泥
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 5 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (腐植土を少量含む)
- 6 5Y5/1 黄灰色砂泥
- 7 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 (腐植土を多量含む)
- 8 5Y6/1 灰色砂泥
- 9 2.5Y6/1 黄灰色砂泥 (粘質)

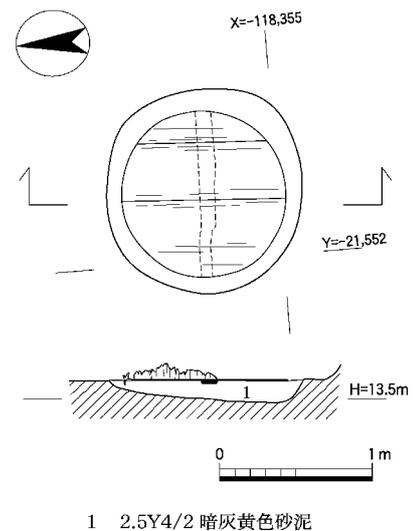
図18 1区土壌1372実測図

区外となり、北西部・東部が攪乱されるが、平面形は南北4.2m以上、東西約2.5mの方形に復元できる。深さ約0.4mである。埋土は暗褐色砂泥で、17世紀後葉～18世紀前葉の遺物が出土した。

土壌1372 (図版10-3、図18) 東部中央、土壌1133の上部で検出した。平面形は南北約1.6m、東西約2.7mの楕円形で、深さ約1.0mである。埋土は腐植土を含む黄灰色砂泥などで、17世紀後葉～18世紀前葉の遺物がまわって出土した。

土壌1414 南部中央壁際で検出した。第2層掘り下げ中に一石五輪塔が出土したため土壌として扱ったが、南側の3区の調査でも遺構の輪郭を検出しなかったため、掘り窪めた遺構ではなく、整地層中に埋没したものと考えている。

土壌1378 (図版11-2、図19) 中央部南寄りで検出した。掘形は直径約1.3mの円形で、深さ



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥

図19 1区土壌1378実測図

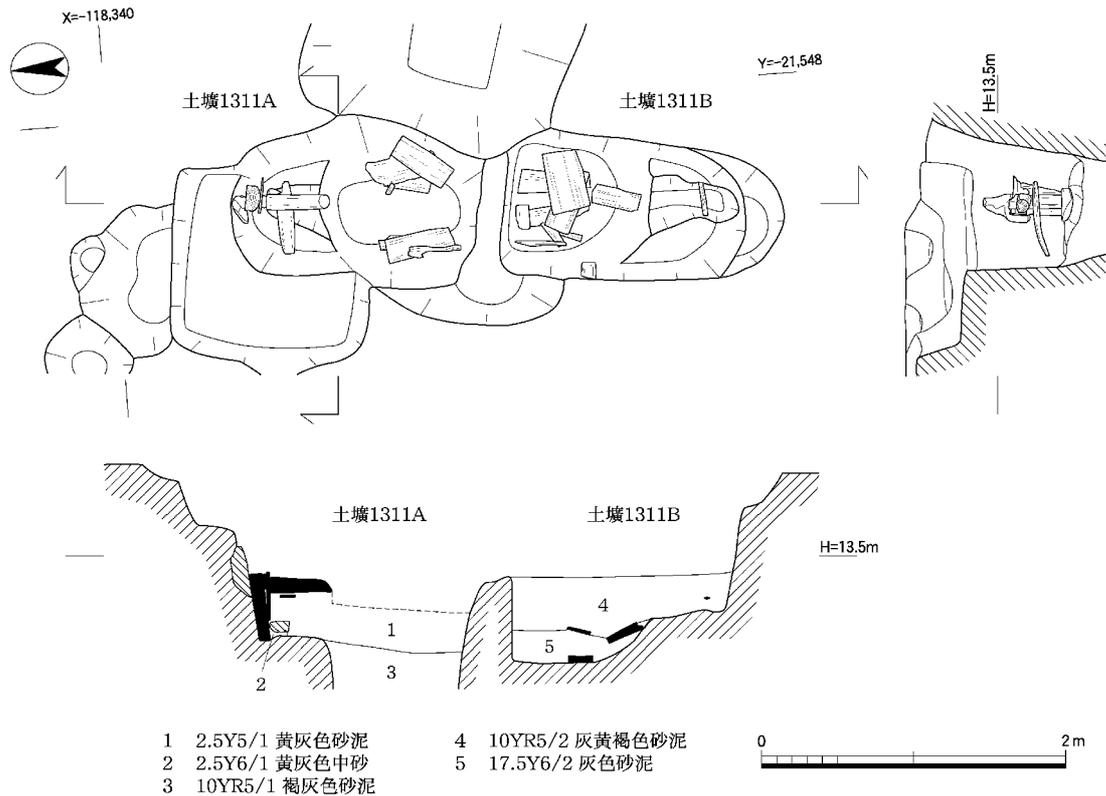


図20 1区土壌1311A・B実測図

は約0.1mである。中央に底径約1.1mの大型の桶を据え付ける。底板は3枚で、底部外面には底板を支える長さ105cm、幅10cmの板材をあてがう。部分的に幅約15cm、残存高約10cmの側板が残る。掘形の埋土は暗灰黄色粘質土である。遺構の時期を確定する遺物は出土していない。

土壌1311A・B(図版11-3、図20) 中央部で検出した南北方向に2基一組の土壌が並ぶ遺構である。2基の土壌が独立しており、上部が削平された可能性がある。東側が攪乱されるが、北側の土壌1311Aは平面形は南北約1.6m、東西約0.9~1.1mの細長い隅丸台形に復元でき、深さ約1.2mである。北寄りには高低差約0.3mの段を作る。南側の土壌1311Bは平面形は南北約1.8m、東西約0.8~1.0mの細長い隅丸台形で、深さ約1.3mである。南寄りには高低差約0.3mの段を作る。土壌1311Aと土壌1311Bの間は幅約0.3mの土手状の壁になる。また、土手状の壁の上面西側には南北約1.2m、東西約0.3m、深さ約0.4mの細長い窪みがある。土壌1311A底部北寄りの段の上には大きさ約10cm×20cmの平たい石を据え、また、大きさ約10cm×30cmの平たい石を壁に立てかけて据え、大きさ約10~40cmの板材・加工材を組み合わせる。南寄りには東西それぞれに大きさ約10~40cmの板材を3枚以上重ねて据える。土壌1311B底部南寄りの段の上には大きさ約5cm×20cmの木片、北寄りには大きさ約10~40cmの板材・加工材を4枚以上重ねて据える。土壌1311A・Bの板材・加工材には穿孔のある板や柄穴のある角材がある。埋土は土壌1311Aが黒褐色砂泥、土壌1311Bがにぶい黄褐色砂泥で、18世紀中葉の遺物が出土した。

土壌1294 西部中央壁際で検出した。検出できたのは東側の1基のみで、西側は調査区外になるが、形態の共通性から東西方向に2基一組の土壌が並ぶ遺構であることがわかる。土壌1294は

独立しており、上部が削平された可能性がある。南側が攪乱されるが、平面形は南北約1.0～1.1m、東西約1.8mの細長い隅丸台形に復元でき、深さ約1.0mである。東寄りには高低差約0.3mの段を作る。土壌1294西側は幅約0.3mの土手状の壁になる。また、土手状の壁の上面北側には南北約0.5m、東西0.5m以上、深さ約0.3mの窪みがある。土壌1294底部東寄りの段の上には大きさ約25cm×25cmの平たい石を壁に立てて据える。埋土は褐色砂泥で、18世紀中葉の遺物が出土した。

土壌1850 A・B 西部中央壁際で検出した南北方向に2基一組の土壌が並ぶ遺構である。西半分が調査区外となるが、南北4.2m以上、東西0.6m以上の不整形な細長い楕円形に掘り窪めた両端に、それぞれ土壌を掘り下げる。北側の土壌1850 Aは平面形は南北約1.8m、東西0.4m以上の細長い隅丸台形に復元でき、深さ約1.0mである。北寄りには高低差約0.2mの不明瞭な段を作る。南側の土壌1850 Bは平面形は南北約2.0m、東西0.5m以上の細長い隅丸台形に復元でき、深さ約1.0mである。南寄りには高低差約0.2mの段を作る。土壌1850 Aと土壌1850 Bの間は幅約0.2mの土手状の壁になる。土壌1850 A底部北寄りの段の上には大きさ約15cmの平たい石・板材を壁に立てかけて据える。土壌1850 B底部南寄りの段の上にはに大きさ約20cmの平たい石・板材を壁に立てかけて据え、北寄りには大きさ約30cmの板材を据える。埋土はともに灰色砂泥などで、18世紀中葉の遺物が出土した。

土壌1197 ( 図版11- 1、 図21 ) 西部中央で検出した。掘形は南北約1.1m、東西約1.2mのほぼ

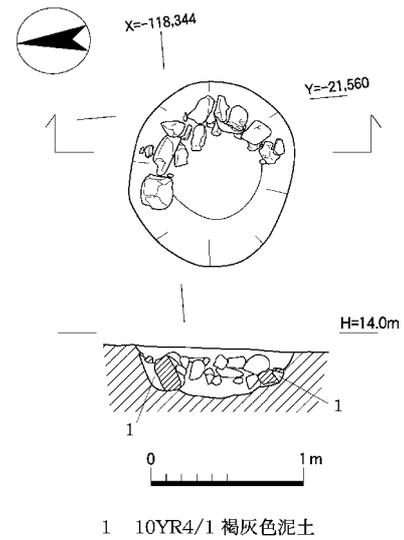
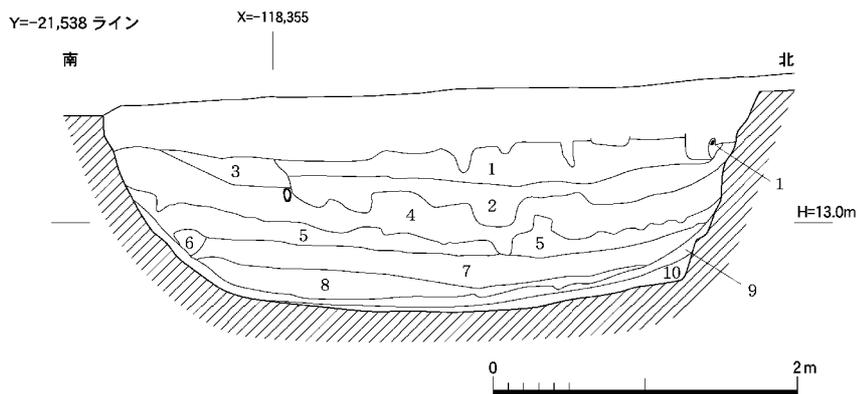
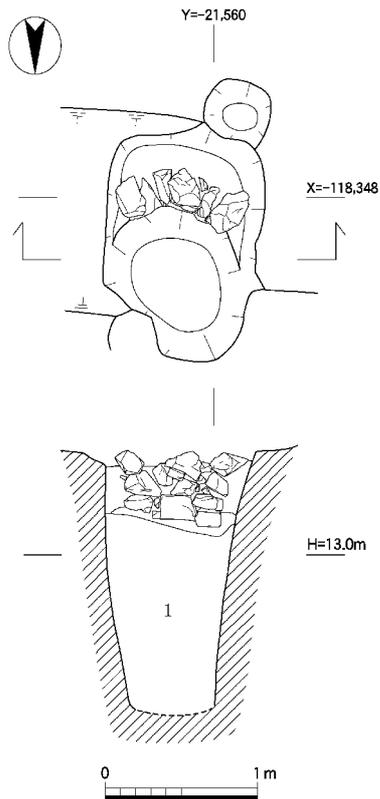


図21 1区土壌1197実測図



- 1 2.5Y6/2 灰黄色泥砂 (7.5GR6/1 緑灰色粘土のブロックを少量含む)
- 2 5Y6/2 灰オリーブ色泥砂 (7.5GR6/1 緑灰色粘土のブロックを少量含む)
- 3 5Y5/2 灰オリーブ色泥砂
- 4 5Y6/2 灰オリーブ色泥砂に2.5Y5/1 黄灰色粘土が混じる
- 5 5Y5/2 灰オリーブ色泥砂
- 6 5Y5/4 オリーブ色粘土
- 7 7.5Y6/2 灰オリーブ色砂泥
- 8 7.5Y6/2 灰オリーブ色砂泥 (粗砂を少量含む)
- 9 5Y5/1 黄灰色シルト (下部にφ1～2cmの礫を少量含む)
- 10 5Y6/1 灰色泥砂 (粗砂を多量含む)

図22 1区土壌1133断面図



1 10YR4/4 褐色砂泥  
(φ 1～2 cmの礫を少量含む、  
炭を少量含む)

図23 1区井戸1189実測図

円形で、深さ約0.3mである。北側・東側に大きさ約10～50 cmの石を2段以上積み上げる。南側・西側の石はないが、内法が長辺約0.5m、短辺約0.4mの方形の小型の石室と推定できる。残存高は約0.2mである。埋土は褐灰色粘土で、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

土壌1133 (図版12- 1～12- 3、図22) 中央部から東部にかけて検出した大土壌である。平面形は南北約4.0m、東西約23.0mの方形で、長軸は西側でわずかに北に振る。断面形はコ字形で、深さは約1.5mである。埋土は粘土の混じる灰オリーブ色泥砂やオリーブ色粘土などで、東から西に向かって短期間に埋め立てられた状況を示す。また、水を湛えていた痕跡はないので濠ではない。16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

石敷1295 (図版12- 5) 西部中央で検出した。攪乱される部分が多く、全体的な輪郭は不明であるが、北はX=-118,333m付近、東はY=-21,557m付近、南はX=-118,343m付近にまで広がる。西側は調査区外となる。直径1～2 cmの礫を含む厚さ約5 cmの堅く締まった砂泥層で、1区西壁断面図 (図6) の14層などが相当する。整地層であることは間違

違いなく、建物内部の土間・通路の可能性も考えられる。16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

井戸1021 北西部で検出した。平面形は直径約1.1mの円形で、深さ2.7m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。第1面土壌1020A・Bの南側に接するが、関係は不明である。埋土は暗褐色砂泥などで、18世紀中葉～後葉の遺物が出土した。

井戸1189 (図版12- 4、図23) 西部中央で検出した。平面形は直径約1.0mの円形で、深さ1.8m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できるが、南側の土壌埋土と重複する部分には石組みを作る。石組みは大きさ約10～30cmの石を小口面を内側に向けて井戸側の円弧に合わせて円形に積み上げる。残存高は約0.5mである。埋土は褐色砂泥などで、17世紀前葉の遺物が出土した。

井戸1270 西部中央で検出した。平面形は直径約1.0mの円形で、深さ1.4m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。埋土は暗褐色砂泥などである。出土遺物はない。

柱穴群 北西部から西部中央の南部町通寄りで多数の柱穴・小土壌を検出した。ややいびつな平面形のものもあるが、直径約0.2～0.6m、深さ約0.1～0.4mで、一部には直径約10～20cmの柱の痕跡がある。重複が著しいこともあり、まとまりを認めることができないが、この区域に建物があったと推定できる。



#### (4) 第3面の検出遺構(図版17・18、図24)

溝・土壇・井戸・柱穴を検出した。調査区北西部から西部中央には小規模な溝・柱穴・小土壇が密集するのに対して、東部では遺構を検出していない。

溝1660(図版18、図25) 北部から中央部東寄りで見出した北北東から南南西方向に伸びるやや弯曲する溝である。北側は調査区外に伸び、南側は土壇1133や墓地の整地により削平されたため不明瞭となる。断面形は逆台形で、長さ35.0m以上、幅約3.0~4.5m、深さ約0.9mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は底部付近は粘質土・泥土、中程より上層は礫を含む砂泥層で、16世紀末の遺物が少量出土した。最上層では17世紀前葉の遺物を含む。また、底部中央には幅約0.9m、深さ約0.3mの浅い窪みがあり、埋土最下層からはわずかではあるが、平安時代や鎌倉時代の遺物が出土していることから、より古い時期の溝が重複している可能性がある。

溝1449 南部中央から南東部で見出した南東から北西に伸びるやや弯曲する溝である。東側は墓地の整地により削平されたため不明瞭となり、西側は調査区外に伸びる。断面形はU字形で、長さ20.0m以上、幅約1.2~2.0m、深さ約0.6mである。底部は北西に向けて傾斜する。埋土は礫を少量含む黒褐色泥土・シルトで、16世紀の遺物が出土した。

溝1453 南西部で見出した東西方向の溝である。東側は溝1449につながり、西側は調査区外に伸びる。断面形は浅い逆台形で、長さ4.7m以上、幅約0.4~0.5m、深さ約0.2mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土は暗灰黄色粘質土である。出土遺物はない。

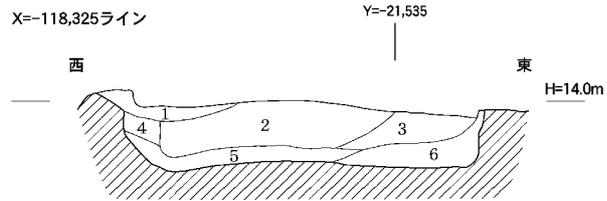
溝1472 南西部で見出した東西方向の溝である。東側は溝1449につながり、西側は調査区外に伸びる。断面形は浅い逆台形で、長さ7.0m以上、幅約1.3m、深さ約0.3~0.4mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土は黄灰色シルトである。出土遺物はない。

溝843 北部中央で見出した北北東から南南西方向の溝である。北側は攪乱され、南側は不明瞭となる。断面形は逆台形で、長さ8.5m以上、幅約0.4m、深さ約0.2mである。底部は南南西に向けて傾斜する。埋土は褐色砂泥である。出土遺物はない。

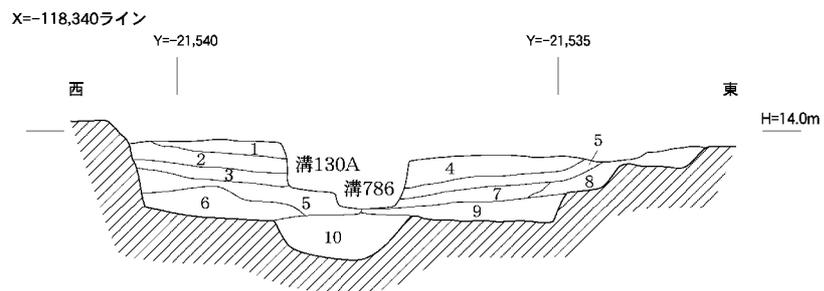
溝1357(図版18) 北西部で見出した北北東から南南西方向の溝である。北側・南側とも調査区外に伸びる。断面形は逆台形で、長さ13.2m以上、幅約0.5m、深さ約0.2mである。底部は南南西に向けて傾斜する。埋土は暗褐色砂泥で、16世紀末~17世紀初頭の遺物が出土した。

溝1731(図版18) 北西部で見出したL字形に屈曲する溝である。東西方向の部分は東南東から西北西方向に伸び、西端は攪乱される。南北方向の部分は北北東から南南西方向に伸び、南端は不明瞭になる。断面形は逆台形で、東西方向の部分は長さ2.0m以上、幅約0.4m、深さ約0.3m、南北方向の部分は長さ9.3m以上、幅約0.4m、深さ約0.3mである。底部は南南西に向けて傾斜する。埋土は褐色砂泥で、16世紀の遺物が出土した。

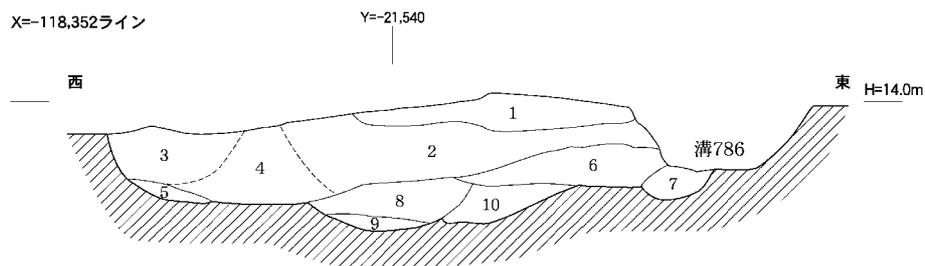
溝2006(図版18) 北西部で見出した東南東から西北西方向の溝である。東は攪乱され、西側は溝2111につながる。また、溝2007と交差するが溝2006の方が新しい。断面形は逆台形で、長さ7.0m以上、幅約0.4~0.7m、深さ約0.1~0.2mである。底部は西北西に向けて傾斜する。埋土



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~1 cmの礫をわずかに含む)
- 2 7.5YR5/3 灰褐色砂泥 (φ1.5~2 cmの礫をわずかに含む)
- 3 7.5Y6/2 灰褐色砂泥 (φ0.5~1 cmの礫を多量含む)
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂
- 5 10YR4/2 灰黄褐色泥土
- 6 10YR5/1 褐灰色粘質土 (φ0.5cmの礫をわずかに含む 炭をわずかに含む)



- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (φ0.5~1 cmの礫を少量含む 炭を少量含む)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (粘質 φ2 cmの礫を少量含む 炭を少量含む)
- 3 10YR3/2 黒褐色砂泥 (粘質 φ2 cmの礫を少量含む)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (粘質 φ0.5~5 cmの礫を少量含む 炭を少量含む)
- 5 10YR3/1 黒褐色泥土 (炭を少量含む)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色泥土と7.5Y5/1 灰色シルトがまだらに混じる。
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (粘質 粗砂・φ2 cmの礫を少量含む)
- 8 10YR3/2 黒褐色泥土 (3 cmの礫をわずかに含む)
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂 (φ0.5~2 cmの礫を少量含む)
- 10 10YR4/1 褐灰色砂泥 (粘質 10YR5/6 明黄褐色砂泥が混じる φ1~8 cmの礫を少量含む)



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (2.5Y5/3 黄褐色砂礫が混じる 整地層)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色泥土 (φ1.5~2 cmの礫を中量含む)
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (φ2~3 cmの礫をわずかに含む)
- 4 5Y6/3 オリーブ黄色砂泥と2.5Y7/6 明黄褐色粘質土が斑に混じる (φ3 cmの礫を少量含む)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色泥土 (φ1.5~2 cmの礫を少量含む)
- 6 2.5Y5/3 暗灰黄色砂泥 (φ3~4 cmの礫を多量含む)
- 7 10Y6/1 オリーブ灰色砂泥 (10YR8/8 黄橙色砂泥が混じる)
- 8 2.5Y5/2 暗黄灰色砂礫
- 9 2.5Y5/4 黄褐色粘質土
- 10 5Y8/1 灰白色砂礫



図25 1区溝1660断面図

はにぶい黄褐色砂泥で、16世紀後葉の遺物が出土した。

溝2007（図版18） 北西部で検出した北北東から南南西方向の溝である。北側・南側とも攪乱される。溝2006と交差する。断面形は逆台形で、長さ3.9m以上、幅約0.3～0.4m、深さ約0.2mである。底部は南南西に向けて傾斜する。埋土は褐色砂泥である。出土遺物はない。

溝2111（図版18） 北西部で検出した北北東から南南西方向の溝である。北側は溝2006とつながり、南側は調査区外に延びる。断面形は逆台形で、長さ6.4m以上、幅約0.4m、深さ約0.3mである。底部は南南西に向けて傾斜する。埋土は灰黄褐色砂泥である。出土遺物はない。

北西部から北部中央で検出した溝はいずれも北から東へ約14～15度の方向で平行・直交する。平行する溝の間隔は、西から順に、溝1357と溝2111は約0.8m、溝2111と溝2007は約3.2m、溝2007と溝843は約12.5m、溝1731と溝843は約12.0mである。

土壌1690 北東部、溝1669の底部で検出した。南北約2.0m、東西約3.0mの不整形な平面形で、深さ約0.4mである。埋土は褐灰色粘質土で、奈良・平安時代の土器類と16世紀の遺物が出土した。溝1660底部の落ち込みの可能性はある。

土壌1779 北部中央で検出した。平面形は南北約1.2m、東西約1.4mのほぼ円形で、深さ約0.6mである。埋土は暗褐色砂泥で、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

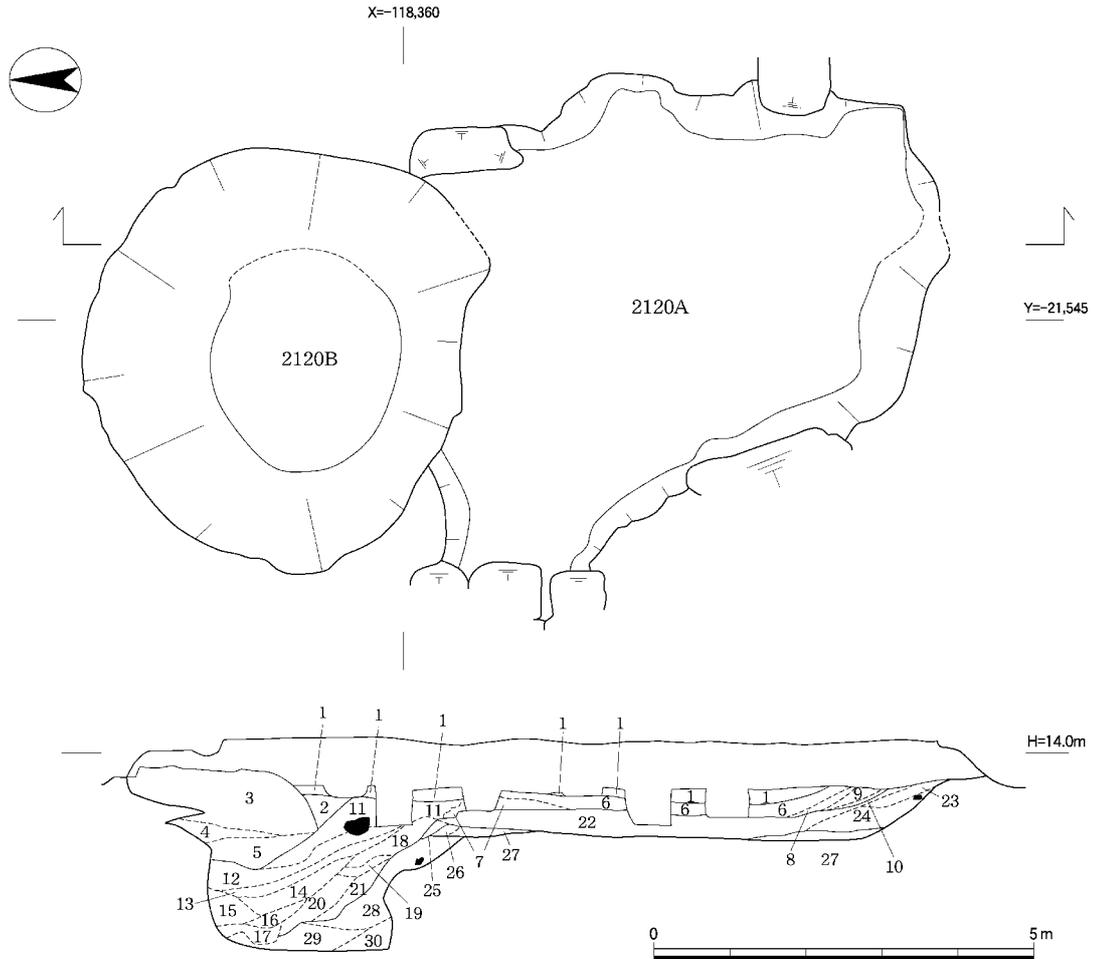
土壌2071 中央部北西寄りで検出した。平面形は直径約1.2mの円形で、深さ約0.3mである。埋土は褐色砂泥で、大きさ10～30cmの自然石を含む。16世紀後葉の遺物が出土した。

土壌2120A・B（図版16、図26） 南部、墓地整地層下面で検出した。1つの大土壌として掘削を開始したが、2つの土壌が重複していることがわかったため、南側を土壌2120A、北側を土壌2120Bとした。土壌2120Aは周囲が墓地の整地により削平されたため輪郭は不明瞭で、南北6.0m以上、東西約6.0mの不整形な平面形になる。深さ約0.7mである。土壌2120Bは平面形は南北4.8m、東西約5.8mの楕円形で、深さ2.2m以上ある。A・Bとも埋土は南側から堆積しており、まず、Aの一部が埋まった状態でBが埋没し、そのあとAが埋没するという複雑な状況を示す。17世紀初頭の遺物がまとまって出土しているが、土壌2120A・土壌2120Bの上層・下層からの遺物に時期差が認められないことから短期間に埋め立てられたと考えられる。

井戸2021（図版18、図27） 北西部で検出した。平面形は直径約2.5mの円形で、上面から底部にかけて徐々に狭くなり、底部径は約0.5mになる。深さ約3.9mである。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。中程で地山が崩落した痕跡があり、底部埋土の礫を含む暗灰黄色泥土はこの時に堆積したものであろう。16世紀後葉の遺物が出土した。

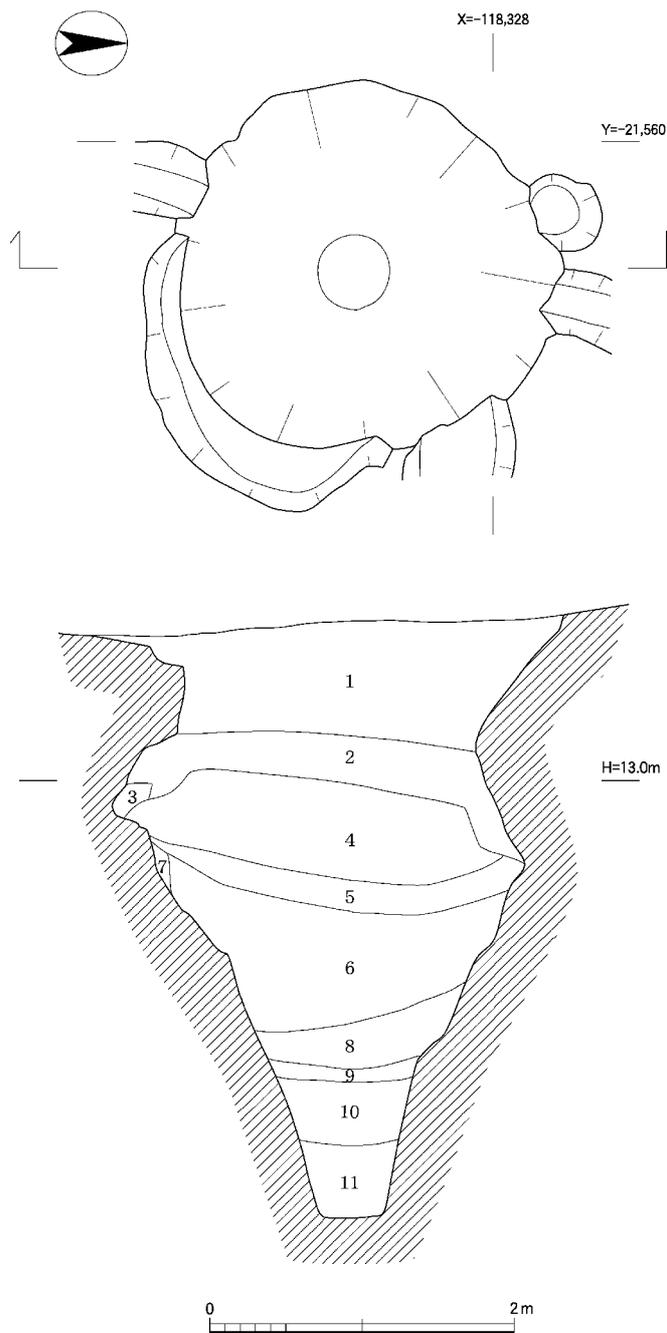
柱穴1716・2087・2259・2247（図28） 北西部で検出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は4基で、検出長は約5.5mである。北側でわずかに東に振る。柱穴は一部が攪乱されるが、直径約0.4m、深さ約0.2～0.3mで、いずれも中央に大きさ約20cmの石を平坦な面を上にして据える。柱穴の間隔は約1.9mである。柱穴2087から16世紀の遺物が出土した。

柱穴2174・1875・1876・1831（図版18、図28） 西部中央で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は4基で、検出長は約5.2mである。西側でやや北に振る。柱穴は直径約0.5～



- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (φ 1~3 cmの礫を少量含む 墓地整地層)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 3 10YR6/6 明黄褐色砂礫 (φ 1~4 cmの礫を多量含む)
- 4 5Y4/1 灰色粘土 (φ 1~5 cmの礫をわずかに含む 地山崩落土)
- 5 5Y4/1 灰色シルト (φ 1~7 cmの礫を中量含む 地山崩落土)
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む 炭を少量含む)
- 7 2.5Y5/3 黄褐色中砂 (φ 1~3 cmの礫を少量含む)
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (炭を多量含む)
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 10 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭を中量含む)
- 11 2.5Y3/1 黒褐色シルト
- 12 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 13 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 14 2.5Y3/2 黒褐色粘土 (2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫が混じる)
- 15 7.5Y6/1 灰色細砂~中砂 (2.5Y5/1 黄灰色粘土が縞状に混じる)
- 16 10YR3/2 黒褐色粘土 (2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫が混じる)
- 17 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 18 2.5Y4/1 黄灰色シルト (φ 1~3 cmの礫をわずかに含む)
- 19 2.5Y5/1 黄灰色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 20 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫 (φ 1~3 cmの礫をわずかに含む)
- 21 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 22 2.5Y3/2 黒褐色粘土
- 23 5Y4/2 灰オリーブ色シルト (φ 1~3 cmの礫をわずかに含む)
- 24 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 25 5Y4/1 灰色細砂
- 26 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂~中砂
- 27 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (φ 1~5 cmの礫を中量含む)
- 28 5Y6/2 灰オリーブ色細砂と2.5Y4/2 暗灰黄色シルトが混じる
- 29 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂~中砂 (φ 1~2 cmの礫を多量含む)
- 30 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂~中砂

図26 1区土壌2120A・B実測図



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/4 黄褐色シルト (φ 1cmの礫を少量含む)
- 3 5Y7/1 灰白色砂礫
- 4 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (粘質 φ 1cmの礫を少量含む)
- 5 5Y4/1 灰色シルト
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
- 7 5Y6/1 灰色シルト (細砂を少量含む)
- 8 5Y6/1 灰色シルト (φ 5cmの礫を多量含む)
- 9 2.5Y4/1 黄灰色泥土
- 10 2.5Y4/2 暗灰黄色泥土 (φ 10~15cmの礫を多量含む)
- 11 2.5Y4/2 暗灰黄色泥土 (φ 3~5cmの礫をわずかに含む)

図27 1区井戸2021実測図

0.6m、深さ約0.3~0.6mで、柱穴1875には直径約10cmの柱根が残る。柱穴の間隔は約1.8mである。出土遺物はない。

柱穴825・826・2266 (図28) 中央部北寄りで検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は3基で、検出長は約2.6mである。西側でやや北に振り、溝843と直交する。柱穴は直径約0.4~0.5m、深さ約0.1~0.3mである。柱穴の間隔は西側から約0.9m・約1.3mである。出土遺物はない。

柱穴1054 (図28) 南西部で検出した。直径約0.4m、深さ約0.4mで、直径約10cmの柱根が残る。16世紀後葉の遺物が出土した。

柱穴2028 (図28) 西部中央で検出した。西側が攪乱されるが、直径約0.6m、深さ約0.4mで、直径約20cmの柱根が残る。出土遺物はない。

柱穴2125 (図28) 西部中央で検出した。直径約0.4m、深さ約0.5mで、一辺約10cmの方形の柱根が残る。出土遺物はない。

柱穴群 これらの柱穴列・柱穴は建物・柵の一部を構成していたものと考えられる。北西部から西部中央では、ほかにも多数の柱穴・小土壌を検出した。ややいびつな平面形のものもあるが、直径約0.3~0.6m、深さ約0.1~0.5mである。

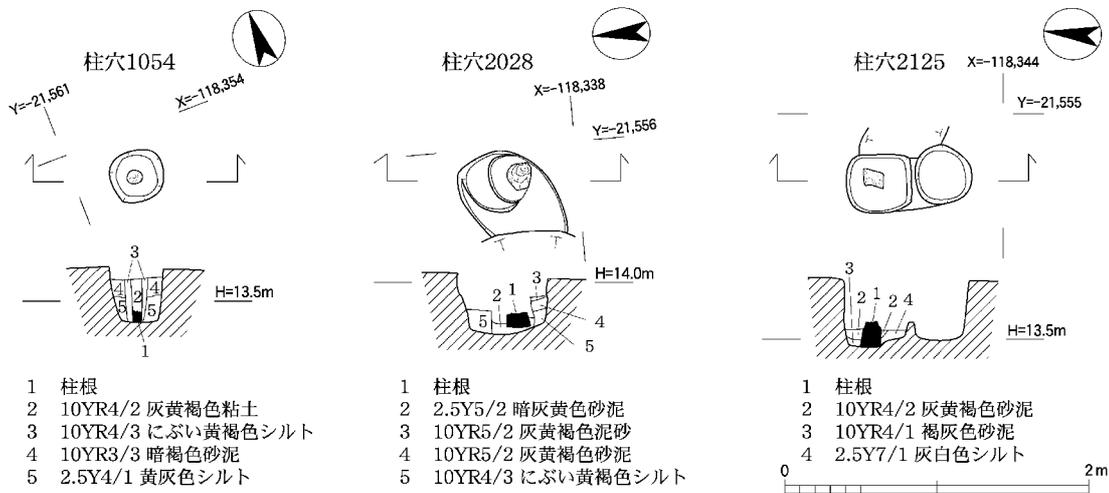
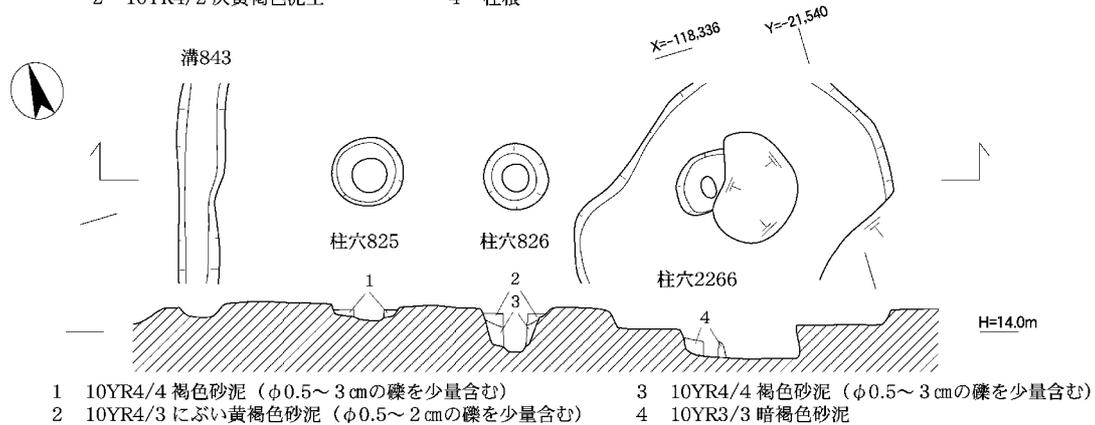
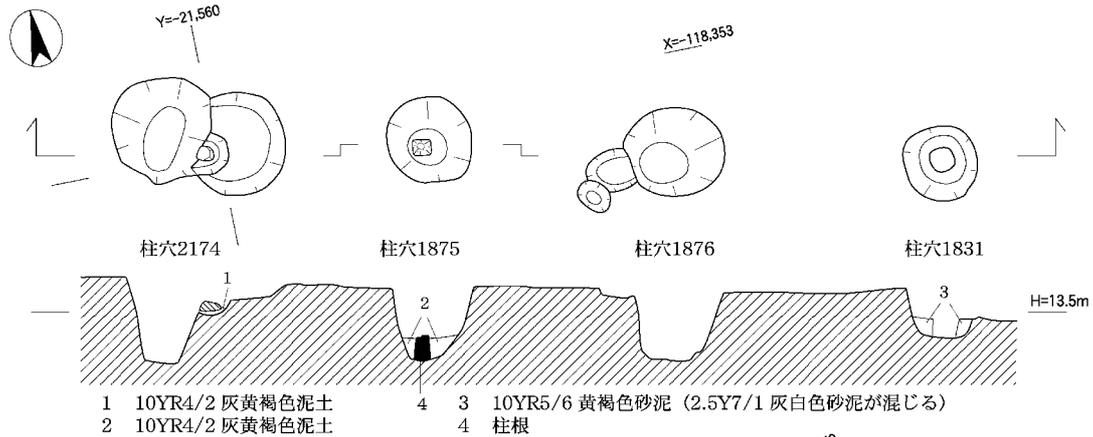
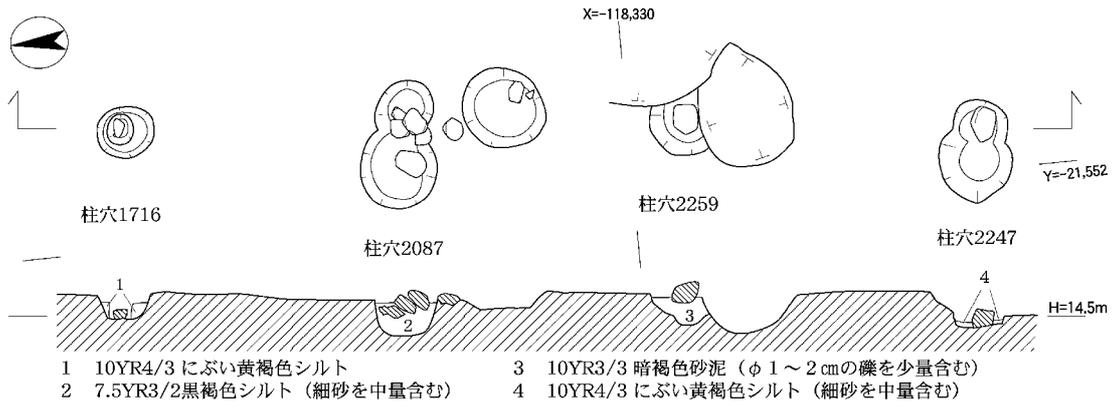


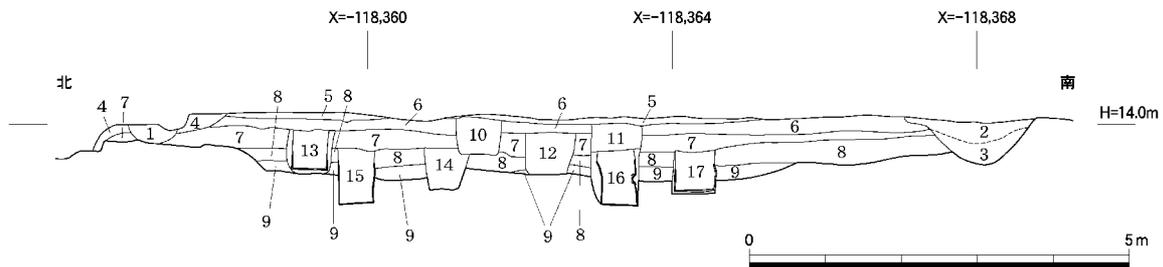
図28 1区柱穴1716・2087・2259・2247、柱穴2174・1875・1876・1831、柱穴825・826・2266、柱穴1054、柱穴2028、柱穴2125実測図

( 5 ) 墓地 ( 図版 4 ~ 9 ・ 13 ~ 16、 図92 ~ 97 )

墓地は南部で検出した。この墓地は、昭和初期に移転した日蓮宗真福寺に付属するものである。北側は溝280、南側は溝180に区画され、東側は2区に広がる。西側はY=-21,553m付近を限りとするが、区画施設の痕跡は認めていない。検出した墓地の規模は、南北約10.0m、東西24.0m以上となる。時期は、江戸時代前期から昭和初期にまで及ぶ。これは一寺院の創建から移転までの墓地の変遷を確認できたことになる。なお、東側の延長である2区で検出した墓地については次章で紹介する。墓地全体の構造・歴史的変遷については第6章第2節で総括する(図92~図97)。

基本層序(図29) 墓地の基本層序は上層から黒褐色砂泥、オリーブ褐色砂泥、にぶい黄褐色砂泥、灰黄褐色砂泥、黄灰色砂泥となる。これらはいずれも墓地の整備に伴う整地層と考えられ、下層は礫を含む暗灰黄色・白色粘土の地山や土壌2120A・Bの埋土となる。また、墓地西側はこれらとは別に湿地を埋め立てて整地を行っている。それぞれの層序の変わり目で遺構検出を行ったが、必ずしも埋葬施設の輪郭が明瞭には認めることができなかったため、大きくは第1面・第2面の2回にわけて墓地の調査・記録を実施した。断面図の一部は図33・図34に掲載した。最終的に墓地の変遷を6期に分けて整理したが、第1面では主に6期・5期の墓地、第2面では主に4期から1期の墓地の調査を行ったことになる。墓地の埋葬施設は遺構密度が極めて高く、かつ複雑に重複していたため複数の時期の埋葬施設を同時に調査することとなった。したがって6期から1期の段階区分には、ある程度の時期的な重複があることをことわっておく。

埋葬施設(図30~34) 埋葬方法には土葬と火葬があり、土葬が大部分を占める。埋葬施設は総計562基を確認した。埋葬施設の種類には、方形木棺(324基 図31)、円形木棺(164基 図32)、土器棺(30基 図32)、方形木棺と土器棺を組み合わせたもの(5基)、直葬(3基 図32)、墓石のみ(6基)、不明(30基)である。



- |   |             |
|---|-------------|
| 1 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 (土器片を中量・炭を少量含む 溝280)              | 10 (埋葬275)  |
| 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 (φ 1 ~ 3 cmの礫を少量含む 溝180)          | 11 (埋葬277)  |
| 3 10YR2/2 黒褐色砂泥 (φ 1 ~ 3 cmの礫を少量含む 炭をわずかに含む 溝180) | 12 (埋葬276)  |
| 4 10YR3/1 黒褐色砂泥 (粗砂~φ 3 cmの礫を中量含む)                | 13 (埋葬1180) |
| 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (中砂~極粗砂を多量含む 上部は粗砂~極粗砂のみ)        | 14 (埋葬1182) |
| 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (骨片を少量含む 堅く締まる)                | 15 (埋葬1181) |
| 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土器片・骨片を少量含む)                  | 16 (埋葬2057) |
| 8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (φ 1 ~ 2 cmの礫を少量含む)              | 17 (埋葬2016) |
| 9 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (φ 1 ~ 3 cmの礫を少量含む)               |             |

図29 1区墓地整地層断面図

直葬には遺体を土壌におさめたものと四肢骨を中心とする人骨を土壌内に並べて改葬したのがある。方形木棺・円形木棺・土器棺は、大小さまざまな大きさのものがある。

方形木棺・円形木棺は点数が多く、また、大きさのみならず部材や製作技法にさまざまな特徴がみられる。ここでは構造や製作工程も考え合わせて、いくつかの特徴に着目して分類した。部材の一部については樹種の同定を行った(図37)。

方形木棺は、まず、埋葬を目的として製作したものと別の製品を棺に転用したものに分けることができる。埋葬を目的として製作したものは、複数の部材を組み合わせて作ることから素材となる部材の性質を基にすると、原材から木棺を製作したものと一部もしくは全部を転用材・端材で製作したものに分けることができる。さらに原材から木棺を製作したものの中には、普遍的にみられる形状と異なり、例えば分厚い板材を使用する、あるいは鉄釘を使用するなどの特別なあつらえた製品がわずかに含まれている。これらをふまえて、A：埋葬を目的として原材から製作したもので何らかの特別な特徴があるもの、B：埋葬を目的として原材から製作したもので普遍的なもの、C：埋葬を目的として一部もしくは全部を転用材・端材で製作したもの、D：他の製品を転用したもの、に分類する。

また、方形木棺の側板の組合せ方法には、1：隣り合う板の小口面と側面を、順次、結合するものと、2：向かい合う側板で直交する側板を挟み込むものがある。前者には結合の方向から、a：右回り・b：左回りがあがる。後者には挟み込む方の板と底板の方向から、a：直交するもの・b：平行するもの・C：小口面を切り欠いて井籠組にするものがある。なお、例外的に3：1・2の方法を折衷するものがある。側板の組合せ方法を整理して図示しておく(図30)。なお、蓋の形態は方形に板をつなぎ合わせて、内面両側に棧木を付けている。

A・B・C・Dと1・2・3、a・b・cはそれぞれ属性が異なるので、型式は例えば「B1a」のようにそれぞれの特徴を並列して表記する。

円形木棺は、方形木棺の分類を援用できるので、A：埋葬を目的として原材から製作したもので何らかの特別な特徴があるもの、B：埋葬を目的として原材から製作したもので普遍的なもの、C：埋葬を目的として一部もしくは全部を転用材・端材で製作したもの、D：他の製品を転用したものに、分けることができる。なお、蓋の形態は円形に板をつなぎ合わせて、中央に棧木を付けている。

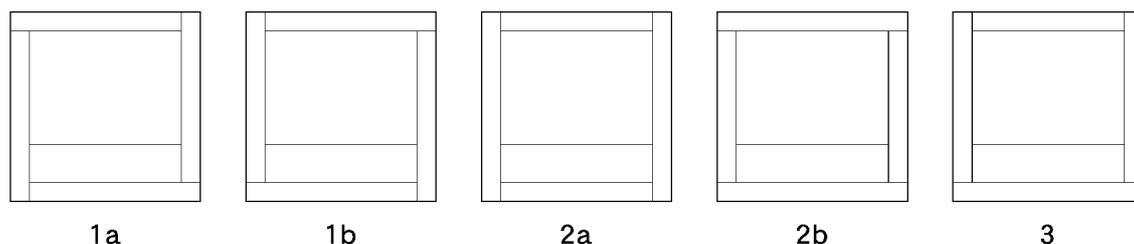


図30 方形木棺側板組模式図

土器棺には土師質の土器、焼締陶器、施釉陶器があり、器形は大型のものを甕、小型のものを壺とした。方形木棺・円形木棺での分類を援用すると、A：埋葬を目的として製作されたもので何らかの特別な特徴があるもの、B：埋葬を目的として製作されたもので普遍的なもの、D：他の製品を転用したものの、に分けることができる。Cに該当するものは存在しない。Bには代用品が含まれるが、BとDの区別は難しい。

これらの分類はあくまでも大まかなものであり、細部の諸特徴は、必要に応じて、適宜、述べることとする。なお、検出したすべての埋葬施設については付表1として一覧表を作成したので参照していただきたい。以下に、第1面より代表的な埋葬について詳述する。

#### 第1面(図版5～9)

6期 幕末から昭和(19世紀中葉～20世紀前葉)の墓地である。土器棺11基・木棺2基・墓石(石仏含む)のみの検出は6基・不明3基で合計22基である。ただし6期にはこの他に34体分の火葬骨を確認しているが、時代が新しく今回の報告書では取上げていない。

埋葬313(図版6-2) 墓地東半部のPO・PP地区で検出した。標高は13.7mである。埋葬施設<sup>1)</sup>は長辺82cm、短辺38cmの長方形の方形木棺で、底部と側板の一部を検出した。掘形規模は不明である。木棺の規模から寝棺であったと推測される。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の4歳児である。木棺底面から扇が出土した。

埋葬321 墓地東半部のOO地区で検出した。標高は13.9mである。埋葬施設は土器棺(33・34)である。掘形規模は不明である。人骨は出土していない。

埋葬335 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.8mである。埋葬施設は土器棺(35・36)である。掘形規模は不明である。人骨は出土していない。

埋葬340(図版6-1) 墓地東半部のOP地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は土器棺(987)(図版88)で、施釉陶器の特注品と思われる。掘形規模は直径45cmである。葬法は火葬で、遺存状態は不良である。

埋葬345 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は14.3mである。埋葬施設は土器棺(19・20)である。掘形規模は不明である。人骨は出土していない。

埋葬392 墓地東半部のQQ地区で検出した。標高は13.8mである。埋葬施設は土器棺(29・30)である。掘形規模は不明である。葬法は火葬で、人骨の遺存状態は不良である。

埋葬393 墓地東半部のQR地区で検出した。標高は14.1mである。埋葬施設は土器棺(986)で、遺存状態は良好である。掘形規模は不明である。人骨は出土していない。

埋葬394 墓地東半部のQQ地区で検出した。標高は14.0mである。埋葬施設は土器棺(18)で、遺存状態は良好である。掘形規模は不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の成人である。

埋葬517 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.7mである。埋葬施設は土器棺(807)である。掘形規模は不明である。人骨は出土していない。

埋葬567 墓地東半部のPR地区で検出した。標高は13.8mである。埋葬施設は土器棺(15・16)

で遺存状態は良好である。掘形規模は直径60cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢性別不明である。

5期 江戸時代後期（19世紀前葉～中葉）の墓地である。方形木棺148基・円形木棺19基・土器棺10基・方形木棺と土器棺を組み合わせたもの4基・直葬3基・不明9基で合計193基である。

埋葬182 墓地西半部のQL・QM地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB2bである。掘形規模は長辺120cm、短辺100cmである。埋葬181に掘形北側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は老年男性である。

埋葬184 墓地西半部のPL地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺45cm、残存高24cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB2bである。埋土から蓋板が出土した。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmで、埋葬185の掘形南側を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年男性である。

埋葬185 墓地西半部のPL地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺75cm、短辺60cmである。埋葬184に掘形南側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は壮年女性である。

埋葬186 墓地西半部のPL地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は一辺65cmである。掘形北側を埋葬187に、南側を埋葬185に壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は熟年男性である。

埋葬187（図版9-1） 墓地西半部のPL地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺45cm、残存高40.5cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はC2bである。底部に黒色の付着物が残る。底板内面・北側の側板外面・西側の側板内面に墨書がある。掘形規模は長辺70cm・短辺65cmである。縄跡が底板外面に残る。葬法は土葬で人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は老年男性である。

埋葬190（図版6-4） 墓地西半部のOL地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺30cm、残存高27.5cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB1aである。掘形規模は一辺70cmである。埋葬191との掘形境界が不明瞭であることから、掘形を共有している可能性が考えられる。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の3歳児・性別不明の成人の2体である。掘形から壮年女性の骨が出土している。

埋葬191 墓地西半部のOL地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺40cm、残存高28cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はC2bである。東側の側板外面・西側の側板外面に墨書がある。掘形規模は長辺90cm、短辺75cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の6歳児である。

埋葬193（図版9-2、図31） 墓地西半部のOM地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は長辺25cm、短辺22cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はC1aである。北側の

側板外面に墨書（木169）がある。掘形規模は長辺70cm・短辺60cmである。底板外面に縄跡が残る。南側には大きさ30～40cm位の河原石を5個敷き並べており参道と考えられる。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の0歳児である。

埋葬197 墓地西半部のOM地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径35cmの円形木棺で遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径60cm。20～30cmの河原石を3個南西方向に敷き並べている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の9箇月児である。

埋葬200（図版6-5、図31） 墓地西半部のPM地区で検出した。標高は13.4m。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺75cm、短辺70cmである。埋葬203を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は熟年男性である。掘形から老年男性・性別不明の成人の2体の骨が出土している。

埋葬206 墓地西半部のPM地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径55cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径70cmで、埋葬207を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は壮年女性である。

埋葬215（図35） 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は一辺70cmである。葬法は土葬で人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年男性である。

埋葬218 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は一辺30cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は一辺50cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の3歳児である。

埋葬223 墓地西半部のON地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は一辺60cmで、埋葬228に掘形北側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年男性である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬228 墓地西半部のON地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は長辺60cm、短辺50cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は長辺80cm、短辺75cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は老年男性である。

埋葬231 墓地西半部のPM地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の成人が3体である。掘形から成人男性の骨が出土している。

埋葬232 墓地西半部のPM地区で検出した。標高は13.7mである。埋葬施設は長辺40cm、短辺35cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は一辺55cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は老年女性である。

埋葬237（図版7-5） 墓地西半部のPM・PN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設

は一辺30cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良で、底板の一部が欠けている。掘形規模は一辺50cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の1歳児である。

埋葬238 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺30cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は不明で、埋葬239と埋葬491を壊している。人骨は出土していない。

埋葬243 (図版7-6) 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は一辺65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は2個体分出土している。姿勢は崩れている。被葬者は、壮年男性・性別不明の成人の2体で前者が主体である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。伊万里の大皿が出土した。

埋葬248 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺30cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は長辺50cm、短辺45cmである。底板のみ残存し、側板は残っていない。葬法は土葬で人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の成人である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬249 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は一辺30cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は不明である。埋葬251に南側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

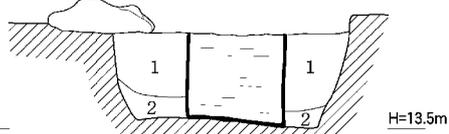
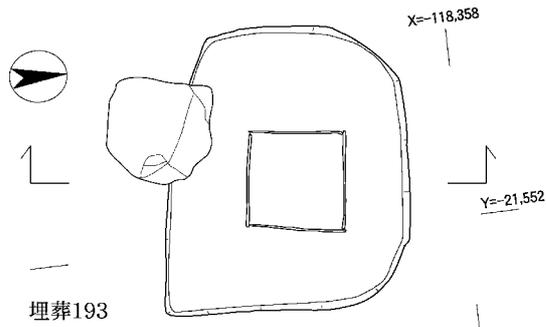
埋葬250 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.8mである。埋葬施設は土器棺(25・26)である。掘形規模は不明である。人骨は出土していない。

埋葬255 墓地西半部のON地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は遺存状態は不良で規模は不明である。掘形規模は長辺90cm、短辺75cmである。埋葬1174の北側を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。上部は削平されているが頭蓋は残存する。姿勢は崩れている。被葬者は成人男性である。埋葬施設の上層で棟端飾瓦と多数の平瓦片が出土した。

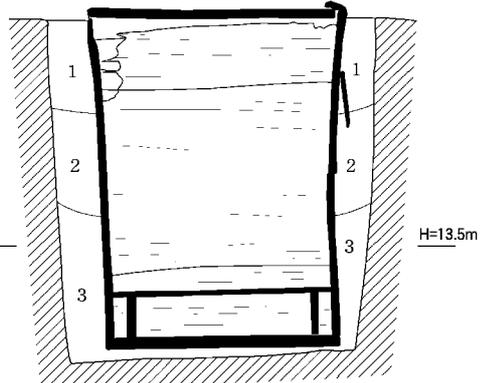
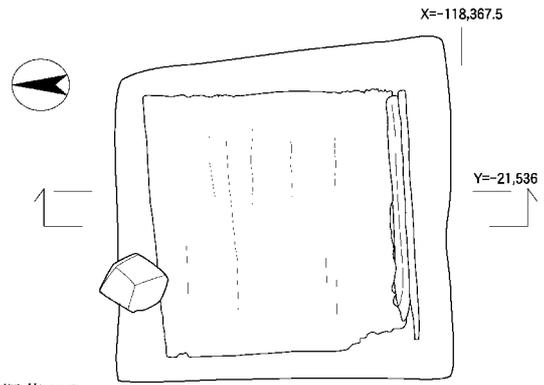
埋葬260 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は長辺55cm、短辺50cm、残存高43cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はA2bである。北側の側板外面に墨書(木164)がある。掘形規模は長辺80cm、短辺70cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は壮年女性である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬274 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は一辺70cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年女性・老年男性の2体で前者が主体である。掘形から成人男性の骨が出土している。

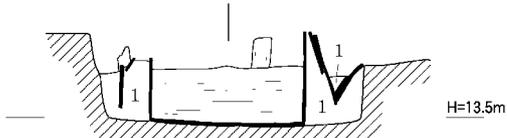
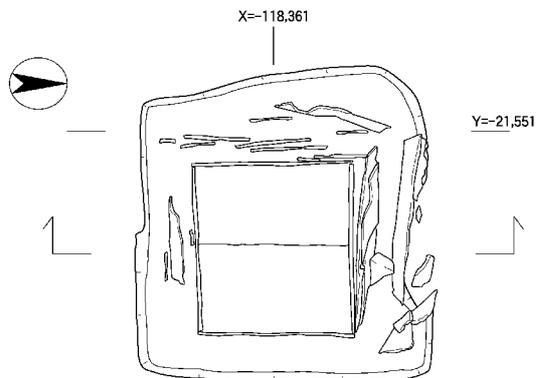
埋葬275 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は成人男性である。掘形から熟年男性の骨が出土している。



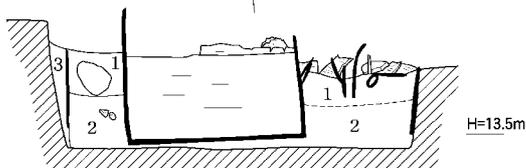
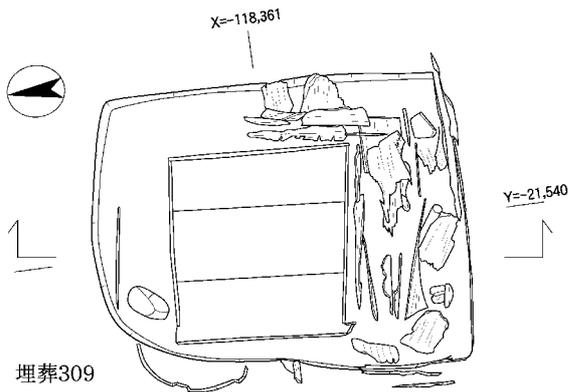
- 1 10YR2/2 黒褐色砂泥 (粗砂を少量含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト



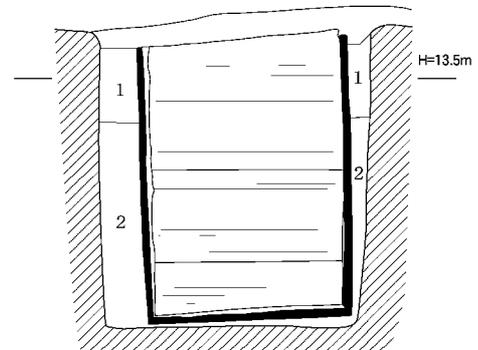
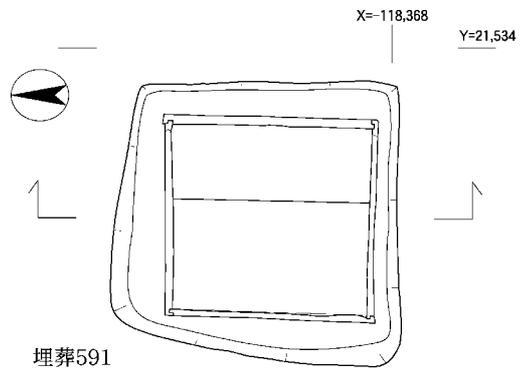
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1 ~ 2 cmの礫を少量含む)
- 2 10YR4/1 褐色砂泥 (φ 1 ~ 2 cmの礫をわずかに含む 粘質)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色砂泥



- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1 ~ 2 cmの礫を少量含む)
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト (粘質)
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥



- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (φ 1 ~ 3 cmの礫を少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色シルト



図31 1区埋葬施設実測図(1)

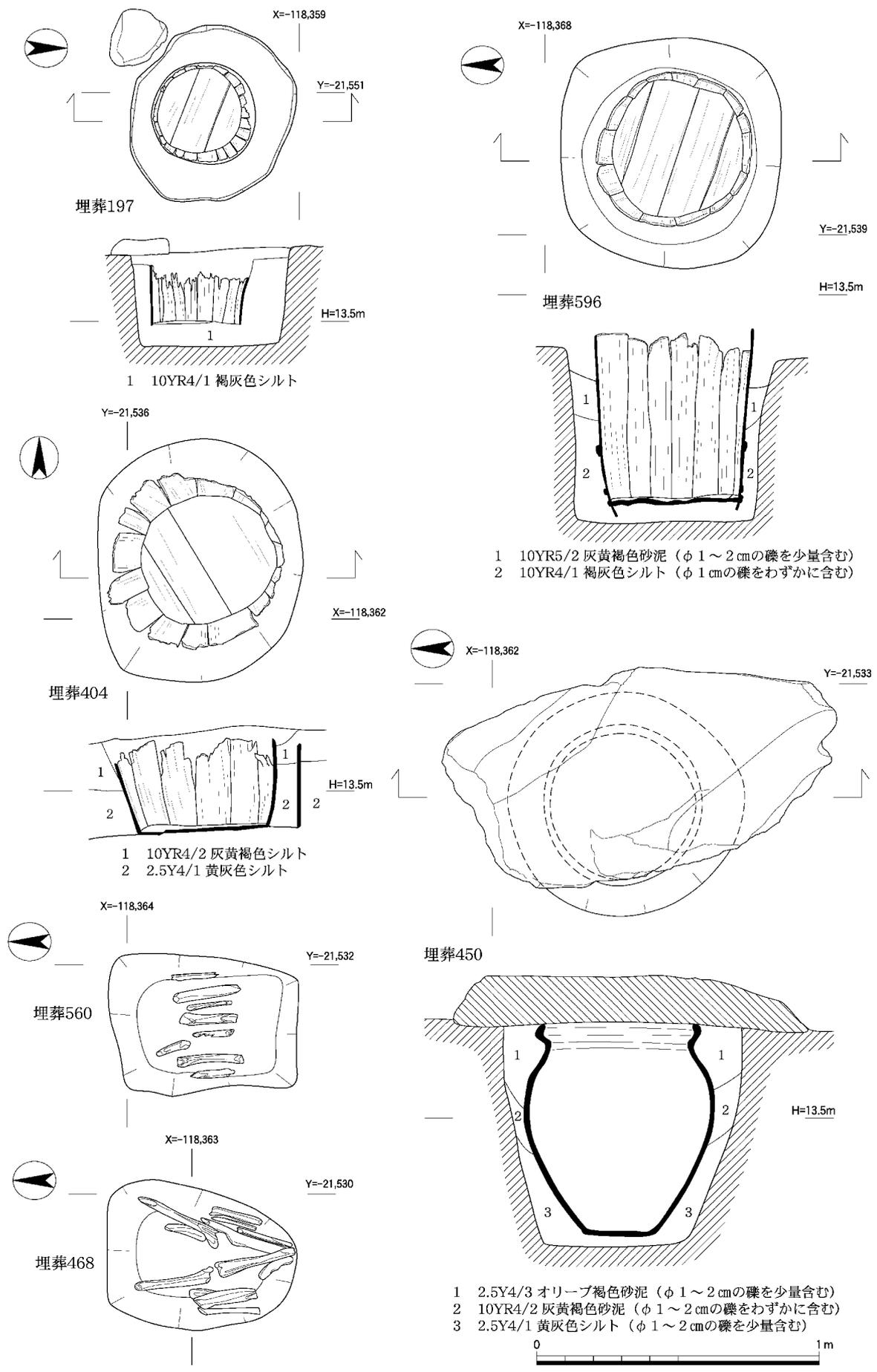
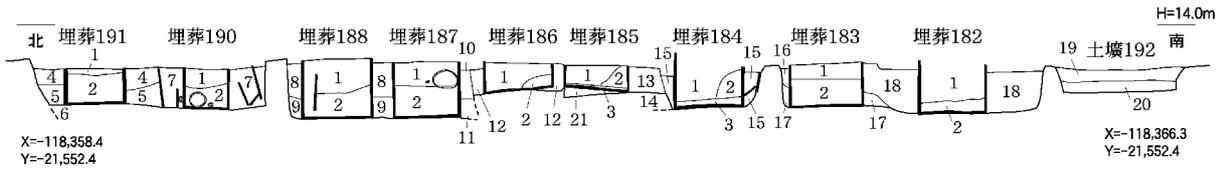
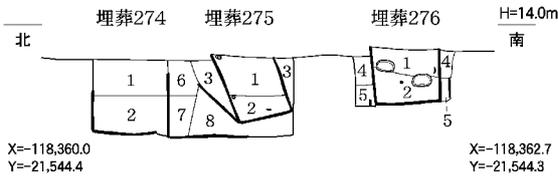


図32 1区埋葬施設実測図(2)

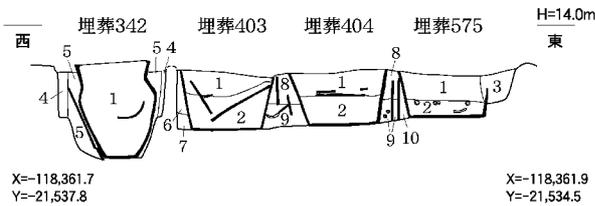


- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (粗砂~φ 1 cmの礫を中量含む)
- 2 5Y4/1 灰色シルト
- 3 炭化物 (N2/1黒色)
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (φ 1~3 cmの礫を少量含む 堅く締まる)
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土
- 6 2.5GY5/1 暗オリーブ灰色シルト (地山)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 8 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (2.5Y6/4 にぶい黄色粘土のブロックが少量混じる)
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
- 10 2.5Y3/1 黒褐色砂泥

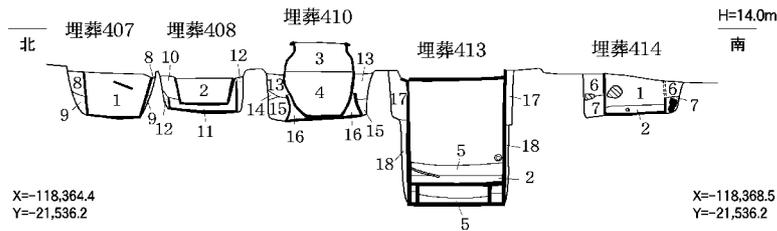
- 11 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (極粗砂を少量含む)
- 12 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭をわずかに含む)
- 13 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 14 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (炭をわずかに含む)
- 15 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 (中砂~極粗砂を少量含む)
- 16 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 17 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
- 18 2.5Y6/3 にぶい黄色砂
- 19 2.5Y3/3 暗褐色砂泥
- 20 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 21 2.5Y4/1 黄灰色シルト



- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (粗砂~φ 1 cmの礫を中量含む)
- 2 5Y4/1 灰色シルト
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 5 2.5Y3/2 黒褐色シルト
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 2~5 cmの礫をわずかに含む)
- 7 2.5Y3/2 黒褐色シルト (炭をわずかに含む)
- 8 5Y4/1 灰色シルト (炭をわずかに含む)



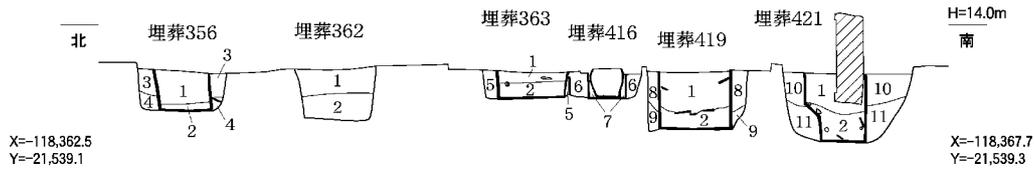
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色シルト
- 3 2.5Y3/1 黒褐色シルト (中砂~粗砂を少量含む)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色シルト (上部でφ 1~2 cmの礫をわずかに含む)
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (炭をわずかに含む)
- 7 2.5Y4/1 黄灰色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト (φ 1~3 cmの礫を少量含む)
- 9 2.5Y4/1 黄灰色シルト
- 10 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト



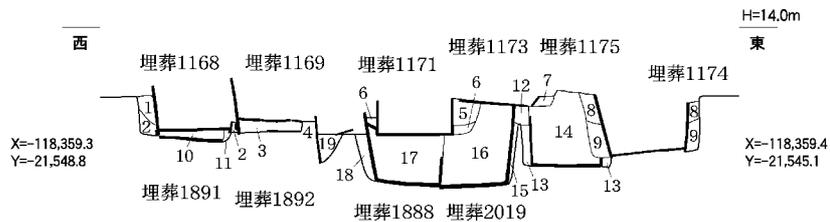
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色シルト
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 5 籾殻
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1~3 cmの礫を少量含む)
- 7 2.5Y3/2 黒褐色シルト
- 8 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (炭をわずかに含む)
- 10 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 11 2.5Y4/1 黄灰色シルト
- 12 2.5Y3/2 黒褐色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (炭をわずかに含む)
- 14 2.5Y3/1 黒褐色シルト (炭を中量含む)
- 15 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (炭をわずかに含む)
- 16 2.5Y4/1 黄灰色粘土?シルト (中砂をわずかに含む)
- 17 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ 1~2 cmの礫を少量含む)
- 18 2.5Y4/1 黄灰色シルト



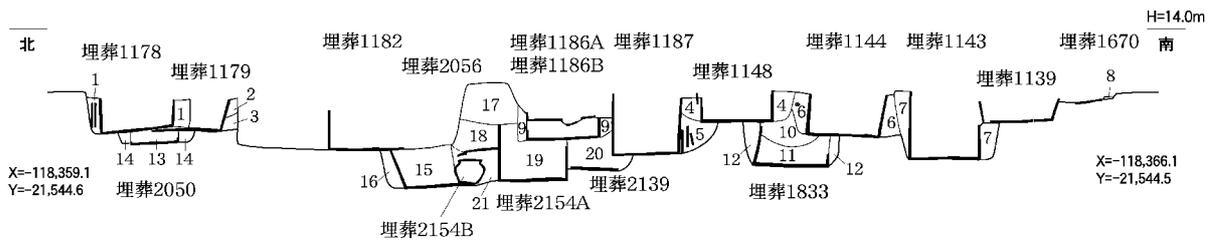
図33 1区埋葬施設半断面図(1)



- |                                      |                                     |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)   | 7 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む) |
| 2 5Y4/1 灰色シルト                        | 8 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (φ 1~2 cmの礫を少量含む)   |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ 1~3 cmの礫を少量含む) | 9 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (中砂を中量含む)         |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)  | 10 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (φ 1~3 cmの礫を少量含む)  |
| 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ 1~3 cmの礫を少量含む) | 11 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト                  |
| 6 10YR4/2 灰黄褐色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)  |                                     |



- |   |  |
|---|--|
| 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む) | 10 2.5Y3/2 黒褐色砂泥                       |
| 2 2.5Y4/3 暗灰黄色シルト                       | 11 2.5Y4/1 黄灰色シルト                      |
| 3 2.5Y3/2 黒褐色シルト                        | 12 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む) |
| 4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト                       | 13 5Y4/1 灰色シルト                         |
| 5 2.5Y3/2 黒褐色シルト (炭をわずかに含む)             | 14 5Y4/1 灰色シルト                         |
| 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト                       | 15 2.5Y4/1 黄灰色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む)  |
| 7 2.5Y4/1 黄灰色シルト                        | 16 5Y4/1 灰色シルト                         |
| 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)   | 17 5Y5/1 灰色シルト                         |
| 9 2.5Y4/1 黄灰色シルト (炭を少量含む)               | 18 5Y4/1 灰色シルト                         |
|   | 19 5Y3/1 オリーブ黒色シルト                     |



- |  |                                       |
|--|---------------------------------------|
| 1 2.5Y3/2 黒褐色シルト (φ 1~3 cmの礫を少量含む)             | 10 2.5Y4/1 黄灰色シルト (細砂をわずかに含む)         |
| 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (φ 1~2 cmの礫をわずかに含む 炭を少量含む) | 11 2.5Y2/1 黒色シルト                      |
| 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト (細砂をわずかに含む)                   | 12 2.5Y3/1 黒褐色シルト                     |
| 4 2.5Y3/1 黒褐色シルト (φ 1~3 cmの礫を少量含む)             | 13 2.5Y4/1 黄灰色シルト                     |
| 5 2.5Y4/1 黄灰色シルト                               | 14 5Y4/1 灰色シルト                        |
| 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)            | 15 5Y4/1 灰色シルト (細砂を少量含む)              |
| 7 2.5Y4/1 黄灰色シルト (φ 1~2 cmの礫を少量含む)             | 16 5Y3/1 オリーブ黒色シルト                    |
| 8 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト                              | 17 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (φ 1~2 cmの礫を中量含む) |
| 9 2.5Y3/1 黒褐色シルト                               | 18 5Y3/1 オリーブ黒色シルト                    |



図34 1区埋葬施設半断面図(2)

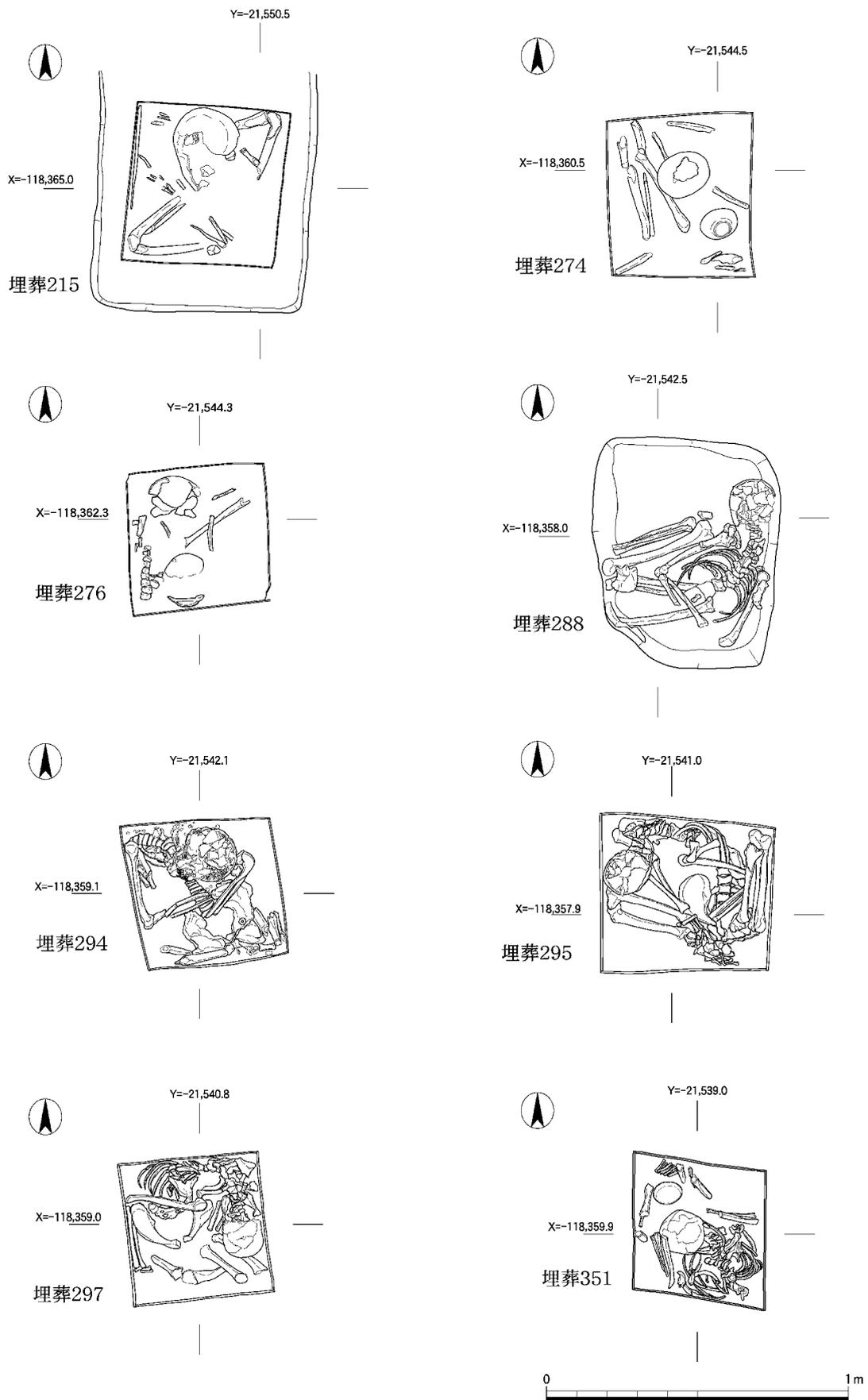


图35 1区埋葬人骨·副葬品出土状况图(1)

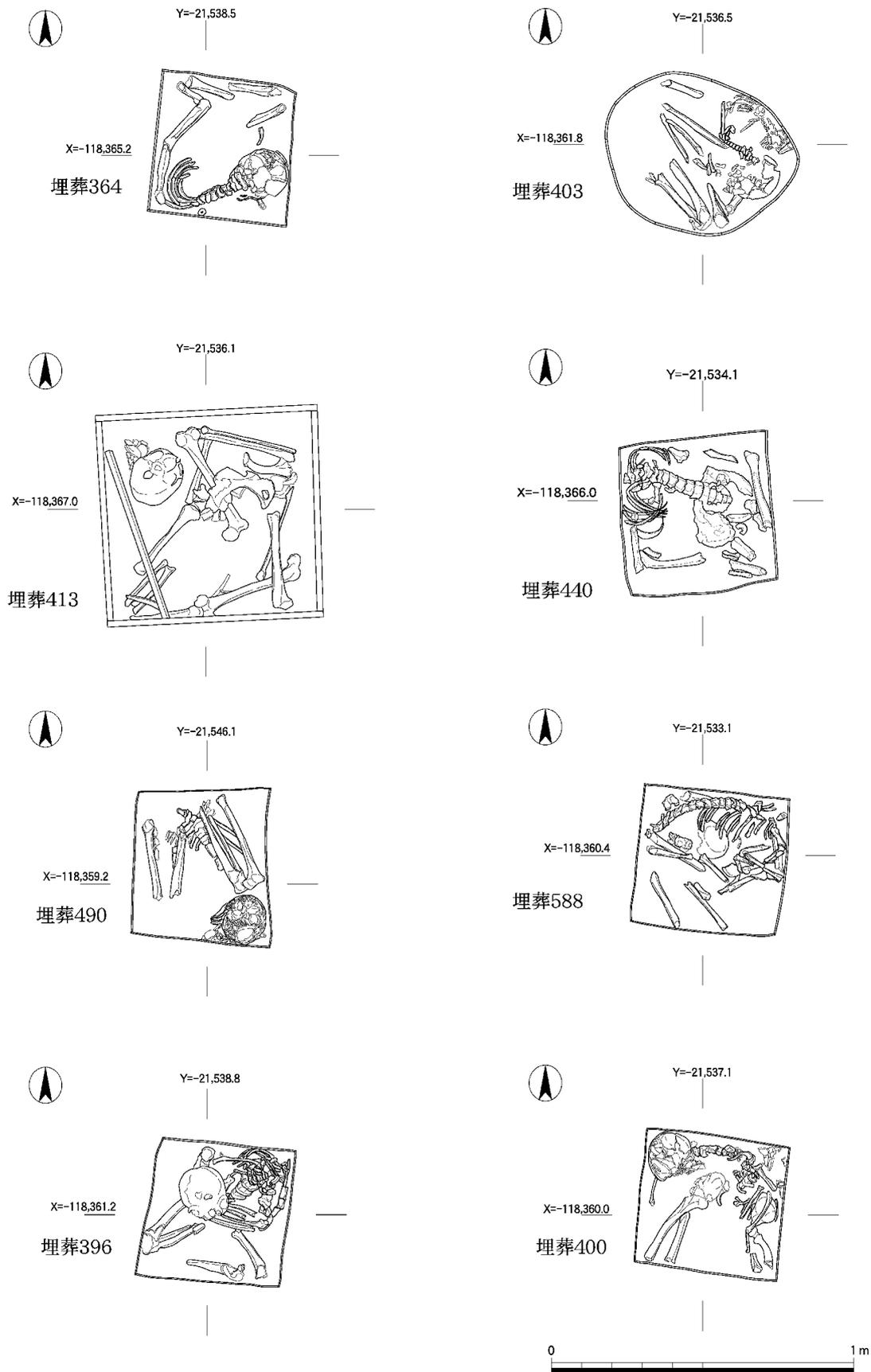


图36 1区埋葬人骨·副葬品出土状况图(2)

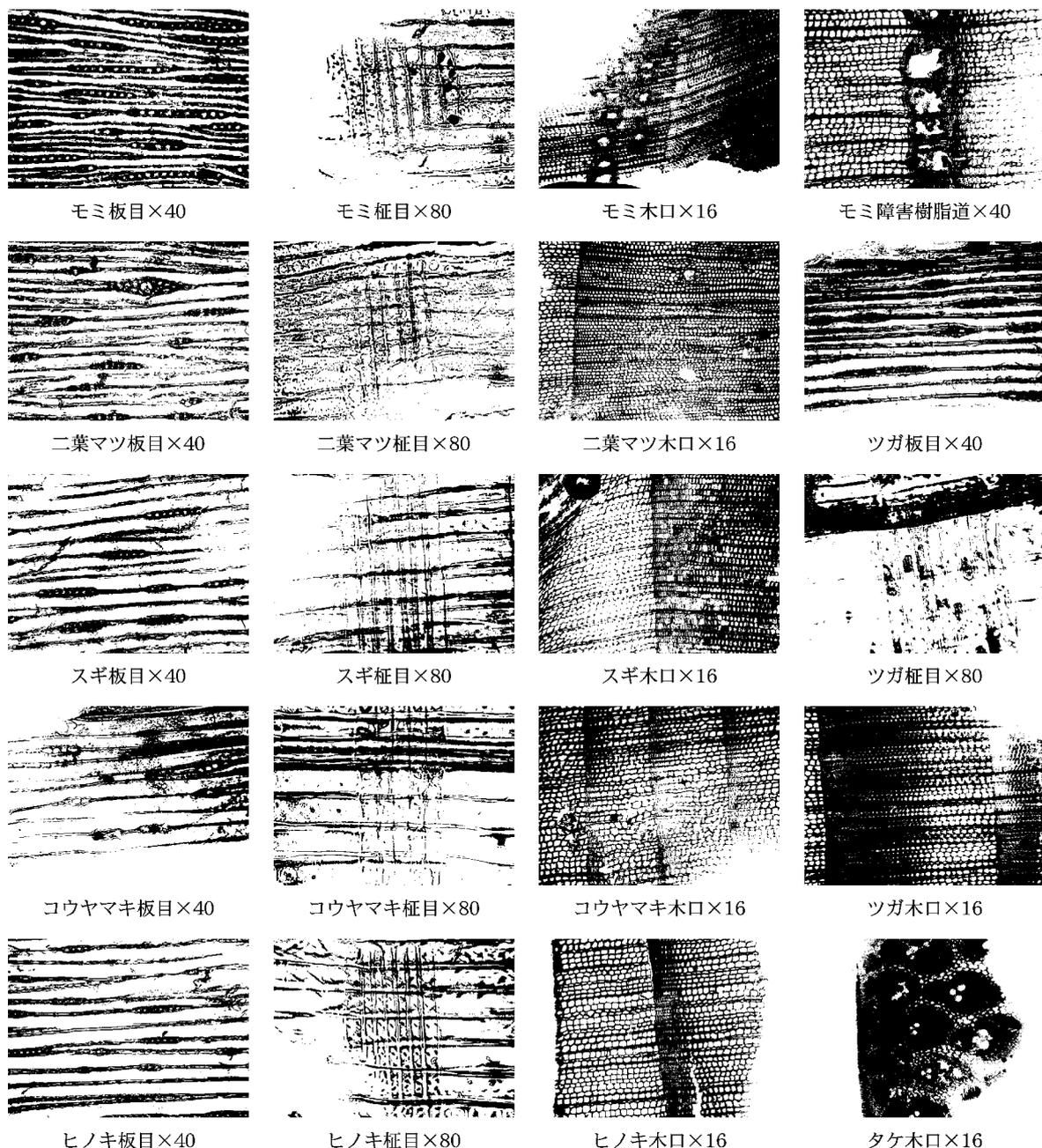


図37 1区埋葬木棺部材顕微鏡写真

埋葬276（図35） 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一边50cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺90cm、短辺50cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は壮年女性である。掘形から壮年男性の骨が出土している。

埋葬277（図版16-6） 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.7mである。埋葬278に西側を壊されている。埋葬施設は確認できなかった。

埋葬288（図版7-1、図35） 墓地東半部のOO地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬は直葬で、遺存状態は良好である。規模は長辺70cm、短辺60cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は北側で伏せている状態で、脚を西に折り曲げている。手は後ろに

回されているように見える。横臥屈葬と推測される。被葬者は壮年男性である。改葬以外で直葬されているのは、この埋葬施設1基のみである。

埋葬292 墓地東半部の〇〇地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は長辺65cm、短辺55cmである。埋葬503の木棺と約5cmの幅で接しているので掘形を共有していた可能性が考えられる。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。木棺の側板はほとんど削平され、底部に数片の骨が残っている状態である。被葬者は熟年男性である。

埋葬293 墓地東半部の〇〇地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺45cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は一辺70cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。頭蓋は残存するが姿勢は崩れている。被葬者は熟年女性・老年男性の2体である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬294 (図35) 墓地東半部の〇〇地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は一辺60cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年男性である。

埋葬295 (図35) 墓地東半部の〇〇地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺55cm、短辺50cm、残存高28cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はC1bである。南側の側板内側に墨書がある。掘形規模は一辺65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は壮年男性である。

埋葬297 (図35) 墓地東半部の〇〇地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cm、残存高46.5cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB1bである。掘形規模は一辺65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋が前に倒れ込んだ状態であるが座臥屈葬と推測できる。被葬者は熟年男性である。掘形から成人男性の骨が出土している。

埋葬298 墓地東半部の〇〇地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は一辺70cmである。埋葬293と西側側板が一部接している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は熟年男性である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬299 墓地東半部の〇〇・PO地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺45cm、残存高18cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はA1bである。掘形規模は一辺80cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬298の掘形東側を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は熟年男性である。掘形から成人女性・老年男性の2体の骨が出土している。

埋葬300 墓地東半部の〇〇地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺60cm、短辺55cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。姿勢は崩れている。被葬者は熟年女性・熟年男性の2体で前者が主体である。掘形から性別不明の6歳児・性別不明の老年の2体の骨が出土している。

埋葬306 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は一辺42cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺90cm、短辺70cmである。埋葬325との掘形境界が不明瞭であることから掘形を共有している可能性が考えられる。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は、熟年男性・性別不明の成人の2体で前者が主体である。掘形から性別不明の成人2体・成人女性1体の3体の骨が出土している。

埋葬308 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺75cm、短辺60cmである。木棺上部の大部分は削平されている。埋葬307を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は成人女性である。

埋葬309 (図31) 墓地東半部のPO・PP地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺50cm、残存高26cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はA2bである。掘形規模は一辺75cmの方形である。埋葬320の土器棺を壊している。「キ」字形にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。姿勢は崩れている。被葬者は壮年女性・性別不明の成人の2体で前者が主体である。掘形から老年女性・成人男性の2体の骨が出土している。

埋葬314 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺75cm、短辺55cmである。埋葬313に壊され、埋葬563を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年男性である。掘形から成人男性と成人女性の2体の骨が出土している。

埋葬317 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺65cm、短辺55cm以上である。隣接する埋葬318とは間の側板が1枚しかないことから側板・掘形を共有していた可能性がある。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は、やや不良である。被葬者は壮年男性である。

埋葬319 墓地東半部のOP・PP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cm、残存高28cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はC2bである。埋土から蓋板、棧木が出土した。掘形規模は一辺70cm以上である。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。東西に隣接する埋葬627・埋葬351とは掘形境界が不明瞭であるが、3基の木棺は整然と並列する。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年男性である。掘形から成人男性と年齢・性別不明の2体の骨が出土している。

埋葬323 (図版7-4) 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は一辺60cmである。埋葬333の土器棺を壊している。埋葬1552の直上にあり、天明2年の元号が記された墓石(石7)を出土したが、埋葬施設が上部をほとんど削平されているため、この遺構の墓石とは確定できない。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は熟年女性・老年男性の2体である。

埋葬325 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は長辺50cm・短辺

45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。木棺上部には大型の台座が落ち込む。東側の掘形には方形木棺の側板が数枚重なって埋まる。元禄17年の元号が記された墓石(石9)が出土した。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、骨は揃っていない。姿勢は崩れている。被葬者は熟年女性である。掘形から成人男性・成人女性の2体の骨が出土している。

埋葬332 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺75cm、短辺70cmである。方柱形の木製塔婆の基部(木36)が、西側側板の内側に立った状態で出土した。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬422の東側を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。座臥屈葬と推測される。被葬者は壮年女性・壮年男性の2体である。

埋葬334 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は土器棺(22・23)で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径40cmである。人骨は出土していない。

埋葬342(図版7-8) 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は土器棺(801)で、遺存状態は良好である。掘形規模は直径80cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は老年男性である。掘形から壮年女性の骨が出土している。唐津の大鉢が出土した。

埋葬347 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺55cm、短辺50cmの方形木棺の中に土器棺(800)を据えており、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺65cmである。土器棺の頸部に銅線が巻き付けられている。蓋に使用されたものは残存していないが、布や編物などが被せられていたと推測される。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の4歳児である。

埋葬351(図版6-3、図35) 墓地東半部のOP・PP地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺80cm以上、短辺70cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。縄は太めである。埋葬319に掘形西側を壊され、埋葬352を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。座臥屈葬と推測される。被葬者は壮年女性である。掘形から成人男性の骨が出土している。

埋葬356 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺35cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmである。十字にかけた縄痕が底板外面にわずかに残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。姿勢は崩れている。被葬者は性別不明の1歳児である。

埋葬364(図36) 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は熟年男性である。

埋葬398 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺35cm、残存

高15.5cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB 1 bである。掘形規模は一辺45cmである。埋葬395を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年女性・老年男性の2体で前者が主体である。掘形から性別不明の0歳児の骨が出土している。

埋葬402 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は土器棺(804)で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径35cmである。人骨は出土していない。

埋葬403(図版6-6・9-5、図36) 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は直径55cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径90cmである。二重に十字にかけた細い縄の痕が底板外面に残る。側板外面には箍の痕跡がある。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は老年女性である。掘形から壮年男性の骨が出土している。

埋葬404(図版6-6・9-5、図32) 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は直径60cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径80cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。掘形から板塔婆先端部の破片が出土した。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。座臥屈葬と推測される。被葬者は熟年男性である。掘形から壮年女性2体・熟年女性・性別不明の乳児の4体の骨が出土している。

埋葬407 墓地東半部のQP・QQ地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。直径36cmの底板のみ検出した。掘形規模は直径60cmである。落ち込んだ蓋の上で、土師器皿(811)を伏せた状態で検出している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の2歳児である。

埋葬408 墓地東半部のQP・QQ地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径40cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。埋葬1595の西側側板を壊して、内側にはまり込んだ状態で検出している。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の1歳児である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬410(図版9-7・9-8) 墓地東半部のQP・QQ地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺45cm、短辺40cmの方形木棺の中に土器棺(799)を据えており、遺存状態は良好である。方形木棺の底部には、土器棺の痕跡が明瞭に残っている。掘形規模は直径80cmである。土器棺の頸部に銅線が2重に巻かれている。蓋となる布か編物などをとめたものと推測される。土器棺内には靱殻が多量に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年女性である。

埋葬413(図版8-1~4、図31・36) 墓地東半部のQP・QQ地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は一辺70cm、高さ90cmと大型の方形木棺で、遺存状態は良好である。蓋板も完存する。木棺内には靱殻が大量に残る。側板は2~3枚を鉄釘で結合する。角部は小口面を凹凸に切り欠いて井籠組みにし、鉄釘でとめている。型式はA 2 cである。木棺の底は二重になってい

る。外側の底板は側板と釘でとめてある。外側の底板の上に柵木を2本置いてその上に板を載せて内底にしている。柵木は東西に渡され南北両側板に沿って据えている。柵木は固定されていない。内底の下にも初殻が多量に入っている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、木棺内に溜った水によって姿勢は崩れている。被葬者は熟年男性である。

埋葬416（図版6-7） 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は一辺25cmの方形木棺の中に土器棺（24）を据えており、遺存状態は良好である。掘形規模は一辺40cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。木棺の側板は土器棺の半分位の高さしかない。埋葬418の掘形西側を壊している。人骨は出土していない。

埋葬419 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺44cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺85cm、短辺80cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は老年男性である。

埋葬428 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺65cm、短辺60cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は壮年男性である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬433 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。木棺はやや厚めの木を使用している。蓋板の柵木が内部に落ち込んでいる。埋葬434に掘形東側を壊されている。西側は埋葬432と接するが、切合い関係は不明である。多少の時期差があるものと思われるが、埋土が同じ砂層であることから、掘形を共有していた可能性も考えられる。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は、やや良好である。頭蓋は残存するが、埋葬姿勢は崩れている。被葬者は熟年男性である。

埋葬440（図36） 墓地東半部のQQ地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。側板は薄く残りが良くない。掘形規模は長辺90cm、短辺80cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。座臥屈葬と推測できる。被葬者は壮年男性である。掘形から熟年女性の骨が出土している。

埋葬453 墓地東半部のQQ地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺45cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は長辺80cm、短辺60cm以上である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は熟年女性、性別不明の1歳児の2体である。

埋葬467 墓地東半部のPR地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。直径35cmの底板のみ検出した。掘形規模は直径80cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の小児である。掘形から性別不明の成人、年齢・性別不明の2体の骨が出土している。

埋葬468 墓地東半部のPR地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬は直葬である。規模は長辺65cm、短辺45cmである。人骨の遺存状態はやや不良である。四肢骨は南北方向にそろえて並

べているが、埋葬560より乱雑である。頭蓋は残存しない。改葬と考えられる。被葬者は成人男性である。

埋葬490（図36） 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年女性である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬560（図版7-2、図32） 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.7mである。埋葬は直葬である。規模は長辺65cm、短辺50cmである。人骨の遺存状態はやや良好である。四肢骨を南北方向にそろえて並べている。頭蓋は残存していない。改葬と考えられる。被葬者は成人女性である。

埋葬563 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺30cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

埋葬585 墓地東半部のQQ地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径55cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径80cmである。埋葬438と接しているが、切合い関係は不明である。葬法は土葬で人骨の、遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存しており座臥屈葬の姿勢が良好に残る。被葬者は老年女性である。

埋葬588（図36） 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は12.4mである。埋葬施設は一辺45cm方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は一辺85cmである。埋葬1599を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は、熟年女性・成人男性の2体で前者が主体である。掘形から壮年男性と成人女性の2体が出土している。木棺内から犬骨がほぼ完形で出土している。被葬者の頭蓋が犬の骨より下から出土していることから埋葬姿勢が崩れた後、墓の上部が削平された。その後、木棺内の土が落ち込み窪みを作っていた所に犬を埋葬したため、木棺内にきれいに納まった状態で犬骨が出土したものと推測できる。

埋葬591（図31） 墓地東半部のQQ地区で検出した。標高は12.8mである。埋葬施設は長辺58cm、短辺56cm、高さ70cmと大型の方形木棺（木280）で遺存状態は良好である。蓋板も完存する。型式はA1aであるが結合部は側面に縦方向の溝を加工して組み合わせる精緻な構造である。また外側の稜はすべて面取りする。掘形規模は長辺80cm、短辺70cmである。木棺の側板外面・底板外面には十字にかけた縄痕が残る。底板と側板の接続部分外面には半截した竹を当て、縄はの上からかけられる。樹種はすべてがツガである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。人骨は多量の初殻に埋まっていたが、水に浸かってしまったために埋葬姿勢は崩れている。被葬者は熟年男性である。掘形から成人男性・成人女性の2体の骨が出土している。

埋葬595（埋葬263・264）（図版6-8） 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.8mである。埋葬施設は、土器棺2個（埋葬263・264）である。遺存状態は埋葬263は不良、埋葬264（806）はやや良好である。掘形は長方形で、規模は長辺80cm、短辺50cmである。掘形内に南北に

並んで土器棺が据えられている。人骨は出土していない。

埋葬627（図版7-7） 墓地東半部のOO地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺40cm、短辺34cm、残存高22.5cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB2bである。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。頭蓋は残存するが、埋葬姿勢は崩れている。被葬者は性別不明の4歳児である。掘形から熟年男性の骨が出土している。ミニチュア竈が出土した。

埋葬1324 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は土器棺（14）で、遺存状態はやや良好である。人骨は出土していない。

#### 第2面（図版13～16）

4期 江戸時代中期から後期（18世紀中葉～19世紀前葉）の墓地である。方形木棺89基・円形木棺49基・土器棺6基・方形木棺と土器棺を組み合わせたもの1基・不明13基の合計158基である。

埋葬188（図版9-4） 墓地西半部のPL地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は一辺70cmである。縄痕が底板外面に残る。埋葬187に掘形南側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。姿勢は崩れている。被葬者は年齢不明の女性・成人男性の2体で後者が主体である。

埋葬207（図版9-3） 墓地西半部のPM地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は一辺50cm、残存高41cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB1bである。埋土から蓋板が出土した。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmである。埋葬206に南東隅を壊され、埋葬208を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年女性である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬220 墓地西半部OM・ON地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺30cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺110cm、短辺80cmである。埋葬487を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の乳児である。

埋葬396（図36） 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cm、残存高29.5cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB2aである。埋土から蓋板が出土した。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmである。埋葬398に北西隅を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、埋葬姿勢は崩れている。座臥屈葬と推測できる。被葬者は熟年男性・壮年男性の2体で前者が主体である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬400（図36） 墓地東半部のOP・PP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺75cm、短辺70cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は熟年女性である。掘形から成人男性の骨が出土している。

埋葬421（埋葬341）（図版7-3） 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設（埋葬421）は長辺50cm、短辺40cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模

は長辺85cm、短辺80cmである。十字にかけた縄痕が底板外面にある。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は熟年男性である。元文改元の元号を記した墓石(埋葬341)(石5)が木棺内に垂直に落ち込んでいる。

埋葬424 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は土器棺(37)で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径50cmである。人骨は出土していない。

埋葬429 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は一辺45cm、残存高48cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB2bである。掘形規模は一辺90cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬429Bを壊している。掘形からは壊れた方形木棺の部材が多量に出土した。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年男性である。掘形から熟年男性・成人男性・性別不明の成人2体の4体の骨が出土している。

埋葬450(図版8-5・8-6) 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は土器棺(797)で、遺存状態は良好である。長辺130cm、短辺70cm、厚さ約20cmの扁平な石を蓋に用いる。土器棺の口縁の西側はわずかに蓋石からはみ出している。掘形規模は直径75cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は老年男性である。

埋葬565 墓地東半部のPR地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。直径48cmの底部のみ検出した。掘形規模は直径80cmである。埋葬473に東側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。姿勢は崩れている。被葬者は熟年女性と成人男性の2体である。

埋葬581 墓地東半部のQR地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径41cmの円形木棺で、遺存状態は不良である。掘形は楕円形を呈し、規模は長径90cm、短径50cmである。底板内面に墨書がある。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬1029(図版14-2) 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺48cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺85cm、短辺75cmである。埋葬214に壊され、埋葬1030の北西隅を壊している。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存しないが、座臥屈葬と推測できる。被葬者は壮年男性である。眼鏡が出土した。

埋葬1030 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺40cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は不明である。埋葬1029に北西側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の1歳児である。朱色の漆塗りの櫛が出土した。

埋葬1044 墓地西半部のPM地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺45cm、短辺40cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺65cm、短辺60cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。埋葬姿勢は不明である。被葬者は熟年男性である。

埋葬1119 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は一辺45cmの方

形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺65cm、短辺60cmである。埋葬1122の北側を壊している。二重に十字にかけた縄痕が底板外面にある。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は熟年女性である。

埋葬1122 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は長辺48cm、短辺40cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は不明である。北側側板は埋葬1119に壊されている。底部に黒色の付着物が残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は成人女性である。

埋葬1123 墓地西半部のQM地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は不明である。南側・東側側板は抜き取られている。底部に黒色の付着物が残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。姿勢は崩れている。被葬者は壮年女性である。

埋葬1130 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は一辺70cmである。埋葬1131・埋葬1137を壊している。南側・北側・東側側板は2枚ずつ重なっているが、西側の側板は1枚である。二重箱の可能性もあるが西側が1枚であるので、上段の側板が落ち込んだものと推測する。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬1131 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は不明である。埋葬1130に南東隅を壊され、埋葬1132の南半分を壊している。埋葬2054の直上に位置する。木棺内から人骨は出土していない。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬1140 (図版15-4) 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺20cm、残存高29cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB2bである。埋土から蓋板が出土した。掘形規模は不明である。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬1145を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の乳児である。

埋葬1140B (図版15-4) 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は土器棺(27・28)で、遺存状態は良好である。掘形規模は不明である。埋葬1143の西南隅の底板に掛かる位置で検出している。埋葬1140と東西に並んでいる。人骨は出土していない。

埋葬1153 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺35cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺55cm・短辺45cm以上である。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬1154の南半分を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の1歳児である。掘形から成人女性の骨が出土している。

埋葬1159 (図版15-2) 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。底部に黒色の付着物が残る。掘形規模は長辺100cm・短辺80cm以上である。埋土から蓋板が出土した。埋葬1158・埋葬1160を壊している。

葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋が2個体分出土したが、ともに完全ではない。姿勢は崩れている。被葬者は老年男性・熟年男性の2体である。掘形から老年男性の骨が出土している。

埋葬1161 墓地西半部のPM地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺100cm、短辺80cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬518を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は熟年男性である。東側の掘形から、人面を描いた板状木製品が出土した。

埋葬1165 墓地西半部のOM地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺80cm、短辺75cmである。木棺はほぼ完形の状態で検出しているが、蓋は認めていない。側板はやや厚めである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は熟年女性である。

埋葬1178 (図版14-3) 墓地西半部のON地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は長辺45cm、短辺40cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は一辺65cmの方形である。埋葬1179の北半分を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は壮年男性である。掘形から成人女性の骨が出土している。頭蓋の下で厨子を検出している。

埋葬1180 (図版16-7) 墓地西半部のON・OO地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺48cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は成人男性・壮年女性・年齢・性別不明の3体である。

埋葬1186A 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺45cm、短辺36cm以上の方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺70cm、短辺60cm以上である。埋葬1186Bを壊し、埋葬276に壊される。「キ」字形にかけた縄痕が底板外面にある。木棺内から人骨は出土していない。掘形から熟年男性の骨が出土している。

埋葬1532 (図版15-5・15-6) 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は12.6mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径90cmである。側板外面に籬の痕跡が明瞭に残る。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。木棺はほぼ完形で検出できたが、蓋は認めていない。底部に黒色の付着物が残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、南側に倒れ込んだ状態で検出している。座臥屈葬と推測できる。被葬者は壮年女性である。

埋葬1558 墓地東半部のPO・PP地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は直径40cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径55cmである。埋葬1559を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は壮年女性である。

埋葬1560 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は一辺50cm、残存高47cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB 2 bである。掘形規模は不明である。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬1573を壊し、埋葬1574と接する。掘形を共有したのか、切合い関係にあるのかは不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は良好である。被葬者は老年女性である。座臥屈葬と推測される。掘形から成人女性と老年女性の2体の骨が出土している。南側の掘形から、天蓋や板塔婆などの木製品が多数出土した。

埋葬1570 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。底板のみ検出した。掘形規模は直径70cmである。埋葬403に壊されている。人骨は出土していない。

埋葬1574 ( 図版14-1 ) 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は12.8mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺55cm以上である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は良好である。頭蓋は残存するが、前に倒れ込んだ状態で検出している。座臥屈葬と推測できる。被葬者は老年男性である。上に重なって壮年女性を検出している。掘形からは成人女性の骨が出土している。南東隅からトウモロコシが出土した。

埋葬1577 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺30cmの方形木棺の中に土器棺(21)を据えており、遺存状態はやや不良である。掘形規模は一辺50cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

埋葬1578 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は直径35cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径45cmである。底板内面に墨書がある。埋葬364に壊されている。人骨は出土していない。

埋葬1579 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径65cmである。底板外面中央に支木が据えられている。側板外面に籬の痕跡がある。埋葬418に壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は成人男性2体・壮年男性の3体である。

埋葬1580 ( 図版15-3 ) 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は土器棺(802)で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は不明である。土器棺の頸部に銅線が巻き付けられる。埋葬1834を壊し、埋葬347に壊されて南半分が欠けている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は成人女性である。

埋葬1581 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は直径30cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径45cmである。底板外面中央に支木が据えられている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

埋葬1592 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径30cmの円形木棺で遺存状態は不良である。掘形規模は直径45cmである。埋葬406に壊されている。人骨は出土していない。

埋葬1600 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は直径50cmの円

形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径70cmである。埋葬1601と接して東西に並ぶ。時期差はほとんど無いと思われるが、切合い関係は不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は熟年男性である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬1635（図版14-4・14-5） 墓地東半部のOO地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺35cm、残存高31cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はA1aである。南側の側板外面に墨書がある。掘形規模は一辺48cmである。この時期の埋葬施設の中では墓地中央の北側に離れた位置で検出している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の1歳児である。

埋葬2100 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は方形木棺で、遺存状態は不良である。木棺の大きさ・掘形規模ともに不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

3期 江戸時代中期（17世紀後葉～18世紀中葉）の墓地である。方形木棺64基・円形木棺61基・土器棺3基・不明5基で合計133基である。

埋葬423 墓地東半部のQP・RP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺50cm、残存高26cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB2aである。掘形規模は一辺65cmである。一条にかけた縄痕が底板外面にある。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。骨は西側に偏っていて姿勢は崩れている。被葬者は成人男性である。

埋葬479 墓地東半部のQR地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は直径37cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径60cmである。人骨は出土していない。

埋葬673 墓地東半部のPQ地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は土器棺（17）で、遺存状態は良好である。掘形規模は直径30cmである。人骨は出土していない。

埋葬1141 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は一辺40cm、残存高36.5cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB2bである。埋土から棧木が出土した。掘形規模は一辺70cmである。西側の側板外面に墨書がある。十字にかけた縄痕が底板外面と側板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年男性である。

埋葬1143 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。型式はB1bである。掘形規模は不明である。埋葬1140Bが底板の南西隅を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

埋葬1144 墓地西半部のPN・QN地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。埋葬260に南西隅を壊されている。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は老年男性・成人男性の2体である。

埋葬1145 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は一辺40cmの方

形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は不明である。十字にかけた縄痕が底板外面のやや偏った位置に残る。埋葬1196を壊し、北側は3分の1が埋葬260に壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は老年男性である。

埋葬1146 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径30cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径40cmである。埋葬1196に南半分を壊されている。人骨は出土していない。

埋葬1157 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は直径35cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径50cmである。埋葬1889と埋葬2097を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者の年齢・性別は不明である。土師器皿が3枚出土し、その内の2枚は口縁部を合わせて立った状態で出土した。

埋葬1187 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は長辺40cm、短辺35cm、残存高47cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。型式はB 1 bである。掘形規模は不明である。埋葬1148に掘形は壊されているが、木棺はほぼ完形で検出している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。座臥屈葬と推測できる。被葬者は老年男性・成人男性の2体で、前者が主体である。

埋葬1540 墓地東半部のPO・PP地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺80cm、短辺75cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年女性である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬1542 ( 図版15- 8 ) 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径75cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。側板外面には箍の痕跡がある。埋葬1545に南側が壊される。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は老年女性である。

埋葬1552 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は一辺45cm、残存高52.5cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB 2 bである。掘形規模は、長辺100cm、短辺80cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。木棺はほぼ完形で検出している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存している。座臥屈葬と推測できる。被葬者は老年女性である。掘形からは壮年女性の骨が出土している。

埋葬1555 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺100cm、短辺80cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は老年男性である。

埋葬1573 ( 図版14- 1 ) 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は一辺45cm、残存高61cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はC 2 bである。南側の側板内

面に墨書がある。掘形規模は長辺80cm、短辺70cm以上である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年女性である。

埋葬1594 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は長辺38cm、短辺34cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は成人女性・性別不明の4歳児の2体で前者が主体である。

埋葬1621(図版15-7) 墓地東半部のRR地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は長辺45cm、短辺42cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。埋葬1620に北側側板の西半分が壊される。西側の掘形底部で天蓋の骨が並んだ状態で出土した。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年女性である。

埋葬1632 墓地東半部のQQ地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺15cm以上の方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は不明である。埋葬1630に壊されて、北側4分の1のみ残存する。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は性別不明の成人である。

埋葬1682 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺90cm、短辺80cmである。底部に黒色の付着物が残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は熟年女性・老年男性・性別不明の成人の3体で前者が主体である。掘形から老年男性3体の骨が出土している。

埋葬2045 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径65cmである。埋葬1147・埋葬1184に壊されている。人骨は出土していない。

埋葬2046 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は長辺42cm、短辺40cm、残存高13.5cmの方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB2aである。掘形規模は長辺80cm、短辺65cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は壮年女性である。

埋葬2069 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は長辺48cm、短辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺70cm、短辺60cmである。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。埋葬2068の北側を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は壮年女性・老年男性の2体で前者が主体である。掘形から老年女性・思春期男性・性別不明の2歳児の3体の骨が出土している。

埋葬2083 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺70cm以上・短辺70cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は老年女性である。掘形から成人女性の骨が出土している。

埋葬2095 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は一辺45cmの方

形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺70cm、短辺60cm以上である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は成人女性である。

埋葬2096 墓地東半部のPP地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は直径65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。掘形から年齢・性別不明の骨が出土している。

埋葬2154B 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は12.8mである。埋葬施設は土器棺（808）で、遺存状態は良好である。木製の蓋が残存する。蓋の上に天蓋の軸と骨が掛かった状態で出土した。掘形規模は不明である。埋葬2056・埋葬2154Aの掘形を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は6～7箇月の胎児である

埋葬2179 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設の形態は不明である。埋葬1541・埋葬2127の間で、形状を保っていないが、頭蓋とともに、天蓋・板塔婆・板状木製品などが出土した。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は熟年女性・熟年男性の2体で前者が主体である。

埋葬2212 墓地東半部のQR地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は長辺70cm、短辺54cm、残存高29.5cmの長方形の方形木棺で、遺存状態は良好である。型式はB2bである。掘形規模は長辺90cm、短辺65cmである。底部に黒色の付着物が残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は熟年女性と成人男性の2体である。

2期 江戸時代前期から中期（17世紀中葉～後葉）の墓である。方形木棺20基、円形木棺24基で合計44基である。

埋葬596（図32） 墓地東半部のRP地区溝180下層で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は直径52cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径70cmである。底板外面中央に支木が据えられている。側板外面には箍の痕跡が残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は老年女性である。

埋葬1175 墓地西半部のON地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は不明である。埋葬1174に東側側板を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は熟年男性である。

埋葬1181（図版16-7） 墓地西半部のON地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は長辺48cm、短辺30cm以上の方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、下向きに崩れている。埋葬姿勢は不明である。被葬者は熟年女性である。掘形から老年男性の骨が出土している。

埋葬1603 墓地東半部のPQ・PR地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。木棺の大きさは不明である。掘形規模は直径90cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。被葬者は老年男性である。

埋葬1833（図版16-1） 墓地西半部のPN・QN地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施

設は長辺50cm、短辺48cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺65cm以上・短辺60cmである。一条の縄痕が底板外面に残る。埋葬2016に南東隅を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は熟年男性・成人女性・成人男性の3体で前者が主体である。掘形から成人男性の骨が出土している。

埋葬2000 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径80cmである。埋葬2093の南側を壊している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は老年男性・性別不明の成人の2体で前者が主体である。位牌・ガラス嵌め木製品・数珠などが出土している。

埋葬2016(図版16-6) 墓地西半部のQN地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は長辺50cm、短辺15cm以上の方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は老年女性である。掘形から性別不明の老年の骨が出土している。

埋葬2057(図版16-6) 墓地西半部のPN地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は長辺44cm、短辺25cm以上の方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は不明である。十字にかけた縄痕が底板外面と東側の側板外面に残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は思春期男性である。

埋葬2081 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は13.0mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺110cm、短辺90cmである。人骨は出土していない。

埋葬2207 墓地東半部のOO地区で検出した。標高は13.2mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は成人男性である。

埋葬2213(図版16-2) 墓地東半部のQP地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良で底板の一部を検出したのみで大きさは不明である。埋葬1585に西半分を壊される。人骨は出土していない。羽子板が出土した。

埋葬2275 墓地東半部のOQ地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。直径48cmの底板のみ検出した。掘形規模は直径70cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者の性別・年齢は不明である。土師器皿が2枚重なって出土している。銭貨6枚が底板に重なった状態で出土した。

1期 江戸時代前期(17世紀前葉～中葉)の墓地である。方形木棺は2基・円形木棺は10基で合計12基である。

埋葬1541(図版16-4) 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は直径45cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径60cmである。蓋板の一部が落ち込んでいる。十字にかけた縄痕が底板外面に残る。側板外面には箍の痕跡が残る。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存する。座臥屈葬と推測できる。被葬者は壮

年男性である。掘形から壮年女性2体の骨が出土している。

埋葬1677（図版16-3） 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は12.8mである。埋葬施設は一辺45cmの方形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は長辺80cm以上、短辺70cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。頭蓋は残存するが、姿勢は崩れている。座臥屈葬と推測できる。被葬者は老年男性である。

埋葬1961 西半部のQN地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径75cmである。底板外面中央に、支木が据えられている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は成人男性である。

埋葬2172 墓地東半部のQO地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は直径40cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径55cmである。埋葬2103に壊された際に、南側の側板数枚を北側に寄せた状況がよくわかるかたちで検出している。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや不良である。頭蓋は残存するが、埋葬姿勢は崩れている。被葬者は性別不明の6歳児である。

埋葬2211 墓地東半部のPO地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は直径52cmの円形木棺で、遺存状態はやや良好である。掘形規模は直径65cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は壮年男性である。

埋葬2216 墓地東半部のOO地区で検出した。標高は12.9mである。埋葬施設は直径45cmの円形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は直径60cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態はやや良好である。被葬者は壮年女性・性別不明の成人の2体で前者が主体である。

#### 註

- 1) 各埋葬施設の標高は、木棺については底板上面、土器棺については内面底部、直葬については底部の標高である。
- 2) 各埋葬施設の規模は、遺構実測図から測定した。

表1 遺構概要表

時期	1 区	2 区	3 区
江戸時代	溝130A・B・C・D 溝180 溝280 溝519 溝528 溝532 溝697 溝786 竈53 竈98 竈112 土壙530 土壙541 土壙613・614 土壙645 土壙754 土壙706・748 土壙711A・B 土壙713A・B 土壙783 土壙728・734 土壙510 ・747 土壙1020A・B 土壙855 土壙1016 土壙1313 土壙1372 土壙1414 土壙1378 土壙1131・ 1438 土壙1294 土壙1850A・B 井戸1021 井戸3 井戸163 井戸1050 墓地	溝72 溝92 土壙38 土壙51 井戸2 井戸60 墓地	溝162 土壙55 土壙62 落込み400 井戸442 井戸871 柱穴40・41・42 柱穴197・178・157・151・141 柱穴461・392・399・465・402 柱穴388・458・391・457
桃山時代	土壙1197 土壙1133 井戸1189 井戸1270 溝1453 溝1472 土壙2120A・B	段差 溝74 溝102 溝185 土壙20 土壙30 土壙45 土壙48 土壙49 土壙65 井戸40 井戸50 井戸62 柱穴23・24 柱穴251・125 柱穴257・254	段差 溝469 溝484 溝467 溝483 竈800 井戸875 井戸881 井戸941 柱穴780・772・762 柱穴768・738・741・743 柱穴675・794・811・731 柱穴834・673・693・812・819 柱穴949・948・947・946
室町時代	溝1660 溝1449 溝843 溝1357 溝1731 溝2006 溝2007 溝2111 土壙2071 井戸2021 柱穴1716・2087・2259・2247 柱穴2174・1875・1876・1831 柱穴825・826・2266 柱穴1054 柱穴2028 柱穴2125	溝14 溝241 溝261 土壙55 井戸10	溝931 溝940 溝923 溝895 溝891 土壙945 土壙939

## 2 1区の遺物

### (1) 遺物の概要

1区では整理箱に632箱の遺物が出土した。土器類、陶磁器類、土製品、瓦類、石製品、木製品、金属製品、骨角製品、ガラス製品、人骨・動植物遺体などの種類がある。大部分は土器・陶磁器類が占め、次いで木製品・人骨が多い。室町時代後期から江戸時代後期に至る各時代の遺物である。

江戸時代後期の遺物は、埋葬施設・区画溝から18世紀後葉以降の京・信楽系陶器、伊万里製品が多量に出土している。19世紀に入るとさらに京・信楽系陶器が増加し、伊万里と共に瀬戸・美濃磁器、産地を限定出来ない磁器も散見できる。また後期の遺構からは土師器の出土はごく少量となる。これらの時期には他に出土遺物として土製品、木製品、石製品、金属製品などがある。

江戸時代中期の遺物は、埋葬施設・土壌・区画溝などから出土しており、17世紀後葉～18世紀中葉の遺物がある。伊万里と共に唐津の刷毛目・三島手の大型製品、銅緑釉などの椀皿と、京焼に類似した京焼風肥前陶器が目につく。18世紀中葉～後葉になると、伊万里の出土量はより増加し、それに伴い京焼の増加も顕著になる。土器類以外に、この時期の遺構からは土製品、木製品、石製品などがある。木製品には食膳具・建築部材などがある。

桃山時代から江戸時代前期にかけての遺物は溝・土壌・井戸などから出土している。この時期の輸入製品には少量であるが、青花の出土がある。国産施釉陶器では美濃<sup>1)</sup>、唐津<sup>2)</sup>。焼締陶器は信楽・備前・丹波などが多い。また土師器には京域とは様相の異なる皿の出土が少量ある。

室町時代後期の遺物は、伏見城の城下町成立以前の溝・井戸などから出土している。数量的に

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代以前	土師器、瓦器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦	少量	土師器1点、軒平瓦2点	少量	0箱
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、ガラス製品	8箱	土師器10点、瓦器10点、焼締陶器10点、国産施釉陶器4点、輸入陶磁器15点、ガラス製品1点	5箱	0箱
桃山時代	土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、木製品	167箱	土師器167点、瓦器2点、焼締陶器27点、国産施釉陶器68点、輸入陶磁器28点、瓦20点、土製品1点、木製品118点	134箱	8箱
江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、木製品、銭貨、金属製品、骨製品、石製品、ガラス製品、水晶製品	624箱	土師器182点、瓦器10点、焼締陶器34点、国産施釉陶器131点、国産磁器167点、輸入陶磁器2点、瓦2点、土製品118点、木製品164点、銭貨167点、金属製品16点、骨製品3点、墓石27点、ガラス製品1点、水晶製品3点	341箱	190箱
合計		799箱	1511点(121箱)	480箱	198箱

は限られ、図示できたものは少ないが、土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器<sup>3)</sup>、ガラス製品などがある。

これらより古い時期の遺物は、奈良時代から室町時代前期の土器類、瓦、石製品が少量ながら新しい時期の包含層や遺構から混入遺物として出土した。

以下では時代の新しいものから順に遺物の概略を述べる。なお、墓地出土遺物については別に項を改めてまとめることとする。

## (2) 主要な遺構出土遺物

溝130出土遺物(図版28) 溝130A・B・C・Dからは土師器、国産施釉陶磁器、土製品、金属製品などが出土している。図示できたものには土師器・国産施釉陶磁器がある。国産施釉陶磁器は京焼、伊万里、瀬戸・美濃磁器に分類される。出土土器は江戸時代後期(18世紀末～19世紀前半)に属する。

土師器には皿(140・141)、焙烙(142)がある。140は粗製の小皿、141は底部内面に圈線が巡る。焙烙は底部型作り、口縁端部外面に凸帯が巡る。枚方の津田産の可能性<sup>4)</sup>がある。

京焼には灯明皿(146)、油受皿(143・144・145)、筒形容器(148)、土鍋(150)、土鍋蓋(149)、錆絵染付椀(147)などがある。灯明皿は体部が直線的で、口縁部内面に貼花を付ける。灯明受皿には大小があり、脚の付くものもある。143は下部に外に広がる脚部を有するもので、上部に受部を有する。筒形容器は白化粧の上に若杉文を描く。上部は欠損している。土鍋蓋は扁平なつまみ付きで、天井部に褐釉と白濁釉を施す。土鍋は鉄釉が施され、蓋受け部の2方に把手を、底部の3方に豆粒状の足を有する。内面には目跡が残る。錆絵染付椀は胎土が灰黄色で精良。丸い体部に錆絵で草文様が描かれる。

伊万里には椀蓋(151・152)、椀(157・159)、筒形椀(153～156)、皿(160～162)、白磁小椀(164)、色絵鉢(165)などがある。152は外面に青磁釉を施される青磁染付。口縁部内面には四方禪文、見込みは二重圈線内にコンニャク印判で五弁花文、高台裏に一重方形内に崩れた渦福銘が記される。151も内面は同様で見込み内は手書きで松文が描かれる。外面は草花文。159は青磁染付椀である。内面口縁部に草花文帯、見込みに松竹梅環状文を描く。高台裏には二重方形内に「筒江」と記される。有田山内町の筒江窯産に限定できる。157は内面口縁部に四方禪文、見込みは五弁花文のコンニャク印判。外面には矢羽文を描く。153～155は内面に四方禪文、見込みにはコンニャク印判で五弁花文が描かれる。153は外面に円形状文が連続して描かれる。154は青磁染付。五弁花の崩れが顕著である。155は菊花文に幾何学文。156は若松文が描かれる。皿はいずれも外面に唐草文、内面に楼閣山水文、草花文が描かれる。160・162は低い蛇の目高台で162は二重方形内に渦福銘が記される。白磁小椀は化粧道具の小椀である。型打ち成形で外面全体に鎬が施される。色絵鉢は体部は内弯し、口縁部が端反する。内面見込みには呉須で宝尽し文、体部には金・緑・赤彩で草文が上絵される。外面体部も同色で鳥が描かれる。また器体には焼継痕跡がある。

瀬戸・美濃磁器には染付椀（158・163）がある。大小があり端反椀である。158は外面に山水・花草、163は渦巻文が描かれる。いずれも呉須文様が浮き立つ。

溝180出土遺物（図版29） 溝180からは土師器、国産施釉陶磁器、木製品などが出土している。国産施釉陶磁器は京焼、瀬戸・美濃、伊万里、産地不明磁器に分類される。出土土器は江戸時代後期（18世紀末～19世紀前半）に属する。

土師器は出土量が非常に少なく、図示できたものは丸底小皿（166）1点である。器高が低く、外方に大きく開く。

京焼には乗燭（167）、仏飯器（168）、灯明受皿（169・170）、灯明皿（171）、皿（172）、椀（173・174）、土鍋（175）などがある。乗燭は鉄釉が施され、低い脚が付く。仏飯器は透明釉を施され、脚が付く。灯明皿は大小あり、いずれも体部は直線的。受部は低いものと、高いものがある。皿は腰部が強く屈曲する腰折皿。椀はいずれも端反椀。腰部に張りを持ち、小さい高台を有する。174には貫入が全体にみられる。土鍋は褐釉が施され、口縁部に把手が付けられる。

瀬戸・美濃には火鉢（176）、皿（177）がある。176は底部のみで上部は欠損している。球形の体部に、側面に雷文が施された台部がつき、緑釉が施される。177は型作り成形の四方皿。内面の文様は型紙摺りで雷文、「福」・「寿」が描かれる。

伊万里には筒形椀（178）、椀（179・180）、色絵椀（182）などがある。筒形椀は口縁部内面に四方禪文が巡り、外面には幾何学文と菊文が描かれる。椀には口縁部が直線的に立ち上がるもの（179）、端反のもの（180）がある。179は口縁部内面に墨弾きで四方禪文が巡る。外面は円形窓に円形文を描く。180は口縁部内面に雷文が巡り、外面には雲と花を描く。色絵椀は上絵で赤・緑・青で外面に藤文を描く小椀。見込みは花文がみられるが明確ではない。

伊万里以外の様相をもつものに椀（181）がある。胎土は陶胎質で粗く、全体に一重網目文が描かれる端反椀。関西系染付椀の可能性もある。

木製品には漆器、下駄形木製品がある。漆器には椀がある。塗りは内外面とも黒色である。下駄形木製品は、形態は下駄であるが、鼻緒を通す穴がない。用途は不明である。

溝786出土遺物（図版38） 溝786からは土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、土製品、木製品などが出土している。図示できたものには焼締陶器がある。出土土器は江戸時代後期（18世紀後半）に属する。

焼締陶器には関西系擂鉢（1～3）がある。大中小があり1は小タイプ、2は中タイプ、3は大タイプで鉄泥を施されたもの。いずれも口縁部は肥厚した縁帯状を呈し、口縁部内外面に凹線の窪みが巡る。2・3は底部周縁に窪みが巡り高台状を呈する。ロク口は右回転で外面ヘラ削り成形。内面の擂目は8～9本1単位、底部は6本1単位で不定形に施される。また3は片口部に「上」と刻印される。

木製品には桶、杭、板などがある。桶は破片で詳細は不明である。杭・板は護岸に用いていたものである。

土壙711出土遺物（図版29・30・54） 土壙711からは土師器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、土

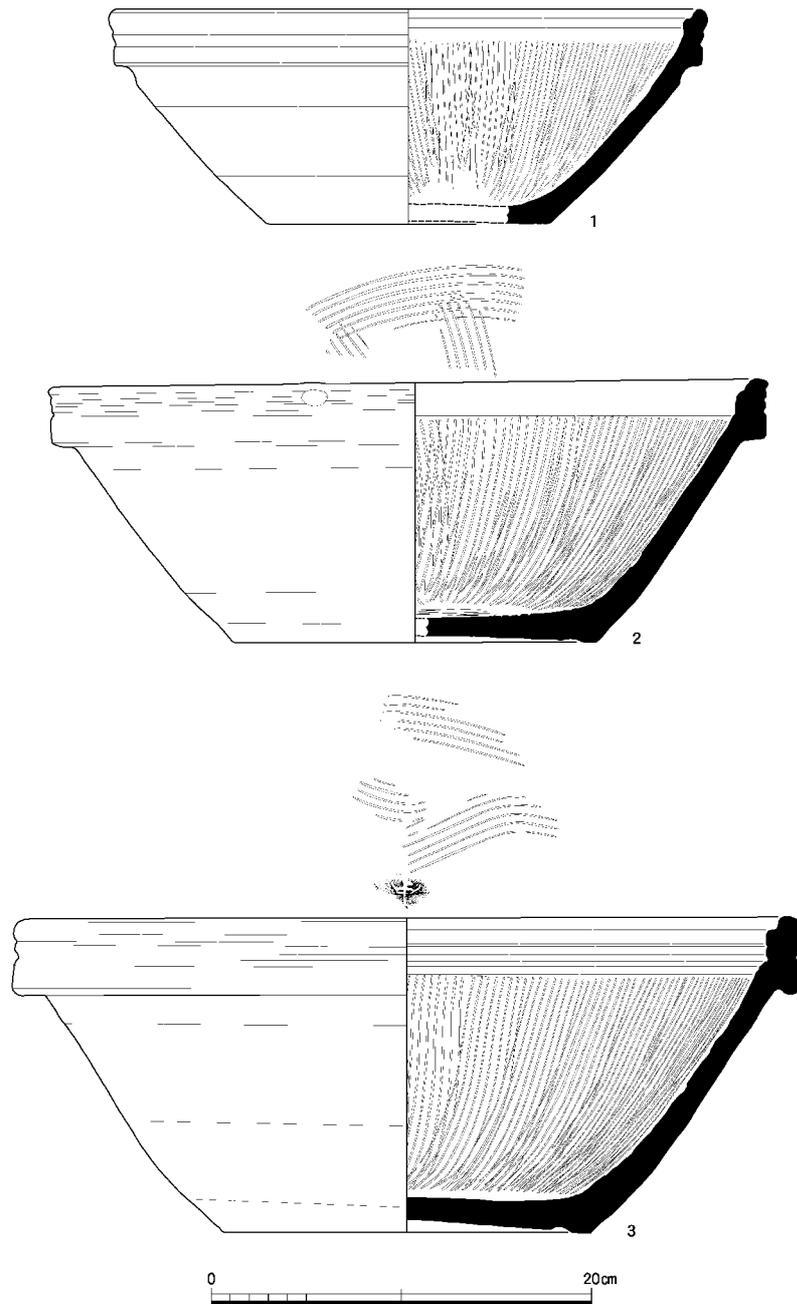


図38 1区溝786出土播鉢

製品、瓦、石製品などが出土している。国産施釉陶磁器は京焼と伊万里の割合が多くを占める。出土土器は江戸時代中期から江戸時代後期（18世紀中頃～後半）に属する。

土師器には皿（183～191）、鉢（192）、壺（194）、焼塩壺蓋（193）などがある。皿は粗製小皿・丸底小皿・<sup>5)</sup> 圈線が巡る大皿に分類できる。粗製小皿（183～185）は口径4.8～7.5cm、器高1.2～1.4cm。丸底小皿（186～188）は口径11.4～1.5cm、器高1.4～1.5cm。圈線が巡る大皿（189～191）は口径9.8～10.1cm、器高1.5～1.7cm。鉢は口径7.8cm、器高2.6cm。胎土が精良でロク口成形されたもの、内外面底部に墨書が記される。壺は鉢と胎土、成形を同じくするもの。外面に3条の凹線が巡る。いずれも底部は糸切り痕が残る。

焼締陶器には関西系播鉢（196・197）がある。いずれも口縁部は幅広く折り返され縁帯をなす。凹線が内面に1条、外面に2条巡る。播目は7～9本1単位で底部に交差するもの、並ぶものがあり、体部内面は密に下から上に櫛目を施す。

京焼には椀（207～209）、筒形椀（211～213）、急須蓋（214）、灯明皿（202・203）、灯明受皿（199～201）、土鍋（198）などがある。丸椀には赤色で上絵付けの207と錆絵染付208がある。209は兜椀。灰釉と鉄釉が掛け分けされ、体部には篋で刻み目が施される。筒形椀には鉄釉で幅広の帯状文が巡る211・212と、錆絵染付の213がある。いずれも高台は幅広で低い。蓋は錆絵染付。灯明皿はいずれも灰釉が施され、203は不明文様が貼り付けられ、内面に目跡が残る。灯明受皿はいずれも灰釉が施され、体部は直線的に開く。受部は口縁部より低くなる。199は古い時期の特徴を持つ軟質施釉陶器。淡い緑釉が施され、3方に粒状の受けが貼り付けられる。土鍋は口縁部に把手が付き、底部外面以外に鉄釉が施される。

瀬戸・美濃には椀（210）がある。内外両面に刷毛目で施文され、口縁部は内弯する。高台は貼り付け。

唐津には花入（215）がある。腰部に最大径を持ち、口縁部が大きく開くものと推定される。上位は鉄釉を施し、中位以下は刷毛目。高台畳付けには離砂が付着する。

伊万里には椀（223～226）、筒形椀（220・221）、蓋（217～219）、猪口（222）、皿（227～231）、花入（232）、色絵水滴（216）などがある。椀には大中小と筒形椀がある。226は大振り器壁が厚く、高台の高いもの。外面体部に銀杏文が描かれ、高台内に一重方形内に崩れた渦福が記される。225はハの字状高台が付き、腰の張りが強い。口縁部内面に四方襷が巡り、見込みに草文を一点描く。外面体部は草花文。224はくらわんか手の梅樹文を描くもの。223は小椀で笹文のみ描かれる。筒形椀には220・221がある。青磁染付220は口縁部内面に四方襷が巡る。221も同様で見込みに崩れた五弁花文のコンニャク印判、外面には唐草と花を描く。222は猪口。若松が描かれる。椀蓋219は松・草が描かれ、口縁部に返りを有するもの。217は内面四方襷文、見込みに草花文を描く。218は青磁染付。内面に四方襷、見込みに草文を描く。天井部には二重方形内に崩れた渦福が記される。皿227・229は波佐見系に推定される皿で、草花と格子目を描くものがある。いずれも見込みは蛇の目釉ハギされ、重ね痕が顕著に残る。229は五弁花文のコンニャク印判を施す。230は内面に墨弾き文が巡り、228は内面に扇・花・唐草を描く。高台内は渦福を記す。いずれも見込みには五弁花文をコンニャク印判で施される。231は腰折大皿、胎土は陶胎に近い。口縁部は直立し、高台は高い。内面全体に繊細に瓜・葉が描かれ、高台内は「太明化製」と記される。232は青磁の花入。ラッパ状に大きく開く口縁部を有するもので三つ叉の耳がつく。216は色絵の鶏形の水滴。体部は型作り成形されたもので、底部を接合する。頸部後方には径0.5cmの孔が穿たれる。色は緑、赤が使われる。

土製品にはミニチュア釜（195）、皿（204）、器台（206）、灯火具（205）、埴塙（885）などがある。灯火具、埴塙を除き、いずれもままごと道具。これらには緑彩と透明釉が施される。埴塙（885）は胴部に丸みをもつ直口壺形である。口縁部は内傾し断面方形状に収める。胴部中位の上

方には径4.0cm前後の孔が穿たれ貫通する。反対側には長径4.0cm、短径3.0cm、深さ4.0cm前後の窪みを有する。おそらく引き出す時に、道具を引っかける穴であろう。成形は2段積み成形で、内面には粘土継ぎ足し痕跡、口縁部直下のナデ上げ痕跡が顕著に残る。外面には口縁部から底部にかけ金属滓が多量に付着する。

溝280出土遺物（図版31・32） 溝280からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器などが出土している。京焼、伊万里がその大半を占める。出土土器は江戸時代中期（18世紀前半～中頃）に属する。

土師器には皿（233～237）花塩皿（238～240）鉢（241・242）焙烙（243）などがある。233は丸底小皿で口径10.2cm、器高1.4cm、234～237は圈線が巡る大皿で口径10.2～11.0cm、器高1.9～2.0cm。花塩皿は大中小があり、口縁部を指で押え襷を巡らす。鉢はいずれも胎土は堅緻。ロク口成形で底部は糸切り未調整。焙烙は底部を台型成形し直立する口縁部を継ぎ足す。口縁部は丸く収められ、煤が付着する。深草産<sup>6)</sup>の可能性がある。

瓦器には火鉢類（244～246）がある。244は体部は丸く、口縁部は強く内傾する。245は口縁部下に瓶掛けを有する。体部には0.9cmの孔が穿たれ、U字状の通風口が付くものと推定される。脚部は中空のもので底部の3方に付けられる。246は外方に折れ曲がる口縁部を有する。外面には漆が塗られた痕跡が残る。

焼締陶器には甕（248）花入（水指）（247）壺（287）がある。甕は備前で、折り返し幅広の玉縁状口縁にナデ痕の窪みが2条巡る。体部外面には板状ヘラ工具の調整痕が顕著に残る。247は備前。ややすぼまりながら直立する体部外面の上位には櫛目が施される。壺は丹波で、肩部に4方向の耳を貼り付ける四耳壺。口縁部、肩部に木灰釉が施釉される。

京焼には灯明皿（249・254・255）灯明受皿（250～253）椀（258～267）香炉（268）筒状容器（257）小椀（256）がある。灯明皿には灰釉が施され、芯受けの条線が施された255、ロク口成形の土師皿タイプ灯明皿の249・254があり、249は緑灰色釉が施された胎土の堅緻なもので、口縁部には把手が1方に貼り付けられる。254は透明釉が施された赤褐色の色調を有する。内面には芯受けの条線と圈線が施される。灯明受皿には陶器質の252・253、ロク口成形土師器皿タイプの250・251があり、陶器質のものは、受け口の凸帯を有する。土師器皿タイプの250は緑灰色釉が施された胎土の堅緻なもので、251は254の受皿タイプ。いずれも粒状の受けが3方向に貼り付けられる。258～261は腰高の半筒形椀、いわゆる煎茶椀である。258は鉄釉と灰釉が掛分けされ、畳付以外施釉される。美濃産の可能性がある。260はワラビを白泥と錆絵で描く。他は外面体部に錆絵で草花が描かれる。いずれも見込みに目跡が残る。262～265は丸椀で上絵付けと下絵付けがある。262・263は緑・赤色の上絵で松や草文を描く。264は下絵で錆絵の草花文を描く。265は大きな口径に対して器高の低いもので、錆絵が描かれる。262・263・265は見込みに目跡が残る。266は腰部から直線的に立ち上がる体部。267は指押しで捻りを加えた体部の椀。いずれも錆絵染付で松・草花が描かれ、京都産に限定できる。268は口縁端部を内に折り返した香炉である。白化粧を施した後に灰釉が施される。257は下絵で草文が描かれ、透明釉が施される筒状容器。

256は型押し成形で鎬を施し、緑彩が掛けられる化粧道具。底部に押し印銘が「源」と読める。

伊万里には椀（269～274・276・277・286）、椀蓋（275）、筒型椀（285）、皿（278～280・283・284）、鉢（281・282）がある。269・270・273はくらわんか手。271・274・276は絵付けが丁寧で、271は上手で緻密に笹文を描く。274は唐草と菊。体部が薄手の276は垣と草花を強い筆致で描く。小椀には272・277があり、272は雨降り文。277は草花文と「玉川」と読める銘が記される。286は色絵椀。内面に上絵で草花を描き、全体に形態は端整である。見込みに重ね焼き痕跡が残る。椀蓋は天井部にコンニャク印判が施され、天井部には崩れた「大明年製」の銘が記される。皿には染付と白磁があり、278～280・283は染付、284は白磁。280は格子文で、見込みは蛇の目軸八ギされる。283は見込みにコンニャク印判で五弁花文、高台内に渦福が記される。284は見込み蛇の目軸八ギ、離砂が高台畳付けと共に付着する。278は内面に墨弾き手法を用いる小皿。279は変形皿で型作り成形されたもの。内面に山水文が描かれる。鉢には大小があり、281は口縁端部に口紅が施される大鉢。見込みには草花文を描き、外面体部の3方の円形窓に、それぞれ松竹梅を描くものと推定される。高台内には渦福が記される。282は口縁端部に輪花を施し、内面体部に雷文と藤、見込みに山水文を描く。外面体部は緻密に唐草文が描かれる。高台内も精緻に、二重方形内に渦福が記される。

土壌754の出土遺物（図版33～35）土壌754からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品、などが出土している。国産施釉陶磁器は多量に出土しており種類は伊万里、唐津、京焼、信楽、瀬戸・美濃に分類できる。京焼には溝280と同類のものが多量に出土している。出土土器は江戸時代中期（18世紀中頃）に属するものが主体となる。

土師器には皿（337～342）、小型壺（343）、焙烙（347～350）、焼塩壺蓋（346）などがある。皿は粗製小皿、圈線が巡る大皿に分類できる。粗製小皿（337～340）は口径5.4～5.7cm、器高1.2～1.4cm。大皿（341・342）は口径10.5～10.7cm、器高1.5～1.8cm。大皿はいずれも外上方に大きく開くもので、器壁は薄い。342は灯明皿に転用されたもの。小型壺は球形を呈し、口縁部はすばまる。焙烙は屈曲する口縁部を有するもの（347）、直立し端部を丸く納める口縁部のもの（348～350）に分類できる。いずれも台型成形。丸く納めるタイプは深草産と推定される。焼塩壺蓋は内面に布目が残る。

瓦器には瓦灯（351）、火鉢（352～354）がある。351は瓦灯の身の部分である。中央には受け皿が据えられる。火鉢には器高の低いものと高いものがある。いずれも口縁部は内傾し水平な端面をもつ。底部には八の字状に足がつく。体部外面はコテをあて平滑に仕上げる。

焼締陶器には壺（357・358）、播鉢（355・356）などがある。357は備前の小壺。球形の体部で、口頸部下位の四方に径0.3cmの孔が穿たれる。底部は研磨されたのか非常に円滑。播粉木に使用か。355は信楽播鉢。断面方形状の口縁部に凹線が2条巡る。体部には鉄泥が施される。播目は6本1単位で全面に施され、使用痕が顕著に残る。356は関西系播鉢。肥厚気味の縁帯部に凹線が2条巡る。硬質な胎土。358は鉄泥が塗られた信楽の壺である。上端部が平坦面をなす屈曲する口縁部を有する。

京焼には椀（288～296）鉢（299）蓋（297）灯明皿（300）などがある。288～292は腰高の半筒椀のいわゆる煎茶椀である。288は白泥と錆絵で草花が描かれ、289は白化粧後に錆絵で草花を描く。他は錆絵だけで草花、変形輪状文が描かれる。見込みの目跡は289を除きいずれも3方に残る。丸椀には293・294がある。293は上絵付けの丸椀。金・緑・赤色で草花を描く。294は錆絵染付で外面体部に波文を描く。平椀には295・296がある。体部の内弯がきついものと緩いものがある。295は内面見込みから体部にかけて上絵付けで草花が描かれる。使用色は緑のみが確認できるが、他は不明。296は無文様のものか。鉢は蓋受け状の口縁部に4方の欠き込みを入れ輪花とする。内面には錆釉と呉須で松を描く呉須染付。蓋は器高の低い平坦な呉須染付297がある。白泥、錆釉、呉須で草花を描くもの。灯明皿は口ク口成形で下部はヘラ削りされる。内面に格子目の伏線で芯受けが施され、内面施釉の緑彩である。

信楽には壺（312）火入（311）がある。壺はいわゆる腰白壺である。肩部は張り気味で、底部にかけすぼまっていく。肩部には凸線が2条巡り、4方に耳が付けられる。施釉は内面口縁部から外面腰部にかけて褐釉が施され、下位は底部まで白釉が施される。火入は器高の低い筒状で、肥厚した口縁上端部が平坦面となる。体部は灰釉が施され、石ハゼが顕著。

瀬戸・美濃には椀（306・307）鉢（308）皿（309・310）などがある。307は体部に口ク口目が顕著に残る。口縁部は小さな玉縁状を呈する。306は腰が張り、体部は直線的なもの。いずれも灰釉が施される。鉢は口縁部は肥厚し端面を有する。体部には口ク口目が顕著に残る。長石釉が施され、見込みの3方に目跡が残る。310は腰折皿である。腰部が屈曲して、口縁部が外反するもので、長石釉が施される。309は菊皿である。内外面をノミ状工具で菊花状に成形されたもので、灰釉が施される。

唐津には刷毛目椀（302～304）刷毛目鉢（305）京焼風肥前陶器（298）がある。刷毛目椀には大中小あり、302は畳み付け以外は全面施釉。303・304は玉縁状の口縁部を有するもので、内面から外面腰部まで刷毛目が施される。高台は上げ底で高い。304のみ見込みが釉ハギされる。305は片口の鉢で注口が付き、玉縁状の肥厚した口縁部を有する。口縁部上端面と高台以外は施釉される。内面は水平方向の刷毛目、外面は刷毛目で波状文を描く。298は平椀である。胎土は黄灰色で精良。高台内は削り出しで、チリメン皺が顕著である。見込みには簡略化した楼閣山水文が描かれる。

伊万里には椀（313～327・335）皿（328～331）蓋（332・333）仏飯器（334）壺（336）がある。椀はくらか手のもので大半を占める。見込みが蛇の目釉ハギされたもの（314・315・317・319・322・323・327）は波佐見窯系の椀で重ね痕が顕著に残る。やや小型で低い高台のもの（320・324・325）は菊文が描かれる。いずれも高台内に渦福が記される。施文は菊文・梅花文・草花文・唐草文・コンニャク印判桐文などが描かれる。320・325は小振りである。皿は328が内面に草花文、見込みにコンニャク印判の五弁花文、外面に唐草文を描く。底部にはハリ支え痕が残る。329は口縁端部に口紅が施され、捻り文の中に鳥と菊、外面に輪宝を描く。330は内面に墨弾き文が巡り、コンニャク印判の五弁花文、外面は簡略化して波文を描く。331は小型

の輪花皿で胎土は陶質。内面にコンニャク印判で3方に菊を描く。蓋は332が香炉の蓋。緻密に波と紅葉が描かれ、つまみに板状のものが貼り付けられるが欠損している。333は大型で鉢の蓋。つまみは高い八の字状。天井部は一面に草花文・若松文が描かれる。白磁に分類できるものには334～336がある。335は白濁した釉が施されるもので、内面が蛇の目釉ハギの椀である。334は仏飯器。いずれも波佐見窯系。336は短頸壺で高台を有する。成形は丁寧に施され、釉薬に浸ける際の指痕が3方に残る。

土製品には灯火具(344)、ミニチュア釜(345)、器台(301)がある。ミニチュア釜、器台はままごと道具。301には低火度釉が施される。

木製品には漆器の椀がある。塗りは内面が赤色、外面が黒色で、体部外面に銀蒔絵や石黄で菊を描くものがある。

溝746出土遺物(図版35・36・52) 土壌746からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、土製品、金属製品などが出土している。国産施釉陶磁器は多量に出土しており種類は伊万里、京焼、信楽、瀬戸・美濃に分類でき土壌754と同類のものである。出土土器は江戸時代中期(18世紀中頃～後半)に属する。

土師器には丸底小皿(359)、圈線が巡る大皿(360～362)がある。小皿は口径8.0cm、器高1.4cm、大皿は口径10.0～10.2cm、器高1.8～2.0cm。361は灯明皿に転用されたもので口縁部に煤が付着する。

瓦器には火消壺(364)、風炉(363)がある。364は短い口縁直下に蓋受けの段を有する。外面上部は簡単にミガキが施される。363は型で成形され、風口の窓を有するものであろう。底部には三足の脚部が付く。窓の口縁部には煤が付着する。

焼締陶器には播鉢(366)、水指(花入)(365)、大壺(803)がある。播鉢は扁平玉縁状の口縁が緩やかに外反する。内外面には黒褐色の鉄泥が厚く掛けられ、内面の播目は一部交差する。底部に高台の付くもので、唐津の播鉢と推定される。365は備前の水指。上部に向かってすぼまる。底部、体部下段はケズリ。信楽大壺(803)は胎土に黄灰色の長珪石を多く含む。口縁部は外に折り曲げられ、玉縁状を呈する。肩部は大きく張りを持ち、胴部から緩やかにすぼまり、平坦な底部に至る。全体に石八ぜが認められ、腰部から火色が薄く赤褐色に残る。

京焼には椀(368～370)、筒形椀(371・372)などがある。368・369は半筒形の煎茶椀。368は施文は不明、369は白泥と錆絵で草が描かれる。370は色絵丸椀。草文が赤・緑色の太い筆致で描かれる。筒形椀はいずれも錆釉が施され、371は幅広の帯状文が描かれ、372は突出した腰部を有し、草木が描かれる。高台は幅広く、底部露胎。

信楽には火入(373)、壺(374)がある。火入は外面に灰釉を施されたもの。腰部は面取りされ、以下は露胎となる。壺は前述した312と同様の四耳壺の腰白壺である。

瀬戸・美濃は片口鉢(375)があり、口縁部に大きめの注口が付く。外面上位から内面にかけて灰釉が施される。一部に濃緑色の釉を施す。

伊万里には椀(376～385)、陶胎染付椀(386)、壺(392・394)、猪口(387・393)、皿

(390・391)、鉢(388・389)がある。椀はくらわんか手のもので、法量は口径9.4～9.8cm、器高5.0～5.3cmと、口径10.2～11.1cm、器高5.3～6.1cmの大小に分類できる。見込みが蛇の目釉八ギされたもの(384・385)があり、やや小型で器壁が薄手のもの(376・381)は菊文が描かれる。土壌754出土品と共通する。380は外面二重編目文、見込みに菊文を描くもの。他には藤文(378)、二重編目文(377)、梅樹文(382・383・385)、コンニャク印判の桐文(379)などがある。高台裏には一重方形内の渦福、かなり簡略化された銘が記されるものがある。猪口は外に大き

表3 1区土壌783土師器法量分布

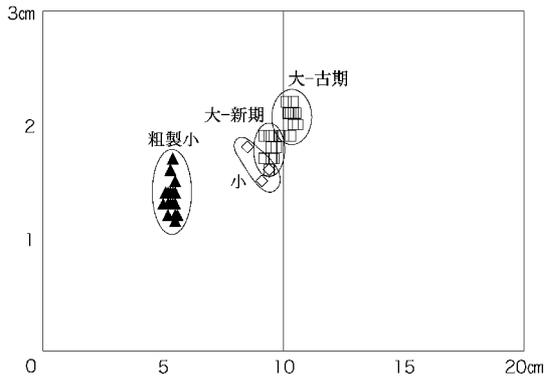


表4 1区土壌783出土土器比率

器種	器形	破片数	比率(%)		
土師器	皿	393	92.3%	83.5%	
	鍋・釜	3	0.7%		
	炉・火鉢	30	7.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	426	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	3	100.0%	0.6%	
	鉢	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	3	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	椀・皿	2	100.0%	4.1%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	2	100.0%	
	唐津	椀・皿	2	66.7%	6.1%
		鉢・向付	1	33.3%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	3	100.0%	
伊万里	椀・皿	35	87.5%	81.6%	
	鉢・大皿	0	0.0%		
	壺・瓶	3	7.5%		
	他・不明	2	5.0%		
	小計	40	100.0%		
京焼・他	椀・皿	3	75.0%	8.2%	
	鉢・大皿	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	1	25.0%		
	小計	4	100.0%		
国産施釉陶磁器計		49	100.0%	9.6%	
焼締陶器	甕	3	9.4%	6.3%	
	壺	9	28.1%		
	摺鉢	17	53.1%		
	盤・大皿	2	6.3%		
	他・不明	1	3.1%		
	小計	32	100.0%		
輸入陶磁器	椀・皿	0	-	0.0%	
	鉢	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
総数		510	100.0%		

く開く口縁部を有するもの(387)があり、393は白磁の型作りで草花が陽刻される。皿(390)は外面体部に唐草文、内面には草花を描き、見込みはコンニャク印判で五弁花文。折縁皿(391)は17世紀前半の初期伊万里に属するもの。底径が狭く、口縁部に稜をもち、高台内は上げ底で畳付けには離砂が付着。見込みに草花を描く。鉢(389)は体部外面に唐草文、内面は草花を描き、見込みは手描きで五弁花文を描く。高台内には簡略化した渦福が記される。鉢(388)は口縁部が大きく端反するもの。内面に宝珠を描く。壺には白磁壺(392)、赤絵油壺(394)がある。386は山水風の絵付けが呉須で描かれ、高台畳付け以外に施釉される。

土製品には鞆の羽口(367)がある。径8.3cmの羽口の先端部には多量の銅滓が付着する。

土壌783出土遺物(図版37・63・75、図39、表3・4)土壌783上層・下層に分けられる。土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、木製品、土製品などがまとまって出土している。出土土師の総破片数は510片あり、その内訳は土師器83.5%、瓦器0.6%、焼締陶器6.3%、国産施釉陶磁器9.6%である。そのうち国産施釉陶磁器は京焼8.2%、瀬戸・美濃4.1%、唐津6.1%、伊万里81.6%となり、伊万里が多数を占める。土師器皿は法量分布から新古に分類できる。上層が江戸時代後期(18世紀後半～19世紀)、下層が江戸時代中期(18世紀前半～中頃)に属する。

上層 土師器には粗製小皿(395～397)、圏線

が巡る大皿（399～406）、涼炉（407）がある。粗製小皿は口径5.0～5.5cm、器高1.2～1.3cm。圏線が巡る大皿は口径9.1～9.6cm、器高1.6～1.8cm。圏線が巡る大皿は体部が外に開き伸長気味である。特殊なものには口縁成形の圏線が巡る小皿（398）がある。内面周縁には深い圏線が巡り、見込みは盛り上がる。涼炉は茶道の点前で用いる炉である。上に茶釜を掛けるために、上端部に茶釜置の支えを3方に有する。口縁部から内方に折り曲げられ、内に炭をおさめる火袋がある。風を送るための透かしが3箇所を確認できる。欠損して確認できないが外面体部にも通風孔が施されるものである。

下層 土師器には粗製小皿（408）、丸底小皿（409・410）、圏線が巡る大皿（411～418）がある。粗製小皿は口径5.5cm、器高1.2cm。丸底小皿は口径9.1～9.5cm、器高1.5～1.7cm。圏線が巡る大皿は口径10.2～10.5cm、器高1.7～2.0cm。圏線が巡る大皿は口縁部が直線的なものと、内弯気味なものがあり、上層に比べ体部が縮小気味である。

焼締陶器には播鉢（419・420）、香炉（421）がある。420は信楽の播鉢で、胎土は軟質で粗く、内外面に鉄泥が施される。口縁端部は外方につまみあげられる。播目は4本1単位。419は関西系播鉢で、小振で高台が付くもの。肥厚した縁帯には2条の凹線が巡る。播目は12本1単位で、底部から交差しながら放射状に播目が施される。高台内には扇形の枠内に「一」の刻印が捺される。香炉は高台付きのもので、器高は低く、腰部が膨らむ。平坦面をもつ口縁は端部が小さく内方に突出する。

唐津には片口鉢（426）がある。体部は深く、口縁部は小さく折り返されて玉縁状とする。口縁部下には粘土板による注口が貼り付けられる。外面底部以外に鉄釉を施釉。

伊万里椀には椀（424・425）、仏飯器（422・423）がある。椀には梅樹文が描かれる。425の高台裏には簡略化された銘が記される。仏飯器は裾の広がる脚部が付く。体部は腰の張るものと、緩やかに開くものがある。

木製品には漆器、曲物、桶、箸、折敷、付札、棒状木製品、楔形木製品、板状木製品、組合せ

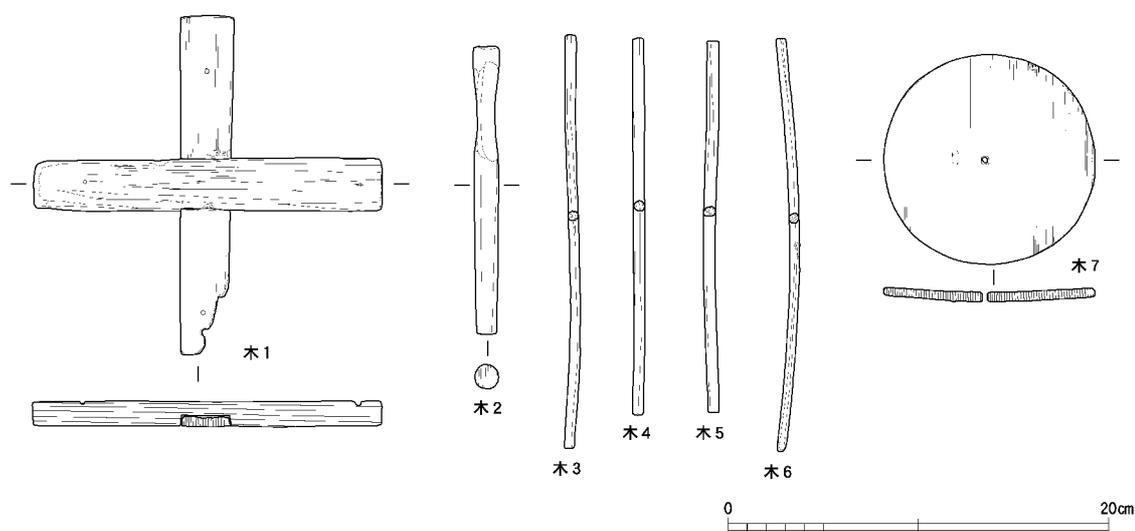


図39 1区土壙783出土木製品

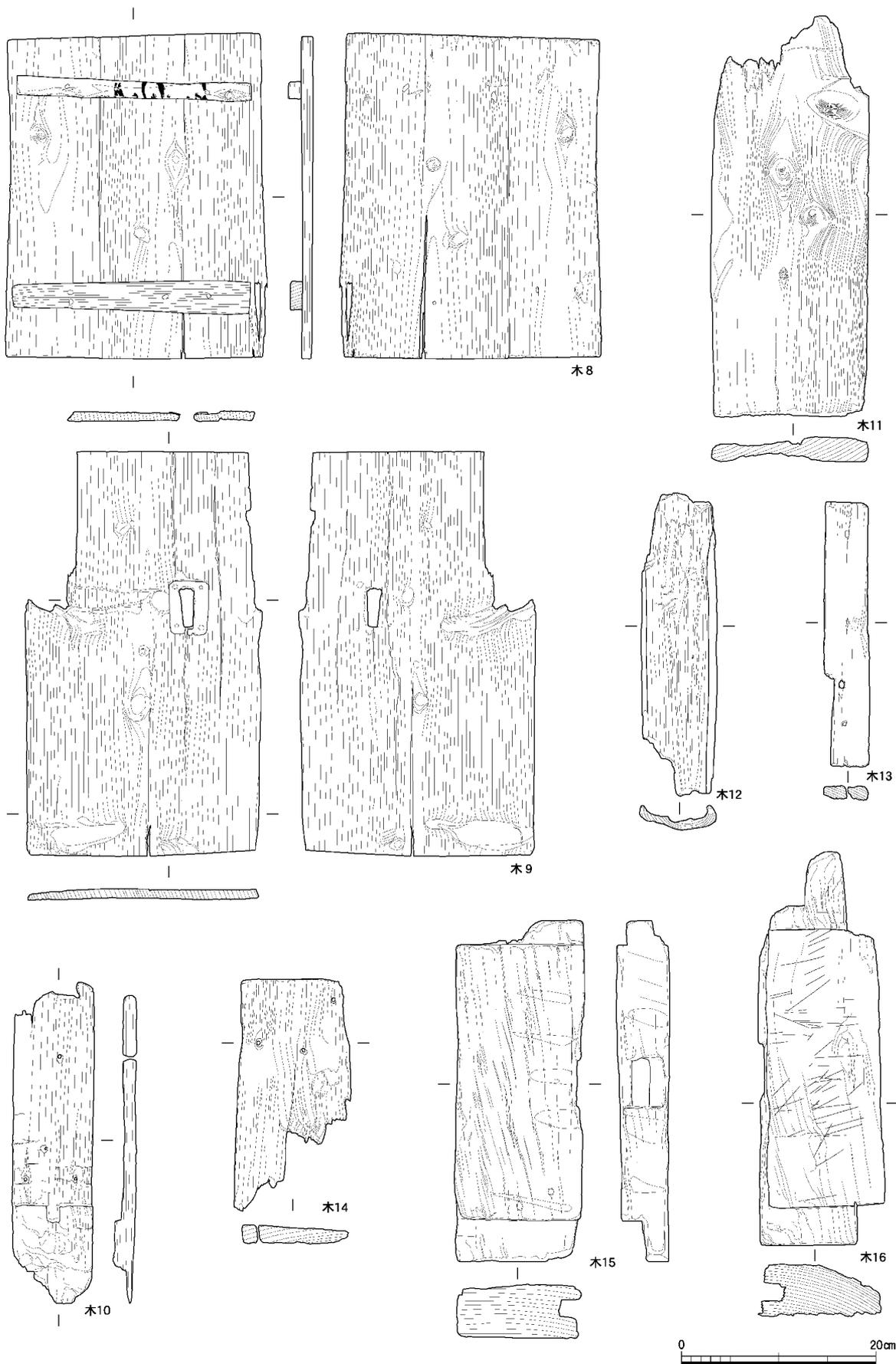


図40 1区土壇1311・747A・613出土木製品

木製品、加工痕のある部材などがある。

漆器には椀、皿がある。漆器椀（木120）は大型で一部が欠損する。高台は高い輪高台で一部が欠損する。塗りは内面は赤色、外面は黒色で体部外面に赤色の漆で笹を描く。漆器皿（木121）はほぼ完形の丸皿である。高台は輪高台である。塗りは内面は赤色、外面は黒色で施文はない。

曲物は小型品で体部は破損する。蓋（木7・木224・木225）は円形の薄い一枚板で、ほぼ中央に穿孔し、つまみの綴じ紐を付ける。木224・木225は上面に「納豆」「妙福寺」の墨書がある。桶は底板の一部のみである。箆（木3～木6）は長軸方向に加工し、端面は切り落とす。折敷は全て破損しているが、綴目が良好に残るものがある。付札（木223）は上部が欠損する。細長い薄い板状で、先端が尖る。片面に墨書がある。楔形木製品は一端を尖らせる方柱形で、大小さまざまである。実際に楔として使用したかは不明である。棒状木製品は断面形が円形・正方形・長方形のものなどさまざまな形態があるが、いずれも用途は不明である。（木2）は円柱形で、両端は平坦である。側面の一部を長軸方向に抉る。組合せ木製品（木1）は中央に欠き込みのある長方形の板を直角に組み合わせる。両端には穿孔や細い切り込みがある。用途は不明である。板状木製品は平面形が長方形のもの、隅丸長方形のもの、細長いもの、先端が尖るもの、片刃状で釘穴のあるもの、小口に切れ目があるものなどさまざまな形態のものがあるが、いずれも用途は不明である。加工痕のある部材には、壁の木舞の可能性のあるものがある。

土壙1311出土遺物（図版37、図40） 土壙1311からは土師器、国産施釉陶磁器、木製品などが出土している。出土土器は江戸時代中期（18世紀前半～中頃）に属する。

土師器には粗製小皿（427～429）、圏線が巡る大皿（430～435）がある。粗製小皿は口径5.2～5.6cm、器高1.1～1.2cm。圏線が巡る大皿は口径10.2～10.6cm、器高1.8～2.1cm。圏線が巡る大皿は口縁部が直線的なものと、内弯気味なものがある。

唐津には京焼風肥前陶器椀（436）がある。内外面に灰釉が施され、内面には錆絵で簡略化された楼閣山水文が描かれるが粗雑である。

木製品は底部北寄り・南寄りに据え付けた部材（木10～木16）で、さまざまな形態がある。損傷しているものが多いが、加工痕の状況からほとんどが転用材と考えられる。

土壙855出土遺物（図版37・51・75・94、図41、表5・6） 土壙855からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、木製品などが出土している。出土土器の総破片数は229片あり、その内訳は土師器42.4%、瓦器0.9%、焼締陶器8.3%、国産施釉陶磁器48.5%である。そのうち国産施釉陶磁器は京焼41.4%、瀬戸・美濃1.8%、唐津9.9%、伊万里46.8%となる。出土土器は江戸時代中期（17世紀末～18世紀前半）に属する。

土師器には粗製小皿（437～440）、丸底小皿（441～444）、圏線が巡る大皿（445～448）、小型壺（450）がある。粗製小皿は口径5.6～5.8cm、器高1.1～1.5cm。丸底小皿は口径8.4～8.7cm、器高1.6～1.9cm。圏線が巡る大皿は口径10.4～11.0cm。圏線が巡る大皿には器壁がやや薄く、体部が縮小気味なものも見受けられる。449は土師器皿の底部で裏面に墨書で「菓子」と記される。小型壺は下部に重心を持ち、球形を呈する。

表5 1区土壌855土師器法量分布

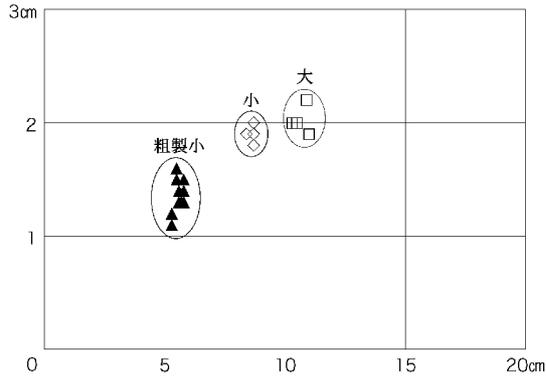


表6 1区土壌855出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	84	86.6%	42.4%	
	鍋・釜	13	0.0%		
	炉・火鉢	0	13.4%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	97	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	1	50.0%	0.9%	
	鉢	0	0.0%		
	他・不明	1	50.0%		
	小計	2	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿	2	100.0%	1.8%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	2	100.0%	
	唐津	碗・皿	5	45.5%	9.9%
		鉢・向付	1	9.1%	
		壺・瓶	1	9.1%	
		盤・大皿	4	36.4%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	11	100.0%	
伊万里	碗・皿	46	88.5%	46.8%	
	鉢・大皿	0	0.0%		
	壺・瓶	6	11.5%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	52	100.0%		
	京焼・他	碗・皿	28		60.9%
鉢・大皿		0	0.0%		
壺・瓶		3	6.5%		
他・不明		15	32.6%		
小計		46	100.0%		
国産施釉陶磁器計		111	100.0%	48.5%	
焼締陶器	甕	13	68.4%	8.3%	
	壺	0	0.0%		
	播鉢	5	26.3%		
	盤・大皿	0	0.0%		
	他・不明	1	5.3%		
	小計	19	100.0%		
輸入陶磁器	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
総数		229		100.0%	

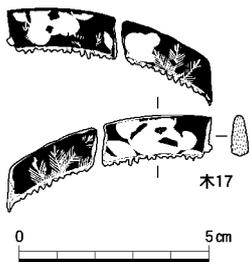


図41 1区土壌855出土櫛

底部に釉が垂れ残る。

木製品には漆器、櫛、付札、板状木製品などがある。

漆器には碗がある。破片が多く、全体が分かるものは1点のみである。輪高台の丸碗で、塗りは内面は赤色、外面は黒色で、高台内部に赤色の漆で記号を描く。破片には塗りが内外面とも赤色のものがある。

櫛（木17）は横櫛の破片である。断面が整っており、目釘状の

焼締陶器には備前の建水（452）、産地不明の播鉢（451）、信楽の甕（798）がある。452の体部は内傾しながら立ち上がり、口縁は端部が外にわずかに張りだす。451は産地不明の播鉢。折り返され肥厚した口縁は縁帯をなす。外端面に2条の凹線が巡る。播目は7本1単位で内外に鉄泥が塗られる。798は頸部が外反し、口縁部は内傾して内へ突出する。肩部に張りはなく、胴部から直線的にすばまり、底部に至る。施釉は内外面に薄く鉄泥が施される。底部は欠損。

京焼には香炉（454）がある。型作りで四方入隅に成形されたものである。高台は削り込みで上げ底。施釉は白化粧を施したのち透明釉をかけ、上絵で松と竹の葉を緑で描くが枝木は色が不明。筆致は繊細な印象を受ける。

唐津には碗（453）がある。腰の張りの強い丸碗。高台は高く内側は曲線的に削り込まれる。いわゆる呉器手風の碗であるが上半部は欠損している。

伊万里には碗（455・456）、皿（457）、猪口（458）、壺（459）がある。455は小振りな碗で、外面に沢瀉文が描かれる。456は梅樹文碗。薄手で、高台がやや高い。猪口は帯状文に型紙摺りで桜を散らし巡らす。腰から外上方に直線的に開く。皿は口縁部に輪花を施すが、非常に粗雑である。見込みにはコンニャク印判で菊文を施したのち、花の輪郭を上書きしている。高台内、外面体部には松葉を描く。壺は網状文の小型の短頸壺。内面

突起があるので一木ではなく、2つの部品を中央で結合すると考えられる。棟は緩やかな弧をなし、断面は薄い。歯は全て欠落するが、細かく、29本以上を挽き出す。側面は歯の部分まで黒色の漆を塗り、金蒔絵で松や花木を描く。歯の溝に漆が付着していることから、歯を加工してから漆を塗ったことがわかる。付札（木222）は上部が欠損する。細長い薄い板状で、先端が尖る。両面に人名などの墨書がある。板状木製品（木221）はほぼ正方形の厚めの板の四隅を小さく切り落とす。ほぼ中央に円形の穿孔がある。片面には墨書がある。用途は不明である。

土壌1372出土遺物（図版38・39・63、図42、表7・8）土壌1372からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、瓦、土製品、木製品などが出土している。出土土師の総破片数は672片あり、その内訳は土師器29.9%、瓦器0.4%、焼締陶器9.1%、国産施釉陶磁器60.6%である。そのうち国産施釉陶磁器は京焼18.4%、瀬戸・美濃5.0%、唐津9.3%、伊万里67.3%となる。出土土師は江戸時代中期（17世紀末～18世紀前半）に属する。

土師器には粗製小皿（460～465）、丸底小皿（466～470）、圏線が巡る大皿（471～475）、小型壺（478）、焙烙（476・477）がある。粗製皿は口径5.1～5.7cm、器高1.2～1.3cm。丸底小皿は口径8.3～8.9cm、器高1.5～1.7cm。圏線が巡る大皿は口径10.2～10.6cm、器高1.8～2.1cm。圏線が巡る大皿は口縁部が直線的なものと、内弯気味なものがある。475は口ク口成形の大皿である。内面底部に圏線が加飾される。外面底部にはヘラ切り痕跡が残る。焙烙には口縁部が直に立ち上がり丸く納まるものと、屈曲する口縁部を有するものがある。いずれも台型成形で、476は口縁部を付け足される。小型壺は球形を呈し、口縁部は内傾する。

焼締陶器には灯明受皿（481）、播鉢（482・483）がある。灯明受皿は備前。胎土は赤褐色で堅緻、丁寧に口ク口成形されたもので口縁部、受部とも端整。内面には薄く鉄泥が施される。播鉢482は信楽。断面方形の口縁部がわずかに内傾す

表7 1区土壌1372土師器量分布

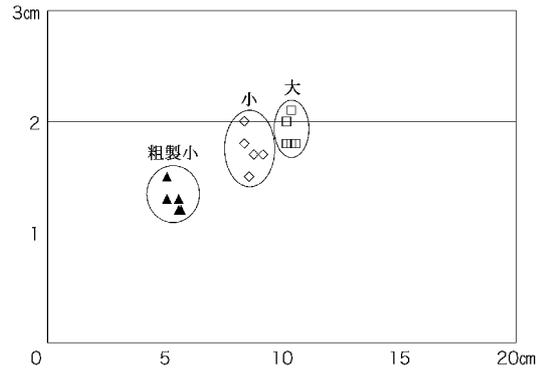


表8 1区土壌1372出土土師比率

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	141	71.1%	29.9%	
	鍋・釜	41	20.4%		
	炉・火鉢	8	4.0%		
	他・不明	11	5.5%		
	小計	201	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	3	100.0%	0.4%	
	鉢	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	3	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿	5	25.0%	5.0%
		鉢・向付	2	10.0%	
		壺・瓶	2	10.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	11	55.0%	
		小計	20	100.0%	
	唐津	碗・皿	22	57.9%	9.3%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	2	5.3%	
		盤・大皿	14	36.8%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	38	100.0%		
	伊万里	碗・皿	248	90.5%	67.3%
		鉢・大皿	5	1.8%	
壺・瓶		8	2.9%		
他・不明		13	4.8%		
小計	274	100.0%			
京焼・他	碗・皿	65	86.7%	18.4%	
	鉢・大皿	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	10	13.3%		
小計	75	100.0%			
国産施釉陶磁器計		407	100.0%	60.6%	
焼締陶器	甕	18	29.5%	9.1%	
	壺	18	29.5%		
	播鉢	5	8.2%		
	盤・大皿	0	0.0%		
	他・不明	20	32.8%		
小計	61	100.0%			
輸入陶磁器	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
総数		672	100.0%		

る。口縁部から内面には鉄泥が施される。摺目は8本1単位。483は肥厚する縁帯を有する備前と推定される摺鉢。緩く大きな片口をもつ。摺目は10本1単位である。

京焼には蓋(489)皿(488)土鍋(490)がある。蓋は鉄釉と灰釉の掛け分け。皿は型作りの灰釉菊皿。土鍋は紐状の把手が2方に付けられた鉄釉土鍋。

信楽には鉢(492・493)の大小がある。それぞれ灰釉、白濁釉が施される。火入などに用いたものか。

瀬戸・美濃には型紙摺りの鉢(491)がある。口縁部が内に折り返され蓋の付くものか。桜が描かれる。494は水甕である。白濁釉を底部以外に施す。外面全体には大きく捻りを加えた襷状の装飾を付ける。新しい特徴をもつ。

唐津には鉢(486・487)椀(484・485)がある。刷毛目、三島手、銅緑釉などに限られる。486は刷毛目の片口鉢。内外面に白化粧で波状文を描き、後に灰釉が施される。487は内面の印花文に白泥を象嵌した。いわゆる三島手の大型鉢。見込みには8箇所大きな砂目が残る。底部は幅広で高い高台を有する。484は京焼風肥前陶器椀。内外面に灰釉が施され、内面には錆絵で簡略化した楼閣山水文が描かれるが粗雑である。丁寧に削り出された高台内には「清水」が刻印される。485は刷毛目椀。見込みは釉ハギされ、高台置付けは露胎で砂目が3箇所に残る。

伊万里には椀(496～501)猪口(495・502)壺(503)香合(504・505)などがある。薄手の椀が主体となる。口径9.7～10.0cm、器高4.9～5.8cm。496・498は丸椀で高台は低い。菊文、四方禪に若松文を描く。501は比較的高台は高い。外面体部にはコンニャク印判と手描きで草花文を描き、高台裏は簡略化した「太明年制」と記される。497は二重網目文。499・500は比較的に器壁が厚く、499は円形窓にコンニャク印判と手描きで松・竹を描く。500は散らした唐草に花をコン描き、高台裏二重方形内に渦福を記される。猪口には器高が低く内弯するもので、草花文が描かれる(495)ラッパ状に開く体部で、コンニャク印判で花文を描く(502)がある。香合は蓋と身のセット。型打成形でいずれも外面に幾何学文が陽刻され、呉須でワンポイント的に色を添える。壺は油壺である。下方に膨らみをもつ胴部には草文が描かれる。口縁部はラッパ状に開く。

伊万里白磁には輪花皿(506)紅皿(507)猪口(508)椀(509・510)がある。輪花皿は長円形の皿であるが作りは粗雑。紅皿も外面は釉が粗雑に掛けられる。猪口は輪花が施され丁寧な成形で底部は上げ底の輪高台。椀は大小あり、510は薄造りである。

伊万里色絵椀(511)は腰が強く張り体部は直線的で深い。外面口縁部下に赤色で条線が巡るが、体部の円形状の文様色は剥離して不明である。

輸入陶磁器には青花の小盃(512)がある。腰は張りを持ち外反する口縁部を有する。腰部に放射状にケズリ痕跡が釉下に残る。器壁は薄く、外面絵付けの草花文が内から透けて見える優品。

土製品には、ままごと道具の器台(479)扁平な球体の土鈴(480)がある。

木製品には漆器、曲物、柄、桶、櫛、楔形木製品、棒状木製品、板状木製品、加工痕のある部材、焼材などがある。

漆器には椀、板状木製品がある。漆器椀（木122）は丸椀で一部が欠損する。高台は高い輪高台で一部が欠損する。塗りは内面は赤色、外面は褐色に近い黒色で、体部外面に銀蒔絵で文様を描く。絵柄は不明である。板状木製品は2点ある。1点は長方形のやや厚めの板の両面に黒漆を塗る。もう1点は方形の薄い板の両面に透漆を塗る。

曲物は小型品で破損するが、直径約10.5cmに復元できる。柄が出土していることから柄杓の可能性はある。柄の長さは約45cmである。桶は側板の一部のみである。櫛（木19）は横櫛の破片である。棟は緩やかな弧をなし、断面は厚めである。歯は粗く、27本以上を挽き出す。表面は平坦に仕上げ、彫刻や塗装の痕跡はない。楔形木製品は一端を尖らせる方柱形で、大小さまざまである。実際に楔として使用したかは不明である。棒状木製品には断面長方形のものなどがあるが、用途は不明である。板状木製品（木18）は平面形が長方形のもの、細長いもの、面取りが顕著なものなどさまざまな形態のものがあるが、いずれも用途は不明である。木18は長方形の厚い板の一方の小口側を方形に欠き込み、反対側の隅を丸く面取りする。一方の板面に長軸と直交する方向に二条の溝を平行に彫り、3箇所ずつ穿孔する。用途は不明である。加工痕のある部材には敷居の可能性のあるものや端材がある。

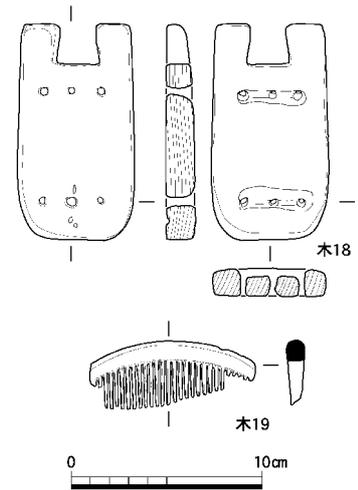


図42 1区土壙1372出土木製品

土壙1313出土遺物（図版40、表9・10） 土壙1313からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器、土製品、木製品などが出土している。出土土器の総破片数は367片あり、その内訳は土師器40.6%、瓦器0.5%、焼締陶器16.1%、国産施釉陶磁器41.4%、輸入陶磁器1.4%である。そのうち国産施釉陶磁器は信楽0.7%、瀬戸・美濃7.2%、唐津36.8%、伊万里55.3%となる。破片数は伊万里が過半数を占め、唐津は銅緑釉椀・皿と京焼風椀が多くなる傾向を示す。出土土器は江戸時代中期（17世紀末～18世紀初頭）に属する。

土師器には粗製小皿（527・528）、丸底小皿（529）、圏線が巡る大皿（530～535）、焙烙（536）がある。粗製小皿は口径5.2～5.6cm、器高1.1～1.3cm。丸底小皿は口径8.6cm、器高1.8cm。圏線が巡る大皿は口径10.4～11.1cm。圏線が巡る大皿は器壁の厚いものが主体となる。焙烙は台型成形されたもので、器壁が厚く、断面方形の屈曲した口縁部が付く。

焼締陶器には信楽の擂鉢（538～540）がある。断面方形の口縁部を有するもので、538は外面に凸帯が巡る。擂目9本1単位。540は口縁部が折り返され断面三角形の縁帯となる。胎土は砂粒を多く含み、内面降灰が溶け緑灰色の自然釉が付く。擂目6本1単位。

信楽には鉢（553）がある。白濁した灰釉が口縁部内面から底部外面まで施釉される。火入などに使用された可能性がある。

唐津には京焼風陶器椀（541～545）、刷毛目鉢（548～550）、銅緑釉椀（546）、銅緑釉皿（547）、刷毛目甕（551）、刷毛目壺（552）などがある。京焼風肥前陶器椀は腰に強く張りを持つ

表9 1区土壌1313土師器法量分布

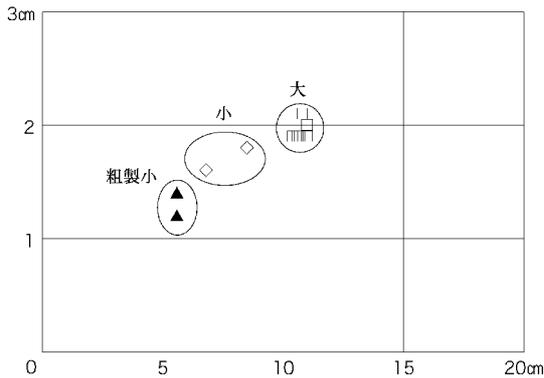


表10 1区土壌1313出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	117	78.5%	40.6%	
	鍋・釜	19	12.8%		
	炉・火鉢	13	8.7%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	149	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	0	0.0%	0.5%	
	釜	2	100.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	2	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿	10	90.9%	7.2%
		鉢・向付	1	9.1%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	11	100.0%	
	唐津	碗・皿	47	84.0%	36.8%
		鉢・向付	1	1.8%	
		壺・瓶	4	7.1%	
		盤・大皿	4	7.1%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	56	100.0%	
伊万里	碗・皿	79	94.0%	55.3%	
	鉢・大皿	0	0.0%		
	壺・瓶	5	6.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	84	100.0%		
京焼・他	碗・皿	0	0.0%	0.7%	
	鉢・大皿	1	100.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	1	100.0%		
国産施釉陶磁器計		152	100.0%	41.4%	
焼締陶器	甕	3	5.1%	16.1%	
	壺	8	13.6%		
	播鉢	41	69.5%		
	盤・大皿	0	0%		
	他・不明	7	11.9%		
	小計	59	100.0%		
輸入陶磁器	碗・皿	5	100.0%	1.4%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	5	100.0%		
総数		366	100.0%		

て立ち上がる。いずれも錆絵で体部外面に楼閣山水文が描かれる。543は胎土も精良、成形も薄造りに仕上げられる。544には刻印に「小松吉」、545には方形の雷文が刻印される。鉢548は二彩の刷毛目大鉢。白泥で波状文を描き、上から土灰釉が掛けられる。見込みと高台置付には目跡が残る。550は藁灰釉が施された大型鉢の底部。見込みには目跡が残る。鉢549は広い底部を持ち、丸みを持って立ち上がる体部が中位で屈曲し口縁は広がる。高台は高く、焼成により橙色に発色している。灰白色の精良な胎土には淡黄灰色の釉が施される。546は銅緑釉小碗である。鉄釉を塗られた上に銅緑釉を施す。削り出しの高台は露胎。547は同じく銅緑釉皿。内面は灰釉の上に銅緑釉が施され、見込みは蛇の目釉ハギされる。外面は腰部まで雑に灰釉が施される。いずれも内野山産の可能性もある。551は刷毛目の甕口縁部である。白泥の刷毛目で波状文を描き、内外面に銅緑釉を施す。552は刷毛目の壺上部である。刷毛目に銅緑釉を施す。

伊万里には皿（554）、碗（555～558）がある。皿は見込みに扇が描かれ、釉は透明感が無く釉垂れがある。555は全体に薄手の小碗である。文様は絵付部が一部分のために不明。556は器壁が全体に厚く、体部外面に一重網目文が描かれる。557は556に比べ体部は薄手である。腰部に張りがあり、直線的に立ち上がり口縁部に至る。草花文・唐草文が散らして描かれ、反対側にも草花が点描される。558は胎土は軟質気味の大振りな碗。

体部は緩やかに内弯し立ち上がる。外面には梅文が描かれ、器全体に細かな貫入がみられる。碗はいずれも高台置付には離砂が付着する。

土製品には土鈴（537）がある。灰白色の精良な土で作られたもので、頂部に紐を通す孔が穿たれる。

木製品には漆器、桶がある。漆器には碗、方形容器がある。碗の塗りは内面が赤色、外面が黒色で、体部外面に石黄・赤色の漆で丸に楓のような三つ葉の紋を描く。方形容器は板状の破片で

片面に黒色の漆を塗る。桶は底板の破片である。

土壌803出土遺物（図版84、図43、表11） 溝1660の最上層に相当する土壌803からは、同時期の京都市街地中心部から出土する土師器皿とは異なる特徴を持った皿（4～11）が出土している。生産地は未詳で複数である可能性も考えられるので、京都市街地中心部から出土する土師器皿と区別するため、ここでは「X群土師器皿」と仮称する。土壌803出土のX群土師器皿はいずれも胎土

の精良なもので、胎色は黄色がかった色調である。焼成も良好で硬質な仕上がりとなる。口径法量から小皿（4～9）、大皿（10・11）の2種類に分類できる。小皿は口径8.7～9.6cm、器高1.9～2.1cm。大皿は口径12.2～12.3cm、器高2.1～2.3cm。いずれも器壁はやや薄手で、大皿は内面に圈線が巡らない。小皿・大皿ともに口縁部先端が尖り気味なものがある。出土土器は江戸時代前期（17世紀前半）に属する。

井戸1189出土遺物（図版39） 井戸1189からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などが出土している。土器類はごく少量であった。国産施釉陶器は瀬戸・美濃と唐津に分類できる。出土土器は江戸時代前期（17世紀前半）に属する。

土師器には焙烙（513）がある。体部は丸みを持ち内弯しながら屈曲する口縁部の一部である。

美濃には長石釉皿（515）、長石釉鉄絵皿（516・517）がある。長石釉皿は腰部から丸みを持って立ち上がるもので全面に釉が施される。体部は口縁目が明確で、右回転のケズリ痕跡が顕著に残る。長石釉鉄絵皿はいずれも腰部から丸みを持って立ち上がる。516は見込みに鉄絵で蘭竹を描く。517は体部内面の二重圈線内に唐草・紅葉、見込みにも文様を描く。いずれも削り出し高台。これらは美濃の連房式登窯で生産されたものと思われる<sup>7)</sup>。

唐津には皿（514）、鉢（518）がある。皿は灰釉が施される。底部が削り出し高台で、高台内中央は兜巾状となる。鉢は丸く立ち上がり、玉縁状の口縁部を有するもので灰釉が施される。

土壌2120出土遺物（図版41・42・85、表12） 土壌2120からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、木製品、石製品などが出土している。出土土器の総破片数は202片である。その内訳は土師器41.1%、瓦器8.9%、焼締陶器18.3%、国産施釉陶器28.7%、輸入陶磁器3.0%である。そのうち国産施釉陶器は美濃27.6%、唐津72.4%となる。伊万里は全く含まれない。唐津が大半を占め、美濃を圧倒する傾向にある。唐津は絵唐津1片のみで他は藁灰釉、灰釉の青唐津椀・皿が大半である。美濃は大窯期の生産品と推定できるものも多い。出土土器は江戸時代前

表11 1区土壌803土師器法量分布

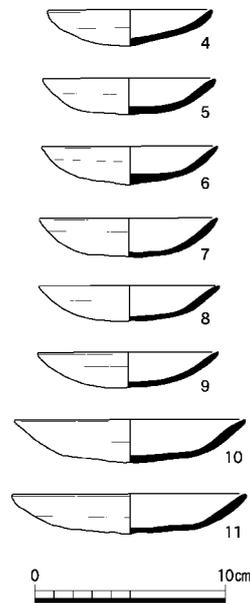
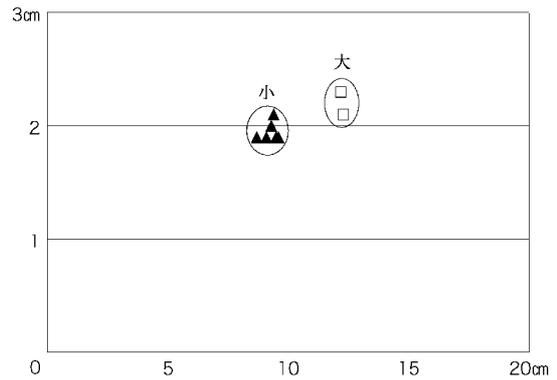


図43 1区土壌803出土土器

表12 1区土壌2120出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	80	96.4%	41.1%	
	鍋・釜	3	3.6%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	83	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	12	66.7%	8.9%	
	釜	3	16.7%		
	他・不明	3	16.7%		
	小計	18	100.0%		
	国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿		14
鉢・向付			2	12.5%	
壺・瓶			0	0.0%	
盤・大皿			0	0.0%	
他・不明			0	0.0%	
小計			16	100.0%	
唐津		碗・皿	30	71.4%	72.4%
		鉢・向付	2	4.8%	
		壺・瓶	1	2.4%	
		盤・大皿	9	21.4%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	42	100.0%	
伊万里		碗・皿	0	-	0.0%
		鉢・大皿	0	-	
		壺・瓶	0	-	
		他・不明	0	-	
	小計	0	-		
	京焼・他	碗・皿	0	-	
鉢・大皿		0	-		
壺・瓶		0	-		
他・不明		0	-		
小計		0	-		
国産施釉陶磁器計		58	100.0%	28.7%	
焼締陶器	甕	8	21.6%	18.3%	
	壺	12	32.4%		
	搦鉢	16	43.2%		
	盤・大皿	0	0.0%		
	他・不明	1	2.7%		
	小計	37	100.0%		
輸入陶磁器	碗・皿	5	83.3%	3.0%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	1	16.7%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	6	100.0%		
総数		202		100.0%	

期（17世紀前半）に属する。

土師器は丸底小皿（559）、圏線が巡る中皿・大皿（560・561）、X群土師器皿の大皿（562）がある。丸底小皿は口径8.8cm、器高1.8cm。圏線が巡る中皿・大皿は口径11.0～11.8cm、器高1.9～2.2cm前後。562は口径12.0cm、器高2.0cm。561は内外面に煤が多量に付着し灯明皿に転用したもののか。560は典型的な京都市街地中心部に多い皿で内面にナデ上げ痕跡が顕著。562は土壌803出土のものと同通する特徴をもち圏線が無い。内外面には煤が付着する。

焼締陶器には搦鉢（565～569）、壺（563・564）、甕（570）などがある。565は丹波で、器壁は均一で口縁部は丸くおさめる。外面に指押え痕跡が残る。搦目は1本1単位。備前には566・567があり、口縁上端部が上方に直立し、縁帯を有する。566は口縁部が肥厚し外端面に凹線が2本巡るが、567は直立する口縁部で、凹線は見られない古い特徴を有する。いずれも搦目は小片のため不明である。唐津の可能性のある搦鉢には568・569がある。568は削り出しの上げ底の底部から、やや丸みを持って立ち上がる。内面には搦

目が9本1単位で放射状に9方向に施し、斜めにも入る。高台外際の4箇所に目跡が残る。569は体部は薄手で口縁部は幅広く折り返される。直立気味に立ち上がる口縁下位にタタキ目を残す。搦目は7本1単位。壺は唐津の可能性もある。施釉陶器ではないが扁平な玉縁状の口縁部を有し、体部は薄手に作られる。口縁上端部に重ね痕跡が残る。直接接合しないが、563・564は同一個体と考える。570は信楽の甕で古い特徴を有する。折り曲げられた口縁部が縁帯となる。体色は橙色で長石、砂粒を多く含む。

美濃には灰釉折縁皿（587・588）、灰釉皿（589）、志野向付（591）、天目茶碗（592）、鉄釉碗（590）などがある。587は見込みは内禿、底部はケズリ込み高台。588は内面体部にソギを施すもの。底部は削り出し高台。いずれも内外面に輪トチ痕が残る。589は全体に灰釉が失透している。外面腰部以下は露胎。見込みには目跡が3箇所に残る。底部は貼り付け高台。591は口縁部が屈曲し、直立して立ち上がるもの。鉄絵で文様を描き長石釉を施す。底部には半環足が付く。連房式窯生産のものか。592は器高がやや低い天目茶碗。透明感のある鉄釉が施される。590は胎土は橙色の軟質。高台内と畳付を除き鉄釉を施される鉄釉丸碗の底部。見込みの目跡上に施釉されており、2次焼成されたものである。

唐津には皿（571～573・575～580・584）、絵唐津皿（574）、碗（581）、向付（582・583）、

鉢（585・586）がある。緑灰色釉を施す青唐津の皿には、底部から直線的に開く小皿（571）、腰部に張りをもつもの（576）、緩やかなもの（577）、直線的に開き口縁部が屈曲するもの（584）がある。584は碁笥底高台。畳付に目跡が残り、見込みにも4箇所胎土目が残る。口径13.6cm、器高4.1cm。575・579は美濃を模倣して作られたと推定される長石釉皿である。成形技法は唐津で、胎土は美濃の胎土に似る。いずれも内面に胎土目跡が残る。578は灰釉皿で底部は厚い。580は失透性の強い藁灰釉が外面に施された、いわゆる斑唐津皿。581は青唐津椀。見込みに口口目で窪ませた茶溜まりをもつ。底部は竹節高台。574は腰部から屈曲する皿の底部。見込みに折れ松葉文を描く。高台内は兜巾状を呈する。向付は口縁部にヘラ押えで輪花を施される。582は小型で輪花が細かく施される。583は大型で輪花が間隔広く施される。いずれも薄く灰釉が施される。585は大きく開く青唐津の大鉢である。上げ底高台で灰釉が施され、腰部以下は露胎となる。586は体部中位でわずかに綾を成す。高台は低く、幅が広い。灰釉が施され、腰部以下は露胎となる。鉢は他のものより新しい特徴を有する。

輸入陶磁器には青花の皿（595・596）、椀（593・594）がある。596は大皿の口縁部片。595は大皿の底部片で高台には離砂が多量に付着する。皿はいずれも下書きののち、呉須で上書きされている。漳州窯系の可能性がある。593は輪花椀。594は口縁部が小さな玉縁状を呈する椀。内面口縁部に方形状文が巡る。

木製品には漆器、箸、下駄などがある。

漆器には椀がある。塗りは内外面とも黒色である。

箸はまとめて出土した。長軸方向に加工し、端面は切り落とす。下駄はいずれも破片である。鉄釘の付いたものがある。

土壌1779出土遺物（図44） 土壌1779からは土師器、焼締陶器などが出土した。出土土器は桃山時代から江戸時代初頭（16世紀末～17世紀初頭）に属する。

土師器には羽釜（12）、焙烙（13）がある。12は口縁部は屈曲し、球体の体部中位には鏝を有する。外面の鏝以下には煤の付着が顕著である。13は屈曲する口縁部を有する焙烙。内面口縁部以下には板状工具により密に刷毛目が施される。外面には煤の付着が顕著である。

土壌1133出土遺物（図版39・86、図45） 土壌1133からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、木製品、石製品などが出土しているが、ごく少量である。出土土器は桃山時代から

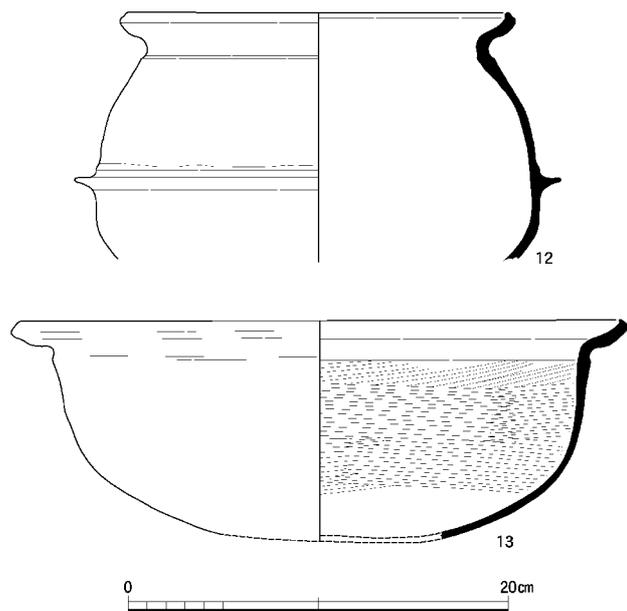


図44 1区土壌1779出土土器

江戸時代初頭（16世紀末～17世紀初頭）に属する。

土師器には皿（519）、羽釜（520）がある。519はX群土師器皿である。圏線が無く、胎土は灰黄色で精良、焼成も良好で堅緻な胎土である。成形・調整は土壌803出土のものより丁寧に作られる。底部には成形時の板状痕跡が残存する。口径10.2cm、器高1.8cm。羽釜は体部に鏝を有するものであろう。口縁部はくの字状に屈曲し、上端はつまみ上げられる。口縁部には煤の付着が顕著である。

焼締陶器には備前の播鉢（522）がある。口縁部上端は鋭く上方につまみあげられ断面三角形を呈する。室町時代に遡る古い特徴を有する。

輸入陶磁器には青磁（523・524）、白磁（525）、青花（526）などがある。523は見込みに円形状の格子が印刻された蓮弁文椀。524は腰部が張り、口縁部がわずかに外半する青磁皿。これらはいずれも龍泉窯系青磁で古い特徴を有する。525は端反の白磁皿で高台畳付以外は釉が施される。526は青花皿底部。全体の釉色は少し青みがかった白色。見込みには寂れた色調の呉須で蓮華文が描かれる。国産品とは絵付けの趣を異にする。

土製品には取瓶（521）がある。半球体を呈する体部は、熱を受け外面はひび割れて剥離する。側面には把手が付いていた痕跡が残る。内面底は比較的円滑である。

表13 1区土壌1660出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	39	84.8%	35.1%	
	鍋・釜	7	15.2%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	46	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	10	76.9%	9.9%	
	釜	2	15.4%		
	他・不明	1	7.7%		
	小計	13	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	椀・皿	30	100.0%	96.8%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	30	100.0%		
	唐津	椀・皿	1	100.0%	3.2%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	1	100.0%		
伊万里	椀・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
京焼・他	椀・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
国産施釉陶磁器計		31	100.0%	23.7%	
焼締陶器	甕	9	25.0%	27.5%	
	壺	3	8.3%		
	播鉢	24	66.7%		
	盤・大皿	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
小計	36	100.0%			
輸入陶磁器	椀・皿	5	100.0%	3.8%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	5	100.0%		
総数		131	100.0%		

瓦には丸瓦（瓦6）がある。

木製品には漆器、箸、桶、下駄、建築部材、杭、加工痕のある部材や端材などがある。

漆器には椀がある。塗りは内面が赤色で外面が黒色のもの、内外面とも赤色のもの、内外面とも赤色で高台内部が黒色のものがある。体部外面に赤色の漆で風景を描くものがある。

箸は長軸方向に加工し、端面は切り落とす。桶は側板の一部のみである。下駄は破片である。建築部材には柱・屋根板がある。

溝1660出土遺物（図版43・84、表13） 溝1660からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品などが出土している。遺物は最上層・上層・下層・最下層から出土し、下層・最下層には室町時代の土師器、瓦器、輸入青磁が数点含まれる。出土土器の総破片数は131片と、遺構規模の割には少量である。その内訳は土師器35.1%、瓦器9.9%、焼締陶器27.5%、国産施釉陶器23.7%、輸入陶磁器3.8%である。そのうち国産施釉陶器は美濃96.8%、唐津3.2%となる。唐津は1片のみで、他は美濃であ

る。美濃の中には志野はなく、大窯期の灰釉皿類が全体を占める。土壌2120より古い段階の遺物群である。出土土器は室町時代後期から江戸時代初頭（15世紀末～17世紀初頭）に属する。

土師器には丸底小皿（598・599）、圏線が巡る大皿（602・603）、X群土師器皿（600・601）、混入土師器皿（604）、焙烙（605）がある。丸底小皿は口径9.8～10.0cm、器高1.9～2.0cm。圏線が巡る大皿は口径11.3～12.8cm、器高2.3～2.6cm。X群土師器中皿・大皿は口径10.6・11.6cm、器高1.6・1.8cm。601は器高が低く外に大きく広がる。内外面に焼けと煤が付着し灯明皿に転用したものが、604は最下層より出土した。口縁部は2段ナデが施される。平安時代後期に属する。605は屈曲する口縁部を有する。内面に板状工具の刷毛目が密に施される。

焼締陶器には信楽擂鉢（606～608）がある。いずれも口縁部は外方に小さく突出し、端部は丸くおさめる。606は胎土が硬質で器表は赤褐色を呈する。擂目は6本1単位。607はやや胎土が軟質なもので、器表は黄橙色を呈する。擂目は6本1単位。608は胎土が軟質で磨滅が激しい。器表は淡橙色を呈する。

美濃には天目茶椀（609～611）、灰釉折縁皿（612～614）、灰釉丸皿（615・616）などがある。天目茶椀は609以外は底部が内反高台で、腰部、高台に鉄錆が施されその上に鉄釉を施す。611は口縁部に厚みをもち小さく外反する。胎土は明褐色で、釉は暗灰緑色に発色し釉の縮みが全体にみられるものである。灰釉折縁皿はいずれも全釉で見込み釉ハギされた内禿。612は口縁部の屈曲が大きいソギ皿で削り出し高台。高台裏に輪トチ痕が残る。613は屈曲が緩く成形、施釉とも丁寧<sup>8)</sup>に仕上げたもので、底部はケズリ込み高台。見込みに目跡、高台裏に輪トチ痕跡が残る。614は鉄釉が施され、高台際の面取りが明確。丸皿はいずれも見込みに釉溜まりが、高台裏は輪トチ痕が顕著に残る。615はケズリ込み高台、616は削り出し高台。いずれも大窯期の生産品である。

これらよりも新しい特徴をもつものには美濃の長石釉皿（618）、唐津の長石釉皿（617）がある。618は体部の口ロ口目が顕著で、口縁部は屈曲気味に直立する。内外面には厚く長石釉を施される。内外面に目跡が3箇所残る。617は体部が丸みを持って口縁部に至る。胎土は灰白色で精良。釉はやや青みを帯び、腰部まで施される。見込みの3箇所に目跡が残る。最上層から出土している。

輸入陶磁器には白磁（620・621）、青磁（619・622）、青花（623）などがある。620・623以外は下層・最下層から出土した。皿620は外反する口縁端部を切り込み輪花とする。621は畳付に親指程の窪みを施された皿の高台部。619は印刻花文を見込みに施す輪花稜皿で、古い特徴を有する。622は線描き蓮弁文の椀体部片。623は釉が濁り気味、口縁端部の内外面には圏線が薄く巡り、内面立ち上がりに凹線が巡る。白磁、青花は景德鎮系、青磁は龍泉窯系である。

木製品には漆器などがある。漆器には椀がある。塗りは内外面とも黒色である。他に鉄釘が付いた木材があり、柱の可能性もある。

溝1357出土遺物（図版44） 溝1357からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などが出土している。出土土器は室町時代後期（16世紀中頃～後半）に属する。

土師器には丸底小皿（624・625）、羽釜（626・627）、焙烙（628）がある。丸底小皿は口径9cm弱、器高2.0cm前後で、624は口縁部に端面をもつ。625は胎土が橙色のやや厚手のもので、624

より新しい特徴を有する。628は台型成形の底部に外傾する口縁部を継ぎ足す。口縁端部は上方に小さくつまみ上げる。626は下半部が欠損しているが、627同様に体部は球形を呈し、中位に鐔が付く。口縁接合部は板状工具によるオサエ。内面体部に弱い刷毛目。

629は瓦器の羽釜である。器壁は厚く、内傾する口縁部外面には3条の凹線が巡る。

焼締陶器には信楽擂鉢(630・631)がある。631は古い特徴を有する。胎土は灰白色で長石を含む軟質。口縁部は外反し、端面をもつ。外面は火を受けたか煤が付着する。内面の擂目は3本1単位である。窯跡採取遺物年代では15世紀後半～16世紀初頭に属する<sup>9)</sup>。630は内外面は大きく火を受け煤が多量に付着。擂目は5本1単位。

美濃には天目茶椀(633)、灰釉丸皿(632)がある。633は腰部から直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。高台は内反高台で鉄釉が施され、畳付には目跡が3方向に残る。632は腰に張りを持って立ち上がる。底部は貼り付け高台。いずれも大窯期の製品。

輸入陶磁器には青磁蓮弁文椀(634)がある。釉掛けにムラがあり失透して、文様が見えにくい。龍泉窯系の粗製品。

溝2006出土遺物(図版44) 溝2006からは土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土しているが少量である。出土土器は室町時代後期(15世紀末～16世紀前半)に属する。

輸入陶磁器(635・636)はともに龍泉窯の器壁の厚い青磁椀。635は胎土は橙色で軟質気味。釉はオリーブ褐色に発色する。636は見込みに印刻花文が施されるもの。いずれも高台内は蛇の目釉八ギされ、636は鉄錆が施される。

井戸2021出土遺物(図版44・84) 井戸2021からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、石製品、ガラス製品などが出土している。出土土器は室町時代後期(16世紀中頃～後半)に属する。

土師器は大皿(637)、羽釜(639・640)がある。皿は口径17.0cm前後の大皿で、口縁内面に端面をもつ。内外面に煤が付着する。639は口縁部が屈曲し、球形の体部中位には鐔を有する。640は下部に重心をもつ球形。内傾した口縁部は肥厚し、端面をもつ。口縁直下には稜を巡らす。鐔以下は煤が多量に付着している。

瓦器には羽釜(638)、風炉(641)がある。638上部は欠損しているが640同様に口縁が内傾する。口縁最下部に凹線が1条巡っており、上位にも巡るものと推定される。641は火鉢あるいは風炉と推定するもの。ハの字に大きく開く高台には半円形状の透かしが施される。腰部が残存するだけで、体部は欠損し不明であるが、大きく開いて立ち上がるものか。

焼締陶器には備前の擂鉢(642)、信楽の擂鉢(643)がある。642の胎土は暗赤褐色で非常に堅緻、口縁部は直立し縁帯となるが、凹線は見られない。内面には4本1単位の擂目が確認できる。643は古い特徴を有する。胎土は黄橙色で軟質。口縁部は強く外反し、口縁上端は平坦面をなす。内面はよく使用されたようで、器表は平滑である。擂目は4本1単位で広く間隔を空ける。窯跡採取遺物年代では15世紀後半～16世紀初頭に属する<sup>10)</sup>。

瀬戸には鉄釉香炉(644)がある。器高は低く、体部は底部から外上方に開き、口縁部は外反す

る。口縁上端は平坦である。底部際には三足の小さな足が付く。15世紀後半頃に属する。

輸入陶磁器は、いずれも青花である。645は碁笥底の皿。見込みに花文を描き、高台際に蓮弁が描かれる。646は景德鎮系。高台が細長く内傾気味で上げ底。見込みに人物文を描き、高台裏は方形内いっばいに篆書で文字を記す。

輸入ガラス製品には簪（石32）がある。体色は淡い透明感のある青色。扁平な楕円形で側部には凹線が施される。比重は2.52gのアルカリガラス製。

木製品には漆器椀がある。塗りは内外面とも赤色で、高台内部は黒色である。

### （3）その他の遺構出土遺物

土壌920出土遺物（図版54） 土製品の埴塼（886）が出土した。口径15.1cm、器高28.4cm。形態・成形も土壌711出土の885と同様である。胴部中位の上方には径2.5cm前後の孔が穿たれ貫通するが、反対側の窪みはみられない。

土壌122出土遺物 木製品の漆器が出土した。漆器には椀がある。塗りは内外面とも黒色のもの、内外面とも茶色のものがある。

土壌747A出土遺物（図版94、図40） 底部南寄りに据え付けた部材に簀子（木8）がある。2枚の長方形の板を方柱形の2つの脚部で結合する。板は表面を平坦に仕上げるが、調整は粗雑である。脚部はあり合わせの板を割って方柱形にしており、表面は調整しない。1つには判読不明の墨書がある。板と脚部は鉄釘で固定する。

土壌613A出土遺物（図版88、図40） 埋土から加工材（木9）が出土した。一部が欠損する。長方形の一枚板で、表面の調整は粗い。中央からはずれた位置に方形に穿孔し、片面に「口」字形の鉄製金具をあてる。金具は一部が欠損するが、四隅を鉄釘で固定する。用途は不明である。

第1層出土遺物（図版52） 遺構から出土したものではないが、墓域の第1層掘り下げの出土品に土製品の焼塩壺（809）がある。体部は緩やかな丸みを持ち、口縁部はわずかに外反する。粘土紐巻き上げ成形。体部上位には二重方形内に「天下一堺ミナト藤左衛門」銘が刻印される。また2箇所には縦に墨書が観られる。17世紀中頃に属する。

第2層出土遺物（図版42・82、図45） 遺構からではないが、包含層から出土した特記遺物として報告するものに輸入陶磁器盤（597）がある。白化粧した後、瑠璃釉を掛け、白釉で花文を点描・線描で描く。いわゆる餅花手である。<sup>11)</sup>口径39.3cm前後、器高9.5cm。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。見込みの3箇所<sup>11)</sup>に菊文を描き、周縁全体と口縁部に樹花文を描く。東京都新宿区内藤町遺跡で類似品が出土している。漳州窯系。江戸時代前期（17世紀前半）に属する。

その他に家紋瓦（瓦4）がある。中央の花は7個、両脇の花は5個の桐文である。圏線はなく瓦当面いっばいに桐文を配している。

その他以下の遺構から瓦が出土している。

土壌886（図版83、図45） 重弧文軒平瓦（瓦1） 三重弧文を配する。弧の断面は台形を呈する。顎は直線顎である。平瓦凹面に布目が残る。中央部にはナデの痕跡がある。文様・技法の特

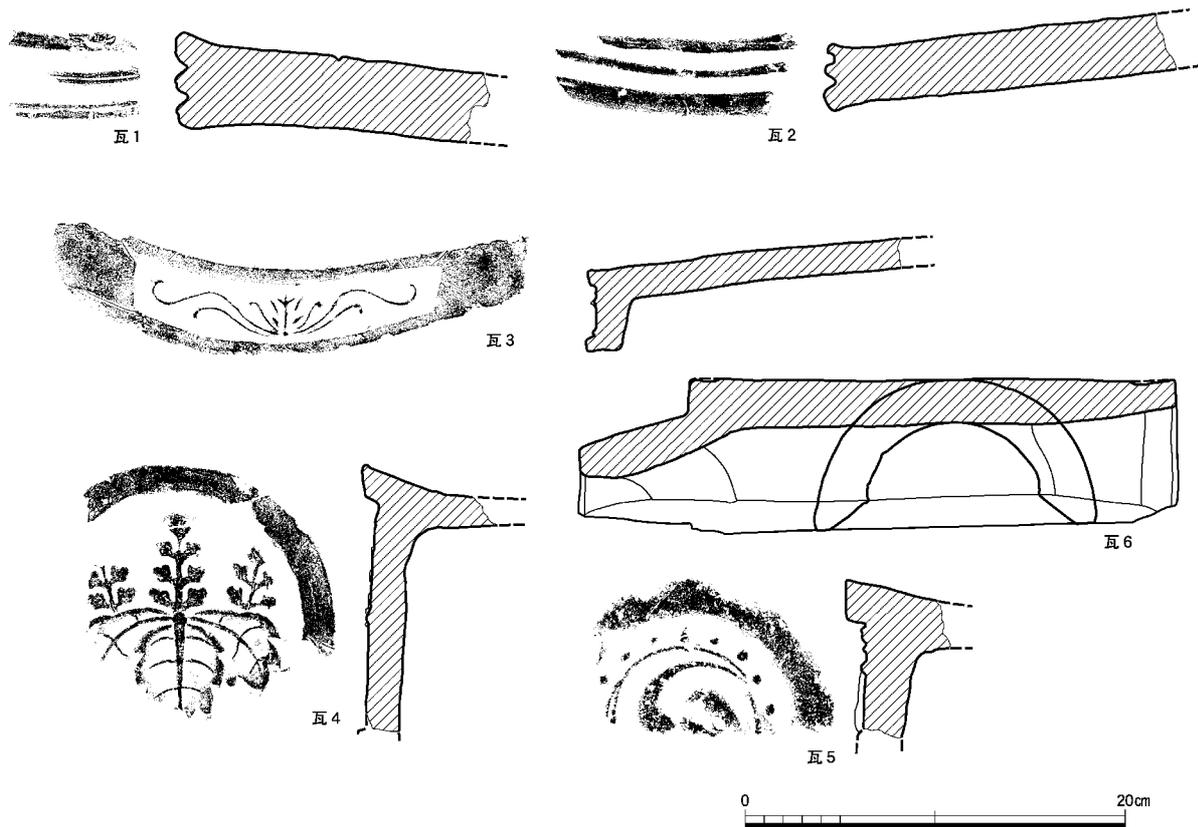


図45 1区出土瓦

徴から飛鳥・白鳳時代に属する。

土壌973（図版83） 金箔瓦（瓦22） 瓦当面に金箔が明瞭に残る。小片のため詳細は不明である。

土壌1428（図版83） 金箔瓦（瓦20） 瓦当面前外周にわずかに金箔が残る。蓮子が3個残る。

土壌1690（図版83、図45） 重弧文軒平瓦（瓦2） 三重弧文を配する。弧の断面は台形を呈する。顎は直線顎である。平瓦凹面に布目が残る。平瓦凸面はヨコ方向のナデ。顎下端はタテ方向にヘラナデする。文様・技法の特徴から飛鳥・白鳳時代に属する。

井戸1021（図版83、図45） 均整唐草文軒平瓦（瓦3） 瓦当面に離砂の痕跡が顕著である。唐草は端部はやや大きめに丸くなる。平瓦凹凸面はヨコ方向のナデ調整を施す。

柱穴1924（図45） 三巴文軒丸瓦（瓦5） 頭はどこにも接しない。尾は隣の巴に接している。やや小粒の蓮子文がめぐる。

#### （4）墓地出土遺物（図版61～75・77・80～87、図46～62）

6期 幕末から昭和（19世紀中葉～20世紀前葉）の墓地出土遺物

埋葬321（図版87、図47） 土師質壺（34）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。無文の壺で、粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には離砂が認められる。外面はヘラナデ調整、内面は指ナデ調整である。口縁部は玉縁状を呈する。蓋（33）はつまみが付き、口

縁部は肥厚した三角形状。天井部周縁には離砂が認められる。

埋葬335（図47） 土師質壺（36）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。無文の壺で、粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には離砂が認められる。外面はヘラナデ調整、底部との接合部分はカキトリを施す。内面は指ナデ調整である。口縁部は玉縁状を呈する。蓋（35）は、中央部が盛り上がるつまみが付く。口縁部は短く外方に開き、端部は丸くおさめる。天井部周縁には離砂がわずかに付着する。

埋葬345（図版88、図46） 土師質壺（20）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には離砂が認められる。外面は布状のものでナデ調整、内面は指ナデ調整を施す。底部からの立上り部分に指圧痕が残る。内面の調整は粗い。口縁部は短く、丸みをもった方形状を呈する。口縁部直下には稜を有する。体部に直線が1本巡るが、途中から線は浅くなり一部消えている。蓋（19）は天井部中央が欠損のためつまみは不明。口縁端部は肥厚する。平坦な天井部には雲母が付着する。

埋葬392（図版87、図47） 土師質壺（30）が出土している。小型壺で、粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。粘土板と粘土紐の接合部分の調整が粗く、粘土板を上につまみ上げた痕跡が明瞭に残る。口縁部は玉縁状を呈する。蓋（29）はつまみは無く、上面に離砂の痕跡が顕著である。外面外周には、ナデの痕跡が明瞭に残る。

埋葬393（図版87） 土師質壺（986）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。無文の壺で、粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には離砂が認められる。外面はヘラナデ、内面は指ナデ調整を施す。底部との接合部分には、カキトリを施す。蓋は平坦な天井部につまみが付き、離砂が多量に付着する。天井部以外は欠損。

埋葬394（図46） 土師質壺（18）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。体部に4本1単位の波状文がつく。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には、離砂が認められる。外面はヘラナデ、内面は指ナデ調整を施す。底部との接合部分にはカキトリを施す。口縁部は玉縁状を呈する。

埋葬517（図版52） 焼締陶器の信楽耳付壺（807）が出土している。土器棺に使用する。胎土は長珪石を多量に含み灰色で粗い。肩部に稜が巡り、直下に耳が2箇所以上貼り付けられる。胴部は膨らみをもたず、中位からすばまり、平底の底部に至る。内外面には3条の接合成形痕跡、降灰が顕著に残る。灰釉が底部際まで施され、内面にも釉が流れ落ちる。底部は露胎。

埋葬567（図46） 土師質壺（16）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。体部に4本1単位の波状文がつく。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には離砂が認められる。外面はヘラナデ、内面は指ナデ調整を施す。底部との接合部分には、カキトリを施す。口縁部は玉縁状を呈する。蓋は（15）つまみが付き、口縁部は肥厚した三角形状。

5期 江戸時代後期（19世紀前葉～中葉）の墓地出土遺物

埋葬182（図版53、図54） 土器、木製品が出土している。土器には磁器の色絵猪口（828）、磁器の色絵小椀（827）、施釉陶器の徳利（829）がある。猪口は高台が高く、体部は腰部から直

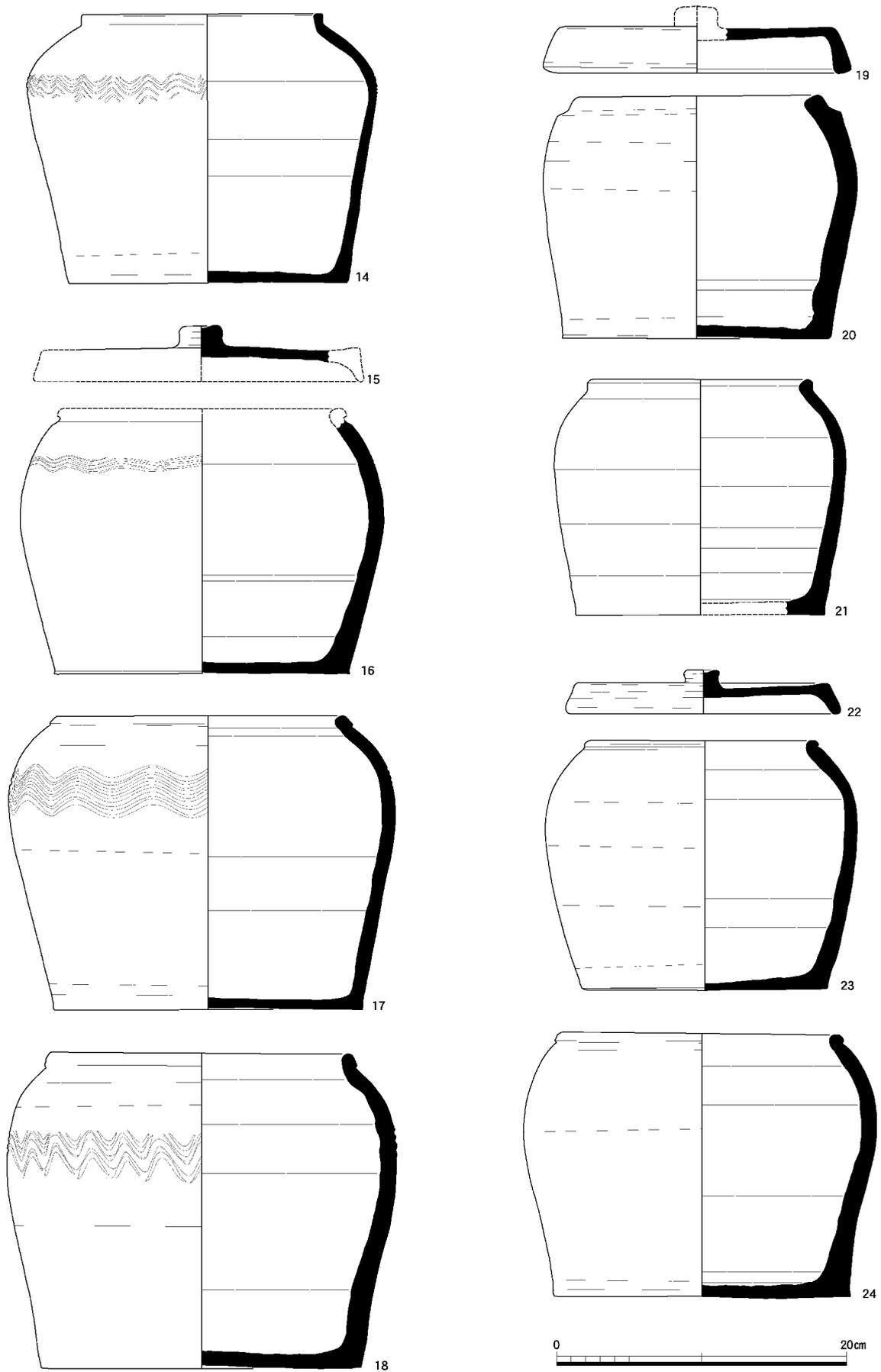


图46 1区埋葬施設出土土器棺(1)

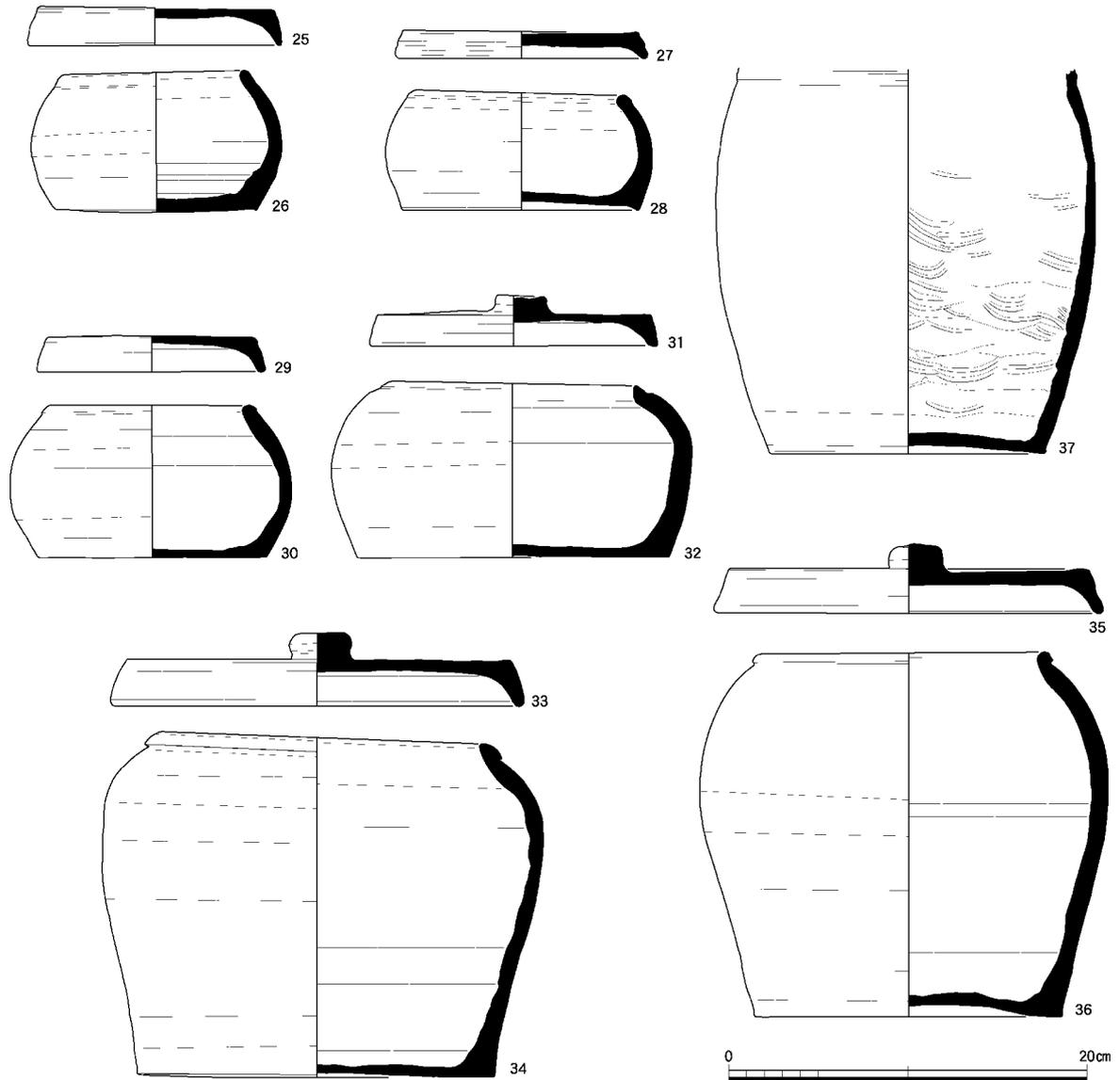


図47 1区埋葬施設出土土器棺(2)

線的に立ち上がる。外面には秋草が繊細な筆致で描かれ、高台際に渦巻き文が巡る。高台内には「宗平之造」銘が記される。小椀は体部が丸みを持ち、口縁部は外反する端反椀。非常に薄手の作りである。内面には風景が描かれ、小さな方形枠内に銘のようなものが記される。絵付け色は赤・緑を確認できる。徳利は口頸部は細く、肩部は撫で肩から体部に至る。腰部は内に屈曲して平坦な底部に至る。櫛目文が体部を巡る。白濁した灰釉が施される。いずれも産地は不明である。

木製品では数珠(木77)がある。球形・円盤形の木製の玉を用いている。材質は広葉樹 - 散孔材。球形の木製の玉は1個を採集した。小粒の球形で中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。円盤形の木製の玉は破損しているものが多く、個数は不明である。平坦な面の中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。

埋葬184(図版91、図52) 木製入歯(木64)が出土している。上顎の入歯で一部が欠損する。欠損のため不明瞭であるが、義歯8本分の凹みを作り、凹み側面には義歯を糸で固定するための

孔を穿つ。右第2小臼歯の位置に割り込み、左第2小臼歯の位置に不整形な窪みを加工し、側面には2箇所穿孔がある。右第2小臼歯と一部が痛んでいた左第2小臼歯を利用して上顎に固定したものと考えられる。表面は極めて平滑に仕上げるが、凹面中央は摩耗していることから、舌先でこすれた痕の可能性がある。また、左第1大臼歯の位置には3箇所に窪みがあり、下顎の歯が当たった痕の可能性がある。材質はツゲである。義歯は4本を採集した。すべて同種の硬質の石製である。平面形は丸みのある三角形である。前面は凸曲面で、光沢が出るまで磨く。後面は平坦で、平行線状の加工痕が残る。咬み合わせ面は平滑な平坦面になるが、加工によるものか使用痕によるものかは不明である。側面中央には固定するための糸を通す円形の孔が貫通する。

埋葬185(図版53) 染付の猪口(831)が出土している。高台は高く、体部は腰部から直線的に立ち上がり、口縁部に至る。外面には山水・家屋・棧橋が繊細な筆致で描かれる。産地不明。

埋葬186(図55) 煙管の雁首・吸口(金1)が出土している。雁首の中には羅字の一部が残存する。吸口には肩が付く。

埋葬187(図版68・92、図55) 木棺の箱棺東側底板(木161)内面・北側の下段側板(木163)外面・西側の上段側板(木162)内面に墨書がある。側板はともに文字が横向けの状態で部材として使用されていることからこれらは転用材の可能性が高い。

金属製品では煙管雁首・吸口(金2)が出土している。雁首の中には羅字の一部が残存する。吸口は非常に長い。雁首・吸口とも金が一部に残る。火皿は深めの椀形である。

埋葬190(図版53) ミニチュア土瓶(847)と柚子でんぼ(846)が出土している。ミニチュア土瓶は、把手部分が欠損している。蓋も無い。柚子でんぼは蓋付で、身と蓋の色が違う。

埋葬191(図版53・69、図52) 土器、木製品が出土している。土器には磁器の猪口(832)がある。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は直立気味。高台端部は外反する。口縁部外面には雷文を巡らせ、体部に繊細な筆致で、草花・蝶が描かれる。産地は不明である。

木製品は羽子板(木54)が1枚のみ出土した。先端が広がる板状で、柄は欠損するが、体部から少なくとも1段の割り込みを作り成形する。厚さは一定で、彫刻や絵・文字の痕跡はない。

木棺の西側の側板(木171)外面・東側の側板(木172)外面に墨書がある。ともに文字が横向けの状態で部材として使用されていることから転用材の可能性が高い。

埋葬193(図版68) 木棺の北側の上段側板(木169)外面に墨書がある。文字が斜め向けの状態で部材として使用されていることから転用材の可能性が高い。

埋葬206(図版53) 伊万里の小椀(838)、猪口(833)が出土している。小椀は体部が緩やかに立ち上がる。外面にはコンニャク印判で菊文を3方向に描く。猪口は腰に丸みをもたせて、直線的に立ち上がる。外面に幾何学文を描き、見込みの五弁花文は手描きで描かれる。

埋葬218(図版53・56、図48) 土器、土製品が出土している。土器には土師器の花塩皿(813)、鉢(815)がある。花塩皿は口縁部を指で押え襷を巡らす。内面周縁は押え痕跡が顕著。鉢は胎土は灰白色で精良。ロクロ成形されたもので、底部は糸切り底となる。

土製品には土人形(926)、泥面子(902)などがある。926は背中に子を背負う母子立像である。

中空で型合せ成形である。作り・表現ともに丁寧である。朱色の着色がわずかに残る。902は泥面子で出土したなかで最大である。胎土はにぶい橙色である。図柄は「玉」である。

埋葬222（図版55）土人形（904～920）が多量に出土している。919・920は男性立像である。中空で型合せ成形である。920は作り・表現ともに丁寧である。内部に土玉を入れて土鈴とする。雲母の付着が目立つ。914は唐人像である。中空で型合せ成形である。鬚と足先に着色が残る。作り表現ともに丁寧である。913は猿を背負う人物立像である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧で表現は細部にわたる。猿に朱色の着色がある。912は鯛捧げ人物座像である。中実で型合せ成形である。鯛は細部まで表現されているが、人物の作り・表現とも粗雑である。908は袋を抱える人物像である。中実で型合せ成形である。作り・表現ともに粗雑である。910は御内裏様像である。中実で型合せ成形である。作りは粗雑だが、表現は細部にわたる。朱色の着色がわずかに残る。907は船に乗る人物像である。中実で型合せ成形である。作りは粗雑である。909は袴を着た人物座像である。中実で型合せ成形である。作りは丁寧で表現は細部にわたる。911は頭巾を被る人物座像である。中実で型合せ成形である。作りは粗雑である。904・905は犬である。中実で手捏ね成形である。904は耳・尾は削り出し。前脚はヘラ状の工具で粘土に切れ目を入れて左右の脚を作り出している。その際に、胴部中央まで穴を開けている。905は後脚は削り出し。前脚・耳・尾は貼り付けである。尾は丸めた粘土を貼り付けて表現する。首に巻く縄も貼り付けている。906は金魚である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧である。底部から尾にかけて墨書があるが判読

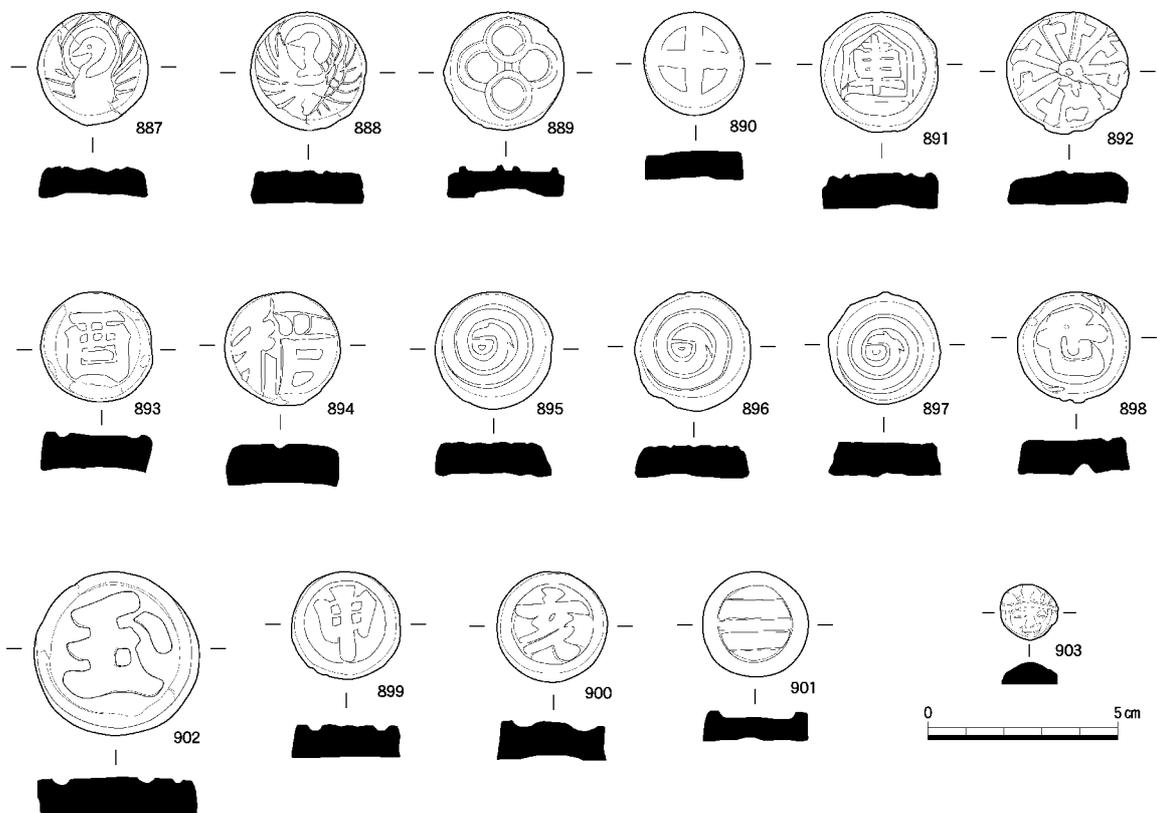


図48 1区埋葬施設出土泥面子

できない。内部に土玉を入れて土鈴とする。918は鳥である。中実で型合せ成形である。作りは粗雑である。917は御堂である。中実で型合せ成形である。作りは粗雑である。芥子面（915・916）は髭を結った男性の顔で、型作りである。裏面の窪みは915は0.9cm、916は1.5cmで裏面に粘土のしわが残る。

埋葬223（図版56） 土人形（932）が出土している。932は布袋像である。中実で型合せ成形である。朱色の着色が残る。

埋葬228（図48） 泥面子（903）が出土している。903は小型である。胎土はにぶい黄橙色である。図柄は頭巾を被った顔である。

埋葬231（図版53） 白磁紅皿（819・820）が出土している。型作り成形で外面には蓮弁文が陽刻される。化粧道具である。

埋葬232（図版58） 土人形（945）が出土している。945は騎馬人物像である。中空で型合せ成形である。後脚から尾にかけてヘラ押しの痕跡がある。前脚・後脚は1つの粘土塊をヘラで切り分けて2本の脚を作り出している。細部まで丁寧に表現される。

埋葬237（図版53・56、図56） 土器、土製品、銭貨が出土している。土器には京焼の小椀（843）がある。腰部は張りをもち、口縁部が外反する端反椀。成形は丁寧に施され、高台の作りも端整である。灰釉が施され、全面に貫入がみられる。

土製品には土人形（921～925）がある。922は犬を抱く人物立像である。中実で型合せ成形である。底部に棒状の工具で穿った幅0.3cmの穴がある。人物の眉と犬の目に褐釉・着物の柄として両袖と前身頃に緑釉が施される。背面の下半分と底面以外には透明釉がかかる。923は笠持ち人物座像である。中実で型合せ成形である。着物部分には褐釉が施され、背面下半部と底面以外は透明釉と一部緑釉が施される。921は男性立像である。中空で型合せ成形である。底面に穴の痕跡はあるが、貫通していない。作りは丁寧に表現は細部にわたる。924は鳩笛である。中空で型合せ成形である。背中央に三角形の穴が開いている。一部に朱色の着色が残る。925は太鼓である。中空で型合せ成形である。火炎太鼓を表現したもので、作りはやや粗雑であるが表現は細部にわたる。柄の部分に朱色の着色が残る。内部に土玉を入れて土鈴とする。

銭貨は古寛永通寶（銭7）、寛永文銭（銭8）、新寛永通寶（銭9）、不明寛永通寶（銭10・銭11）、祥符通寶（銭12）の計6枚である。

埋葬238（図版57・73） 土製品、木製品が出土している。土製品には土人形（935～938）がある。935は玉を抱える人物像である。中空で型合せ成形である。背面に大小の穴が開く。作りはやや粗雑である。前面に雲母の付着が多い。936は着物を着た人物座像である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧に、顔の表現は粗雑である。937は袴を着た人物座像である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧に、顔の表現は粗雑である。938は笠を持つ人物立像である。中実で型合せ成形である。作りは丁寧に、着色が残る。

木製品には板塔婆（木205）がある。先端近くの小破片である。側面から切り込みを入れて成形する。片面に墨書がある。

埋葬243 (図版53・57、図56) 土器、土製品、金属製品が出土している。土器には伊万里の大皿(851)、白磁の蕎麦猪口(842)がある。大皿は器壁が厚く大きく緩やかに口縁部に至る。内面には大きくザク口が描かれ、外面には唐草文が巡る。肥厚した三角形の高台内には渦福が記される。猪口は体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。高台は削り出しの輪高台。施釉は畳付以外に施される。18世紀中頃～後半に製作された伝世品の可能性がある。

土製品には土人形(939)がある。939は女性立像である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧で、着物の細部まで表現される。全体にうっすらと朱色の着色があり、一部には別の着色が残る。雲母の付着が多い。

金属製品には銭貨がある。古寛永通寶(銭36)、新寛永通寶(銭37～銭40)、不明(銭41)の計6枚である。

埋葬248 (図48) 泥面子(897～900)が出土している。図柄は897は「渦巻き」、898は「せ」、899は「申」、900は「亥」。900は裏面が少々窪む。胎土は4個ともにぶい橙色である。

埋葬249 (図版53・86) 土師器丸底小皿(810)が出土している。口縁部は横方向のナデで、端部は立ち上る。底部には指圧痕が残る。

埋葬250 (図版87、図47) 土師質壺(26)が出土している。小型壺。粘土板と粘土紐の接合部分のヘラナデによって、粘土が底部に筋状にはみ出る。口縁部は、玉縁状を呈する。蓋(25)はつまみが無く、外周のナデは浅い。

埋葬255 (図版83、図49) 上面から棟端飾瓦(瓦7・瓦8)が2点出土している。瓦7は型作りで作って接合している。接合面にはカキヤブリを施している。外縁に大きめの蓮子が5個貼り付けられている。瓦当面中央には文様が貼り付けられていた痕跡が残っている。瓦8の作りは瓦7と同じである。頂部外周を面取りしている。瓦当面中央にヘラ描きした線が1本タテにのびる。

埋葬260 (図版68) 木棺の北側の上段側板(木164)外面に墨書がある。人名らしき文字が横向けの状態で書かれている。

埋葬274 (図版63) 漆器椀(木110)が出土している。丸椀で、口縁端部が欠損する。高台は輪高台で端部が欠損する。塗りは内外面とも黒色で、高台内部に朱漆で記号を描く。

埋葬292 (図版56、図54～56) 土製品、金属製品、骨製品が出土している。土製品には土人形(927～931)がある。927・929は女性立像である。中空で型合せ成形である。作りは粗雑で表現は不鮮明である。929の底に穴の痕跡はあるが貫通していない。928は布袋立像である。中実で型合せ成形である。底に穴の痕跡はあるが貫通していない。作りはやや粗雑である。930は人物座像である。中実で型合せ成形である。作りは粗雑である。931は袴を着た人物座像である。中実で型合せ成形である。作りは粗雑で表現は不鮮明である。

金属製品には銅製金具(円孔有り)(金14)、銭貨がある。古寛永通寶(銭1)、新寛永通寶(銭2～銭6)の計6枚である。

骨製品には玉(骨3)がある。扁球形の大粒である。側面中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。長端の両端は平坦な面になる。数珠の可能性がある。

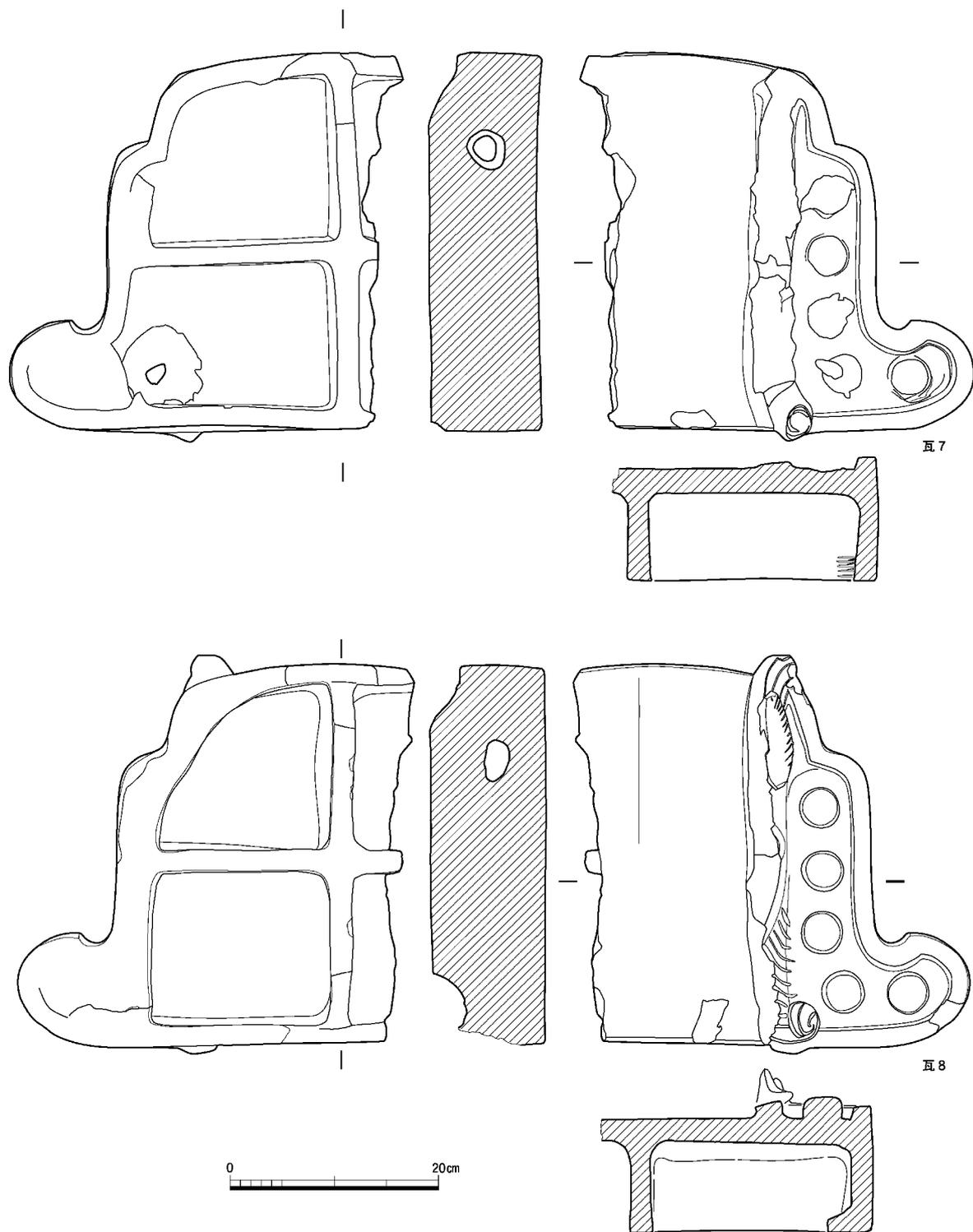


図49 1区埋葬255出土棟端飾瓦

埋葬293（図版74・89、図54）木製品が出土している。数珠（木74）は球形・扁球形の水晶玉、ほぼ球形の琥珀玉、円盤形の木製の玉を用いている。連結状態は不明。球形の水晶玉は3個で、透明度が高い水晶を使用し、中央に穿孔する。片面穿孔である。表面は光沢があり、穿孔部分外面には幅の狭い平坦面を作る。扁球形の水晶玉は1個で、透明度が高い水晶を使用し、T字

形の3方に穿孔する。表面は光沢があり、最大径部分に稜が巡る。ただし、側方からの穿孔は外面に凹部を整形してから行うため、凹曲面はつや消しになる。琥珀玉は2個で、半透明の茶色で、中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。穿孔部分外面には幅の狭い平坦面を作る。比重は1.06である。木製の玉は61個を採集した。大きさにはばらつきがあり、整った円盤形ではない、いびつな形態のものも多い。平坦な面の中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。材質はカキノキである。円盤形木製品(木217)は小型の曲物の蓋であろう。つまみの綴紐を通す孔が並び、「上」の墨書がある。

埋葬295(図版68) 木棺の南側の上段側板(木166)内面に墨書がある。文字が横向けの状態です。部材として使用されていることから転用材の可能性が高い。

埋葬300(図版53・56、図55) 土器、土製品、金属製品が出土している。土器には伊万里の小椀(830)がある。小型の丸椀である。口縁部内面には雷文を巡らせ、見込みに簡略化した松竹梅環状文が描かれる。外面には繊細な筆致で草花・反物が描かれる。高台内には二重方形内に変形文字が記される。

土製品には土人形(933・934)がある。933は笠を持つ人物立像である。中空で型合せ成形である。作りは粗雑である。934は鈴を持つ人物像である。中空で型合せ成形である。底に穴の痕跡はあるが貫通していない。型に粘土を入れた際にできたしわによる穴がある。作りは粗雑である。前面に朱色の着色が残る。

金属製品には煙管雁首・吸口(金3)がある。雁首は首が短く太い。吸口は肩が付く。

埋葬306(図50) 方柱形木製品(木23)が出土している。方柱形で先端は丸みをもって尖る。基部の面の四隅には直径2~3cm・深さ5~10cmの円形の穴がある。用途不明であるが、形態の類似から天蓋の軸の可能性が高い。

埋葬308(図56) 天保通寶(銭35)が出土している。

埋葬314(図版57) 土人形(940~943)が出土している。940は袴を着た人物座像である。中実で型合せ成形である。全体に朱色の着色が残る。表現は丁寧であるが、作りは粗雑である。941は頭巾を被った人物座像である。中実で型合せ成形である。全体に朱色の着色が残る。表現は細部にわたり、作りも丁寧である。942・943は犬を抱く人物立像である。中空で型合せ成形である。底部中央に穴が開く。人物と犬の顔面に褐釉が施され、背面下半部と底面以外に透明釉がかかる。作りは丁寧である。

埋葬317(図54) 数珠(木83)が出土している。球形の大粒の木製の玉1個のみを採集した。遺存状態はよくない。T字形の3方に穿孔する。材質はカキノキである。

埋葬319(図版68) 木棺の西側の下段側板(木165)内面に墨書がある。文字が横向けの状態です。部材として使用されていることから転用材の可能性が高い。

埋葬323(図版53) 伊万里の小椀(837)が出土している。波佐見窯系。体部は丸みをもって立ち上がり口縁部に至る。外面には梅樹文が描かれる。18世紀に製作された伝世品の可能性がある。

埋葬325（図版53） 土器が出土している。伊万里の色絵小椀（839）は体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。見込みには船の帆のような絵が描かれ、外面には4箇所の窓に、2種類の花が対に描かれる。絵付色は赤・緑・黄が確認できる。唐津には香炉（840）がある。体部は中位が膨らみ、S字状を呈する。口縁下端には、粒状の耳が貼り付けられる。高台はケズリ出され2段状を呈する。鉄釉と銅緑釉が口縁部から腰部まで施される。萩焼の可能性のあるものである。

埋葬331（図版53） 色絵小椀（841）が出土している。体部は丸みをもち、口縁部はわずかに外反する端反椀。内面には宝尽し文が描かれる。小さな方形内に変形文字が記される。産地は不明である。

埋葬332（図版53、図51） 土器、木製品が出土している。土器には磁器の小椀（834）がある。体部は丸みをもち、口縁部はわずかに外反する端反椀。非常に薄手の作りである。口縁部内面には帯状文が巡り、見込みに草花を繊細な筆致で描く。産地は不明である。

木製品には塔婆（木36）がある。基部の破片である。方柱形で下面・側面はいずれも平坦に仕上げる。墨書は不明である。

埋葬334（図46） 土師質壺（23）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には離砂が認められる。外面は布状のものでナデ調整、内面は指ナデ調整を施す。底部からの立上り部分に板状工具でのナデ調整が残る。口縁部は体部と一体となり、玉縁状を呈する。蓋（22）は平坦な天井部に、中央が窪むつまみが付く。口縁部は短く、外方に開き、端部は丸くおさめられる。天井部周縁には離砂が多量に付着する。

埋葬342（図版51・53・63・74、図54～56） 土器、木製品、金属製品が出土している。土器には施釉陶器信楽の甕（801）、唐津の大鉢（850）がある。甕は土器棺に使用する。胎土は灰白色で精良、斜め上方に広がる長い頸部には、内に突出する口縁部を有する。底径に対し口径が大きくなる甕である。張りのない肩部からすぼまり、腰部から直線的に、平坦な底部に至る。胴部中位に粘土紐継ぎ足し痕跡、底部内面には目跡が5箇所残る。鉄釉が内外面に施され、黒褐色釉が頸部から肩部、胴部中位に上下流し掛けされる。底部は露胎。大鉢は体部は腰に丸みをもたせ、口縁部は大きく開く。高台は肥厚した三角形状で、外面が2段状を呈する。内面には蓮弁文・蔓文の印花文に白泥を象嵌する。見込みには離砂が多量に付着する。三島手の大型鉢である。17世紀末～18世紀前半に製作された伝世品の可能性がある。

木製品には漆器（木111）、板状木製品（木216）、数珠（木76）、扇がある。木111は完形の丸椀である。高台は輪高台である。塗りは内外面とも黒色で、体部外面に銀蒔絵で丸に蝶の紋を描く。木216は台形の薄い板で、人名とみられる墨書がある。木76は円盤形の木製の玉を7個採集した。やや大粒で平坦な面のほぼ中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。材質はモチノキである。扇は閉じた状態で出土し、要近くの骨のみが残る。

金属製品には煙管、銭貨がある。煙管は雁首（金4）のみが出土している。

銭貨は皇宋通寶（銭22・銭23）、洪武通寶（銭26）、開元通寶（銭24・銭25）、至道元寶（銭30）

康熙通寶（錢19～錢21）、政和通寶（錢29）、萬曆通寶（錢28）、正隆元寶（錢27）、新寬永通寶（背元）（錢31）、新寬永通寶（錢32）、永樂通寶（錢13～錢18）の計20枚である。甕棺底部から古寛永通寶（錢33）、新寛永通寶（錢34）の計2枚である。

埋葬347（図版51・53） 土器、土製品が出土している。土器には施釉陶器の信楽の甕（800）、土師器の小型壺（814）、伊万里の小椀（835）、白磁紅皿（821）がある。甕は土器棺に使用する。胎土は灰白色で精良、硬質。口頸部は直立し、口縁部は内外に突出する。上端面は平坦である。肩部は張りをもたず、胴部は緩やかにすぼまり、平坦な底部に至る。内外面に鉄釉が施された後、黒褐色釉が上下に流し掛けされる。底部は露胎。小型壺は体部が丸みを持ち、口縁部はすぼまる。底部は平底である。小椀は器高は低く、腰に丸みをもった筒状の椀。外面に帯状文が3条巡る。紅皿は型作り成形され、外面には鎬が施される。化粧道具である。

土製品にはミニチュア鍋（836）がある。腰部以外に鉄釉が施された、ままごと道具。

埋葬351（図版53、図48） 土器、土製品が出土している。土器には伊万里の小椀（844）がある。丸みを持った腰部から、わずかに外反する口縁部に至る。口縁部内面に蝙蝠文を巡らせ、見込みにも蝙蝠文を対に描く。外面にも蝙蝠文を2段に巡らせ描かれる。

土製品には泥面子（901）がある。901の図柄は丸に「二」である。胎土は灰白色である。

埋葬356（図版53・58） 土器、土製品が出土している。土器には伊万里の小椀・蓋のセット（826）、軟質施釉陶器の徳利（825）がある。椀は腰に張りをもって、口縁部に至る。外面に巻物・果実・草を描く。蓋は天井部に椀同様の文様が描かれる。徳利は口縁端部に片口を有する。口頸部から緩やかに丸みもち、平坦な底部に至る。全面に低火度鉛釉が施され、花が描かれる。

土製品にはミニチュア椀（824）や土人形（950）がある。824は型作り成形され、内面に緑釉が施されたままごと道具。950は鳥である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧である。内部に土玉を入れて土鈴とする。

埋葬402（図版52） 焼締陶器の信楽の壺（804）が出土している。土器棺に使用する。胎土は長珪石を多く含み灰色で粗い。短い直立する口頸部は折り返され、口縁部は丸みをもって外に突出する。肩部と腰部は大きく張り出し、胴部中央がすぼまる。胴部は中位からはロクロ目が顕著。肩部から体部にかけて、緑灰色の自然釉が流れ落ち、石ハゼ、降灰が顕著である。

埋葬404（図版53・86・90、図51） 土器、木製品が出土している。土器には土師器の圈線が巡る大皿（812）がある。胎土はにぶい橙色である。器壁はやや厚めである。底部と口縁部の境は屈曲し、口縁部は横方向のナデで、端部は立ち上る。圈線は明瞭である。

木製品には板塔婆（木32）がある。先端部の破片である。細長い板に側面から直線的に切り込みを入れて成形する。墨書は不明である。

埋葬407（図版53） 土師器の丸底小皿（811）が出土している。器高は低く、底部と体部の境が不明瞭。口縁端部は上方につまみ上げられる。

埋葬408（図版63） 漆器椀（木112）が出土している。小型の丸椀で、一部が欠損する。高台は輪高台で端部が欠損する。塗りは内面は赤色、外面は黒色で、体部外面の3方に銀蒔絵で丸に

三ツ柏の紋を描く。

埋葬410（図版51・92、図55） 土器、金属製品が出土している。土器には施釉陶器の信楽の甕（799）がある。土器棺に使用する。胎土は灰白色で精良、硬質。口頸部は直立気味、口縁部は外下方へ突出する。肩部はわずかに張りをもち、胴部から緩やかにすぼまり、平坦な底部に至る。胴部には粘土紐継ぎ足し痕跡が認められる。底部内面には目跡が3箇所顕著に残る。鉄釉が内外面に施され、黒褐色釉が上下に流し掛けされる。底部は露胎。

金属製品には煙草入（金12）・煙管（金11）のセットがある。金12は円筒形で、被せ蓋が付く。内部には紙に包まれた煙草が残る。金11は雁首・羅宇・吸口が完存する。雁首は寸胴円筒形の羅宇との接合部から強くくびれて屈曲し、火口は内弯して開く。吸口は寸胴円筒形の羅宇との接合部から強くくびれて、先端はわずかにふくらむ。羅宇は竹製で雁首・吸口との接合部は小さな段を加工する。一部は剥落するが、外面は全面黒色の漆を塗る。煙草入・煙管の意匠は共通する。

埋葬413（図版68・69） 東側側板（木170）は2枚が接合し、外面全面に題目などの墨書がある。また掘形から出土した方形木棺側板破片（木167）、方形木棺蓋破片（木168）に墨書がある。

埋葬416（図版87、図46） 土師質壺（24）が出土している。小型で、粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。外面はヘラナデ調整、内面は指ナデ調整である。

埋葬419（図55） 煙管雁首・吸口（金5）が出土している。雁首は小さめの肩を持ち、首の曲りは直角である。雁首の中には羅宇の残骸がある。吸口の口付の加工が粗雑である。

埋葬428（図51） 巻物の軸（木37・木38）が出土している。軸木・八双が一組で出土した。軸木は完形である。円柱形で両端に小さな段を加工し、軸鼻を嵌める。断面形はほぼ円形で、長軸方向に相対する狭い平坦面を作る。一端に小さな方形の穿孔、中央より少しはずれた位置に長方形の柄穴と逆台形の欠き込みを加工する。材質は両端が（イスノキ）、他の部位は（ヒノキ科）である。一部には金箔が残る。軸鼻は骨角製で中央に軸を嵌める窪みを加工する。八双は中央で折れているが、完形である。細長い三角柱形で中央部は削り込んで平坦面を作る。2箇所に掛緒を留める環が付く。一部に金箔が残る。環は真鍮製で先端は八双を貫通し、基部は輪形に丸める。

埋葬433（図版91、図52） 木製入歯（木63）が出土している。上顎の入歯でほぼ完形である。義歯6本分の凹みを作り、凹み側面には義歯を糸で固定するための孔を穿つ。右第1・第2小臼歯の位置に割り込み、左第1小臼歯の位置に窪みを加工する。これらの歯を利用して上顎に固定したものと考えられる。表面は極めて平滑に仕上げる。左前歯の位置は大きく窪み、孔が空くが、出土人骨の観察から下顎に1本のみ残っていた左第2前歯が当たった痕による損傷である。また、出土人骨には右第2小臼歯が残っていなかったため、入歯製作後、かなりの期間にわたって使用されたと推定できる。材質はツゲである。義歯は4本を採集した。内1本は先端が折れる。すべて同種の石製である。平面形は三角形である。前面は凸曲面で、光沢が出るまで磨く。両側面・後面は平坦で、加工痕は不明。咬み合わせ面は平滑な幅広い平坦面になる。曲線となる部分もあるので、使用により摩耗したと考えられる。側面中央には固定するための糸を通す円形の孔が貫通する。1本は穿孔の一部が前面にはみ出している。

埋葬440 (図版53、図56) 土器、金属製品が出土している。土器には伊万里の椀(845)がある。体部は腰部に張りをもち口縁部に至る。高台は八の字状に開く。口縁部内面は四方禪文が巡り、見込みに波状文を描く。外面には波・鯉が力強い筆致で描かれ、高台際に蓮弁文を巡らす。体部には焼継痕跡が観られる。

金属製品には銭貨がある。古寛永通寶(銭43)、新寛永通寶(銭44・銭45)、題目銭(銭42)の計4枚である。

掘形から古寛永通寶5枚、寛永文銭1枚が出土している。

埋葬453 (図版91、図52) 骨製簪(骨1)が出土している。部分的に欠損する。先端は二股になり、端部は尖る。側面は丸く加工し、切り込みには平行線状の加工痕が残る。基部は両側に外反する飾りをあしらひ、先細りする。

埋葬467 (図版57) 土人形(944)が出土している。944は亀である。首は貼り付けで、甲羅中央に穴が開いている。作りは丁寧である。外側には褐釉・緑釉・透明釉がかかる。内面に釉はかからない。

埋葬563 土人形が出土している。俵を持つ人物立像である。中実で型合せ成形である。作りは丁寧である。朱色の着色が残る。

埋葬588 (図版63、図55) 木製品、石製品が出土している。木製品には漆器椀(木113)がある。丸椀である。一部が欠損する。高台は輪高台で端部が欠損する。塗りは内面は赤色、外面は黒色で、体部外面に銀蒔絵で草花を描く。

石製品には数珠(石4)がある。小粒の球形の水晶玉1個のみを採集した。透明度が高い水晶を使用し、中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。表面は光沢があり、穿孔部分外面には幅の狭い平坦面を作る。

埋葬591 (図版89・90、図54) 方形木棺(木280)は遺存状態が良好で、蓋板も完存する。

数珠(木75)が出土している。球形の水晶玉、球形・突起のある球形の木製の玉を用いている。ほとんどの数珠玉には穿孔に紐が残っていたが、腐朽しており材質・連結状態は不明である。材質はモチノキである。水晶玉は小粒のものが1個で、透明度が高い水晶を使用し、中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。表面は光沢があり、穿孔部分外面には幅の狭い平坦面を作る。木製の玉は突起のあるもの2個、大粒のもの2個、中程の大きさのもの94個、やや小粒のもの12個を採集した。突起のあるものは端部に突帯がめぐる円筒状の突起が付き、中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。大粒のものにはさらに大小があり、大きい方はT字形の3方に穿孔する。小さい方は中央に穿孔し、穿孔と直交する位置の外面に強い凹みがある。中程の大きさのものやや小粒のものは大きさの差異は漸移的で、いずれも中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。

埋葬627 (図版53・58・86) 土器、土製品が出土している。土器には土師器鉢(816~818)、伊万里の白磁紅皿(823)がある。鉢は大中小があり、いずれも精良な胎土である。ロク口成形されたもので、底部は糸切り底となる。823は型作り成形され、外面には鎬が施される。化粧道具である。

土製品にはミニチュア竈セット（946～949）・蓋付き片口（848）・小鉢（822）・小瓶（849）がある。946は型成形で、内側には押し付ける際に付いた指押さへの痕跡が明瞭に残る。焚口が3箇所あり大小の釜（947・948）と鍋（949）が付属する。細部まで丁寧に表現されている。外面には着色が残る。釜は身・蓋とも型成形である。雲母の付着が顕著である。鍋は型成形で、内面の調整は粗雑である。片口は蓋付きで、内外面に施釉する。ミニチュア小鉢は一部欠損するが六弁に復元できる。ミニチュア小瓶は緑釉を施す。蓋はない。

埋葬1324（図46） 土師質壺（14）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には、離砂はわずかに認められる。外面は肩部に4条の波状文が巡る。腰部には口クロ目が顕著に残る。内面は口クロ目が顕著である。口縁部は短く立ち上がり、玉縁状を呈する。

#### 4期 江戸時代中期から後期（18世紀中葉～19世紀前葉）の墓地出土遺物

埋葬220（図版88、図48） 泥面子（887～896）が出土している。図柄は887・888は「鶴」、889は「四輪」、890は「十」、891は五角形に「車」、892は「ト」を連ねたもの、893は「酉」、894は「稻」、895・896は「渦巻き」である。890と893は少し小さい。胎土は887が灰白色、888が明褐色、889～896がにぶい橙色である。

埋葬400（図版90・91、図52・53） 木製品、骨製品が出土している。木製品には櫛（木71）がある。木製の横櫛で、一部の歯が欠落するが、ほぼ完形である。棟は緩やかな弧をなし、断面は厚めである。歯は59本を挽き出す。表面は平滑に仕上げ、彫刻や塗装の痕跡はない。材質はイスノキ。

骨製品には櫛払（骨2）がある。軸部のみ完存する。植毛は残っていない。先端部は緩やかに屈曲して幅広となり、ほぼ同じ直径の植毛の穴が13箇所並ぶ。背面には長軸方向の浅い溝を彫り、植毛の穴に対応する小孔を穿つ。柄の先端は鋭く尖る。表面は平滑に仕上げる。

埋葬424（図版88、図47） 施釉陶器の唐津の壺（37）が出土している。土器棺に使用する。器壁の薄い胴部は張りが緩く、上げ底気味の底部に至る。体色は暗赤褐色に焼け締まり、黒褐色釉が薄く垂れ流れる。内面にはタタキ成形痕が顕著に残る。

埋葬429（図版90、図52） 木刀（木57・木58）が出土している。大小2本一組で完形で出土した。木58は大刀でわずかに反りがある棒状で、刀身中央が最も太い。先端はわずかに鋭角をなし、切っ先を表現する。鐔の部分には不明瞭な突帯がめぐる。柄頭は平坦面になる。表面の加工は粗雑で、断面形は刀身先端は不整形な杏仁形、他の部分は隅丸長方形である。木57は小刀で反りがない真っ直ぐな棒状で、柄頭が太くなる。先端はほぼ直角である。鐔の部分には不明瞭な突帯がめぐる。柄頭はわずかに凸面となる。表面の加工は粗雑で、断面形は刀身部分が不整形な杏仁形、柄の部分は楕円形である。材質はどちらもニヨウマツである。

埋葬450（図版51） 焼締陶器の備前甕（797）が出土している。土器棺に使用する。胎土は灰色で粗い。口縁部は内弯気味に立ち上がり、外面は3条の凹線が巡る。肩部はわずかに張りをもち、胴部から緩やかにすばまり底部に至る。胴部には粘土紐継ぎ足し痕跡が認められる。内外面

に薄く鉄泥が施される。底部は露胎。

埋葬495（図版54） 土器、木製品が出土している。土器には伊万里のミニチュア赤絵小椀（866）がある。型作り成形である。外面の絵付けは剥離して不明。ままごと道具である。

土製品には土人形がある。春駒持ち人物立像である。中空で型合せ成形である。細部まで表現されており作りは丁寧である。着色の痕跡がある。

埋葬565（図57） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭70・銭71）、新寛永通寶（銭72～銭75）の計6枚である。

埋葬581（図版75） 木棺の底板（木220）内面中央に「六」の墨書がある。

埋葬1029（図版91、図55） 眼鏡レンズ（石1）が出土している。一つは完形。もう一つは4片に割れているが大きさは完形のものと同じである。凸レンズで表面は半透明になっている。レンズの縁や弦は出土していない。

埋葬1030（図版54・60・90、図53） 土器、土製品、木製品が出土している。土器には伊万里の小椀（871・872）がある。872は体部は緩やかに立ち上がり口縁部に至る。山水・御堂が描かれる。871は底径が小さく、体部は丸みをもって口縁部に至る。外面に蜻蛉と草が描かれる。

土製品には土人形（971・972）がある。971は犬である。中空で型合せ成形である。972は袋を担ぐ人物立像である。中空で型合せ成形である。細部まで表現してあり作りは丁寧である。着色がわずかに残る。

木製品には櫛（木72）がある。小型の横櫛で完形である。棟は半円形をなし、両端は幅広となる。歯は22本を挽き出す。全面に朱色の漆を塗る。一方の側面に小さな花のような飾りが付く。反対側も漆が小さく円形に剥離していることから、同様の飾りが付いていたと考えられる。

埋葬1044（図57） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭64～銭67）、寛永文銭（銭68・銭69）の計6枚である。

埋葬1119（図版63） 漆器椀（木114）が出土している。ほぼ完形の丸椀である。高台は輪高台である。塗りは内面は赤色、外面は黒色で、施文はない。

埋葬1122（図版72、図51・54） 木棺の西側の下段側板（木193）外面に享保15年（1730）の元号や戒名の一部の墨書がある。上段側板が残っていないため上部は欠損する。

木製品には棒状木製品（木41）、数珠（木80）がある。木41は完形である。円柱形で両端に微妙な段を加工する。断面形はほぼ円形で、長軸方向に加工する。巻物の軸の可能性もある。木80は球形・円盤形の木製の玉を用いている。材質は広葉樹 - 散孔材である。遺存状態はよくない。球形の玉は小粒のものが1個で、中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。円盤形のものほとんどが破損しており、個数は不明である。平坦な面の中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。

埋葬1123（図版60、図57） 土製品、金属製品が出土している。土製品には土人形（973）がある。973は袴を着た人物立像である。中空で型合せ成形である。頭部、耳は貼り付けである。作りは丁寧である。

金属製品には銭貨がある。寛永文銭（銭46）、新寛永通寶（銭47～銭51）の計6枚である。

埋葬1131 (図版54) 土器、土製品が出土している。土器には京焼の椀(873)がある。体部は丸みをもった腰部から、口縁部に至り口縁端部は外反する。高台の成形は丁寧である。鉄釉と白釉に掛け分けられる。体部外面には幾何学文が2箇所描かれる。銘はないが錦光山と推定できるものである。

埋葬1140B (図版87、図47) 土師質の壺(28)が出土している。小型壺で、粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。外面は板状工具の調整、内面は指ナデ調整である。口縁部は丸くおさめる。底部には離砂が付着する。蓋(27)はつまみは無く、上面に離砂の痕跡が顕著である。

埋葬1153 (図版54・59・60) 土器、土製品が出土している。土器には伊万里の小椀(870)・ミニチュア白磁小椀(868)・赤絵小椀が2点(867・869)がある。867～869は型作り成形である。ままごと道具である。

土製品には土人形(951～970)がある。951・952は笠を持つ人物立像である。中空で型合せ成形である。作りは両方とも丁寧である。952は底面が開口し、緑釉が左肩から右裾に向けて斜めにかけてかけられる。962は獅子頭を持つ人物立像である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧である。961・957は人物座像である。961は中実で型合せ成形である。957は中空で型合せ成形である。961は底部に直径0.2cm位の穴が開く。底面に「」の墨書がある。両方とも作りは丁寧である。954は頭巾を被る人物立像である。中実で型合せ成形である。底部中央から人形の中心部にかけて0.2cm位の穴が開いている。作り・表現ともに丁寧である。朱色の着色が残る。953は唐人立像である。中実で型合せ成形である。作りは丁寧で、顔や着衣の細部まで丁寧に表現される。956は童子座像である。中実で型合せ成形である。作りは丁寧である。955は天神像である。中実で型合せ成形である。底面は開口する。作りは丁寧である。958は狛犬である。中実で型合せ成形である。底面は開口する。959・960は狐である。中実で型合せ成形である。959の作りは丁寧である。底面は開口する。968～970は牛である。中空で型合せ成形である。鼻の両側に穴が開く。腹部は開口している。967は鳥である。中空で型合せ成形である。腹部は開口している。脚は貼り付けである。作りは簡略化されている。朱色の着色が残る。963は灯籠である。笠の頂部に穴が開く。台と火入れ部分は粘土を足して接合してある。丸めた粘土で笠は3箇所にとめる。作りは丁寧である。964は五重塔である。中実で型合せ成形である。作りは丁寧である。965・966は土鈴である。頂部に紐通し用の穴が開いている。作りは粗雑である。

埋葬1161掘形(図版69・73) 木製品が出土している。方形木棺側板破片(木174)外面に墨書がある。中段または上段の側板片である。

長方形の板状木製品(木197～199)は3点が出土した。四隅を小さく切り落とした長方形の薄い板の中央から少しはずれた位置に、片面より浅く切り込みを入れ、長軸方向に割り剥ぐ。2つになった部品は八字形に2箇所の目釘で留め、再び接合する。また、割ってない部分の中央には1箇所円形の穿孔がある。表面は両面とも平滑に調整し、割らない方の面には剽軽な顔を描く。顔は円形の眼・細長い鼻・髭の可能性のある短い線を表現する。眼は判で描いたようである。口・耳はない。木198は割る方の面に円弧を描く。用途は不明であるが、顔が描かれるところから、

何らかの祭祀にかかわる遺物と推定できる。

埋葬1165（図版54・91、図52・53） 土器、木製品が出土している。土器には伊万里の椀（876）・蓋（877）のセットがある。椀は器高は低く、体部はわずかに丸みをもち、口縁部に至る。口縁部内面に2条の圏線が巡り、見込みに鳥が描かれる。外面には稲穂・鳥が描かれる。蓋は椀と同様の絵付けがある。

木製品には櫛（木70）、箸（木59）がある。櫛は横櫛で、一部が欠落する。棟は緩やかな弧をなし、断面は厚めである。歯は35本以上を挽き出す。表面は平滑に仕上げるが、片面には多数の傷が付く。彫刻や塗装の痕跡はない。材質はクスノキ科。箸は2本一組で出土した。細長い円柱形で両端が先細りする。断面形は正円形で、端面は両端ともほぼ平坦である。表面の加工は丁寧で平滑に仕上げる。材質はヒノキである。

埋葬1178（図版89、図53） 厨子（木73）が出土している。両開きの扉をもつ小型の仏壇型である。天井部は緩やかな丸みをおびて盛り上がり、頂部やや後寄りに銅製金具が付く。内面は丸天井で、前面は扉が嵌る欠き込みを作る。背面は平坦で緩やかな曲面で弯曲して側面となる。側面やや前寄り左右両側で、上下2箇所に銅製蝶番で扉を結合する。底面は平坦で四周は丸く面取りし、前面は扉が嵌る欠き込みを作る。扉は両開きで右扉に定規縁が付く。扉は前面は平坦で、側面側は緩やかな曲面で弯曲する。定規縁は断面形は半円形で、上半部が欠損する。外面全面に厚く黒漆を塗り、内面は全面および扉側面に黒色の漆を塗った上から金箔を貼る。頂部の金具は中空で放射状に花卉を表現する。天井部とはリベット状に鋳で固定する。鋳には環が付くが錆びついているため詳細は不明である。一部には金箔が残る。蝶番は半円形の金具2個を二つ巴形に組み合わせ、側面・扉にはそれぞれ1個の鋳で結合する。錆びついているため詳細は不明である。一部には金箔が残る。

内部には仏像を5体おさめる。細長い小判形の低い台の上にそれぞれの仏像を固定する。台は全面に黒色の漆を塗ったのち金箔を貼る。台下面および対応する部分の底部内面は金箔を貼ったのち、丸鑿状の刃先の工具による削り込みがある。用途は不明である。中央の仏像は半球形の木製台に接合した銅製の連弁台座の上に載った銅製立像で、右手を挙げ施無畏印を結ぶ。一部には金箔が残る。銅製の光背が付き、細かい銅の針金が共伴しているので部品の一部である可能性がある。両側の仏像はやや不整形な台に接合した連弁台座の上に載った木製座像である。一体は合掌印、一体は阿弥陀印を結ぶ。ともに金箔がわずかに残る。前の小さな2体の木製立像は台に直接接合される。1体は合掌印、1体は施無畏印のようであるが、小さいため詳細は不明である。ともに金箔がわずかに残る。

埋葬1180（図版54） 土師器の丸底小皿（852）、圏線が巡る大皿（853・854）が出土している。丸底小皿は器高は低く、底部と体部の境が不明瞭。体部は器壁が薄く直線的。圏線が巡る大皿は体部は直線的に開き、圏線は顕著。

埋葬1186（図版54） 伊万里の筒形椀（875）が出土している。体部は腰部から屈曲し、直線的に口縁部に至る。口縁部内面には四方禪文が巡り、見込みに崩れた五弁花文を描く。外面には幾

何学文・菊文が描かれる。

埋葬1532(図版70、図50) 木棺の側板(木178)外面の下部に題目・戒名などの墨書がある。上部は欠損する。

天蓋の軸(木22・木25)が出土している。1点は先端が尖る方柱形(木25)である。先端部には長軸と直交する方向に1箇所穿孔がある。基部の面には十字形に深い切り込みを入れる。1点は擬宝珠形(木22)である。隅丸方柱形の基部の上部を先端の尖る球形に丁寧に削り出す。細かい加工痕が残る。基部の面には十字形に深い切り込みを入れる。なお、基部の一部は欠損する。

埋葬1558(図版60) 土人形(974)が出土している。974は家屋である。背面開口、型成形である。屋根の両側に穴が開く。屋根の2箇所と円窓に緑釉を施す。作りはやや粗雑である。

埋葬1560掘形(図版70・74、図50~52) 多数の木製品がまとまって出土した。方形木棺蓋破片(木175)は外面全面に『法華経』安楽行品の偈の墨書がある。上部が欠損するが3枚組でほぼ完形となる。方形木棺側板破片(木176)は上段側板の上部に「前」の墨書がある。

天蓋の軸(木20)は先端が尖る方柱形である。先端部には長軸と直交する方向に1箇所穿孔がある。基部の面には十字形に深い切り込みを入れる。方柱形木製品(木24)は細長い方柱形で先端は鋭く尖り、稜を面取りする。基部の面の四隅には直径2~3mm・深さ5~10mmの円形の穴がある。用途不明であるが、形態の類似から天蓋の軸の可能性もある。天蓋の骨(木29)は4枚一組で出土した。薄い板材に割り込みを入れて先端が半円形になる屈曲した平面形に成形する。天蓋の軸の基部の面の切り込みに嵌め込んで使用するが、取り外して埋納されたためか、いずれもほぼ完存する。表面の調整は丁寧に平滑に仕上げるが、側面には断続的な加工痕が残る。

板状木製品は長方形のもの(木213~215)と細長いもの(木45・木46)がある。長方形の板状木製品は一部が破損するものも含めて6点が出土した。四隅を小さく切り落とした長方形の薄い板の中央から少しはずれた位置に、片面より浅く切り込みを入れ、長軸方向に割り剥く。2つになった部品は八字形に2箇所の目釘で留め、再び接合する。また、割ってない部分の中央には1箇所円形の穿孔がある。表面は両面とも平滑に調整し、割らない方の面には剽軽な顔、割る方の面には波形や円弧を描く。顔は円形の眼・細長い鼻・髭の可能性のある短い線を表現する。口・耳はない。用途は不明であるが、顔が描かれるところから、何らかの祭祀にかかわる遺物と推定できる。細長い板状木製品は一部が破損するものも含めて4組が出土した。薄い板の一端が鋭角、一端が円弧状になる。これは両端が円弧状の細長い薄い板の中央を鋭角に切り目を入れて折り割ったものであることが切断痕からわかるので、2枚一組で用いた可能性が高い。鋭角の方には1箇所小さな穿孔がある。用途は不明である。

棒状木製品(木61)は7点出土した。折れているものもあるが、一端が尖り、小さな面を作る。長軸方向に不連続に加工するため断面形はいびつな多角形となるものが多い。楊枝の可能性もある。巻物の軸は軸木の破片が出土した。円柱形で端部に黒色の漆を塗る。

埋葬1570(図51) 板塔婆(木34・木35)が出土している。2点とも基部の破片である。木34は細長い板の基部を4方から加工して尖らせる。端部は切り落とし、小さな端面を作る。墨書は不

明である。木35は細長い板の側面をわずかに丸みをもって幅を狭め、平坦な面を薄く削り、幅の狭い小口面を作る。墨書は不明である。

埋葬1574（図版70・91、図55） 木棺の南側側板（木179）は3枚が接合し、外面全面に『法華経』方便品の偈の墨書がある。

木製品、金属製品が出土している。木製品にはトウモロコシ（木281）がある。

金属製品には小柄（金13）がある。完形である。刃部は反りがなく、鋭く尖る。刀背は狭い面を作る。柄は断面が細長い六角形の方柱形で、柄頭は平坦である。茎は柄の中なので詳細は不明であるが、柄に目釘の痕跡はない。

埋葬1577（図46） 土師質壺（21）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。底部には離砂が認められる。外面は板状工具のナデ、内面は指ナデ調整を施す。口縁部は短く、玉縁状を呈する。

埋葬1578（図版69） 木棺の底板（木173）内面中央に墨書がある。

埋葬1579（図57） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭52～銭54）、新寛永通寶（銭55～銭57）の計6枚である。

埋葬1580（図版51・54、図52） 土器、木製品が出土している。土器には施釉陶器の信楽甕（802）、伊万里の小椀（874）がある。甕は土器棺に使用する。801を小型化した形態である。胎土は灰白色で粗く軟質。全体にロクロ目が顕著。全面に鉄釉が施される。小椀は体部に丸みをもつ丸椀。体部外面には草文・花が描かれる。

木製品（木56・木62）には長方形の薄い板・穿孔がある小さな板・目釘状のものなどがある。組み合わせて一つの形になると推定できるが、方法や用途は不明である。

埋葬1581（図57） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭58）、新寛永通寶（銭59～銭63）の計6枚である。

埋葬1592（図版61） 土人形（978）が出土している。978は鳥である。中空で型合せ成形である。羽根などが丁寧に表現されている。作りは丁寧である。内部に土玉を入れて土鈴とする。

埋葬1600（図版93、図53・55・57） 木製品、金属製品が出土している。木製品には漆器椀（木67）がある。丸椀で、一部が欠損する。高台は輪高台で端部が欠損する。塗りは内外面とも黒色で、施文はない。

金属製品には煙管、銭貨がある。煙管は雁首（金9）のみである。銭貨は新寛永通寶（銭76～銭79）の4枚である。掘形から古寛永通寶6枚が出土している。

埋葬1635（図版61・62・70・91、図52・54） 木棺の南側の下段側板（木177）は外面に題目の一部などの墨書がある。上部は欠損する。

土製品、木製品が出土している。土製品には土人形（975～977・983）がある。975は頭巾を被る人物座像である。中空で型合せ成形である。雲母の付着が多い。976は金魚である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧である。内部に土玉を入れて土鈴とする。977は鳩笛である。中空で型合せ成形である。作りは丁寧で、細部まで表現されている。着色が明瞭に残る。983は鳥である。

中空で型合せ成形である。朱色の着色が残る。内部に土玉を入れて土鈴とする。

木製品には数珠、独楽がある。独楽（木55）は一部が欠損する。轆轤で成形する。底部は鈍角の凸曲面で、軸の先端は不明瞭である。側面は幅が狭く、わずかに上部の径が大きくなる。上面は緩やかな凹曲面で、軸の突起を削り出す。木取りは芯材を使用し、表面は平滑である。材質はモチノキである。数珠（木81）は小粒の円盤形の木製の玉を5個採集した。平坦な面の中央に穿孔する。穿孔方向は不明。材質はモチノキである。

埋葬2100（図版72） 方形木棺上段側板（木195）外面に『法華経』提婆達多品の偈の一部の墨書がある。部位は不明である。

3期 江戸時代中期（17世紀後葉～18世紀中葉）の墓地出土遺物

埋葬423（図版61） 土人形（979・980）が出土している。980は牛である。中空で型合せ成形である。目は棒状の工具で穴を開けている。作りは粗雑である。朱色の着色がある。979は鳥である。中空で型合せ成形である。羽は貼り付けである。作りはやや粗雑である。

埋葬479（図版73） 木棺の側板（木201・木202）外面に『法華経』提婆達多品の偈の一部の墨書がある。上部は欠損する。また、掘形から出土した方形木棺側板片（木200）に墨書がある。

埋葬673（図版87、図46） 土師質壺（17）が出土している。火消し壺を土器棺に使用する。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。体部には6条の波状文が巡る。外面はヘラナデ調整、内面は指ナデ調整である。口縁部は玉縁状を呈する。

埋葬1129（図版74） 長方形の板状木製品（木212）は掘形から1点出土している。四隅を小さく切り落とした長方形の薄い板の中央から少しはずれた位置に、片面より浅く切り込みを入れ、長軸方向に割り剥ぐ。2つになった部品は八字形に2箇所を目釘で留め、再び接合する。また、割っていない部分の中央には1箇所円形の穿孔がある。表面は両面とも平滑に調整し、割らない方の面には剽軽な顔、割る方の面には円弧を描く。顔は円形の眼・細長い鼻・髭の可能性のある短い線を表現する。口・耳はない。用途は不明であるが、顔が描かれるところから、何らかの祭祀にかかわる遺物と推定できる。

埋葬1141（図版73） 木棺の西側の上段側板（木206）外面に題目の一部などの墨書がある。

埋葬1143（図版63） 漆器椀蓋（木115）が出土している。一部が欠損する。塗りは内外面とも赤色で、つまみ内は黒色である。外面の3方に黒漆で橘を描く。

埋葬1144（図版91、図51） 巻物の軸（木40）が出土している。軸木・八双が一組で出土した。軸木は遺存状態はよくないが完形である。円柱形で両端は平坦な面を作る。一部には金箔が残る。八双は完形である。細長い三角柱形である。2箇所に掛緒を留める環が付く。一部には金箔が残る。環は錆びついているため詳細は不明である。

埋葬1145（図版87・89、図47・50） 土器、木製品が出土している。土器には土師質壺（32）と蓋（31）がある。壺（32）は小型である。粘土板の上に粘土紐を巻き上げて成形される。外面はヘラナデ調整、内面は指ナデ調整である。口縁部は、三角形に立ち上る。蓋（31）は平坦な天井部に、窪むつまみが付く。口縁部は肥厚した三角形状。離砂の付着は顕著ではない。つまみに

は体部の使用土とは胎色が異なる土を使用している。方形木棺内で出土した。

木製品には小型仏像未製品（木31）がある。仏像は完形で、一木で作る。底面は平坦で上部に頭部のような球形部分を表現することから座像の仏像と推定する。全体に加工は粗いままで、手足や顔などの細部が表現されていないので、未製品である可能性がある。材質はヒノキ科である。

埋葬1146（図版54）伊万里白磁の合子身（878）が出土している。器高の低いもので、蓋受部以外に青味がかった白釉が施される。体部は縦に細かく刷毛目を巡らせる。

埋葬1157（図版54・86）土師器の粗製小皿（855～857）が出土している。いずれも丁寧に手捏成形されたものである。

埋葬1187（図版54・86）土師器の丸底小皿（858・859）、圈線が巡る大皿（860）が出土している。丸底小皿は底部と体部の境が不明瞭。口縁部は横方向のナデで端部はつまみ上げる。底は丸い。圈線が巡る大皿は底部と口縁部の境は屈曲する。口縁部は横方向のナデ調整、端部はつまみ上げる。

埋葬1540（図版63・72、図55）木製品、金属製品が出土している。木製品には漆器、木棺片がある。漆器椀（木116）は丸椀で、わずかに欠損する。高台は輪高台である。塗りは内面は赤色、外面は黒色で、体部外面の2箇所に銀蒔絵で桜を描く。方形木棺内に落ち込んだ蓋板破片（木196）外面に『法華経』安樂行品の偈の一部とみられる墨書がある。

金属製品には簪（金16）がある。銅製で完形である。先端は二股になり、端部はわずかに尖る。側面には毛彫りで細かい文様を施す。基部は菱形で花卉をあしらひ、先細りして端部は小さな球になる。

埋葬1542（図54）数珠（木78）が出土している。球形の玉を用いている。いびつなものもあり、材質はボダイジュである。破損しているものが多く、個数は不明である。中央に穿孔する。

埋葬1552掘形（図版71）方形木棺側板（木185）外面に延享元年（1744）の元号・題目・戒名などの墨書がある。3つの破片に分かれているが、2枚組の側板で復元できる。

埋葬1555（図版92・93、図53・55）木製品、金属製品が出土している。木製品には漆器椀（木66）がある。ほぼ完形の丸椀である。高台は輪高台である。塗りは内外面とも褐色に近い黒色で、施文はない。

金属製品には煙管雁首・吸口（金6）がある。雁首・吸口は接合部分に溝が2条ある。ねじ込み式の羅宇と推測される。雁首の首の曲りは緩やかで肩はない。火皿は椀型である。

埋葬1573（図版72）木棺の南側の側板（木190・木191）内面に墨書がある。文字が横向けの状態では部材として使用され、上段側板・下段側板で独立していることから転用材の可能性が高い。

掘形から出土した方形木棺側板破片（木192）に享保19年（1735）の元号・戒名などの墨書がある。3つの破片に分かれているが、2枚組の側板でほぼ復元できる。

埋葬1594（図版54、図57）土器、金属製品が出土している。土器には伊万里の赤絵小椀（879）がある。底径が小さく、体部は丸みをもって大きく開き口縁部に至る。外面に草・網干が描かれる。

金属製品には銭貨がある。古寛永通寶（銭80～銭85）の6枚である。

埋葬1621（図版54、図50）伊万里の油壺（880）が出土している。口縁部はラッパ状に開き、体部下位に最大径をもち底部に至る。外面には二重圏線、藤が描かれる。高台畳付には離砂が多量に付着する。

木製品は掘形から天蓋の骨（木27）が出土している。4枚一組であるが、2枚はかなり破損する。薄い板材に割り込みを入れて先端が半円形になる屈曲した平面形に成形する。元は折損するが、天蓋の軸の基部の面の切り込みに嵌め込んで使用したためである。表面は木目が浮き出し、加工痕は不明である。

埋葬1632（図版61）土人形（982）が出土している。982は猿面を持つ人物立像である。中空で型合せ成形である。作りはやや丁寧である。

埋葬1682（図版73・92、図55）木製品、金属製品が出土している。木製品には大型の木札（木204）がある。完形である。長方形の厚い板材で頂部が鈍角に尖る。裏面には紐を通す割り込みが2箇所並ぶ。表面は平滑に仕上げる。天明元年（1781）の元号・題目などの墨書がある。納経札と推定できる。

金属製品には煙管がある。煙管は小型の雁首・吸口（金7）と雁首・吸口（金8）の2組ある。金7は雁首の首の曲りは緩やかである。金8は雁首・吸口ともに、接合部分に溝がありねじ込み式の羅字がついたものと推測できる。雁首には肩があり接合部は上中央である。火皿は椀型で深い。首の曲りは緩やかである。吸口は細目で肩がつく。

埋葬2045（図58）銭貨が出土している。古寛永通寶（銭93～銭96）、寛永文銭（銭97・98）の計6枚である。

埋葬2046（図版63・72、図58）木棺の西側の下段側板（木194）外面に墨書がある。

木製品、金属製品が出土している。木製品には漆器皿（木118）がある。丸皿である。一部が欠損する。高台は輪高台である。塗りは内面は赤色、外面は黒色で、体部外面の3方に石黄で丸に花菱の紋を描く。

金属製品には銭貨がある。古寛永通寶（銭99）、寛永文銭（銭100）、新寛永通寶（銭101～104）の計6枚である。

埋葬2069（図版61・63・74、図57）土製品、木製品、金属製品が出土している。土製品には土人形（981）がある。981は女性立像である。中空で型合せ成形である。前帯の部分に文様が残る。袖の部分にも、わずかに着色の痕跡がある。

木製品には漆器（木117）、供養札（木218）がある。木117は完形の丸椀である。高台は輪高台である。塗りは内外面とも褐色に近い黒色で、施文はない。木218はほぼ完形である。長方形の薄い板材に戒名・明和8年（1771）の元号などの墨書がある。

金属製品には銭貨がある。古寛永通寶（銭86～銭90）、寛永文銭（銭91）、新寛永通寶（銭92）の計7枚である。

埋葬2083（図版54・74、図51）土器、木製品が出土している。土器には瀬戸・美濃の椀

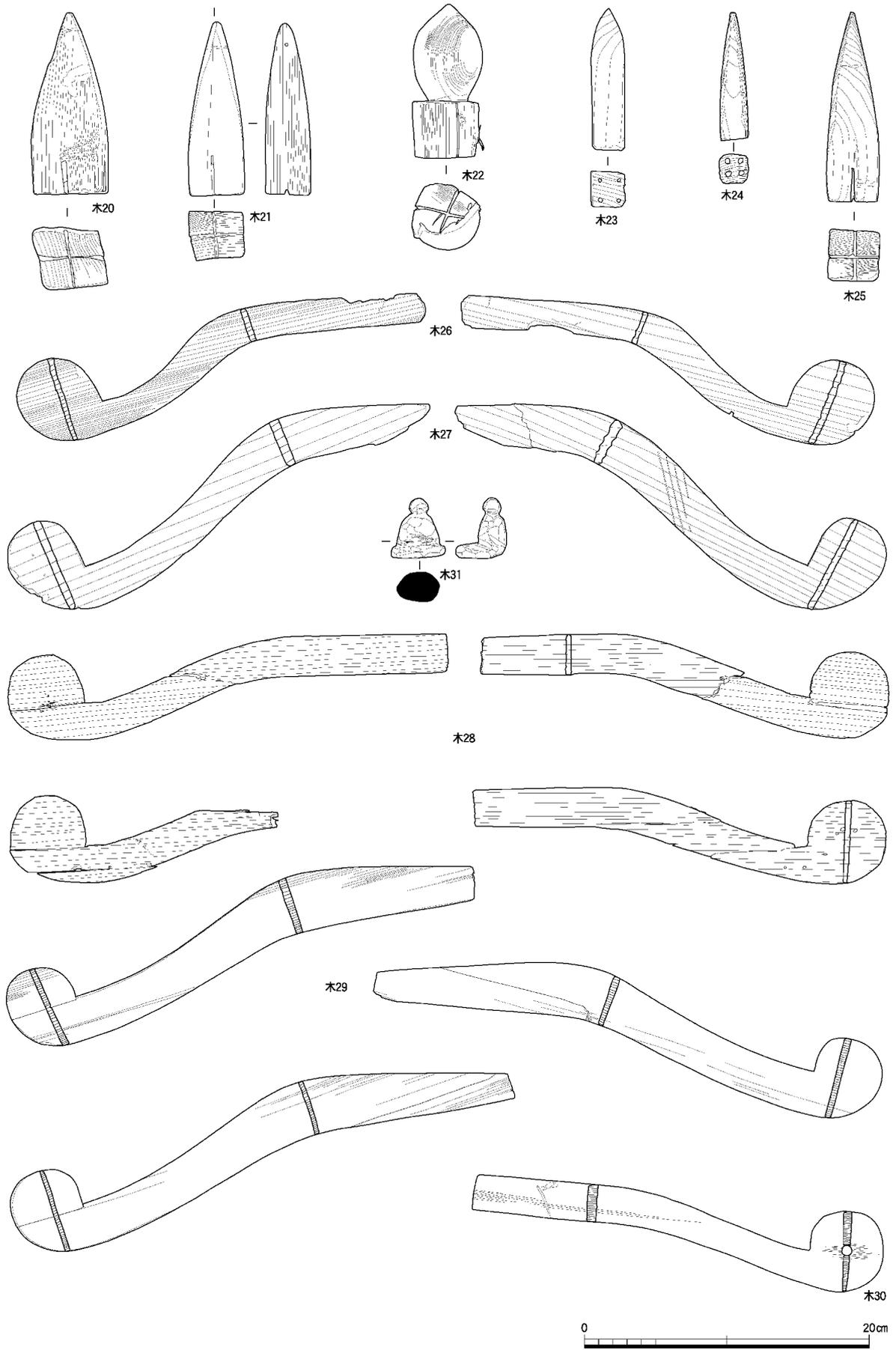


图50 1区埋葬施設出土木製品(1)

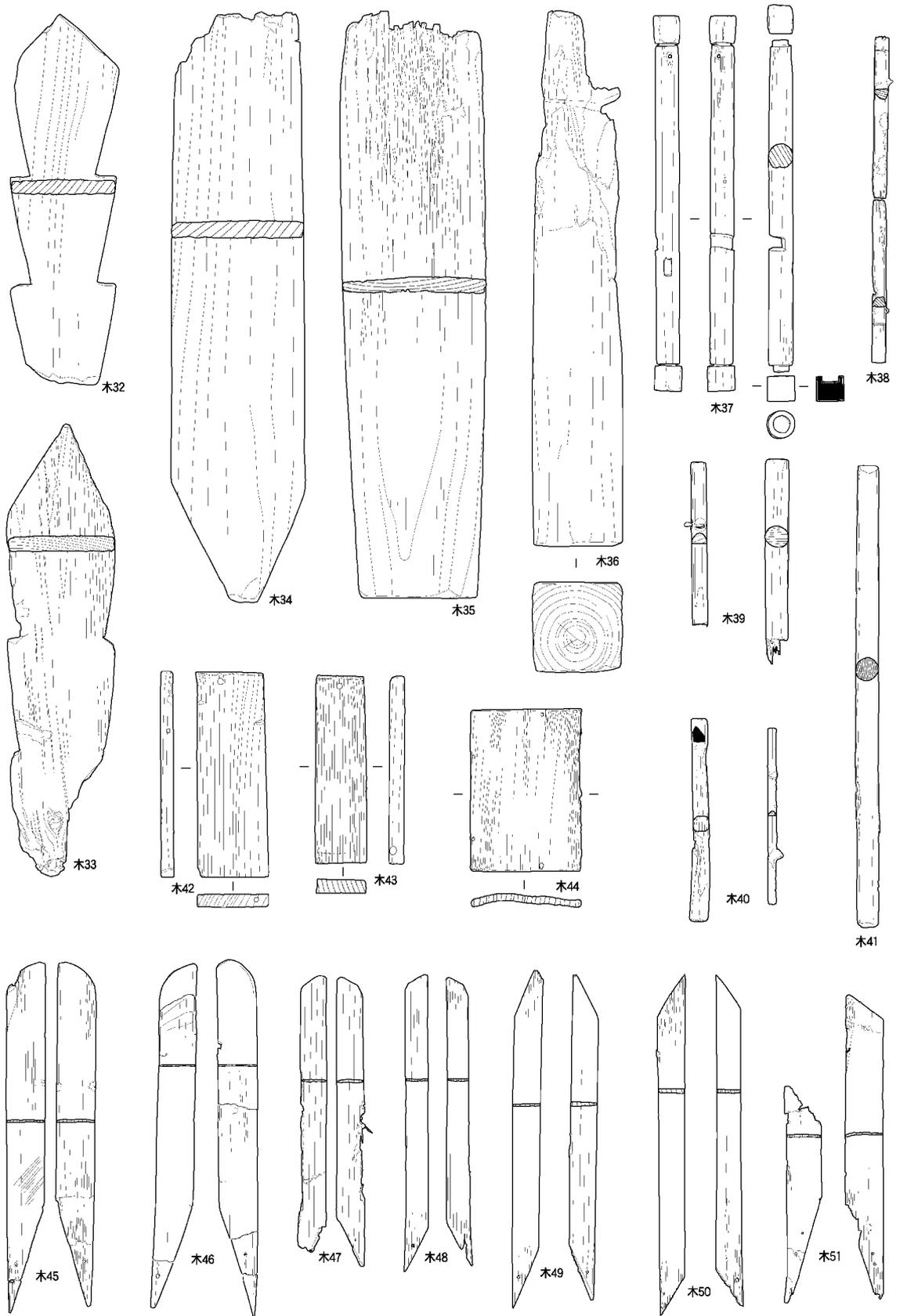


图51 1区埋葬施設出土木製品(2)

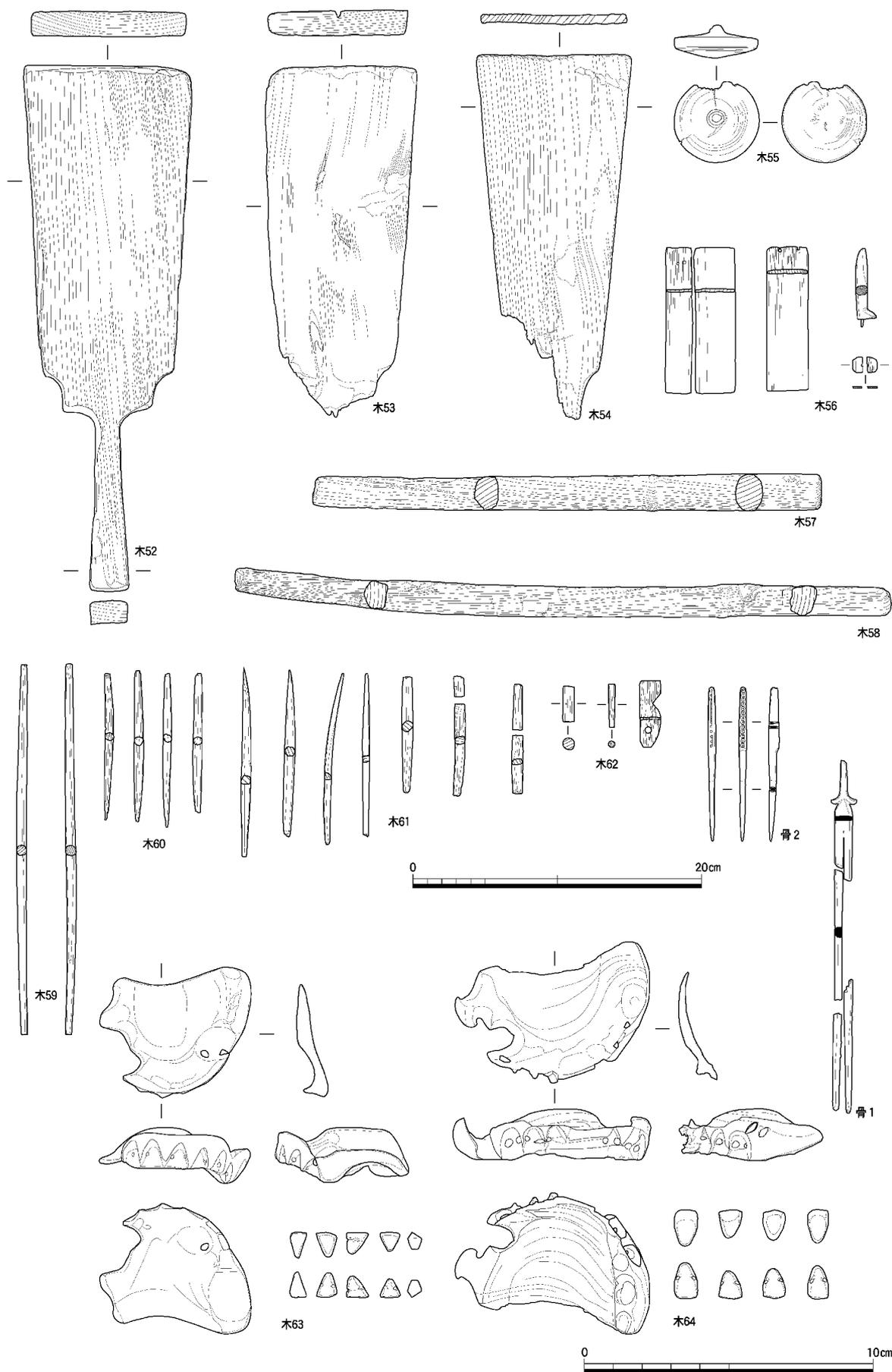


图52 1区埋葬施設出土木製品(3)

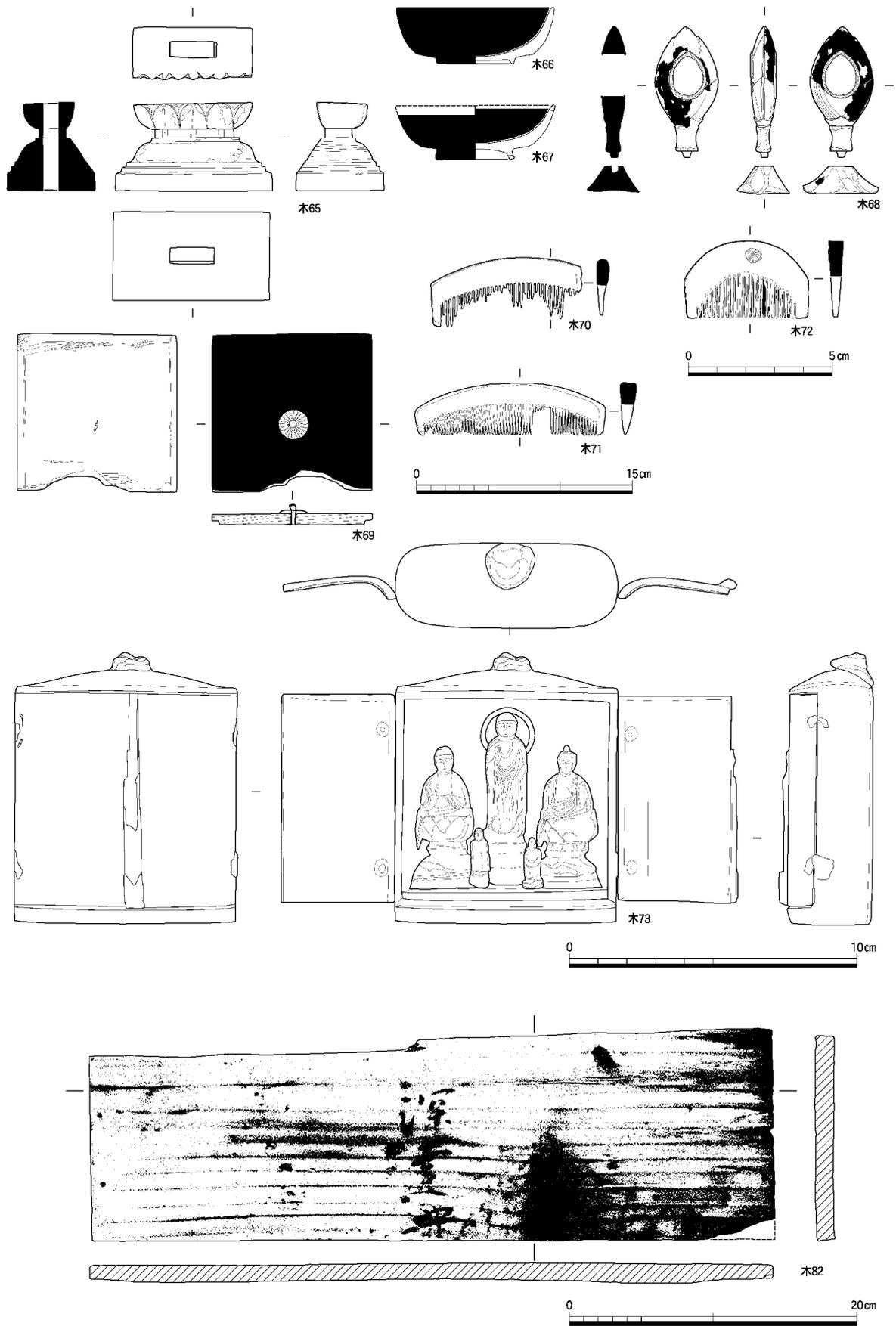


图53 1区埋葬施設出土木製品(4)

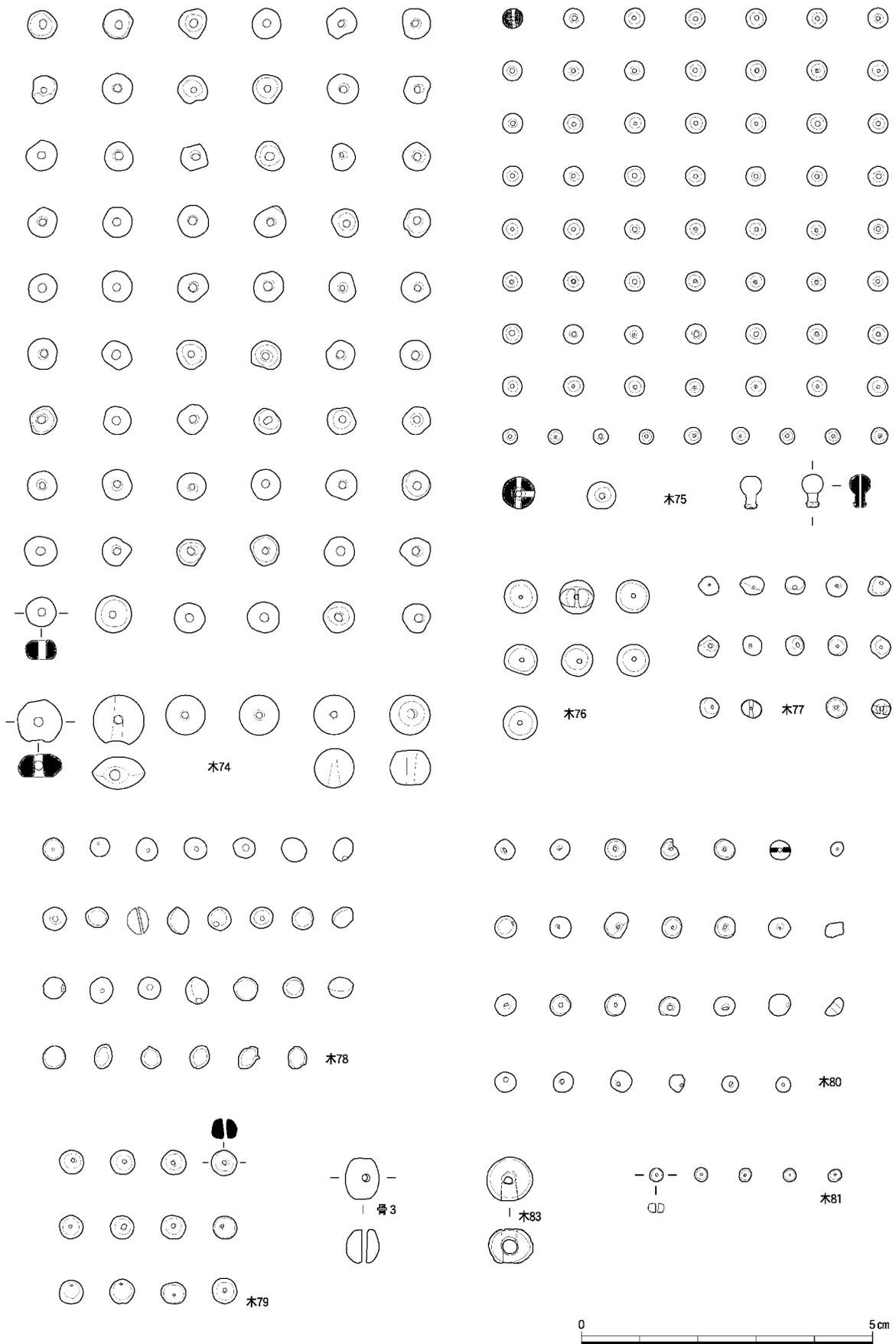


图54 1区埋葬施設出土数珠

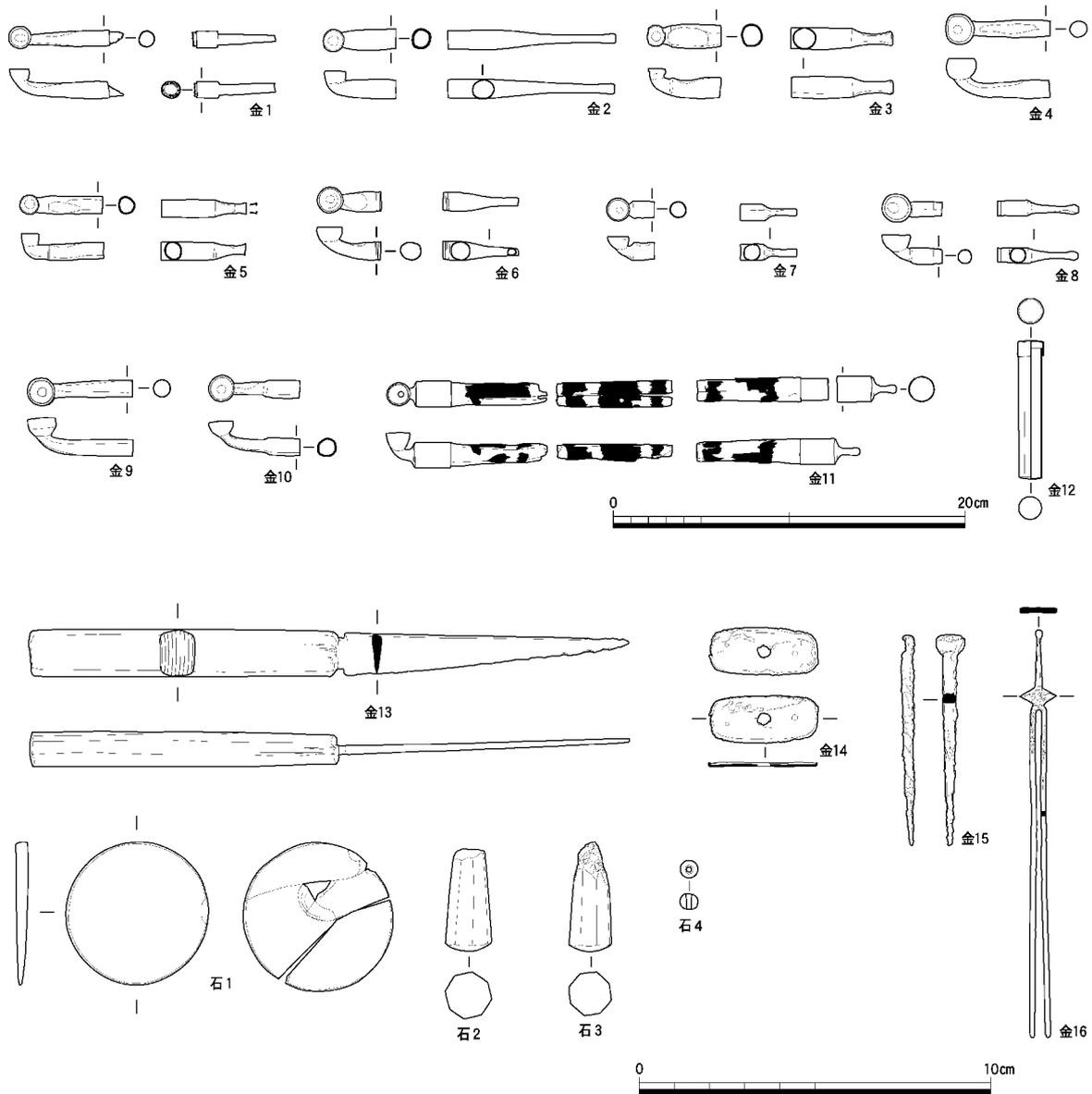


図55 1区埋葬施設出土金属製品・ガラス製品・水晶製品

(881)がある。器高は低く、体部は直線的。口縁端部断面は丸みをもった方形状を呈する。鉄軸が内外面に施され、腰部以下は露胎となる。内面は焼成時の降灰が残る。17世紀に製作された伝世品の可能性がある。

木製品には長方形の板状木製品がある。木209～木211は一部が破損するものも含めて掘形から3点が出土した。四隅を小さく切り落とした長方形の薄い板の中央から少しはずれた位置に、片面より浅く切り込みを入れ、長軸方向に割り剥ぐ。2つになった部品は八字形に2箇所目の釘で留め、再び接合する。また、割ってない部分の中央には1箇所円形の穿孔がある。表面は両面とも平滑に調整し、割らない方の面には剽軽な顔、割る方の面には波形や円弧を描く。顔は円形の眼・細長い鼻・髭の可能性のある短い線を表現する。口・耳はない。ただし、木209は2枚重ねの加工はせず、片面に顔を描くのみである。用途は不明であるが、顔が描かれるところから、何ら

かの祭祀にかかわる遺物と推定できる。

その他の板状木製品（木42・木43）は長方形の板で、片方の板面は平滑に仕上げ、反対側の板面は鋸挽きのままである。木42は片方の小口面の1箇所に目釘穴がある。木43は片方の小口面側の稜を丸く面取りする。容器の部材の可能性はあるが、用途は不明である。

埋葬2095掘形（図版70）板塔婆（木180）が出土している。基部の破片である。細長い板を鋭角に尖らせる。墨書が残る。

埋葬2096（図版54、図58）土器、金属製品が出土している。土器には青花椀（882）がある。体部の器壁は薄く、丸みをもった腰部から直線的に口縁部に至る。外面には、鹿・松・鳥が繊細な筆致で描かれる。

金属製品には銭貨がある。熙寧元寶（銭107・銭108）、元祐通寶（銭106）、天聖元寶（銭105）の計4枚である。

埋葬2154A（図版71）木棺の東側側板（木186）がある。3枚が接合し上部が欠損する。外面全面に享保20年（1735）と推定できる元号・題目・戒名の墨書がある。

埋葬2154B（図版52・73・75・90、図50・51）施釉陶器の信楽の壺（808）が出土している。胎土は灰白色で硬質。凹凸状の短い口頸部は、外に突出する。肩に張りを持ち、底部は平底。肩部以下は口くろ目が顕著である。施釉は鉄釉が内外面に施され、腰から底部は露胎。胎児が埋葬されていたもので、内面には遺体が溶けて灰白色化したものが多量に付着している。壺には木製の蓋（木203）が伴う。上面にはつまみの綴紐がのこり、「大白」の墨書がある。下面周縁には口縁部の圧痕がのこる。

天蓋の軸（木21）は先端が尖る方柱形で、稜を面取りする。先端部には長軸と直角する方向に1箇所穿孔がある。基部の面には十字形に深い切り込みを入れる。天蓋の骨（木26）は4枚一組が重ねられた状態で出土した。木取りと木目から母材が別々であることがわかる。薄い板材に切り込みを入れて先端が半円形になる屈曲した平面形に成形する。元は折損するが、天蓋の軸の基部の面の切り込みに嵌め込んで使用したためである。ただし、出土状況からすると分解してから埋納している。表面の調整はやや粗雑で、側面には断続的な加工痕が残る。材質はいずれもモミ属である。

細長い板状木製品（木47・木48）は一部が破損するものも含めて5組が出土した。薄い板の一端が鋭角、一端が円弧状になる。これは両端が円弧状の細長い薄い板の中央を鋭角に切り目を入れて折り割ったものであることが切断痕から分かるので、2枚一組で用いた可能性が高い。鋭角の方には1箇所小さな穿孔がある。用途は不明である。

掘形から出土した方形木棺蓋板破片（木219）外面に『法華經』安樂行品の偈の一部とみられる墨書がある。板材は完形である。

埋葬2179（図版71、図50・51・53）木製品が出土している。方形木棺側板（木182）外面中央に『法華經』提婆達多品の偈の墨書がある。2枚組の側板でほぼ復元できるが、部位は不明である。別個体の方形木棺側板（木82）外面中央にも同じ偈の墨書がある。

板塔婆（木183・木184）は2点とも中間部分の破片である。板の幅が異なるので別個体である。木183は細長い板の両面に墨書がある。木184は片面に人名などの墨書がある。

天蓋の骨（木30）は4枚一組で出土したが、遺存状態はよくない。薄い板材に割り込みを入れて先端が半円形になる屈曲した平面形に成形する。先端の中央に円形の穿孔がある。表面は平滑に仕上げるが、側面には断続的な加工痕が残る。

細長い板状木製品（木49・木50）は一部が破損するものも含めて4組が出土した。薄い板の両端が鋭角になる。これは両端が尖った細長い薄い板の中央を鋭角に切り目を入れて折り割ったものであることが切断痕から分かるので、2枚一組で用いた可能性が高い。鋭角の方には1箇所小さな穿孔がある。用途は不明である。板状木製品（木44）は長方形の薄い板状で、小口面のみ加工するが、他は割ったままで調整は施さない。粗製である。

埋葬2212（図版70） 木棺の西側側板（木181）外面に題目の一部とみられる墨書がある。小口側の板であるが、小破片のため詳細は不明である。

#### 2期 江戸時代前期から中期（17世紀中葉～後葉）の墓地出土遺物

埋葬596（図版54・63、図55・58） 土器、木製品、金属製品が出土している。土器には伊万里の色絵椀（884）がある。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に2条の圏線、見込みには二重圏線内に、緑色で唐草が描かれる。外面には赤玉文を3方向に、円形窓に竹・松・不明文様が3方向に描かれる。高台内に「大明成化年製」と記される。古九谷様式の末期の製品か。

木製品には漆器椀（木119）がある。丸椀で、一部が欠損する。高台は輪高台である。塗りは内面が赤色、外面が黒色で、体部外面の3方に銀蒔絵で丸に花菱の紋を描く。

金属製品には煙管、銭貨がある。煙管は雁首（金10）のみである。銭貨は古寛永通寶（銭121～銭126）6枚である。

埋葬1175（図版54、図58） 土器、金属製品が出土している。土器には土師器の圏線が巡る大皿（861）、伊万里の小椀（883）がある。圏線が巡る大皿は腰部から屈曲して開く口縁部を有する。内面の圏線は顕著。小椀は器高は低く、体部は丸みをもって口縁部に至る。外面にはコンニャク印判で桐を3方向に描く。

金属製品には銭貨がある。古寛永通寶（銭115～銭118）、寛永文銭（銭119）、新寛永通寶（銭120）の計6枚である。

埋葬1181（図版54・86） 土師器の小椀（864・865）が出土している。いずれも精良な胎土で、ロク口成形されたもの。864は体部がやや直線的。865は丸みを有する。底部は厚く、八の字状の高台を有する。

埋葬1603（図版91、図55） 水晶製の巻物の軸端（石2・石3）が出土している。2点一組で出土した。1点は一部が欠損するが、同一形状である。透明度がきわめて高い水晶を使用し、八角錐状に成形する。基部は緩やかな凸曲面に整形する。表面は光沢があり、稜は明瞭である。

埋葬2000（図版89、図51・53・54） 木製品が出土している。位牌（木65）は台座部分で、3

つの部品からなる。下段は平面形は長方形で、前面・両側面は4段の段を加工するが、背面は平坦な斜面のままである。下面・上面は平坦に仕上げ、中央に長方形の穿孔がある。水平方向に細かい段の加工痕が残る。中段は平面形は長方形で、前面に2条一組の線刻が3箇所ある。他の面はいずれも平坦に仕上げ、中央に長方形の穿孔がある。上段は平面形は長方形で、上部は弯曲して広がる。前面は蓮弁を陽刻し、両側面・背面は緩やかな曲面とする。下面・上面は平坦に仕上げ、中央に長方形の穿孔がある。水平方向の細かい加工痕が残る。全面に黒色の漆を塗ったのち、金箔を貼るが、残っているのは下段・上段の前面のみである。また、これらの部品は平坦な面で接するが、連結のための加工がないので、穿孔に板を通すことによって結合されていたと考えられる。

ガラス嵌め木製品(木68)は、2つの部品からなる。下段は平面形は小判形で、底面はわずかに凹面となる。側面は外反して裾が広がり、狭端部には小さな面を作る。上面は平坦に仕上げ、中央に上部と結合するための小さな円形の柄穴をあける。上部は平たい杏仁形で、下面は平坦に仕上げ、下部と結合するための小さな円柱形の柄を作る。側面には3段に花卉状の段を陽刻する。つぼみを表現していると考えられる。一木の状態で、両面から杏仁形に孔をあけて内部を割り抜き、薄い板ガラスを嵌め、銅製金具で固定する。内部は中央に仕切りがあり、透明な小片を上段に3個以上、下段に1個以上納める。ガラスが不透明なため内部の詳細は不明である。小片の材質は水晶・石英・ガラスなどが考えられる。木質部分は全面に細かい加工痕が残るが、一部剥落するが、黒色の漆を塗る。用途は不明であるが、舍利容器の可能性はある。

数珠(木79)は球形の木製の玉を12個採集した。やや扁平な球形で、中央に穿孔する。穿孔方向は不明である。穿孔部分外面には幅の狭い平坦面を作る。材質はモチノキである。

巻物の軸(木39)は軸木・八双が一組で出土した。ともに半分に欠損している。軸木は円柱形で、両端は平坦な面を作る。八双は細長い三角柱形で、1箇所に掛緒を留める環がのこる。環は錆びついているため詳細は不明である。

埋葬2081掘形(図版74、図51・52) 木製品が出土している。長方形の板状木製品(木207・木208)は破片1点を含めて3点出土した。四隅を小さく切り落とした長方形の薄い板の中央から少しはずれた位置に、片面より浅く切り込みを入れ、長軸方向に割り剥ぐ。2つになった部品は八字形に2箇所の目釘で留め、再び接合する。また、割ってない部分の中央には1箇所円形の穿孔がある。表面は両面とも平滑に調整し、割らない方の面には剽軽な顔を描く。顔は円形の眼・細長い鼻・髭の可能性のある短い線を表現する。口・耳はない。割る方の面には何も描かない。用途は不明であるが、顔が描かれるところから、何らかの祭祀にかかわる遺物と推定できる。

細長い板状木製品(木51)は破片が2組出土した。薄い板の両端が鋭角になる。これは両端が尖った細長い薄い板の中央を鋭角に切り目を入れて折り割ったものであることが切断痕から分かるので2枚一組で用いた可能性が高い。鋭角の方には1箇所小さな穿孔がある。用途は不明である。棒状木製品(木60)は4点出土した。折れているものもあるが、一端が尖り一端に小さな面を作る。長軸方向に不連続に加工するため断面形はいびつな多角形となる。楊枝の可能性はある。

埋葬2207（図58） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭127～銭131）、寛永文銭（銭132・銭133）、新寛永通寶（銭134～銭137）の計11枚である。

埋葬2213（図版90、図52） 羽子板（木52・木53）が出土している。2枚一組で出土した。1点は柄が欠損する。先端が広がる板状で、柄は体部から2段の割り込みを作り成形する。柄の基部はやや広がる。厚さは一定で、彫刻や絵・文字の痕跡はない。材質はヒノキである。

埋葬2275（図版54・86、図58） 土器、金属製品が出土している。土器には土師器の圏線が巡る中皿（862・863）がある。いずれも体部の器壁は厚く、口縁部は肥厚する。862は比較的圏線が顕著であるが、863は加飾化される以前の様相を呈し、圏線は浅く顕著ではない。

金属製品には銭貨がある。元豊通寶（銭112～銭114）、天禧通寶（銭111）、皇宋通寶（銭110）、紹興元寶（銭109）の計6枚である。

1期 江戸時代前期（17世紀前葉～中葉）の墓地出土遺物

埋葬1541（図版71・88、図53） 木棺の側板（木189）外面の上部に「前」墨書がある。また、蓋板（木188）に墨書がある。

木製蓋（木69）が出土している。3方に欠き込みがあることから、スライド式の蓋と考えられる。欠き込みがない一辺に少し寄った位置に銅製金具が付く。金具は円形で放射状に20弁の花弁を表現し、2枚割式の鋏で固定する。外面・側面には厚く黒色の漆を塗る。一部が欠損するが、齧歯類にかじられた痕跡である。

埋葬1677掘形（図50） 天蓋の骨（木28）が出土している。4枚一組で、1点は欠損する。薄い板材に割り込みを入れて先端が半円形になる屈曲した平面形に成形する。元は折損するが、天蓋の軸の基部の面の切り込みに嵌め込んで使用したためである。表面は木目が浮き出すが、表面の調整は丁寧で平滑に仕上げ、側面には断続的な加工痕が残る。

埋葬1961（図59） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭138～銭143）の6枚である。

埋葬2172（図版71） 木棺の側板（木187）外面の上部に「前」の墨書がある。文字は左半分なので、右隣の側板にまたがって書かれていたことがわかる。

埋葬2216（図版91、図55・59） 金属製品が出土している。鉄釘（金15）は頭が縦に薄い円形で頂部は潰れている。銭貨は古寛永通寶（銭144～銭146）3枚である。

墓石

墓石（図60～62） 墓地やその周辺からは多数の墓石が出土した。重機掘削中や整地層から出土したのも多いため、概要をまとめておくこととする。

墓石には墓標と台石がある。墓標は五輪塔・一石五輪塔・石仏・舟形のもの・方柱形のものに分類できる。五輪塔は天輪・水輪などが分解した状態で出土した。いずれも材質は花崗岩である。一石五輪塔（石14・石15）は埋葬に伴うものはない。材質は暗色の火成岩である。石仏（石13・石27・石28）は仏像を半肉彫にする。一部が欠損しているものが多い。材質は花崗岩・凝灰岩である。舟形のもの（石9・石11・石12・石16・石17・石21・石22）は前面に題目・元号を刻字する。材質はいずれも花崗岩である。方柱形のもの（石5～石8・石10・石18～石20）は前面に

戒名・元号などを刻字する。また、側面にも刻字があるもの（石23）がある。材質はほとんどが砂岩で、3区第2-1層から出土した石31のみ花崗岩製である。

台石は方形で、上面・前面・両側面を平坦に仕上げる。上面には円形・隅丸方形の穴を加工する。材質は砂岩・花崗岩・凝灰岩がある。なお、墓石の刻字の釈文はP.295～P.292にまとめているので参照していただきたい。

#### 註

- 1) ここでは国産施釉陶磁器を京焼、伊万里、唐津、瀬戸・美濃と分類した。肥前陶磁器は磁器類を伊万里、陶器類を唐津と表記している。京焼は信楽も含め同じネットワーク内製品として捉え、京焼と表記している。瀬戸・美濃は桃山時代～江戸時代前期の美濃産に限定できるものに関しては、美濃と表記している。また古期の瀬戸・美濃大窯期以前に該当する遺物に関しては古瀬戸と表記した。
- 2) 焼締陶器は基本的に施釉のない陶器であるが、信楽・備前・丹波などの産地では江戸時代施釉が行われるようになる。本書では産地別の破片数の割合を対比するため施釉があってもこれらの産地の製品を焼締陶器に含め、施釉のあるものについては遺物ごとに記述する。
- 3) ここでは輸入陶磁器は明染付を青花と表記している。
- 4) 『平安京左京北辺四坊 第2分冊（公家町） 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2004年。
- 5) 土師器皿内面の底部と口縁部の屈曲部分に、明瞭な沈線が巡るものを圏線皿とする。
- 6) 註4)に同じ。
- 7) 『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』岐阜県教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター、2002年。
- 8) 藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 1』瀬戸市埋蔵文化財センター、2003年。
- 9) 『近世信楽焼をめぐって 研究会資料集』関西陶磁史研究会、2001年。
- 10) 註9)に同じ。

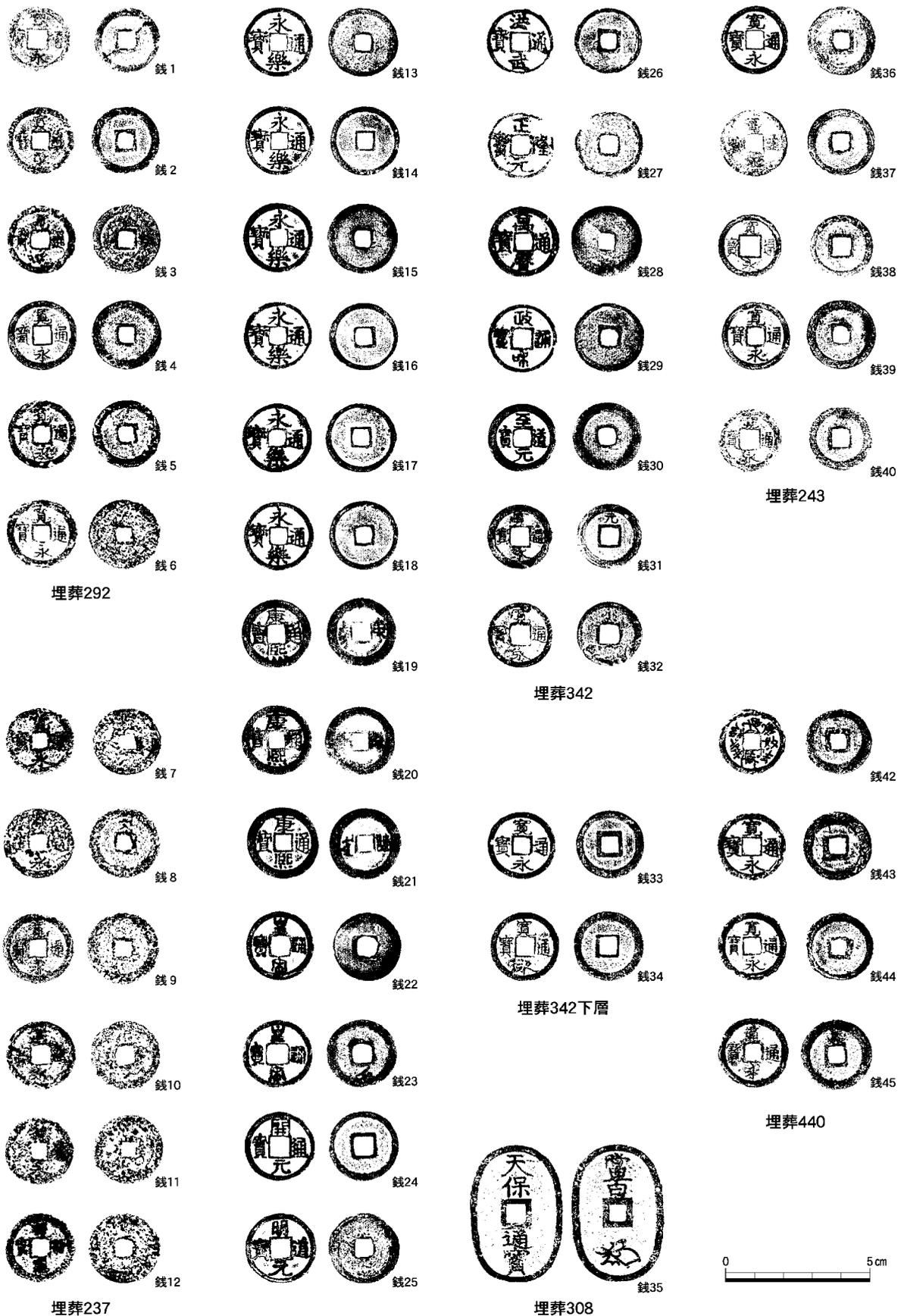


图56 1区埋葬施設出土銭貨(1)

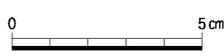
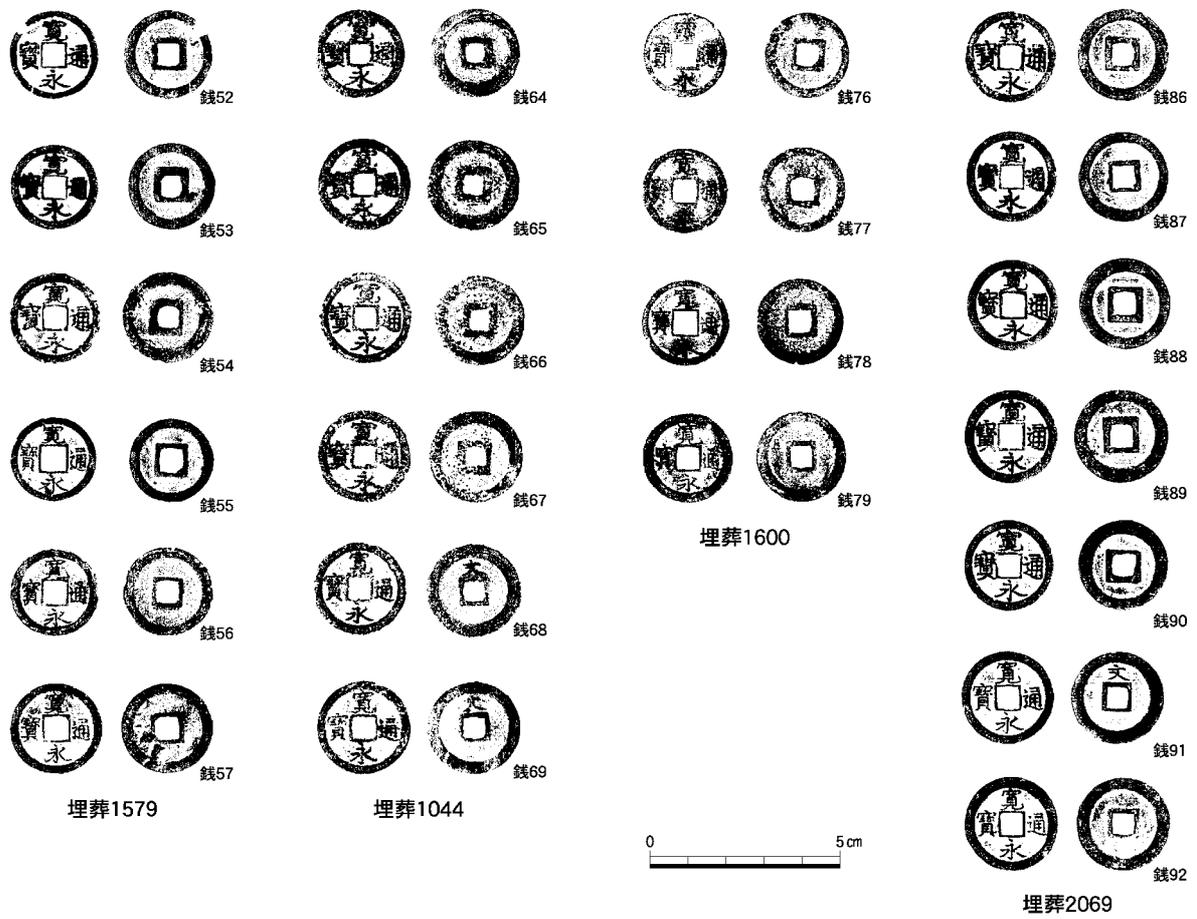
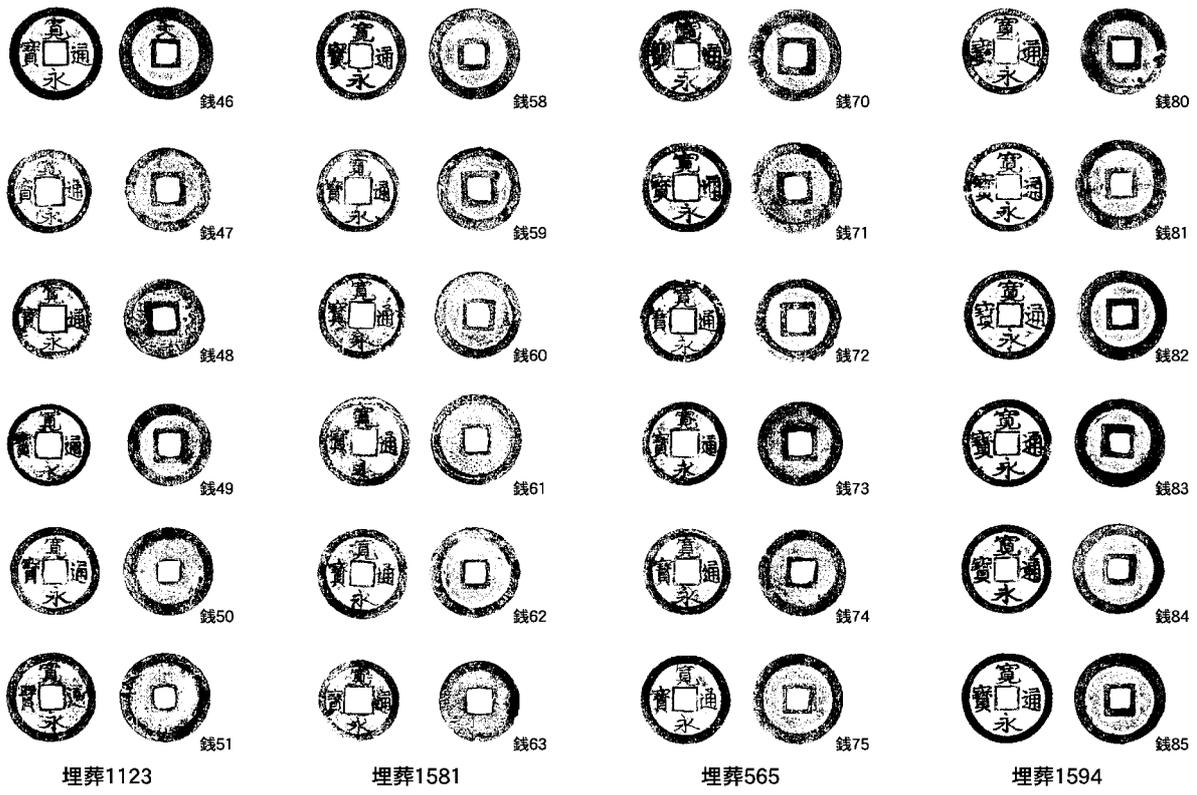


圖57 1区埋葬施設出土錢貨(2)

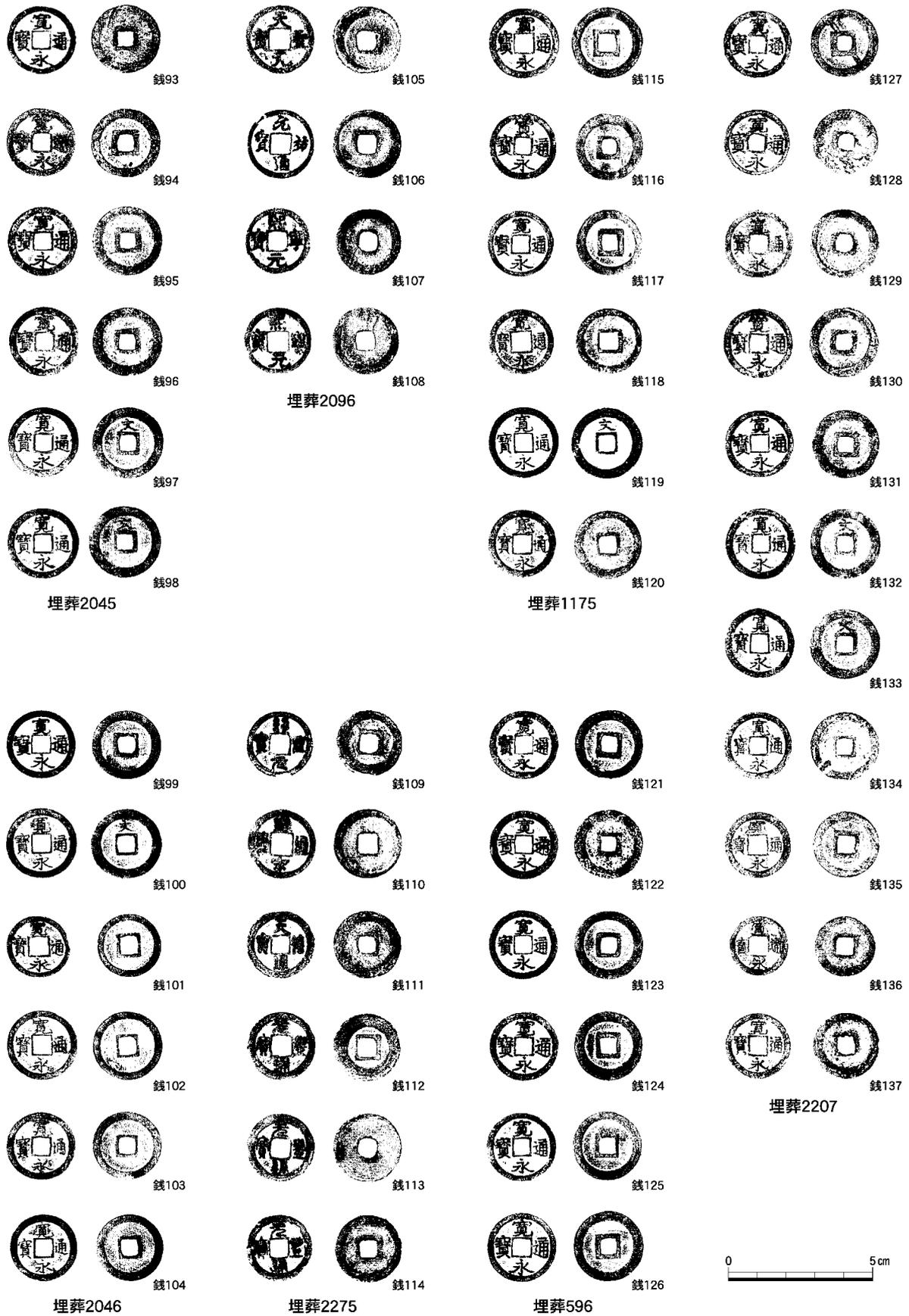


图58 1区埋葬施設出土銭貨(3)

表14 1区埋葬施設出土銭貨一覧表(1)

番号	遺構番号	時期	種類	直径cm	厚さcm
銭1	292	5期	古寛永通寶	2.3	0.09
銭2	292	5期	新寛永通寶	2.4	0.14
銭3	292	5期	新寛永通寶	2.4	0.14
銭4	292	5期	新寛永通寶	2.5	0.12
銭5	292	5期	新寛永通寶	2.4	0.09
銭6	292	5期	新寛永通寶	2.4	0.14
銭7	237	5期	古寛永通寶	2.4	0.08
銭8	237	5期	寛永文銭	2.5	0.09
銭9	237	5期	新寛永通寶	2.6	0.09
銭10	237	5期	不明寛永通寶	2.5	0.09
銭11	237	5期	不明寛永通寶	2.5	0.11
銭12	237	5期	祥符通寶	2.5	0.09
銭13	342	5期	永樂通寶	2.4	0.15
銭14	342	5期	永樂通寶	2.4	0.15
銭15	342	5期	永樂通寶	2.4	0.08
銭16	342	5期	永樂通寶	2.4	0.08
銭17	342	5期	永樂通寶	2.4	0.14
銭18	342	5期	永樂通寶	2.4	0.11
銭19	342	5期	康熙通寶	2.4	0.06
銭20	342	5期	康熙通寶	2.5	0.07
銭21	342	5期	康熙通寶	2.5	0.10
銭22	342	5期	皇宋通寶	2.4	0.11
銭23	342	5期	皇宋通寶	2.4	0.12
銭24	342	5期	開元通寶	2.4	0.14
銭25	342	5期	開元通寶	2.5	0.10
銭26	342	5期	洪武通寶	2.3	0.14
銭27	342	5期	正隆元寶	2.4	0.11
銭28	342	5期	萬曆通寶	2.5	0.09
銭29	342	5期	政和通寶	2.4	0.12
銭30	342	5期	至道元寶	2.4	0.09
銭31	342	5期	新寛永通寶(元)	2.3	0.10
銭32	342	5期	新寛永通寶	2.3	0.08
銭33	342下層	5期	古寛永通寶	2.4	0.11
銭34	342下層	5期	新寛永通寶	2.4	0.13
銭35	308	5期	天保通寶	4.4×3.3	0.13
銭36	243	5期	古寛永通寶	2.4	0.12
銭37	243	5期	新寛永通寶	2.4	0.10
銭38	243	5期	新寛永通寶	2.2	0.10
銭39	243	5期	新寛永通寶	2.4	0.12
銭40	243	5期	新寛永通寶	2.2	0.09
銭41	243	5期	小片不明		0.14
銭42	440	5期	題目銭	2.4	0.13
銭43	440	5期	古寛永通寶	2.4	0.09
銭44	440	5期	新寛永通寶	2.4	0.15
銭45	440	5期	新寛永通寶	2.5	0.13
銭46	1123	4期	寛永文銭	2.5	0.13
銭47	1123	4期	新寛永通寶	2.2	0.12
銭48	1123	4期	新寛永通寶	2.1	0.12

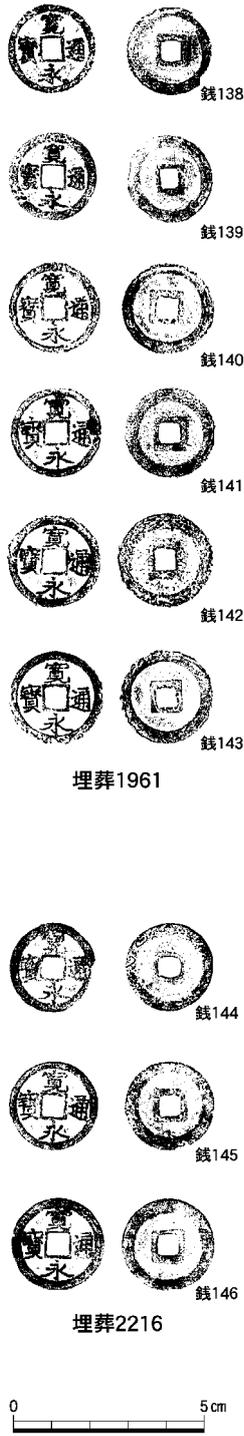


図59 1区埋葬施設出土銭貨(4)

表15 1区埋葬施設出土銭貨一覧表(2)

番号	遺構番号	時期	種類	直径cm	厚さcm	番号	遺構番号	時期	種類	直径cm	厚さcm
銭49	1123	4期	新寛永通寶	2.2	0.12	銭98	2045	3期	寛永文銭	2.5	0.12
銭50	1123	4期	新寛永通寶	2.4	0.14	銭99	2046	3期	古寛永通寶	2.4	0.11
銭51	1123	4期	新寛永通寶	2.4	0.13	銭100	2046	3期	寛永文銭	2.5	0.12
銭52	1579	4期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭101	2046	3期	新寛永通寶	2.2	0.10
銭53	1579	4期	古寛永通寶	2.3	0.11	銭102	2046	3期	新寛永通寶	2.5	0.10
銭54	1579	4期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭103	2046	3期	新寛永通寶	2.4	0.10
銭55	1579	4期	新寛永通寶	2.2	0.09	銭104	2046	3期	新寛永通寶	2.3	0.11
銭56	1579	4期	新寛永通寶	2.4	0.12	銭105	2096	3期	天聖元寶	2.4	0.14
銭57	1579	4期	新寛永通寶	2.4	0.12	銭106	2096	3期	元祐通寶	2.4	0.14
銭58	1581	4期	古寛永通寶	2.4	0.11	銭107	2096	3期	熙寧元寶	2.3	0.12
銭59	1581	4期	新寛永通寶	2.2	0.11	銭108	2096	3期	熙寧元寶	2.4	0.18
銭60	1581	4期	新寛永通寶	2.3	0.12	銭109	2275	2期	紹興元寶	2.3	0.14
銭61	1581	4期	新寛永通寶	2.4	0.12	銭110	2275	2期	皇宋通寶	2.4	0.14
銭62	1581	4期	新寛永通寶	2.4	0.14	銭111	2275	2期	天禧通寶	2.4	0.14
銭63	1581	4期	新寛永通寶	2.2	0.10	銭112	2275	2期	元豊通寶	2.4	0.14
銭64	1044	4期	古寛永通寶	2.4	0.14	銭113	2275	2期	元豊通寶	2.4	0.12
銭65	1044	4期	古寛永通寶	2.5	0.14	銭114	2275	2期	元豊通寶	2.3	0.12
銭66	1044	4期	古寛永通寶	2.4	0.13	銭115	1175	2期	古寛永通寶	2.5	0.13
銭67	1044	4期	古寛永通寶	2.5	0.14	銭116	1175	2期	古寛永通寶	2.4	0.12
銭68	1044	4期	寛永文銭	2.5	0.14	銭117	1175	2期	古寛永通寶	2.3	0.14
銭69	1044	4期	寛永文銭	2.5	0.13	銭118	1175	2期	古寛永通寶	2.3	0.12
銭70	565	4期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭119	1175	2期	寛永文銭	2.5	0.14
銭71	565	4期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭120	1175	2期	新寛永通寶	2.3	0.12
銭72	565	4期	新寛永通寶	2.3	0.10	銭121	596	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭73	565	4期	新寛永通寶	2.3	0.10	銭122	596	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭74	565	4期	新寛永通寶	2.3	0.11	銭123	596	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭75	565	4期	新寛永通寶	2.4	0.07	銭124	596	2期	古寛永通寶	2.4	0.12
銭76	1600	4期	新寛永通寶	2.2	0.10	銭125	596	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭77	1600	4期	新寛永通寶	2.3	0.11	銭126	596	2期	古寛永通寶	2.5	0.14
銭78	1600	4期	新寛永通寶	2.3	0.12	銭127	2207	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭79	1600	4期	新寛永通寶	2.4	0.14	銭128	2207	2期	古寛永通寶	2.3	0.19
銭80	1594	3期	古寛永通寶	2.3	0.12	銭129	2207	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭81	1594	3期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭130	2207	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭82	1594	3期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭131	2207	2期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭83	1594	3期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭132	2207	2期	寛永文銭	2.5	0.14
銭84	1594	3期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭133	2207	2期	寛永文銭	2.5	0.14
銭85	1594	3期	古寛永通寶	2.4	0.14	銭134	2207	2期	新寛永通寶	2.4	0.14
銭86	2069	3期	古寛永通寶	2.4	0.12	銭135	2207	2期	新寛永通寶	2.4	0.10
銭87	2069	3期	古寛永通寶	2.4	0.13	銭136	2207	2期	新寛永通寶	2.1	0.12
銭88	2069	3期	古寛永通寶	2.5	0.12	銭137	2207	2期	新寛永通寶	2.3	0.11
銭89	2069	3期	古寛永通寶	2.5	0.12	銭138	1961	1期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭90	2069	3期	古寛永通寶	2.4	0.11	銭139	1961	1期	古寛永通寶	2.3	0.13
銭91	2069	3期	寛永文銭	2.5	0.12	銭140	1961	1期	古寛永通寶	2.4	0.17
銭92	2069	3期	新寛永通寶	2.5	0.12	銭141	1961	1期	古寛永通寶	2.4	0.16
銭93	2045	3期	古寛永通寶	2.4	0.15	銭142	1961	1期	古寛永通寶	2.5	0.18
銭94	2045	3期	古寛永通寶	2.4	0.15	銭143	1961	1期	古寛永通寶	2.5	0.15
銭95	2045	3期	古寛永通寶	2.4	0.13	銭144	2216	1期	古寛永通寶	2.4	0.19
銭96	2045	3期	古寛永通寶	2.4	0.11	銭145	2216	1期	古寛永通寶	2.4	0.14
銭97	2045	3期	寛永文銭	2.5	0.13	銭146	2216	1期	古寛永通寶	2.5	0.13

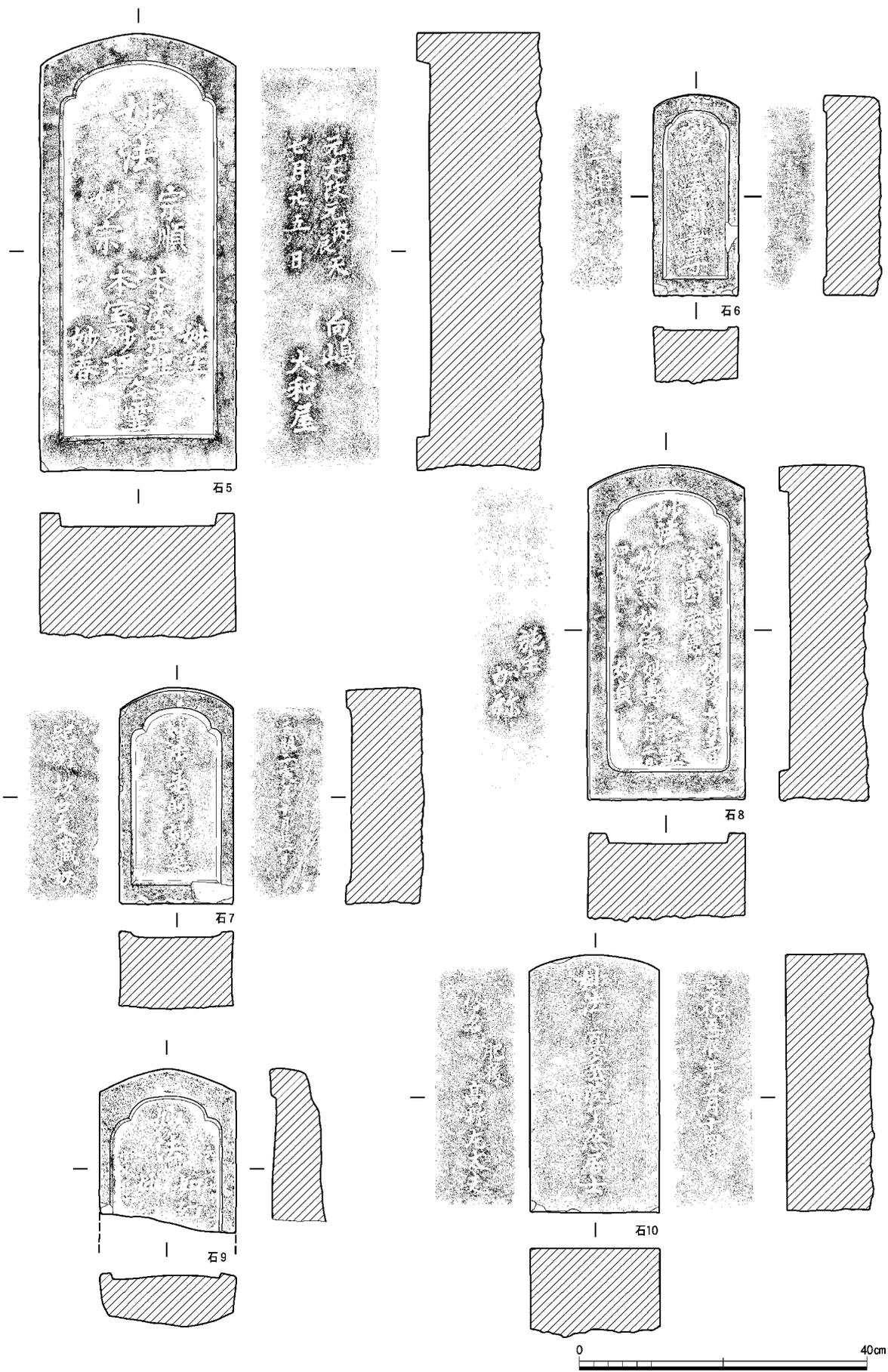


图60 1区出土墓石(1)

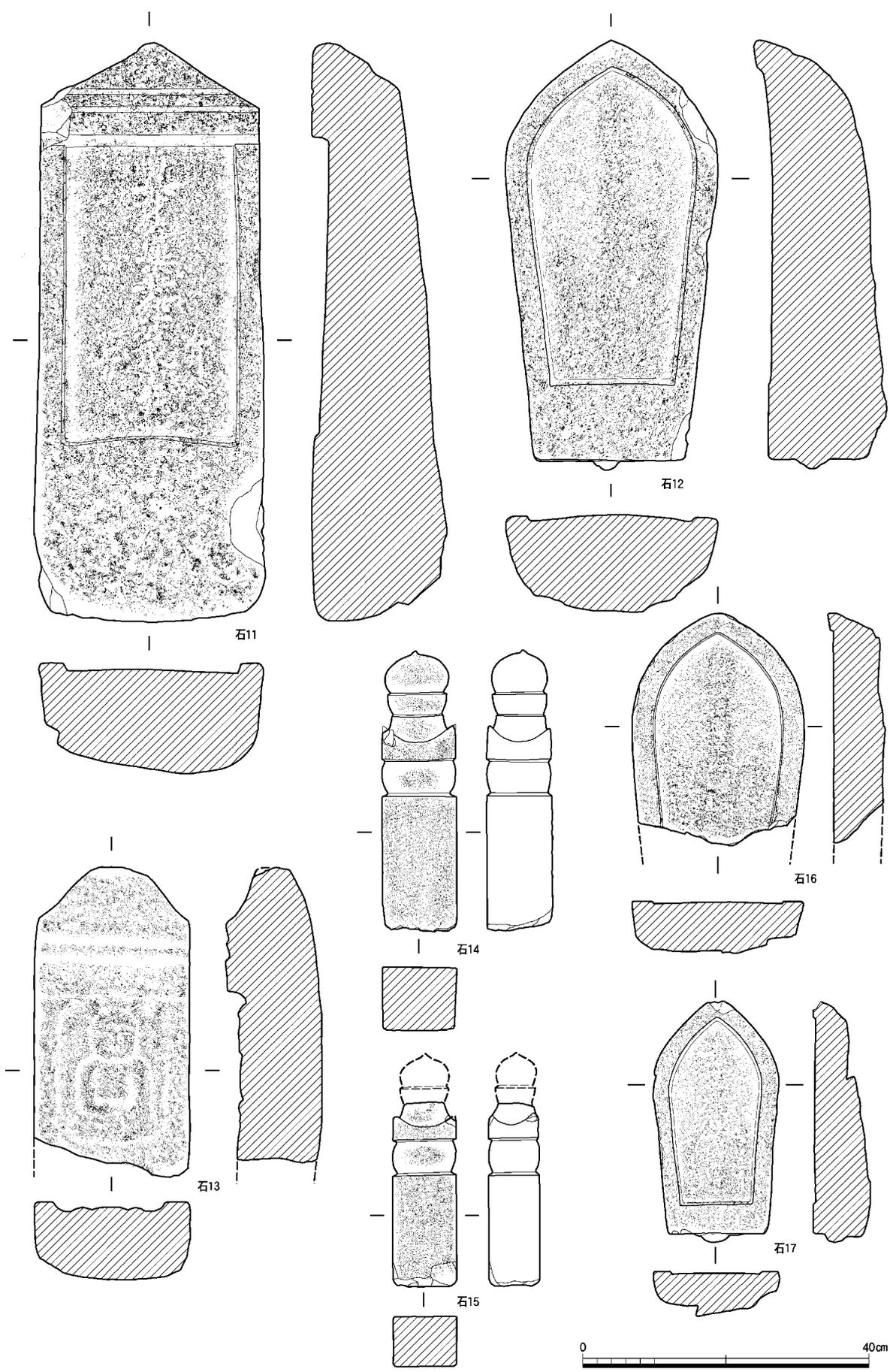


图61 1区出土墓石(2)

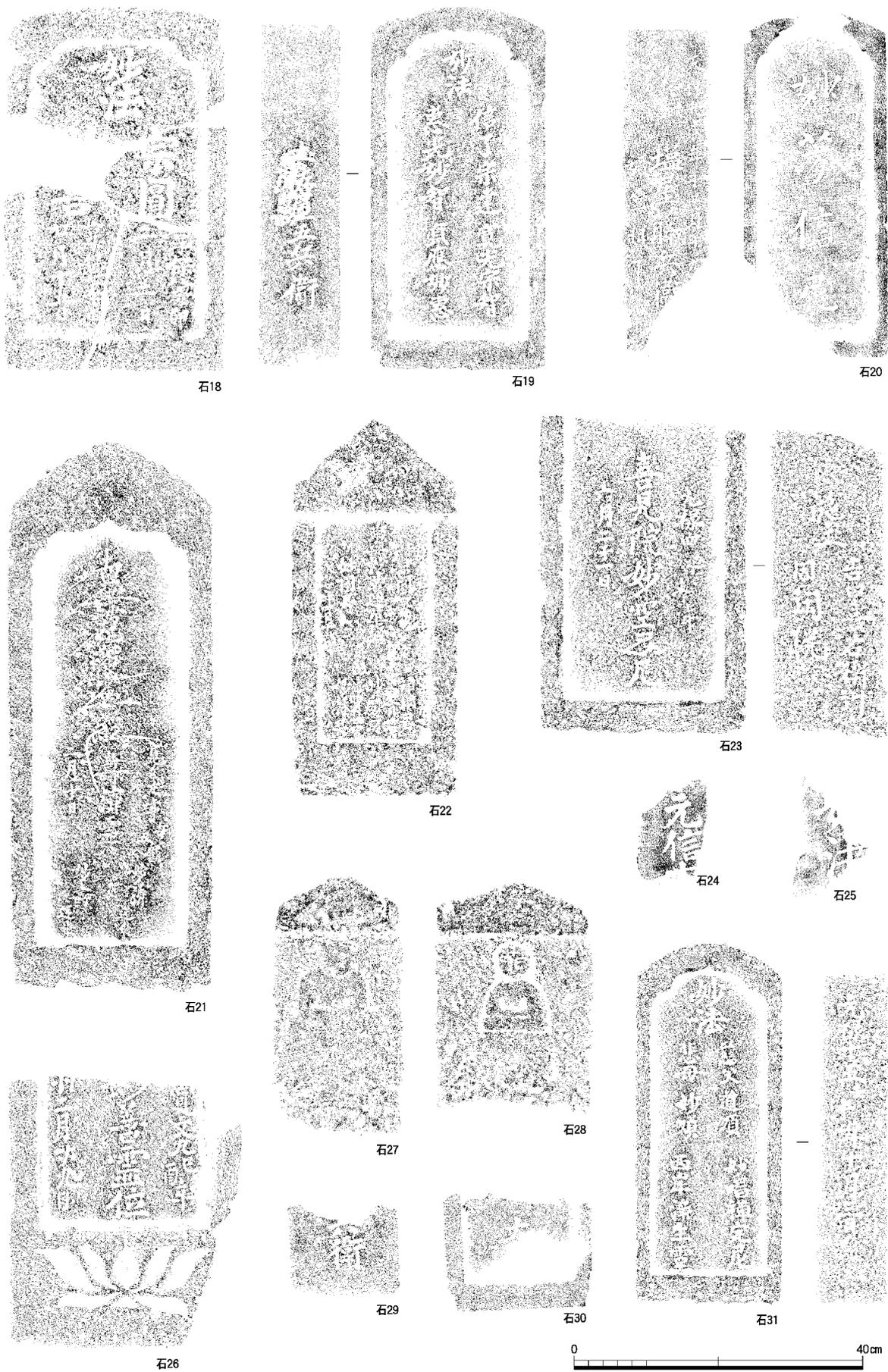


图62 1区出土墓石(3)、3区出土墓石

## 第4章 2区の調査

### 1 2区の遺構

#### (1) 基本層序と遺構の概要 (図63～65)

基本層序 調査区は1区東側にあたる。1区で検出した遺構との関連を確認するために1区の一部を再掘削した。2区は大部分が近代以降の著しい攪乱をうけ、地山まで削平されている。また、1区北東部の大規模な攪乱が2区にまで広がるため北西部の遺構は残っていない<sup>1)</sup>。

このような状況により基本層序が確認できた部分は調査区北東部・東部中央・西部中央の一部にすぎない。東部中央では盛土の厚さは約0.9mで、下面で検出した地山の窪みに1区第2層に対応

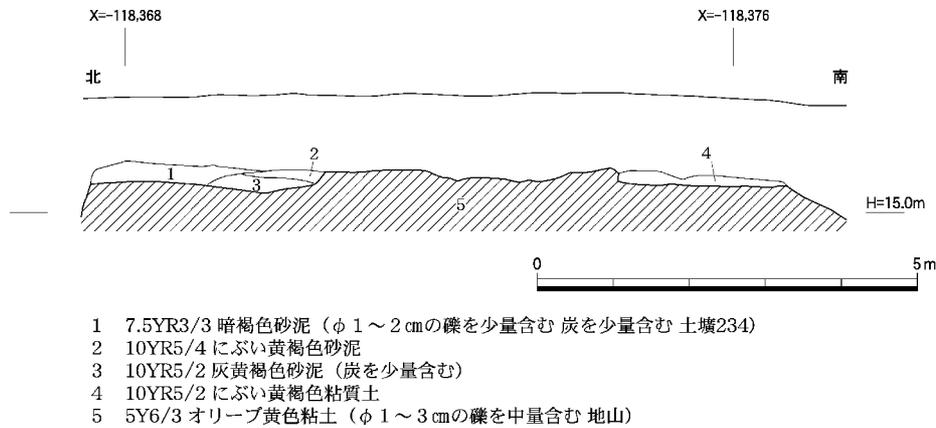


図63 2区東壁断面図

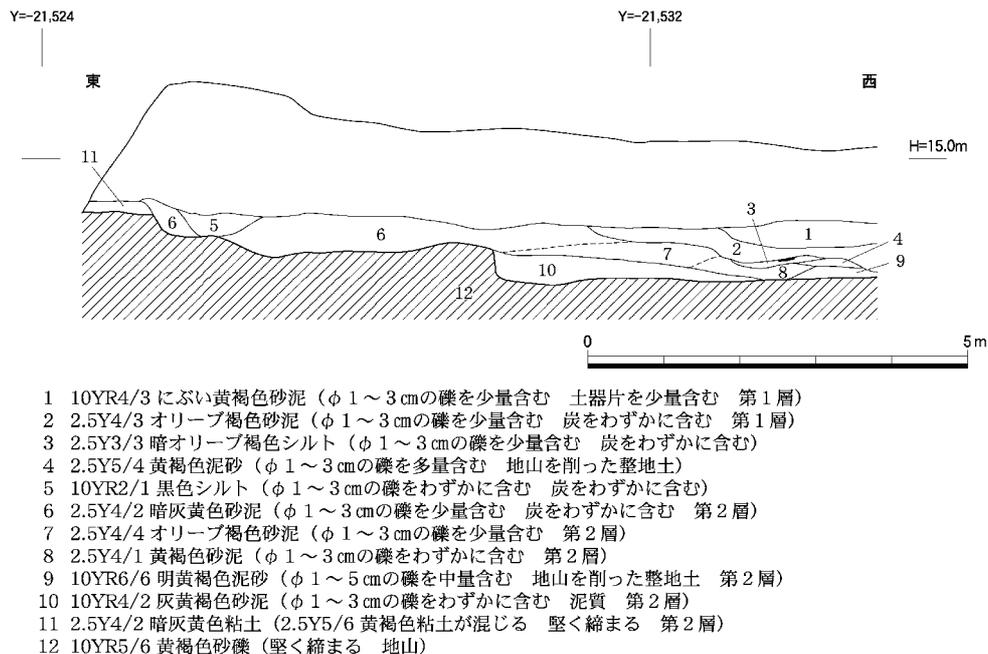


図64 2区南壁断面図



する厚さ約0.2～0.3mの灰黄褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥・粘質土が堆積する。西部中央では厚さ約1.1～1.6mの盛土と次の2層に分けることができる。第1層は厚さ約0.4～0.5mのにぶい黄褐色砂泥・オリブ褐色砂泥などからなる整地層で、後述する段差の西側に広がる。1区第1層に対応する。第2層は段差上部の厚さ約0.2mの暗灰黄色粘土および段差を埋めるように堆積する厚さ約0.2～0.5mの暗灰黄色砂泥・灰黄褐色砂泥などからなる整地層で、1区第2層に対応する。1区第3層に対応する層序はない。整地層の下層は礫を含むオリブ黄色粘土や黄褐色砂礫・褐色砂礫となる。非常に堅く締まっており、遺物を含んでいないことから地山と判断した。地山検出面は東部が西部よりも約1.0m高く、また、2区西端が1区東部よりも0.8m以上高いことから、削平をされてはいるものの西に向かって傾斜する地形であったことがわかる。

遺構の概要 検出した遺構総数は261基である。大部分が削平されていたため、盛土下面の1つの面で各時代の遺構調査を行った。ここでは新しい時期の遺構から順に報告する。また、検出遺構は1区・3区と比較して必ずしも多くないが、ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構、特殊な構造をもつ遺構を中心に報告する。なおまた、検出遺構が集中する墓地については、1区と同様、別に項をあらためてまとめることとする。調査地全体の歴史の変遷については第6章第1節で総括する。

## (2) 検出遺構 (図版19～22、図65)

江戸時代中期から後期の遺構には溝・土壇・井戸・墓地、桃山時代から江戸時代前期の遺構には段差・溝・土壇・井戸・柱穴、室町時代後期の遺構には溝・土壇・井戸がある。

溝72 西部中央の上段段差上部で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも攪乱され不明瞭となる。断面形は逆台形で、長さ12.0m以上、幅約0.3m、深さ約0.1～0.2mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は黒褐色砂泥で、18世紀中葉の遺物が出土した。

溝92 西部中央北寄りの上段段差下部で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも攪乱される。断面形は浅いU字形で、長さ14.0m以上、幅約0.5～0.7m、深さ約0.1mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は褐色砂泥で、18世紀の遺物が出土した。

土壇38 中央部北東寄りで検出した。南北約2.2m、東西約3.1mの不整形な平面形で、深さ約0.3mである。埋土は黒褐色砂泥で、17世紀末～18世紀前葉の遺物が出土した。

土壇51 (図版19-2・19-3、図66) 中央部北西寄りで検出した。平面形は南北約2.2m、東西約3.2mの方形で、深さ約0.9mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、底部と壁付近には約0.1～0.5mの厚さで褐色泥土が堆積する。褐色泥土からは17世紀後葉～18世紀前葉の遺物が出土した。

井戸2 南東部で検出した。平面形は直径約1.2mの円形で、深さ1.2m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。埋土はオリブ褐色砂泥で、18世紀前葉の遺物が出土した。

井戸60 北東部の攪乱底部で検出した。平面形は直径約1.3mの円形で、深さは検出面から2.0

m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。埋土はオリブ褐色砂泥で、18世紀後葉～19世紀中葉の遺物が出土した。

段差（図版23-1）西部で検出した。南寄りの部分は上下2段に分かれる。上段はY=-21,526m付近で、北側は攪乱されるが、南側は3区に延びる。攪乱される部分があるが、検出長は約36.0mである。地山を削り込んで成形しており、高低差は約0.4mである。下段はY=-21,530m付近で、北側は西部中央で不明瞭となり、南側は3区に延びる。攪乱される部分があるが、検出長は約16.0mである。地山を削り込んで成形しており、高低差は約0.4mである。上段段差と下段段差の間は幅約4.6

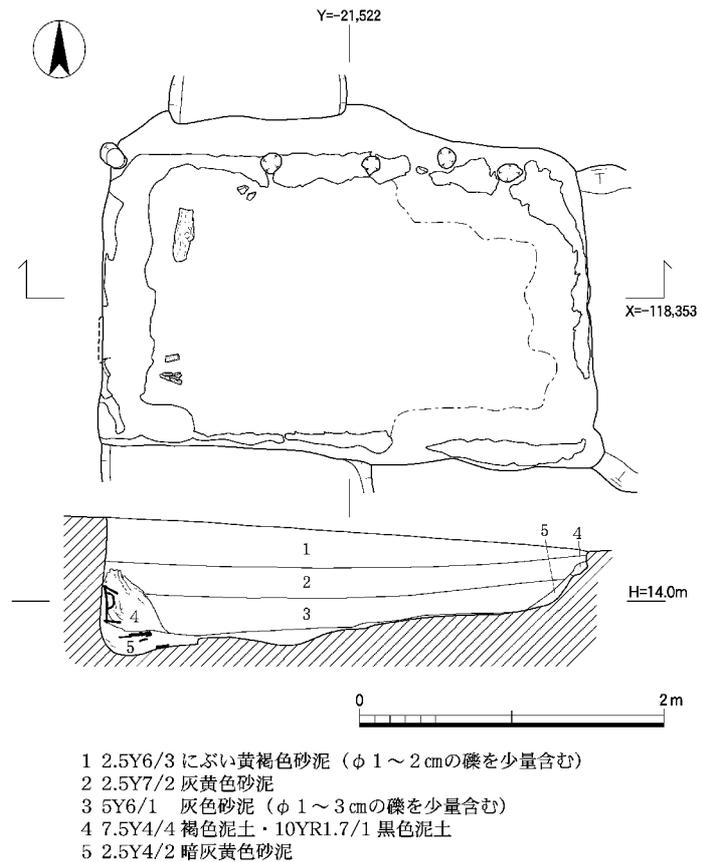


図66 2区土壌51実測図

mの平坦面となる。伏見城下町造営にあたって傾斜する地形を階段状に成形して平坦地を造り出した痕跡と考えられる。

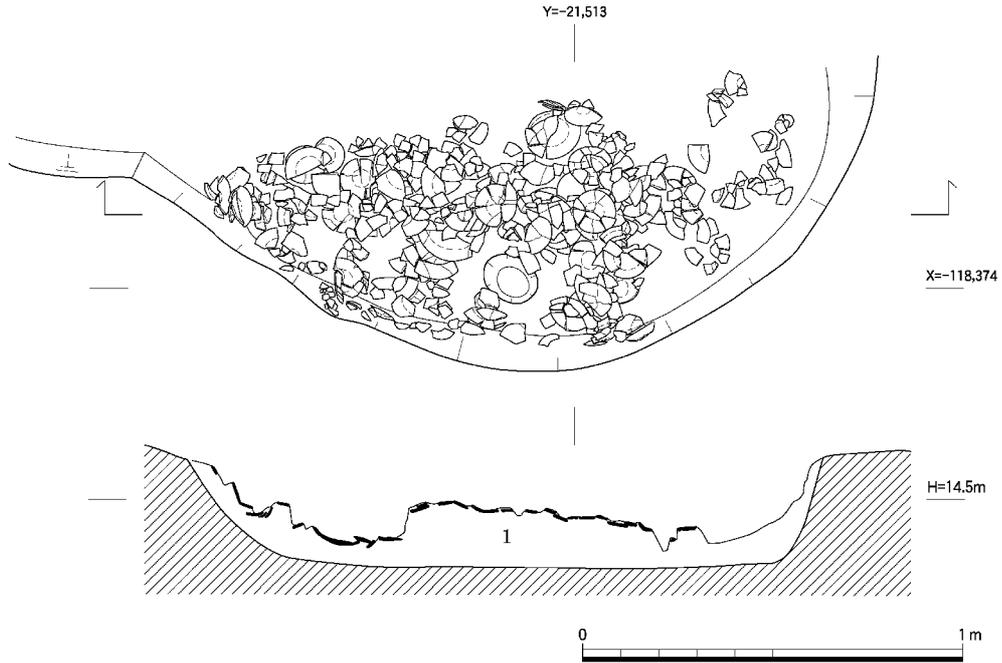
溝74 西部中央南寄りの上段段差下部で検出した南北方向の溝である。北側は攪乱されるが、南側は3区に延びる。断面形は浅いU字形で、長さ4.0m以上、幅0.5m以上、深さ約0.2mである。底部は高低差がほとんどない。埋土はオリブ褐色砂泥で、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

溝102 西部中央の段差間の平坦面で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも攪乱され不明瞭となる。断面形は浅いU字形で、長さ5.0m以上、幅約0.6m、深さ約0.1mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は暗灰黄色砂泥で、16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した。

溝185 西部中央の段差間の平坦面で溝102の東側に並んで検出した南北方向の溝である。北側・南側とも攪乱され不明瞭となる。断面形は浅いU字形で、長さ5.0m以上、幅約0.3～0.5m、深さ約0.1mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は暗灰黄色砂泥で、16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した。

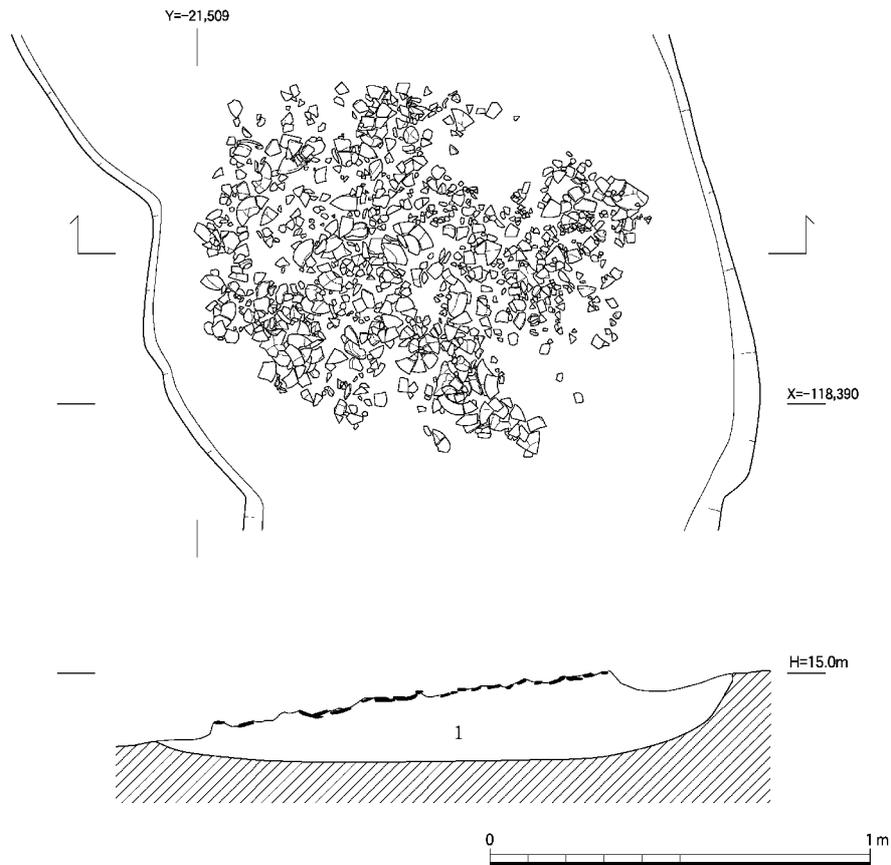
土壌20（図版21-1、図67） 中央部で検出した。北側は攪乱されるため、検出できた平面形は南北0.6m以上、東西約2.0mの半月形で、深さ約0.3mである。埋土は黒褐色砂泥で、17世紀初頭のほぼ完形の土師器皿がまとまって出土した。

土壌30（図版21-2、図68） 南東部で検出した。北側が攪乱されるが、南北約2.8m、東西約



1 2. 5Y3/2 黒褐色砂泥（黄色粘土ブロックを含む 炭を少量・土器片を多量含む）

図67 2区土壌20実測図



1 10YR3/3 暗褐色砂泥（φ5～10cmの礫を少量含む 炭を多量含む）

図68 2区土壌30実測図

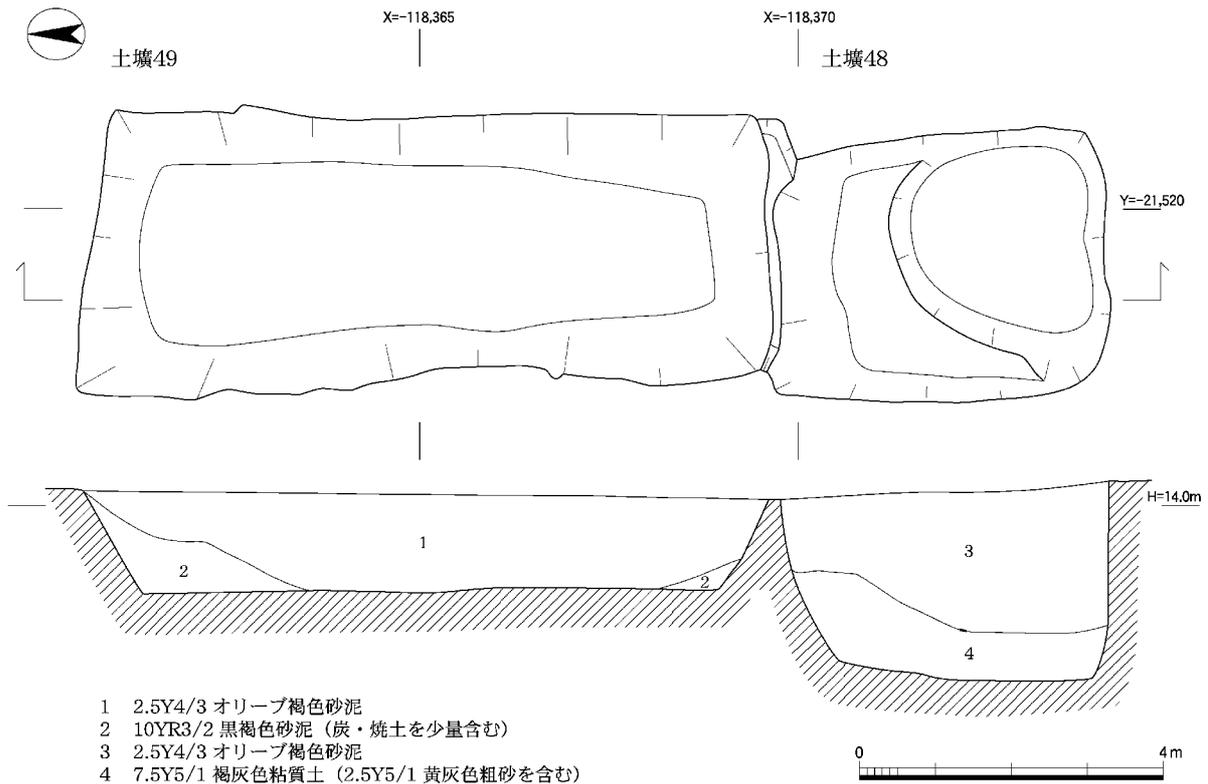


図69 2区土壇48・土壇49実測図

1.5mの不整形な楕円形に復元できる。深さ約0.2mである。埋土は暗褐色砂泥で、17世紀初頭の土師器皿が細片に割れた状態でまとまって出土した。

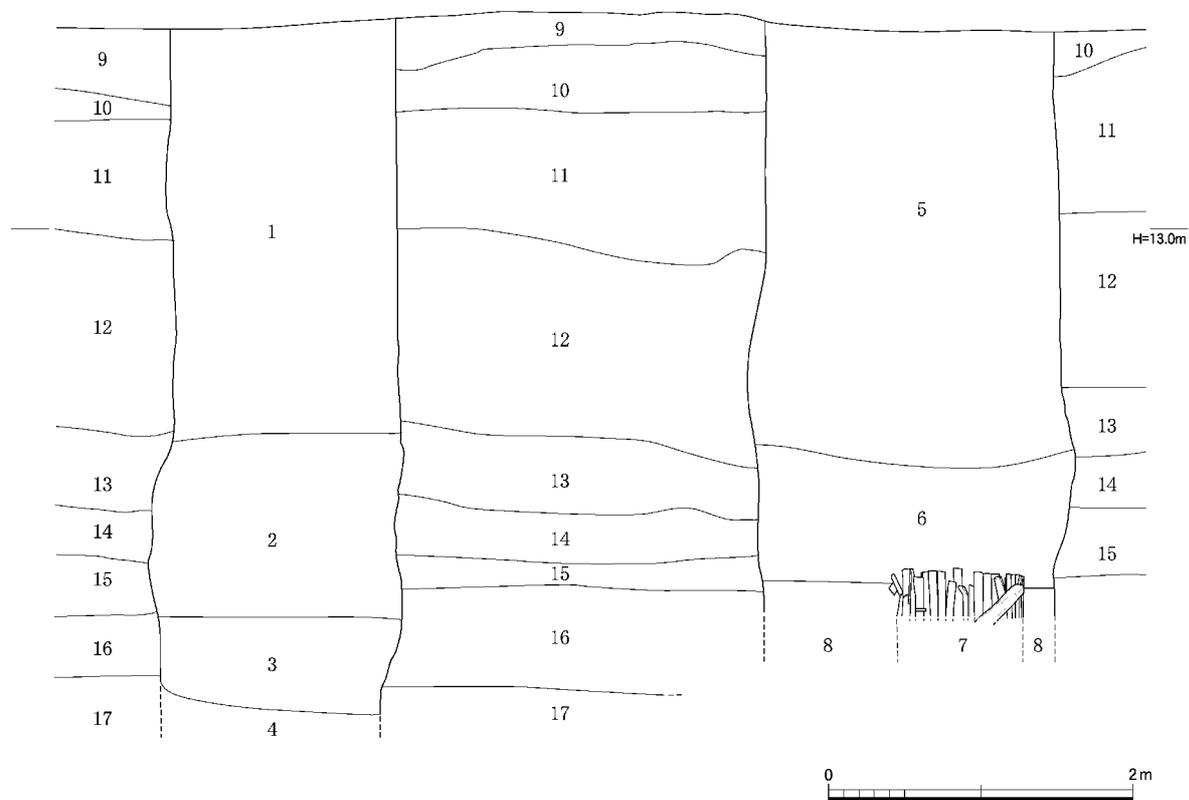
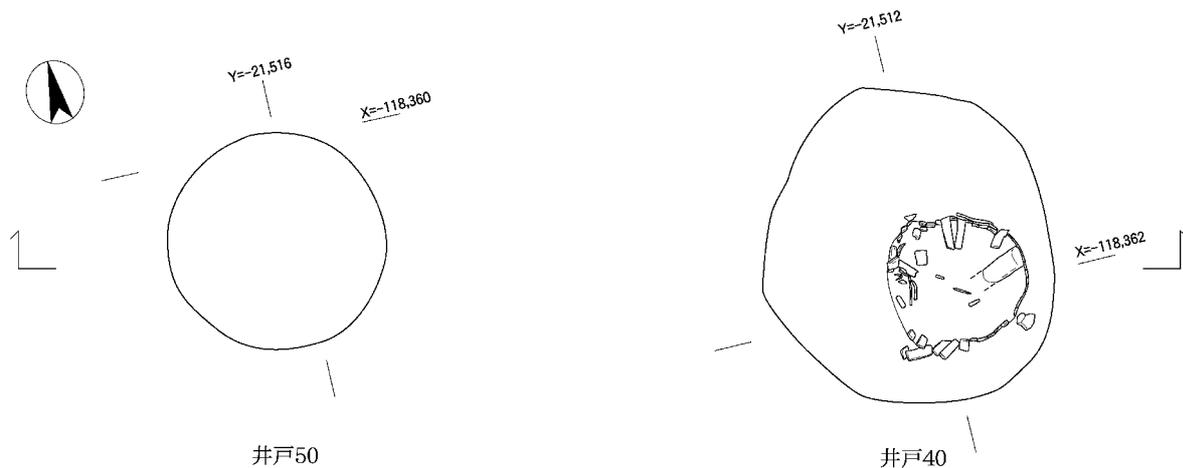
土壇45 中央部北西寄りで検出した。南側は土壇51に攪乱されるが、平面形は南北0.6m以上、東西約1.1mの方形に復元できる。深さ約0.5mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、17世紀前葉の遺物が出土した。

土壇48 (図版20-3・20-4、図69) 中央部で検出した。北側は土壇49に接するが、土壇48のほうが新しい。平面形は南北約4.4m、東西約3.6mの方形で、深さ約2.7mである。埋土は上層がオリーブ褐色砂泥で、下層は褐灰色粘質土に混じって褐色泥土が堆積する。また炭・焼土粒も含んでいる。上層と下層の2段階に分けて遺物を採集したが時期差は認められない。17世紀前葉の土器類・瓦類と漆器をはじめとする多量の木製品がまとまって出土した。

土壇49 (図版20-1・20-2、図69) 中央部で検出した。南側は土壇48に接する。平面形は南北約9.1m、東西約1.6mの長方形で、深さ約1.6mである。埋土は上層がオリーブ褐色砂泥で、下層は黒褐色砂泥に混じって褐色泥土が堆積する。上層と下層の2段階に分けて遺物を採集したが時期差は認められない。16世紀末～17世紀初頭の土器類と漆器をはじめとする多量の木製品がまとまって出土した。

土壇65 北東部で検出した。南北約4.8m、東西約2.1mの不整形な平面形で、部分的に攪乱される。深さ約0.3mである。埋土は褐色砂泥で、16世紀末～17世紀前葉の遺物が出土した。

井戸40 (図版21-3、図70) 中央部で検出した。平面形は直径約1.7mの円形で、深さ4.0m以



- |    |  |    |  |
|----|--|----|--|
| 1  | 10YR6/8 明黄褐色砂泥                           | 11 | 10YR7/2 にぶい黄橙色砂礫<br>(φ 3~6 cmの礫を多量含む 地山) |
| 2  | 5Y4/1 灰色泥土                               | 12 | 10YR7/6 黄橙色砂礫<br>(φ 5~10cmの礫を多量含む 地山)    |
| 3  | 5Y3/2 オリーブ黒色泥土                           | 13 | 2.5Y7/2 暗黄色砂礫<br>(φ 2~4 cmの礫を多量含む 地山)    |
| 4  | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥                           | 14 | 2.5Y7/1 灰白色砂礫 (地山)                       |
| 5  | 10YR6/8 明黄褐色砂泥                           | 15 | 7.5Y7/1 灰白色砂礫<br>(φ 3 cmの礫を多量含む 地山)      |
| 6  | 5Y4/1 灰色泥土                               | 16 | 7.5Y6/1 灰色砂礫 (地山)                        |
| 7  | 2.5Y5/1 黄灰色粘土                            | 17 | 10YR8/1 灰白色泥砂 (地山)                       |
| 9  | 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥<br>(φ 1~2 cmの礫を多量含む 地山) |    |  |
| 10 | 10YR7/1 灰白色砂泥 (地山)                       |    |  |

図70 2区井戸40・井戸50実測図

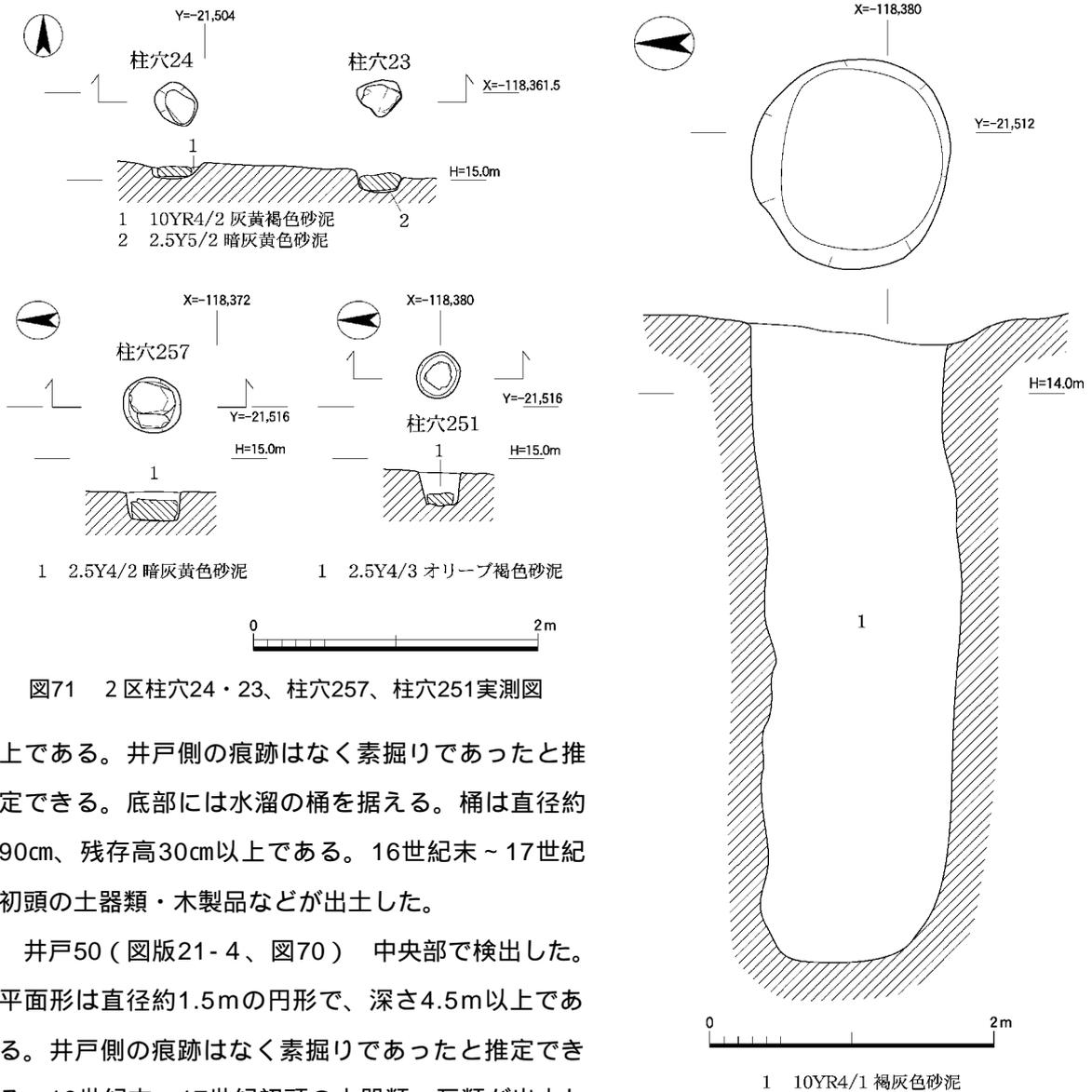


図71 2区柱穴24・23、柱穴257、柱穴251実測図

上である。井戸側の痕跡はなく素掘りであったと推定できる。底部には水溜の桶を据える。桶は直径約90cm、残存高30cm以上である。16世紀末～17世紀初頭の土器類・木製品などが出土した。

井戸50（図版21-4、図70）中央部で検出した。平面形は直径約1.5mの円形で、深さ4.5m以上である。井戸側の痕跡はなく素掘りであったと推定できる。16世紀末～17世紀初頭の土器類・瓦類が出土した。

図72 2区井戸10実測図

井戸62 北東部で検出した。平面形は直径約1.7mの円形で、深さ2.0m以上である。井戸側の痕跡はなく素掘りであったと推定できる。埋土は褐色砂泥で17世紀初頭の遺物が出土した。

柱穴23・24（図版22-1、図71）東部中央で検出した東西方向の柱穴列である。攪乱の肩部で検出したことから、さらに東西方向に延びる可能性がある。検出した柱穴は2基で、検出長は約1.0mである。柱穴は直径約0.3～0.4m、深さ約0.1mで、中央に大きさ約20～30cmの平たい石を据える。出土遺物はない。

柱穴251（図版22-3、図71）南部中央で検出した。直径約0.4m、深さ約0.3mで、中央に大きさ約30cmの石を平坦な面を上にして据える。出土遺物はない。南側で検出した柱穴125と柱穴列になる可能性がある。

柱穴257（図版22-2、図71）中央部南寄りで検出した。直径約0.3m、深さ約0.3mで、中央に大きさ約20cmの平たい石を据える。出土遺物はない。南側で検出した柱穴254と柱穴列になる

可能性がある。

溝14 南東部で検出した東西方向の溝である。西側は攪乱されるが、東側は調査区外に延びる。断面形は浅い逆台形で、長さ5.2m以上、幅約0.8～1.1m、深さ約0.2mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土は暗黄灰色砂泥で、16世紀前葉の遺物が出土した。

溝241 中央部北寄りで検出した東北東から西南西方向の溝である。東側・西側とも攪乱される。断面形は浅いU字形で、長さ7.4m以上、幅約0.4～0.5m、深さ約0.1mである。底部は西南西に向けてわずかに傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂泥である。出土遺物はない。

溝261 北東部で検出した北北西から南南東方向の溝である。北側は攪乱され、南側は調査区外に延びる。断面形は浅い逆台形で、長さ1.7m以上、幅約0.1m、深さ約0.1mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は灰オリーブ色粘質土で、16世紀の遺物が少量出土した

土壙55(図版22-4) 南部で検出した。平面形は南北約1.0m、東西約1.1mのほぼ円形で、深さ約0.2mである。埋土は黒褐色砂泥で、16世紀後葉の遺物がまとまって出土した。

井戸10(図版22-5、図72) 南東部で検出した。平面形は直径約1.5mの円形で、深さ約4.5mである。井戸側の痕跡はなく素掘りであったと推定できる。16世紀前葉の遺物が出土した。

### (3) 墓地(図版23、図92～97)

墓地は調査区西部中央で検出した。1区から続く墓地の東端を確認することができた。平坦をつくり出す為に、西に向かって傾斜する地山を削り込んで段差を設けている。墓地の東端となる下段段差は北にも延びるが、埋葬施設が造られている平坦面は墓地北端で消滅する。この西側の段差は墓地を東に拡張するために造り出されたものと考えられる。1区で検出した墓地の南北を区画する溝180・溝280は、2区では検出できなかった。墓地の状況は、基本的に1区と同様であるが埋葬施設の重複は少ない。これらは6期から3期に属し、2区には2期・1期の埋葬施設はない。

埋葬施設は、方形木棺11基・円形木棺16基・直葬1基・不明12基の合計40基確認できた。

6期 幕末から昭和(19世紀中葉～20世紀前葉)の墓地である。不明の4基である。その他に、動物の墓を1基確認している。

埋葬146 PR地区で検出した。標高は13.9mである。埋葬施設は不明である。掘形規模は長辺40cm、短辺34cmである。人骨は出土していない。

埋葬208 QR・QS地区で検出した。標高は13.8mである。埋葬施設は不明である。掘形規模は直径75cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は成人男性・性別不明の9歳児の2体である。

5期 江戸時代後期(19世紀前葉～中葉)の墓地である。方形木棺5基・円形木棺6基・直葬1基・不明1基の合計13基である。

埋葬77(図版23-2) QS地区で検出した。標高は13.1mである。埋葬施設は長辺48cm、短辺45cmの方形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は長辺70cm、短辺65cmである。葬法は土葬

で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は壮年男性・熟年男性の2体である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬164 QS地区で検出した。標高は13.8mである。埋葬は直葬で、遺存状態は不良である。規模は長辺94cm、短辺60cmである。土葬の改装である。人骨の遺存状態はやや不良である。被葬者は性別不明の老年である。

埋葬202 RR・RS地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。直径50cmの底板のみ検出した。掘形規模は直径75cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

埋葬216 (図版23-3) PR・PS地区で検出した。標高は13.3mである。埋葬施設は直径50cmの円形木棺で、遺存状態は不良である。掘形規模は直径66cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は壮年男性である。

4期 江戸時代中期から後期(18世紀中葉～19世紀前葉)の墓地である。方形木棺5基・円形木棺6基・不明5基の合計16基である。

埋葬203 RR地区で検出した。標高は13.6mである。埋葬施設は方形木棺で、遺存状態は不良である。木棺の規模は不明である。掘形規模は一辺80cmである。埋葬202に北東側を壊されている。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は老年男性である。

埋葬214 (図版23-4) PS地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は一辺50cmの方形木棺で、遺存状態はやや不良である。掘形規模は長辺85cm、短辺75cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は壮年男性である。掘形から性別不明の成人の骨が出土している。

埋葬220 PR・PS地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。直径48cmの底板のみ検出した。掘形規模は不明である。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は年齢・性別不明である。

埋葬239 PR地区で検出した。標高は13.5mである。埋葬施設は不明である。埋葬136・埋葬219・埋葬220に壊されて、全壊状態であるが土師器皿2個を、底板片の上ののった状態で検出している。人骨は出土していない。

3期 江戸時代中期(17世紀後葉～18世紀中葉)の墓地である。方形木棺1基・円形木棺4基・不明2基の合計7基である。

埋葬201 (図版23-5) RS地区で検出した。標高は13.4mである。埋葬施設は円形木棺で、遺存状態は不良である。直径50cmの底板のみ検出した。掘形規模は直径70cmである。葬法は土葬で、人骨の遺存状態は不良である。被葬者は成人女性である。

## 2 2 区の遺物

### (1) 遺物の概要

2区では整理用コンテナに117箱の遺物が出土した。出土遺物は土器類、陶磁器類、土製品、木製品、瓦類、石製品、金属製品などである。大部分は土器・陶磁器類と木製品が占める。室町時代後期から江戸時代中期に至る各時代の遺物である。

江戸時代後期の遺物は、土壌、井戸などから出土しているが、数量的に少なく、1区で多数を取り上げたことから、この稿では除外した。18世紀末～19世紀代にかかる遺物が大半で、18世紀中頃の遺物はごく少量であった。

江戸時代中期の遺物は、土壌から出土しており、17世紀末～18世紀前半に属するが少量である。木製品では下駄・食膳具、他に石製品がある。

桃山時代から江戸時代前期にかけての遺物は土壌、井戸などから出土している。土壌からは一括遺物として土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などが豊富に出土している。1区同様に国産施釉陶器では美濃・唐津、輸入陶磁器には青花、焼締陶器は信楽・備前・丹波などが多い。また土師器にはX群土師器皿の出土が多数ある。木製品は多種多様である。

室町時代後期の遺物は、伏見城城下町成立以前の井戸、土壌、溝などから出土している。1区同様に数量的には限られ、図示できたものは少ないが、土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などがある。

これらより古い時期の遺物は、ごく少量が混入遺物として出土した。以下では時代の新しいものから順に遺物の概略を述べる。

### (2) 主要な遺構出土遺物

土壌51出土遺物(図版45・65) 土壌51からは土師器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、木製品、石製品などが出土している。出土土器は江戸時代中期(17世紀末～18世紀前半)に属する。

土師器には焙烙(661)がある。底部は台型成形、継ぎ足され直立する口縁部はナデ、端部は丸くおさめる。

瓦器には火鉢(662)がある。2条の凹線内に花文を印刻される。口縁部は欠損しているが蓋受部を有する。

焼締陶器には信楽の壺(663)、備前の擂鉢(664)がある。壺は口縁端部が内外に丸く突出するもの。口縁上端部はわずかに窪みとなる。内外面には鉄泥が施される。擂鉢は灰色の非常に堅微な胎土をもち、体色は暗褐色を帯びる。口縁部は丸くおさめられた三角形の縁帯となる。口縁部内面に1条、縁帯部に2条の凹線を有する。擂目は9本1単位で密に入る。

京焼には灰釉小椀(668)がある。高台は丁寧なケズリ出され、外端面は面取りされる。

唐津には皿(666)、椀(665)がある。皿は体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が屈曲す

る。腰部まで灰釉が施される。見込みは蛇の目釉八ギ。椀は刷毛目椀で、畳付以外は全面に釉が施され、見込みは釉八ギされる。高台際には指圧痕が残る。

伊万里には瑠璃釉を施された香炉（667）がある。上絵で橋を渡る人物2名と雲・松らしきものが描かれる。彩色は不明。

木製品には漆器、箸、桶、折敷、編物、竹製品、箒、棒状木製品、板状木製品、建築部材、端材などがある。

漆器には椀（木140）がある。木140は丸椀で一部が欠損する。高台は高い輪高台である。塗りは内外面とも黒色で、体部外面に銀蒔絵で太丸に花菱の紋を描く。その他の椀には塗りは内面が赤色で外面が黒色のもの、内外面とも赤色のもの、内外面とも茶色のものがある。また、内面に焦痕があるものなどがある。箸は長軸方向に加工し、端面は切り落とす。桶は底板・側板が分解した状態で出土したものがほとんどであるが、底径約21cm、高さ約10cmに復元できるものがある。折敷は全て破損している。

編物は細く切った樹皮を編んだ容器の破片と考えられる。分解しており、詳細は不明である。

竹製品は輪切りにして節を抜く。容器の破片と考えられる。箒は植物の繊維を紐で束ねる。柄は欠損する。

棒状木製品には方柱状で鉄釘が付くものがある。板状木製品には平面形が長方形のもの、先端が尖るもの、鉄釘がつくものがある。建築部材には屋根板がある。

井戸62出土遺物（図73） 井戸62からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、瓦などが出土している。出土土器は江戸時代前期（17世紀前半）に属する。

土師器皿には圈線が巡る大皿（38）がある。体色は橙色で、口縁部はわずかに端面をもつ部分がある。圈線は弱く2条に巡る。

美濃には天目茶椀の底部（40）がある。見込みの4方に目跡が残る。腰部以下は露胎で、底部は削り出し高台。

焼締陶器には備前の播鉢（39）がある。口縁部が直立するようにつまみ上げられ縁帯となり、凹線が2条みられる。

土壙45出土遺物（図74、表16） 土壙45からは土師器、焼締陶器、瓦などが出土している。大半が土師器皿である。出土土器は江戸時代前期（17世紀前半）に属する。

土師器には丸底小皿（41～43）、圈線が巡る中皿（46～49）、圈線が巡る大皿（50～56）、圈線が巡る特大皿（57～60）、X群土師器皿（61）、耳皿（44・45）がある。丸底小皿は口径9.4～9.9cm、器高1.9～2.1cm。圈線が巡る中皿は口径10.2～10.8cm、器高1.8～2.4cm。圈線が巡る大皿は口径12.0～13.0cm、器高2.0～2.5cm。圈線が巡る特大皿は口径16.0～20.8cm、器高2.1～2.9cm。X群土師器皿は口径11.8cm、器高2.1cm。48を除き橙色系で、器壁のやや厚い

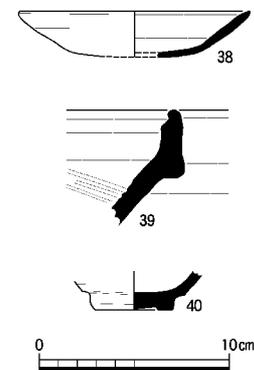


図73 2区井戸62出土土器

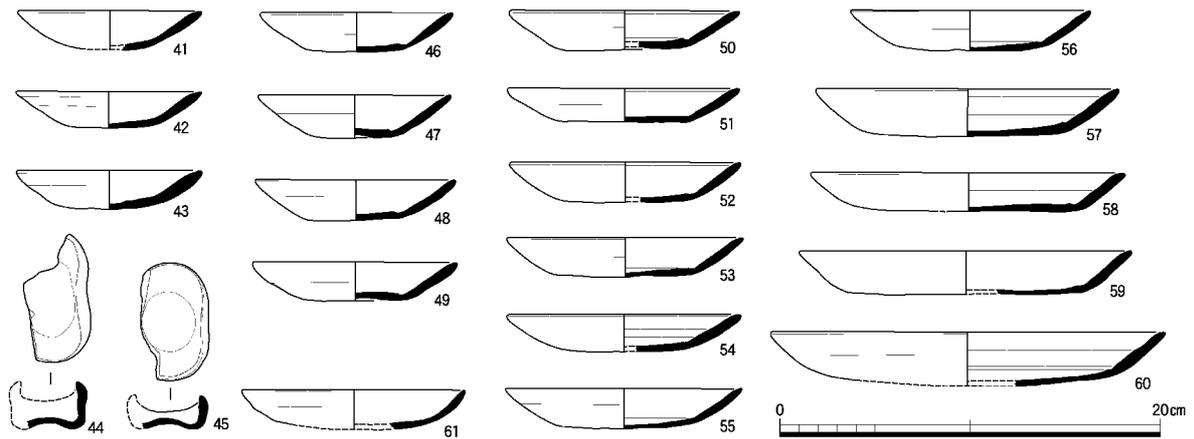


図74 2区土壌45出土土器

表16 2区土壌45土師器法量分布

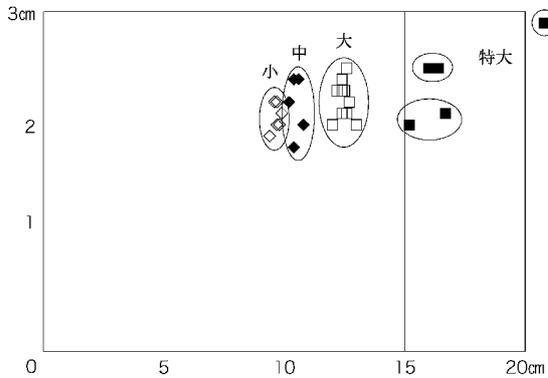


表17 2区土壌30土師器法量分布

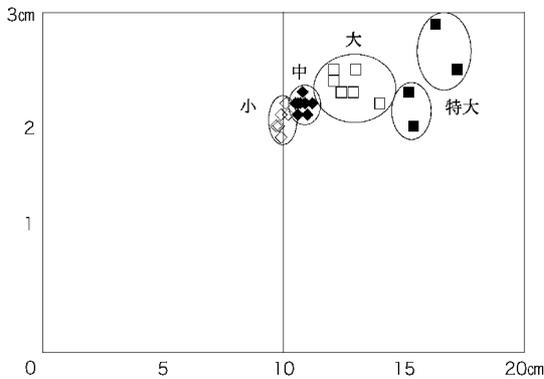
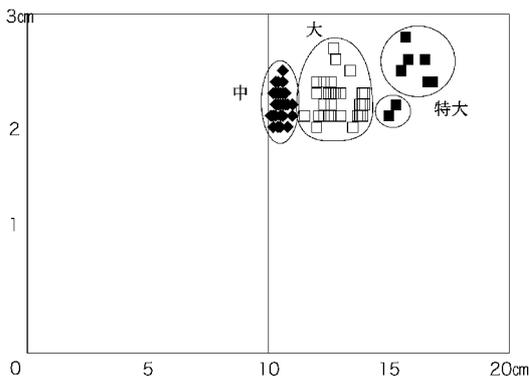


表18 2区土壌20土師器法量分布



ものが多い。圏線が巡る特大皿には口径20cmを超えるものがみられる。X群土師器皿は器壁が薄く、煤が付着する。耳皿は口縁端部を両側から内へ折り曲げ、底部中央は盛り上げられる。

土壌30出土遺物（図75、表17）土壌30からは土師器皿が多量に出土している。総破片数は2,110片である。他は土師器焙烙、焼塩壺蓋、瓦器、瀬戸・美濃などの4片のみである。破片数の割に接合復元できるものが少ないことから、破棄された破片を、新たに埋めた可能性がある。出土土器は桃山時代から江戸時代初頭（16世紀末～17世紀初頭）に属する。

土師器には丸底小皿（62～66）、圏線が巡る中皿（67～70）、圏線が巡る大皿（71～74）、圏線が巡る特大皿（75～77）、耳皿（78～80）がある。丸底小皿は口径9.7～10.2cm、器高1.9～2.1cm。圏線が巡る中皿は口径10.5～11.2cm、器高2.1～2.2cm。圏線が巡る大皿は口径12.1～13.4cm、器高2.2～2.5cm。圏線が巡る特大皿は口径15.2～17.2cm、器高2.0～2.5cm。後述する土壌20と比較して体色が橙色系のものが多く、全体の成形も粗雑なものが多い。耳皿はわずかに内面中央部が盛り上がる。焼塩壺蓋（81・82）は全体に丸みを持った形態。

土壌20出土遺物（図76、表18）土壌20から

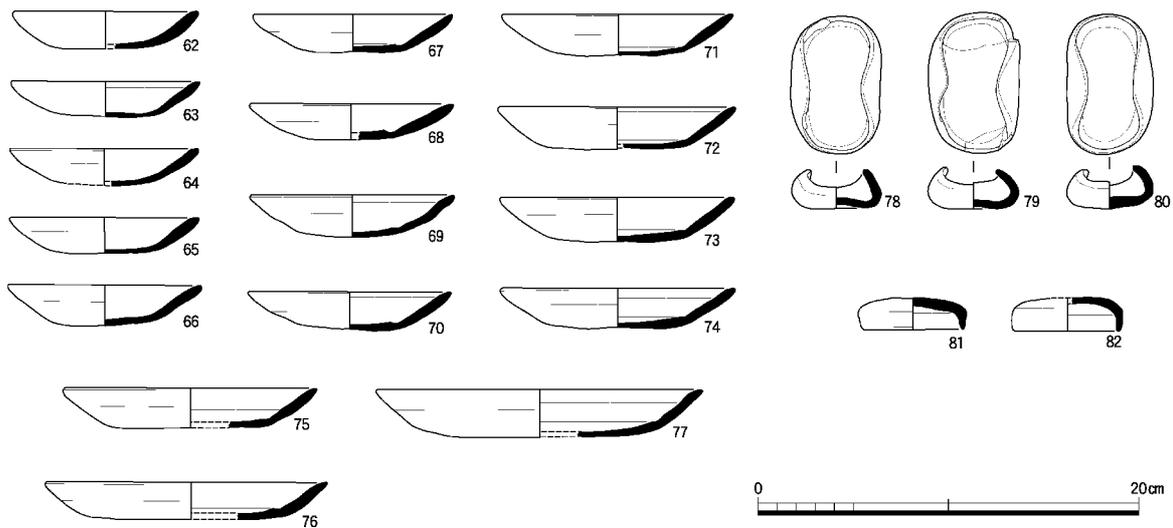


图75 2区土壤30出土土器

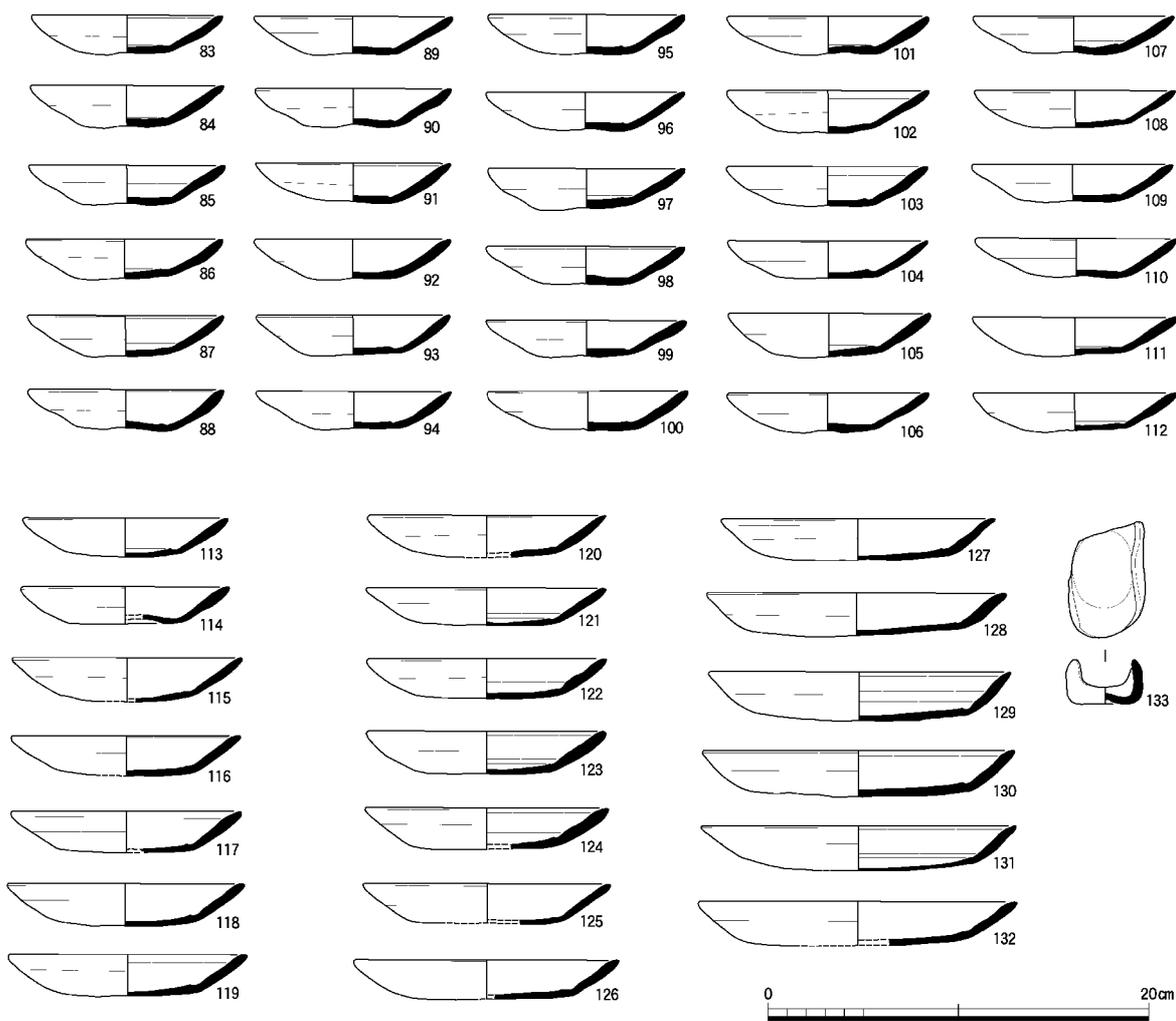


图76 2区土壤20出土土器

は土師器皿のみ多量に出土している。総破片数は1724片である。出土土器は江戸時代初頭（17世紀初頭）に属する。

土師器皿には圏線が巡る中皿（83～114）、圏線が巡る大皿（115～127）、圏線が巡る特大皿（128～132）、耳皿（133）がある。粗製小皿と丸底小皿はない。圏線が巡る中皿は口径10.1～11.5cm、器高2.0～2.4cm。圏線が巡る大皿は口径11.5～14.4cm、器高2.0～2.6cm。圏線が巡る特大皿は口径15.0～16.8cm、器高2.1～2.8cm。圏線が巡る特大皿はその中で器高の低いものと、高いものに分かれ、底部内面に煤の付着したものである。これらはいずれも口縁部にわずかな端面をもち、圏線はやや幅の広く浅いものが多い。圏線は時計回りに施し、立ち上がりで反対方向にナデ上げる成形が主体。また体色の灰色がかかったものは圏線の成形、口縁端部を丁寧に仕上げたものが多く、器壁の薄手のものがある。橙色のものは口縁部が厚手で、成形が粗いものが多い印象を受ける。耳皿は口縁端部を両側から内へ折り曲げる。底部中央は盛り上げられる。

井戸40出土遺物（図版45・65・81・83・86）井戸40からは土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、木製品、瓦などが出土している。土器類は少量で、そのうち国産施釉陶器には美濃・唐津がある。少ないながらも唐津が美濃を凌ぐ傾向にある。出土土器は桃山時代から江戸時代初頭（16世紀末～17世紀初頭）に属する。

土師器には丸底小皿（647）、圏線が巡る大皿（650）がある。647は小片で器高が低い。650は内面に金箔が残る。土製品の焼塩壺（648・649）は649が丸みをもつが、どちらも筒状に近い。

焼締陶器には信楽擂鉢（652）、備前徳利（651）がある。擂鉢は口縁端部が外上方に小さく突出する。擂目は6本1単位である。内面の中位以下は磨滅し平滑で使用痕が顕著。徳利は完形品である。赤褐色の体色を有し、焼成により一部暗褐色の火色がみられる。腰部には縦に5条のヘラ記号が描かれる。

唐津には椀（654・655・657）、小椀（653）、皿（656）、把手付き汁注ぎ（658）がある。椀は腰部が露胎となる青唐津椀。655は腰部から屈曲して立ち上がり、口縁部に至る半筒形椀。灰白色釉と灰釉が掛け分けされる。654は腰部に丸みをもつ半筒形椀。口縁部は鉄絵が施されたいわゆる皮鯨。体部にも簡素な文様が描かれる。653は屈曲して立ち上がる、小型の半筒椀。いずれも高台はチリメン皺の兜巾状を呈する。656は青唐津の端反皿で、口縁部が強く外反する。高台畳付には離砂が付着する。把手付き汁注ぎは大型のものである。藁灰釉が全面に施され、体部はわずかに丸みをもち立ち上がる。口縁部は方形状に肥厚気味。上方には直線的な注口、その直上口縁部には、欠損しているが二股の把手が付くものか。

美濃には燭台（659）がある。灰釉が底部以外に施される。下端に油受け、上端に油皿を有する。油皿中央には灯芯の孔が穿たれる。

輸入陶磁器には青花の皿（660）がある。高台以外に白濁した釉が施される粗製の青花である。見込みは盛上り気味となり、壽文が描かれる。

瓦には棟端飾瓦（瓦24）がある。瓦当裏面は粗い指ナデ。瓦当面の文様は貼り付けているが残りが少なく形は不明である。外縁の立上り部分は指ナデ調整である。

木製品には漆器、箸、籠、桶、折敷、箒、下駄、付札、楔形木製品、棒状木製品、板状木製品、建築部材、加工痕のある部材、端材、焼材などがある。

漆器には椀（木141～木143）と方柱形製品がある。木141は丸椀で欠損部分が多い。高台は輪高台である。塗りは内面は赤色、外面は黒色である。体部に大きな円形の穿孔がある。木142は椀で一部が欠損する。高台は輪高台である。塗りは内外面とも赤色で施文はない。木143は大型の丸椀で一部が欠損する。高台は高い輪高台である。塗りは内外面とも黒色で、施文はない。椀には体部外面に赤色の漆で文様を描くものがある。方柱形漆製品は表裏2面に黒色の漆を塗る。用途は不明である。

箸はまとめて出土した。長軸方向に加工し端面は切り落とす。端部が焦げていることから付木に転用した可能性があるものがある。籠は板状で片刃状に尖るものがある。桶は底径約32cm、高さ約32cmに復元できるものがある。折敷は全て破損しているが、墨書があるものがある（木278・木279）。箒は植物の繊維を紐で束ねる。柄は欠損する。下駄はいずれも一木作りである。平面形は方形と小判形がある。長さ9cm以上、幅約4.5cmの小型品がある。小児用のものであろう。いずれも歯は磨り減っている。付札には墨書があるものがある（木275・木277）。楔形木製品は一端を尖らせる方柱形で、大小さまざまである。実際に楔として使用したかは不明である。棒状木製品は断面形が円形、半円形、正方形、長方形のものなどさまざまな形態があるが、いずれも用途は不明である。板状木製品は平面形が正方形のもの、長方形のもの、細長いもの、いびつな円形のもの、不整形なもの、一端に多数の切れ目があるもの、端部を面取りするもの、先端が尖るもの、片刃状のもの、舟形のもの、円盤形のもの、鉄釘が付くものなどさまざまな形態のものがあるが、いずれも用途は不明である。墨書のあるものがある（木274・木276）。建築部材には壁の木舞・屋根板がある。加工痕のある部材には鉄釘が付く角柱状木製品、両端を削いだ丸太などがある。

土壙48出土遺物（図版46・64・65・76・77・82～85・94、図77・79、表19・20）土壙48からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、木製品、瓦などが出土している。出土土師器の総破片数は218片である。その内訳は土師器70.6%、瓦器0.9%、焼締陶器16.1%、国産施釉陶器8.7%、輸入陶磁器3.7%である。そのうち国産施釉陶器は美濃31.6%、唐津68.4%と唐津が大半を占め、美濃を凌ぐ傾向にある。美濃にはわずかに志野が含まれるが、織部は含まない。出土土師器は江戸時代前期（17世紀前半）に属する。

土師器には粗製小皿（669・670）、丸底小皿（671～675）、圏線が巡る中皿（677）、圏線が巡る大皿（678～681）、圏線が巡る特大皿（682）、X群土師器皿（676）、鍋（684）、羽釜（683）などがある。粗製小皿は口径6.1～7.0cm、器高1.4～1.8cm。丸底小皿は口径9.2～10.3cm、器高1.8～2.3cm。圏線が巡る中皿は口径11.1～11.6cm、器高2.1～2.0cm。圏線が巡る大皿は口径13.2～14.0cm、器高2.1～2.4cm。圏線が巡る特大皿は口径16.4cm、器高2.1cm。粗製小皿はいずれも底部中央が盛り上がる。口縁部に煤が付着し灯明皿に使用された可能性がある。丸底小皿の674・675は胎土が灰白色に近く、精良で堅緻である。丸底小皿671・672、圏線が巡る中皿677は灯明

表19 2区土壌48土師器法量分布

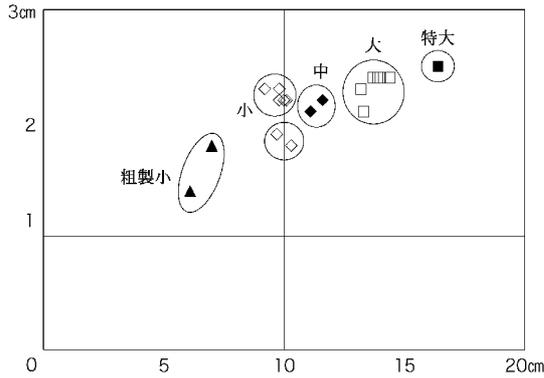


表21 2区土壌49土師器法量分布

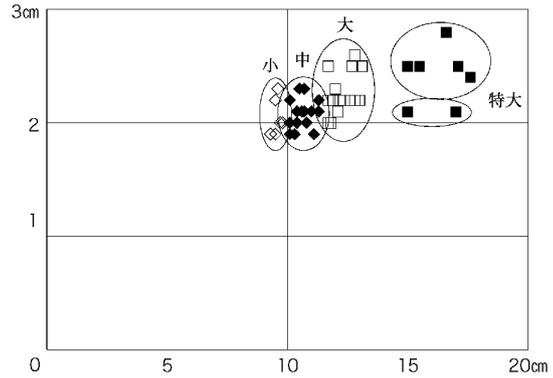


表20 2区土壌48出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	109	70.8%	70.6%	
	鍋・釜	20	13.0%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	他・不明	25	16.2%		
	小計	154	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	0	0.0%	0.9%	
	釜	2	100.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	2	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿	5	83.3%	31.6%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	1	16.7%	
		小計	6	100.0%	
	唐津	碗・皿	12	92.3%	68.4%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	1	7.7%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	13	100.0%	
伊万里	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
京焼・他	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
国産施釉陶磁器計		19	100.0%	8.7%	
焼締陶器	甕	1	2.9%	16.1%	
	壺	4	11.4%		
	播鉢	17	48.6%		
	盤・大皿	8	22.9%		
	他・不明	5	14.3%		
	小計	35	100.0%		
輸入陶磁器	碗・皿	8	100.0%	3.7%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	8	100.0%		
総数		218		100.0%	

表22 2区土壌49出土土器比率

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	592	86.0%	76.4%	
	鍋・釜	64	9.3%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	他・不明	32	4.7%		
	小計	688	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	5	22.7%	2.4%	
	釜	17	77.3%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	22	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿	41	73.2%	72.7%
		鉢・向付	2	3.6%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	13	23.2%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	56	100.0%	
	唐津	碗・皿	21	100.0%	27.3%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
		小計	21	100.0%	
伊万里	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
京焼・他	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
国産施釉陶磁器計		77	100.0%	8.5%	
焼締陶器	甕	7	11.9%	6.5%	
	壺	7	11.9%		
	播鉢	33	55.9%		
	盤・大皿	10	16.9%		
	他・不明	2	14.3%		
	小計	59	100.0%		
輸入陶磁器	碗・皿	54	98.2%	6.1%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	1	1.8%		
	小計	55	100.0%		
総数		901		100.0%	

皿に使用されたもので、全体に煤が付着し、器壁も厚い。圏線が巡る大皿は淡橙色の色調で、圏線の幅が浅く広く、わずかな凸線状に盛り上がりがある。676はX群土師器皿。圏線はなく、黄灰色の堅緻な胎土で薄手である。684は口縁部が扁平な玉縁状となるもので、外面体部には格子目タタキが施される。播磨産の初現期形態に属する<sup>2)</sup>。羽釜は灰黄色の精良な胎土で硬質、小型に属する。罏以下には煤が付着する。土製品の焼塩壺蓋(685~687)は全体に丸みを有し、口縁部はナデ調整。焼塩壺(688・689)はいずれも芯に粘土紐を巻き上げて成形される。筒状に幅の狭いものと、壺状に丸みを有するものがある。

焼締陶器には甕（691・692）、搦鉢（693・694・985）、鉢（690）などがある。691は信楽の甕。口縁部がN字状を呈し、縁帯となるもので、古い特徴を有する甕である。14世紀に製作された伝世品か。692は備前の甕。折り返された口縁部には外面に3条の凹線が巡る。胎土は硬質で堅緻。暗褐色の器表には降灰が顕著に残る。694は備前搦鉢。折り返され肥厚した口縁部は内傾し縁帯となり、2条の凹線が巡る。搦目は7～8本1単位。口縁部上端、下端に重ね痕が顕著に残る。985も備前搦鉢。693は丹波搦鉢。内面の口縁下部に鼓状のヘラ記号が記される。搦目は1本単位。920は備前の鉢。丸みをもって立ち上がり、玉縁状の口縁部を有する。内面には鉄泥が施される。

美濃には灰釉丸皿（700）、長石釉菊皿（701）がある。灰釉丸皿は釉が全面に施される。高台は削り出し高台で、高台内の3方に目跡が残る。菊皿は内面を丸ノミで菊花状に成形し、口縁部はヘラ切りされる。釉は全面に施される。高台際には目跡が残る。

唐津には皿（695・696）、椀（697）、鉢（698・699）などがある。695は青唐津皿である。釉が全面に施される。高台裏は兜巾状を呈する。696は口縁部が外反する灰釉端反皿。腰部は露胎となる。美濃の灰釉皿に似るが、胎土・成形技法は唐津である。高台裏はチリメン皺の兜巾状となる。697は青唐津椀である。外面腰部以下は露胎。698は内外面に灰釉を施された鉢。屈曲する口縁部を有し、口縁部の外端面は縁帯となる。699は灰釉を施された大鉢。口縁部は肥厚する。一部灰釉は焼成により白く失透する。

輸入陶磁器はいずれも青花である。椀（702・704）、皿（703）がある。椀はいずれも、細く高い高台を有する。見込みに花文が描かれる。703は見込みに壽文が描かれる皿。釉は白濁しており粗製品。

瓦には三巴文軒平瓦（瓦11）、均整唐草文軒平瓦（瓦12・瓦13）がある。瓦11は右巻き込みの巴文である。頭も尾も接していない。蓮子文は16個で周縁は幅が広く低い素文の直立縁である。圏線はない。丸瓦部凹面に明瞭なヨコ方向のナデ痕跡がある。丸瓦部に釘穴が開いている。桃山後期以降のものである。瓦12は中心に三房を置きやや細目の支葉が1本2本上向きにのびる。先端の巻き込みは強く丸く膨らむ。瓦当裏面と平瓦との接合部はヨコ方向にナデる。瓦当上端面は面取りする。瓦13は中心飾りの三房はやや大きめである。脇にのびる支葉は上向きと下向きにのびる2本である支葉端部の巻き込みは緩やかである。瓦当裏面はヘラ磨きを施す。瓦当上端面は面取りする。瓦23は留蓋の一部か用途不明である。瓦14・瓦15は丸瓦である。

木製品には漆器、箸、杓文字、籠、曲物、柄、桶、樽、栓、折敷、俎板、刷毛、箒、下駄、櫛、鞘、付札、楔形木製品、棒状木製品、板状木製品、建築部材、加工痕のある部材、杭、端材、焼材などがある。

漆器は多数出土した。破片を含めて70点以上を識別している。種類には椀（木123～木132・木135～木138）、皿（木134）、合子（木133）などがある。椀は大型の丸椀（木123～木125・木127・木128・木135・木136）、丸椀（木126・木129～木132・木137・木138）がある。高台は大型の丸椀が台状の高台（木123・木127・木128）、高い輪高台（木124・木125）で、丸椀は輪高台である。塗りは内面が赤色で外面が黒色、内外面とも黒色、内外面とも赤色がある。体部内

外面や高台内部には赤色や黒色の漆で絵柄・紋・記号を描くものが多い。高台内部には記号の線刻があるものがある。また、木124は体部に円形の穿孔がある。木127・木135は内面に焦げ痕がある。木138は内面に赤色の塗料が付着する。木134は丸皿で一部が欠損する。高台は輪高台である。塗りは内面が赤色、外面が黒色で、体部外面に赤色の漆で松を描く。皿には塗りは内外面とも黒色、内外面とも赤色のものがある。木133は合子の蓋である。突起の一部が欠損するがほぼ完形である。天井部はわずかに外面が凸曲面、内面が凹曲面となる。周縁・内面の突起は別材を貼り合わせる。塗りは内外面とも黒色である。

箸は大量に出土した。長さ・太さには差異がある。長軸方向に加工するが、端部は端面を切り落とすもの、両端が尖るもの、一端が篋状になるものなどさまざまな形態がある。一端に穿孔するものがあり、紐を通して使用したと考えられる。端部が焦げていることから付木に転用した可能性があるものがある。杓文字（木89）は一部が欠損する。定型的な杓文字の形で、先端は使用痕のため篋状に尖る。篋（木88・木90・木91）は、木90は薄い板状で、先端部は幅広となり、片刃状に尖る。木91は柄は棒状で、先端部は板状で幅広となり、片刃状に尖る。木88は薄い板状で、平面形は先端がわずかに鋭角となり、手元は先細りとなる。先端部全体が尖る。曲物は小型品で破損する。柄が出土していることから柄杓の可能性もある。蓋の破片に墨書があるものがある（木238）。桶・樽（木94）は底板・側板・蓋板が分解した状態で出土した。破片であるが、側面の一方は真っ直ぐで、もう一方は円弧をなし、大きな円形の穿孔がある。樽の蓋板の端で栓の穴の部分の破片であると考えられる。表面には黒色の漆を塗る。栓にはさまざまな形態のものがある。俎板（木93）は脚部が欠損する。長方形の板で裏面には小口近くに2条の細長い溝を加工し、それぞれ2箇所ずつ穿孔がある。溝に方柱形の脚部をはめ込み、釘で固定したと考えられる。表面には無数の刃物の痕がある。また、刃物の痕は裏面中央部にも残る。刷毛（木84・木85）は完形で2点が出土した。2枚の板を合わせて先端部に密に植毛を挟み込む。木84は体部は先端は真っ直ぐで、両側は大きく丸く仕上げる。柄は体部中央に取り付き、手元に小さな穿孔がある。稜は全て面取りをする。剥落している部分があるが、全面に透漆を塗る。植毛は短くちぎれ、固まっている。木85は体部は先端はほぼ真っ直ぐで、両側は弯曲する。柄は幅広く体部から緩やかに連続し、角は大きく丸く仕上げ、中央には大きな円形の穿孔がある。稜は全て面取りをする。体部先端近くに2条の細い溝が平行に全周しており、糸をかがった痕と考えられる。剥落している部分があるが、全面に透漆を塗る。植毛は短くちぎれ、固まっている。折敷は全て破損しているが、墨書があるものがある（木232・木241・木242）。箒は植物の繊維を紐で束ねる。柄は欠損する。下駄はいずれも一木作りである。平面形は長方形・先端が幅広の長方形・小判形・細長い小判形・先端が幅広の小判形がある。また、長方形で四隅を小さく切り落とすもの、小判形で上面踵部分に「×」の線刻があるもの、小判形の高下駄などがある。歯が磨り減っているものが多い。櫛（木95）は横櫛の破片である。棟は緩やかな弧をなし、断面は厚めである。歯は粗く、17本以上を挽き出す。表面は平坦に仕上げ、彫刻や塗装の痕跡はない。鞘（木86）は2枚一組で出土した。1枚の板を中央で割り、内面を刀形に浅く割りぬく。束口外面には小さな段を加工し、先端

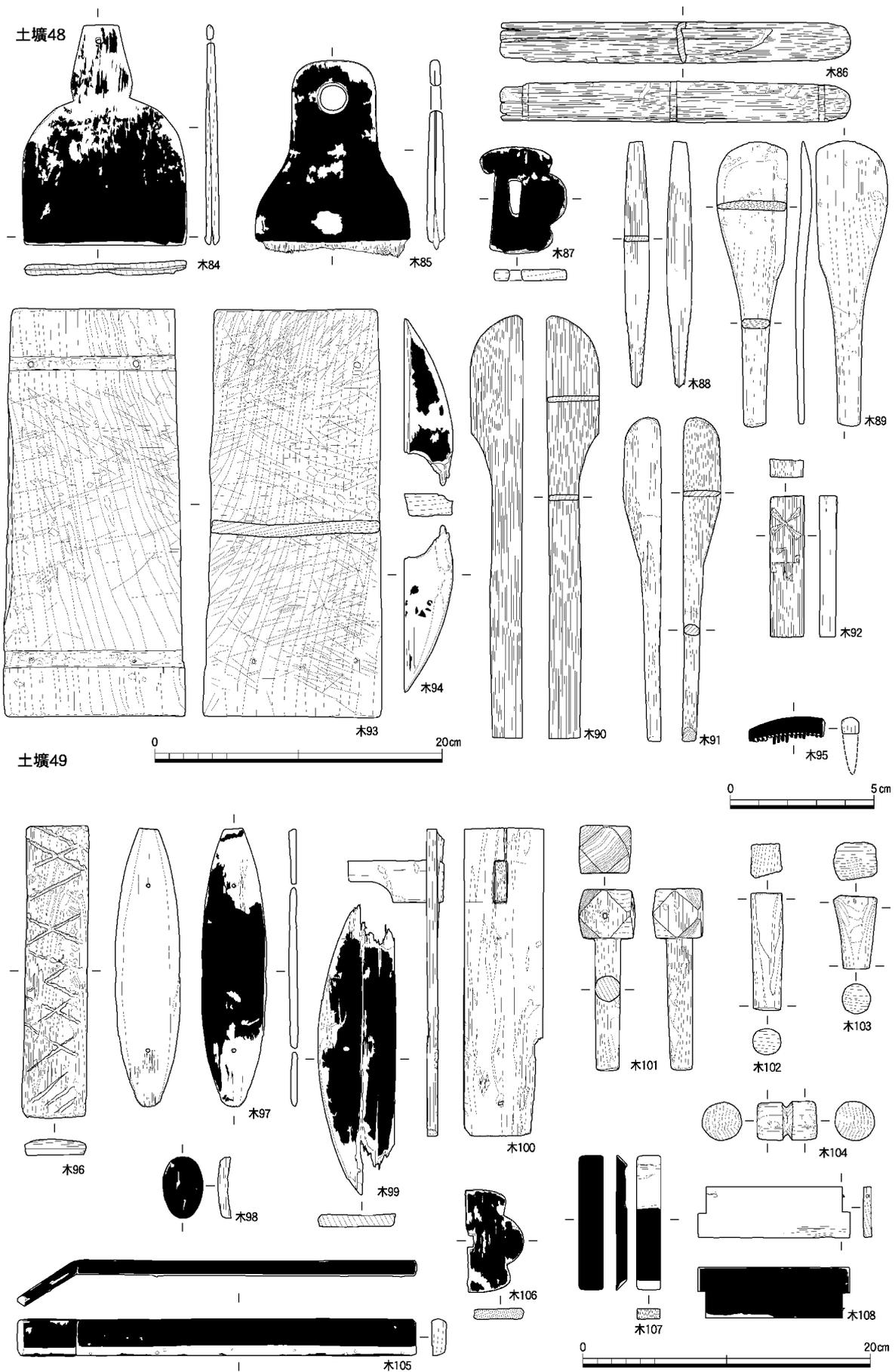


图77 2区土壙48·49出土木製品

は丸く仕上げる。表面の調整は丁寧である。付札には墨書があるものが多い(木226～木229)。楔形木製品は一端を尖らせる方柱形で、大小さまざまである。実際に楔として使用したかは不明である。棒状木製品(木92・木230)は断面形が円形・正方形・長方形・多角形のもの、先端が尖るもの、方柱形のものなどさまざまな形態がある。いずれも用途は不明である。木92は方柱形で、表面を平坦に仕上げる。片面には「×」「卍」状の陰刻がある。木230は墨書がある。板状木製品(木87)は平面形が正方形のもの、長方形のもの、細長いもの、いびつな円形のもの、不整形なもの、端部を面取りするもの、端部が隅丸になるもの、先端が尖るもの、片刃状のもの、切れ込みのあるもの、鉄釘が付くものなどさまざまな形態のものがあるが、いずれも用途は不明である。墨書のあるものがある(木231・木233～木237・木239・木240)。木87は一部が欠損するが、全体を刀の鏝に似た4つの曲面を削り出す形に成形し、中央には一端が先細る細長い穿孔がある。穿孔側面を含め、全面に黒色の漆を塗り、側面の一部には金箔が残る。建築部材には鉄釘の付く丸柱、枿や枿穴のある丸柱、枿のある角柱、鉄釘の付く角材、壁の木舞、屋根板がある。加工痕のある部材には鉄釘が付く角柱状木製品、面取りのある角柱状木製品、両端を削いだ丸太などがある。

土壙49出土遺物(図版47～49・66・67・78～80・84・85・94、図77、表21・22) 土壙49からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、木製品、瓦などが出土している。出土土師器の総破片数は901片である。その内訳は土師器76.4%、瓦器2.4%、焼締陶器6.5%、国産施釉陶器8.5%、輸入陶磁器6.1%である。そのうち国産施釉陶器では美濃87.0%、唐津13.0%と美濃が大半を占め、唐津を凌ぐ傾向にある。美濃には志野・黄瀬戸が含まれ、織部はみられない。出土土師器は桃山時代から江戸時代初頭(16世紀末～17世紀初頭)に属する。

土師器には丸底小皿(705～707)、圏線が巡る中皿(709～716)、圏線が巡る大皿(717～724)、圏線が巡る特大皿(725～727)、X群土師器皿(708)、耳皿(728)、羽釜(732～737)がある。丸底小皿は口径9.3～9.8cm、器高1.9～2.3cm。圏線が巡る中皿は口径10.1～10.8cm、器高1.9～2.3cm。圏線が巡る大皿は口径11.0～13.1cm、器高1.9～2.5cm。圏線が巡る特大皿は口径15.0～17.6cm、器高2.4～2.8cm。圏線が巡る特大皿は2区土壙20・土壙30同様に器高の低いものと高いものに分かれる。皿全体の形態は2区土壙20と類似するもので、わずかな端面をもち、圏線は幅広く浅いものが多い。また灯明皿に使用された711・713などがあり、他にも内外面に煤が付着するものがみられる。708はX群土師器皿で圏線の無いものである。全体に丸みを持ち口縁部は外反しない。器壁は薄手で、1区から出土したX群土師器皿には外反気味なものがあったが、これは外反はしない。内外面には煤が多量に付着する。耳皿は灯明皿に転用されたもので口縁部の2方に煤が付着する。これらの土師器皿は2区土壙48と比較して口径が若干小さくなる傾向がある。羽釜はいずれも胎土の堅緻なもの。屈曲する口縁部と丸みを持った体部を有する。736・737は鏝が付き、他も同様に鏝が付く。

瓦器には羽釜(738)、炉(739)がある。羽釜は鏝からすぼまり逆台形状を呈する。体部には多量に煤が付着する。炉は内外面ともに丁寧に成形され、体部には風孔が施される。

土製品の焼塩壺（730・731）はいずれも芯に粘土紐を巻き上げて成形されたもの。730は筒形、731は壺型を呈する。焼塩壺蓋（729）が1点ある。

焼締陶器には丹波の盤（745）、備前の播鉢（740～743）、信楽の鉢（744）がある。盤は全体に焼き歪みのある大型のもの。底部から大きく開いて立ち上がり、器高は低い。口縁部は丸みをもち内側に肥厚する。底部内面は多量に降灰を受けて自然釉となる。底部外面の敷灰は溶けている。鉢は赤褐色の胎土で長珪石を多く含む。平底の底部から、腰に丸みをもって立ち上がり、上部に端面をもつ口縁部に至る。内面には漆と思われる暗褐色状の膜が付着する。播鉢はいずれも肥厚した口縁部が縁帯を呈するもので2条の凹線が巡る。胎土は堅緻、器表の体色は赤褐色・暗褐色の色調である。播目は7～9本1単位で、播目を体部に垂直方向に入れ、後に斜め方向に入れる。底部播目は不規則に入れるものと、十字に入れるものがある。

美濃には天目茶椀（763・764・766）、鉄釉小椀（765）、志野半筒形椀（767・768）、志野鉢（770）、志野皿（769）、志野角向付（771）、黄瀬戸大皿（772）がある。天目茶椀には大中小がある。766は中型で腰部に鉄錆が薄く施される。763は器壁の厚いもので口縁下部が肥厚気味になる。釉には光沢が無く透明感はない。鉄釉小椀は器高は低く、釉には透明感がある。半筒形椀には大小がある。768は大型で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに玉縁状となる。体部には縦にヘラケズリが施され瀬戸黒茶椀に通じる意匠である。平坦な底部には削り出しの輪高台が付く。767は小型で腰部を面取りされ、直線的に立ち上がる体部を有する。志野鉢は直立して立ち上がる口縁部を有するものか。見込みには鉄絵が描かれるがはっきりしない。底部は碁笥底高台。目跡が見込みに3箇所、高台際にも1箇所残る。志野皿は丸みをもって立ち上がり外反する。乳白色の釉が厚く施される。底部は削り出し高台で、高台内に目跡が3箇所残る。志野角皿は隅丸形状を呈する。見込みには大きくロクロ目が反時計方向に巡り、鉄絵で鳥と竹が描かれる。底部には3方に脚部がつき、口縁部には小さな粘土粒が貼り付けられる。黄瀬戸大皿は体部が大きく開き、口縁部が強く外反する。全面にオリーブ灰色の釉が施されるが、外面は変色が顕著である。見込みには印刻花文が施される。目跡が内外面に残る。

唐津には椀、皿（757～762）がある。757・758は暗緑灰色釉が施される青唐津。757は見込みに左回転のロクロ目が深く残り、茶溜まりを作為したものか。759～762はいずれも全面に灰釉を施された端反皿。いずれも体部は腰が張り口縁部は緩やかに外反する。底部は削り出し高台。760は窯内で直に置かれ焼成されたためか、高台に溶けた土が多く付着する。2区土壙48出土の美濃に類似する皿と作風が共通する。高台内は兜巾状ではない。

輸入陶磁器には青花の椀（746～754）、皿（755）がある。景德鎮系と推定される。746～748は類似した文様が描かれる椀。文様は円形状の花文らしき文様の周りに葉が描かれ、口縁部には円形の文様が巡る。749は芙蓉手の椀。750・751・753・754はいずれも細く高い高台を有し、見込みに花文などが描かれる。750は見込みが盛り上がる。753は体部内面に楕円状に圧痕が施される。752は呉彩の椀体部片。緑・赤で文様を描く。755は内面底部に圧痕が施される。756は白磁小椀である。白濁した釉が粗く施され、見込みは蛇の目釉ハギされる。

木製品には漆器、箸、篋、曲物、桶、樽、栓、折敷、木錘、箒、下駄、布片、付札、楔形木製品、棒状木製品、組合せ木製品、板状木製品、建築部材、加工痕のある部材、竹片、端材、焼材などがある。

漆器は多数出土した。破片を含めて80点以上を識別している。種類には椀（木144・木145・木151・木152・木154～木158）、皿（木146～木150）、蓋（木159・木160）、合子（木153）、膳（木105）、容器（木107・木108）などがある。椀は大型の丸椀（木144・木151・木156～木158）、丸椀（木145・木152・木154・木155）がある。高台は大型の丸椀が台状の高台（木145・木157・158）、高い輪高台（木151・木156）で、丸椀は輪高台である。塗りは内面が赤色で外面が黒色、内外面とも黒色、内外面とも赤色がある。体部内外面や高台内部には赤色や黒色の漆で絵柄・紋・記号を描くものが多い。高台内部には記号の線刻があるものがある。また、木145・木156は体部に円形の穿孔がある。皿は丸皿で、高台は輪高台である。塗りは内面が赤色で外面が黒色、内外面とも黒色、内外面とも赤色がある。体部内外面や高台内部には赤色や黒色の漆で絵柄・紋・記号を描くものが多い。木159・木160は小型の椀の蓋である。つまみは輪状である。塗りは内外面とも赤色で、外面に黒色の漆で木159は草花、木160は分銅を描く。木159はつまみ内部に「X」の線刻がある。木153は合子の体部である。一部が欠損する。底部は平坦で、内面には突起が立ち上がる。塗りは内外面とも黒色である。木105は膳の縁の破片である。細長い棒状の板の長辺に沿って底部と結合するための小さな目釘穴が並ぶ。底部と接する部分以外にはすべて厚く黒色の漆を塗る。木107・木108はいずれも容器の部品である。木107は細長い板状で、両端を45度に削ぎ落とし、板面の片面には浅い割り込みを加工する。これ以外の面にはすべて厚く黒色の漆を塗る。木108は板状で両端に小さな欠き込みがある。欠き込みの小口面にはそれぞれ目釘がある。片面に黒色の漆を塗る。ともに容器の仕切りと考えられる。

箸は大量に出土した。長さ・太さには差異がある。長軸方向に加工するが、端部は端面を切り落とすもの、両端が尖るもの、一端が篋状になるものなどさまざまな形態がある。一端に穿孔するものがあり、紐を通して使用したと考えられる。端部が焦げていることから付木に転用した可能性があるものがある。篋は大小さまざまな形態のものがある。曲物は小型品で破損する。桶・樽（木99）は底板・側板・蓋板が分解した状態で出土した。木185は破片であるが、2枚が接合し、側面の一方は真直ぐで、もう一方は円弧をなす。樽の蓋板の端であると考えられる。表面には黒色の漆を塗る。栓（木101～木103）はさまざまな形態のものがある。木101はわずかに先端部が先細る円柱形で、別材で作った立方体を面取りした形態のにぎりを結合する。にぎり中央には小さな穿孔がある。木102は方柱形で、先端部を円柱形に加工する。木103は半截円錐台形であるが、わずかに角柱形の部分がのこる。これらは先端面はいずれも平坦であるが、先端が円錐形に尖るものも出土している。折敷は全て破損しているが、墨書があるものがある（木267・273）。木錘（木104）は寸胴円柱形の側面中央に断面V字形の1条の溝を加工する。編物の錘である。箒（木282）は植物の繊維を紐で束ねる。柄は欠損する。下駄はほとんどが一木作りであるが、差し歯下駄が2点ある。一木作りの下駄は平面形は長方形・先端が幅広の長方形・小判形・先端が幅

広の小判形がある。また、長方形の高下駄、小型の小判形の高下駄、小判形で折れた歯を鉄釘で固定・修理した高下駄などがある。差し歯下駄は小判形で歯に方形の柄を作り、嵌め込むものと長方形で下面に浅い溝を作り、方柱形の歯を嵌め釘で固定するものがある。いずれも歯が磨り減っているものが多い。また焼け焦げのあるものがある。布片は切れ端で詳細不明である。付札には墨書があるものが多い(木243～木261・木263・木270)。270には慶長4年(1599)の元号があり注目できる。楔形木製品は一端を尖らせる方柱形で、大小さまざまである。実際に楔として使用したかは不明である。棒状木製品は断面形が円形・正方形・いびつな長方形・多角形のもの、先端が尖るものなどさまざまな形態がある。いずれも用途は不明である。木269には墨書がある。組合せ木製品(木100)はやや弯曲する板に別の板材を差し込む。用途は不明である。板状木製品(木96～木98・木106)は平面形が正方形のもの、長方形のもの、細長いもの、いびつな円形のもの、不整形なもの、先端が尖るもの、片刃状のもの、切れ込みのあるもの、鉄釘や竹釘が付くものなどさまざまな形態のものがあるが、いずれも用途は不明である。墨書のあるもの(木262・木264～木266・木268・木271・木272)がある。木98は平面形は小さな小判形で片面に黒色の漆を塗る。木106は一部が欠損するが、全体を刀の鐔に似た4つの曲面を削り出す形に成形し、中央には方形の小さな穿孔がある。剥落している部分が多いが、全面に黒色の漆を塗る。木97は両端が緩やかに弯曲して細くなる板状で、長軸中央の2箇所に小さな穿孔がある。片面には黒色の漆を塗る。木96は長方形の細長い板状で、断面形は片方の板面が緩やかな凸面となる。凸面の方には多数の平行線を「x」に交差するように線刻する。建築部材には壁の木舞、屋根板がある。加工痕のある部材には面取りのある角柱状木製品などがある。

井戸10出土遺物(図版50) 井戸10からは土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品、石製品などが出土している。図示できたものには瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。出土土器は室町時代後期(15世紀末～16世紀前半)に属する。

瓦器には羽釜(773～775)、火鉢(776)がある。羽釜は上方にのびる口縁部と、鐔を有する。773・774は鐔の貼り付け痕跡が顕著なもの。775は長めの口縁部外面に幅広の凹線が巡る大型の羽釜。火鉢は四隅を切り取った方形を呈し、八角形に復元できる。腰が屈曲する。口縁部には凸線が2条巡り、中に珠文を配する。

焼締陶器には播鉢(777～781)、壺(782)がある。777・778は信楽の播鉢で、灰白色の胎土を有する。口縁端部は外反し、777は上端が平坦面をなす。播目は3本だけを確認できる。781は丹波の播鉢で、播目は1本1単位。779・780は備前の播鉢。口縁部は幅広く折り返され縁帯状を呈する。779は凹線が一部に巡る。播目は8～9本1単位で間隔を広く施される。780は口縁部外面に焼成時の重ね痕跡が顕著に残る。782は信楽の壺。折り返された口縁部が縁帯となる。肩部には焼成時の降灰が多く付着する。

輸入陶磁器には青磁(783～787)、白磁(788・789)がある。青磁はいずれも龍泉窯系で、器壁の厚いもの。783・785・786は見込みに印刻花文が施された椀であるが、不鮮明なものが多い。783には外面に線描きの蓮弁文が施される。787は片切彫り蓮弁文椀。釉は厚く施される。高台内

は釉ハギされ、赤褐色に胎土が発色する。白磁は蛇の目釉ハギされた椀788と、高台の3方に欠き込みを入れた陶胎質の皿789がある。高台内には「七」と読める字が墨書される。

木製品では最下層から桶の破片が出土した。

土壙55出土遺物（図版50） 土壙55からは土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土している。図示できたものには土師器、瓦器、国産施釉陶器、輸入陶磁器がある。出土土器は室町時代後期（15世紀末～16世紀前半）に属する。

土師器には赤色系の小皿（790）がある。体部下半のオサエは強く、長い三角形の口縁部を有する。

瓦器には羽釜（791・792）、火鉢（793）がある。羽釜は直線的にのびた口縁部外面に、幅広の凹線が2条巡り、鏝を有する。火鉢は器高の低いもので、体部は強く内弯し、口縁上面には平坦面を有する。底部には3方に脚が付く。内外面ともに器表は平滑であり、丁寧に成形されたものである。

古瀬戸には壺（794）の底部がある。高台下端部が広がり、灰釉が施されている。

輸入陶磁器には青磁椀（795・796）がある。いずれも端反椀。

### （3）その他の遺構出土遺物

井戸50出土遺物（図版65・82、図78・79） 軒瓦や木製品が出土している。菊文軒丸瓦（瓦9・瓦10）は16弁で上下2段に蓮弁を配する複菊文である。単弁の中央は窪む。ともに丸瓦凹面に吊紐の痕跡が明瞭に残る。瓦当裏面から8cm位の箇所<sup>3)</sup>にヨコ方向に縄目がのびるものと、12cm位の所から丸瓦狭端部に向けてタテ方向にのびるものの2箇所ある。丸瓦部凹面端部は面取りされている。

井戸50から出土した菊文軒丸瓦はすべて同范である。13点まとめて出土している。瓦当面右下の中房と花卉が接する部分で、花卉と花卉の間が潰れている。

木製品には漆器、箸、柄、桶、樽、折敷、楔形木製品、棒状木製品、板状木製品、端材、焼材などがある。

漆器には椀（木139）、膳（木109）がある。木139は大型の丸椀で一部が欠損する。高台は高い輪高台である。塗りは内外面とも黒色で、体部外面に

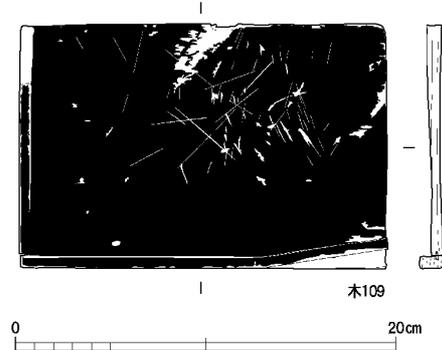


図78 2区井戸50出土漆器

赤色の漆で一对の橘と一文字二星の紋、内面見込みに一对の橘と体部内面3箇所に一文字二星の紋を描く。高台内部に「×」の線刻がある。椀には塗りは内面が赤色で外面が黒色のものがある。また、高台内部に「×」の線刻があるものがある。木109は一部が欠損するが、底部の側面に縁が付く。底部は平坦な方形である。縁は細長い棒状の板で、長辺に沿って底部と結合するための小さな目釘穴が並ぶ。角部は隣り合う縁の

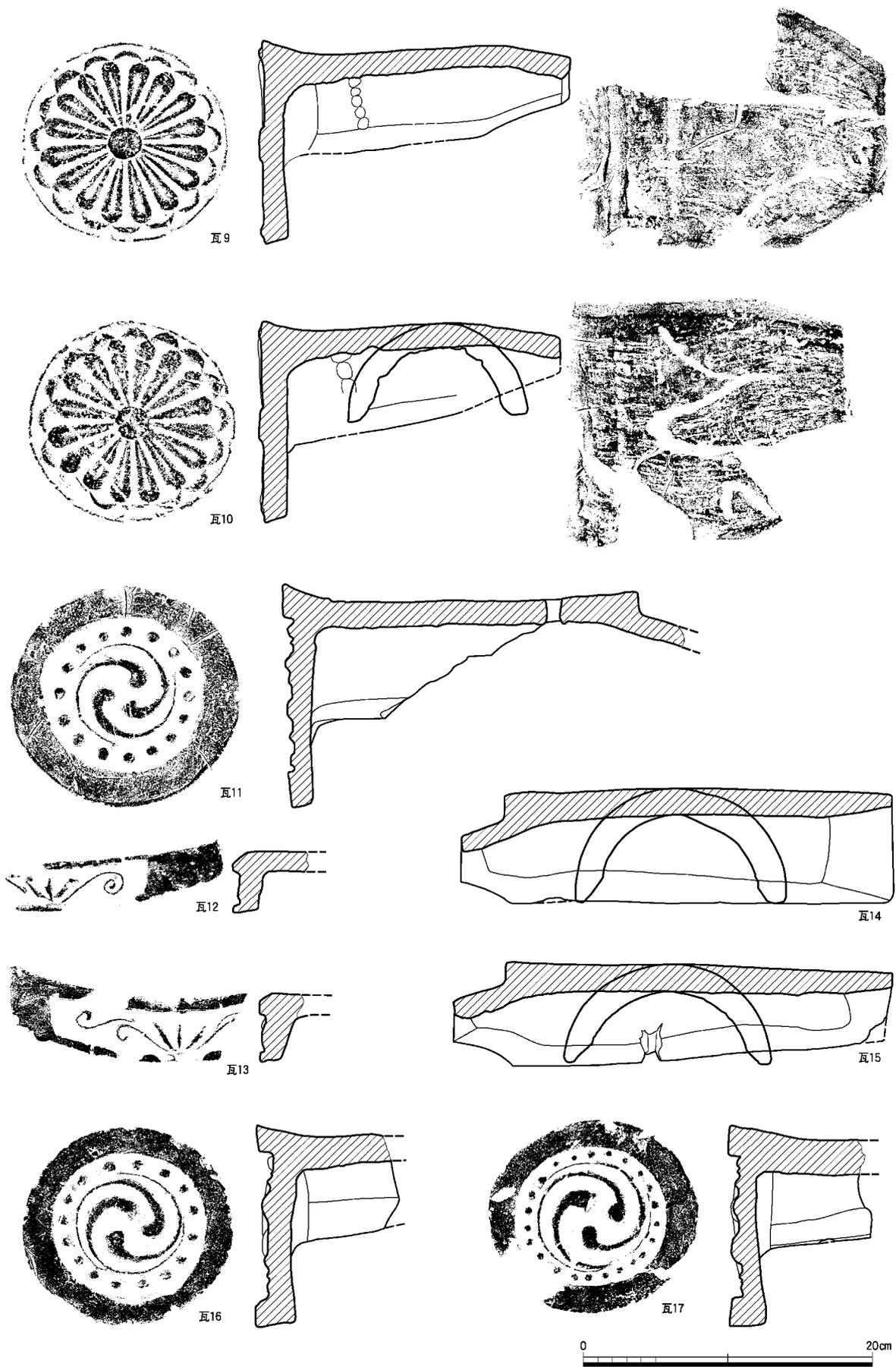


图79 2区出土軒丸瓦·軒平瓦·丸瓦

小口面と側面を結合する。底部上面と縁には厚く黒色の漆を塗る。箸はまとまって出土した。長軸方向に加工し、端面は切り落とす。柄は柄杓の柄と網の柄の可能性のあるものがある。桶・樽は底板・蓋板の破片である。折敷は全て破損している。楔形木製品は一端を尖らせる方柱形である。実際に楔として使用したかは不明である。棒状木製品には方柱状のものがある。板状木製品には平面形が長方形・隅丸台形のもの、先端が尖るものがある。

土壙67出土遺物 木製品の漆器、箸、桶、焼木などが出土した。漆器には椀がある。塗りは内外面とも赤色のものと内面が赤色、外面が黒色のもので、外面に茶色の漆で草花を描くものがある。箸は長軸方向に加工し、端面は切り落とす。桶は破片である。

土壙65出土遺物（図版82・83、図79） 三巴文軒平瓦（瓦16・瓦17）、家紋瓦（瓦21）、棟瓦（瓦18・瓦19）が出土している。瓦17は金箔瓦である。金箔は瓦当面に少量残る程度である。巴の頭は大きめで、尾は隣の巴と接している。蓮子文は小粒で23個である。周縁の幅は広めで直立縁である。瓦16は巴の頭は大きめで、尾は全て接している。蓮子文は16個である。周縁は広めで直立縁である。丸瓦凹面はヨコ方向のナデ調整を施す。端部は面取りしている。瓦21は金箔は瓦当面にわずかに残る。文様は家紋か。瓦当裏面はヨコ方向にナデを施す。釘穴が当面に開いている。瓦18・19は花菱文を中央に配し圏線が4分割でめぐる。瓦19は上下に釘穴が開けられているが、片方は貫通していない。

#### （4）墓地出土遺物

5期 江戸時代後期（19世紀前葉～中葉）の墓地出土遺物

埋葬164（図81） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭153～銭156）、寛永文銭（銭157・銭158）の計6枚である。

埋葬202（図81） 銭貨が出土している。古寛永通寶（銭147～銭150）、寛永文銭（銭151・銭152）の計6枚である。

埋葬216（図80） 土師器皿（139）が出土している。圏線が巡る大皿で、器壁はやや薄い。胎土は灰白色。底部に巡る圏線は明瞭である。体部は緩やかに屈曲して立上る。口縁端部はつまみ上げる。

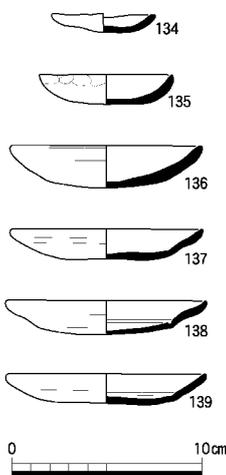


図80 2区埋葬施設出土土器

4期 江戸時代中期から後期（18世紀中葉～19世紀前葉）の墓地出土遺物

埋葬203（図80） 土師器皿（134）が出土している。粗製小皿である。胎土は浅黄橙色。手捏ね成形で指圧痕が明瞭に残る。口縁端部はつまみ上げる。

埋葬205（図81） 銭貨が出土している。新寛永通寶（銭161）、題目銭（銭159・銭160）の計3枚である。

埋葬214（図80） 土師器皿（138）が出土している。圏線が巡る大皿で、器壁はやや薄い。胎土は灰白色。底部に巡る圏線は明瞭

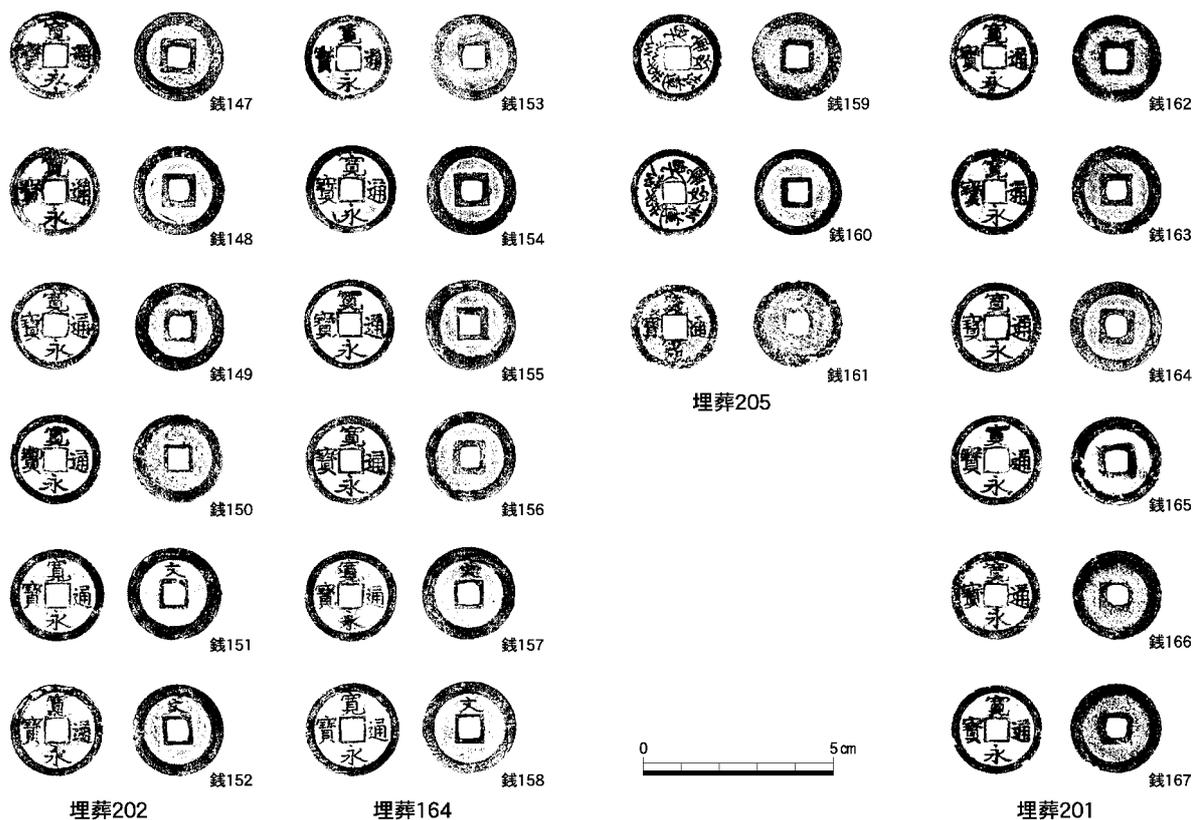


図81 2区埋葬施設出土銭貨

表23 2区埋葬施設出土銭貨一覧表

番号	遺構番号	時期	種類	直径 cm	厚さ cm
錢147	202	5期	古寛永通寶	2.4	0.15
錢148	202	5期	古寛永通寶	2.4	0.12
錢149	202	5期	古寛永通寶	2.4	0.15
錢150	202	5期	古寛永通寶	2.4	0.17
錢151	202	5期	寛永文銭	2.5	0.12
錢152	202	5期	寛永文銭	2.5	0.18
錢153	164	5期	古寛永通寶	2.3	0.15
錢154	164	5期	古寛永通寶	2.4	0.15
錢155	164	5期	古寛永通寶	2.4	0.15
錢156	164	5期	古寛永通寶	2.4	0.14
錢157	164	5期	寛永文銭	2.5	0.14
錢158	164	5期	寛永文銭	2.5	0.13
錢159	205	4期	題目銭	2.4	0.13
錢160	205	4期	題目銭	2.4	0.12
錢161	205	4期	新寛永通寶	2.4	0.14
錢162	201	3期	古寛永通寶	2.4	0.09
錢163	201	3期	古寛永通寶	2.4	0.16
錢164	201	3期	古寛永通寶	2.4	0.14
錢165	201	3期	古寛永通寶	2.4	0.12
錢166	201	3期	古寛永通寶	2.4	0.15
錢167	201	3期	古寛永通寶	2.4	0.11

である。体部は底部から屈曲して立上る。口縁端部はつまみ上げる。

埋葬239（図80） 土師器皿が出土している。丸底小皿（135）と圈線が巡る大皿（137）がある。135は胎土は浅黄橙色。底部は丸く、口縁端部はつまみ上げる。底部から口縁部にかけて、立ち上げる際の指圧痕が残る。137は器壁はやや薄い。底部に巡る圈線は浅い。体部は底部から屈曲して立上り、口縁端部はつまみ上げる。

3期 江戸時代中期（17世紀後葉～18世紀中葉）の墓地出土遺物

埋葬201（図80・81） 土器、金属製品が出土している。土器には土師器皿（136）がある。丸底中皿で、器壁は厚めである。底部と体部の境が不明瞭で、体部は緩やかに立上る。口縁部にはヨコ方向のナデを施し、口縁端部は三角形を呈する。

金属製品には銭貨がある。古寛永通寶（銭162～銭167）の6枚である。

埋葬215 銭貨が出土している。古寛永通寶が6枚である。

註

- 1) 調査区北西部は攪乱の広がりを確認したのち、土置き場とした。
- 2) 『兵庫津遺跡2（浜崎・七宮地区遺跡の調査） 兵庫県文化財報告書 第270冊』兵庫県教育委員会、2004年。
- 3) 山崎信二『奈良文化財研究所学報第59冊 中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所、2000年。

## 第5章 3区の調査

### 1 3区の遺構

#### (1) 基本層序と遺構の概要 (図版24、図82)

基本層序 調査区は1区南側、2区西側にあたる。1区・2区で検出した遺構との関連を確認するためにそれぞれの調査区の一部を再掘削した。3区は近代以降の攪乱が少なく、遺存状況は1区・2区と比較して良好である。

3区の基本層序は厚さ約0.5～1.8mの盛土と次の4層に分けることができる。それぞれの土層は調査区西部では重なりが明瞭であるが、東部では徐々に不明瞭となり、東端の段差上部では盛土の直下が地山となる。

第1層は厚さ約20～30cmのオリブ褐色砂泥層からなる整地層で、段差下部まで広がる。1区第1層に対応する。第2-1層は厚さ約15～25cmのにぶい黄褐色砂泥層からなる整地層で、Y=-21,540m付近まで広がる。礫混じりの明褐色砂泥層を含む部分があるので整地が2段階に行われた可能性がある。第2-2層は厚さ約5～10cmの明褐色粘質土からなる整地層で、西部では面的に広がるがY=-21,550m付近では断続的となる。第2-1層・第2-2層としたのは1区第2層に対応する層序を3区では2段階に細分して調査したためである。第3層は厚さ約20～30cmの褐色粘質土からなる整地層で、第2-2層と同様に調査区西部に広がる。1区第3層に対応する。第3層の下層は礫を含む暗灰黄色・白色粘土で、東部では褐色砂礫となる。非常に堅く締まっており、遺物を含んでいないことから地山と判断した。

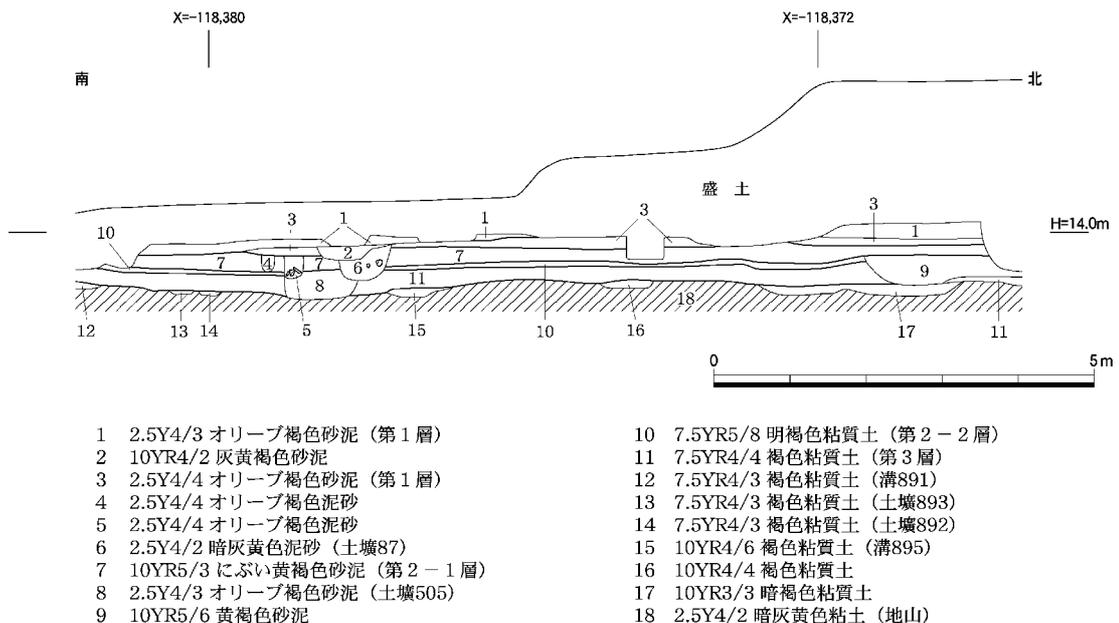


図82 3区西壁断面図

調査では第1層の下面を第1面、第2-1層の下面を第2-1面、第2-2層の下面を第2-2面、第3層の下面を第3面とした。1区第2面に対応するのは第2-2面である。第1面は18世紀中葉～19世紀、第2-1面は17世紀後葉～18世紀前葉、第2-2面は16世紀末～17世紀中葉、第3面は16世紀後葉の遺構が主体をなす。第1面の検出高は東部の段差下部が西部よりも約20cm高く、西に向かって傾斜している。第2-1層から第3層は調査区中央部から西部に偏って堆積しているため、第3面では東部が西部よりも約40cm、南部が北部よりも約30cm高く、整地が行われる以前は北西に向かって傾斜する地形であったことがわかる。

遺構の概要 検出した遺構総数は998基である。遺構密度が高く、複雑に重複するため、各遺構面では目的とした時期の遺構のほかにも前後する時期の遺構を検出することも多かった。ここでは調査段階の検出状況にしたがって各遺構面に分けて報告する。また、検出遺構は多数におよぶため、ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構、特殊な構造をもつ遺構を中心に報告する。調査地全体の歴史の変遷については第6章第1節で総括する。

## (2) 第1面の検出遺構 (図版24-2、図83)

溝・土塙・柱穴を検出した。調査区全域にまばらに散在する。

柱穴40・41・42 中央部東寄りで見出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は3基で、

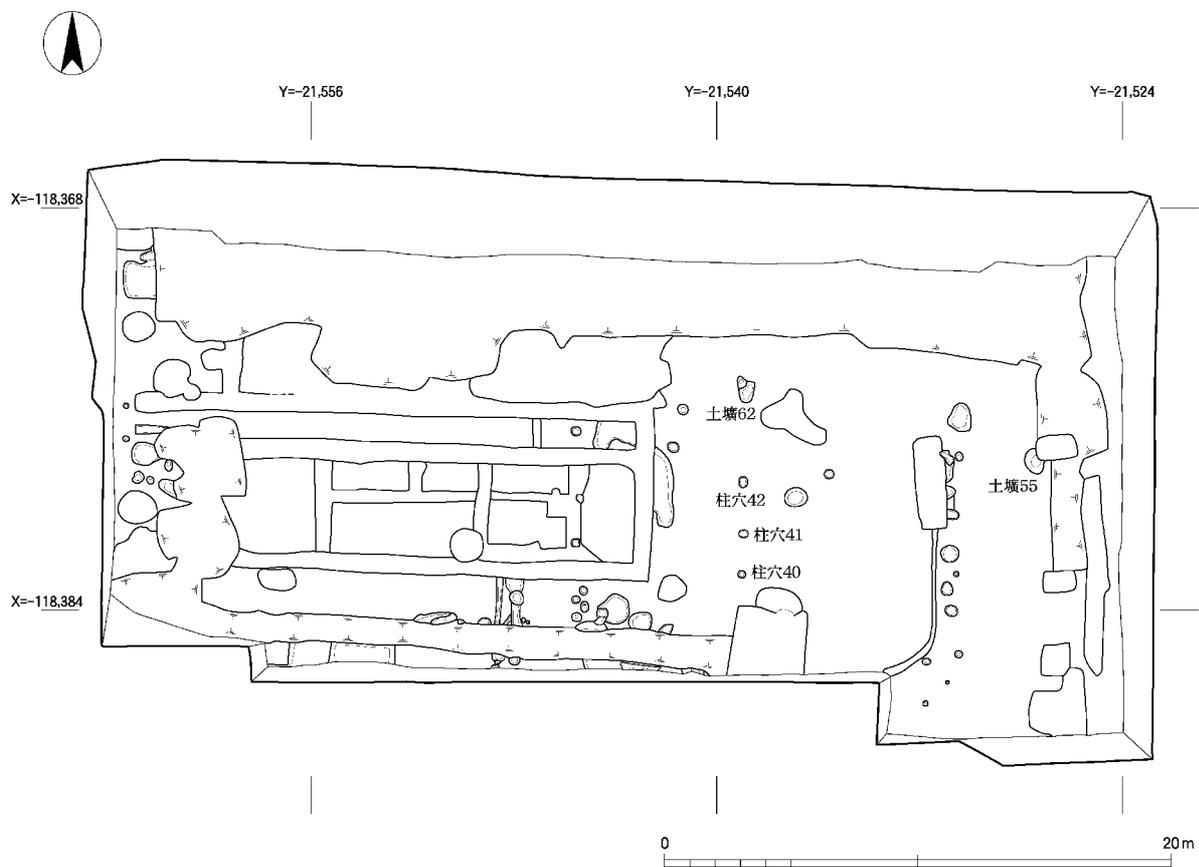


図83 3区第1面遺構平面図

検出長は約3.7mである。柱穴は直径約0.3～0.4m、深さ約0.1～0.2mで、明瞭な柱痕がないことからみても上部は削平されたと考えられる。柱穴の間隔は北から約2.0m・約1.6mである。埋土は褐色砂泥・黒褐色砂泥である。出土遺物はない。

土壌62 中央部北東寄りで検出した。平面形は南北約0.8m、東西約0.6mの不整形な楕円形で、深さは約0.2mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。出土遺物はない。柱穴列40・41・42の北延長線上にあり、柱穴42との間隔は約3.5mなので、これらが一連の遺構であったとすると、中間に柱穴がさらに1基あった可能性がある。

土壌55 東部で検出した。北東側が攪乱されるが、平面形は南北約1.0m、東西約0.7mの楕円形に復元できる。深さ約0.1mである。埋土はオリブ黒色泥土で、18世紀中葉以降の遺物が出土した。

(3) 第2-1面の検出遺構(図版25-1、図84)

調査区全域で段差・溝・土壌・井戸・柱穴などを検出した。

段差(図版26-2) 東部で検出した。2区上段段差の南延長線上にあたり、南側は調査区外に延びる。攪乱される部分があるが、検出長は約15.0mである。段差は1段で、地山を削り込んで成形しており、高低差は約0.5～0.6mである。2区下段段差は3区では不明瞭である。

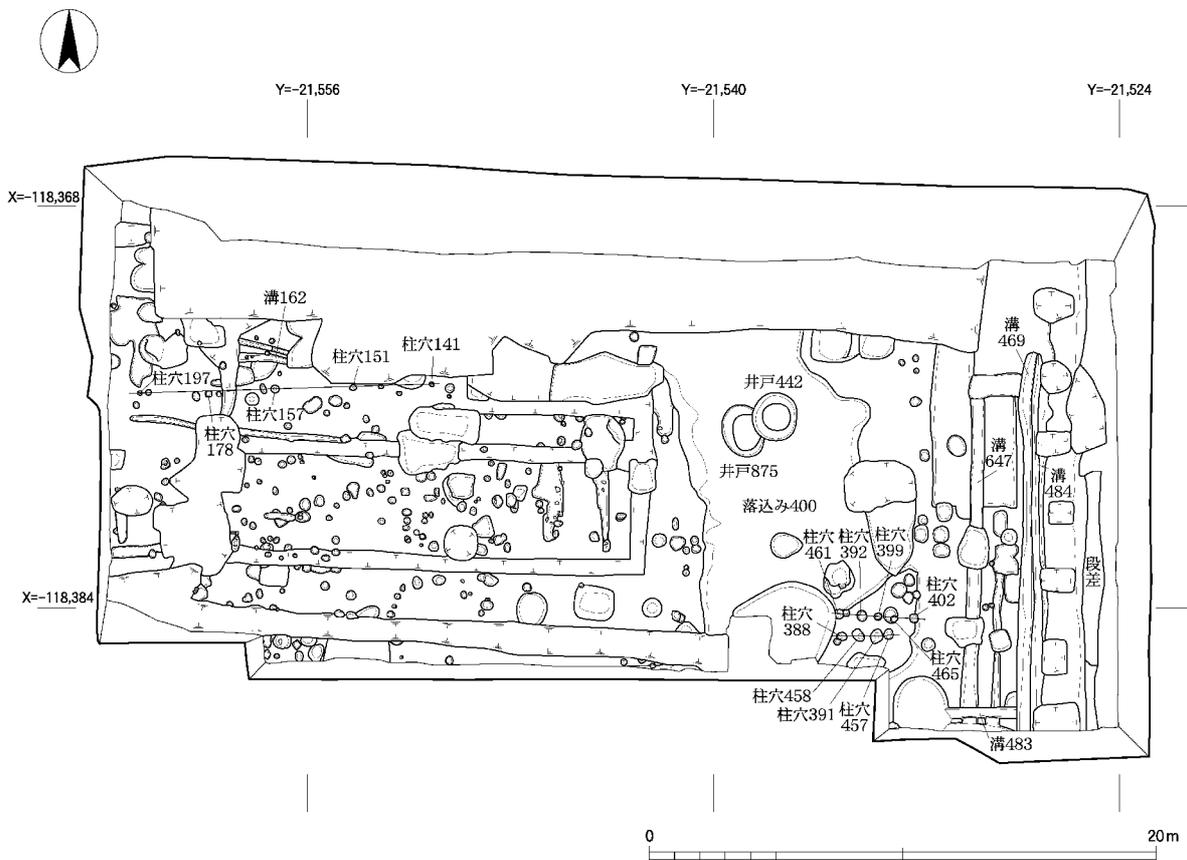


図84 3区第2-1面遺構平面図

溝469 東部の段差下部で検出した南北方向の溝である。2区溝74の延長であり、南側は調査区外に延びる。断面形は浅いU字形で、長さ15.0m以上、幅約0.3～0.5m、深さ約0.1mである。底部は高低差がほとんどない。埋土はオリーブ褐色砂泥で、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

溝484 東部の段差下部で検出した南北方向の溝である。溝469と重複し、西半分が攪乱される。2区溝74の延長であり、南側は調査区外に延びる。ただし、2区では重複を認めていない。断面形は浅いU字形で、長さ15.0m以上、幅0.4m以上、深さ約0.2mである。底部は南に向けてわずかに傾斜する。埋土は灰黄褐色砂泥で、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

溝467 東部で検出した南北方向の溝である。2区下段段差の南延長線上にある。北側・南側とも攪乱されるが、南側は調査区外に延びると推定できる。断面形は浅いU字形で、長さ13.0m以上、幅約0.5～0.6m、深さ約0.2mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は暗褐色砂泥で、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

溝483 南東部で検出した東西方向の溝である。東側は溝469につながり、西側は攪乱される。溝496の方が新しい。断面形は浅いU字形で、長さ2.8m以上、幅約0.4～0.5m、深さ約0.1mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は灰黄褐色砂泥である。出土遺物はない。

溝162 北西部で検出した東西方向の溝である。東側・西側とも攪乱される。断面形は浅いU字形で、長さ2.0m以上、幅約0.3m、深さ約0.1mである。底部は西に向けてわずかに傾斜する。埋土は黄灰色砂泥である。出土遺物はない。

落込み400(図版25-2) 中央部東寄りで検出した。平面形は不整形で、西端は第2-1層が途切れるY=-21,540m付近にあるが、他の部分の輪郭は不明瞭である。南北10.0m以上、東西7.0m以上で、中央が南北方向に溝状に窪み、最も深いところで約0.4mである。埋土は直径約1～10cmの礫を多量に含む暗褐色砂泥・褐色砂泥などが不連続な層状に堆積する。上層からは18世紀中葉～19世紀、下層からは17世紀中葉～18世紀前葉を中心とする遺物が出土したが、層位による明確な時期差は認められない。

井戸442 中央部東寄りで検出した。直径約1.9m、深さ約0.6mの円形に掘り窪めた中央を直径約1.1mの円形に掘り下げる。深さ1.4m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。埋土は灰オリーブ色粘質土である。出土遺物はない。

井戸875 中央部東寄り、落込み400下面で検出した。井戸442に攪乱される。南北約2.1m、東西約1.7m、深さ約0.3mの楕円形に掘り窪めた中央を直径約1.2mの円形に掘り下げる。深さは検出面から1.0m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。埋土は灰黄褐色砂泥で、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

柱穴197・178・157・151・141 北西部で検出した東西方向の柱穴列である。東側は攪乱されるが、西側は調査区外に延びる。検出した柱穴は5基で、検出長は約11.5mである。柱穴は直径約0.2～0.3m、深さ約0.1～0.3mである。柱穴の間隔は西から約2.7m・約2.6m・約3.1m・約3.1mである。これらのほかにも同一線上に並ぶ柱穴があるので、作り替えがあったと推定できる。

埋土は黄灰色砂泥・オリーブ褐色砂泥・褐色砂泥などで、柱穴151から17世紀の遺物がわずかに出土した。

柱穴461・392・399・465・402（図版25-3）南東部で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は5基で、検出長は約3.0mである。柱穴は直径約0.3～0.4m、深さ約0.2～0.3mで、柱穴461・392・399・402には中央に直径約20cmの柱痕がある。柱穴の間隔は約0.6～0.9mである。埋土はオリーブ褐色砂泥・暗褐色砂泥・灰褐色砂泥などである。出土遺物はない。

柱穴388・458・391・457（図版25-3）南東部で検出した東西方向の柱穴列である。柱穴461・392・399・465・402と近接するが、方位をやや異にする。検出した柱穴は4基で、検出長は約9.5mである。柱穴はややいびつな平面形のものもあるが、直径約0.4～0.6m、深さ約0.2～0.4mで、いずれも中央に直径約20cmの柱痕がある。埋土は褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥である。出土遺物はない。

柱穴群 これらの柱穴のほかにも、西部から中央部で多数の柱穴・小土壙を検出した。ややいびつな平面形のものもあるが、直径約0.2～0.6m、深さ約0.1～0.3mで、一部には直径約10～20cmの柱痕がある。東西・南北方向に並ぶものがあることから、復元には至らないが、この区域に建物があったと推定できる。

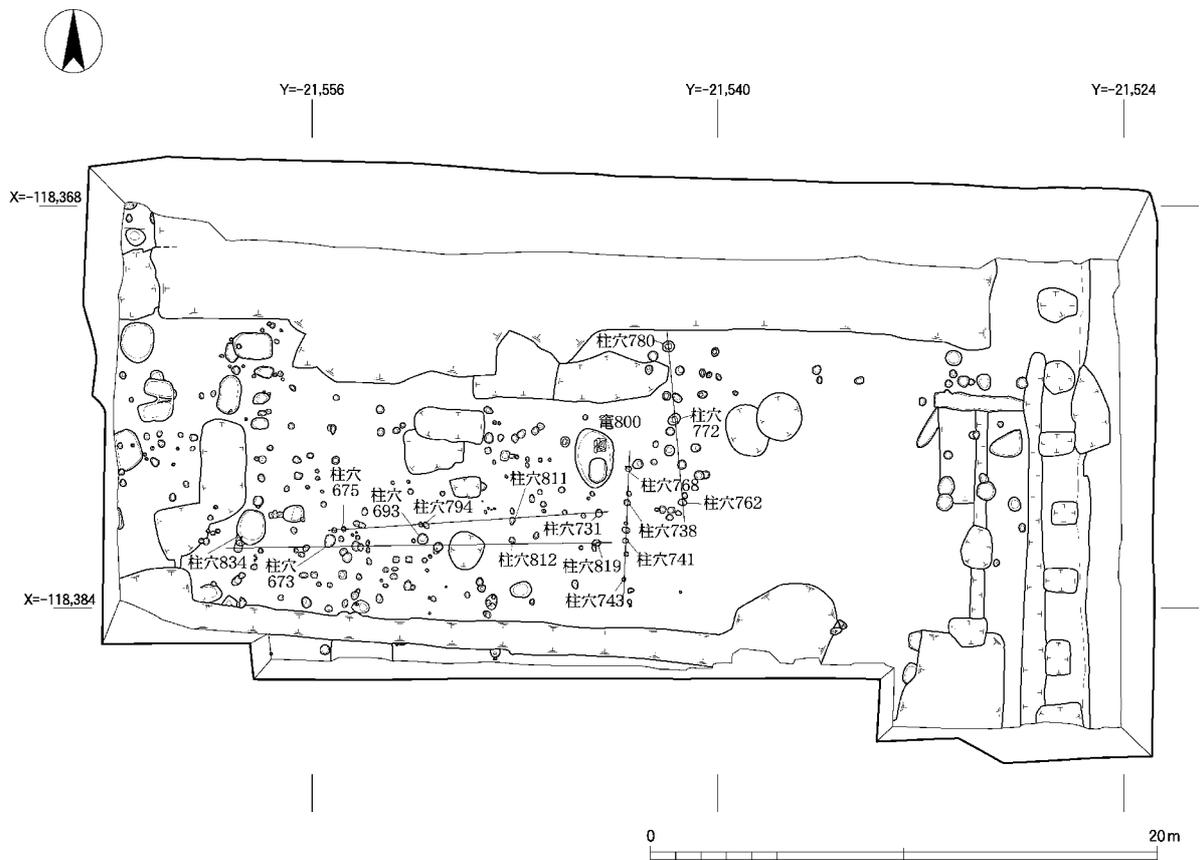


図85 3区第2-2面遺構平面図

(4) 第2-2面の検出遺構(図版26-1、図85)

調査区全域で溝・竈・土壇・柱穴を検出した。

竈800(図版26-3、図86) 竈壁体の立ち上がりがあったため、上部は第2-1面で検出したが、第2-2面の遺構である。南北約2.3m、東西約1.5m、深さ約0.2mの楕円形に掘り窪めた土壇南側に1基の壁体を構築する。平面形は南北約1.0m、東西約0.7mの小判形で、焚口は北側を向く。熱を受けて赤変している部分の厚さは約10cmで、壁体の厚さは約30cmに復元できる。焚口の前には南北約0.6m、東西約0.5mの方形に平坦な面を上にして石を2段に積み上げる。断面の炭層の堆積状況から少なくとも2回の作り替えが行われたことがわかる。16世紀~17世紀前葉の遺物が出土した。

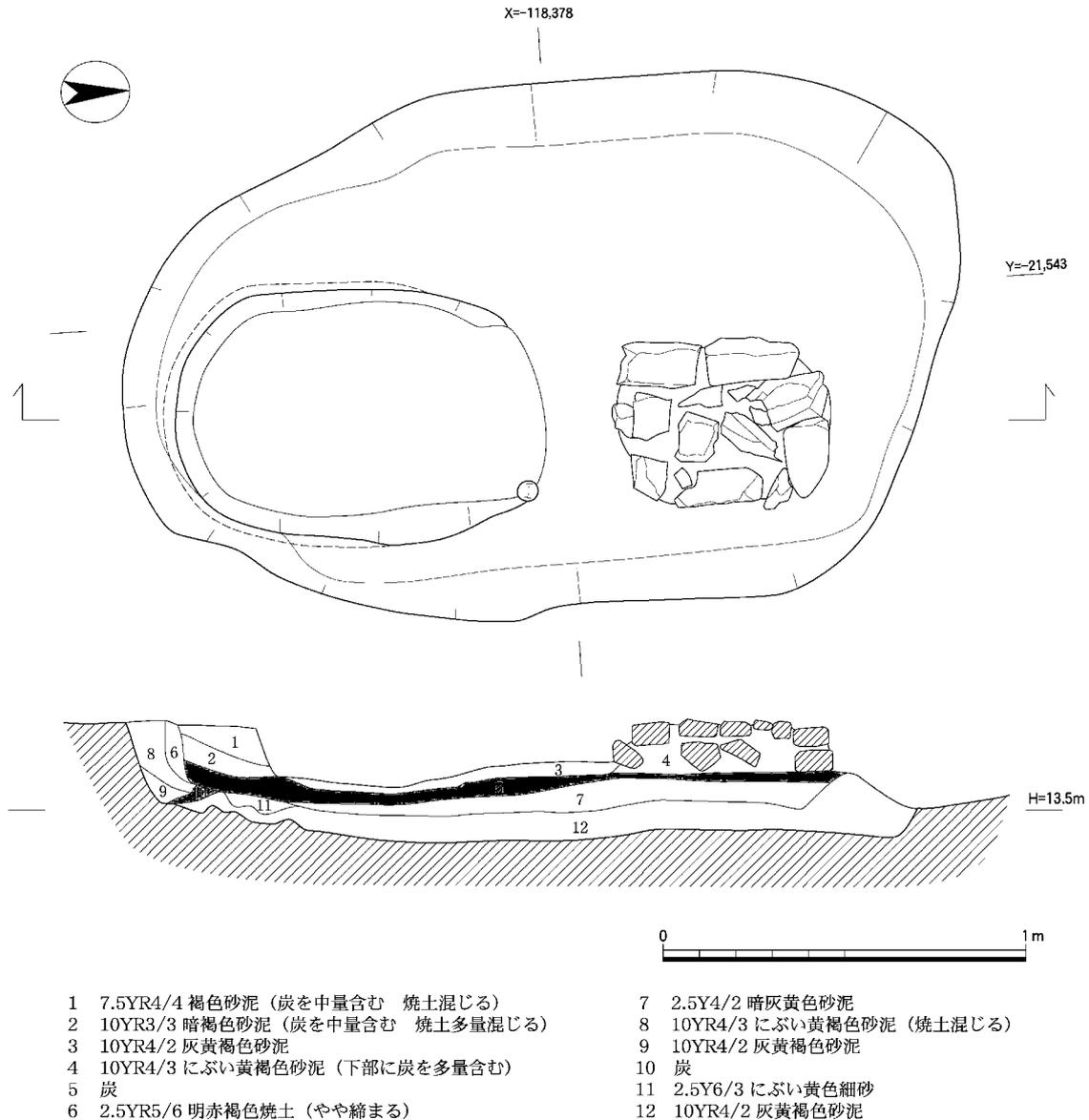


図86 3区竈800実測図

柱穴780・772・762 中央部で検出した南北方向の柱穴列である。北側でやや西に振る。検出した柱穴は3基で、検出長は約6.2mである。柱穴は直径約0.3～0.4m、深さ約0.4～0.5mで、柱穴780・772には中央に大きさ約20cmの平たい石を据える。柱穴の間隔は北から約2.9m・約3.3mである。埋土はそれぞれ明褐色砂泥・灰黄褐色砂泥・褐色砂泥で、柱穴772から時期不明の遺物がわずかに出土したのみである。

柱穴768・738・741・743 中央部で検出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は4基で、検出長は約4.4mである。柱穴は直径約0.2m、深さ約0.1mである。柱穴の間隔は約1.4～1.5mである。埋土は褐色砂泥・黄褐色砂泥などである。出土遺物はない。

柱穴675・794・811・731 中央部で検出した東西方向の柱穴列である。東側でやや北に振る。検出した柱穴は4基で、検出長は約10.1mである。柱穴731の東延長線上に柱穴762があり、南北方向の柱穴列に取り付く可能性がある。そうすると検出長は約13.4mになる。柱穴は直径約0.2～0.3m、深さ約0.1～0.3mで、いずれも直径約10～20cmの柱痕がある。柱穴の間隔は約3.2～3.4mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥・褐色砂泥である。出土遺物はない。

柱穴834・673・693・812・819 西部から中央部で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は5基で、検出長は約14.0mである。柱穴は直径約0.3～0.5m、深さ約0.1mで、柱穴673・693・812・819には直径約10～20cmの柱痕がある。柱穴の間隔は約3.2～3.6mである。埋

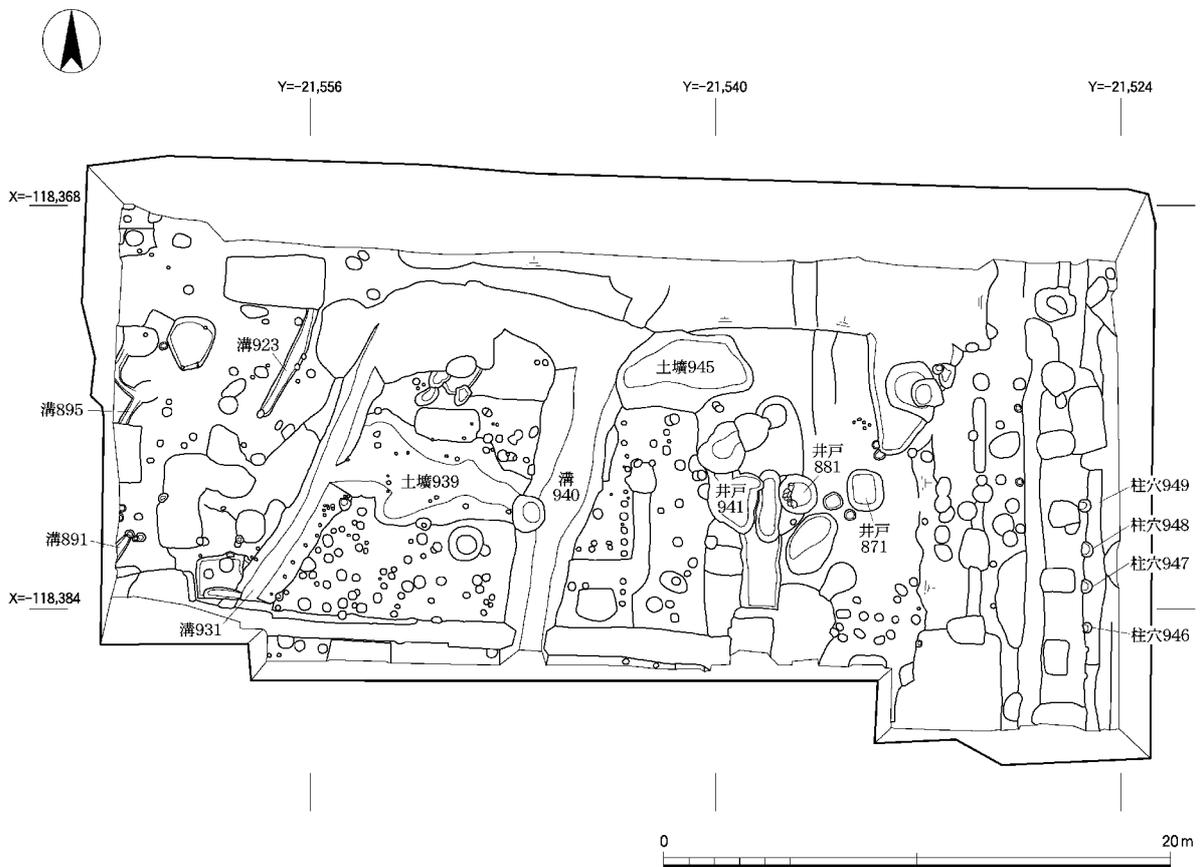


図87 3区第3面遺構平面図

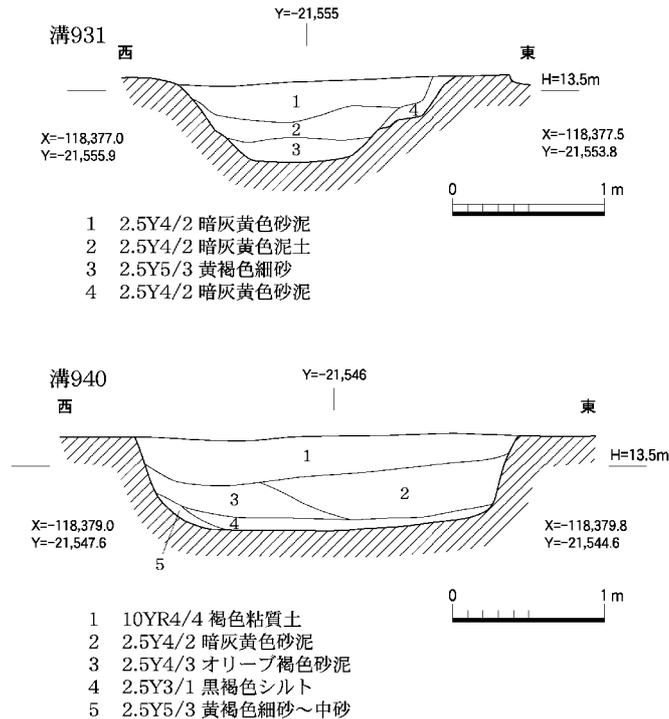


図88 3区溝931・溝940断面図

土は褐色砂泥・暗褐色砂泥である。出土遺物はない。

柱穴群 これらの柱穴のほかにも第2-1面と同様、西部から中央部で多数の柱穴・小土壇を検出した。直径約0.1～0.4m、深さ約0.1～0.4mで、一部には直径約10～20cmの柱痕がある。総じて小型のものが多く、平面形の復元には至らないが、この区域に建物があったと推定できる。

#### (5) 第3面の検出遺構(図版27-1、図87)

調査区全域で溝・土壇・柱穴を検出した。遺構数は第2-1面・第2-2面と比較して少ない。

溝931(図版27-2、図88) 西部で検出したわずかに弯曲する北北東から南南西方向の溝である。北側は1区境界付近で不明瞭になり、南側は調査区外に延びる。断面形は逆台形で、長さ12.7m以上、幅約1.3～1.7m、深さ約0.5mである。底部は北北東に向けて傾斜する。南側の東肩部には直径約5～10cmの杭痕が並ぶ。16世紀後葉の遺物が出土した。

溝940(図版27-2、図88) 中央部で検出した南北方向の溝である。北側でやや東に振る。北側は1区境界付近で不明瞭になり、南側は調査区外に延びる。断面形は幅広いU字形で、長さ12.0m以上、幅約2.0～2.9m、深さ約0.6mである。底部は北に向けて傾斜し、幅も広がる。16世紀後葉の遺物が出土した。

溝923 北西部で検出した北北東から南南西方向の溝である。北側・南側とも攪乱される。断面形は浅いU字形で、長さ4.5m以上、幅約0.4～0.5m、深さ約0.1mである。底部は高低差がほとんどない。埋土はにびい黄褐色砂泥である。出土遺物はない。

溝895 西部壁際で検出した北北東から南南西方向の溝である。北側・南側とも攪乱される。断

面形は浅いU字形で、長さ1.2m以上、幅約0.3m、深さ約0.1mである。底部は高低差がほとんどない。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。出土遺物はない。

溝891 南西部壁際で検出した北北東から南南西方向の溝である。北側は途切れ、南側は調査区外に延びる。断面形は浅いU字形で、長さ1.1m以上、幅約0.4m、深さ約0.05mである。底部は高低差がほとんどない。埋土は暗灰黄色砂泥である。出土遺物はない。

土壙939 中央部で検出した。東側・西側はそれぞれ溝940・溝931に攪乱される。南北約4.5m、東西7.0m以上の不整形な平面形で、深さ約0.5mである。埋土は褐色砂泥で、16世紀後葉の遺物が出土した。

土壙945 中央部北寄りで検出した。南北約3.0m、東西約5.4mの不整形な平面形で、深さ約0.9mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、16世紀後葉の遺物が出土した。

井戸871 東部の落込み400下面で検出した。平面形は南北約1.6m、東西約1.4mの楕円形で、深さ1.2m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、18世紀の遺物が出土した。

井戸881 中央部東寄りで検出した。平面形は直径約1.5mの円形で、深さ1.0m以上である。西半分上部に大きさ約20～40cmの石を粗く積み上げるが、残存状況が悪く、石組の井戸であったかは不明である。埋土は灰黄褐色砂泥などで、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

井戸941 中央部東寄りで検出した。平面形は直径約2.4mのいびつな円形で、深さ1.1m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであったと推定できる。埋土は褐色砂泥などで、16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土した。

柱穴949・948・947・946 東部の段差上部西端で検出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は4基で、検出長は約4.8mである。柱穴は西半分が攪乱されるが、直径約0.4～0.5m、深さ約0.2mに復元できる。柱穴の間隔は約1.5～1.7mである。埋土はいずれもにぶい黄褐色砂泥で、出土遺物はないが、段差にともなう柱穴列と推定できる。

柱穴群 柱穴はまとまりを認めることができない。

## 2 3区の遺物

### (1) 遺物の概要

3区では遺物がまとまって出土することはなく、また、ほとんどが細片に割れているため、完形に復元することができなかった。遺物内容も基本的に1区・2区出土遺物の欠を補うものはほとんどない。そこで3区の遺物については、ここに概要を記載し、ごく一部の遺物を掲載するととどめることとする。

3区では整理用コンテナに22箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・陶磁器類・土製品・瓦類・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が

占め、そのほかの種類は少ない。

土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶磁器・輸入磁器があるが、17世紀以降の遺物がほとんどで、16世紀の遺物はごくわずかにすぎない。16世紀後葉の土器類には土師器の皿、瓦器の鍋・釜・火鉢・壺、須恵器の捏鉢・壺・甕、焼締陶器の擂鉢・甕、中国製青磁椀・白磁椀・白磁皿がある。17世紀以降の土器類は施釉陶磁器が大部分を占めており、器形は椀・皿・鉢・仏飯器・香炉・灯火具・鍋・土瓶・壺・甕・紅皿・水滴など多様である。そのほかには土師器の皿・焙烙・鍋・炉・壺、瓦器の火鉢、焼締陶器の盤・擂鉢・壺・甕がある。

土製品には焼塩壺・土人形・泥面子がある。

瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・棧瓦・飾瓦がある。棧瓦が多くを占める。いずれも細片である。

木製品には角材・板材・角杭・丸杭・竹片などがある。いずれも遺存状態は悪い。溝931から出土した丸杭は、溝の東肩に並ぶ杭が埋没したものである可能性がある。

石製品には墓石・硯・砥石がある。

金属製品には銭貨・煙管・銅線・鉄釘などがある。用途不明のものもある。

動物遺体には獣骨・貝、植物遺体には種子がある。いずれも種類の同定は実施していない。

## (2) 主要な遺構出土遺物

土壙55出土遺物(図版62) 土師器皿、施釉陶器壺、土人形が出土した。土人形(984)は大型の飾り馬である。中空で型合せ成形である。頭部・脚部が欠損するが、鞍・鐙などの馬具、たてがみ・飾り房などの細部まで表現している。外面には雲母が付着し、内面には多数の指圧痕と粘土の継ぎ目がのこる。着色は認められない。

第2-1層出土遺物(図62) 陶磁器類など多数の遺物が出土したが、墓石(石31)のみ紹介する。墓石は1区境界近くの第2-1層から前面を上にして横転した状態で出土した。完形である。材質は花崗岩製で、頂部が丸くなる方柱形である。花崗岩製の方柱形の墓石は今回の調査では唯一である。元禄15年(1702)10月3日の日付が刻まれる。

## 第6章 まとめ

### 1 遺構の変遷

#### (1) 室町時代(図89)

今回の調査で出土した最も古い遺物は古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器であり、新しい時期の包含層や遺構からわずかながら破片が出土した。また、飛鳥・白鳳時代の瓦、奈良時代の須恵器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・磁器・瓦、鎌倉時代から室町時代前期の土師器・瓦器・焼締陶器・磁器・瓦・石製品が、いずれも少量ながら新しい時期の包含層や遺構から出土していることを確認した。調査地内ではこれらの時期の遺構を検出することができなかったが、周辺では第2章で紹介したように、断片的ながらも該当する時期の遺構が見つまっていることから、継続して生活が営まれていたことが想像できる。特に1区溝1660から出土した飛鳥・白鳳時代の重弧文軒平瓦は、調査地北側の調査で検出した奈良時代の竪穴住居や土壌と合わせて、板橋廃寺との関連が注目できる。

今回の調査で検出した最も古い遺構は室町時代後期に属する。1区・3区の中央部から西部にかけて溝・土壌・井戸・柱穴の分布が集中する反面、2区では井戸10・土壌55などを確認したにすぎない。集落の一部が見つかったと推定しているが、遺構の分布が偏っている要因には、伏見城城下町造営に伴う地形の改変と集落自体の構成の2つが想定できる。

まず、地形の改変について検討する。地山面の状況から当時の地形は東から西に向けて傾斜しており、遺跡が緩斜面に立地していたことがわかる。後述するように城下町造営にあたっては、地山を削り込んで南北方向の段差を形成し、緩斜面の低い方には整地層を盛って平坦地を造り出した。調査区西部の遺構の多くは、この時に埋め立てられ、整地層に覆われたのである。1区溝1660などから出土した遺物が16世紀末の特徴をもっていることはこれを裏付ける。一方、1区溝1660の東側から段差下部には遺構はなく、段差を形成するときに削平されてしまったと考えられる。また、段差上部については、城下町造営の段階に加えて、近代以降にも削平をうけたため、2区井戸10・2区土壌55のような規模の大きな遺構のみが残されたのであろう。

次に集落の構成について検討する。1区・3区西部で検出した溝・柱穴列は、伏見城城下町の街路・街区とは異なり、1区では約15度、3区では約20度で北側がやや東に振る方位をとる。溝は集落内部の区画溝、柱穴列は建物か柵の一部であると考えられる。概要図に掲載した他にもこの時期に属する多数の柱穴を検出している。重複が多いため個々の建物の復元はできていないが、数回に及ぶ建て替えが行われていたと考えられる。1区井戸2021も建物に伴うものである。これらの遺構は調査区外に拡がることから、集落の中心部は調査地のさらに西側にあったと推定できる。

そうすると、1区溝1660・3区溝940は集落の東側を画する溝と位置づけることが可能である。埋土最下層には泥土・粘質土が堆積していることから、東から西に向けて傾斜している斜面にあ

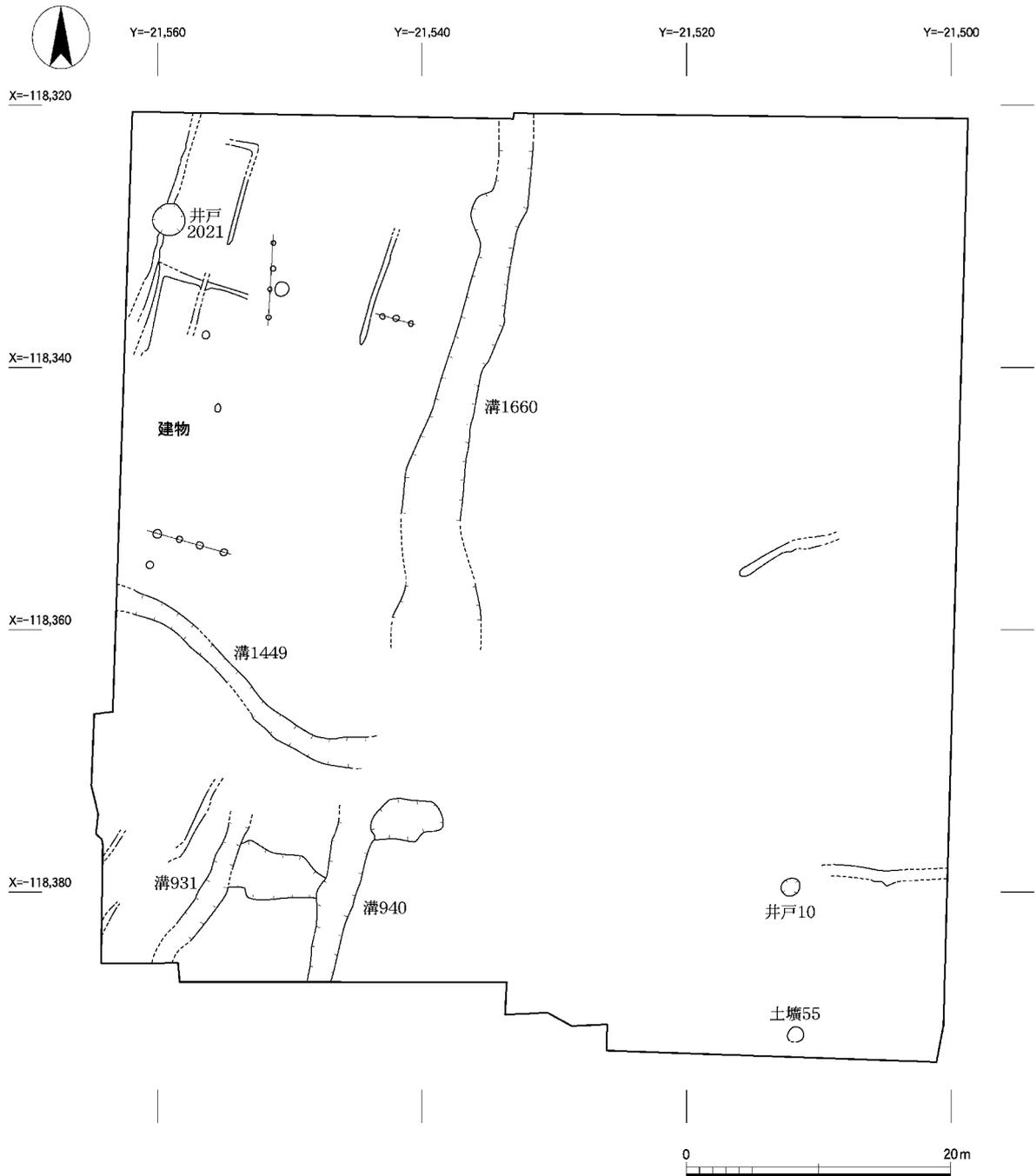


図89 遺構概要図(室町時代)

って、丘陵上部からの雨水や悪水が集落内部に流れ込むのを防ぐ機能をもっていたことは間違いない。1区溝1660は南に向けて、3区溝940は北に向けて傾斜しており、調査区内では最も低い1区溝1660と3区溝940が向かい合う部分に雨水や悪水が集められ、さらに1区溝1449を通じてより低い西側に排出されたのではないだろうか。また、これらの溝に防御的機能や象徴的機能があったかは定かではないが、図版17-2の写真に見るように、1区溝1660を北側調査区外に延長すると、現在の金札宮東側を囲う位置にあたる。金札宮は城下町造営以前から現在の位置にあるという伝承があり興味深い。したがって1区溝1660・3区溝940により集落の内部と外部が区別され、遺構の分布の偏りに反映していることが考えられるのである。もちろん、1区溝1660・3

区溝940の外側に遺構がまったくないわけではない。2区井戸10から出土した遺物は16世紀前半の特徴をもっており、集落の消長をあらわす要素と位置づけることができる。

桃山丘陵で伏見城城下町造営以前にさかのぼる室町時代の集落が確認できたことは初めてのことである。また、山城国紀伊郡条里<sup>1)</sup>は北側で東に振る方位をとると考えられており、旧地形と合わせて検出した遺構との関連が注目できる。今後、周辺の調査が充実することにより、城下町造営以前の詳細な状況が明らかになることを期待したい。

## (2) 桃山時代(図90)

伏見城城下町の造営が行われ、現在に残る街路・街区が整備された時期である。この時期の遺構は3つの調査区のほぼ全域に分布する。

城下町造営の痕跡は段差と整地に顕著にあらわれている。段差は南北方向に2区西側から3区東端にかけて検出した。東から西に傾斜する地山を削り込んで形成する。検出長は50m以上で、少なくとも調査地がある街区内の北端および南端まで延長すると考えられる。また、2段になる部分や上部が近代以降に削平されている部分もあるが、高低差は0.8mを越える。3区の段差上部西端で検出した柱穴列は付属する塀か柵があった可能性を示す。また、段差下部の南北方向の溝は水切りを目的としたものと考えられ、数回にわたって作り直されている。

整地層は段差下部の1区・3区西部に広がる。室町時代後期の遺構を覆う層序である第3層がこれにあたる。緩斜面の低い方に土を盛って平坦地を造り出した。第3層の拡がり調査区西側に偏るのはこのためである。整地に用いた土は、おそらくは段差を形成した掘削土を利用したものである。

この時期には遺構数や遺物の出土量が増大し、土地利用に大きな変化が起こったことがわかる。段差上部には大規模な廃棄土壌・井戸などがある。また、近代以降に削平されたため復元はできないが、礎石を備えた柱穴を数基検出しており、何らかの建物があったことは間違いない。2区土壌48・2区土壌49をはじめとする大規模な廃棄土壌は、段差近くの南北方向に並ぶ。これからは多量の土器・陶磁器類、木製品などが出土した。土器・陶磁器類は食器類が多くを占める。また、木製品は漆器の椀皿類・箸・折敷などの食膳具、杓文字・籠・まな板・柄杓などの調理具、桶・樽などの貯蔵具が目立ち、付札の中には油や味噌の文字がみられることから、台所に関連する遺物を廃棄したと推定できる。2区井戸40・2区井戸50が並列していることも台所と結びつけることが可能である。

これらの廃棄土壌や井戸から出土した遺物の年代は短い時間幅でまとまっており、埋土も短期間で埋め立てられた状況を示している。廃棄土壌から出土した木製品には台所関連用品の他にも下駄・箒などの生活用品、櫛・鞆などの装身具、建築部材などが含まれている。木製品は使用痕が明瞭に残り、建築部材には鉄釘が付いているものも多いことから、建物を取り壊し、不要になった家財道具をまとめて廃棄した状況を想定できる。2区井戸50から同範の軒丸瓦がまとまって出土したことも、これを裏付ける。埋め立てられた時期は遺物のまとまりから17世紀第一四半期

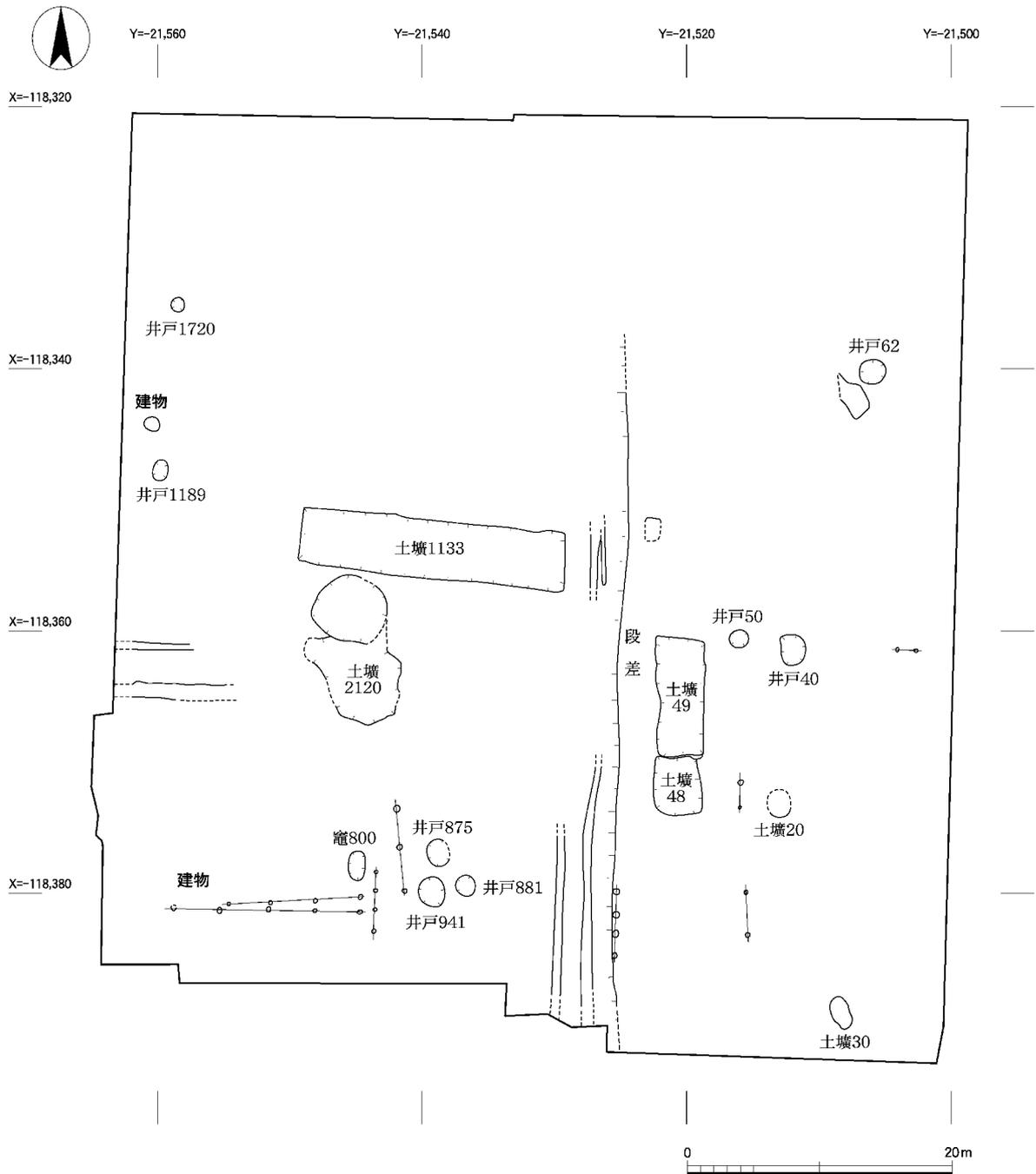


図90 遺構概要図（桃山時代）

に限定することができる。この時期は伏見城城下町にあっては、慶長20年（1615）の大坂夏の陣での豊臣氏滅亡や元和9年（1623）の伏見城廃城に伴って武家屋敷の移転が行われており、遺構の状況と合致する。

これらの遺構を残した主体が、城下町の中で如何なる階層にあたるのかは詳らかにできていない。調査地に武家屋敷があったことを示す後世の絵図があるが、調査では建物の復元ができていないこともあり、武家屋敷が存在したかについては断定できない。ただ、少なくとも庶民とは異なり、多量の生活資材を所有していたこと、また、相応の広さの屋敷を占有していたことは確実であろう。調査地東側の竹中町通もしくは南側の毛利橋通に面して門を開き、敷地西限は段差に

およんだと考えられる。

段差下部には土壌・井戸・柱穴などがある。個々の建物の復元には至らないが、柱穴は1区・3区西部に集中している。3区では南部町通から約30mの範囲で東西方向の柱穴列を検出しており、この部分に建物があったと推定できる。3区竈800は建物内部の台所の遺構と考えられる。3区井戸875・3区井戸881・3区井戸941は建物裏側に作られたものであろう。このような遺構の配置から考えて、南部町通に面して出入口を開く町屋が建ち並んでいた状況が復元できる。柱穴が重複するのは何回もの建て替えがあったことの反映であろう。1区西部も同様に町屋が建ち並んでいたと推定できる。1区井戸1189・1区井戸1720は柱穴群の中にあるので、建物内部の井戸であった可能性がある。なお、1区土壌1133は町屋に引き付けて評価することは現状では難しい。整然とした大規模な方形の土壌であることから、屋敷の堀あるいは街区内の区画施設とみれなくはない。しかし、水を湛えていた痕跡がないこと、掘削されて間もなく埋め立てられていること、規模の割りに出土遺物が少ないことから普通の廃棄土壌とは考えがたいことなど、機能は不明である。

また、段差下部にあっても1区南部では建物の痕跡を認めていない。ここは室町時代後期以降も引き続き調査区内では最も低い部分となり、雨水などが溜まりやすい状況にあったと推定できる。西側の南部町通に直交して西に向けて傾斜する1区溝1472は、1区溝1449の排水機能を引き継いでいた可能性がある。居住に適さないこの場所には大規模な廃棄土壌である1区土壌2120が作られ、さらに江戸時代になると墓地として新たな利用が行われるのである。

### (3) 江戸時代(図91)

伏見城の廃城後、市街地が拡大・充実した時期である。この時期の遺構は段差より西側の1区・3区に濃密に分布するのに対して、東側の2区にはほとんどない。

段差下部では多数の溝・土壌・井戸・柱穴を検出していることから、引き続き市街地として状況を呈していたことがわかる。この時期における大きな変化は墓地を備えた寺院が造営されることである。真福寺という日蓮宗寺院である。次節で詳述するが、墓地は桃山時代に空地地として放置されていた1区南部に造られており、墓地の下層の1区土壌2120から出土した遺物が17世紀第一四半期の特徴を示すこと、出土した墓碑銘の最も古い元号が元和5年(1619)であることから、この頃に造営が行われたことがわかる。

寺域東端は墓地東限の段差にあることは確実である。寺域南端は3区溝162付近にあったと推定できる。墓地南限の1区溝180から3区溝162付近にかけては、遺構がほとんど認められず、分厚く堆積した第2層からは墓石をはじめ煙管などの副葬品が混入・散乱した状態で出土した。これは度重なる墓地の整地の際に出た排土を積み上げていた結果と考えられ、この部分は土壘状に盛り上がっていた状況が想像できる。1区南部西寄りでは樹木や竹の根が残っていたことから、何らかの植栽があったことをうかがわせる。桃山時代にあった3区西部の町屋の北端を境界として寺域が定められたのであろう。この位置は調査前の伏見区役所と民有地の境界と一致しており、

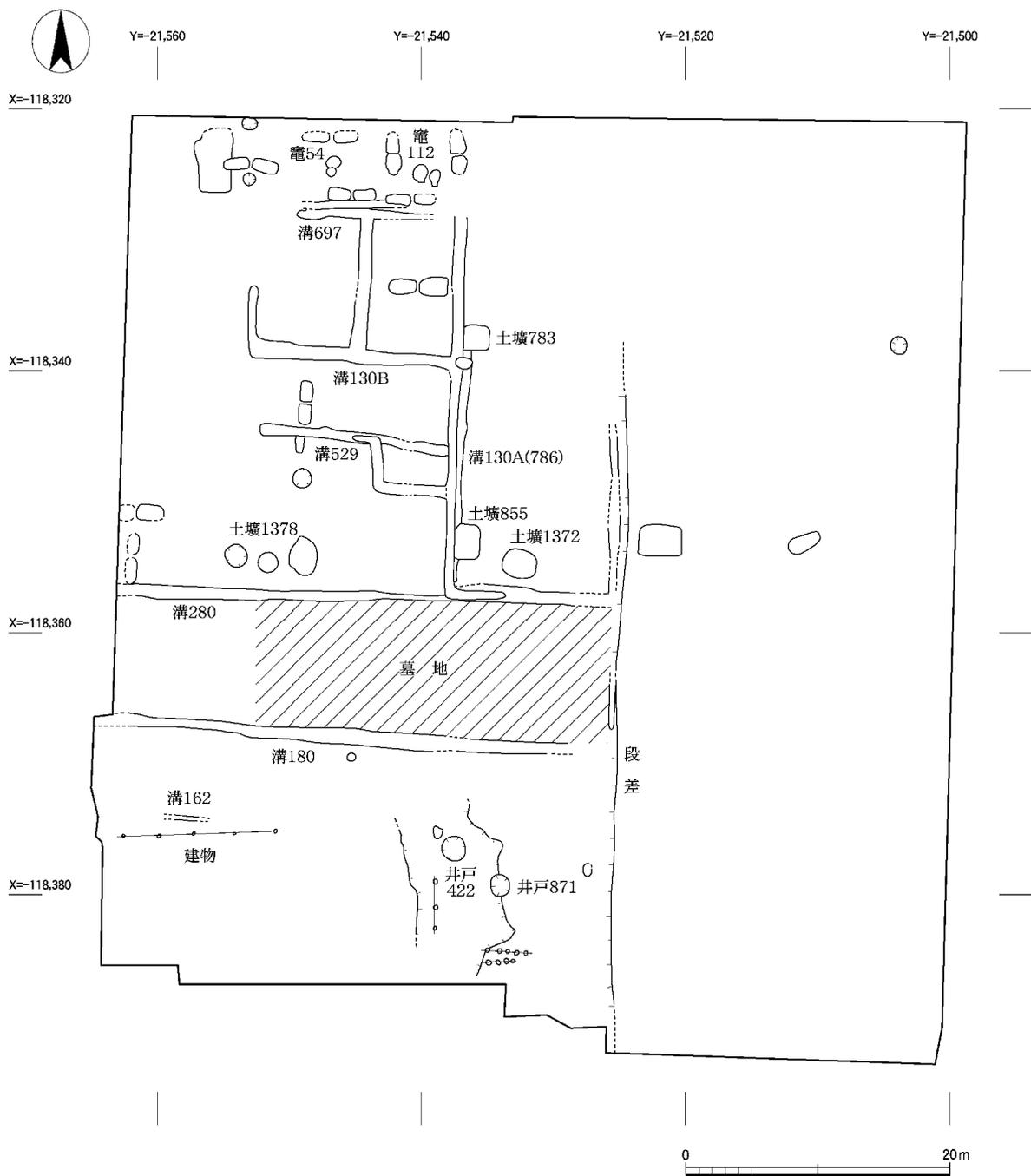


図91 遺構概要図（江戸時代）

現代まで踏襲されていたことを示している。なお、寺域北端は明確にできておらず、後程、あらためて考察する。また、遺構としては検出できていないが、西側の南部町通に面して門を開いていたことは間違いのないであろう。

寺院の建物は基壇（亀腹）部分が削平されたためか、痕跡が不明である。墓地北側にあったことは確実で、瓦や石で護岸した1区溝529は雨落溝の可能性があるので、1棟は墓地北限の1区溝280と1区溝529の間に推定できる。1区溝786・1区溝130Aは江戸時代を通じて同じ場所を踏襲しており、寺域内の基幹排水溝とみられる。したがって建物はこの溝より西側におさまっていたであろう。寺院内にはこの他にも複数の建物があったはずであるが、全体の配置は復元で

きない。

寺院の周囲には、桃山時代と同様、南部町通に面して出入口を開く町屋が建ち並んでいたと推定できる。1区第1層・第2層、3区第1層・第2-1層・第2-2層の状況から、数回にわたる整地が行われ、それに伴い建物が建て替えられたことがわかる。3区では桃山時代とほぼ同じ位置に3区井戸442・3区井戸871を検出していることから、南部町通から約30mの範囲に建物があり、井戸は裏側に位置していたと考えられる。

一方、1区では町屋についても配置の詳細が不明である。周辺から鞆羽口・埵埵・金属滓が出土した大型の竈である1区竈98・1区竈112や、細長い深い土壌が2基一組で並ぶ特殊な形態の遺構は何らかの生産施設であったと推定できる。これらの遺構は1区溝697よりも北側にまとまっている。1区溝697は調査地北側の西楽図子通から約23mの位置にあり、これらの遺構群は西楽図子通に面した比較的奥行き短い小規模な町屋裏側に設置されたか、あるいは街区内の一角を占める敷地をもった手工業生産施設の中に配置されていたと考えられる。ほぼ同時期の遺構が多いことから後者の可能性が高い。したがって、寺域北端は最大でも1区溝697までとなる。1区溝130Aが1区溝697の東延長付近にまで延びていることも関連付けられる。ところが、細長い深い土壌が2基一組で並ぶ特殊な形態の遺構は、南部町通に近い1区溝280のすぐ北側や1区溝529北側に接した位置・1区溝130Aの西側に接した位置でも検出しており、また1区溝280北側では、大型の桶を据付けた土壌1378がある。これが生産施設であったとすると先にみた寺域との関係が微妙となる。遺構の埋没時期はこれらの方が1区溝697北側で検出したものよりも若干古い。この様に遺構が入り組んだ状況を示すことから、江戸時代の中で寺域北端と西端については、町屋域との間に境界の移動があった可能性が十分に考えられる。

段差下部に対して、段差上部にはわずかに土壌・井戸が分布するのみである。近代以降に削平されたこともあるが、検出できた遺構はあまりにも少ない。その理由として次のような経過を考えておきたい。桃山時代の終わりにこの場所にあった屋敷が廃絶したあと、敷地全体は空閑地となった。やがて調査地東側の竹中町通に沿って、南部町通側と同様に町屋が建ち並ぶようになったが、街区中央部までは活用が及ぶことがなく、また、西側からは活用しようにも段差が障害となった。おそらく江戸時代を通じて耕作地などとして利用された可能性はあるが、空閑地のまま残されたのではないか。近代になってからの工場建設まで、この部分の大規模な再開発は行われなかったのである。

## 2 墓地の変遷

調査した墓地は、昭和初期に移転した日蓮宗真福寺に付属する寺墓である。文献資料からの検討が困難であることから真福寺の創建年代は明らかではないが、1区土壌1414から出土した一石五輪塔が元和5年であることから1619年を上限とすることができる。

墓地の整地 墓地の規模は南北10m、東西27mに渡る。墓域の境界は18世紀中葉～19世紀前葉あたりで確定する。北端は溝280、南端は溝180、東端は段差によって限られる。西端では境界を

示す明瞭な遺構は確認できなかった。しかし西端の墓列（埋葬181・182・183・184・185・186・187・188・190・191）がほぼ一列に並んでいることから、1区溝1449から派生した湿地が埋め立てられこの墓列まで墓域は拡張されて、西端になったものと思われる。

墓地にあたる場所には下層に1区土壌2120や1区溝1660などが存在し、整地前は湿潤な場所であった。1区溝1660は城下町造営時に埋め立てられ土壌2120が造られた。その後この土壌も徐々に埋まっていき、その上に盛土を行い整地して埋葬施設が造られ始める。その後少なくとも4回の盛土を繰り返していることが墓地整地層断面（図29）から観察できる。これは墓域は東西に広がっていくが平面の広がりだけでは増墓に対処しきれず墓地を整理し盛替えた結果である。埋葬施設が飽和状態に達すると、一旦全体を削平してから40～50cmの盛土をして再整備したと推測できる。1期～4期では削平した土は墓域の西側の湿地や南側の町家との境界に盛られていたと考えられる。墓域の南側に当たる1区土壌1414や3区北部から元和5年（1619）の一石五輪塔（石14）や元禄15年（1702）の墓石（石31）などが出土している。また西側の湿地からは寛文11年（1640）（石17）と寛永銘（石16）の墓石が出土している。5期～6期になると一旦削平した土を再度墓域に盛ったようで、土の中に骨片や遺物などを多数包含している。

墓地の変遷 埋葬施設の変遷を6時期に分けた。時期決定の基準は、埋葬施設の切合い（平面・断面）・埋葬施設底部の標高（埋葬施設の規模には規則性が認められ種類の違いによる多少の差はあるが、同時期の埋葬施設は標高が一定範囲内に収まる）・副葬品の時期は主に土師器・陶磁器などの年代と銭貨の組合せなどによって区分した。しかし重複が激しく出土遺物が確実にその埋葬施設に付属するものであることを断定することが困難な場合は、埋葬施設の切合いを優先した。また標高が示す時期と出土遺物の年代が大きく異なるものについては遺物の年代を優先しているが、最終的には遺構の切合いを最優先で決定した。

1期（図92）（12基）江戸時代前期（17世紀前葉～中葉）の墓地である。古寛永通寶<sup>2)</sup>のみが出土する時期とした。江戸時代初頭の1区土壌2120が埋まり、その上に埋葬施設が造られ始める真福寺創建期のものである。

埋葬施設は円形木棺が主体であり、寺の建物があつたと推測される場所の南側にあたる。

2期（図93）（44基）江戸時代前期から中期（17世紀中葉～18世紀中葉）の墓である。寛永文銭の鑄造が終り新寛永通寶が作り始められるまでの時期とした。

この時期は、まだ埋葬施設は雑然とした配置で墓道も確立されていない。しかし墓域は意識され始めたようで、東端は北から埋葬2275・1603・1633・2208が南北方向に並ぶ。西端は1区土壌2120の西端に当たる部分にまで広がっている。しかし西側の1区溝1449から派生した湿地はまだそのままであつたとおもわれる。

埋葬596は溝180の下で検出していることから、この時期にはまだ墓域の南端を確定する溝は造られていなかったようである。

埋葬施設は円形木棺と方形木棺があり、円形木棺がやや多い。

3期（図94）（140基）江戸時代中期（17世紀後葉～18世紀中葉）の墓地である。新寛永通寶

(1期)の鑄造が終わる頃までとした。

表24 埋葬施設個数

この時期になると墓道が意識され始め、埋葬施設は整然と並び始める。墓域も東側に拡張されている。2区で検出した墓地の平坦面には不整列で墓が造られている。

埋葬施設は円形木棺と方形木棺の数が逆転し方形木棺の方がやや多めになる。またこの時期から土器棺(埋葬673・埋葬2154B)が出現する。

埋葬施設	1期	2期	3期	4期	5期	6期	合計
円形木棺	10	24	65	55	24	1	179
方形木棺	2	20	65	94	152	1	334
土器棺			3	6	10	11	30
木棺+土器棺				1	4		5
直葬					4		4
墓石						6	6
不明			7	18	12	7	44
合計	12	44	140	174	206	26	602

4期(図95)(174基)江戸時代中期から後期(18世紀中葉~19世紀前葉)の墓地である。墓地南限の1区溝180と北限の1区溝280出土遺物の時期とした。

※ 埋葬595(263・264)は土器棺1としてカウントした。

この時期に墓地の規模がほぼ確定したと推測できる。墓地の南側に1区溝180が造られ墓地の南端が確定した。また北側には1区溝280と1区溝868が造られ建物との境界としている。埋葬施設は東西にも広がっていく。西は1区溝1449から広がる湿地が埋め立てられ、その上に埋葬施設が造られ西端となる。東は平坦面の奥にまで広がっていき墓列は2列になる。

埋葬施設は方形木棺が円形木棺の倍近い数になる。土器棺には壺棺の他に甕棺も出現する。

5期(図96)(206基)江戸時代後期(19世紀前葉~中葉)の墓地である。

墓地内は、墓道が確立されており整然とした状況を呈している。墓道は大部分が南北方向であるが、北東部は東西方向となる。

埋葬施設は方形木棺が大多数を占めるようになるが、円形木棺もわずかではあるが残る。土器棺の数も増えるが、方形木棺と組み合わせるもの(埋葬284・347・410・416)が出現する。土器棺と組み合わせる木棺は浅い。古い木棺の底部を利用した可能性もありうるが、たとえば埋葬416では土師質の壺棺が方形木棺の中にちょうど納まっていることからみても組み合わせで1つの埋葬施設と考えるのが妥当と思われる。

6期(図97)(26基)幕末から昭和(19世紀中葉~20世紀前葉)にかけての墓地である。

真福寺移転後の工場建設のために削平を受けており、残存状況はよくなかった。この時期は火葬骨が主体となるため、骨壺のみが残存している状況であった。また墓石も一部が残るのみであった。木棺はほとんど無かったが寝棺が1基検出された。

埋葬施設 今回確認できた埋葬施設は、1区・2区合わせて602基である。埋葬施設と認定した基準は、棺桶が残存(底板のみ残存・棺桶の形が多少でも残るものは墓とした)するもの、人骨が検出されたもの、明らかに副葬品(銭貨・数珠など)と確認できる遺物が検出された土壌を埋葬施設とした。

埋葬施設の変遷は円形木棺が主体となる1期から始まり、2期では円形木棺の方が方形木棺よ

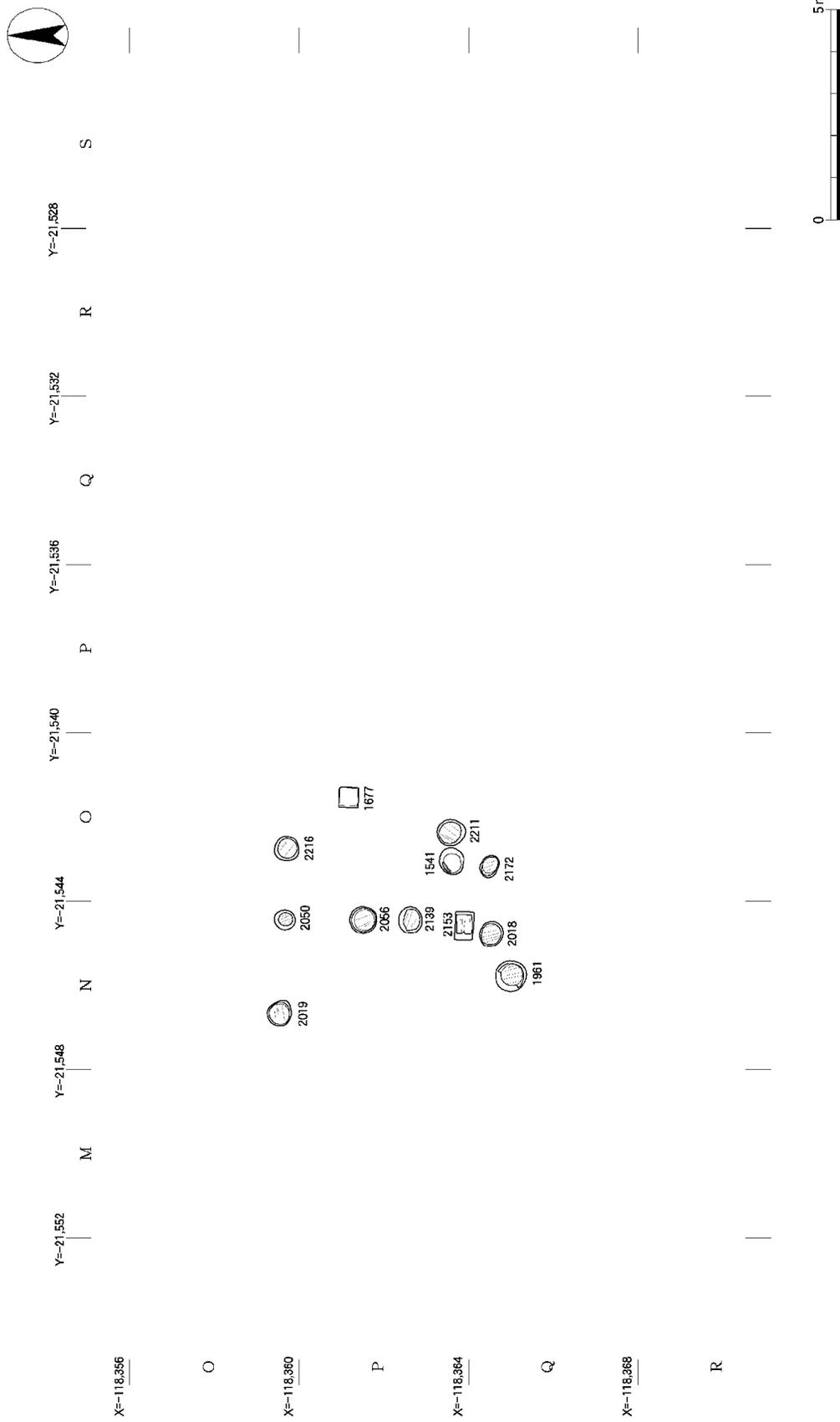


图92 耕地变化图(1期)

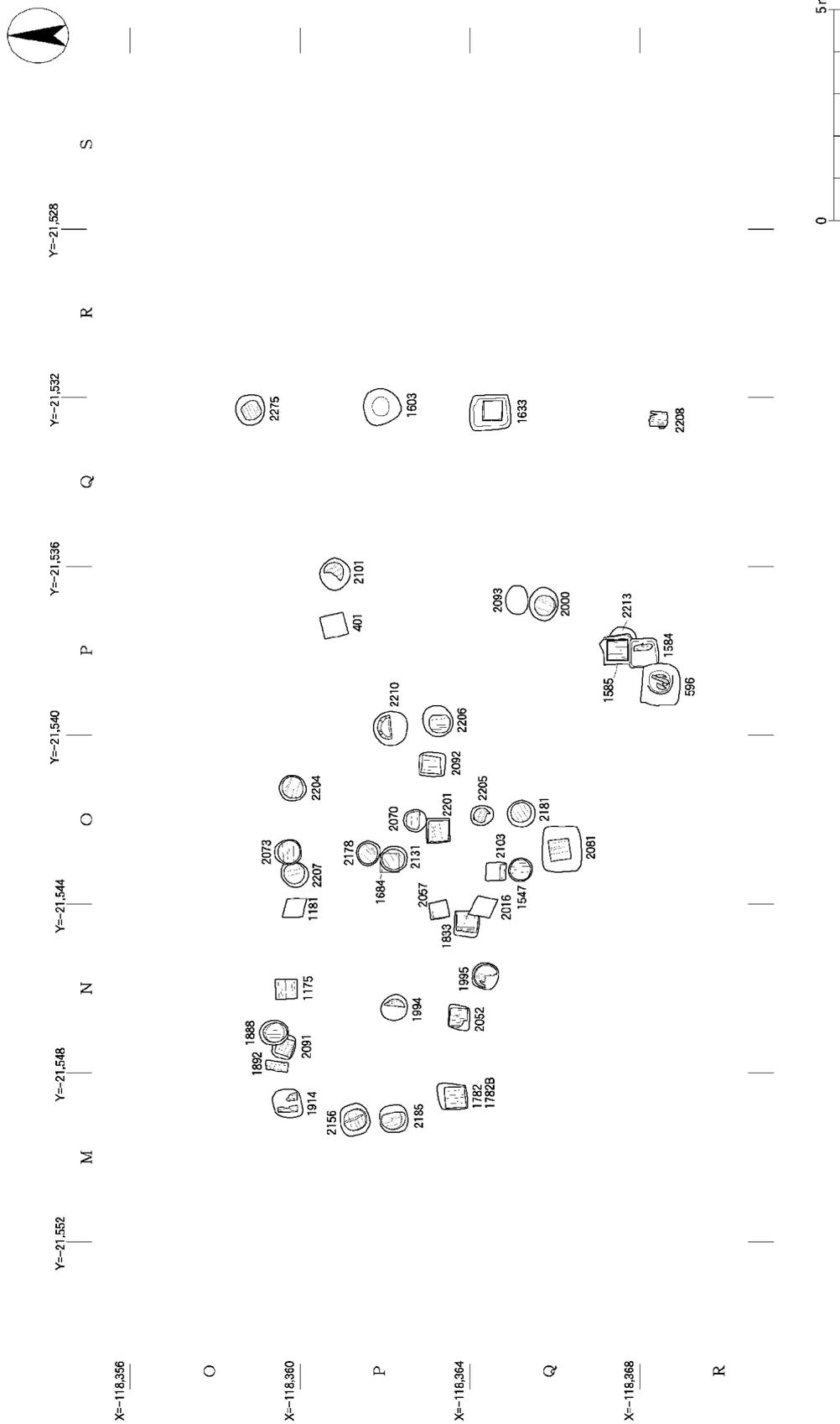


图93 用地变化图(二期)





Y=-21,552 | M | Y=-21,548 | N | Y=-21,544 | O | Y=-21,540 | P | Y=-21,536 | Q | Y=-21,532 | R | Y=-21,528 | S

X=-118,366

X=-118,360

X=-118,364

X=-118,368

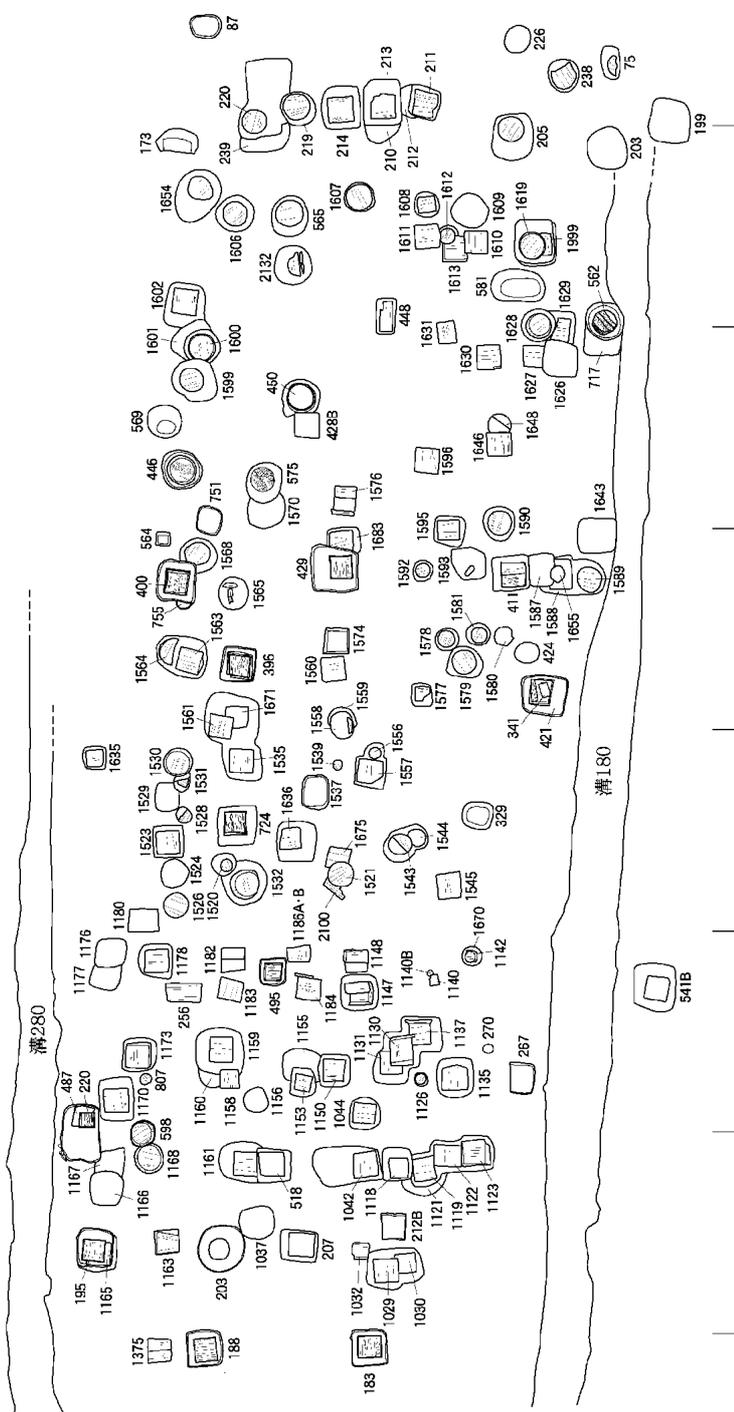


图95 遗址平面图(4期)





Y=-21,552      M      Y=-21,548      N      Y=-21,544      O      Y=-21,540      P      Y=-21,536      Q      Y=-21,532      R      Y=-21,528      S

X=-118,356



O

X=-118,360



P

X=-118,364



Q

X=-118,368



R



图97 槽地变迁图(6期)

表25 埋葬施設出土銭貨数

時期	埋葬施設	古寛永通寶	寛永文銭	新寛永通寶	鉄銭	題目銭	その他 (模鑄銭など)	不明	合計
1期	2/12基	9	-	-	-	-	-	-	9
2期	8/44基	63	5	8	-	-	6	-	82
3期	17/140基	56	8	13	-	-	6	1	84
4期	25/174基	37	11	38	1	2	-	-	89
5期	25/206基	37	13	33	1	1	21	8	114
6期	1/26基	-	1	-	-	-	-	-	1
	78/602基	202	38	92	2	3	33	9	379

りやや多い。3期になると土器棺が出現してくる。木棺はまだ円形木棺の方がやや多めである。4期になると円形木棺と方形木棺の数が逆転して方形木棺がほぼ倍になる。5期になると圧倒的に方形木棺が占めるようになる。この時期には木棺と土器棺を組み合わせるものが出現する。6期は木棺より土器棺が多い。大きくは円形木棺から方形木棺へと変化してゆくが、円形木棺が無くなることはなく継続して使われている。

木棺に使用された樹種はスギ・ヒノキ・コウヤマキ・モミ・二葉マツ・ツガなどで、スギが一番多く使われている。側板・底板・蓋板などの部材の樹種が2種類以上であるものは、切片観察を行った木棺の約1/4にあたる。円形木棺に多い。木棺の部材は釘・箍で結合されるが、円形木棺はタケの木釘・箍、方形木棺は鉄釘・ヒノキ属の木釘を用いており、木棺の種類による使い分けが明瞭である。

木棺の大きさは1期では直径50cmの円形木棺が主体となる。最小は直径34cmである。方形木棺は一辺45cmのものである。2期の円形木棺は直径50cmが多数を占める。最小は直径35cm、最大は直径55cmである。方形木棺は一辺50cmのものが一辺45cmのものに比べてやや多い。3期の円形木棺は直径50cmが大多数を占める。最小は直径24cm、最大は直径52cmである。方形木棺は一辺45cmのものが多数を占め、次に一辺50cmのものが続く。最小は一辺35cm、最大は一辺55cmである。4期の円形木棺は直径50cmが多数を占める。最小は直径20cm、最大は直径55cmである。方形木棺は一辺45cmのものが多数を占め一辺50cm、一辺48cmと続く。最小は一辺20cmのものである。5期の円形木棺は最小は直径30cm、最大は直径55cmであとは直径35cm・50cm・52cmと一定しない。方形木棺は一辺45cmのものが多数を占め、一辺50cmのものが続く。最小は一辺30cm、最大は一辺70cmである。6期は火葬骨が主体となるので土器棺が大多数を占める。木棺は埋葬313の長方形を呈するものと、埋葬445の円形木棺の2基である。埋葬313は幅35cm、残存長85cmで被葬者は4歳児であることから唯一の寝棺であると思われる。埋葬445は直径36cmである。

木棺の規模は時期差にはあまり関係なく円形木棺では直径50cmのものが主体となる。次に40～50cmの直径のものが続き、直径40cm以下の小さいものが直径50cm以上のものより多くなる。方形木棺では一辺45cmのものが主体となりつぎに一辺50cmのものが続く。あとは5cm刻み程度で大小ある。最小は一辺20cm(埋葬281・1140)、最大は一辺70cm(埋葬413)のものである。

円形木棺・方形木棺ともに規模の小さいものは、ほぼ乳幼児（6歳以下）の棺である。ただし成人と同じ規模の棺に納められた乳幼児の埋葬施設（埋葬246・347・1030）もある。成人の墓に混入か合葬されたと思われるものもある。

土器棺には土師質の壺（14～36・986）・備前の大甕（797）・信楽の大小甕（799～802）や壺（804～808）などがある。

土師質の壺には火消し壺と、いわゆる胞衣壺と呼ばれる小型の壺の2種類がある。火消し壺として使用された痕跡が認められるものはなかったことから、転用されたものではなく埋葬に使用することを目的として最初から求められたものであると考えられる。また土師質の壺からはほとんど人骨が出土していないが、埋葬340・416からは火葬骨が検出されている。このことから土師質の壺は火葬骨用の骨壺として使用された可能性が考えられる。小型壺も同様に埋葬392から火葬骨が検出されている。

陶磁器類の甕棺・壺棺の被葬者は子供から老人までおり、副葬品にも特別なものは見当たらない。信楽の大甕を用いた埋葬342（被葬者は老年男性）の副葬品には唐津大鉢・銭貨22枚・漆器椀・数珠・煙管・板状木製品などがある一方で、備前の大甕を用いた埋葬450（被葬者は老年男性）には巨大な蓋石が置かれて、内部は攪乱されていないにもかかわらず、副葬品は何も検出されないといった差がある。甕棺の使用が積極的に被葬者の階層差を表すものとは断定できない。

副葬品 副葬品は食膳具・喫煙具・装身具・遊戯具・信仰具と葬送用具などに分けられる。食膳具には陶磁器・漆器などがある。陶磁器には伊万里・唐津・信楽などがあり、器種も小椀・大皿・大鉢・猪口・合子・香炉など生前の愛用品と思われるものが多い。漆器には椀がある。

喫煙具の煙管はほとんど雁首と吸口のみが出土し、羅宇が残っているものは少ない。しかし埋葬410出土の煙管は竹製の羅宇が残り全面に漆を施している。煙草入れは銅製で中には紙に包まれた煙草が入れられていた。煙管・煙草入れは凝った作りの高価なセットと思われ被葬者の身分・階層を推測する手掛かりになると考えられる。装身具には入歯・眼鏡・櫛・櫛払・簪・小柄などがある。入歯（木63・木64）は木製で2個出土している。よく使い込まれていたようで、使用痕が明瞭に残る。眼鏡はレンズが2枚出土しているが、縁や絃は出土していない。遊戯具には土人形・土鈴・泥面子・独楽・羽子板・木刀・ミニチュアマまごとセットなどがある。子供の墓には特に土人形が多く副葬されている。信仰具には数珠・位牌・厨子・仏像・ガラス嵌め木製品・巻物の軸・香炉（火入）などがある。葬送用具には銭貨（六道銭）・供養札・天蓋・顔を描いた板状木製品などがある。銭貨（六道銭）は全埋葬施設602基中78基から出土している。

種類は古寛永通寶・寛永文銭・新寛永通寶が大部分を占めるが、模鑄銭の可能性のある渡来銭のほか、4・5期では寛永鉄銭が1枚ずつ、題目銭が3枚出土している。1つの埋葬施設から出土する六道銭は6枚揃っている場合は半数以下で、むしろ6枚に満たないことが多い。2期の埋葬1584の掘形からは古寛永通寶が37枚まとまって出土しているが、これは墓地を整理した時に出てきた銭貨を集めて納めた可能性がある。六道銭が出土した埋葬施設の数全体からすると少ないようであるが、1期から6期のいずれの時期でも認めていることから六道銭を埋納する習俗は

普通に行われていたものと考えられる。

天蓋は本来埋葬施設の上に差し掛けて使用されたと考えられるが、ほとんどが4枚の骨を重ねた状態で出土しており、何らかの埋納儀礼が行われたと推測できる。また、掘形からは顔を描いた板状木製品など、祭祀にかかわるとされる遺物も出土している。

**墓標** 墓標には木製塔婆・河原石・墓石などがある。木製塔婆には、板状のものと方柱状のものがあるが点数は少ない。大部分は腐朽したものであると考えられる。埋葬施設内部および周辺の整地土からは河原石を多数検出した。これらの中には埋葬施設の目印にされたものもあると考えられる。埋葬施設の掘形は浅く狭いことから棺を埋納できる最小限の規模であったものと考えられる。その上に土盛り（土饅頭）が構築されたかは、削平・盛土の繰り返しにより断面観察では確認できなかった。しかし1区埋葬421に垂直に落ち込んでいる墓石（石5）の状況から盛土が木棺内に十分充填できるほど無かったことがわかる。したがって埋葬施設の上の盛土（土饅頭）はあまり高くなかったと推測される。

墓石には題目・戒名・年月日が彫られ、1つの墓石に複数名の戒名があるものがある。（石5・石8・石9・石16・石18・石19・石21・石22・石31）これは後年に血縁関係のある被葬者をまとめて、墓石を建立したものであると思われる。このことから家族墓の存在を考えることができる。

**埋葬の重複** 埋葬施設が重なり合う場合、容赦なく壊され、上に重ねられているものと、明らかに破壊を回避したと思われるものがある。後者の場合は何らかの理由で埋葬施設を破壊せず少しずらして新しい埋葬施設を設けた結果、掘形は壊されているが埋葬施設は接近して並ぶという状態に至ったと考えられる。時期差を伴う埋葬施設が並列する原因である。

古い埋葬施設の掘形をそのまま使用したものがある。古い埋葬施設の上部を一旦壊したのち、底板直上に新しい棺を埋納する。また古い埋葬施設の人骨はそのまま掘形に移されるものが多いが、新たに浅めの土壌へきれいに並べて改葬するもの（1区埋葬468・1区埋葬560・2区埋葬164）もある。埋葬施設の中には内部に刳殻が入れられたり、黒色の付着物が底に溜まっているものがある。目的はよくわからないが、遺体に対する何らかの作用を期待してのことと思われる。

**棺の埋納** 方形木棺・円形木棺の底板外面・側板外面には縄をかけた痕跡を認めたものが多い。棺を緊縛して運搬したり、掘形内に納めるために使用されたと考えられる。円形木棺の中には底板外面に支木を据付けるものがある。なお、土器棺には銅線を巻き付けるものがあるが縄痕は確認できていない。

また、方形木棺・円形木棺の中には少数ながら側板外面に「前」の字を墨書してあるものがある。これは棺の前面（被葬者の正面）を示したものであると考えられている。住居内での祭祀、墓地までの葬列、掘形内への埋納の際に被葬者の正面が意識されたことがわかる。木棺外面に描かれた題目などの墨書も同様の目印になっていたと推測できる。これらの葬送儀礼や江戸時代の習俗といったものについて、今後詳しく検討する必要がある。

以上不明な点や未整理の部分など多数あるが、今回は調査成果のみを報告するにとどめた。

今回の調査では一つの寺院の墓地の全域に渡り、創建から移転まで約300年間の変遷を追うこと

ができた。寺請制度によって檀家を増やし墓域を拡大していった様子が墓地の変遷にもよく現れている。また来年度も人骨については分析が続けられることになっており、より詳しい江戸時代の人々の様子がわかるであろう。

最後に調査の対象となり多くの貴重な資料の提供者となった埋葬された人々に、心より感謝するとともにご冥福をお祈りいたします。

#### 註

- 1) 金田章裕「郡・条里・交通」『平安京提要』角川書店、1994年。
- 2) 永井久美男編『近世出土銭』兵庫埋蔵銭調査会、1998年。

#### 参考文献

- 古泉弘『江戸を掘る』柏書房、1983年。
- 自證院遺跡調査団編『自證院遺跡』東京都新宿区教育委員会、1987年。
- 港区芝公園1丁目遺跡調査団編『芝公園一丁目増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』東京都港区教育委員会、1988年。
- 『發昌寺跡』新宿区南元町遺跡調査会、1991年。
- 新宿区修行寺跡調査団編『修行寺跡』株式会社エステートプロジェクト 新宿区修行寺跡調査団、1992年。
- 新宿区法光寺遺跡調査団編『法光寺跡』日本電信電話株式会社 新宿区法光寺遺跡調査団、1995年。
- 堺市立埋蔵文化財センター編『堺市文化財調査概要報告 第71冊』堺市教育委員会、1998年。
- 永井久美男編『近世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会、1998年。
- 鈴木隆雄『骨から見た日本人』講談社、1998年。
- 新宿区法光寺遺跡調査団編『法光寺跡』東京都水道局 新宿区法光寺遺跡調査団、1999年。
- 聖母女学院短期大学伏見学研究会編『伏見学ことはじめ』思文閣、1999年。
- 鈴木公雄『出土銭貨の研究』東京大学出版会、1999年。
- 圭室文雄『葬式と檀家』吉川弘文館、1999年。
- 中村禎里『胞衣の生命』(株)海鳴社、1999年。
- 江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究事典』柏書房、2001年。
- 鈴木公雄『銭の考古学』吉川弘文館、2002年。
- 『行元寺跡』財団法人新宿区生涯学習財団 新宿歴史博物館 埋蔵文化財課、2003年。
- 『東京都中央区八丁堀三丁目遺跡』八丁堀三丁目遺跡(第2次)調査会、2003年。
- 聖母女学院短期大学伏見学研究会編『伏見の歴史と文化』清文堂、2003年。
- 新谷尚紀『「お葬式」の日本史』青春出版社、2003年。
- 江戸遺跡研究会編『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館、2004年。
- 聖母女学院短期大学伏見学研究会編『伏見の自然と環境』清文堂、2004年。
- 堺市立埋蔵文化財センター編『堺市文化財調査概要報告 第106冊』堺市教育委員会、2005年。
- 谷畑美帆『江戸八百八町に骨が舞う』吉川弘文館、2006年。

## 付論 1 京都市伏見区出土人骨の人類学的所見

藤澤珠織・片山一道

(京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室)

2005年度から2006年度にかけて、京都市伏見区総合庁舎整備事業に伴う発掘調査がおこなわれた。調査地は伏見城跡の城下町にあたり、その一画にある寺院の墓地から大量の方形木棺と円形木棺、及び少量の甕棺や壺棺など、計602基の墓が出土した。これらは、墓道を伴って整然と区画された墓域を形成していた。墓地の造営時期は17世紀中葉から20世紀初頭であり、層的に6段階の時期に大別されている。人骨の多くは江戸時代前期から終末に、また一部が明治時代以降に属する人々の骨である。大部分の人骨は土葬であったが、上層に一部火葬骨も含まれていた。

本報告では、出土人骨のほとんどを占める土葬人骨について、最小個体数、遺存状態、性別判定、死亡年齢推定、身長推定の概略について述べ、埋葬様式にも触れる。人骨それぞれについては付表2として一覧にまとめた。なお計測値、形態小変異、傷病痕などの分析成績、その他の詳細については次年度に報告する予定である。

出土人骨の最小個体数は、棺桶の内部から少量でも人骨片が出土していれば、これを1体分と数えた。一方、一つの棺内に人骨の同一部位が重複して認められるものや、性別や年齢段階の異なる骨が含まれるものは、複数体分として数えた。また棺桶の掘形（棺桶の外側で棺に接した位置）から発見された人骨は、発掘時の遺構番号をひとつのまとまりとみなし、これを基準に1体分と数えた<sup>1)</sup>。このようにして求めた土葬人骨の最小個体数は、棺桶等の内部から出土したものが466体分、掘形など棺桶外出土のものが164体分、合計630体分である。

人骨の遺存状況は様々であった。遺存の部位や量、破損の程度についてみると、成人の土葬人骨のうち全身骨格が良く残り、破損も比較的少ない人骨は30体程度である。このほか全体の2割にあたる人骨では、端部が破損したり破片になっていたりするものの、部位、量ともにほぼ全身の骨が残っていた。また3割の人骨では、全身の各部位の骨が破片となって残るものの、量としては1個体分に満たなかった。残る4割弱のものは、部位、量ともにごく少量だが、人骨と確認できたため1体分としたものである。骨質は、堅固で良好なものもあれば、外形は留めているが脆弱なもの、骨表面が剥離しかけ崩れかけているものまで様々であった。

性差を示す部位が遺存する成人人骨及び思春期後半の人骨について、性別を判定した。判定できたものは432個体で、男性254体、女性178体であった。

次に死亡年齢を大まかに成人と未成人とにわけ、成人人骨は壮年（20才以上40才未満）・熟年（40才以上60才未満）・老年（60才以上）の3段階に分類した。これらのいずれかに相当するが細分類できないものは、一括して「成人」とした。未成人人骨は、胎児・乳児（～1才）、幼児（2才～6才）、小児（7才～12才）、思春期（13才～おおむね20才前後）に分類し、細分類できないものを「未成人」とした。土葬人骨で死亡時の年齢段階を判定できた個体は538個体あり、このうち成人人骨は、壮年98体、熟年109体、老年83体、「成人」204体の計494体であった。また未成

人人骨は、胎児・乳児18体、幼児19体、小児9体、思春期11体、「未成人」4体の計61体であった。

身長推定は、四肢いずれかの長骨が完形、又はほぼ完形で遺存し、計測が可能な個体についておこなった。このような個体は男性35体、女性19体の計54体あった。これらについて、マルチンの方法に準拠し最大長や生理学長などを計測した。大腿骨が遺存していない個体はその他の下肢骨を優先し、下肢骨が計測できない場合は上肢骨を用い、各計測値を藤井の式（藤井，1960）に適用した。なお付表には、身長推定にどの骨を用いたかを記した。男性の推定身長平均値は158.2cm（s.d. = 2.62）、女性は144.4cm（s.d. = 2.60）となった。

一つの棺内に2体分以上の人骨が重複して埋葬され見つかったものが70基余りあった。最多で4体分の人骨が一つの遺構から出土している。この中には、人骨の遺存状況が良好で、明らかに同一の棺に複数体埋葬されたと考えられる例もある。ただし攪乱や落ち込みの結果によるものもあると思われ、埋葬方法を反映したとばかりは言えない。大半の棺では単体埋葬であったと考えられる。またこれらのうち成人人骨について写真等で埋葬姿勢を確認したところ、椎骨、腸骨、下肢骨などの位置関係から、多くは座葬で埋葬されたようである。特殊な例として、唯一の土壌墓から発見された人骨は、上肢を後ろ手にまわした横臥屈葬であった。

以上の結果のうち性別、年齢構成の内訳について次の表に示す。

表26 出土人骨の死亡年齢・性別構成

死亡年齢/性別	男性	女性	性別不明	計
胎・乳児	—	—	18	18
幼児	—	—	19	19
小児	—	—	9	9
思春期	4	7	—	11
「未成人」	—	—	4	4
壮年	47	49	2	98
熟年	70	38	1	109
老年	52	27	4	83
「成人」	80	56	68	204
死亡年齢不明	1	1	73	75
計	254	178	198	630

## 謝辞

本人骨資料を検査するにあたり、(財)京都市埋蔵文化財研究所の皆様並びに発掘調査員の皆様には多大なご支援をいただいた。深く感謝の意を表します。

## 註

- 1) 掘形から発見された人骨は、数回にわたる墓の造成の際に攪乱が生じ、他の墓から骨が紛れ込むなどした結果と考えられる。よって、平面、層位ともに墓と掘形とが隣接している中から人骨が出土した場合、同一個体に帰属するか否かを検討しなくてはならない。しかし本遺跡では、人骨の分析と各遺構の平面・層位的な位置関係の分析とを同時平行で進めざるを得なかったため、出土人骨数にこれらの検討は加えられていない。

## 参考文献

- 藤井明, 1960. 四肢長骨の長さと言身長との関係に就て. 順天堂大学体育学部紀要3:49-61
- 埴原和郎, 1952. 日本人男性恥骨の年齢的变化について. 人類学雑誌62:245-260
- C.O. Lovejoy, 1985. Dental wear in the Libben : population: its functional pattern and role in the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology 68:47-56.
- 日本小児歯科学会, 1988. 日本人小児における乳歯・永久歯の萌出時期に関する調査研究. 小児歯科学雑誌26:1-18
- K.Sakaue, 2004. Sexual determination of long bones in recent Japanese. Anthropological Science 112:75-81
- L. Scheuer and S. Black, 2000 . Developmental Juvenile Osteology, London: Academic Press.
- 瀬田季茂. 吉野峰生, 1990. 白骨死体の鑑定. 令文社
- T.W.Todd, 1920. Age changes in the pubic bone: I. The white male pubis. American Journal of Physical Anthropology 3:467-470.
- Ubekaker, 1978. Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis and Interpretation. Smithsonian Institution Press.
- T.D. White, P.A. Folkens, 2000. Human Osteology (2nd ed.), London: Academic Press.

## 付論 2 出土漆器の材質・技法に関する調査

北野信彦

### 1 はじめに

本報告書が取り上げる伏見城跡の調査区からは、1：伏見城築城以前の16世紀後半の中世期、2：伏見桃山城が機能した16世紀末から17世紀第1四半期頃までの城下町期（桃山時代）、3：元和9年（1623）の伏見城の廃城以降から幕末期までの伏見町が伏見奉行所管轄となる町屋期（江戸時代）、の三つの年代や性格が大別される遺構と遺物が大量に検出された。この中には、多数の漆器資料も含まれていた。今回、これら出土漆器の材質・技法に関する文化財科学的調査を行ったので、その結果を報告する。

### 2 出土漆器の調査

#### 2.1 調査対象資料

分析調査を行った出土漆器は、ろくろ挽き物である椀や板物である樽の部材などの飲食器資料や墓地副葬品である小形厨子など、合計294点である。この内訳は、(1) 中世期資料2点、(2) 城下町期（桃山時代）資料220点、(3) 寺院墓地副葬品37点とその他のゴミ廃棄土壌出土品31点の町屋期（江戸時代）資料68点、その他4点である。いずれも基本的には実用性が高い生活什器類であろうが、伏見城下に所在した武家屋敷移転に伴う屋敷仕舞の廃棄、その後の伏見町屋や寺院の通常ゴミ廃棄、さらには墓地副葬品など、性格はそれぞれ大きく異なる資料群である。

#### 2.2 調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、ろくろ挽き作業により椀や皿型の挽き物の形態にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、漆絵などの加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程から成っている。本報では、まず、各資料の器形や残存状態、漆塗り表面の状態などを肉眼観察した後、実体顕微鏡による細部の観察を行った。次に、自然科学的手法を用いた、(1) 木胎の樹種同定、(2) 木取り方法、(3) 漆塗り構造の分類、(4) 赤色系漆や蒔絵粉材料の定性分析、などの材質・技法の組成に関する調査を行った。以下、調査方法を記す。

##### (1) 木胎の樹種同定

樹種の同定は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、本体をできるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から小口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は、サフラニン・キシレンを用いて常法に従い染色と脱水を行い、検鏡プレパラートに仕上げた。

##### (2) 木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の検討は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行った。

### (3) 漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に1mm×3mm程度の漆膜剥落片を採取して合成樹脂(エポキシ系樹脂/アラルダイトGY1251J.P ハードナーHY.837)に包埋した後、断面を研磨した。この断面試料の漆塗膜面の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態などについて、金属顕微鏡による落射観察を行い、一部の代表的な漆器については生物顕微鏡を用いた薄層の透過観察を併用した。

### (4) 赤色系漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

赤色系漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析は、採取可能な部分の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所EMAX-2000エネルギー分散型X線分析装置(EPMA・電子線マイクロアナライザー)を連動させて使用した。分析設定時間は600秒。さらに、クロスチェックを行うために(株)堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置に設置して、特性X線を検出した。設定条件として、分析積算時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μAおよび20μA、検出強度は40,000cps、定量補正法はスタンダードレスである。

## 3 調査結果と考察

以下、材質・技法別に分析調査の結果を述べる。まず、本漆器資料群の樹種同定を行った結果、いずれも挽き物類では、一点のみヒノキ材が使用されていた以外は、いずれも広葉樹材が選択されていた。この内訳は、やや一般的な良材であるクルミ(11点)、コナラ節(4点)、クリ(30点)、ブナ(57点)、カバノキ科(7点)、ホオノキ(10点)、カツラ(4点)、カエデ亜属(1点)、トチノキ(49点)などと、最良材であるケヤキ(31点)、シオジ(28点)である。そしてこれらの木取り方法は、いずれも横木地であり、板目取りと柁目取りの双方が確認された。挽き物類である近世出土漆器の場合、竪木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、竪木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である(図98)。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したために、経験的に選択された結果であろう。一方、板物類には、スギ(9点)、ヒノキ(18点)が、塗櫛にはイスノキ(3点)が、その他ではタケ(1点)が見出された。

通常、これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗りなどを考慮に入れて用材選択の傾向をみると、堅牢で寸法安定性が高い最良材であるケヤキ・シオジ・ヒノキ材等と、かたや若干寸法安定性に欠くが加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いブナ・トチノキ・クリ・スギ・マツ材などの2つのグループに分かれる。本資料群の場合、この2つのグループの比率は、前者が全体の16.4%、後者が83.6%であり、後者の出現比率が高かった。そして、江戸時代中期以降の挽き物類である椀木地の用材にはトチノキ・ブナ・ケヤキ材が中心となるが、本遺跡の(1)および(2)期に相当する中世後期から近世初頭期段階には、全国的に樹種の多様性が見出され、とりわけクリ・コナラ節・シオジ材の使用が特徴的であった。本漆器資料群の場合でも、当該年代の特徴であるシオジ、クリ、コナラ節材が全体の24.3%であり、

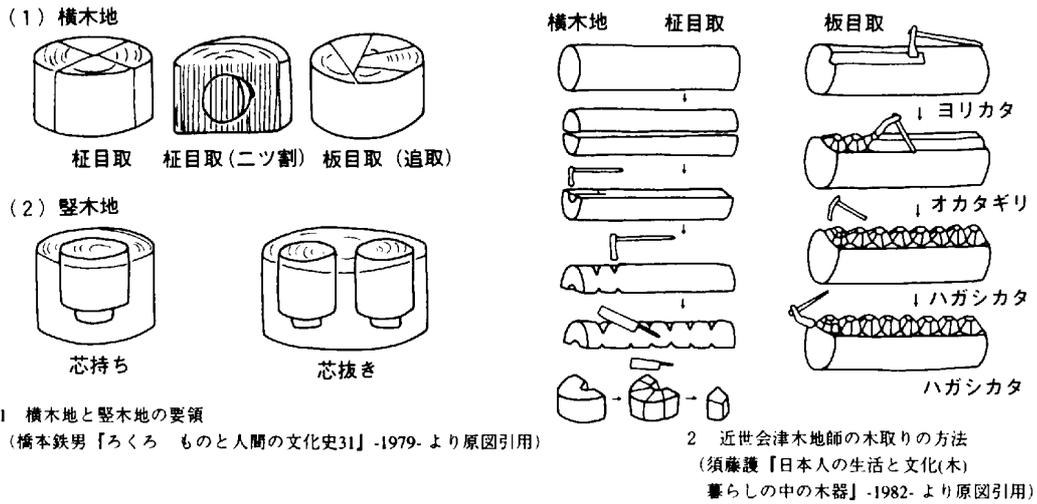


図98 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

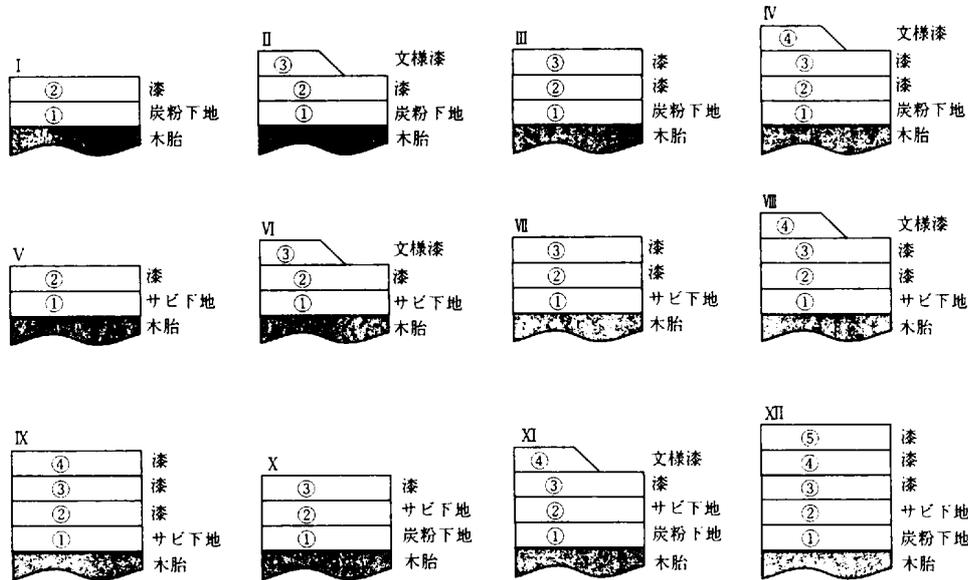


図99 漆塗り構造の分類

表27 ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ ギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靱性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散 孔 材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザク ラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大きである。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-などを参考にして作成

ケヤキ・トチノキ・ブナ材は全体の54.1%であった。これらクリ・シオジ・コナラ節などの樹種はその後の17世紀後半以降、とりわけ18～19世紀代の資料ではほとんど確認されなくなり、この時期の年代的特徴の一つが反映されていた。

次に、個々の資料の漆塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層をみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al（アルミニウム）、Si（シリカ）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた。さらにこれらを顕微鏡観察することにより、前者を、炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）と理解した。

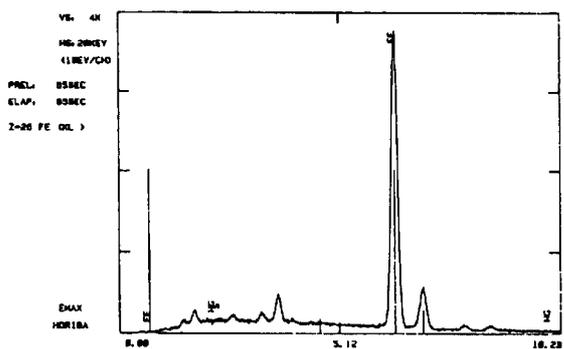
また近世初頭期から江戸時代前期にかけては、環孔材であるシオジやケヤキ材などの最良材の木胎の上にまず炭粉下地を塗り込んで木固めした上で明褐色系の粘土下地を施すサビ下地の漆工技術が、これまでの筆者による出土漆器の調査で明らかになっている。本資料でも、桃山時代の資料群に当該時期の下地技法が多数見出された。

このような挽き物類である椀型資料の漆塗り構造は、いずれも炭粉下地の上に薄く黒漆層や透明感のある赤褐色系漆、朱漆・ベンガラ漆が1層ないしは2層塗布された一般的な生活什器タイプ、上記のようなサビ下地を施した上にやや厚みを持った上塗りの朱漆や黒色系漆を塗装する生活什器ではあるがやや優品タイプに位置づけられる漆器資料の二種類に大別された。そして加飾の漆絵や家紋などの蒔絵は地の上塗り漆の上に描かれていた。ただし、本資料の場合、桃山文化期の特徴である高台寺蒔絵やその後の江戸文化を特徴づける高蒔絵などを金粉を用いて施す高度な蒔絵漆器は、蒔絵塗櫛が一点江戸時代のゴミ廃棄土壌から出土した以外見出されておらず、基本的にはいずれも生活に密着した実用性が高い漆器資料群であると理解される。

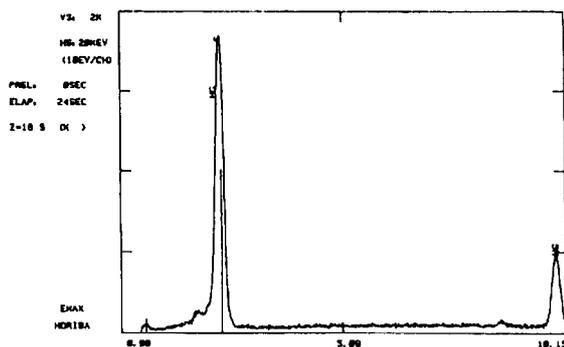
次に、本漆器資料における赤色系漆の使用顔料を電子線マイクロアナライザーおよび蛍光X線分析した結果、水銀（Hg）成分が強く検出され、顕微鏡観察では少なくとも朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS）の赤色顔料の粒が確認される資料群、水銀（Hg）成分とともに若干の鉄（Fe）成分のピークが検出され、さらに顕微鏡観察した結果、いずれも朱顔料の粒が確認される資料群、さらには鉄（Fe）成分が強く検出される資料群、の三種類の赤色系漆に分類された。本資料の場合、（1）および（2）期の資料群では、いずれの赤色系漆からも水銀（HgS）が強く検出されたため、基本的には朱顔料（HgS）を使用した朱漆である。しかし、一部の資料では、鉄（Fe）のピークも同時に検出されるため、これを埋没土中の鉄成分の沈着汚染である可能性も残されるが、色味調整で朱にベンガラ（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）顔料を混ぜて使用した赤色漆も一部存在するものと理解した。また、鉄（Fe）のみが検出される資料群は、（3）期である江戸時代の墓地副葬品、ゴミ廃棄土壌出土品いずれからも一般的に見出された。これらはいずれもベンガラ漆であると理解した。

ベンガラ・朱ともに赤色顔料としての歴史は古い。しかし江戸時代の漆器の色漆顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降は人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となる。本資料の江戸時代の資料

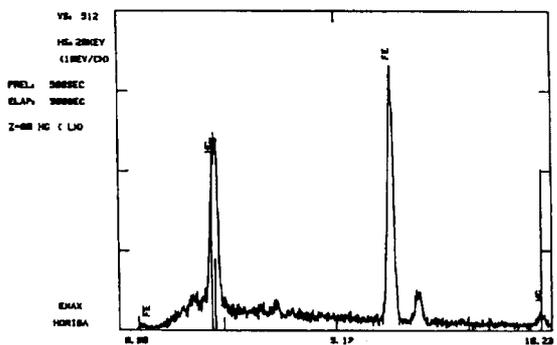
表28 漆器成分分析表



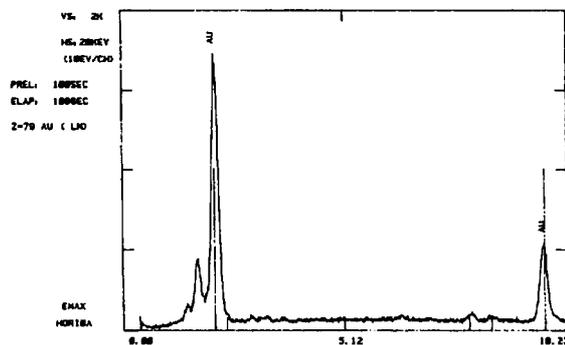
赤色系漆 ベンガラ (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)



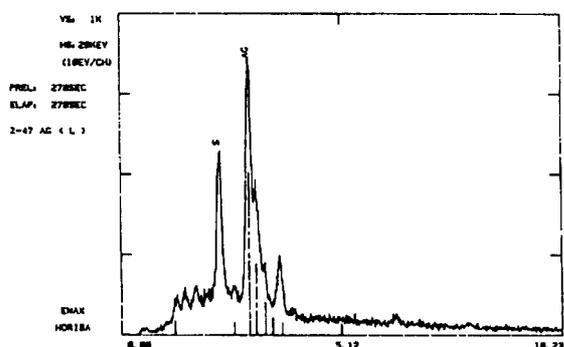
赤色系漆 朱 (HgS)



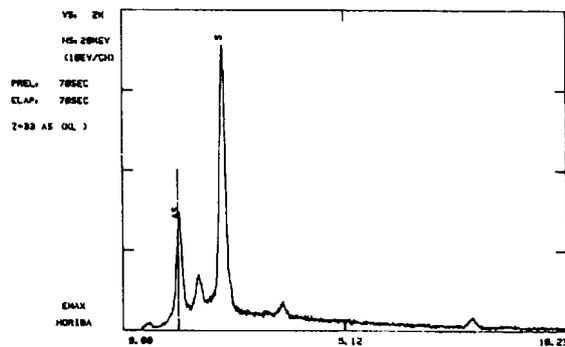
赤色系漆 朱+ベンガラ (HgS+Fe)



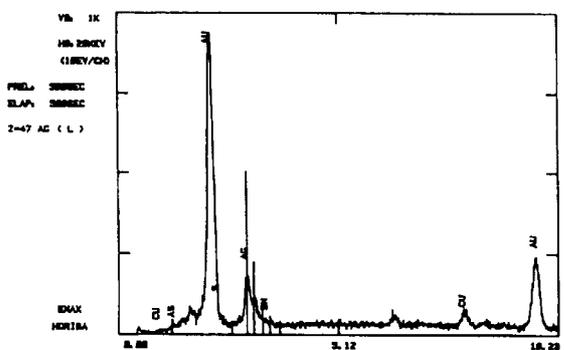
蒔絵加飾 (金彩) 金 (Au)



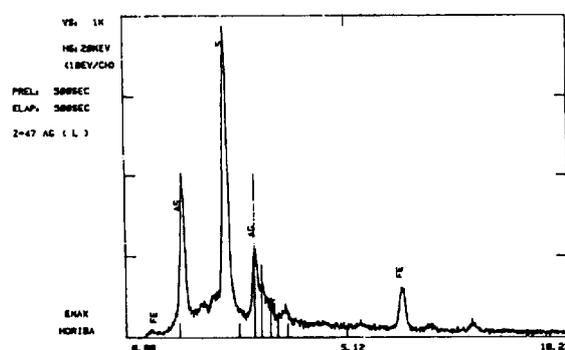
蒔絵加飾 (銀彩) 銀 (Ag)



蒔絵加飾 (金彩) 石黄 (As<sub>2</sub>S<sub>3</sub>)

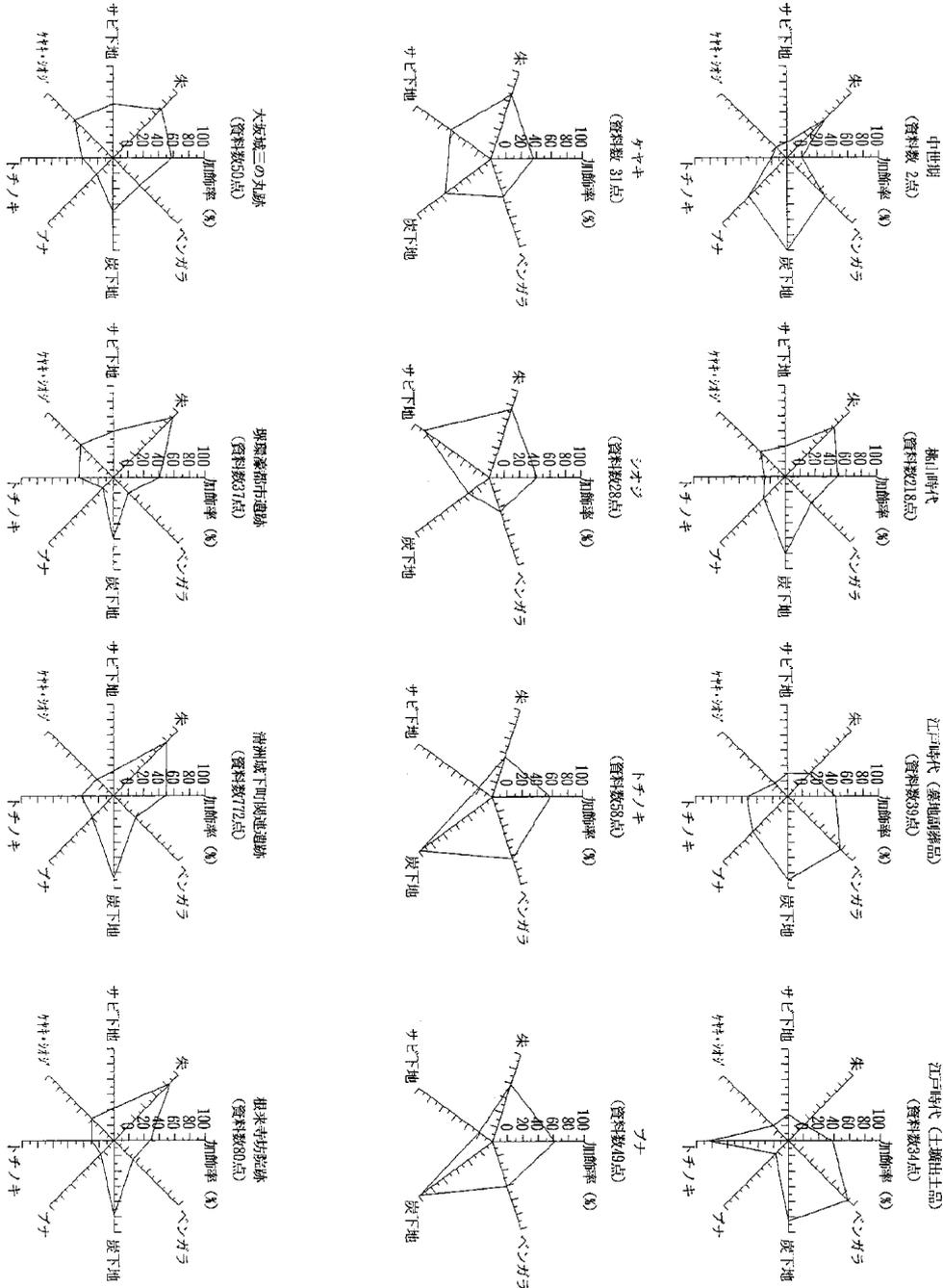


蒔絵加飾 (金彩) 金+銀 (Au+Ag)



蒔絵加飾 (金彩) 銀+石黄 (Ag+As+S)

表29 時期・樹種別出土漆器の組成、桃山時代他遺跡出土漆器の組成



群の場合も、炭粉下地に地塗りの上塗り漆を一層塗布するような簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラ漆を、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱漆を、地内面にはベンガラ漆を塗布するが地外面の家紋や漆絵の加飾部分のみに朱漆を使用するなど、朱漆とベンガラ漆の使い分けを意識した事例も見出された。報告者による朱漆とベンガラ漆の年代別使用比率の割合の推移の調査結果では、江戸時代中期以降では朱漆の使用比率が著しく低下し、ベンガラ漆が一般化する傾向が顕著になる。この点も当時の漆工技術の一端が裏づけられたものと考えられる。

次に、(3)期の漆器椀などの地外面に施された家紋や絵柄などの蒔絵加飾部分の色調は、鮮やかな金色(金粉もしくは金箔)・銀色を呈するものから、鈍い金(山吹)色・やや黒ずんだ銀色・青灰褐色・茶褐色・黄褐色などそれぞれ異なっていた。これら蒔絵加飾が施されていた部分の定性分析を行った結果、Au(金)、Ag(銀)、Sn(スズ)の3種類がそれぞれ確認された。

また、色漆であるために厳密には蒔絵粉材料とは言い難いが金蒔絵を意識した代用品であると認識した黄色系もしくは金泥状の定性分析を行った結果、いずれも石黄(三硫化二砒素:  $As_2S_3$ )が認められた。近世出土漆器における石黄の使用は、江戸時代前期頃の漆絵や蒔絵加飾に黄色系漆を施す漆器資料群と、その後約一世紀の石黄使用の途絶期を挟み、18世紀以降の江戸時代後期以降を中心として漆器の地塗りに緑色系漆を塗布する漆器資料群の二種類に大別される。このうちの前者は、江戸時代前期頃を中心としてシャム(現在のタイ)・トンキン(現在のベトナム)・林邑(現在のカンボジア)などの東南アジアから大量に海外貿易品目の一つとして我国に輸入されたものであり、帰属年代が江戸時代前期中葉~後葉頃(1630?~1700年前後)に限定される出土漆器に特徴的な加飾技法である。本資料でも、江戸時代前期~中期頃の資料群にこの加飾漆器椀が優勢であった。本資料群の場合、金(Au)粉自体を使用した蒔絵漆器は、蒔絵櫛一点のみであり、その他は例は代用金・銀粉である錫粉や石黄粉、もしくは銀粉が使用されていた。特に金(Au)粉以外の蒔絵材料は年代別に石黄~銀~錫へと使用状況が大きく移行しており、この点はこれまで筆者の調査結果を基本的には裏付ける結果であった。

## 4 まとめ

以上、伏見城跡出土漆器の材質・技法の分析調査を行った結果、次のような結論を得た

### 4.1 中世期資料

(1)この時期の資料は2点と少ないため、傾向を言及するには至らなかった。ただ、この中に内外面に赤色系漆を地塗りし、高台内のみに黒色系漆を塗り分ける朱漆器椀が1点含まれていた。これは中世以来の代表的な漆器の一つとして、主に寺社什器を中心とした実用本位の「根来手」「根来椀」、もしくは「根来塗」と呼称された朱漆器類であるが、本資料の場合、炭粉下地の上に朱+ベンガラ漆を一層塗装する簡便な量産タイプの資料であった。

### 4.2 城下町期(桃山時代)資料

(1)この時期の資料には、洛中洛外図屏風などにも描かれるように、内・外黒漆もしくは内朱漆・外黒漆を地塗りし、それらに朱漆で漆絵を筆描きする。木胎部は肉厚でやや大振りの器形を

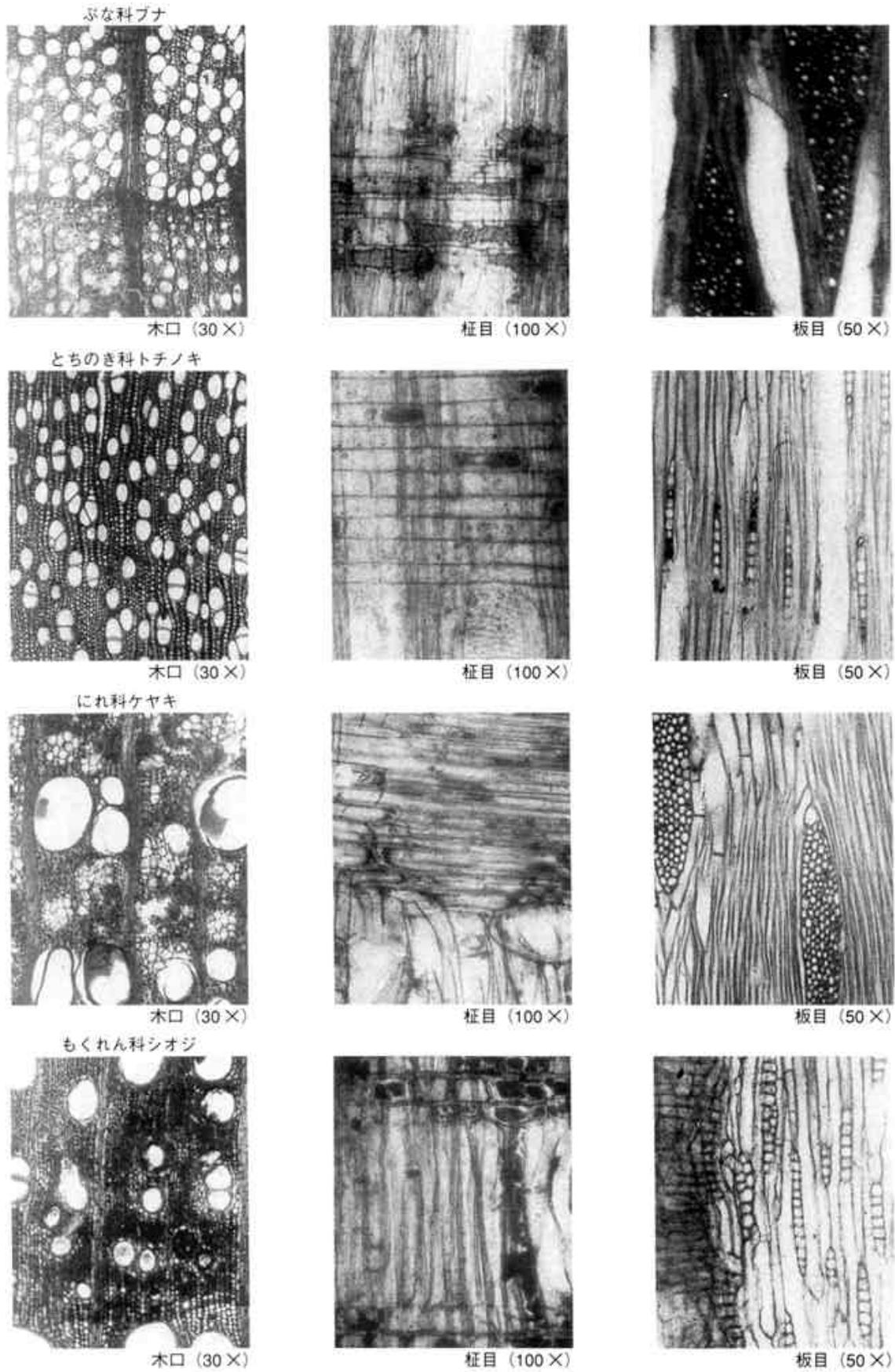


図100 漆器木材顕微鏡写真 (×90%)

有する高台高が比較的高い椀タイプの高台高の資料があり、本資料群にもこれらが多く見出された。高台内に所有などを意味する刻印が刻まれる場合も多い。これと同様の資料は、年代観が明確な尾張清洲城下町関連遺跡（1610年下限）や姫路城資料（1603年下限）などからも検出されている。

（2）これらの材質・技法も、（a）クリやコナラ節材を使用、優良材であるケヤキ材でも炭粉下地を施した一般的な塗り構造を有する資料が含まれる点、（b）炭粉下地に極めて薄い上塗り漆を一層塗布する資料が多い点、（c）赤色系漆には、江戸時代前期以降極めて一般的なベンガラ漆ではなく、一部ベンガラを混ぜるものの朱漆が多用される点、（d）加飾の漆絵である米俵などの吉祥文様や紅葉などの植物文様のモチーフが豪放な肉筆であるとともに、引っ掻き技法が採用される資料も含まれている点、など、該当時代の漆器資料の特徴をよく表現している。

（3）高台部はやや低い中振り椀であるが、シオジ材に炭粉下地～明褐色系のサビ下地を施し、内外面に朱漆を地塗りした外面上に黒色漆で引っ掻き技法も交えた絵柄を描く朱漆器が数例含まれていた。これらは、本遺跡とほぼ同時期の大阪城三の丸跡、堺環濠都市遺跡、姫路城資料など畿内系の漆器と同じ資料群である。

（4）中世期資料でも述べた「根来塗」系の朱漆器が幾例も見出されたが、これらの材質・技法には、中世期資料同様の簡便な塗り技法の資料1点とともに、典型的な木胎の上に堅牢性を重視した布着せ補強を伴うサビ下地が施された資料も見出された。これらには、サビ下地の上に中塗りの黒漆を塗布し、さらに上塗りの朱漆が塗り重ねられていた。これは、漆工史の分野では中世漆器を代表すると位置づけられている「根来系朱漆器」では、正統的もしくは典型的とも評せられる技法であった。このことは、朱漆器には色々な品質ランクの資料が並存して、時と場所、所有者によって使い分けられていた可能性も指摘される。

#### 4.3 伏見町屋期（江戸時代）資料

（1）これらには、寺院跡の墓地副葬品と通常のゴミ処理と考えられる土壌出土品がある。いずれも主要樹種であるブナ・トチノキ・ケヤキ材が用いられていたが、墓地副葬品ではブナ（12点）トチノキ（9点）、ケヤキ（1点）であるのに比較して、土壌出土品は、トチノキ（22点）、ブナ（1点）、ケヤキ（2点）であり両者の傾向が大きく異なっていた。

（2）その一方で、ベンガラ漆の多様性、家紋や絵柄の加飾部分の蒔絵粉材料には、金粉自体を使用する金蒔絵は少なく、基本的には石黄粉～銀粉～スズ粉といった年代的変遷が認められる一般的な生活什器の実用漆器の範疇に含まれる資料が多かった。これは副葬品、土壌出土品ほぼ同様の傾向である。

（3）それぞれ一点ずつではあるが、前記した「根来塗」系の朱漆器が含まれていたが、これらはいずれも典型的な塗り技法であった。このことは、これらが検出した墓地被葬者の性格を考える上で何らかの参考ともなる。

#### 4.4 全体的傾向

以上、材質・技法といった生産技術面から検討を加えた。本資料は、椀型などの挽き物類であ

る飲食器類や曲物底板、膳部破片、櫛などの実用性が高い資料群である。項目別に各出土漆器の材質・技法といった生産技術の在り方をみた結果、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別グループに分類された。そして、基本的には実用に即した一般的な生活什器を中心としていることがわかった。一例ではあるが、蒔絵漆器でも、桃山時代を代表する高台寺蒔絵などや江戸時代の高蒔絵漆器はほとんど見出されず、基本的には絵柄を筆書きする色絵加飾、もしくは家紋や絵柄を代用蒔絵粉材料などを用いて施す日常什器類が中心であった。

今後の課題は、やはり個々の漆器資料の器形分類と材質・技法の組成との照合を行うこと。その上で陶磁器を始めとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことである。このことが、本出土漆器の性格を的確に理解する上で必要なことであろう。

#### 引用文献

- 文化庁文化財保護部（1974）『木地師の習俗 民俗資料選集2』国土地理協会  
橋本鉄男（1979）『ろくろ ものと人の文化史31』法政大学出版局  
須藤護（1982）『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器6』日本観光文化研究所編、ぎょうせい  
北野信彦（2005）『近世出土漆器の研究』吉川弘文館  
北野信彦（2005）『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣  
北野信彦（2005）『漆器の考古学 -出土漆器からみた近世という社会-』あるむ出版

# 付 表

付表1 埋葬施設一覧表

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
181	13.7m	5	1区1面西 PL・QL	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	40×40
182	13.3m	5	1区1面西 QL・QM	2.5Y6/3にぶい黄色砂	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	120×100
183	13.4m	4	1区1面西 PL	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
184	13.4m	5	1区1面西 PL	2.5Y4/3オリーブ褐色粘質 土	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫混 5Y4/1灰色シルト N2/1の炭化物を含む	土葬	方形	70×60
185	13.5m	5	1区1面西 PL	2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 炭・礫を僅かに含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト N2/1の炭化物を含む	土葬	方形	75×60
186	13.5m	5	1区1面西 PL	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 炭を僅かに含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×65
187	13.3m	5	1区1面西 PL	2.5Y3/1黒褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色砂泥 極粗砂 を少量含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト 中砂～粗 砂を少量含む	土葬	方形	70×60
188	13.3m	4	1区1面西 PL	2.5Y3/2黒褐色砂泥 2.5Y6/4にぶい黄色粘土混 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
190	13.4m	5	1区1面西 OL・OM	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
191	13.4m	5	1区1面西 OL	2.5Y3/2黒褐色砂泥 礫を含 み固く締まる 2.5Y3/3暗オリーブ 褐色粘質土	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	90×75
193	13.5m	5	1区1面西 OM	10YR2/2黒褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/1褐灰色シルト	土葬	方形	60×70
194	13.6m	5	1区1面西 OM	10YR4/2灰黄褐色砂泥 固く締まる	10YR3/1黒褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥粘質	土葬	方形	65×75
195	13.5m	4	1区1面西 OM	10YR4/1褐灰色泥砂 礫混 5Y4/1灰色シルト	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 2.5Y5/3黄褐色シルト	土葬	方形	65×75
196	13.5m	5	1区1面西 OM	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト 2.5Y3/1黒褐色シルト	土葬	方形	70×70
197	13.4m	5	1区1面西 OM	2.5Y4/1黄灰色シルト	10YR3/1黒褐色シルト	土葬	円形	径60
199	13.3m	5	1区1面西 ON・PN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×65
200	13.4m	5	1区1面西 PM	2.5Y4/1黄灰色砂泥 10YR5/6黄褐色泥砂 ブロック混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×75
201	13.6m	5	1区1面西 PM	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y5/3黄褐色細砂混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	65×65
202	13.6m	5	1区1面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥 焼灰含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	不明

付表1 補註

- 1 各埋葬施設の標高は、木棺については底板上面、土器棺については底部内面、直葬については底部の標高である。
- 2 棺桶の材質の「マツ属」は「マツ属複雑維管束亜属」を略称したものである。
- 3 各埋葬施設の規模は、遺構実測図から測定した。
- 4 各埋葬施設から出土した人骨の「性別」・「年齢」の順序は対応している。
- 5 各埋葬施設から出土した人骨で（ ）内は掘形から出土した人骨である。

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			不明					
木棺	B2b		45×45	色絵猪口・小椀、施釉陶器 徳利、数珠	江戸時代後期	1	男	老年
木棺	B2b		45×45			2	女 男	思春期 成人
木棺	B2b	底・側板・蓋 ・棧スギ、 釘ヒノキ属	45×45	木製入歯	江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	B2b		45×45	染付猪口	江戸時代末期	1	女	壮年
木棺	B2b		45×45	煙管(雁首・吸口)	江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	C2b	底・側板スギ、 棧ヒノキ属	50×45	煙管(雁首・吸口)	江戸時代後期	1	男	老年
木棺	B2b		45×45		江戸時代後期	2	男 女	成人 不明
木棺	B1a	底・側板スギ	30×30	ミニチュア土瓶、 柚子でんぼ	江戸時代後期	2 (1)	不明 不明 (女)	成人 3歳 (壮年)
木棺	C2b	底・側板スギ、 釘ヒノキ属	40×40	磁器猪口、羽子板、数珠?	幕末	1	不明	6歳
木棺	C1a	底・側板スギ、 蓋ヒノキ科、 釘ヒノキ属	25×22		江戸時代後期	1	不明	0歳
木棺			50×45		江戸時代後期			
木棺	B2b		44×44		江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	A2b		45×45		江戸時代中期	1 (1)	女 (不明)	老年 (不明)
木棺	(B)		径35		江戸時代中期～ 後期	1	不明	9箇月
木棺	B2a		45×45		江戸時代中期～ 後期	1	男	成人
木棺	B2b		45×45		江戸時代中期	1 (2)	男 (男) (不明)	熟年 (老年) (成人)
木棺			45×45		江戸時代中期?			
木棺			50×50		江戸時代中期～ 後期			

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
203	13.6m	4	1区1面西 PM	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
205	13.6m	5	1区1面西 PM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	55×60
206	13.6m	5	1区1面西 PM	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径70
207	13.6m	4	1区1面西 PM	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
208	13.5m	3	1区1面西 PM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径70
209	13.5m	5	1区1面西 PM	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	65×70
210	13.4m	5	1区1面西 PM	10YR5/2灰黄褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
212 A	13.6m	5	1区1面西 QM		2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	不明
212 B	13.6m	4	1区1面西 PM・QM	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫を含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×75
213	13.5m	5	1区1面西 PM・QM	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	方形	40×45
214	13.6m	5	1区1面西 PM・QM	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	80×65
215	13.4m	5	1区1面西 QM	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫を少量含む 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×75
216	13.5m	5	1区1面西 QM	10YR3/1黒褐色砂泥		土葬	方形	60×65
217	13.5m	5	1区1面西 QM	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫を少量含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×55
218	13.5m	5	1区1面西 QM	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫を含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	50×50
219	13.7m	5	1区1面西 OM	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	方形	70×110
220	13.4m	4	1区1面西 OM・ON	5Y3/1オリーブ黒色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×110
221	13.4m	5	1区1面西 OM・ON	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
222	13.6m	5	1区1面西 ON	2.5Y4/1黄灰色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	50×40
223	13.6m	5	1区1面西 ON	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥礫混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	60×60
224	13.6m	5	1区1面西 OM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径65
226	13.7m	5	1区1面西 ON	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫少量含む 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	50×50

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			不明					
木棺			不明					
木棺	(B)		径55	染付小椀・猪口	江戸時代前期～中期	1	女	壮年
木棺	B1b	底板・側板スギ・モミ属、蓋・棧モミ属	50×50		江戸時代中期?	1 (1)	女 (不明)	壮年 (成人)
土器棺			残存径55		江戸時代中期			
木棺	不明		50×50		江戸時代中期～後期	1	男	老年
木棺	B2b		50×50		江戸時代後期	1 (1)	女 (男)	熟年 (老年)
木棺			25×25	染付猪口				
木棺	B2b	底・側板スギ	50×50		江戸時代後期	2 (1)	女 女 (不明)	思春期 成人 (成人)
木棺			25×25					
木棺			45×45	古寛永通寶2		1	男	熟年
木棺			50×50	染付猪口	江戸時代後期	1	男	熟年
不明			不明		江戸時代中期			
木棺	(B2b)		50×45		江戸時代中期～後期	1	不明	成人
木棺	(B2a)		30×30	土師器花塩皿・鉢、土人形・土鈴(母子立像)、泥面子大(玉)	江戸時代後期	1	不明	3歳
木棺			50×50		江戸時代後期	1	男	成人
木棺			30×30	泥面子(鶴2・四輪・十字・五角形に車・トを連ねたもの・酉・稲・渦巻き2)	江戸時代後期	1	不明	乳児
木棺			45×45		江戸時代後期	1	女	老年
木棺			30×30	土人形(犬2・船に乗る人物像・袋抱え人物像・袷人物座像・御内裏様・頭巾人物座像・鯛揚げ人物座像・猿背負い人物立像・芥子面2・鳥・御堂)・土鈴(金魚・唐人・男性立像2)	江戸時代後期	1	不明	不明
木棺			45×45	土人形(布袋像)	江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	熟年 (不明)
木棺			径55			1	不明	不明
木棺			30×30		江戸時代中期～後期	1	不明	成人

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
228	13.5m	5	1区1面西 ON	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×75
229	13.3m	5	1区1面西 PM	10YR5/2灰黄褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	75×75
231	13.3m	5	1区1面西 PM	2.5Y4/1黄灰色砂	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×70
232	13.7m	5	1区1面西 PM	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 固く 締まる 10YR5/2灰黄褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	55×55
234	13.7m	5	1区1面西 PM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	35×30
235	13.7m	5	1区1面西 PM	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	30×30
236	13.6m	5	1区1面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	55×60
237	13.4m	5	1区1面西 PM・PN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	50×50
238	13.6m	5	1区1面西 QM	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	方形	不明
239	13.6m	5	1区1面西 QM	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	方形	45×45
241	13.6m	5	1区1面西 QM	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	60×60
243	13.4m	5	1区1面西 QM	2.5Y4/3オリーブ褐 色砂泥 礫含む 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×65
246	13.6m	5	1区1面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 炭を少量含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	65×70
248	13.6m	5	1区1面西 PN	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	45×50
249	13.5m	5	1区1面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 10YR3/1黒褐色シルト	土葬	方形	不明
250	13.8m	5	1区1面西 PN	10YR4/4褐色砂泥			円形	不明
251	13.4m	5	1区1面西 PN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×80
252	13.6m	5	1区1面西 QN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
253	13.6m	5	1区1面西 PN・QN	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	残存 60×30
255	13.5m	5	1区1面西 ON	10YR3/3暗褐色砂泥	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	90×75
256	13.6m	4	1区1面西 ON・PN	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	長方形	不明
257	13.2m	5	1区1面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト 炭混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×80
259	13.6m	5	1区1面西 PN・QN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む	土葬	方形	40×50
260	13.1m	5	1区1面西 QN	10YR4/2灰黄褐色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト 炭混		土葬	方形	80×70

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			60×50	泥面子小(顔)	江戸時代中期～後期	1	男	老年
木棺	B1a		50×50	土人形、数珠	江戸時代後期	1	女	熟年
木棺	(B2b)		45×45	白磁紅皿2	江戸時代後期	3 (1)	不明3 (男)	成人3 (成人)
木棺			35×40	土人形(騎馬人物像)	江戸時代後期	1	女	老年
木棺			不明					
木棺			不明					
木棺			30×30	新寛永通寶1	江戸時代後期	1	不明	4歳
木棺			30×30	古寛永通寶1・寛永文銭1 ・新寛永通寶1・不明寛永通寶2・祥符通寶1、京焼小椀、土人形(犬抱き人物立像・笠持ち人物座像・男性立像)・鳩笛・土鈴(太鼓)	江戸時代後期	1	不明	1歳
木棺			30×30	土人形(玉抱え人物像・人物座像・袵人物座像・笠持ち人物立像)	江戸時代後期			
木棺			30×30					
木棺	不明		50×55		江戸時代中期～	1	男	壮年
木棺	B1b	底・側板スギ	45×45	古寛永通寶1・新寛永通寶4・不明1、染付皿、蕎麦猪口、土人形(女性立像)	江戸時代後期	2 (1)	男 不明 (不明)	壮年 成人 (不明)
木棺			40×40		江戸時代後期	1 (1)	不明 (男)	2歳 (成人)
木棺			30×30	泥面子(申・亥・せ・渦巻き)	江戸時代後期	1 (1)	不明 (不明)	成人 (成人)
木棺			30×30	土師器皿	江戸時代後期	1	不明	不明
土器棺			径18		江戸時代前期～中期			
木棺			40×45	土人形	江戸時代後期	1	男	成人
木棺	不明		50×50	土人形(唐子・笠持ち人物2)	江戸時代後期	1 (1)	男 (女)	壮年 (壮年)
木棺						1	不明	不明
不明					江戸時代後期	1	男	成人
木棺			70×40					
木棺	B1b	底・側板スギ	45×45	天蓋軸、土人形	江戸時代後期	2 (1)	男 女 (男)	熟年 老年 (成人)
木棺			35×35		江戸時代中期			
木棺	A2b	底板・蓋・棧スギ	50×55	箱棺側板墨書		1 (1)	女 (不明)	壮年 (不明)

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
262	13.8m	6	1区1面西 PN	10YR3/2黒褐色砂泥				
265	13.3m	5	1区1面西 QN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	75×85
266	13.2m	5	1区1面西 QN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×75
267	13.7m	4	1区1面西 QN	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	残存 50×60
270	13.7m	4	1区1面西 QN	10YR3/2黒褐色砂泥			円形	不明
272	13.6m	5	1区1面西 ON・OO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	残存 55×25
273	13.6m	5	1区1面西 ON	10YR3/3黒褐色砂泥	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	40×40
274	13.2m	5	1区1面西 ON・PN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
275	13.3m	5	1区1面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
276	13.4m	5	1区1面西 PN	10YR3/3暗褐色砂泥 礫混 2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 90×50
277	13.7m	5	1区1面西 PN	10YR5/2灰黄褐色シルト 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
278	13.2m	5	1区1面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫含む	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×70
281	13.6m	5	1区1面西 QN	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	35×35
282	13.6m	5	1区1面西 QN	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む		土葬	円形	径60
284	13.5m	5	1区1面西 QM	2.5Y3/2黒褐色シルト	10YR4/2灰黄色シルト 礫混		円形 方形	不明
288	13.6m	5	1区1面東 OO	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混		直葬	方形	70×60
289	13.7m	5	1区1面東 OO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	55×60
290		6	1区1面東 QO				円形	不明
291	13.7m	5	1区1面東 OO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	45×40
292	13.6m	5	1区1面東 OO	2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 55×65
293	13.3m	5	1区1面東 OO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
294	13.5m	5	1区1面東 OO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y3/1黒褐色砂泥	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×60
295	13.4m	5	1区1面東 OO	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×65
296	13.7m	5	1区1面東 OO	10YR3/2黒褐色砂泥			円形	径50

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
石仏 (地藏)								
木棺	B1a		45×45			3 (1)	男女 男(男)	壮年 熟年 成人 (思春期)
木棺	(B1b)		45×45	古寛永通寶1		2 (1)	女 男(男)	成人 成人 (成人)
木棺			不明					
土器棺			径20	土師器	江戸時代後期			
木棺			不明		江戸時代中期			
木棺			30×30		江戸時代後期			
木棺	B2b		45×50	古寛永通寶3・寛永文銭1 ・新寛永通寶1・皇宋通寶 1、漆器椀	江戸時代中期	2 (1)	女 男(男)	熟年 老年 (成人)
木棺	(B2b)		45×45		江戸時代後期	1 (1)	男 (男)	成人 (熟年)
木棺	(B2b)		50×50		江戸時代中期～ 後期	1 (1)	女 (男)	壮年 (壮年)
不明			不明					
木棺	B2b	底・側板スギ、 釘ヒノキ属	45×45		江戸時代後期	2	男 不明	壮年 不明
木棺			20×20					
不明			不明			1	不明	成人
土器棺 木棺	B2b		径25 25×25			1	不明	不明
直葬					江戸時代後期	1	男	壮年
木棺			45×45	鳩笛、煙管(雁首)	江戸時代後期	1	男	成人
土器棺			不明		江戸時代後期			
木棺			不明		江戸時代後期			
木棺	不明		45×45	古寛永通寶1・新寛永通寶 5、土人形(女性立像2・ 布袋立像・人物座像・袷人 物座像)、数珠、銅製金具	江戸時代中期～ 後期	1	男	熟年
木棺	B1a		45×50	数珠(水晶・琥珀・木製)、 円盤形木製品墨書「上」	江戸時代後期	2 (1)	女 男 (不明)	熟年 老年 (成人)
木棺	不明		45×45		江戸時代後期	1	男	壮年
木棺	C1b	底・側板・蓋 ・棧スギ	50×55	箱棺側板墨書、土人形	江戸時代後期	1	男	壮年
土器棺			径25		江戸時代後期	1	男	成人

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
297	13.3m	5	1区1面東 OO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×65
298	13.6m	5	1区1面東 OO	2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
299	13.4m	5	1区1面東 OO・PO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×80
300	13.4m	5	1区1面東 OO・PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×55
301	13.6m	5	1区1面東 PO	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	円形	径80
302	13.4m	5	1区1面東 PO	10YR4/2灰黄褐色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
303	13.3m	5	1区1面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	55×60
304	13.3m	5	1区1面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×70
305	13.4m	5	1区1面東 PO	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	方形	不明
306	13.2m	5	1区1面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×90
307	13.3m	5	1区1面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 70×70
308	13.6m	5	1区1面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	方形	75×60
309	13.4m	5	1区1面東 PO・PP	10YR3/3暗褐色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	75×75
311	13.7m	5	1区1面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
313	13.7m	6	1区1面東 PO・PP	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	長方形	不明
314	13.3m	5	1区1面東 PO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y5/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	75×55
315	13.2m	5	1区1面東 PO・QO	10YR4/2灰黄褐色砂泥礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×75
316	13.9m	6	1区1面東 PO	10YR3/3暗褐色砂泥				
317	13.4m	5	1区1面東 QO	10YR5/2灰黄褐色砂泥 5Y4/1灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 55×65
318	13.4m	5	1区1面東 QO	2.5Y5/3黄褐色砂泥 礫含む	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 50×75
319	13.3m	5	1区1面東 OP・PP	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 70×70
320	13.7m	5	1区1面東 PO	10YR3/2暗褐色砂泥			円形	不明

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	B1b		45×45		江戸時代後期	1 (1)	男 (男)	熟年 (成人)
木棺	不明		45×45		江戸時代中期～ 後期	1 (1)	男 (不明)	熟年 (成人)
木棺	A1b	底板・側板 マツ属	45×50	寛永文銭1・新寛永通寶1、 土人形	江戸時代後期	1 (2)	男 (女) (男)	熟年 (成人) (老年)
木棺	B2b	底・側板・棧 スギ	45×45	染付小椀、土人形(笠持ち 人物立像・鈴持ち人物像)、 煙管(雁首・吸口)	江戸時代後期	2 (2)	男 女 (不明) (不明)	熟年 熟年 (6歳) (老年)
木棺			不明		江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	(B2a)		40×45		江戸時代後期	1	女	成人
木棺	B1a		40×50	古寛永通寶1・新寛永通寶 1	江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	熟年 (成人)
木棺	B1a		50×50		江戸時代後期	1	女	壮年
木棺			不明		江戸時代後期	1 (2)	男 (男) (女)	熟年 (成人) (成人)
木棺	B2b		42×42	不明寛永通寶4・不明2、 土人形、方柱形木製品	江戸時代後期	2 (3)	男 不明 (不明2) (女)	熟年 成人 (成人2) (成人)
木棺			60×45		江戸時代後期	4 (1)	不明 男 女 不明 (男)	3歳 熟年 成人 未成人 (不明)
木棺	不明		45×45	天保通寶1		1	女	成人
木棺	A2b	底・側板・蓋 ・棧スギ	50×50	新寛永通寶2、 土人形(袴人物座像)	江戸時代後期	2 (2)	女 不明 (女) (男)	壮年 成人 (老年) (成人)
不明								
木棺	B1a		35×82	土人形(力士立像・宝珠を 抱く人物像)、扇	江戸時代後期	1	不明	4歳
木棺			45×45	土人形(袴人物座像・頭巾 人物座像・犬抱き人物立像 2)	江戸時代後期	1 (2)	男 (女) (男)	熟年 (成人) (成人)
木棺	B1a		45×45		江戸時代後期	1 (1)	女 (男)	壮年 (成人)
墓石					江戸時代後期			
木棺	不明		45×45	数珠	江戸時代後期	1	男	壮年
木棺	不明		45×45	煙管(雁首・吸口)	江戸時代後期	2	男 男	老年 成人
木棺	C2b	底・側板・棧 スギ	45×45	箱棺側板墨書、漆器椀	江戸時代中期～ 後期	1 (2)	男 (男) (不明)	熟年 (成人) (不明)
土器棺			不明		江戸時代後期			

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
321	13.9m	6	1区1面東 OO	10YR3/2暗褐色砂泥			円形	不明
323	13.6m	5	1区1面東 QO	10YR4/4褐色砂泥 礫含む	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	方形	60×60
324	13.3m	5	1区1面東 PO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×65
325	13.3m	5	1区1面東 PO	10YR4/2灰黄褐色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	不明
326	13.4m	5	1区1面東 PO	10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	火葬	方形	残存 80×40
327	13.7m	5	1区1面東 QO	10YR3/2暗褐色砂泥		土葬	方形	残存 100×60
328	13.1m	5	1区1面東 PO・QO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	80×85
329	13.5m	4	1区1面東 QO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	50×50
330	13.6m	5	1区1面東 QO	10YR3/2暗褐色砂泥	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×65
331	13.6m	5	1区1面東 QO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	55×65
332	13.4m	5	1区1面東 QO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂泥 炭混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×75
333	13.7m	5	1区1面東 QO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色砂泥		円形	径45
334	13.5m	5	1区1面東 QO	10YR3/2暗褐色砂泥			円形	径40
335	13.8m	6	1区1面東 QO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥			円形	不明
337	13.4m	5	1区1面東 QO	2.5Y3/2黒褐色砂泥 礫混		土葬	方形	65×70
339	13.9m	6	1区1面東 PP	10YR3/3暗褐色砂泥				
340	13.6m	6	1区1面東 OP	10YR3/2黒褐色砂泥		火葬	円形	径45
342	13.2m	5	1区1面東 PP	2.5Y4/1黄灰色シルト 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	円形	径80
345	14.3m	6	1区1面東 PQ	10YR3/3暗褐色砂泥			円形	不明
346		6	1区1面東 QQ	10YR3/2黒褐色砂泥			円形	不明
347	13.4m	5	1区1面東 QP	2.5Y4/1黄灰色砂泥	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y5/1黄灰色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	70×65
348	13.3m	5	1区1面西 OM	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫含む 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×60

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
土器棺			残存径24		江戸時代後期			
木棺			45×45	新寛永通寶1、染付小椀、泥面子	江戸時代後期	2	女 男	熟年 老年
木棺	不明		50×45		江戸時代中期～後期	2 (1)	女 不明 (不明)	思春期 不明 (不明)
木棺	B2a		50×45	色絵小椀、唐津香炉	江戸時代後期	1 (2)	女 (男) (女)	熟年 (成人) (成人)
木棺			35×30	土人形(女性立像)	江戸時代後期	1 (2)	女 (男) (男)	成人 (壮年) (成人)
木棺			26×26		江戸時代中期～後期			
木棺	B1b	底・側板スギ	45×45		江戸時代後期	1 (1)	女 (女)	老年 (成人)
木棺			不明					
木棺			45×45		江戸時代後期		不明	成人
木棺			45×45	色絵小椀	江戸時代後期	1	男	老年
木棺	(B1a)		50×50	磁器小椀、塔婆	江戸時代後期	2	男 女	壮年 壮年
土器棺			径25		江戸時代後期			
土器棺			径20		江戸時代後期			
土器棺			径22		江戸時代中期			
木棺			不明			1	不明	不明
墓石								
土器棺	A		径18	寛永文銭1				
土器棺			径60	古寛永通寶1・新寛永通寶2・新寛永通寶(背元)1・永楽通寶6・至道通寶1・開元通寶2・洪武通寶1・皇宋通寶2・康熙通寶3・萬曆通寶1・正隆元寶1・政和通寶1、唐津大鉢、漆椀、数珠、板状木製品、扇、煙管(雁首)	江戸時代中期～後期	1 (1)	男 (女)	老年 (壮年)
土器棺			径22		江戸時代後期			
土器棺			径24		江戸時代後期			
木棺 土器棺	(B2b)		55×50 径45	土師器小型壺、染付小椀、白磁紅皿、ミニチュア鍋	江戸時代後期	1	不明	4歳
木棺	B1a		45×45		江戸時代後期	1	不明	不明

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
349	13.5m	5	1区1面東 OP	2.5Y3/2暗褐色粘質土 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘質土	10YR3/1黒褐色シルト 2.5Y4/1黄灰色シルト 5Y3/1オリーブ黒色粘土	土葬	方形	45×45
351	13.5m	5	1区1面東 OP・PP	2.5Y3/2黒褐色砂泥 礫含む 2.5Y4/1黄灰色シルト	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 70×80
353	13.7m	5	1区1面東 OP・PP	2.5Y3/1黒褐色粘質土		土葬	方形	40×40
354	13.0m	6	1区1面東 PP					
356	13.4m	5	1区1面東 PP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 10YR4/2灰黄褐色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
361	13.4m	5	1区1面東 PP	10YR5/6黄褐色砂 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 2.5Y5/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×60
362	13.3m	3	1区1面東 PP・QP	2.5Y3/1黒褐色シルト 5Y4/1灰色シルト		土葬	方形	50×50
363	13.5m	5	1区1面東 QP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫・炭を含む	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×55
364	13.4m	5	1区1面東 QP	10YR4/2灰黄褐色砂泥礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×65
366	13.6m	5	1区1面西 QM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	残存 65×45
390	14.0m	6	1区1面東 PP・PQ	10YR3/2黒褐色砂泥 やや粘質				
391	14.0m	6	1区1面東 PP・PQ	10YR4/4褐色砂泥				
392	13.8m	6	1区1面東 QQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		火葬	円形	不明
393	14.1m	6	1区1面東 QQ・QR	2.5Y3/1黒褐色粘質土 10YR3/2黒褐色砂泥			円形	不明
394	14.0m	6	1区1面東 QQ・QR	2.5Y3/2黒褐色粘質土		土葬	円形	不明
395	13.7m	5	1区1面東 PP	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	方形	60×65
396	13.3m	4	1区1面東 PP	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
398	13.6m	5	1区1面東 PP	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	45×45
400	13.3m	4	1区1面東 OP・PP	10YR3/1暗褐色砂泥 礫混 2.5Y5/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×75
401		2	1区1面東 PP	2.5Y3/2黒褐色粘質土		土葬	方形	60×55
402	13.5m	5	1区1面東 PP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥			円形	径35
403	13.3m	5	1区1面東 PP	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径90
404	13.3m	5	1区1面東 PQ	10YR4/2灰黄褐色シルト 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径80
406	13.6m	5	1区1面東 QP	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径50

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	B1a		30×30		江戸時代後期	1	不明	新生児
木棺	B2b		45×45	染付小椀、泥面子(丸二)	江戸時代後期	1 (1)	女 (男)	壮年 (成人)
木棺			30×30	土人形(笠持ち人物像)	江戸時代後期			
墓石								
木棺	不明		35×35	染付小椀・蓋、軟質施釉陶器徳利、ミニチュア椀、土鈴(鳥)	江戸時代後期	1	不明	1歳
木棺	B2b		45×45		江戸時代後期	1 (2)	女 (女2)	熟年 (成人2)
木棺			不明	景德元寶1	江戸時代前期			
木棺	B2b	底・側板・蓋 スギ	50×50		江戸時代後期	1	男	壮年
木棺	B2b		45×45	古寛永通寶1、数珠	江戸時代後期	1	男	熟年
木棺			不明					
墓石					江戸時代中期			
墓石3								
土器棺			径18	土人形(笠持ち人物立像3)				
土器棺			径22		江戸時代中期			
土器棺			径26		江戸時代後期	1	不明	成人
木棺			45×45		江戸時代中期～ 後期	1	不明	成人
木棺	B2a	底・側板・蓋 スギ	45×45		江戸時代中期	2 (1)	男 男 (不明)	壮年 熟年 (成人)
木棺	B1b	底・側板・蓋 スギ	35×35			2 (1)	男 女 (不明)	老年 熟年 (0歳)
木棺	B2b		45×45	櫛、櫛払	江戸時代前期	1 (1)	女 (男)	熟年 (成人)
木棺			不明		江戸時代前期			
土器棺			径20					
木棺	C		径55		江戸時代中期～ 後期	1 (1)	女 (男)	老年 (壮年)
木棺	C		径60	土師器皿、板塔婆	江戸時代後期	1 (4)	男 (不明) (女3)	熟年 (乳児) (壮年2) (熟年)
木棺			不明					

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
407	13.4m	5	1区1面東 QP・QQ	2.5Y3/2黒褐色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	円形	径60
408	13.4m	5	1区1面東 QP・QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y3/2黒褐色シルト	5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	不明
409	13.3m	5	1区1面東 QP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×65
410	13.4m	5	1区1面東 QP・QQ	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 2.5Y3/1黒褐色シルト	10YR4/2灰黄褐色砂泥 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 2.5Y4/1黄褐色粘土・シルト	土葬	円形	径80
411	13.2m	4	1区1面東 QP	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y5/3黄褐色シルト 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 70×65
412	13.3m	5	1区1面東 QP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 70×65
413	12.9m	5	1区1面東 QP・QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	90×90
414	13.4m	5	1区1面東 RP・RQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
416	13.5m	5	1区1面東 QP	10YR4/2灰黄褐色砂泥 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	火葬	方形	40×40
418	13.4m	5	1区1面東 QP	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径70
419	13.3m	5	1区1面東 QP	2.5Y3/2黒褐色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×85
420	13.6m	5	1区1面東 QP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	45×45
421	13.2m	4	1区1面東 QP	2.5Y3/2黒褐色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	85×80
423	13.3m	3	1区1面東 QP・RP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×65
424	13.6m	4	1区1面東 QP	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥	10YR4/2灰黄色砂泥 炭混		円形	径50
426	13.5m	5	1区1面東 PQ	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	不明
428	13.2m	5	1区1面東 PQ	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y5/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×60
428 B	13.6m	4	1区1面東 PQ			土葬	方形	残存 70×50
429	13.1m	4	1区1面東 PP	10YR4/2灰黄褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	90×90
429 B	13.1m	3	1区1面東 PP			土葬	方形	不明
430	13.4m	5	1区1面東 PP・PQ	10YR4/2灰黄褐色砂泥 2.5Y5/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 70×70
431	13.5m	5	1区1面東 PQ	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	方形	残存 70×60
432	13.2m	5	1区1面東 PQ	10YR7/2にぶい黄橙色粗砂	2.5Y5/3黄褐色シルト 礫混	土葬	方形	残存 65×55
433	13.3m	5	1区1面東 PQ	10YR7/2にぶい黄橙色粗砂	10YR3/3暗褐色砂泥 2.5Y6/2灰黄色砂泥 砂礫混	土葬	方形	不明
434	13.5m	5	1区1面東 PQ	10YR3/2黒褐色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 80×40

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	B	底・側板スギ、 籬・釘タケ	径36	土師器皿	江戸時代後期	1	不明	2歳
木棺	B		径40	漆器椀	江戸時代前期	1 (1)	不明 (不明)	1歳 (不明)
木棺	B1a		50×50		江戸時代中期 ～後期	2	不明 男	小児 熟年
木棺 土器棺	B2a	底板・側板マ ツ属	45×40 径45	煙草入、煙管(雁首・羅宇 ・吸口)		1	女	壮年
木棺	B1a	底・側板・蓋 スギ	46×46	寛永文銭1	江戸時代中期 ～後期	1	女	壮年
木棺	B1a		40×45	寛永文銭4、天蓋軸、 煙管(雁首)	江戸時代後期	1	女	壮年
木棺	A2c		70×70		江戸時代前期	1	男	熟年
木棺	B2b		45×45	天蓋	江戸時代後期	1	男	壮年
木棺 土器棺	B1a		25×25 径20		江戸時代後期			
木棺			径50			1	女	思春期
木棺	B2b		44×44	煙管(雁首・吸口)	江戸時代後期	1	男	老年
木棺			不明					
木棺	B2b		40×50		江戸時代後期	1 (1)	男 (男)	熟年 (壮年)
木棺	B2a	底板モミ属、 側板スギ	50×50	土人形(牛・鳥)、漆器皿、 天蓋	江戸時代中期～ 後期	1	男	成人
土器棺			径24		江戸時代前期			
木棺	B1b	底・側板スギ	28×28		江戸時代中期	1	不明	新生児
木棺	B2a	底・側板スギ ・モミ属、蓋 モミ属	45×45		江戸時代中期	1 (1)	男 (不明)	壮年 (不明)
木棺	B2a		50×50			1	不明	小児
木棺	B2b	底・側板・棧 スギ、釘ヒノ キ属	45×45	木刀(長・短)	江戸時代後期	1 (4)	男 男 男 (不明2)	壮年 (熟年) (成人) (成人2)
木棺	A2b		不明					
木棺	B2b		50×65		江戸時代後期	1 (2)	女 (男) (女)	老年 (壮年) (熟年)
木棺	不明		45×45	土人形	江戸時代後期	1 (1)	男 (男)	老年 (熟年)
木棺	B1a	底・側板・蓋 ・棧マツ属	45×45	土人形、数珠	江戸時代後期	1	女	老年
木棺	B2a		50×45	木製入歯	江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	B2b		32×32		江戸時代後期	1	不明	3歳

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
436	13.7m	5	1区1面東 QQ	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	残存径70
437	13.7m	5	1区1面東 QQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫混		土葬	方形	70×90
438	13.3m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	75×75
439	13.5m	5	1区1面東 QQ	2.5Y3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	不明
440	13.4m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×90
441	13.2m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×70
442	13.3m	5	1区1面東 RQ	10Y4/2灰黄色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×90
444	13.3m	5	1区1面東 PP	5Y4/1灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	65×70
445	13.5m	6	1区1面東 PQ	10YR3/2暗褐色粘質土	5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径45
446	13.4m	4	1区1面東 PQ・OQ	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径70
447	13.3m	3	1区1面東 PQ・OQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫混 2.5Y5/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
448	14.0m	4	1区1面東 QR	10YR4/4褐色砂泥		土葬	長方形	40×70
450	13.0m	4	1区1面東 PQ	10YR4/4褐色砂泥 礫混	5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径75
453	13.5m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 60×80
454	13.3m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫混 2.5Y3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×65
455	13.3m	5	1区1面東 QQ・QR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径70
456	13.5m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	80×75
457	13.3m	5	1区1面東 QQ	10YR4/2灰黄褐色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×70
458	13.4m	5	1区1面東 RQ	10YR5/2灰黄褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	方形	70×70
459	13.9m	5	1区1面東 OR	10YR4/3黄褐色砂泥		土葬	円形	径100
460	13.9m	6	1区1面東 OR・PR	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	50×180
461	13.6m	5	1区1面東 PR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 5Y4/1灰色シルト		土葬	楕円形	70×50
467	13.6m	5	1区1面東 PR	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y5/3黄褐色シルト	土葬	円形	径80
468	13.6m	5	1区1面東 PR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫混 5Y4/1灰色シルト		直葬	楕円形	65×45
473	13.6m	5	1区1面東 PR	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂 泥 炭混		土葬	円形	径70

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			径30					
木棺			不明		江戸時代中期～後期			
木棺	B1 b		50×50		江戸時代後期	2 (1)	男女 (不明)	老年 熟年 (成人)
木棺			30×30					
木棺	(B1 a)		50×50	古寛永通寶6・寛永文銭1 ・新寛永通寶2・題目銭1、 染付椀、漆器椀	江戸時代後期	1 (1)	男 (女)	壮年 (熟年)
木棺	B1 a		45×48		江戸時代後期	1 (1)	男 (女)	熟年 (成人)
木棺	B1 b		45×50		江戸時代後期	2 (1)	男 不明 (不明)	老年 成人 (成人)
木棺	B3	底板スギ・ヒノキ科、側板スギ	55×50		江戸時代後期	2 (2)	女 不明 (男) (不明)	壮年 成人 (壮年) (不明)
木棺	B	底・側板スギ ・籬タケ	径36	煙管吸口	江戸時代中期	2	男 男	老年 老年
木棺	(C)		径50		江戸時代後期	1	不明	老年
木棺	B2 a	底・側板スギ	48×48		江戸時代前期			
木棺	不明		25×60		江戸時代後期	1	不明	成人
土器棺			径54			1	男	老年
木棺	不明		45×50	新寛永通寶1、骨製簪	江戸時代後期	2	女 不明	熟年 1歳
木棺	B1 b	底・側板スギ	45×45		江戸時代中期～後期	1 (1)	女 (不明)	思春期 (成人)
木棺	不明		径52		江戸時代中期	2	男 不明	熟年 6箇月
木棺	B(l b)		46×50		江戸時代前期～中期	1	女	老年
木棺	B2 b		45×50		江戸時代前期～中期	1	女	成人
木棺	不明		50×50	漆器椀	江戸時代後期	1	男	成人
不明			不明		江戸時代前期			
不明			不明		江戸時代中期～後期	1 (1)	男 (男)	老年 (熟年)
木棺			不明	古寛永通寶3・新寛永通寶3、漆器椀	江戸時代後期	1	不明	成人
木棺			径35	古寛永通寶2・新寛永通寶3、土人形(亀)	江戸時代後期	1 (2)	不明 (不明) (不明)	小児 (不明) (成人)
直葬					江戸時代中期～後期	1	男	成人
木棺			不明		江戸時代後期	(1)	(不明)	(不明)

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
474	13.4m	5	1区1面東 PR・QR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	90×90
475	13.4m	5	1区1面東 QR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 65×70
476	13.4m	5	1区1面東 QR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	45×45
477	13.4m	5	1区1面東 QR	10YR3/3暗褐色砂泥 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×70
479	13.3m	3	1区1面東 QR	10YR4/2灰黄褐色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径60
480	13.5m	5	1区1面東 QQ・QR	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	径75
483	13.6m	5	1区1面西 QN	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	50×40
484	13.4m	5	1区1面東 QQ・QR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 70×80
487		4	1区1面西 ON	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
488	13.6m	5	1区1面西 ON	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫混		土葬	方形	65×85
490	13.4m	5	1区1面西 QN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
491	13.6m	5	1区1面西 QM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	45×50
495	13.4m	4	1区1面西 PN	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	50×60
502	13.5m	5	1区1面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥	2.5Y4/1黄灰色砂泥 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×65
503	13.3m	5	1区1面東 OO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	残存 55×60
514	13.9m	6	1区1面東 QR	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径40
517	13.7m	6	1区1面東 PO				円形	不明
518	13.3m	4	1区1面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	70×70
541 B	13.2m	4	1区1面西 RN	10YR4/2灰黄褐色砂泥 10YR4/1褐灰色シルト 礫混	2.5Y4/1黄灰色砂泥	土葬	方形	80×90
560	13.7m	5	1区1面東 PQ	10YR5/4にぶい黄褐色細砂 10YR2/2黒褐色シルト		直葬	方形	65×50
562	13.5m	4	1区1面東 RQ・RR	10YR3/3暗褐色砂泥	5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径80
563	13.6m	5	1区1面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
564	13.5m	4	1区1面東 OP	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混		土葬	方形	22×22
565	13.4m	4	1区1面東 PR	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 礫混	10YR4/4褐色砂泥 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 10YR3/2黒褐色砂泥	土葬	円形	径80
567	13.8m	6	1区1面東 PR	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫混	土葬	円形	径60
568	13.8m	6	1区1面東 PR	10YR4/4褐色砂泥		土葬	楕円形	54×28
569	13.5m	4	1区1面東 OQ	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混			円形	径60

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	不明		55×55		江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	B1b		50×45		江戸時代後期	1	女	壮年
木棺	不明		40×40		江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	B1a		45×45	新寛永通寶4、煙管(雁首・吸口)	江戸時代後期	1 (2)	女 (男) (不明)	老年 (成人) (成人)
木棺	C	底板スギ・ヒノキ科・コウヤマキ、側板ヒノキ科、籐タケ	径37	古寛永通寶12・寛永文銭1、桶棺側板墨書	江戸時代中期			
木棺	不明		30×30		江戸時代中期～後期	2 (1)	不明 不明 (不明)	6歳 成人 (成人)
不明			不明		江戸時代後期	1	不明	小児
木棺	(B2b)		50×45		江戸時代後期	1 (1)	不明 (不明)	小児 (不明)
木棺	B2b	底・側板・蓋・棧スギ	40×40		江戸時代後期			
木棺			不明		江戸時代前期～中期			
木棺	B2b		50×50		江戸時代後期	1 (1)	女 (不明)	壮年 (不明)
木棺			35×30					
木棺	B1a		35×35	ミニチュア赤絵小椀、土人形(春駒持ち人物立像)	江戸時代中期	1	不明	5歳
木棺	不明		45×45	古寛永通寶1、泥面子	江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	熟年 (成人)
木棺	B1b		45×45		江戸時代後期	1	男	熟年
不明			不明		江戸時代後期			
土器棺			径18	土師器、染付、瓦	江戸時代後期			
木棺	不明		50×50			(1)	(女)	(成人)
木棺	B1a	底・側板スギ	45×45		江戸時代後期	1	男	老年
直葬			不明			1	女	成人
木棺	不明		径52		江戸時代前期	1	不明	不明
木棺			30×30	土人形(俵持ち人物立像)、銭貨		1	不明	不明
不明			不明		江戸時代前期			
木棺	不明		径48	古寛永通寶2・新寛永通寶4	江戸時代後期	2	女 男	熟年 成人
土器棺			径24		江戸時代後期	1	不明	不明
不明			不明		江戸時代後期			
不明			不明		江戸時代後期	1	男	老年

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
575	13.4m	4	1区1面東 PQ	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径75
581	13.4m	4	1区1面東 QR	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	楕円形	90×50
583	13.5m	5	1区1面東 PQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	30×30
585	13.4m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径80
588	13.4m	5	1区1面東 PQ	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 10YR3/1黒褐色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	85×85
590	13.5m	5	1区1面東 PP	10YR2/2黒褐色粘質土	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	60×50
591	12.8m	5	1区1面東 QQ	2.5Y4/1黄灰色シルト 5Y4/1灰色シルト		土葬	方形	70×80
592	13.9m	5	1区1面東 QR	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	径30
595	13.6m	5	1区1面西 QN	2.5Y4/1黄灰色砂泥		土葬	長方形	80×50
(263)	13.8m	5	1区1面西 QN	2.5Y4/1黄灰色砂泥			円形	不明
(264)	13.8m	5	1区1面西 QN	2.5Y4/1黄灰色砂泥			円形	不明
596	12.9m	2	1区1面東 RP	10YR5/2灰黄褐色砂泥 礫混 10YR4/1褐色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径70
597	13.4m	5	1区1面東 QP・RP	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	土葬	方形	70×70
598	13.6m	4	1区1面西 OM・ON	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径55
627	13.4m	5	1区1面東 OO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
638	13.6m	5	1区1面西 PM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	50×55
673	13.5m	3	1区1面東 PQ				円形	径30
717	13.5m	4	1区1面東 RQ	10YR4/3褐色砂泥		土葬	方形	残存 70×30
724	13.3m	4	1区1面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	75×80
726	13.4m	3	1区1面東 RP	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径65
733	13.6m	3	1区1面東 PO	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
751	13.6m	4	1区1面東 PQ	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	不明
752	13.6m	5	1区1面東 PP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥			円形	径30
755	13.6m	4	1区1面東 PP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	径35
795	13.6m	5	1区1面東 QP・QQ			土葬	方形	残存 35×65
807	13.5m	4	1区1面西 ON			土葬	円形	不明

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	B		径60	漆器椀	江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	熟年 (成人)
不明	C		径41		江戸時代中期～ 後期	1 (1)	不明 (不明)	不明 (成人)
木棺	不明		23×26		江戸時代後期			
木棺	不明		径55		江戸時代中期	1 (1)	女 (不明)	老年 (不明)
木棺	B 2 b		45×45	漆器椀、数珠(水晶)	江戸時代中期	2 (2)	女 男 (男) (女)	熟年 成人 壮年 (成人)
木棺			不明		江戸時代中期			
木棺	A 1 a	1 個体ツガ属	58×56	数珠	江戸時代中期	1 (2)	男 (女) (男)	熟年 (成人) (成人)
不明			不明					
土器棺			不明					
土器棺			径30		江戸時代後期			
土器棺			径25					
木棺	B	底・側板スギ ・ヒノキ科、 籬タケ	径52	古寛永通寶6、色絵椀、 漆器椀、煙管(雁首)	江戸時代前期	1	女	老年
木棺	(B 2 b)		50×50		江戸時代後期	1	男	壮年
木棺			径45					
木棺	B 2 b	底・側板・蓋 ・棧スギ	34×40	白磁紅皿、土師器鉢、ミニ チュア竈セット・蓋付き片 口・小鉢・小瓶	江戸時代後期	1 (1)	不明 (男)	4 歳 (熟年)
不明			不明					
土器棺			径18		江戸時代後期			
不明			不明					
木棺	B 2 a		45×45		江戸時代後期	2 (2)	女 男 (男) (不明)	老年 成人 (熟年) (成人)
木棺	不明		径50					
不明			不明		江戸時代後期			
不明			不明	古寛永通寶 1	江戸時代後期	1	男	成人
土器棺			不明		江戸時代後期			
不明			不明		江戸時代中期			
木棺			不明					
木棺			径25					

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1029	13.4m	4	1区2面西 QM	10YR3/4暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	75×85
1030	13.4m	4	1区2面西 QM	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1031	13.1m	3	1区2面西 PM・QM	10YR3/3暗褐色砂泥 7.5YR4/6褐色砂泥混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1032	13.5m	4	1区2面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	不明
1033	13.3m	3	1区2面西 PM	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
1034	13.3m	3	1区2面西 QM	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径60
1036	13.4m	3	1区2面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径60
1037	13.5m	4	1区2面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥 7.5YR5/8明褐色砂泥		土葬	方形	65×60
1038	13.5m	3	1区2面西 PM	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	径60
1039	13.4m	3	1区2面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	不明	不明
1040	13.5m	3	1区2面西 PM	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径65
1041	13.3m	3	1区2面西 PM	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径85
1042	13.3m	4	1区2面西 PM	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		土葬	方形	残存 60×60
1043	13.3m	3	1区2面西 PM	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1044	13.4m	4	1区2面西 PN	10YR3/4暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	60×65
1045	13.2m	3	1区2面西 PM	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 礫混	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径55
1046	13.2m	3	1区2面西 PM	2.5Y5/3黄褐色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	60×60
1118	13.3m	4	1区2面西 QM	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	60×65
1119	13.2m	4	1区2面西 QM	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	60×65
1120	13.2m	3	1区2面西 QM	2.5Y3/2黒褐色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径90
1121	13.5m	4	1区2面西 QM	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	不明	不明
1122	13.2m	4	1区2面西 QM	2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1123	13.3m	4	1区2面西 QM	2.5Y4/1~5/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1124	13.3m	3	1区2面西 QM・QN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径60
1125	13.2m	3	1区2面西 QM・QN	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径70
1126	13.4m	4	1区2面西 QN	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1127	13.3m	3	1区2面西 QN	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1129	13.2m	3	1区2面西 QN	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 2.5Y5/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	65×65

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	B 1 b		48×48	眼鏡レンズ		1	男	壮年
木棺	(B 1 b)		40×40	染付小椀2、土人形(袋担 ぎ人物立像・犬)、櫛	江戸時代中期～ 後期	1	不明	1歳
木棺	(B 2 a)		45×45		江戸時代中期～ 後期	1	女	壮年
木棺			35×35	漆器椀	江戸時代中期	1	男	成人
木棺	(B 1 b)		50×50		江戸時代前期	1	男	成人
木棺			径50		江戸時代前期～ 中期			
木棺			径30		江戸時代前期			
不明			不明					
不明			不明					
木棺			不明		江戸時代前期			
木棺			径50		江戸時代前期			
木棺	不明		径50		江戸時代前期	1	男	熟年
木棺	不明		50×50	漆器椀		1	女	壮年
木棺			45×45		江戸時代後期	1	女	熟年
木棺	不明		45×40	古寛永通寶4・寛永文銭2	江戸時代前期	1	男	熟年
木棺	不明		径42	古寛永通寶3・寛永文銭1	江戸時代前期	1	不明	未成人
木棺	(B 2 b)		45×45		江戸時代前期	1	女	成人
木棺	(B 1 b)		40×40			1	不明	未成人
木棺	(B 1 a)		45×45	漆器椀	江戸時代前期	1	女	熟年
木棺	不明		径52	元祐通寶1	江戸時代前期	1	不明	不明
木棺			不明					
木棺			48×40	箱棺側板墨書、数珠、棒状 木製品		1	女	成人
木棺	不明		45×45	寛永文銭1・新寛永通寶5、 土人形(袴人物立像)	江戸時代中期～ 後期	1	女	壮年
木棺			不明					
木棺	不明		径50			1	男	成人
木棺	B		径25		江戸時代中期			
木棺	B		径30					
木棺	(B 2 a)	底板スギ、側 板・蓋ヒノキ 科	50×50			1 (1)	女 (女)	成人 (成人)

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1130	13.3m	4	1区2面西 QN	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	70×70
1131	13.4m	4	1区2面西 QN	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1132	13.2m	3	1区2面西 PN・QN	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色砂泥	土葬	円形	径60
1134	13.5m	3	1区2面西 QN		2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1135	13.2m	4	1区2面西 QN	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	75×80
1136	13.3m	3	1区2面西 QN			土葬	方形	残存 60×80
1137	13.1m	4	1区2面西 QN	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	80×70
1138	13.4m	3	1区2面西 QN	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1138 B	13.4m	3	1区2面西 QN	2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1139	13.4m	5	1区2面西 QN	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径65
1140	13.4m	4	1区2面西 QN	2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1140 B	13.2m	4	1区2面西 QN				円形	不明
1141	13.2m	3	1区2面西 QN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	70×70
1142	13.5m	4	1区2面西 QN	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1143	13.1m	3	1区2面西 QN	2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1144	13.3m	3	1区2面西 PN・QN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1145	13.1m	3	1区2面西 QN	2.5Y3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1146	13.4m	3	1区2面西 QN	2.5Y3/3黒オリーブ褐色 砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径40
1147	13.1m	4	1区2面西 PN	2.5Y3/3黒オリーブ褐色 砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 75×70
1148	13.3m	4	1区2面西 PN	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1149	13.3m	3	1区2面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	70×60
1150	13.3m	4	1区2面西 PN	2.5Y3/2黒褐色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	60×65
1152	13.2m	3	1区2面西 PN	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	土葬	方形	不明
1153	13.3m	4	1区2面西 PN	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 45×55
1154	13.3m	3	1区2面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径65

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			50×50			1 (1)	不明 (不明)	不明 (成人)
木棺	不明		45×45	京焼椀(錦光山)	江戸時代後期	1	不明	不明
木棺	不明		径45		江戸時代中期	1	不明	不明
木棺			不明					
木棺	不明		50×50	漆器椀	江戸時代後期	1 (1)	男 (女)	成人 (成人)
木棺	不明		48×48					
木棺	B1b		45×45		江戸時代中期	1	男	熟年
木棺			不明		江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	不明		径50			1	不明	成人
木棺	不明		径50		江戸時代中期～ 後期	1	男	壮年
木棺	B2b	底・側板・蓋 スギ	20×20			1	不明	乳児
土器棺			径16					
木棺	B2b	底・側板・棧 スギ	40×40	数珠	江戸時代後期	1	男	壮年
木棺			径22					
木棺	(B1b)		残存 45×45	漆器椀		1	不明	不明
木棺	(B1b)		45×45	巻物軸(金箔)	江戸時代前期～ 中期	2	男 男	老年 成人
木棺	(B2a)		40×40	仏像未製品	江戸時代中期～ 後期	1	男	老年
木棺			径30	白磁合子	江戸時代前期			
木棺	(B2a)		48×40	古寛永通寶3・寛永文銭2 ・新寛永通寶1	江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	不明		残存 45×26		江戸時代中期	1	男	成人
木棺	(B2a)		35×35		江戸時代中期～ 後期	2	不明 女	1歳 成人
木棺	(B1b)		42×45		江戸時代中期～ 後期	1	男	壮年
木棺	(B2b)		残存 45×20		江戸時代中期	1	不明	成人
木棺	(B2b)		35×35	伊万里小椀、ミニチュア赤 絵小椀2・白磁小椀、土人 形(笠持ち人物立像2・唐 人立像・頭巾人物立像・天 神・童子座像・人物座像2 ・狛犬・狐2・獅子頭持ち 人物立像・灯籠・五重塔・ 鳥・牛3)・土鈴2、櫛	江戸時代後期	1 (1)	不明 (女)	1歳 成人
木棺			径50		江戸時代前期	1	女	壮年

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1155	13.5m	4	1区2面西 PN	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
1156	13.5m	4	1区2面西 PN	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径50
1157	13.4m	3	1区2面西 PN	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径50
1158	13.5m	4	1区2面西 PN	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1159	13.2m	4	1区2面西 PN	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 2.5Y6/3にぶい黄色シルト 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 100×80
1160	13.3m	4	1区2面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	残存 50×30
1161	13.0m	4	1区2面西 PM	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	100×80
1162	13.2m	3	1区2面西 PM	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
1163	13.1m	4	1区2面西 OM	2.5Y4/2黄灰色シルト 礫混 5Y4/1灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1164	13.3m	3	1区2面西 OM	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径60
1165	13.1m	4	1区2面西 OM	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	80×75
1166	13.5m	4	1区2面西 OM	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	不明	残存 65×35
1167	13.5m	4	1区2面西 OM	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	不明	不明
1168	13.3m	4	1区2面西 OM	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 礫混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1169	13.4m	3	1区2面西 OM・ON	2.5Y3/2黒褐色シルト 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1170	13.3m	4	1区2面西 ON	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	70×90
1170 B	13.3m	3	1区2面西 ON	2.5Y3/1黒褐色シルト 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト		土葬	方形	70×90
1171	13.3m	3	1区2面西 ON	2.5Y3/2黒褐色シルト 炭混 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1172	13.3m	3	1区2面西 ON	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1173	13.5m	4	1区2面西 ON	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	65×65
1174	13.2m	3	1区2面西 ON	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径70
1175	13.1m	2	1区2面西 ON	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 5Y4/1灰色シルト	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	不明
1176	13.5m	4	1区2面西 ON	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	方形	60×65
1177	13.5m	4	1区2面西 ON	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	方形	不明
1178	13.3m	4	1区2面西 ON	2.5Y3/2黒褐色シルト 炭混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	65×65

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			不明					
不明			不明	古寛永通寶 1				
木棺			径35	土師器皿 3	江戸時代中期～後期	1	不明	不明
木棺			不明	新寛永通寶 2				
木棺	(B 1 b)		45×45		江戸時代前期～後期	2 (1)	男 男 (男)	熟年 老年 (老年)
木棺			不明		江戸時代後期	1 (1)	不明 (不明)	不明 (不明)
木棺			45×45	新寛永通寶 1	江戸時代中期	1	男	熟年
木棺			不明			(1)	(女)	(成人)
木棺	(B 2 a)		45×45		江戸時代中期～後期	1	男	壮年
木棺	不明		径50		江戸時代中期	1	男	老年
木棺	(B 1 a)		50×50	染付椀・蓋、箸、櫛	江戸時代後期	1	女	熟年
不明			不明					
不明			不明					
木棺	B	底・側板スギ、 籬・釘夕ケ	径50		江戸時代後期	1 (2)	女 (女) (不明)	成人 (成人) (未成人)
木棺	不明		径40		江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	成人 (成人)
木棺	(B 2 b)		50×50	古寛永通寶 1・新寛永通寶 1	江戸時代後期	2 (1)	男 女 (女)	壮年 熟年 (壮年)
木棺	不明		残存 35×50			1	女	成人
木棺	(B 1 b)		40×40	新寛永通寶 1	江戸時代中期	1 (1)	男 (男)	成人 (壮年)
木棺			不明		江戸時代後期	(1)	(女)	(熟年)
木棺	不明		50×50		江戸時代前期～中期	1 (1)	男 (不明)	壮年 (成人)
木棺	不明		径45		江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	熟年 (不明)
木棺	(B 1 b)		50×50	古寛永通寶 4・寛永文銭 1 ・新寛永通寶 1、土師器皿、 染付小椀	江戸時代前期～後期	1	男	熟年
不明			不明		江戸時代中期～後期			
不明			不明					
木棺	(B 2 b)		45×40	厨子	江戸時代前期～中期	1 (1)	男 (女)	壮年 (成人)

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1179	13.5m	3	1区2面西 ON・PN	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径70
1180	13.4m	4	1区2面西 ON・OO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
1181	12.9m	2	1区2面西 ON	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	不明
1182	13.2m	4	1区2面西 PN		2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1183	13.2m	4	1区2面西 PN	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 70×60
1184	13.1m	4	1区2面西 PN	2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1185	13.3m	3	1区2面西 PN	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1186 A	13.4m	4	1区2面西 PN	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 70×60
1186 B	13.3m	4	1区2面西 PN	2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 70×60
1187	13.1m	3	1区2面西 PN	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1324	13.6m	5	1区2面東 QO	10YR3/4褐色砂泥			円形	不明
1375	13.4m	4	1区2面西 OL	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
1376	13.4m	3	1区2面西 ON	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径26
1413	13.4m	3	1区2面西 OM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径70
1520	13.4m	4	1区2面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径45
1521	13.4m	4	1区2面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	不明
1523	13.3m	4	1区2面東 OO・PO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	55×65
1524		4	1区2面東 OO・PO	10YR4/2灰黄褐色砂泥礫混	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	不明
1526	13.2m	4	1区2面東 OO・PO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	不明
1528	13.4m	4	1区2面東 OO・PO	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	円形	不明
1529	13.4m	4	1区2面東 OO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
1530	13.3m	4	1区2面東 OO・PO	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	不明
1531	13.3m	4	1区2面東 PO	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1532	12.6m	4	1区2面東 PO	2.5Y3/2黒褐色シルト 5Y4/1灰色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径90
1533	13.2m	3	1区2面東 PO	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	残存 60×65
1534	13.2m	3	1区2面東 PO	2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
1535	13.4m	4	1区2面東 PO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	80×65
1537		4	1区2面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	残存 59×65

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			径45		江戸時代後期	1	不明	不明
木棺			48×48	土師器皿3	江戸時代後期	3	男女不明	成人 壮年 不明
木棺			残存 48×30	土師器椀2、天蓋	江戸時代中期	1 (1)	女 (男)	熟年 (老年)
木棺	不明		50×50					
木棺	不明		45×45					
木棺	不明		48×44	古寛永通寶5	江戸時代前期	1	女	壮年
木棺			不明		江戸時代中期～ 後期	1 (1)	男 (男)	成人 (老年)
木棺			残存 45×36	新寛永通寶1、染付筒椀	江戸時代中期	(1)	(男)	(熟年)
木棺	(B2b)		45×45					
木棺	B1b	底・側板スギ	40×35	土師器皿3	江戸時代後期	2	男 男	老年 成人
土器棺			径25					
木棺			45×45		江戸時代後期			
木棺	B		径24					
木棺			不明					
木棺			径25			1	男	成人
木棺			径56					
木棺	B1b		48×50		江戸時代後期	1	女	熟年
木棺			径55		江戸時代後期	1	男	老年
木棺			径50		江戸時代中期	1	不明	不明
木棺			径30					
木棺			不明					
木棺	不明		径45		江戸時代後期	1 (1)	男 (男)	熟年 (成人)
木棺			不明		江戸時代後期	1	男	成人
木棺	B	底板マツ属、 側板スギ、 釘タケ	径50	天蓋頂部・軸	江戸時代中期～ 後期	1	女	壮年
木棺			残存 45×15			1	不明	壮年
木棺	(B2a)		45×45			1	男	壮年
木棺	(B1b)		45×45		江戸時代中期～ 後期	1 (2)	男 (女) (不明)	壮年 (成人) (不明)
木棺			不明		江戸時代後期	2	男 女	老年 成人

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1538	13.3m	3	1区2面東 PO	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	不明
1539	13.5m	4	1区2面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
1540	13.2m	3	1区2面東 PO・PP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	75×80
1541	12.9m	1	1区2面東 PO	2.5Y4/1黄灰色シルト 2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径60
1542	13.2m	3	1区2面東 QO	2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径75
1543	13.4m	4	1区2面東 QO	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	不明
1544	13.3m	4	1区2面東 QO	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径50
1545	13.2m	4	1区2面東 QO	2.5Y4/2暗灰黄色シルト 2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	残存 60×74
1546	13.2m	3	1区2面東 QO	2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	不明
1547	13.1m	2	1区2面東 QO	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径60
1552	13.0m	3	1区2面東 QO	2.5Y3/2黒褐色シルト 礫混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	100×80
1553	13.1m	3	1区2面東 QO	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 礫混 2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/2暗灰色シルト	土葬	方形	70×80
1554	13.1m	3	1区2面東 QO	2.5Y6/1黄灰色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰色シルト	土葬	方形	80×70
1555	13.1m	3	1区2面東 QO	2.5Y5/3黄褐色シルト 礫混 5Y5/1灰色粘土	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	80×100
1556	13.5m	4	1区2面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径40
1557	13.2m	4	1区2面東 PO・QO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	60×60
1558	13.2m	4	1区2面東 PO・PP	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1暗灰黄色シルト	土葬	円形	径55
1559	13.5m	4	1区2面東 PP	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径60
1560	12.9m	4	1区2面東 PP	10YR4/2灰黄褐色砂泥 2.5Y5/1黄灰色シルト 礫混	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
1561	13.3m	4	1区2面東 PO・PP	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 40×80
1562	13.3m	3	1区2面東 OP・PP	10YR2/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径70
1563	13.3m	4	1区2面東 OP・PP	10YR3/1黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 60×80
1564	13.3m	4	1区2面東 OP・PP	10YR3/1黒褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径70
1565	13.5m	4	1区2面東 PP	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径65
1566	13.4m	3	1区2面東 OP・PP	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径80

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	不明		径42		江戸時代中期～後期	1	不明	不明
木棺			径20					
木棺	B2b		45×45	古寛永通寶1・新寛永通寶4、漆器椀、銅製簪	江戸時代前期	1 (1)	女 (不明)	壮年 (不明)
木棺	C	底・側板スギ、 栓・蓋ヒノキ科、 籬タケ	径45	天蓋、漆片	江戸時代前期	1 (2)	男 (女2)	壮年 (壮年2)
木棺	C	底板ヒノキ属 ・モミ属・コ ウヤマキ	径50	数珠	江戸時代中期	1	女	老年
木棺			径40			1	不明	不明
木棺			径30					
木棺	B2b	底・側板スギ	48×48		江戸時代後期	1	女	壮年
木棺	C		径45		江戸時代中期	1	女	熟年
木棺	C	底板スギ・ヒ ノキ属、側板 ・栓ヒノキ属	径50			1	女	老年
木棺	B2b	底・側板スギ	45×45	煙管(雁首・吸口)	江戸時代中期～後期	1 (1)	女 (女)	老年 (壮年)
木棺	B2b		45×45	数珠、天蓋	江戸時代中期	1	男	思春期
木棺	B1a		45×40	数珠	江戸時代後期	1	男	熟年
木棺	不明		45×45	古寛永通寶1・新寛永通寶3、漆器椀、煙管(雁首・吸口)	江戸時代後期	1	男	老年
木棺			径22			1	(不明)	(成人)
木棺	(B2b)		48×48		江戸時代中期	1	女	壮年
木棺		底・側板・棧 モミ属、台木 ・蓋マツ属	径40	土人形(家)	江戸時代中期	1	女	壮年
木棺			不明		江戸時代中期	1	男	成人
木棺	B2b	底・側板スギ	50×50	古寛永通寶1・寛永文銭2 ・新寛永通寶1、天蓋	江戸時代中期～後期	1 (2)	女 (女2)	老年 (成人) (老年)
木棺			45×43		江戸時代中期～後期	2 (3)	男 女 (女) (不明2)	成人 成人 (思春期) (熟年) (小児)
木棺			径50			1 (1)	男 (不明)	成人 (不明)
木棺	(B1a)		45×45			1 (1)	女 (男)	熟年 (成人)
木棺			径55	寛永文銭1	江戸時代中期	2	女 男	成人 成人
木棺			不明					
木棺			径50					

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1567	13.2m	3	1区2面東 PP	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径75
1568	13.3m	4	1区2面東 OP	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径75
1569	13.3m	3	1区2面東 OP・PP	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 65×70
1570	13.2m	4	1区2面東 PQ	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥		土葬	円形	径70
1571	13.3m	3	1区2面東 PP	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥		土葬	円形	不明
1573	13.0m	3	1区2面東 PP	2.5Y3/2黒褐色シルト礫混	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	残存 80×70
1574	12.8m	4	1区2面東 PP	5Y4/1灰色シルト礫混	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	残存 70×55
1576	13.3m	4	1区2面東 PQ	2.5Y3/2黒褐色シルト礫混	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 65×60
1577	13.4m	4	1区2面東 QP	10YR3/黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬 土器棺	方形	50×50
1578	13.3m	4	1区2面東 QP	2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径45
1579	13.2m	4	1区2面東 QP	2.5Y3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径65
1580	13.2m	4	1区2面東 QP	2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1581	13.3m	4	1区2面東 QP	2.5Y3/2黒褐色シルト礫混	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径45
1582	13.2m	3	1区2面東 QO・RO	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径65
1583	13.4m	3	1区2面東 QO・QP	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	残存 40×60
1584	13.3m	2	1区2面東 QP・RP	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	65×65
1585	13.3m	2	1区2面東 QP	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫混	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	70×70
1586	13.1m	3	1区2面東 QP	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	円形	径80
1587	13.3m	4	1区2面東 QP	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	方形	残存 60×65
1588	13.3m	4	1区2面東 QP	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 70×80
1589	13.3m	4	1区2面東 QP・RP	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径70
1590	13.3m	4	1区2面東 QP・QQ	10YR3/4暗褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径70
1591	13.3m	3	1区2面東 QP・QQ	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径65
1592	13.4m	4	1区2面東 QP	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径45
1593	13.3m	4	1区2面東 QP	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	65×65
1594	13.3m	3	1区2面東 QP	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
1595	13.4m	4	1区2面東 QP・QQ	10YR3/4暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	60×60

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	不明		径50		江戸時代中期～後期	1	不明	小児
木棺	不明		径50	古寛永通寶 6				
木棺			50×50	天蓋	江戸時代中期～後期			
木棺			不明	板塔婆				
不明			不明		江戸時代前期	1	不明	不明
木棺	C 2 b	底・側板スギ	45×45	箱棺側板墨書	江戸時代中期	1	女	壮年
木棺	B 2 a		50×50	寛永文銭 1・新寛永通寶 3、小柄、天蓋、トウモロコシ、棺側板墨書	江戸時代中期～後期	2 (1)	女 男 (女)	壮年 老年 (成人)
木棺	B 1 b		40×45		江戸時代中期～後期	1 (1)	男 (男)	老年 (熟年)
木棺			30×30		江戸時代中期～後期	1	不明	不明
木棺	B		径35	箱棺側板墨書	江戸時代後期			
木棺	不明		径50	古寛永通寶 3・新寛永通寶 3	江戸時代後期	3	男 3	壮年 成人 2
土器棺			残存径40	染付小椀、数珠、木製品	江戸時代中期～後期	1	女	成人
木棺	B		径30	古寛永通寶 1・新寛永通寶 5		1	不明	不明
木棺			径50		江戸時代中期	1 (1)	女 (不明)	成人 (不明)
木棺			不明					
木棺			不明	古寛永通寶 37				
木棺	(B 2 b)		45×45	古寛永通寶 4	江戸時代中期～後期	1	男	成人
木棺	不明		径50					
木棺			不明					
木棺	C 1 a		50×60		江戸時代後期			
木棺	不明		径50					
木棺	不明		径50		江戸時代中期	1	不明	不明
木棺			径50	古寛永通寶 3・寛永文銭 1・不明 1		1	女	成人
木棺	不明		径30	土人形土鈴(鳥)				
木棺			不明					
木棺	(B 1 b)		38×34	古寛永通寶 6、赤絵小椀	江戸時代中期	2	不明 女	4歳 成人
木棺			40×40					

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1596	13.4m	4	1区2面東 QQ	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 75×80
1597	13.1m	3	1区2面東 QQ	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1598	13.1m	3	1区2面東 QQ	10YR4/にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1599	13.4m	4	1区2面東 PQ	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径70
1600	13.3m	4	1区2面東 PQ	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径70
1601	13.6m	4	1区2面東 PQ	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	不明
1602	13.2m	4	1区2面東 OR・PR	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	80×90
1603	13.0m	2	1区2面東 PQ・PR	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径90
1604	13.6m	5	1区2面東 PR	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径40
1605	13.4m	5	1区2面東 PR	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	80×110
1606		4	1区2面東 PR	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径75
1607	13.4m	4	1区2面東 PR	10YR4/6褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径60
1608	13.5m	4	1区2面東 QR	10YR4/6褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	50×50
1609	13.4m	4	1区2面東 QR	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径75
1610	13.4m	4	1区2面東 QR	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1611	13.4m	4	1区2面東 QR	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1612		4	1区2面東 QR	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	不明
1613		4	1区2面東 QR	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥	土葬	方形	不明
1614	13.3m	3	1区2面東 QR	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径70
1616	13.3m	5	1区2面東 QR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 50×65
1619	13.5m	4	1区2面東 QR	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	不明
1620	13.2m	3	1区2面東 QR	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 60×65
1621	13.3m	3	1区2面東 RR	2.5Y5/2暗灰黄色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1622	13.5m	3	1区2面東 RR	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 70×40
1623	13.4m	3	1区2面東 RQ	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1624	13.4m	3	1区2面東 RQ	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
1625	13.4m	3	1区2面東 RQ・RR	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径65

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			残存 45×50			1	男	熟年
木棺	B 1 a		45×45	漆器椀		1	女	成人
木棺	B 2 b	底・側板スギ	55×55	数珠	江戸時代中期～ 後期	1 (1)	男 (不明)	壮年 (不明)
木棺	不明		径50					
木棺	不明		径50	古寛永通寶 6・新寛永通寶 4、漆器椀、煙管(雁首)	江戸時代前期～ 後期	1 (1)	男 (不明)	熟年 (不明)
木棺			不明			1	女	成人
木棺	B 2 b		45×45		江戸時代中期～ 後期	1 (1)	女 (不明)	熟年 (不明)
木棺			不明	水晶製巻物軸端		1	男	老年
木棺			径30					
木棺			径50	古寛永通寶 5・寛永文銭 1		1	男	成人
木棺	不明		径50			1	不明	不明
木棺			径50					
木棺			35×35			1	不明	不明
木棺			不明		江戸時代中期			
木棺			45×45		江戸時代後期	1	男	成人
木棺			50×50					
木棺			径30		江戸時代前期			
木棺			48×48					
木棺			径50		江戸時代後期	1	男	老年
木棺			45×45					
木棺			径50		江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	成人 (成人)
木棺	(B 2 b)		40×40		江戸時代中期～ 後期	1	女	熟年
木棺			45×42	伊万里壺、天蓋	江戸時代中期	1	女	壮年
木棺			残存 45×30					
木棺			40×48			1	不明	不明
木棺			残存 25×48			(1)	(女)	(老年)
木棺			不明		江戸時代前期			

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1626	13.3m	4	1区2面東 QQ			土葬	方形	75×70
1627	13.3m	4	1区2面東 QQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1628	13.3m	4	1区2面東 QQ・QR	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径65
1629	13.5m	4	1区2面東 QQ・QR	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1630	13.3m	4	1区2面東 QQ	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1631	13.3m	4	1区2面東 QQ・QR	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 50×65
1632	13.4m	3	1区2面東 QQ	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1633	13.1m	2	1区2面東 QQ	2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	95×80
1634	13.3m	3	1区2面東 PP・PQ	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 40×60
1635	13.4m	4	1区2面東 OO	2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	48×48
1636		4	1区2面東 PO	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	70×80
1642	13.2m	3	1区2面東 PQ	10YR4/4褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
1643	13.3m	4	1区2面東 RP・RQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	70×70
1644	13.2m	3	1区2面東 RQ			土葬	方形	残存 60×80
1645	13.1m	3	1区2面東 QQ	10YR4/2灰黄褐色砂泥礫混		土葬	方形	残存 70×100
1646	13.2m	4	1区2面東 QQ	2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1647	13.2m	3	1区2面東 QQ	10YR3/2暗褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1648	13.4m	4	1区2面東 QQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	不明
1651		3	1区2面東 QQ	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	円形	不明
1652	13.2m	3	1区2面東 QQ		10YR3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径60
1654	13.4m	4	1区2面東 PR	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	80×100
1655	13.3m	4	1区2面東 QP	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	円形	不明
1670	13.6m	4	1区2面西 QN	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		土葬	円形	径40
1671	13.3m	4	1区2面東 PP	10YR4/2灰黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1673	13.3m	3	1区2面東 OO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	不明
1674	13.3m	3	1区2面東 PO	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1675	13.2m	4	1区2面東 PO	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 2.5Y4/1灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
不明			不明					
木棺	(B 2 b)		45×45		江戸時代前期～中期			
木棺	D	底・側板・栓スギ、籬タケ	径42	古寛永通寶 1	江戸時代中期～後期	1	男	熟年
木棺			残存 36×50			1	男	成人
木棺			50×60			1	男	成人
木棺			35×40					
木棺			残存 15×50	土人形土鈴(猿面持ち人物)		1	不明	成人
木棺	B 2 b	底・側板スギ	45×45			1	女	壮年
木棺			不明					
木棺	A 1 a	底・側板・蓋・棧スギ	35×35	土人形(頭巾人物座像)・土鈴(金魚・鳥)・鳩笛、数珠、独楽、箱棺側板墨書	江戸時代中期～後期	1	不明	1歳
木棺	(B 2 b)		45×45	古寛永通寶 1・新寛永通寶 1	江戸時代中期～後期	1 (1)	女 (女)	壮年 (壮年)
木棺	B 2 b	底板モミ属、側板モミ属	45×45	数珠	江戸時代前期～中期	1	男	成人
木棺			不明					
木棺			48×48					
木棺			55×55					
木棺			45×45	白磁小杯	江戸時代前期～中期	1	男	熟年
木棺	C	底板ヒノキ属・モミ属	径48			1	男	成人
木棺			径45			1	不明	成人
不明			不明	漆器椀				
木棺	不明		径50					
木棺			径50					
土器棺			残存径35	信楽甕	江戸時代中期	1	不明	6歳
木棺			径28					
木棺	(B 1 a)		45×45	寛永文銭 1		1	女	思春期
木棺			径50	天蓋	江戸時代中期～後期	1 (1)	不明 (男)	成人 (熟年)
木棺			不明		江戸時代後期	1	不明	成人
木棺	(B 2 b)		45×45		江戸時代後期	1 (2)	男 (女) (不明)	成人 (成人) (成人)

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1676	13.1m	3	1区2面東 PO	5Y4/1灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	不明
1677	12.8m	1	1区2面東 PO	2.5Y4/1黄灰色シルト 5Y4/1灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	残存 70×80
1678		3	1区2面東 QO	10YR3/3暗褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	円形	径50
1682	13.1m	3	1区2面東 PP	2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	90×80
1683	13.2m	4	1区2面東 PP・PQ	10YR2/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
1684	13.0m	2	1区2面東 PO	2.5Y2/2黒褐色砂泥	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	不明
1685	13.2m	3	1区2面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
1782	13.1m	2	1区2面西 PM	2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	不明
1782 B	13.1m	2	1区2面西 PM	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	2.5Y5/1黄灰色シルト	土葬	方形	65×60
1833	13.1m	2	1区2面西 PN・QN	2.5Y3/1黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト 2.5Y2/1黒色シルト	土葬	方形	残存 60×65
1834	13.4m	3	1区2面東 QP	2.5Y4/2暗灰黄色シルト礫 混 2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	円形	径60
1835		3	1区2面西 QM	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
1886	13.2m	3	1区2面西 PM	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	円形	径70
1887	13.3m	3	1区2面西 QM	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	円形	径60
1888	13.0m	2	1区2面西 ON	5Y4/1灰色シルト	5Y5/1灰色シルト	土葬	円形	不明
1889	13.3m	3	1区2面西 PN	2.5Y3/1黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
1890	13.2m	3	1区2面西 PN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	90×65
1891	13.2m	3	1区2面西 OM	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/2黒褐色砂泥	土葬	円形	径65
1892	13.3m	2	1区2面西 ON	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
1914	13.3m	2	1区2面西 OM・PM	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	70×65
1933	13.5m	3	1区2面西 PM・QM	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		土葬	円形	径60
1934	13.3m	3	1区2面西 PM・QM	2.5Y4/2灰黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
1961	13.1m	1	1区2面西 QN	2.5Y3/4灰黄褐色砂泥		土葬	円形	径75
1994	13.4m	2	1区2面西 PN	2.5Y4/2灰黄褐色砂泥		土葬	円形	径60

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺	不明		45×45	古寛永通寶2・寛永文銭1、 数珠		1	男	熟年
木棺	A2b		45×45	天蓋		1	男	老年
不明			不明			1	不明	不明
木棺	B2b		45×45	漆器椀、供養札墨書、 煙管(雁首・吸口各2)		3 (3)	男女 不明 (男3)	老年 熟年 成人 (老年3)
木棺			48×40	古寛永通寶1	江戸時代中期～ 後期	2 (1)	男女 (男)	熟年 熟年 (壮年)
木棺			不明	天蓋		1	女	老年
木棺	不明		48×48		江戸時代後期	2 (1)	女 男 (男)	壮年 老年 (成人)
木棺			不明			1	男	熟年
木棺	C2a	底・側板スギ	50×50					
木棺	(B2a)		48×50	板塔婆	江戸時代中期～ 後期	3 (1)	男女 男 (男)	熟年 成人 成人 (成人)
木棺	不明		不明			(1)	(女)	(熟年)
木棺			不明					
木棺			径50					
木棺			径50					
木棺			径45			(1)	(男)	(老年)
木棺			50×50					
木棺			50×50					
木棺			径50					
木棺			残存 50×25					
木棺			50×50			1	不明	不明
木棺			不明	古寛永通寶6	江戸時代中期			
木棺			径50					
木棺			径50	古寛永通寶6	室町時代後期～ 桃山時代	1	男	成人
木棺			径50		江戸時代前期			

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
1995	13.2m	2	1区2面西 QN	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂泥		土葬	円形	径65
1996	13.3m	3	1区2面西 QN	2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂泥		土葬	円形	不明
1999	13.3m	4	1区2面東 QR	2.5Y3/2黒褐色シルト 礫混	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土葬	方形	75×85
2000	13.1m	2	1区2面東 QP	10YR3/1黒褐色砂泥		土葬	円形	径80
2016	13.1m	2	1区2面西 QN	10YR2/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
2017	13.2m	3	1区2面西 QN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
2018	13.1m	1	1区2面西 QN	10YR2/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径65
2019	12.9m	1	1区2面西 ON	2.5Y4/1黄灰色シルト 礫混	5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	不明
2045	13.2m	3	1区2面西 PN	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	円形	径65
2046	13.0m	3	1区2面西 PN	2.5Y3/1黒褐色シルト 炭混	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	80×65
2050	13.2m	1	1区2面西 ON	5Y4/1灰色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径48
2051	13.2m	3	1区2面西 PN	2.5Y4/1黄灰色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	80×55
2052	13.2m	2	1区2面西 PN	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 45×55
2054	13.2m	3	1区2面西 QN	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
2056	12.9m	1	1区2面西 PN	5Y3/1オリーブ黒色シルト	5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径60
2057	13.0m	2	1区2面西 PN	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
2068		3	1区2面東 PP	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥		土葬	円形	不明
2069	13.1m	3	1区2面東 PP	2.5Y3/1黒褐色シルト	5Y4/1灰色シルト	土葬	方形	70×60
2070	13.1m	2	1区2面東 PO	10YR2/3黒褐色砂泥		土葬	円形	径55
2073	13.2m	2	1区2面東 OO	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	円形	径60
2074	13.2m	3	1区2面東 OO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	不明
2075	13.2m	3	1区2面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	不明
2081	13.0m	2	1区2面東 QO	10YR2/2黒褐色砂泥	5Y3/1オリーブ黒色シルト	土葬	方形	90×110
2082	13.2m	3	1区2面東 PP	2.5Y4/2暗灰黄色シルト		土葬	方形	不明
2083	12.9m	3	1区2面東 PP	2.5Y4/1黄灰色シルト 2.5Y6/1黄灰色シルト	2.5Y5/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 70×70

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			径55			1	男	成人
木棺			径45					
木棺	B2a	底・側板スギ	45×45					
木棺			径50	数珠、位牌、舍利容器、巻物軸、漆塗り木片	江戸時代前期～中期	2	男不明	老年成人
木棺			残存 50×15		江戸時代前期～中期	1 (1)	女 (不明)	老年 (老年)
木棺			径40	天蓋		1	不明	小児
木棺			径50			1	男	壮年
木棺	不明		径50		江戸時代中期	1 (1)	男 (不明)	老年 (不明)
木棺			径50	古寛永通寶4・寛永文銭2				
木棺	B2a	底・側板スギ	40×42	古寛永通寶1・寛永文銭1 ・新寛永通寶4、漆器椀、 箱棺側板墨書		1	女	壮年
木棺			径34					
木棺	B2a		45×45			1	女	熟年
木棺			45×45		江戸時代後期	2	男男	老年成人
木棺	(B2b)		45×45		江戸時代中期～後期	1 (1)	男 (女)	壮年 (成人)
木棺	C		径50		江戸時代前期	1	女	成人
木棺			残存 44×25		江戸時代後期	1	男	思春期
木棺			径30		江戸時代中期			
木棺			48×45	古寛永通寶5・寛永文銭1 ・新寛永通寶1、漆器椀、 土人形(女性立像)、供養札	江戸時代中期	2 (3)	男女 (男) (女) (不明)	老年 壮年 (思春期) (老年) (2歳)
木棺			径45	古寛永通寶2・寛永文銭1 ・新寛永通寶3、漆器椀	江戸時代中期	1 (3)	女 (男) (女2)	熟年 (成人) (成人2)
木棺	C		径53					
木棺	不明		径48		江戸時代中期	1	男	老年
木棺			残存 35×48			1	男	熟年
木棺	不明		50×50	板状木製品(顔墨書)、箸				
木棺	B2b		45×50			1	男	成人
木棺			45×45	施釉陶器椀、板状木製品	江戸時代前期～中期	1 (1)	女 (女)	老人 (成人)

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
2091	13.2m	2	1区2面西 ON	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
2092	13.2m	2	1区2面東 PO	10YR3/1黒褐色砂泥	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	60×60
2093		2	1区2面東 QP	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	不明
2094	13.4m	3	1区2面東 RQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
2095	13.2m	3	1区2面東 PO	5Y4/2暗灰黄色シルト	2.5Y3/2黒褐色シルト	土葬	方形	残存 70×60
2096	13.2m	3	1区2面東 PP	2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 礫・炭混	2.5Y3/2黒褐色シルト 5Y4/1灰色シルト	土葬	円形	径65
2097	13.3m	3	1区2面西 PN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
2100	13.3m	4	1区2面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
2101	13.4m	2	1区2面東 PP	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	径75
2102	13.2m	3	1区2面東 PP・PQ	10YR2/2黒褐色砂泥		土葬	方形	80×70
2103	13.3m	2	1区2面東 QO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
2131	13.0m	2	1区2面東 PO	2.5Y3/2黒褐色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	円形	径65
2132	13.4m	4	1区2面東 PR	10YR3/1黒褐色砂泥		土葬	円形	径75
2138	13.3m	3	1区2面西 PN	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	径65
2139	13.1m	1	1区2面西 PN	10YR3/1黒褐色砂泥	2.5Y5/1黄灰色シルト	土葬	円形	径62
2153	12.9m	1	1区2面西 PN	10YR3/1黒褐色砂泥		土葬	方形	残存 50×60
2154 A	13.0m	3	1区2面西 PN	5Y3/1オリーブ黒色シルト	2.5Y4/1黄灰色シルト	土葬	方形	残存 70×60
2154 B	12.8m	3	1区2面西 PN	2.5Y4/1黄灰色シルト		土葬	円形	不明
2155	12.9m	3	1区2面西 PM	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	方形	80×80
2156	12.9m	2	1区2面西 PM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径70
2172	12.9m	1	1区2面東 QO	10YR2/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径55
2178	13.2m	2	1区2面東 PO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	不明
2179	12.9m	3	1区2面東 PO	10YR3/1黒褐色砂泥		土葬	方形	不明
2181	13.0m	2	1区2面東 QO	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	径65
2185	13.2m	2	1区2面西 PM	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径70
2186	13.2m	3	1区2面東 QQ	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	不明
2187	13.2m	3	1区2面東 QQ	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	円形	径85
2201	13.1m	2	1区2面東 PO	10YR2/2黒褐色砂泥		土葬	方形	70×60

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			残存 20×44			(1)	(女)	(老年)
木棺			50×50			1 (1)	男 (不明)	成人 (不明)
木棺			不明		江戸時代中期			
木棺			径50			1	不明	不明
木棺	B2a		45×45	板塔婆		1	女	成人
木棺	不明		径50	元祐通寶1・天聖元寶1・ 熙寧元寶2、明染付碗	江戸時代前期	1 (1)	不明 (不明)	不明 (不明)
木棺			径50					
木棺			不明			1	不明	不明
木棺			径50		江戸時代前期			
木棺			50×50					
木棺			50×40		江戸時代前期			
木棺			径50			1	不明	成人
木棺			径50					
木棺	(C)		径50			1	不明	成人
木棺			径50	天蓋		1	不明	成人
木棺			50×40		江戸時代前期～ 中期	1	不明	成人
木棺	B2b		45×45	箱棺側板墨書		1 (1)	女 (女)	熟年 (成人)
土器棺			径20	天蓋、板状木製品、円盤状 木製品		1	不明	胎児 6～7箇月
木棺	B2a	底板・側板・ 蓋スギ	45×45		江戸時代前期	1	男	熟年
木棺			径50	古寛永通寶5・寛永文銭1				
木棺	C	底・側板・蓋 スギ・ヒノキ 科・モミ属・ コウヤマキ	径40	箱棺側板墨書		1	不明	6歳
木棺			径50		江戸時代前期～ 中期	1	不明	成人
木棺			残存 25×45	板塔婆、板状木製品、天蓋、 箱棺側板墨書	江戸時代中期～ 後期	2	女 男	熟年 熟年
木棺	不明		径50		江戸時代前期～ 中期	1	女	老年
木棺			径48					
木棺			径50			1	不明	成人
木棺	D	底板モミ属	径50					
木棺			50×50			1	男	壮年

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
2202	13.2m	3	1区2面東 PO	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	65×65
2204	13.2m	2	1区2面東 OO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径60
2205	13.3m	2	1区2面東 QO	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	円形	径55
2206	13.1m	2	1区2面東 PP	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	円形	径70
2207	13.2m	2	1区2面東 OO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径65
2208	13.4m	2	1区2面東 RQ	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	方形	不明
2209	13.4m	3	1区2面東 PQ	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	不明
2210	13.1m	2	1区2面東 PO・PP	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径85
2211	13.1m	1	1区2面東 PO	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	円形	径65
2212	13.1m	3	1区2面東 QR	2.5Y2/1黒褐色砂泥		土葬	方形	65×90
2213	13.3m	2	1区2面東 QP	10YR3/3暗褐色砂泥		土葬	円形	径60
2216	12.9m	1	1区2面東 OO	2.5Y3/1黒褐色砂泥		土葬	円形	径60
2219	13.1m	3	1区2面東 QR			土葬	円形	径60
2222	13.3m	3	1区2面東 OO			土葬	円形	不明
2275	13.3m	2	1区2面東 OQ	10YR3/4暗褐色砂泥		土葬	円形	径70
75	13.4m	4	2区RS	10YR4/2灰黄褐色砂泥 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥		土葬	円形	径65
76	13.6m	5	2区RS	10YR4/2灰黄褐色砂泥 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥		土葬	円形	径75
77	13.1m	5	2区QS	2.5Y3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	70×65
80	13.5m	5	2区QS	10YR3/2黒褐色砂泥		土葬	方形	72×70
80B	13.2m	3	2区QS			土葬	円形	径70
85	13.5m	5	2区PS	2.5Y3/2黒褐色砂泥 炭混		土葬	方形	残存 90×85
87	13.6m	4	2区PS	10YR3/3暗褐色砂泥 10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	60×50
89	13.8m	6	2区 OS・PS	10YR3/3暗褐色砂泥 10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径35
146	13.9m	6	2区PR	7.5YR4/2灰褐色砂泥 礫混		土葬	不明	40×34
147	13.6m	5	2区PR	7.5YR5/4にぶい褐色砂泥		土葬	楕円形	径47
148	13.8m	6	2区PS	7.5YR4/1褐色砂泥 礫混		土葬	円形	径42

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			48×48					
木棺	(C)		径50		江戸時代前期～中期	1	男	熟年
木棺	B	底板モミ属、側板スギ・ヒノキ科・ヒノキ属	径35					
木棺			径50		江戸時代中期			
木棺	C		径50	古寛永通寶5・寛永文銭2・新寛永通寶4	江戸時代後期	1	男	成人
木棺			45×35					
木棺			径40		江戸時代前期	1	不明	成人
木棺			径50		江戸時代前期	1	不明	成人
木棺	B		径52	箱棺蓋墨書		1	男	壮年
木棺	B2b	底板モミ属側板モミ属	54×70	天蓋、箱棺側板墨書	江戸時代前期～中期	2	女男	熟年成人
木棺			不明	羽子板2				
木棺	B		径45	古寛永通寶3、鉄釘、天蓋	江戸時代前期	2	女不明	壮年成人
木棺	(C)		径48		江戸時代前期	1	男	成人
木棺			径35					
木棺			径48	元豊通寶3・皇宋通寶1・天禧通寶1・紹興元寶1、土師器皿2	江戸時代前期	1	不明	不明
木棺			径40					
木棺			不明		江戸時代前期			
木棺			45×48		江戸時代前期	2 (1)	男男 (不明)	壮年 熟年 (成人)
木棺			45×45		江戸時代中期～後期	1	女	熟年
木棺			径50			1	女	壮年
木棺			不明		江戸時代中期			
不明			不明					
不明			不明					
不明			不明					
不明			不明					
不明			不明		江戸時代中期			

No.	底部標高	時期	地区	掘形断面土層名	棺桶内埋土層名	埋葬方法	掘形形状	掘形規模
150	13.6m	5	2区 PR・PS	7.5YR4/3褐色砂泥 礫混		土葬	方形	残存 80×55
154	13.6m	5	2区PS	10YR5/6黄褐色砂泥 礫混		土葬	円形	径75
164	13.8m	5	2区QS	2.5YR4/2暗灰黄色砂泥礫混		直葬	楕円形	94×60
165	13.5m	5	2区QS	10YR4/3黄褐色砂泥 礫混		土葬	方形	径80
166	13.6m	5	2区QS	10YR4/2灰黄褐色砂泥礫混		土葬	円形	径85
173	13.4m	4	2区 OR・PR			土葬	方形	残存 80×48
199	13.5m	4	2区 RR・RS	2.5YR4/2暗灰黄色砂泥		土葬	方形	85×88
201	13.4m	3	2区RS	2.5YR4/3オリーブ褐色砂泥		土葬	円形	径70
202	13.6m	5	2区 RR・RS	2.5YR4/4オリーブ褐色砂泥		土葬	円形	径75
203	13.6m	4	2区RR	2.5YR3/3オリーブ褐色砂泥 炭混		土葬	円形	径80
204	13.4m	3	2区RS	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥		土葬	円形	径70
205	13.5m	4	2区 QR・QS	2.5YR4/3オリーブ褐色砂泥		土葬	円形	径90
206	13.5m	3	2区QR	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥		土葬	方形	100×80
208	13.8m	6	2区 QR・QS	2.5Y4/3暗オリーブ褐色砂泥		土葬	不明	76×75
209	13.5m	3	2区 QR	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径60
210	13.4m	4	2区QR	10YR4/4褐色砂泥		土葬	円形	径80
211	13.5m	4	2区QS	10YR4/4褐色砂泥		土葬	方形	60×60
212	13.7m	4	2区QS	2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥		土葬	不明	不明
213	13.4m	4	2区QS	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥		土葬	方形	不明
214	13.4m	4	2区PS	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥		土葬	方形	75×85
215	13.3m	3	2区PS	2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥		土葬	円形	径60
216	13.3m	5	2区 PR・PS	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥		土葬	円形	径66
219	13.4m	4	2区PS	10YR4/2灰黄褐色砂泥		土葬	円形	径65
220	13.5m	4	2区 PR・PS	5Y3/2オリーブ黒色砂泥		土葬	円形	不明
226	13.3m	4	2区QS	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥		土葬	円形	径55
236	13.6m	3	2区QS	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥		土葬	不明	不明
237	13.7m	5	2区QS	10YR4/4褐色砂泥 炭混 10YR6/8明黄褐色砂粒混		土葬	円形	径60
238	13.6m	4	2区QS	2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 10YR6/8明黄褐色砂粒・礫混		土葬	円形	径55
239	13.5m	4	2区PR	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥		土葬	不明	不明

棺種類	棺型式	棺桶材質	棺規模	副葬品・他	遺物の時期	個体数	性別	年齢
木棺			残存 60×40			1	不明	不明
不明			不明					
直葬			不明	古寛永通寶4・寛永文銭2	江戸時代前期～ 中期	1	不明	老年
不明			不明		江戸時代中期	1	女	成人
木棺			径46		江戸時代中期	1	男	成人
木棺			残存 55×26		江戸時代中期	1	女	成人
木棺			径40		江戸時代前期？			
木棺			径50	古寛永通寶6、土師器皿	江戸時代前期？	1	女	成人
木棺			径50	古寛永通寶4・寛永文銭2	江戸時代前期	1	不明	不明
不明			不明	土師器皿	江戸時代中期～ 後期	1	男	老年
木棺			径52		江戸時代前期	1	男	壮年
木棺			径50	新寛永通寶1・題目銭2	江戸時代前期			
木棺			48×48		江戸時代中期～ 後期	1	女	壮年
不明			不明		江戸時代後期	2	男 不明	成人 9歳
不明			不明		江戸時代中期～ 後期			
不明			不明		江戸時代中期	1	不明	壮年
木棺			45×50		江戸時代中期	1	女	老年
不明			不明					
木棺			48×48		江戸時代後期	1	女	壮年
木棺			50×50	土師器皿	江戸時代後期	1 (1)	男 (不明)	壮年 (成人)
木棺			径40	古寛永通寶6		1	不明	成人
木棺			径50	土師器皿	江戸時代後期	1	男	壮年
木棺			径50		江戸時代後期	1	不明	不明
木棺			径48		江戸時代後期	1	不明	不明
木棺			不明	新寛永通寶6	江戸時代前期	1	男	壮年
不明			不明		江戸時代前期			
木棺			径48	漆器椀	江戸時代中期	1	不明	不明
木棺			径48					
不明			不明	土師器皿2	江戸時代中期			

付表2 出土人骨一覧表

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
182	1	男	老年	外後頭隆起は下垂。長骨の骨幹が頑強。大腿骨頭が大きい。	頭蓋骨破片のラムダ縫合部で内板が癒合完了。下顎片の後方歯の一部に歯の生前喪失あり。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、四肢骨、肩甲骨などが主に遺存。各所に破損あり。骨質やや不良。	
183	2①	女	16	前頭結節が発達。	橈骨近位端が一部癒合。脛骨近位端未癒合。大腿骨頭未癒合。第三大臼歯歯根3/4形成。	頭蓋骨は半分以上、下顎骨、四肢骨、寛骨などが主に遺存。多くは破損。骨質は比較的良好。	
183	2②	男	成人	踵骨や側頭骨の錐体が大きい。脛骨骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、四肢骨、足根骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
184	3	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。下顎歯の一部が生前離脱。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、寛骨、足根骨などが主に遺存。骨質不良。	
185	199-1	女	壮年	側頭骨の乳様突起が小さい。上腕骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部が内板で一部癒合、外板で未癒合。咬耗はごく弱い。	上腕骨骨幹の一部、頭蓋骨破片。	
186	199-2	男	熟年	大腿骨頭が大きい。	下顎後方に歯槽部分の退縮がみられるが、前方は退縮無し。大腿骨骨頭窩に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨、下顎骨、長骨破片など。	
187	4	男	老年	大腿骨頭の大きさは中等度。寛骨の大坐骨切痕が鋭角。眉上隆起が発達。	肋骨胸骨端は老年段階。腸骨稜、椎骨、橈骨粗面、足趾骨の下面など、各所に棘形成が著明。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質良好。	
188	5①	男	成人	鎖骨が太く頑強。	骨のサイズは成人段階。	端部を欠いた右鎖骨1点と、後頭骨破片。	
188	5②	女	不明	大腿骨、上腕骨の骨幹が細い。	骨質不良にて観察不可。	頭蓋骨、四肢骨骨幹部、左右鎖骨、肋骨、足指骨の一部が遺存。多くは破片。骨質不良。	
190	199-3	不明	成人	性差を表す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	一部の破損した骨。	
190	199-3	—	3	—	歯冠形成段階と歯牙萌出段階、および骨幹長を想定。	頭蓋骨、下肢骨、肩甲骨、肋骨、足指骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
190・191 挿形	6	女	壮年	大腿骨頭、肩甲骨が小さく華奢。	関節面に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	頭蓋骨、四肢骨、肩甲骨、肋骨、椎骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
191	199-4	—	6	—	骨幹長を想定。	頭蓋骨破片、一部の長骨破片。	
193	199-5	—	0	—	歯冠形成段階。	一部の歯、下顎骨破片、長骨破片。	
195	7	男	熟年	外後頭隆起が発達。大腿骨頭が大きい。尺骨の骨幹が頑強。	頭蓋骨破片の冠状縫合複雑部が内板で癒合完了、外板は一部癒合。咬耗が象牙質に進行。	頭蓋、下顎、四肢骨など。全て破片。骨質不良。	
196	199-6	女	老年	側頭骨の乳突切痕が浅い。大腿骨と上腕骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片のラムダ縫合外下部が内板癒合完了、外板一部癒合。下顎骨破片の退縮著明。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨など、破損した一部の骨。	
196挿形	199-7	不明	不明	性差を表す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	一部の骨の破片など。	
197	199-8	—	9箇月	—	歯冠と歯根の形成段階。	一部の歯など。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
199	8①	男	成人	側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕が深い。大腿骨の骨幹が頑強。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨が遺存。全て破片。骨質不良。	
200	9	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨耳状面は熟年段階。下顎後方歯の一部に生前喪失あるが、歯槽退縮ほとんど無し。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質不良。	
200挿形	200-1①	男	老年	眉上隆起が著明。外後頭隆起は下垂。	頭蓋骨破片の冠状縫合部分が内板で癒合完了、外板で一部癒合。ラムダ縫合中央部で外板が一部癒合。	頭蓋骨、四肢骨が遺存。多くは破片。骨質不良。頭蓋骨は破片で半分以上遺存。	
200挿形	200-1②	不明	成人	骨質不良にて観察不可。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片。骨質やや不良。	
204	200-2	不明	不明	骨質不良にて観察不可。	骨質不良にて観察不可。	一部の骨の破片など。骨質不良。	
206	200-3	女	壮年	大腿骨頭が華奢。	上腕骨、桡骨、尺骨の関節面や椎骨に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	四肢骨など破損した少量の骨。	
207	10	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が小さい。	寛骨耳状面と肋骨の胸骨端は壮年段階。	頭蓋を除くほぼ全身骨格の大半が遺存。各所に破損あり。骨質良好。	148cm(横骨)
207挿形	200-4	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	側頭骨破片。	
209	11	男	老年	上腕骨遠位端幅が大きい。大腿骨頭が頑強。	下顎片の歯槽部分の退縮著明。	頭蓋骨、四肢骨など。全て破片。骨質不良。	
210	200-5	女	熟年	大腿骨と上腕骨の骨幹が細い。	下顎骨破片に歯の生前喪失あるが、歯槽の退縮無し。	頭蓋骨、上下肢骨などの破損した骨。	
210挿形	200-6	男	老年	外後頭隆起が下垂。	頭蓋骨破片のラムダ縫合中央部が内板で癒合完了。	頭蓋骨、四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
212B	12①	女	16	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。	第三大臼歯歯根1/2形成。鎖骨胸骨端未癒合。	ほぼ全身の各部の骨がそれぞれ一部ずつ遺存。骨質不良。	
212B	12②	女	成人	大腿骨、脛骨の骨端が小さい。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質不良。	
212B挿形	200-7	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	側頭骨破片など。	
214	13	男	熟年	脛骨の近位骨端が大きい。大腿骨頭、上腕骨頭が頑強。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板で癒合完了、外板で未癒合。寛骨耳状面は熟年段階。咬耗は象牙質に進行。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。骨質は比較的良好。	
215	14	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。全体的にサイズが大きい。	頭蓋骨破片の冠状縫合部分が内板で癒合完了、外板で一部癒合。咬耗が象牙質の一部に進行。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破損。骨質やや不良。	
217	200-9	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	一部の骨の破片など。	
218	200-10	—	3	—	歯牙萌出段階。	一部の歯、下顎骨破片など。	
219	200-11	男	成人	外後頭隆起が突出。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、大腿骨骨幹部などの破損した骨。	
220	200-12	—	乳児	—	頭蓋冠の骨壁が乳児程度。	頭蓋骨破片。	
221	201-1	女	老年	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕も浅い。外後頭隆起が弱い。	頭蓋骨破片の泉門部分が内板で癒合完了、外板もほぼ完了。	頭蓋骨など、破損した少量の骨。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
222	201-2	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	碎骨片。	
223	201-4	男	熟年	大腿骨頭、肩甲骨関節窩が大さい。	咬耗が象牙質の一部に進行。一部の関節面に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	下肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
223補形	201-5	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨破片など。	
224	201-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
226	201-7	不明	成人	骨質不良にて判定不可。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹の一部など。骨質不良。	
228	201-8	男	老年	大腿骨頭の大きさは中等度。外後頭隆起が著明。	下顎片の歯槽部分の退縮著明。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。全て破損。骨質不良。	
229	15	女	熟年	側頭骨の乳様突起が小さい。大腿骨頭が小さい。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板で癒合完了、外板で一部癒合。	頭蓋骨、下顎骨、椎骨、四肢骨、寛骨などが遺存。全て破損。骨質不良。	
231	16①	不明	成人	骨質不良にて観察不可。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破損。骨質不良。	
231	16②	不明	成人	骨質不良にて観察不可。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。骨質不良。	
231	16③	不明	成人	骨質不良にて観察不可。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。骨質不良。	
231補形	201-9	男	成人	上腕骨の遠位端幅が大さい。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨、大腿骨骨幹部など。	
232	201-10	女	老年	側頭骨の乳突切痕が浅い。外後頭隆起は弱い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部で内板が癒合完了、外板もほぼ完了。下顎骨破片の退縮著明。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に、四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
236	202-1	—	4	—	歯冠形成段階と歯牙萌出段階。	一部の歯、下顎骨破片など。	
237	202-2	—	1	—	歯牙の萌出段階。	一部の歯、下顎骨破片など。	
241	202-3	男	壮年	橈骨、尺骨の骨幹が頭強。	下顎歯は全て死後消失、歯槽骨の退縮無し。関節面に骨増殖が無く、全体に滑らか。	下顎骨、頭蓋骨、上肢骨の一部が遺存。全て破片。	
243	17①	男	壮年	肩甲骨関節窩が大さい。大腿骨の骨幹が太い。	咬耗はエナメル質に認められる。肩甲骨関節窩などの関節面に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	頭蓋骨、四肢骨、下顎骨など、全て破片。骨質は概ね不良。この他No.17①②の個体判別が困難な各部の骨が遺存。	
243	17②	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片。	
243補形	202-4	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	指骨破片。	
246	18	—	2	—	歯冠形成段階、および骨幹長を想定。	頭蓋骨は半分以上、下顎骨、四肢骨は一部が遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
246補形	202-5	男	成人	大腿骨頭が大さい。	骨のサイズは成人段階。	骨頭のみ	
248	202-6	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	
248補形	202-7	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	
249	202-8	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	小骨片。	
251	19	男	成人	側頭骨の乳様突起が頭強。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
252	20	男	壮年	上腕骨、鎖骨の骨幹はやや細いが、乳突切痕が深く、大体骨頭が頭強。	鎖骨胸骨端に癒合線残存。椎骨、大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖無し。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質やや不良。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
252挿形	21	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鈍角。	寛骨耳状面、恥骨結合面、肋骨の胸骨端は壮年段階。咬耗はエナメル質に認められる。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
253	202-10	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	大腿骨破片。	
255	202-11	男	成人	大腿骨頭、肩甲骨関節窩が大きい。	骨のサイズは成人段階。	破損した少量の骨。	
257	22①	男	熟年	側頭骨の乳突切痕が深い。外後頭隆起は下垂。大腿骨頭が大きい。鎖骨が頑強。	頭蓋骨破片のラムタタ縫合中央部が内板で一部癒合。椎骨、肩甲骨関節窩に軽度のリップキングが出現。咬耗は象牙質に進行。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質は比較的良好。	
257	22②	女	老年	大腿骨頭が小さい。	頭蓋骨破片のラムタタ縫合中央部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。肋骨の胸骨端は老年段階。咬耗は象牙質のほぼ全面に進行。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、下肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
257挿形	202-12	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した少量の骨。	
260	23	女	壮年	側頭骨の乳突切痕は深い。眉上隆起の発達はみられない。長骨の骨幹が細い。鎖骨が華奢。	第三大臼歯が萌出完了し、エナメル質に咬耗あり。頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部が内板、外板ともに未癒合。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
260挿形	203-1	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
261	203-2	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
261挿形	203-3	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
265	24	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕や側頭骨の乳突突起の大きさは中間。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はエナメル質に認められる。椎骨や大腿骨頭骨頭窩に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、四肢骨、椎骨、寛骨、足根骨の一部が遺存。多くは破損または破片。骨質不良。	
265	203-5①	女	熟年	大腿骨、脛骨の骨幹が細い。	長骨の一部に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	破損した大腿骨、脛骨骨幹部。	
265	203-5②	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
265挿形	25	男	17-18	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	大腿骨頭、寛骨の腸骨稜が未癒合。橈骨近位端は癒合完了。	頭蓋骨、下肢骨、寛骨の一部が遺存。多くは破損。骨質不良。	
266	26①	女	成人	距骨が華奢。大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨骨幹の一部、距骨。	
266	26②	男	成人	側頭骨の乳突突起が大きく、乳突切痕が深い。上腕骨や尺骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、四肢骨骨幹。すべて破片。	
266挿形	203-4	男	成人	脛骨の骨幹が頑強。	骨のサイズは成人段階。	下顎片、脛骨左右骨幹部など。	
274	27①	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。上腕骨の骨幹が細い。	咬耗は象牙質の一部に進行。四肢骨関節面、肩甲骨関節窩に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ残る。多くは破損または破片。骨質は比較的良好。	
274	27②	男	老年	側頭骨の乳突切痕が深い。外後頭隆起が著明。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板で癒合完了、外板では癒合完了。下顎の全歯が生前喪失し、歯槽部分の退縮著明。	下顎骨、上肢骨、下肢骨、肩甲骨の一部が遺存。多くは破損。骨質やや不良。	
274挿形	203-6	男	成人	上腕骨が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した上腕骨骨幹部。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
275	28	男	成人	大腿骨頭、脛骨近位端、鎖骨が頑強。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、四肢骨が主に遺存。多くは破片。骨質不良。	
275細形	29	男	熟年	側頭骨の乳様突起、大腿骨頭、大腿骨の遠位端幅がともに大きい。	寛骨や尺骨に、軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	頭蓋骨、四肢骨、寛骨、手指骨、足根骨、足指骨が主に遺存。各所に破損あり。骨質は比較的良好。	159cm (橈骨)
276	30	女	壮年	大腿骨頭が華奢。長骨の骨幹が全体に細い。	寛骨耳状面は壮年段階。第三大臼歯萌出完了で、咬耗はごく弱い。椎骨に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にはほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質不良。	
276細形	203-7	男	壮年	大腿骨頭が大きい。	脛骨や膝蓋骨破片に加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	破損した上下肢骨など。	
278	31①	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭、距骨が頑強。	頭蓋骨破片の矢状縫合部が内板で一部癒合、外板で未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質やや不良。	
278	31②	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	破損した大腿骨骨幹部。	
282	203-8	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
284	203-9	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	小骨片。	
288	32	男	壮年	大腿骨頭、四肢骨、鎖骨など、全体に頑強。	頭蓋の三種縫合は全て未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。椎骨、四肢骨関節面等に加齢性の骨増殖無し。	全身骨格のほぼ全体が、概ね完形で残る。頭蓋は後頭孔付近を欠く。骨質良好。	158cm (大腿骨)
289	203-10	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	破損した少量の骨。	
292	33	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	頭蓋骨破片の冠状縫合複雑部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。寛骨耳状面は熟年に相当。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。骨質やや不良。	156cm (橈骨)
293	34①	男	老年	上腕骨遠位端幅、大腿骨頭が大きい。脛骨の骨幹が太い。	下顎骨の齒槽部分の退縮著明。	頭蓋骨の雑体、下顎骨、上下肢骨、肩甲骨の一部が遺存。骨質は比較的良好。この他、No.34①②で個体判別困難な長骨、頭蓋骨、寛骨、椎骨など、全て破片。	
293	34②	女	熟年	前頭結節が発達。肩上升起はごく弱い。大腿骨と脛骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部で内板が癒合完了、外板が癒合無し。	頭蓋骨、下肢骨、肩甲骨の破片など。骨質不良。	
293細形	203-12	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	肋骨破片。	
294	35	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	鎖骨胸骨端未癒合。四肢骨骨端部は癒合完了。第三大臼歯のエナメル質に咬耗あり。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。骨質やや不良。	
295	36	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳様突起は大きく乳突切痕も深い。外後頭隆起は下垂。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はごく弱い。四肢骨関節面等に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にはほぼ全身骨格の大半が概ね完形で遺存。骨質良好。	161cm (大腿骨)
296	203-13	男	成人	上腕骨遠位端幅が大きい。尺骨近位端も頑強。	骨のサイズは成人段階。	上肢骨の骨幹部などが遺存。骨質は比較的良好。	
297	37	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕と脛骨下角が鋭角。大腿骨頭、距骨が頑強。	頭蓋骨の冠状、矢状縫合は、内板でほぼ癒合完了、外板で癒合開始。耳状面、恥骨結合面、肋骨端による年齢段階は熟年。	頭蓋が後頭孔付近を欠くのをはじめ、全身骨格のほぼ全体が概ね完形で遺存。一部は破損。骨質良好。	157cm (橈骨)

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
297 挿形	203-14	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
298	38	男	熟年	大腿骨頭、鎖骨片が太く頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。椎骨に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に全身骨の各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。多くは破損。骨質は比較的良好。	
298 挿形	203-15	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	各部位の骨片。	
299	39	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。眉上隆起が発達。外後頭隆起も著明。大腿骨頭が大きい。距骨が頑強。	頭蓋の冠状縫合と矢状縫合の外板が一部癒合。寛骨耳状面は熟年段階。肩甲骨関節窩の辺縁に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨は、大後頭孔付近を欠き、それ以外はほぼ完形。他にはほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
299 挿形	203-16①	女	成人	鎖骨が細く小さい。	骨のサイズは成人段階。	鎖骨。端部を破損。	
299 挿形	203-16②	男	老年	外後頭隆起が下垂。長骨は頑強。	頭蓋骨破片のラムダ縫合中央部内板が癒合完了。	頭蓋骨、尺骨骨幹部。すべて破損。	
300	40①	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。側頭骨の乳様突起が小さい。大腿骨の遠位骨端、大腿骨頭が著明。	頭蓋の矢状縫合が内板で癒合完了、外板で未癒合。寛骨耳状面は熟年段階。	全身骨格の大半が遺存。頭蓋は、顔面部を破損するがほぼ完形。他は概ね完形、一部に破損あり。骨質良好。	148cm(腓骨)
300	40②	男	熟年	上腕骨の骨幹が太く、鎖骨も頑強。	鎖骨胸骨端に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	上腕骨骨幹の一部など。端部を破損。骨質は概ね良好。	
300 挿形	203-17①	不明	老年	性差を示す部位の遺存無し。	下顎骨破片の退縮著明。	頭蓋骨、下顎骨などの破片。	
300 挿形	203-17②	—	6	—	骨幹長を想定。	破損した上腕骨骨幹部。	
301	204-1	男	熟年	外後頭隆起は下垂。大腿骨遠位端幅が大きい。大腿骨頭が頑強。	大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。下顎骨破片に退縮無し。	頭蓋骨、下顎骨、上下肢骨など。全て破片。骨質不良。	
302	41	女	成人	側頭骨の乳様突起、乳突切痕は、中間。外後頭隆起は弱い。恥骨下角(半棘)が鈍角に近い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、寛骨、四肢骨骨幹部などが主に遺存。多くは破損または破片。骨質不良。	
303	42	男	熟年	側頭骨の乳突切痕が深い。全体に大きい。	寛骨耳状面は熟年段階。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質は比較的良好だが、一部不良なものが含まれる。	
303 挿形	204-2	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹の一部など。	
304	43	女	壮年	側頭骨の乳様突起が小さい。鎖骨が著明。	咬耗はエナメル質に認められる。椎骨に加齢性の骨増殖は無く、関節面が滑らか。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質は比較的良好。頭蓋骨は破片で半分以上遺存。	
305	204-3	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨の骨幹が太い。	寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨、寛骨、上下肢骨など、全て破片。	
305 挿形	204-4①	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	骨のサイズは成人段階。	上肢骨と寛骨の破片。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
305細形	204-4 ②	女	成人	大腿骨頭が小さい。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨の破片。	
306	44①	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳様突起が大きさい。外後頭隆起の下垂が著明。大腿骨頭が頑強。	寛骨耳状面、恥骨結合面は熟年段階。咬耗は工ナマル質のほぼ全面にあり。	ほぼ全身各部の骨が残るが、一部に破損がみられる。骨質は概ね良好。	
306	44②	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	下顎骨破片。骨質不良。	
306細形	45①	不明	成人	大腿骨骨幹の太さが中間。他に性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。他に、No.45①②③の個体判別困難な各部の骨の破片が遺存。	
306細形	45②	不明	成人	大腿骨骨幹の太さが中間。他に性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
306細形	45③	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
307	46①	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳突切痕が著しく深い。	寛骨耳状面は熟年段階。	側頭骨、大腿骨、寛骨が遺存。一部が破損、あるいは破片。この他、No.46①②④の中で個体判別困難な、頭蓋骨破片、下顎骨などが遺存。	
307	46②	女	成人	上腕骨と橈骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨、橈骨、尺骨の骨幹片。	
307	46③	—	3	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
307	46④	不明	未成人	—	長骨骨幹サイズが成人に達していない。	上腕骨骨幹部。	
307細形	204-5	男	不明	外後頭隆起が発達。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨、大腿骨の破片。	
308	204-6	女	成人	外後頭隆起がやや発達。側頭骨の乳様突起は小さい。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨の破片など。	
309	47①	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭、距骨が華奢。	下顎第三大臼歯萌出中、歯根は完成。寛骨耳状面は壯年段階。	ほぼ全身各部の骨が残るが、全て破片。	
309	47②	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	後頭骨破片。	
309細形	204-7 ①	男	成人	脛骨の骨幹が太い。大腿骨の小転子の発達著明。	骨のサイズは成人段階。	下肢骨骨幹の一部。	
309細形	204-7 ②	女	老年	大腿骨の小転子が発達しているが、骨幹は細い。側頭骨の乳様突起が小さい。	頭蓋骨破片の冠状・矢状縫合部が内板で癒合完了、外板では癒合。	頭蓋骨破片、下肢骨骨幹の一部など。	
313	204-8	—	4	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
314	48	男	熟年	大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が頑強。	寛骨耳状面と恥骨結合面は熟年段階。大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖あり。椎骨にリッピング無し。上顎歯は全て生前喪失し、退縮するが、下顎後方破片は遺存歯あり、退縮無し。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。多くは破損または破片。骨質やや不良。	
314細形	204-9 ①	女	成人	眉上隆起の発達はみられない。橈骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、橈骨など。すべて破損。	
314細形	204-9 ②	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
315	49	女	壮年	側頭骨の乳様突起が小さい。眉上隆起の発達はみられない。	骨のサイズは成人段階。頭蓋骨破片の矢状縫合部が内板、外板ともに未癒合。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨などが主に遺存し多くは破損。	
315挿形	204-10	男	成人	大腿骨、上腕骨、脛骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した上下肢骨など。	
317	50	男	壮年	大腿骨頭が大きい。	頭蓋冠の矢状縫合部で内板が一部癒合、外板が未癒合。咬耗はエナメル質に認められる。四肢骨関節面に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋冠、下顎骨、四肢骨などが主に遺存し、多くは破片。骨質は概ね良好。	
318	51①	男	老年	側頭骨の乳様突起が頑強。眉上隆起が発達。長骨骨幹が太い。	下顎全歯が生前喪失、歯槽部分の退縮著明。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨骨幹の一部が遺存。全て破損。骨質不良。	
318	51②	男	成人	上腕骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨骨幹の一部など。	
319	52	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角。上腕骨遠位端、大腿骨頭が頑強。	頭蓋の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板で癒合開始。寛骨の耳状面と恥骨結合面は熟年段階。椎骨、四肢骨、胸骨等各所に加齢性の骨増殖が進行。上下顎の全歯が生前喪失しているが、退縮は軽度。	全身骨格のほぼ全体が残り、頭蓋は完形、下顎はほぼ完形。それ以外は一部に破損がみられる。骨質良好。	(161cm) (尺骨)
319挿形	205-1	男	成人	肩甲骨関節窩が大きい。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
319挿形	206-1	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
323	53①	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。	寛骨耳状面は熟年段階。大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨、四肢骨、寛骨の一部が遺存。多くは破片。骨質良好。この他、No53①②の個体判別困難な、頭蓋骨、椎体、指骨などの破片が遺存。	
323	53②	男	老年	側頭骨の乳様突起が大きい。大腿骨遠位端の幅が大きい。	下顎骨破片の退縮著明。寛骨の耳状面は加齢変化が進行している。長骨の加齢性の骨増殖が進行。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、寛骨が残り、多くは破片。骨質不良なものがある。	
324	54①	女?	16-17	大腿骨頭が華奢。踵骨が小さい。	腸骨と坐骨未癒合。左大腿骨頭未癒合、右は癒合し骨端線明瞭。大腿骨の大転子癒合。第三大臼歯萌出直前で、歯槽解放。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片や細かい骨片。骨質やや不良。	
324	54②	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	下顎体の破片。骨質不良。	
324挿形	205-2	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
325	55	女	熟年	側頭骨の乳様突起と乳突切痕は中間。上腕骨と大腿骨の骨幹や鎖骨は細い。	寛骨耳状面は熟年段階。咬耗は象牙質の一部に進行。	頭蓋骨は破片でほぼ全体が遺存。他に、ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
325挿形	205-3①	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
325挿形	205-3②	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
326	205-4	女	成人	脛骨の骨幹が華奢。	骨のサイズは成人段階。	脛骨骨幹の一部、下顎骨、趾根骨、頭蓋骨の破片。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
326榧形	56①	男	成人	外後頭隆起が発達。大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片。骨質不良。	
326榧形	56②	男	壮年	側頭骨の乳様突起が大きく、外後頭隆起も発達。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部分が内板、外板ともに未癒合。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
328	57	女	老年	寛骨の大坐骨切痕は中間。側頭骨の乳様突起が小さい。	上下顎片の退縮著明。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
328榧形	205-6	女	成人	脛骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	破損した脛骨。	
330	205-7	不明	成人	距骨サイズが中間。他に性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した頭蓋骨、足根骨、足趾骨など。	
331	58	男	老年	頭蓋の上項線が発達。大腿骨の骨幹は太い。	下顎全歯が生前喪失、歯槽部分の退縮著明。腰椎や大腿骨の粗線等の各部位に、加齢性の骨増殖が著明。	破損した大腿骨、上腕骨骨幹部。頭蓋、下顎、椎骨、寛骨、肋骨、足根骨、足趾骨はすべて破片。骨質良好。	
332	59①	男	壮年	側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕は深い。眉上隆起が発達。大腿骨頭が頑強。	頭蓋骨破片の冠状縫合泉門部が内板、外板ともに未癒合。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨、四肢骨、足根骨、足趾骨などが主に遺存。多くは破片。骨質不良。他に、No.59①②の個体判別困難な、各部の破片が遺存。	
332	59②	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕は浅い。大腿骨の骨幹が細い。	寛骨耳状面は壮年段階。	頭蓋骨、寛骨、上下肢骨骨幹部、足根骨など。すべて破損。骨質不良。	
337	205-9	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
342	60	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	頭蓋の三種縫合は、内板で癒合完了、外板で癒合開始。肋骨の胸骨端は老年段階。上下肢骨に加齢性の骨増殖が進行。椎骨、膝蓋骨では増殖著明。寛骨の耳状面は加齢変化が進行。	ほぼ全身骨格が残り、頭蓋骨と下顎骨は完形。それ以外はいくぶん分解消失。骨質良好。	161cm (上腕骨)
342榧形	205-12	女	壮年	大腿骨頭が華奢。大腿骨骨幹が細い。肩甲骨関節窩が小さい。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板、外板ともに未癒合。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖が無く、関節面が滑らか。	破損した少量の骨。	
347	205-14	—	4	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
348	205-15	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
349	205-16	—	新生児	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
351	61	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕は中間だが、大腿骨頭が華奢。全体に長骨の骨幹が細い。	寛骨の腸骨稜に癒合線が残る。寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はエナメル質に認められる。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。多くは破損または破片。骨質良好。	
351榧形	206-2	男	成人	脛骨骨幹が太く長い。	骨のサイズは成人段階。	下顎、脛骨骨幹などの破損した骨。	
356	206-4	—	1	—	歯冠形成段階と歯牙萌出段階、および大腿骨骨幹長。	一部の歯、下顎骨破片、大腿骨など。	
361	62	女	熟年	外後頭隆起がやや発達。側頭骨の乳様突起が小さい。四肢骨の骨幹は華奢。距骨、踵骨は小さい。	寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にはほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質やや不良。	146cm (尺骨)
361榧形	206-5	女	成人	脛骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋と指骨の破片。	
361榧形	206-6	女	成人	脛骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片、脛骨骨幹の一部。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
363	63	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕は中間。外後頭隆起が下垂。尺骨頭頭強。四肢骨幹は太い。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗は一部が象牙質に進行。椎体や尺骨近位端に骨増殖無し。	頭蓋、下顎、四肢骨、寛骨などの一部。全て破片。骨質不良。	
364	64	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。眉上隆起が発達。大腿骨頭が大きい。	頭蓋冠の冠状縫合部が内板で癒合完了、外板で未癒合。寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、四肢骨、椎骨、寛骨、足根骨、足指骨の一部、多くは破片。骨質不良。	
394	206-9	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片。	
395	206-10	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破片。	
396	65①	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角。大腿骨頭が大きい。	頭蓋の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板で一部癒合。寛骨耳状面は熟年段階。上下肢骨の関節面に、脛度の加齢性の骨増殖がみられる。下顎に一部、歯の生前喪失がみられる。	全身骨格の大半が遺存。頭蓋はほぼ完形で、大後頭孔付近を欠く。その他は各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
396	65②	男	壮年	大腿骨頭の大きさは中等度。鎖骨の長径が大きい。	大腿骨骨頭高等に加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	四肢骨骨幹部など。骨質不良。	
396挿形	206-11	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	側頭骨破片。	
398	66①	女	熟年	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕が浅い。外後頭隆起の発達はみられない。大腿骨の骨幹が細い。	頭蓋骨の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板で一部癒合。	頭蓋骨は顔面と大後頭孔付近を欠く。その他、四肢骨の一部が遺存。端部を破損している。骨質は比較的良好。	
398	66②	男	老年	大腿骨の骨幹が頭強。	長骨に加齢性の骨増殖が進行。	大腿骨骨幹部など。	
398挿形	206-12	—	0	—	歯根の形成段階、および骨幹長を想定。	一部の歯、長骨破片、腸骨破片など。	
400	67	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭、距骨が華奢。	寛骨耳状面は熟年段階。咬耗はエナメル質のほぼ全面にあり。上肢骨の関節面や寛骨耳状面の辺縁に、軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	全身骨格のほぼ全体が残り、各所に破損あり。骨質良好。	142cm(橈骨)
400挿形	206-13	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
403	68	女	老年	寛骨の大坐骨切痕は中間。大腿骨頭が小さい。長骨の骨幹は細い。	下顎片の退縮著明。尺骨の関節面や橈骨粗面、大腿骨骨頭高等に加齢性の骨増殖が著明。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨、肩甲骨、肋骨、寛骨、手指骨、足根骨が遺存。多くは破片。骨質良好。	
403挿形	206-14	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭、大腿骨骨幹が頭強。	寛骨耳状面は壮年段階。尺骨関節面、大腿骨頭窩に、加齢性の骨増殖無し。	上下肢骨、寛骨など。全て破片。	
404	69	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が頭強。側頭骨の乳様突起が大きい。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部が内板で癒合完了、外板が一部癒合。咬耗は象牙質に進行。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、四肢骨、寛骨、足根骨、足指骨などが主に遺存。多くは破損。骨質は比較的良好。	
404挿形	70①	女	壮年	大腿骨頭、距骨が華奢。	大腿骨骨頭高等に加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	寛骨と下肢骨が遺存。全て破損または破片。この他、No70①②③の個体判別困難な四肢骨、頭蓋骨、肩甲骨、肋骨の各破片が遺存。	
404挿形	70②	女	壮年	大腿骨の骨幹が細い。	寛骨に加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	寛骨と下肢骨。全て破損または破片。	
404挿形	70③	女	熟年	大腿骨の骨幹が細い。	寛骨耳状面は熟年段階。	寛骨と下肢骨。全て破損または破片。	
404挿形	70④	—	乳児	—	頭蓋冠の厚さが乳児程度。	頭蓋骨破片。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
407	206-16	—	2	—	歯冠形成段階、および骨幹長を想定。	一部の歯、長骨破片、頭蓋骨破片など。	
408	71	—	1	—	骨幹長を想定。	頭蓋骨、四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
408挿形	206-17	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	一部の骨の破片など。	
409	72①	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕も深い。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は熟年段階。咬耗は象牙質に進行。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖あり。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
409	72②	—	小児	—	長骨骨幹の遺存部位を他個体と比較。	一部の長骨破片など。	
410	73	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。側頭骨の乳様突起が小さく、眉上隆起の発達はみられない。大腿骨頭が華奢。	第一、第二仙椎間が癒合中。四肢骨の骨端は癒合完了し骨端線の遺存無し。椎骨などに加齢性の骨増殖無し。	全身骨格の大半が遺存。頭蓋はほぼ完形。下顎は一部破損。それ以外もほぼ完形で残る。骨質は概ね良好。	(143cm) (大腿骨)
411	74	女	壮年	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕は浅い。膝蓋骨、距骨が華奢。大腿骨や脛骨の骨幹が細い。	咬耗はエナメル質に認められる。長骨骨幹のサイズは成人段階。半壊する寛骨耳状面や椎体に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨、長骨などが主に遺存。多くは細かい破片。骨質不良。	
412	75	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨、脛骨の骨幹が細い。	大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	破損した四肢骨骨幹、寛骨、足根骨など。骨質不良。	
413	76	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。恥骨下角は中間。側頭骨の乳様突起が大きく乳突切痕も深い。外後頭隆起は下垂。眉上隆起が発達。大腿骨骨頭が大きい。四肢骨は全体に頑強。肩甲骨関節窩も大きい。	頭蓋骨の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板で一部癒合。寛骨耳状面、肋骨端は熟年段階。咬耗は一部が象牙質に進行。	全身骨格のほぼ全体が、概ね完形で残る。骨質良好。	155cm (大腿骨)
414	77	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕は鋭角。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は壮年段階。尺骨の関節面などに加齢性の骨増殖無し。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損または破片。骨質良好。	156cm (尺骨)
418	78	女	17	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。	大腿骨骨頭癒合完了。下顎第三大臼歯歯根2/3形成。上顎左第三大臼歯萌出中。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くが破片。骨質は概ね良好。	
419	207-1	男	老年	側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕も深い。外後頭隆起は下垂。	下顎骨破片の退縮著明。	頭蓋骨、下顎骨など。全て破片。	
421	79	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。外後頭隆起が発達。大腿骨頭が大きい。	頭蓋骨破片の縫合部は内板、外板ともに一部癒合。寛骨耳状面は熟年段階。関節面に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。全て破片。骨質は比較的良好。	
421A	205-11	男	壮年	橈骨の骨幹が頑強。	橈骨近位端関節面の破片などに、加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	破損した橈骨骨幹部など。	
423	207-2	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、上下肢骨などの破損した骨。	
426	207-3	—	新生児	—	歯冠形成段階。	一部の歯など。	
428A	80	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はエナメル質に認められる。	頭蓋骨以外のほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くが破片。骨質不良。	
428A挿形	207-4	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
428B	81	—	7-8	—	上下顎第一大臼歯のエナメル質に軽度の咬耗あり。骨幹長を想定。	一部の歯、少量の頭蓋骨破片、一部の四肢骨の破片など。骨質やや不良。	
429	82	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕および恥骨下角が鋭角。大腿骨頭、側頭骨の乳様突起が大きい。	頭蓋三種縫合の内板が一部癒合、外板は癒合無し。寛骨耳状面と恥骨結合面は壮年段階。	全身骨格の大半が遺存。頭蓋をはじめ概ね完形で残る。骨質は比較的良好。	152cm (大腿骨)
429補形	83①	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳様突起が大きい。外後頭隆起も発達。大腿骨頭が大きい。全体に頑強。	頭蓋の冠状、矢状縫合は、内板で癒合完了、外板で一部癒合。寛骨耳状面は熟年段階。四肢骨や椎骨には軽度の加齢性の骨増殖開始。上顎歯が生前喪失しているが、歯槽骨の退縮は進行していない。	頭蓋骨は完形。他に全身骨格の全体が遺存するが、多くが破損。骨質は比較的良好。	161cm (尺骨)
429補形	83②	男	成人	大腿骨、脛骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、下肢骨など。全て破損。骨質良好。	
429補形	83③	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
429補形	83④	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
430	84	女	老年	寛骨の大坐骨切痕、大腿骨頭の大きさは中間。側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕が浅い。四肢骨の骨幹、鎖骨が細い。	上下顎片の退縮著明。寛骨耳状面は加齢変化が進行している。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にはほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質やや不良。	
430補形	207-5①	男	壮年	尺骨近位端、大腿骨頭が大きい。下顎が頑強。	尺骨関節面、大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖無く、全体に着らぬ。	下顎骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質不良。他に、207-5①②で個体判別困難な、頭蓋骨、四肢骨の破片などが遺存。	
430補形	207-5②	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭、鎖骨が小さい。	寛骨耳状面は熟年段階。	大腿骨頭、鎖骨、寛骨など。	
431	85	男	熟年	側頭骨の乳様突起が大きい。大腿骨頭、膝蓋骨が大きい。長骨が太い。	頭蓋骨破片の冠状縫合泉門部が内板で癒合完了し、外板でも一部癒合。尺骨の関節面に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に椎骨、四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質不良。	
431補形	207-6	男	熟年	大腿骨頭が頑強。長骨骨幹が太い。	大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	破損した少量の骨。	
432	86	女	老年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕も浅い。	頭蓋の冠状、矢状縫合が内板、外板ともほぼ癒合完了。寛骨耳状面は熟年段階。椎骨に加齢性の骨増殖が著明。下顎前歯部破片に歯の生前喪失と歯槽退縮あり。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質不良。	
433	87	男	熟年	長骨長は、男性ならかなり短く、大腿骨頭の大きさは中間。寛骨の大坐骨切痕が鋭角。眉上隆起や側頭骨の乳様突起、外後頭隆起が著明。総合して男性と判断。	頭蓋の冠状、矢状縫合で、内板が癒合完了、外板が一部癒合。耳状面と肋骨端による年齢段階は熟年に相当。歯の生前喪失がみられる。椎体、長骨関節面に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	ほぼ全身骨格の大半が遺存。頭蓋は完形。それ以外は各所に破損あり。骨質は比較的良好。	
434	207-7	—	3	—	歯冠形成段階と歯牙萌出段階。	一部の歯、下顎骨破片など。	
438	88①	男	老年	上腕骨遠位端幅、大腿骨頭が大きい。側頭骨の乳様突起が頑強で乳突切痕が深い。四肢骨の骨幹が頑強。	頭蓋骨破片の冠状縫合泉門部と矢状縫合が内板で癒合完了、外板で一部癒合。ラムダ縫合中央部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。咬耗が上下顎第三大臼歯の象牙質に進行。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にはほぼ全身の各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質良好。	(162cm) (腓骨)

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
438	88②	女	熟年	外後頭隆起の発達が弱い。下顎体が華奢。	頭蓋骨破片の冠状縫合、矢状縫合部が内板で一部癒合、外板で未癒合。下顎骨破片の後方に歯の生前喪失があるが、歯槽閉鎖未完了で退縮無し。骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、下顎骨など。全て破片。骨質良好。	
438補形	207-8	不明	成人	骨質不良にて観察不可。		大腿骨骨幹部。骨質不良。	
440	89	男	壮年	大腿骨頭、上肢骨肘関節部、踵骨が頑強。	第一、第二仙椎間が癒合中。上肢骨や椎骨に加齢性の骨増殖が無く、関節面が滑らか。	四肢骨、肋骨、寛骨、椎骨、足根骨、足趾骨などの、破損した骨の一部。	
440補形	208-1	女	熟年	下顎骨が華奢。脛骨の骨幹は細い。	咬耗が象牙質に進行。下顎骨右半破片に退縮無し。	破損した少量の骨。	
441	90	男	熟年	眉上隆起が発達。大腿骨頭が頑強。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部が内板で癒合完了、外板で癒合無し。下顎後方歯の一部に軽度の歯槽退縮があるが、前方には歯が残り、歯槽の退縮無し。咬耗は象牙質に進行。大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、四肢骨、足根骨、足指骨などが主に遺存。多くは破片。破片または端部を破損。骨質は概ね良好。	
441補形	208-2	女	成人	尺骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	破損した尺骨骨幹部。	
442	208-3①	男	老年	大腿骨頭が大さい。尺骨の骨端が頑強。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板、外板とともに癒合完了。下顎骨の歯槽部分の退縮あり。	頭蓋骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
442	208-3②	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片、破損した脛骨骨幹部。	
442補形	208-4	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
443	208-5	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	手指骨など。	
444	91①	女	壮年	側頭骨の乳様突起が小さい。長骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部が内板で一部癒合、外板で未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨の一部が遺存。全て破損。骨質は比較的良好。	
444	91②	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	下顎体破片、上腕骨骨幹の一部など。	
444上	208-7	男	壮年	外後頭隆起が発達。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合泉門部が内板で癒合完了、外板で未癒合。	頭蓋骨が破片で半分以上遺存。	
444補形	208-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	大腿骨骨幹の一部、頭蓋骨破片。	
445	92①	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨の骨幹は頑強。	頭蓋骨破片の冠状縫合、矢状縫合部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。下顎骨破片の歯槽退縮著明。尺骨の関節面に加齢性の骨増殖が著明。	頭蓋骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
445	92②	男	老年	大腿骨の骨幹が太い。	長骨に加齢性の骨増殖が進行。	大腿骨骨幹部1対など。骨質やや不良。	
446	208-8	不明	老年	性差を示す部位の遺存無し。	下顎骨破片の前方歯付近に歯槽退縮著明。	大腿骨破片と下顎骨。	
448	208-9	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	一部の長骨破片など。	
450	93	男	老年	大腿骨頭が大さい。	頭蓋冠の冠状、矢状縫合部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。歯の一部に生前喪失がある。椎骨、上下肢骨に加齢性の骨増殖が著明。	頭蓋冠をはじめ全身骨格の大半が遺存。一部に破損がみられる。骨質は概ね良好。	157cm(橈骨)
453	208-10①	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が小さい。	寛骨耳状面は熟年段階。尺骨、足趾骨に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨、四肢骨、寛骨、手指骨、足根骨、足指骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	144cm(橈骨)

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
453	208-10 ②	—	1	—	歯牙萌出段階。	下顎体破片。	
454	94	女	思春期	寛骨の大坐骨切痕は中間的な角度を示す。眉上隆起無し。前頭結節発達。長骨が華着。	頭蓋の三種癒合が全て未癒合。下顎左右第三大臼歯は萌出完了しているが咬耗無し。一部の仙椎間が未癒合。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質良好。頭蓋骨は破片で半分以上遺存。	
454挿形	208-11	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
455	208-12 ①	男	熟年	外後頭隆起が下垂。上肢骨の骨幹が長い。	咬耗の一部が象牙質に進行。上下顎骨破片の退縮無し。上腕骨遠位関節面に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	頭蓋骨、下顎骨、上肢骨の一部が遺存。多くは破片または端部を破損。骨質良好。	
455	208-12 ②	—	6箇月	—	歯冠形成段階。	一部の歯など。	
456	208-13	女	老年	側頭骨の乳突切痕が小さく、外後頭隆起は見られない。大腿骨頭が小さい。	下顎片の歯槽部分の退縮が進行。寛骨臼辺縁で加齢性の骨増殖が著明。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、寛骨の一部が遺存。多くは破片。骨質良好。	
457	209-1	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨骨幹部など。全て破損。	
458	209-2	男	成人	大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	破損した四肢骨骨幹部など。	
461	209-4	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	各部位の骨片。	
467	209-5	—	小児	—	遊離歯のうち、上顎犬歯、上顎第一、第二小臼歯、上下顎第二大臼歯に咬耗が無く、下顎切歯と上下顎第一大臼歯に咬耗あり。	遊離歯と碎骨片。	
467挿形	209-6	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	碎骨片。	
467挿形	210-22	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
468	209-7	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	長骨骨幹部など。	
473下層	210-1	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
474	95	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨、四肢骨、寛骨、足根骨の一部が遺存。多くは破損。骨質良好。	
475	210-2	女	壮年	大腿骨頭が小さい。骨幹は細い。	咬耗はエナメル質に認められる。肩甲骨関節窩などに、加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	破損した頭蓋骨、四肢骨など。	
476	96	男	熟年	側頭骨の乳様突起が大きい。長骨骨幹が太い。	頭蓋骨破片の矢状癒合部が内板でほぼ癒合完了、外板で一部癒合。咬耗は象牙質に進行。坐骨結節に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。骨質不良。	
477	97	女	老年	側頭骨の乳突切痕は深い。乳様突起は小さく、外後頭隆起も弱い。	頭蓋骨破片のラムダ縫合部が内板で癒合完了し、外板もほぼ完了。矢状癒合部は内板が癒合完了。下顎骨前歯部の退縮著明。	頭蓋骨、上下肢骨の骨幹部が遺存。全て破損。骨質良好。	
477挿形	210-3 ①	男	成人	大腿骨頭が頑強。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部など。	
477挿形	210-3 ②	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
478	210-4	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	下顎骨破片など。	
480	210-7	—	6	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
480	210-8	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
480	210-10	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した脛骨骨幹部。	
481	99	男	老年	側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕が深い。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合泉門部で、内板が癒合完了、外板一部癒合。咬耗が象牙質のほぼ全面に進行。外後頭隆起に加齢性の骨増殖著明。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨破片などが遺存。	
481	209-3	男	熟年	大腿骨頭が大きい。	大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	四肢骨の破片。	
483	210-11	—	12	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
484	100	—	12	—	歯根形成段階、および骨幹長を想定。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。各所に破損あり。	
484	210-12	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	小骨片。	
490	101	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。側頭骨の乳突切痕がやや浅い。	第一、第二仙椎間が癒合中。長骨骨端は癒合完了、骨端線の遺存無し。咬耗はごく弱い。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
490	210-13	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	小骨片。	
495	210-14	—	5	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片。	
502	102	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部は内板でほぼ癒合完了、外板で未癒合。寛骨耳状面は熟年段階。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。多くは破片。骨質不良。	
502	210-15	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	下顎骨、四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
503	103	男	熟年	大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は熟年段階。関節面に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質不良。	
518	210-17	女	成人	大腿骨の骨幹は比較的細く、脛骨と上腕骨の骨幹は細い。	骨のサイズは成人段階。	上下肢骨骨幹部。	
541B	104	男	老年	側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕が深い。大腿骨骨幹など長骨が長い。	頭蓋骨の冠状縫合は内板が癒合完了、外板で一部癒合。矢状縫合は内板でほぼ癒合完了、外板の一部癒合。ラムダ縫合は一部で内板、外板の癒合完了。椎骨の加齢性の骨増殖が著明。	ほぼ全身骨格の大半が遺存。頭蓋は顔面と大後頭孔付近を欠く。それ以外は各所に破損あり。骨質やや不良。	
560	210-18	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部、長骨破片など。	
562	210-19	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
563	210-20	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
567	105①	男	成人	大腿骨頭が頭強。	骨のサイズは成人段階。	長骨。	
567	105②	女	熟年	前頭結節が発達。大腿骨や上腕骨の骨幹が細い。	頭蓋冠の前頭縫合泉門部の内板癒合完了。長骨の一部に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	頭蓋冠、寛骨、四肢骨骨幹部など。全て破損。	
567A	210-21	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長 (使用骨)
569	106	男	老年	大腿骨遠位端幅が大きい。膝蓋骨が頑強。鎖骨が長い。	頭蓋の矢状縫合、ラムダ縫合が内板で癒合完了、外板で一部癒合。咬耗は象牙質に進行。椎骨、膝蓋骨、肩甲骨関節窩など、加齢性の骨増殖が著明。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、四肢骨、鎖骨、肩甲骨、椎骨などが主に遺存。各所に破損あり。骨質は比較的良好。	
575	107	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。四肢骨の骨幹、鎖骨が頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。咬耗は象牙質の一部に進行。椎骨に加齢性の骨増殖あり。下顎片の一部に歯の生前喪失と歯槽部分の退縮あり。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
575挿形	210-23	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	一部の骨の破片など。	
581	210-24	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
585	108	女	老年	側頭骨の乳様突起が小さい。長骨骨幹が細い。	下顎片の退縮あり。頭蓋骨破片の冠状縫合側頭部で内板癒合完了。椎骨に加齢性の骨増殖あり。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。全て破片。四肢骨骨幹部以外の骨質は概ね良好。	
585挿形	210-25	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨骨幹破片。	
588	109①	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。	寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。四肢骨、寛骨、足根骨、足指骨などが主に遺存。多くは破損。骨質は概ね良好。	
588	109②	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部1対。骨質は概ね良好。	
588挿形	210-26①	男	壮年	側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕は深い。上肢骨も太く頑強。	咬耗はエナメル質に認められる。上下顎骨右半破片で歯の生前喪失、歯槽退縮ともに無し。側頭骨に加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	頭蓋骨、上肢骨、肩甲骨など。全て破損。	
588挿形	210-26②	女	成人	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕は浅い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、上腕骨破片。	
591	110	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角。大腿骨頭を はじめ、全体的に頑強。	頭蓋の三種縫合が内板で癒合完了、外板で一部癒合。耳状面、恥骨結合面、肋骨結合面による年齢段階は熟年を示す。咬耗は象牙質まで進行。	全身骨格のほぼ全体が、概ね完形で遺存。骨質良好。	160cm (大腿骨)
591挿形	211-2①	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	
591挿形	211-2②	男	成人	上腕骨、尺骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	上肢骨骨幹部などの破片。	
596	211-4	女	老年	大腿骨、脛骨の骨幹が華奢。	頭蓋骨片の矢状縫合部で、内板は癒合完了、外板もほぼ癒合完了。	破損した頭蓋骨、上下肢骨など。	
597	111	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	寛骨の腸骨稜癒合線が一部残存。長骨骨端は癒合済で癒合線の遺存無し。	頭蓋骨、上肢骨、下肢骨、寛骨などが主に遺存。多くは破損または破片。骨質良好。	
627	112	—	4	—	歯牙萌出段階、および長骨骨幹長。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質は概ね良好。	
627挿形	211-5	男	熟年	鎖骨が長く頑強。	頭蓋骨破片の矢状縫合部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。	破損した頭蓋骨、鎖骨など。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
724	113①	女	老年	寛骨の大坐骨切底が鈍角。外後頭隆起微弱。	寛骨の耳状面は加齢変化が進行している。	頭蓋、上腕骨、脛骨、寛骨、踵骨、すべて破損。骨質不良。このほか、No.113①②の個体判別困難な下顎体、頭蓋骨、椎骨、長骨など、全て破片。	
724	113②	男	成人	外後頭隆起が下垂。大腿骨の骨幹、膝蓋骨が頑強。	骨のサイズは成人段階。	骨頭骨、側頭骨錐体部、踵骨、大腿骨の一部など。全て破損。骨質不良。	
724	211-9①	男	熟年	寛骨の大坐骨切底が鋭角。大腿骨の骨幹が太い。	寛骨耳状面は熟年段階。	寛骨、大腿骨骨幹部。	
724	211-9②	不明	成人	骨質不良にて観察不可。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。骨質不良。	
751	211-11	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した下腕骨など。	
1029	114	男	壮年	大腿骨頭が比較的大きい。中足骨が大きい。全体に頑強。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はエナメル質のほぼ全面に認められる。	四肢骨、肩甲骨、椎骨、寛骨、足根骨、足指骨などが主に遺存。概ね完形、一部破損。骨質良好。	160cm(橈骨)
1030	212-2	—	1	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
1031	115	女	壮年	上肢骨の骨幹が細い。	咬耗はエナメル質に認められる。上肢骨関節面や椎骨に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、椎骨の一部が遺存。端部を破損している。骨質良好。	
1032	212-3	男	成人	大腿骨と上腕骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部数点。	
1033	212-4	男	成人	尺骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部数点。	
1041	116	男	熟年	寛骨の大坐骨切底が鋭角。大腿骨頭、大腿骨骨幹、尺骨近位端が頑強。	恥骨結合面は熟年段階。椎骨に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	四肢骨、肋骨、椎骨、寛骨など。全て破損。骨質は比較的良好。	
1042	117	女	壮年	側頭骨の乳様突起、乳突切痕は、中間。大腿骨頭は華奢。橈骨や尺骨の骨幹が細い。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はごく弱い。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨などほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質不良。	
1043	118	女	熟年	大腿骨頭の大きさは中等度。寛骨の大坐骨切痕が鈍角。脛骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の冠状縫合部は内板で一部癒合、外板で未癒合。寛骨耳状面は熟年段階。咬耗はエナメル質のほぼ全面にあり。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨などほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質不良。	
1044	119	男	熟年	膝蓋骨や橈骨、尺骨が大きく頑強。	咬耗は一部が象牙質に進行。長骨に加齢性の骨増殖が軽度あり。	四肢骨骨幹の一部。全て破損。骨質不良。	
1045	212-6	不明	未成人	—	第三大臼歯萌出中。頭蓋の骨壁が成人の厚さに達していない。	歯、頭蓋骨破片など。	
1046	120	女	成人	大腿骨頭と距骨が華奢。側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕も浅い。外後頭隆起は弱い。	咬耗はエナメル質にごく弱く認められるものと、象牙質のほぼ全面に認められるものがある。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、足根骨など。全て破片。骨質不良。	
1118	121	不明	未成人	—	長骨骨幹サイズが成人に達していない。	大腿骨破片と、不明長骨のかけらなど。多くは破片。表面剥離著明。	
1119	212-7	女	熟年	寛骨の大坐骨切底が鈍角。大腿骨頭が華奢。	寛骨耳状面は熟年段階。	四肢骨、寛骨など。全て破損。	
1120	212-8	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1122	212-9	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部数点。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1123	122	女	壮年	肩甲骨の大きさ、鎖骨の太さは中間。膝蓋骨が小さい。橈骨、尺骨の骨幹が短い。	咬耗はエナメル質のほぼ全面に認められる。椎骨、橈骨、尺骨の関節面や肩甲骨関節窩に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨を除くほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破損。骨質概ね良好。	
1125	123	男	成人	大腿骨の骨幹および腓骨の遠位端が大きい。	骨のサイズは成人段階。	下肢骨骨幹部。	
1129	212-11	女	成人	橈骨、尺骨、大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨骨幹部数点。	
1129掘形	212-12	女	成人	長骨の骨幹が細い。鎖骨が小さい。	骨のサイズは成人段階。	破損した上肢骨など。	
1130	213-1	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	破損した長骨骨幹部。	
1130掘形	213-2	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	橈骨骨幹部他、一部の骨の破片など。	
1131掘形	213-3	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	上肢骨骨幹の一部。骨質概ね良好。	
1132	213-4	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	破損した大腿骨、脛骨骨幹部。骨質不良。	
1135	213-5	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	骨のサイズは成人段階。	破損した少量の骨。	
1135掘形	213-6	女	成人	外後頭隆起がごく弱い。	骨のサイズは成人段階。	破損した少量の骨。	
1137	124	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面と恥骨結合面は熟年段階。咬耗は象牙質に進行。	ほぼ全身各部の骨の大半が遺存。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	159cm(橈骨)
1138	125	男	熟年	上腕骨遠位端が頑強。	椎骨の一部に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	四肢骨、肋骨、腰椎の一部が遺存。全てが破損。骨質は比較的良好。	
1138B	213-7	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	一部の骨の破片など。	
1139	126	男	壮年	大腿骨頭が大きい。上腕骨遠位端が頑強。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板、外板ともに未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。咬耗は一部が象牙質に進行。	頭蓋、下顎、四肢骨、寛骨、足根骨、足趾骨の一部が遺存。多くは破片。長骨以外、骨質は比較的良好。	
1140	213-8	—	乳児	—	長骨骨幹端部の大きさが乳児程度。	一部の長骨破片など。	
1141	127	男	壮年	側頭骨の乳様突起、大腿骨頭が大きい。肩甲骨や下顎が頑強。	下顎第三大臼歯萌出中。四肢骨骨端の癒合完了。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質不良。	
1143	213-10	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	四肢骨骨幹の一部など。全て破片。骨質良好。	
1144	128①	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭、大腿骨や脛骨の骨幹が頑強。	尺骨の関節面に加齢性の骨増殖が著明。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質は概ね不良。	
1144	128②	男	成人	大腿骨と脛骨の骨幹が頑強。	骨のサイズは成人段階。	破損した上下肢骨骨幹部など。	
1145	213-11	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が頑強。	大腿骨骨頭高、足趾骨に加齢性の骨増殖が進行。	破損した寛骨、上下肢骨骨幹部など。	
1147	129	男	熟年	眉上隆起、外後頭隆起が著明。側頭骨の乳様突起が大きい。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。長骨に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨、四肢骨骨幹部、足根骨、足趾骨などが主に遺存。全て破損。骨質不良。	
1148	214-1	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨骨幹部など。全て破損。	
1149	214-2①	女	成人	上腕骨の骨幹と鎖骨が細い。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨骨幹部、鎖骨破片。	
1149	214-2②	—	1	—	歯冠形成段階と歯牙萌出段階。	一部の歯、下顎骨破片。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1150	130	男	壮年	眉上隆起が発達。大腿骨頭が大きい。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板、外板ともに未癒合。咬耗は一部が象牙質に進行。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、椎骨、腸骨、足根骨、足指骨の一部が遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
1152	214-3	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	各部位の骨片。	
1153	214-4	—	1	—	歯冠形成段階、および骨幹長を想定。	一部の歯、長骨破片など。	
1153掘形	214-5	女	成人	脛骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨の一部の破片。	
1154	131	女	壮年	側頭骨の乳様突起は大きい。乳突切痕は浅い。外後頭隆起が弱い。大腿骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板で癒合完了、外板で未癒合。咬耗はエナメル質のほぼ全面に認められる。	頭蓋骨、上下肢骨。全て破片。骨質不良。	
1157	214-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1159	132①	男	熟年	上腕骨をはじめ、全体に頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨、上腕骨などが遺存。多くは破片。骨質やや不良。他に、①②の個体判別困難な破片大量。	
1159	132②	男	老年	外後頭隆起が発達。大腿骨頭が大きい。長骨の骨幹が頑強。	下顎骨の内板が退縮著明。	頭蓋骨、上腕骨、大腿骨、左右下顎骨などの一部が遺存。多くは破損。骨質やや不良。	
1159掘形	214-7	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨に加齢性の骨増殖が著明。	破損した寛骨、椎骨、大腿骨骨幹部など。	
1160	214-8	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1160掘形	214-9	不明	不明	寛骨の大坐骨切痕は中間。他に性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	破損した寛骨、脛骨など。	
1161	133	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。肩甲骨関節窩が大きい。	頭蓋三種縫合の内板がほぼ癒合完了、外板が癒合開始。咬耗は象牙質の一部に進行。	全身骨格のほぼ全体が、概ね完形で残る。頭蓋骨は後頭孔付近を欠く。骨質良好。	(154cm) (腓骨)
1162掘形	214-10	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨破片など数点。	
1163	134	男	壮年	側頭骨の乳様突起が大きく、外後頭隆起は下垂。大腿骨の骨幹や下顎骨が頑強。	頭蓋骨破片の内板、矢状縫合部が内板、外板ともに未癒合。咬耗は一部が象牙質に進行。椎骨に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎、四肢骨の各部の骨。全て破損。骨質不良。	
1164	214-11	男	老年	上腕骨の骨幹が頑強。	下顎骨破片の退縮著明。	上腕骨骨幹部、下顎骨。	
1165	135	女	熟年	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕も浅い。眉上隆起の発達はみられない。外後頭隆起の発達が弱い。全体に細い。肩甲骨関節窩は小さい。	頭蓋の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板の一部癒合。寛骨耳状面と恥骨結合面は熟年段階。咬耗は一部が象牙質に進行。胸骨に加齢性の骨増殖あり。	頭蓋完形。下顎ほぼ完形。全身骨格のほぼ全体が概ね完形、一部破損。骨質良好。	(148cm) (橈骨)
1168	136	女	成人	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕が浅い。大腿骨頭が小さい。脛骨、大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	全身の各部の骨を認めるが、多くが細かい破片。骨質不良。	
1168掘形	215-1	女	成人	大腿骨の骨幹が比較的細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
1168掘形	215-1	不明	未成年	—	長骨骨幹サイズが成人に達していない。	大腿骨骨幹部。	
1169	215-2	男	成人	大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	破損した頭蓋骨、寛骨、上下肢骨など。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1169掘形	215-3	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	
1170	137①	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角。側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕も深い。大腿骨頭が大きい。	頭蓋骨の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板は癒合中。恥骨結合面は熟年段階。寛骨の耳状面刃縁、大腿骨骨頭窩等にわずかに加齢性の骨増殖あり。咬耗は象牙質に進行。	頭蓋冠遺存。他に下顎骨、四肢骨、寛骨の大半が遺存。概ね完形、一部破損。骨質良好。	(159cm) (橈骨)
1170	137②	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。距骨が華着。	寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨、寛骨などが主に遺存。多くは破損または破片。骨質は比較的良好。	
1170掘形	215-4	女	壮年	上腕骨遠位端、肩甲骨が華着。	肋骨の胸骨端は壮年段階。椎骨に加齢性の骨増殖無し。	上肢骨、肩甲骨、椎骨の一部が遺存。各所に破損あり。骨質良好。	
1170B	215-5	女	成人	上腕骨の骨幹が比較的細い。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨骨幹部。	
1171	215-6	男	成人	橈尺の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	上肢骨骨幹部。	
1171掘形	215-7	男	壮年	鎖骨は一端を破損するが長い。	鎖骨胸骨端に加齢性の骨増殖が無く、関節面が滑らか。	鎖骨と頭蓋骨の破片。	
1172掘形	215-8	女	熟年	大腿骨の骨幹が細い。	咬耗は象牙質の一部に進行。歯の生前喪失があるが、下顎の退縮無し。	破損した上下肢骨、下顎骨など。	
1173	215-9	男	壮年	大腿骨頭が大きい。	大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	破損した下肢骨、寛骨など。	
1173掘形	215-10	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片。	
1174	138	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。眉上隆起を認める。大腿骨頭が頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。下顎骨破片の一部に歯の生前喪失があるが、歯槽退縮無し。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
1174掘形	215-11	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
1175	139	男	熟年	大腿骨頭が大きい。四肢骨の骨幹が太い。側頭骨の乳突切痕は深い。	頭蓋骨破片の冠状縫合部は内板で癒合完了、外板で一部癒合。咬耗が象牙質に進行。	頭蓋骨、四肢骨など。全て破損または破片。骨質不良。頭蓋骨は破片で半分以上遺存。	
1178	140	男	壮年	大腿骨頭が大きい。	咬耗はエナメル質に認められる。椎骨や大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。全て破損。骨質は概ね良好。	
1178掘形	215-12	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨破片など数点。	
1179	215-13	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	指骨破片。	
1180	141①	男	成人	大腿骨の骨幹部が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹の一部。他に、No141①②③で個体判別困難な各部位の破片が遺存。	
1180	141②	女	壮年	大腿骨頭が華着で、骨幹が細い。	寛骨耳状面は壮年段階。	大腿骨骨幹部。寛骨など。全て破損。骨質不良。	
1180	141③	不明	不明	性差を表す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	大腿骨骨幹の一部。	
1181	142	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕は中間。側頭骨の乳様突起、大腿骨頭が小さい。	頭蓋骨の冠状、矢状縫合の内板が癒合完了、外板は一部未癒合。ラムダ縫合は内板が一部癒合。寛骨耳状面は熟年段階。咬耗はエナメル質のはほぼ全面にあり。	頭蓋骨は顔面と大後頭孔付近を欠く。他に、寛骨、下肢骨など。全て破損。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
南北 七ヶシオン 1181 東隣	215-14	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨に加齢性の骨増殖が著明。	破損した上腕骨、大腿骨、寛骨など。	
1184	143	女	壮年	側頭骨の乳様突起が大きい、乳突切痕は浅い。寛骨の大坐骨切痕は鈍角。大腿骨の骨幹が細い。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はごく弱い。椎骨に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨、寛骨、上下肢骨幹部など。全て破損。骨質良好。	
1185	216-1	男	成人	橈骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した橈骨骨幹部。	
1185掘形	216-2	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。外後頭隆起の発達著明。	寛骨の腸骨稜、耳状面で加齢性の骨増殖著明。	橈骨完形1点および、一部の骨の破片など。	157cm (橈骨)
1186掘形	144	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。下顎の一部に歯の生前喪失がみられる。一部に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部づつ遺存。多くは破損または破片。骨質やや不良。	
1187	145①	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕も深い。	寛骨の耳状面は加齢変化が進行している。咬耗が象牙質に進行。	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部づつ遺存。多くは破損。骨質は概ね良好。	
1187	145②	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部数点	
1520	216-3	男	成人	膝蓋骨が頑強。	骨のサイズは成人段階。	膝蓋骨1点完形。他は骨片数点。	
1523	146	女	熟年	大腿骨頭が女性にしてはやや大きい。寛骨の大坐骨切痕は鈍角。側頭骨の乳様突起が小さい。脛骨の骨幹が細い。	寛骨耳状面は熟年段階。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にはほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部づつ遺存。骨質不良。	
1524	216-4	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。上腕骨遠位端幅、大腿骨頭が大きく、骨幹が太い。腓骨遠位端が大きくい。	寛骨耳状面、大腿骨骨頭窩に加齢性の骨増殖が進行。	破損した少量の骨。	
1526	216-5	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨破片。	
1527	216-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1530	147	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭、距骨が頑強。	寛骨耳状面と恥骨結合面は熟年段階。大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨は破片の一部。他に四肢骨、寛骨、椎骨、仙椎、手指骨、足根骨、足指骨の大半が遺存。概ね完形、一部破損。骨質良好。	158cm (橈骨)
1530掘形	216-7	男	成人	上腕骨遠位端が頑強。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨骨幹、脛骨骨幹、肩甲骨。全て破損。	
1531	216-8	男	成人	尺骨の骨幹が頑強。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨の一部が遺存。多くは破片または端部を破損。骨質は比較的良好。	
1532	148	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕は中間。恥骨下角が鈍角。大腿骨頭が小さい。	頭蓋三種縫合の内板が一部癒合、外板はほぼ癒合無し。寛骨耳状面と恥骨結合面は壮年段階。頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合泉門部が内板、外板ともに未癒合。咬耗はごく弱い。	全身骨格のほぼ全体が、概ね完形で残る。頭蓋骨は大後頭孔付近を欠く。骨質良好。	148cm (大腿骨)
1533	216-9	不明	壮年	性差を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨破片など。	頭蓋骨破片など。	
1534	216-10	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面は壮年段階。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖無し。	一部の骨の破片など。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1535	217-1	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨耳状面と恥骨結合面は壮年段階。	上肢骨、寛骨、足根骨、足趾骨などの破損した骨。	
1535挿形	217-2①	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
1535挿形	217-2②	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	大腿骨骨幹部。骨質不良。	
1537	149①	男	老年	側頭骨の乳様突起が大きい。外後頭隆起が著明。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部ともに内板の癒合が完了、外板は一部癒合。上顎歯槽部分の退縮著明。	頭蓋骨が破片で半分以上遺存。骨質は概ね良好。	
1537	149②	女	成人	側頭骨の乳様突起が小さい。外後頭隆起はごく弱い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
1538	217-3	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
1540	150	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。側頭骨の乳様突起が小さい。大腿骨頭が小さく、骨幹は細い。距骨が華奢。肩甲骨関節窩が小さい。	下顎左右第三大臼歯萌出中。第一、第二仙椎間が一部癒合。鎖骨胸骨端の骨端線が残る。頭蓋骨の冠状縫合、矢状縫合の内板は一部癒合、外板は癒合無し。	全身骨格の大半が遺存。概ね完形だが一部破損する。頭蓋は後頭骨が瓦解。骨質良好。	139cm(橈骨)
1540挿形	217-5	不明	不明	骨表面に付着物あり、観察不可。	骨表面に付着物あり、観察不可。	破損した大腿骨骨幹部。	
1541	151	男	壮年	大腿骨頭、距骨、踵骨、四肢骨骨幹が頑強。	第一、第二仙椎間が癒合途中。耳状面、恥骨結合面、肋骨端による年齢段階は壮年。咬耗はエナメル質に認められる。	頭蓋をはじめ、全身骨格のほぼ全体が概ね完形。	162cm(脛骨)
1541挿形	152①	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕は中間。出産痕が明瞭。大腿骨の骨幹が細い。	寛骨耳状面は壮年段階。	寛骨、下肢骨などが遺存。骨質は概ね良好。他に、152①②の個体判別困難な下肢骨などが遺存。	
1541挿形	152②	女	壮年	大腿骨頭が小さい。上腕骨の骨幹が細い。	大腿骨骨頭窩や橈骨関節面に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	上下肢骨などが遺存。端部を破損。骨質は概ね良好。	
1542	153	女	老年	側頭骨の乳突切痕が浅く、乳様突起は小さい。四肢骨は比較的細い。	上下顎の退縮著明。長骨に加齢性の骨増殖が進行。	頭蓋、寛骨、四肢骨骨幹を中心に遺存。全て破損。骨質概ね良好。	
1543	217-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1545	154	女	壮年	大腿骨頭、大腿骨や上腕骨の骨幹が華奢。	大腿骨の骨頭は癒合完了し、骨端線がのこる。腸骨稜一部未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。	頭蓋骨、四肢骨、足指骨、寛骨、足根骨など。多くは破損。骨質は比較的良好。	
1546	217-8	女	熟年	大腿骨の骨幹が細い。	長骨に軽度の加齢性の骨増殖あり。	破損した上下肢骨など。	
1547	217-9	女	老年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨の骨幹が細い。	寛骨の耳状面辺縁に棘生成あり。	下肢骨破片などの破損した骨。	
1552	155	女	老年	上腕骨遠位骨端が華奢。全体に細い。	上下顎の退縮著明。四肢骨関節面、寛骨、椎骨などに加齢性の骨増殖が著明。	全身骨格のほぼ全体が概ね完形。一部破損。頭蓋骨は完形。骨質良好。	140cm(大腿骨)
1552挿形	217-10	女	壮年	側頭骨の乳様突起が小さい。全体に細く、鎖骨が華奢。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板、外板ともに未癒合。咬耗はごく弱い。加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	頭蓋骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長 (使用骨)
1553	156	男	13-16	大腿骨骨幹と未癒合の骨頭部分の最大径が大きい。	骨端未癒合(大腿骨頭、上腕骨頭、腸骨と坐骨、椎骨の輪状骨端)。第三大臼歯未萌出。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質は比較的良好。	
1554	157	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳様突起が大きく、外後頭隆起は下垂。眉上隆起を認める。鎖骨は端部を欠くが長い。	頭蓋骨の矢状縫合内板は癒合完了、外板で一部みられる。上腕骨関節面に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	頭蓋完形。他にほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質は比較的良好。	159cm (橈骨)
1555	158	男	老年	大腿骨頭、四肢骨の骨幹が頑強。	頭蓋冠の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板でもほぼ癒合。歯が生前喪失し、下顎片の歯槽部分の退縮著明。椎骨、尺骨などに加齢性の骨増殖著明。	後頭骨を欠いた頭蓋冠。下顎骨、四肢骨、寛骨、足根骨、足指骨などが遺存。各所に破損あり。骨質良好。	(157cm) (尺骨)
1556掘形	217-11	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	
1557	159	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。	頭蓋冠の冠状、矢状縫合が内板、外板ともに未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はごく弱い。椎体や四肢骨に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨は顔面と大後頭孔付近を欠く。下顎骨、四肢骨、肋骨、椎骨、寛骨の一部が遺存。各所に破損あり。骨質は比較的良好。	
1558	160	女	壮年	大腿骨頭が小さい。	咬耗はエナメル質に認められる。大腿骨骨頭窩、椎骨に加齢性の骨増殖無し。	下顎骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質不良。	
1559	218-2	男	成人	大腿骨、上腕骨の骨幹が頑強。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片、大腿骨、上腕骨、腓骨の骨幹部など。	
1560	161	女	老年	寛骨の大坐骨切痕は鋭角だが取骨下角は鈍角。側頭骨の乳突切痕は深い。乳様突起は小さい。大腿骨頭の大きさは中間。長骨長は短く、距骨や中足骨は華奢。総合して女性と判断。	頭蓋の矢状縫合が内板、外板ともに癒合完了。上下顎の退縮進行。全身の各所に加齢性の骨増殖が著明。	全身骨格のほぼ全体が、完形で残る。骨質良好。	142cm (脛骨)
1560掘形	218-3	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨、腓骨骨幹部。	
1560(南)	218-4	女	老年	上腕骨が細く、骨頭も小さい。脛骨の骨幹が細い。	下顎骨破片の退縮著明。	上腕骨完形1点および、下顎、一部の骨の破片など。骨質良好。	144cm (上腕骨)
1561	218-5 ①	女	成人	鎖骨が華奢。	骨のサイズは成人段階。	端部を破損した鎖骨。	
1561	218-5 ②	男	成人	大腿骨、鎖骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	上下肢骨、鎖骨などの骨幹部。	
1561掘形	162①	女	思春期	前頭結節が発達。側頭骨の乳様突起は小さく、外後頭隆起や眉上隆起は弱い。鎖骨が華奢。	頭蓋骨の冠状縫合泉門部が内板、外板ともに未癒合。鎖骨胸骨端が未癒合。下顎第二大臼歯は死後消失しているが、歯槽ソケットの遺存状況から萌出完了、または完了に近い。第三大臼歯未萌出。	頭蓋冠が遺存。腰椎1点完形。その他、下顎、鎖骨の一部が遺存し、破損あり。骨質良好。	
1561掘形	162②	不明	熟年	性差を表す部位の遺存無し。	頭蓋冠の矢状縫合・ラムダ縫合が内板で癒合完了、外板で一部癒合。	頭蓋冠、鎖骨など。全て破損。骨質は比較的良好。	
1561掘形	162③	—	小児	—	頭蓋冠の厚さが思春期に達していない。	頭蓋骨破片。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1562	218-6	男	成人	大腿骨の骨幹が太く長い。肩甲骨関節窩が大きい。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨骨幹などの破損した骨。	
1562掘形	218-7	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	下顎骨右半。	
1563	218-8	女	熟年	大腿骨頭と距骨が小さい。大腿骨の骨幹が細い。	大腿骨骨頭高等に程度の加齢性の骨増殖がみられる。	破損した四肢骨骨幹など。	
1563掘形	218-9	男	成人	大腿骨の骨幹が太く長い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨、腓骨骨幹部。	
1564	218-10 ①	男	成人	上腕骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨骨幹部。	
1564	218-10 ②	女	成人	大腿骨と上腕骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨、大腿骨骨幹部。	
1567	219-1	—	12	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
1571	219-3	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	小骨片。	
1573	163	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。肩甲骨は華奢で関節窩が小さい。全体に細い。	寛骨耳状面と肋骨の胸骨端は壮年段階。咬耗はごく弱い。	四肢骨、肩甲骨、脛骨などが主に遺存。概ね完形、一部破損。骨質良好。	144cm (上腕骨)
1574上	164	女	壮年	側頭骨の乳突切痕と外後頭隆起は中間。前頭結節が発達。鎖骨が華奢。	頭蓋冠の冠状縫合が内板、外板ともに未癒合。矢状縫合は一部を除き、内板、外板ともに未癒合。	頭蓋冠遺存。他に、鎖骨、肋骨、椎骨、手指骨、足根骨、足指骨の一部が遺存。一部に破損がみられる。骨質は概ね良好。	
1574下	165	男	老年	大腿骨頭、大腿骨遠位端幅が大きい。	頭蓋の三種縫合は、内板で癒合完了、外板で癒合開始。上下歯が生前喪失し、歯槽部分の退縮あり。肋骨胸骨端は老年段階。関節面や寛骨など各所に加齢性の骨増殖が著明。	全身骨格のほぼ全体が、概ね完形で残る。骨質良好。	156cm (脛骨)
1574掘形	219-4	女	成人	肩甲骨関節窩が小さい。	骨のサイズは成人段階。	一部の骨の破片。	
1575	219-5	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	肋骨破片。	
1576	166	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が頑強。	恥骨結合面は加齢変化が進行している。坐骨結節、大腿骨粗線等の各部位に、加齢性の骨増殖著明。	四肢骨、寛骨、足根骨、足指骨などが主に遺存。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
1576掘形	219-6	男	熟年	眉上隆起を認める。下顎片が頑強。	頭蓋骨破片の冠状、矢状縫合部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。下顎骨破片の前方、後方歯に生前喪失あるが、退縮無し。	頭蓋骨、下顎骨の破損した一部。	
1577	219-7	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1579	219-8 ①	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面と恥骨結合面は壮年段階。	寛骨、大腿骨骨幹部。全て破損。	
1579	219-8 ②	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	骨のサイズは成人段階。	寛骨、足根骨、足趾骨。多くは破損。	
1579	219-8 ③	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	骨のサイズは成人段階。	寛骨破片。	
1580	219-9	女	成人	距骨が小さい。	骨のサイズは成人段階。	一部の骨の破片など。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1581	219-10	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1582	219-11	女	成人	側頭骨の乳様突起が小さい。大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。咬耗は象牙質の一部または全面に達している。下顎骨破片の退縮無し。	頭蓋骨、上下顎骨、長骨など、全て破片。	
1582掘形	219-12	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	破損した長骨骨幹部。	
1585	219-13	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	破損した四肢骨、足根骨など。	
1590	220-1	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
1591	220-2	女	成人	大腿骨頭が華奢。	骨のサイズは成人段階。	一部の骨の破片など。	
1594	220-3 ①	—	4	—	歯根形成段階、および骨幹長を想定。	一部の歯、長骨破片、腸骨破片。	
1594	220-3 ②	女	成人	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。	骨のサイズは成人段階。	下顎骨、上肢骨、寛骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
1596	220-4	男	熟年	大腿骨頭が大きい。	大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	大腿骨などの破損した骨。	
1597	220-5	女	成人	大腿骨と上腕骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質良好。	
1598	167	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕は中間。大腿骨頭、上肢骨が頑強。	上肢骨に加齢性の骨増殖無く、全体に滑らか。	下顎骨、四肢骨、寛骨、足根骨、足指骨の一部が遺存。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	161cm(橈骨)
1598掘形	220-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	後頭骨の破片。骨質不良。	
1600	168	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。側頭骨の乳様突起が大きい。乳突切痕も深い。	頭蓋骨の冠状、矢状縫合が内板で癒合完了、外板で未癒合。上顎前歯および下顎後方歯に歯の生前喪失があるが、歯槽部分は閉鎖未完了、退縮ほとんど無し。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨などが主に遺存。多くは破片または破片または破片。骨質良好。	
1600掘形	220-7	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1601	220-8	女	成人	大腿骨と尺骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨、上腕骨骨幹部など。	
1602	169	女	熟年	大腿骨頭が小さい。	寛骨耳状面は熟年段階。頭蓋骨破片の矢状縫合部が内板で癒合済。咬耗は一部が象牙質に進行。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他にほぼ全身各部分の骨が残るが、いくぶん分解消失。多くは破片または破片。骨質は比較的良好。	
1602掘形	220-9	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
1603	170	男	老年	眉上隆起が大きい。側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕も深い。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板、外板ともにほぼ癒合完了。下顎骨破片の歯槽部分の退縮著明。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に下顎骨、下肢骨、足趾骨の一部。全て破損。骨質良好。	
1605	221-1	男	成人	上腕骨遠位端幅、大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、上下肢骨、寛骨などの破片。	
1606	221-2	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	小骨片。	
1608	221-3	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	碎骨片。	
1610	221-4	男	成人	大腿骨頭が頑強。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨骨幹部など。全て破損。	
1614	221-5	男	老年	大腿骨の骨幹が太い。	大腿骨に加齢性の骨増殖が進行。	破損した大腿骨、腓骨など。	
1619	221-6	男	成人	寛骨の大坐骨切痕は中間。踵骨が大きい。橈骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した上肢骨、寛骨、足根骨、足趾骨など。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1619	171	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	長骨破片。	
1620	171	女	熟年	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕が浅い。	頭蓋骨破片の環状縫合部分が内板で癒合完了、外板で一部癒合。歯は死後消失しているが、上顎片の歯槽退縮無し。	頭蓋骨、下顎骨、上下肢骨。全て破損。骨質良好。	
1621	172	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が小さい。全体に細く華奢。	頭蓋骨破片の冠状縫合部で内板が一部癒合、外板が未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。	頭蓋骨、四肢骨、寛骨、足根骨、足指骨など、全て破片。骨質は比較的良好。	
1624	173	女	老年	側頭骨の乳突切痕は深い、乳様突起が小さい。外後頭隆起は弱い。	頭蓋骨破片の冠状・矢状縫合の内板、外板ともにほぼ癒合完了。上顎骨破片の退縮著明。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に、四肢骨の一部が遺存し多くは破損。骨質は概ね良好。	
1628	98	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が大きい。	寛骨耳状面と恥骨結合面は熟年段階。	四肢骨、寛骨、足根骨、足指骨などが主に遺存。各所に破損あり。骨質やや不良。	
1629	221-10	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
1630	222-1	男	成人	大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
1632	222-2	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した上腕骨骨幹部。	
1633	174	女	壮年	大腿骨頭が華奢。距骨が華奢。長骨の骨幹は全体に細い。	寛骨耳状面は壮年段階。咬耗はエナメル質のほぼ全面に認められる。	頭蓋骨、下顎、四肢骨、肩甲骨、肋骨、椎骨、寛骨など。多くは破損。骨質は比較的良好。	
1635	222-3	—	1	—	歯芽萌出段階、および骨幹長を想定。	頭蓋骨は顔面と大後頭孔付近を欠く。下顎骨、四肢骨、肋骨、腸骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
1636	222-4	女	壮年	踵骨が小さい。中足骨が華奢。	第一、第二仙椎間が癒合中。仙椎の耳状面は壮年段階に相当。	仙椎、足根骨、足趾骨などが遺存。各所に破損あり。骨質良好。	
1636	222-5	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。上腕骨遠位端の幅が比較的小さい。	寛骨耳状面は壮年段階。関節面等に増殖無く、全体に滑らか。	破損した頭蓋骨、四肢骨、寛骨など。	
1642	175	男	成人	四肢骨骨幹は比較的細いが、側頭骨の乳様突起や大腿骨頭が大きい。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、肩甲骨、足指骨の一部が遺存。多くは破損。骨質は比較的良好。	
1646	176	男	熟年	大腿骨、上腕骨、尺骨の骨幹が太い。	頭蓋骨破片の冠状縫合泉門部は、内板で癒合完了、外板で未癒合。下顎破片は後方歯に生前喪失あるが、歯槽閉鎖は完了していない。	頭蓋骨、上下肢骨、上下肢骨、足根骨の一部が遺存。全て破損。骨質は比較的良好。	
1647	222-6	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	下肢骨、足根骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は比較的良好。	
1648	222-7	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	上肢骨破片。	
1655	222-8	—	6	—	歯牙萌出段階。	一部の歯、下顎骨破片など。	
1671	177	女	18	寛骨の恥骨下角と大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭、踵骨が華奢。	坐骨結節が一部癒合し骨端線明瞭。	頭蓋と下顎以外のほぼ全身が遺存。寛骨、肩甲骨、椎骨、肋骨の一部が概ね完形で残る。他の部位は一部に破損あり。骨質良好。	
1673	223-1	不明	成人	上腕骨骨幹の太さが中間。他に性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1673掘形	223-2	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。	大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。下顎骨破片の退縮無し。	破損した下顎骨、寛骨、上下肢骨など。	
1674	223-3	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	足指骨数点。	
1675	223-4	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が頑強。	骨のサイズは成人段階。	橈骨完形1点および、一部の骨の破片など。	158cm(橈骨)
1675掘形①	223-5	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
1675掘形②	223-5	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	下肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質良好。	
1676	178	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。眉上隆起が発達。	頭蓋骨破片の冠状縫合部は内板で癒合完了、外板で一部癒合。寛骨耳状面と恥骨結合同面は熟年段階。咬耗はエナメル質のほぼ全面にあり。	ほぼ全身骨格の大半が遺存。多くは破損。骨質良好。	155cm(尺骨)
1677	179	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が大きい。眉上隆起を認める。	頭蓋の冠状、矢状縫合は、内板が癒合完了、外板が一部癒合。咬耗が象牙質に進行。椎骨、上下肢骨関節面に加齢性の骨増殖が進行。寛骨の腸骨稜、坐骨結節、足趾骨に骨痲形成あり。	頭蓋骨は破片でほぼ全体が遺存。他に、下顎骨、四肢骨、肋骨、寛骨、足根骨、足指骨の大半が遺存し概ね完形、一部破損。骨質は概ね良好。	158cm(上腕骨)
1678	223-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
1682	180①	男	老年	上腕骨遠位端の幅が大きい。下肢骨の骨幹が頑強。	下顎骨の齶槽部分の退縮著明。上腕骨、橈骨、脛骨に加齢性の骨増殖が著明。	四肢骨、手指骨の一部などが遺存。概ね完形、一部破損。骨質良好。	165cm(橈骨)
1682	180②	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鈍角。上腕骨遠位端の幅が小さい。側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕も浅い。	頭蓋の矢状縫合三角部、冠状縫合右複雑部が内板、外板ともに一部癒合。椎体や四肢骨の関節面に軽度の加齢性の骨増殖あり。	頭蓋骨は顔面と大後頭孔付近を欠く。他に四肢骨、椎骨、寛骨、手指骨、足指骨の大半が遺存。概ね完形、一部破損。骨質良好。	145cm(橈骨)
1682	180③	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨骨幹の一部が遺存。骨質良好。	
1682掘形	181①	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が頑強。	寛骨耳状面、恥骨結合同面、大腿骨の粗線、尺骨関節面等に加齢性の骨増殖が著明。	四肢骨、寛骨のほぼ全体が遺存。一部に破損がみられる。骨質良好。	
1682掘形	181②	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨耳状面、恥骨結合同面、尺骨関節面や坐骨に加齢性の骨増殖が著明。	上肢骨、下肢骨、寛骨の一部が遺存。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
1682掘形	181③	男	老年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨臼辺縁に加齢性の骨増殖が著明。	上肢骨、下肢骨、寛骨の一部が遺存。多くは破損。骨質は概ね良好。	
1683	223-7①	男	熟年	下顎骨体が頑強。	下顎骨のほぼ全てに生前喪失あるが、退縮はほとんど無し。	ほぼ完形の下顎骨。	
1683	223-7②	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨の骨幹が細い。	下顎前方歯、後方歯の一部に生前喪失あるが、退縮はわずか。	下顎骨、寛骨、大腿骨骨幹部。全て破損。	
1683掘形	223-8	男	壮年	橈骨の骨幹が太い。	長骨に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	長骨骨幹部。	
1684	182	女	老年	眉上隆起の発達はみられず、外後頭隆起も弱い。長骨の骨幹が細い。	頭蓋の三種縫合が内板、外板ともにほぼ閉鎖。	頭蓋冠、四肢骨、肋骨、寛骨、足指骨の一部が遺存。一部に破損がみられる。骨質良好。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
1685	224-1 ①	男	老年	側頭骨の乳様突起が大きく乳突切痕も深い。	下顎骨破片の退縮著明。	橈骨完形1点および、大腿骨幹部、下顎骨などの一部の骨の破片など。	(159cm) (橈骨)
1685	224-1 ②	女	壮年	大腿骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の冠状縫合が内板、外板ともに未癒合。	頭蓋骨、上腕骨などの破損した骨。	
1685掘形	224-2	男	成人	側頭骨の乳様突起が大きく、乳突切痕は深い。上腕骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。		
1782	224-4	男	熟年	距骨が頑強。上肢骨、踵骨、中足骨が大きい。	橈骨と尺骨関節面に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	上肢骨、足根骨、足指骨など。全て破損。	
1833	184①	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭、距骨、踵骨が頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。大腿骨骨頭窩等に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。	橈骨、尺骨、距骨、胫骨が完形で遺存。他の四肢骨や寛骨は端部を破損。骨質良好。他に、No184①②③の個別判別困難な各部の骨が遺存。全て破損。	159cm (橈骨)
1833	184②	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
1833	184③	男	成人	尺骨の近位端が頑強。	骨のサイズは成人段階。	一端を欠いた尺骨。骨質良好。	
1834掘形	224-5	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した少量の骨。	
1834掘形	224-6	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。	寛骨の耳状面は熟年段階。	破損した上下肢骨、寛骨など。	
1888掘形	224-7	男	老年	橈骨の骨幹が長い。	長骨に加齢性の骨増殖著明。	破損した上下肢骨、足趾骨など。	
1914	224-8	不明	不明	性差を表す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	大腿骨破片。	
1961	224-9	男	成人	寛骨の大坐骨切痕は鋭角。橈骨と尺骨の骨幹が長い。	骨のサイズは成人段階。	破損した上肢骨、寛骨など。	
1995	224-10	男	成人	大腿骨と脛骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した下肢骨など。	
2000	185①	男	老年	尺骨の近位端が頑強。	長骨、尺骨関節面に加齢性の骨増殖著明。	頭蓋骨、四肢骨、鎖骨、肋骨、寛骨、椎骨など、全て破損または破片。手指骨の一部は完形。骨質は概ね良好。	
2000	185②	不明	成人	骨質不良にて観察不可。	骨のサイズは成人段階。	四肢骨骨幹部。骨質不良。	
2016	225-1	女	老年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨と脛骨の骨幹が細い。	寛骨耳状面等に加齢性の骨増殖著明。	頭蓋骨、四肢骨、寛骨、足指骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
2016掘形	225-2	不明	老年	性差を示す部位の遺存無し。	下顎歯が全て生前喪失し、歯槽退縮著明。	一部を欠いた下顎骨、破損した脛骨骨幹部。	
2017	225-3	—	11-12	—	骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
2018	225-4	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨耳状面は壮年段階。加齢性の骨増殖無し。	橈骨完形1点および、一部の骨の破片など。	158cm (橈骨)
2019	186	男	老年	寛骨の大坐骨切痕は中間。想定される恥骨下角(右半遺存)は鋭角。大腿骨頭が大きい。	腰椎や大腿骨の骨頭窩等の各部位に、加齢性の骨増殖著明。寛骨の耳状面は加齢変化が進行している。	頭蓋骨、四肢骨、仙椎、寛骨、足根骨、足指骨の一部が遺存。端部を破損している。骨質は概ね良好。	
2019掘形	225-5	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	破損した長骨骨幹部。	
2046	187	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕は中間。尺骨が華奢。	寛骨耳状面と恥骨結合面は壮年段階。	四肢骨、肋骨、椎骨、寛骨、手指骨、足根骨、足指骨の一部。一部完形、他は各所に破損あり。	(144cm) (尺骨)

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
2051	225-7	女	熟年	距骨が華奢。腓骨の骨幹が短い。	一部の骨に加齢性の骨増殖がみられる。	足根骨、足趾骨の多くが完形で遺存。他に椎骨破片、腓骨など。	
2052	188①	男	老年	側頭骨の乳様突起が発達。外後頭隆起も著明。大腿骨の骨幹が太い。	冠状、矢状縫合の内板が癒合完了。外板は一部癒合。ラムダ縫合の内板で癒合完了。	頭蓋骨は顔面と大後頭孔付近を欠く。四肢骨の一部が遺存。各所に破損あり。骨質良好。	
2052	188②	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
2054	189	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。上腕骨遠位端幅が大きい。	咬耗はごく弱い。尺骨関節面や大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	下顎骨、四肢骨、寛骨の一部が遺存するが、全破片。骨質不良。	
2054掘形	225-8	女	成人	脛骨と上腕骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	長骨骨幹部。	
2056	225-9	女	成人	上腕骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	下顎骨、上腕骨、橈骨などの破損した骨。	
2057	190	男	14-16	大腿骨骨幹と未癒合の骨頭部分の最大径が大きい。	骨端未癒合(大腿骨頭、転子、肩甲骨関節窩、烏口突起、上腕骨頭、腸骨と坐骨および恥骨、椎骨の輪状骨端等)	ほぼ全身の各部の骨が、それぞれ一部ずつ遺存。各所に破損あり。骨質やや不良。	
2069	191①	男	老年	寛骨の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角。	助骨の胸骨端は老年段階。胸椎、恥骨結合面、尺骨等に加齢性の骨増殖が著明。	上肢骨、下肢骨、肩甲骨、椎骨、寛骨の一部が遺存。概ね完形、一部破損。	155cm(尺骨)
2069	191②	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。	寛骨耳状面と恥骨結合面は壮年段階。椎骨に加齢性の骨増殖無し。	四肢骨、椎骨、寛骨、足根骨、足指骨の大半が遺存。概ね完形、一部破損。骨質良好。	145cm(脛骨)
2069掘形	192①	男	思春期	側頭骨の乳突切痕が深い。側頭線が明瞭。外後頭隆起が下垂。眉上隆起が発達。	頭蓋三種縫合がすべて未癒合。大腿骨骨幹の長さは成人男性に近いが、細く華奢。	頭蓋骨遺存。下肢骨は端部を破損して残る。骨質良好。	
2069掘形	192②	—	2	—	大腿骨骨幹の遺存部位から、骨幹長を想定。	一部の長骨破片など。	
2069掘形	192③	女	老年	橈骨の骨幹が細い。	橈骨関節面、粗面に加齢性の骨増殖著明。	端部を破損した長骨。	
2070	225-10	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕は若干鋭角だが、大腿骨頭が非常に華奢。距骨や中足骨が小さい。	寛骨耳状面と助骨の胸骨端は熟年段階。大腿骨骨頭高と尺骨関節面に軽度の骨増殖あり。	破損した肋骨、肋骨、助骨、足根骨、足趾骨など。	
2070掘形	226-1①	男	成人	大腿骨の骨幹が長い。小転子が発達。	骨のサイズは成人段階。	下肢骨骨幹の一部。他に、No226-1①②③の個体判別困難な各部の骨が遺存。全て破損。	
2070掘形	226-1②	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	下肢骨骨幹の一部。	
2070掘形	226-1③	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	下肢骨骨幹の一部。	
2074	226-2	男	老年	大腿骨頭が頑強。	下顎破片の退縮あり。大腿骨の粗線や橈骨、尺骨関節面と粗面、足趾骨などに加齢性の骨増殖が著明。	橈骨はほぼ完形1点および長骨破片など。	(156cm)(橈骨)
2075	193	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。大腿骨頭が頑強。	寛骨耳状面は熟年段階。	四肢骨、仙椎、寛骨、足根骨、足指骨などが主に遺存。一部に破損がみられる。骨質良好。	158cm(橈骨)
2082	226-3	男	成人	橈骨、尺骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	上肢骨骨幹部。	
2083	226-4	女	老年	外後頭隆起はやや発達。上腕骨の骨幹が細い。鎖骨や橈骨が短く細い。	頭蓋骨破片のラムダ縫合部で、内板、外板ともに癒合完了。椎骨や肋骨端に加齢性の骨増殖著明。	橈骨完形1点および、一部の骨の破片など。	145cm(橈骨)

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
2083掘形	226-5	女	成人	寛骨臼の径が小さい。脛骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	寛骨、脛骨の一部が遺存。骨質は比較的良好。	
2091掘形	226-6	女	老年	大腿骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部が内板、外板ともにほぼ癒合完了。	破損した少量の骨。	
2092	226-7	男	成人	上腕骨、橈骨、尺骨の骨幹が頭強。	骨のサイズは成人段階。	上肢骨骨幹部。	
2092掘形	226-8	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	指骨破片。	
2094	227-1	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨破片。	
2095	227-2	女	成人	鎖骨、上腕骨が華奢。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	
2096	227-3	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
2096掘形	227-4	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
2100	227-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
2131	227-8	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	一部の骨の破片など。	
2138	227-9	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	各部位の骨片。	
2139	227-10	不明	成人	大腿骨骨幹の太さが中間。他に性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
2153	227-11	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	足指骨など数点。	
2154A	183	女	熟年	側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕は浅い。長骨の骨幹が細い。眉上隆起や外後頭隆起の発達はみられない。	頭蓋骨冠状、矢状縫合の内板で一部癒合、外板で未癒合。寛骨耳状面、恥骨結合面、肋骨の胸骨端は熟年段階。咬耗は象牙質の一部に進行。骨のサイズは成人段階。	ほぼ全身各部の骨が残るが、一部に破損がみられる。頭蓋は、顔面と大後頭孔付近を欠く。骨質良好。	145cm(橈骨)
2154A掘形	227-3	女	成人	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が小さい。	骨のサイズは成人段階。	破損した上下肢骨、寛骨など。	
2154B垂の中	227-12	—	胎齢6-7箇月	—	長骨骨幹長。	全身骨格の大半が遺存。概ね完形、一部破損。骨質は概ね良好。	
2155	194	男	熟年	大腿骨頭の大きさは中等度。寛骨の大坐骨切痕が鈍角。	寛骨耳状面は熟年段階。頭蓋破片各所の縫合部分の内板で癒合完了、外板で未癒合。	頭蓋骨、寛骨、四肢骨骨幹部、足根骨、足趾骨。全て破損。骨質良好。	
2172	195	—	6	—	歯牙萌出と歯根形成段階、および骨幹長を想定。	頭蓋冠が残る。それ以外にはほぼ全身骨格の大半が遺存。多くは破損。骨質は概ね良好。	
2178	227-13	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	下顎咬破片など。	
2179	196①	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕も浅い。	頭蓋骨の矢状縫合が外板で癒合開始。寛骨耳状面は熟年段階。咬耗はエナメル質のほぼ全面にあり。	頭蓋骨はほぼ完形。下顎骨、上肢骨、鎖骨、肋骨、寛骨、足根骨の一部が遺存。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
2179	196②	男	熟年	眉上隆起が発達。橈骨、尺骨の近位端が頭強。	橈骨と尺骨の近位端間に軽度の加齢性の骨増殖が認められる。頭蓋骨破片の冠状縫合外板で一部癒合。	頭蓋骨、上肢骨の一部などが遺存。多くは破片。骨質やや不良。	
2181	197	女	老年	前頭結節がやや発達。大腿骨頭は比較的小さく、骨幹が細い。	頭蓋冠の冠状、矢状縫合部が内板で癒合完了。外板で一部癒合。尺骨と大腿骨骨頭窩に加齢性の骨増殖が進行。	頭蓋骨は冠の後方左半を欠く。四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質良好。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
2186	227-15	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した大腿骨骨幹部。	
2201	227-16	男	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。中足骨が大きい。	寛骨耳状面は壮年段階。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	破損した寛骨、下肢骨など。	
2204	228-1	男	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	寛骨耳状面は熟年段階。尺骨関節面に軽度の加齢性の骨増殖あり。	四肢骨骨幹、寛骨などの破損した骨。	
2207	228-3	男	成人	橈骨、尺骨の骨幹が太く長い。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部数点。	
2209	228-4	不明	成人	上腕骨骨幹の太さが中間。他に性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	上腕骨骨幹部。	
2210	228-5	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部。	
2211	228-6	男	壮年	距骨、踵骨が大きい。	橈骨、尺骨に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	上肢骨、肩甲骨、肋骨、手指骨、足根骨、足趾骨の一部が遺存。長骨は概ね完形。骨質良好。	
2212	228-7 ①	女	熟年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。上下肢骨の骨幹が細い。	下顎破片の前、後方に歯の生前喪失あるが、歯槽閉鎖は未完了で退縮無し。長骨に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	寛骨、四肢骨骨幹の一部など。	
2212	228-7 ②	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹の一部。	
2216	198①	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。	第一、第二仙椎間が癒合中。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖無し。	四肢骨、肋骨、寛骨、仙椎、足根骨、足指骨などが主に遺存。一部に破損がみられる。骨質良好。	(145cm) (脛骨)
2216	198②	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	橈骨骨幹部。	
2219	228-8	男	成人	寛骨の大坐骨切痕が鋭角。	骨のサイズは成人段階。	上下肢骨、寛骨などの破損した骨。	
2275	228-9	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	一部の骨の破片など。	
77	236①	男	壮年	眉上隆起はやや弱い、側頭骨の乳様突起が発達し、乳突切痕が深い。大腿骨頭が大きい。	咬耗はごく弱い。大腿骨骨頭窩、寛骨などに加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	頭蓋骨は半分以上遺存。他にほぼ全身の各部の骨がそれぞれ一部ずつ遺存し、多くは破損。骨質は概ね良好。	
77	236②	男	熟年	大腿骨の骨幹が太い。	一部に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	大腿骨骨幹部など。骨質は比較的良好。	
77掘形	250-2	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	大腿骨骨幹部。	
80	237	女	熟年	大腿骨の骨幹が細い。	一部に軽度の加齢性の骨増殖がみられる。	頭蓋骨、下肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
80B	250-3	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。大腿骨頭が華奢。	寛骨や大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	破損した寛骨、四肢骨骨幹部など。	
87	251-9	—	4	—	歯冠と歯根の形成段階。	一部の歯。	
150	250-8	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
164	238	不明	老年	性差を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨破片の冠状縫合部が内板、外板ともに癒台完了。大腿骨骨頭窩等に加齢性の骨増殖が進行。	頭蓋骨、大腿骨など。全て破片。骨質不良。	

遺構番号	No.	性別	死亡年齢	性別判定の指標	年齢段階推定の指標	遺存状態	推定身長(使用骨)
165	250-10	女	成人	前頭結節が発達。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨、四肢骨などの破片。	
166	239	男	成人	大腿骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	長骨破片少量。	
173	250-11	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	骨のサイズは成人段階。	長骨破片少量。	
201	240	女	成人	大腿骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板で癒合完了、外板で一部癒合。	頭蓋骨などを中心に一部が遺存。細かい骨片。骨質は概ね良好。	
202	251-1	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	骨片。	
203	241	男	老年	側頭骨の乳突切痕が深い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板、外板ともに癒合完了。	頭蓋骨の細かい破片。	
204	242	男	壮年	尺骨近位端が頭強。	咬耗はエナメル質に認められる。長骨の関節面に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	頭蓋骨、四肢骨、足根骨、足指骨の一部が遺存。全て破片。骨質不良。	
206	251-3	女	壮年	大腿骨頭が華奢。	大腿骨骨頭高等に加齢性の骨増殖が無く、全体に滑らか。	下肢骨など破損した少量の骨。	
208	251-4	男	成人	大腿骨、上腕骨の骨幹が太い。	骨のサイズは成人段階。	破損した長骨骨幹部数点。	
208	251-4	—	9	—	歯牙萌出段階。	一部の歯、下顎骨破片など。	
210	243	不明	壮年	性差を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板、外板ともに未癒合。冠状縫合部分は内板、外板ともに一部癒合。	頭蓋骨、四肢骨の一部が遺存。多くは細かい骨片。骨質良好。	
212B	244	女	老年	側頭骨の乳様突起は中間。乳突切痕は浅い。眉上隆起や外後頭隆起は弱い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板、外板ともに癒合完了。ラムタ縫合中央部が内板で癒合完了、外板で一部癒合。咬耗はエナメル質のほぼ全面に認められる。	頭蓋骨は破片で半分以上遺存。他に四肢骨の一部が遺存。多くは破片。骨質は概ね良好。	
213	245	女	壮年	寛骨の大坐骨切痕が鈍角。側頭骨の乳様突起が小さく、乳突切痕も浅い。大腿骨頭が華奢。大腿骨の骨幹が細い。	頭蓋骨破片の矢状縫合部分が内板、外板ともに未癒合。寛骨耳状面は壮年段階。加齢性の骨増殖無し。	ほぼ全身各部の骨が残るが、いくぶん分解消失。各所に破損あり。骨質は概ね良好。	
214	246	男	壮年	踵骨が頭強。大腿骨頭が大きい。	頭蓋骨破片の冠状縫合泉門部が内板、外板ともに未癒合。咬耗はごく弱い。大腿骨骨頭高等に加齢性の骨増殖無し。	頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、足根骨など。全て破片。骨質不良。	
214掘形	251-5	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨破片。	
215	247	不明	成人	性差を示す部位の遺存無し。	骨のサイズは成人段階。	頭蓋骨が破片で半分以上遺存。骨質良好。	
216	248	男	壮年	大腿骨頭が大きい。	咬耗は一部が象牙質に進行。椎骨や上肢骨、大腿骨骨頭高等に加齢性の骨増殖無し。	四肢骨、椎骨、寛骨、足根骨、足指骨の一部が遺存。多くは破損。骨質は概ね良好。	
219	251-6	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	碎骨片。	
220	251-7	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	長骨破片。	
226	249	男	壮年	上腕骨遠位端幅が比較的大きい。	大腿骨骨頭高、尺骨関節面に加齢性の骨増殖無し。	四肢骨などが主に遺存。多くは破片。骨質不良。	
237	251-8	不明	不明	性差を示す部位の遺存無し。	年齢段階を示す部位の遺存無し。	頭蓋骨破片。	

付表3 漆器一覧表

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料		遺物番号	備考	
				文様		内	外	内	外			文様
				内	外	内	外					
1区土壙122	椀	トチノキ	A	茶		I	I					
	椀	トチノキ	A	黒		I	I					
1区溝180	椀	トチノキ	A	黒		I	I					
	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-銀・石黄	I	II	ベンガラ		As+S,Ag	体部外面-菊 玉縁部分にサビド口調整あり	
1区土壙754	椀	トチノキ	A	赤		I	X	ベンガラ			体部外面-不明	
	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-赤	I	II	ベンガラ		ベンガラ	体部外面-笹	
1区土壙783	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-赤	I	II	ベンガラ		ベンガラ		
	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-赤	I	II	ベンガラ		ベンガラ		
1区土壙855	椀	トチノキ	A	赤	透漆	I	I	ベンガラ				
	椀	トチノキ	A	赤	透漆	I	I	ベンガラ				
1区土壙1060	椀	トチノキ	A	赤	黒	I	V	ベンガラ			高台内-朱印 蒔絵-松・花木	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	I	V	ベンガラ		Au+ベンガラ ベンガラ	体部外面-丸に葉 朱顔料粒子細かい	
1区土壙1133	椀	ケヤキ	B	赤	赤	X	X	朱+ベンガラ	朱		外面-風景	
	椀	ケヤキ	B	赤	赤	I	II	朱+ベンガラ	朱		高台内-黒 (古いタイプ;根来手)	
1区土壙1313	椀	ブナ	A	赤	黒	I	II	ベンガラ		As+S, ベンガラ	高台内-黒 (古いタイプ;根来手)	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		As+S	体部外面-草花	
1区土壙1372	椀	トチノキ	A	赤	黒(茶)	I	I	ベンガラ				
	椀	トチノキ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		As+S	体部外面-向鶴 引っ掻き技法	
1区溝1660	椀	ブナ	A	黒	透漆	I	I					
1区井戸2021	椀	クルミ	B	赤	赤	I	I	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ		高台内-黒 (根来手)	
1区土壙2120	椀	ツバキ科	-	黒	黒	I	I	朱				
第2層	椀	スギ	-	赤	黒	I	I	ベンガラ		Ag		
	椀	スギ	-	赤	黒	I	II	ベンガラ				

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考
				内	外	内	外	内	外	文様		
第2層	膜面のみ	-	-	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱	朱		体部外面-三つ葉？ 引っ掻き技法
1区埋葬274	椀	ブナ	B	黒	黒	外-金箔	I	I	朱	Au	木110	高台内-朱印消し痕跡
1区埋葬313	扇	針葉樹	-	赤	赤		-	-				
1区埋葬319扁形	椀	カツラ	A	赤	赤		I	I	ベンガラ	ベンガラ		
1区埋葬342	椀	ブナ	B	赤	黒	外-紋-銀	I	II	ベンガラ	Sn	木111	体部外面-丸に蝶
1区埋葬408	椀	ブナ	B	赤	黒	外-紋-銀	I	II	ベンガラ	Sn	木112	体部外面-丸に三ツ柏
1区埋葬410	煙管	タケ	-	黒	黒		-	-			金11	下地無し
1区埋葬423	椀	トチノキ	A	茶	赤		I	I	ベンガラ(うるみ)	ベンガラ		
1区埋葬440扁形	椀	ブナ	B	黒	黒	外-紋-銀	I	II	ベンガラ	Ag		体部外面-不明
1区埋葬458	椀	トチノキ	B	赤	黒	外-紋-茶	I	II	ベンガラ	As+S		高台内-不明
1区埋葬575	椀	ブナ	B	赤	黒		I	I	ベンガラ			
1区埋葬588	椀	ブナ	B	赤	黒	外-絵-銀・石黄	I	II	ベンガラ	As+S,Ag	木113	体部外面-草花？
1区埋葬596	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-銀	I	II	ベンガラ	Sn	木119	体部外面-草花？
1区埋葬1030	櫛	イスノキ	-	赤	赤	外-紋-銀	V	V	朱+ベンガラ	Ag+ベンガラ	木72	体部外面-丸に花菱
1区埋葬1032	椀	ブナ	B	赤	黒	外-絵-銀	I	II	ベンガラ	Ag		体部外面-不明
1区埋葬1042	椀	膜面のみ	-	赤	黒		V	V	ベンガラ			
1区埋葬1119	椀	ブナ	B	赤	黒		I	I	ベンガラ		木114	
1区埋葬1135扁形	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-紋-銀	I	II	ベンガラ			体部外面-太丸に草花
1区埋葬1143	椀	ケヤキ	A	赤	赤	外-黒-絵	VII	VIII	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	木115	高台内-黒、体部外面-橘 布着せ補強、正当な根来塗系
1区埋葬1153	櫛	イスノキ	-	赤	赤		I	I	朱	朱		
1区埋葬1178	小形厨子	ヒノキ	-	黒	黒	外-金箔	V	VI		Au+Cu	木73	
1区埋葬1532	板物	ヒノキ	-	透漆	-		-	-				
1区埋葬1540	椀	ブナ	A	赤	黒	外-絵-銀	I	II	ベンガラ	Sn	木116	体部外面-桜？
1区埋葬1541	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	ベンガラ			
	板物	スギ	-	透漆	-		-	-				
	板物	ヒノキ	-	透漆	透漆		-	-			木69	
1区埋葬1555	椀	トチノキ		黒	黒		I	I			木66	
1区埋葬1560扁形	板物	スギ	-	透漆	透漆		-	-				
1区埋葬1597	椀	ブナ	B	黒	黒		I	I				
1区埋葬1600	椀	トチノキ	A	黒	黒		I	I				
1区埋葬1651	椀	ブナ	A	赤	赤		I	I	ベンガラ	ベンガラ	木67	

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考	
				内	外	内	外	内	外	文様			
1区埋葬1682	椀	クルミ	B	赤	黒	I	II	ベンガラ		ベンガラ+朱(少)		体部外面-丸に二本線、手書き肉筆	
1区埋葬2000	板物	針葉樹	-	透漆	透漆	I	I				木68		
	位牌	針葉樹	-	黒	黒	V	VI			Au+Cu	木65		
1区埋葬2046	椀	トチノキ	A	赤	黒	I	II	ベンガラ		As+S+ベンガラ	木118	体部外面-丸に花菱	
1区埋葬2069	椀	トチノキ	A	黒	黒	I	I				木117		
1区埋葬2070	椀	ハンノキ	A	赤	黒	I	II	ベンガラ		ベンガラ		体部外面-丸に矢印、手書き肉筆	
2区井戸40	椀	シオジ	B	黒	黒(茶)	X	X				木143		
	椀	クリ	B	黒	黒	I	I					高台内-刻印	
	椀	クリ	B	黒	黒	II	I			朱		見込-不明	
	椀	シオジ	A	赤	赤	X	X	朱			木142		
	椀	クリ	A	赤	黒	I	I	ベンガラ			木141	穴あき	
	椀	ブナ	B	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		朱+ベンガラ		体部外面-竹?	
	椀	ケヤキ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		朱		体部外面-松	
	椀	クリ	B	赤	黒	I	I	朱+ベンガラ					
	板物	ヒノキ	-	黒	黒	I	I						
	膜面のみ	-	-	赤	-	VII	-	朱					朱漆二層重ね塗り 朱顔料粒子細かい
2区土壇48	椀	ケヤキ	A	黒	黒	II	II			朱+ベンガラ	木123	見込・体部外面-松	
	椀	ブナ	A	黒	黒	II	II	朱+ベンガラ		朱	木124	見込・体部外面-斜格子	
	椀	クリ	A	黒	黒	II	II			朱	木125	見込・体部外面-斜格子 高台内-刻印	
	椀	クリ	A	黒	黒	I	II			朱+ベンガラ	木126	体部外面-丸に三ツ葉 高台内-刻印	
	椀	ブナ	B	黒	黒	II	II			朱		見込・体部外面-鳥?	
	椀	クリ	A	黒	黒	I	I					高台内-刻印	
	椀	トチノキ	A	黒	黒	I	II			朱		体部外面-草花? 高台内-刻印	
	椀	ケヤキ	B	赤	黒	I	I	朱+ベンガラ			木127	高台内-刻印、内-焼	
	椀	ケヤキ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		朱	木129	体部外面-桐	
	椀	ケヤキ	B	黒	黒	I	I				木137	上塗り保存状態良好	
	椀	ブナ	B	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		朱		体部外面-亀甲	

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料		遺物番号	備考
				内	外	内	外	内	外		
2区土壙48	椀	ブナ	A	赤	外-絵-赤	内	外	朱+ベンガラ	朱	木132	体部外面-草花
	椀	シオジ	B	黒	外-模様-赤	X	X	朱+ベンガラ	朱	木136	上塗り保存状態良好
	椀	カエデ属	B	赤	外-模様-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱	木128	体部外面-コンパス文 高台内-刻印
	椀	ブナ	A	黒	内-絵-赤	II	I		朱	木131	見込-葉
	椀	ケヤキ	A	黒	内・外-絵-赤	II	II		朱		見込・体部外面-松？ 高台内-刻印
	椀	ケヤキ	A	黒		V	V				
	椀	ホオノキ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱	木134	体部外面-松 修理痕跡あり
	椀	ホオノキ		黒	外-絵-赤	I	II	朱	朱		体部外面-松
	椀	ブナ	A	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱		体部外面-樹木？
	椀	シオジ	A	赤	内・外-模様-赤	V	V	朱+ベンガラ	朱		
	椀	クリ	A	黒	内-絵-赤	II	II			木130	見込-X、体部外面-D
	椀	広散孔材	A	黒	内-絵-赤	II	II		朱+ベンガラ		見込-草花？
	椀	シオジ	A	黒	内-絵-赤	X	X				高台内-刻印
	椀	ブナ	A	黒	内-絵-赤	II	I				見込-丸に草花？
	椀	トチノキ	A	黒	内・外-絵-赤	II	II		朱+ベンガラ		見込-松葉？、体部外面-葉
	椀	シオジ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱		体部外面-不明
	椀	ブナ	B	黒		X	X				
	椀	広散孔材	A	黒		I	I				
	椀	クリ	A	黒		I	I				
	椀	ブナ	A	黒	内-絵-赤	II	I		朱+ベンガラ		見込-不明
椀	ケヤキ	B	赤		I	I	朱+ベンガラ			高台内-刻印	
椀	クリ	A	赤		I	I	朱+ベンガラ			高台内-刻印	
椀	クリ	A	黒		I	I				使用痕あり	
椀	トチノキ	A	赤	外-絵-紋-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱		体部外面-丸に三ツ笹	
椀	ブナ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱	朱		体部外面-草花	
椀	ブナ	A	赤		I	I					
椀	シオジ	A	赤		I	I	朱+ベンガラ			高台内-刻印	
椀	ブナ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱		体部外面-楕	
椀	ケヤキ	A	赤		I	I					
椀	トチノキ	A	赤		I	I	朱			高台内-刻印	
椀	シオジ	A	赤		II	X	朱	朱		内-朱たまり（根来手：朱顔料 粒子細かい）	

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考	
				内	外	内	外	内	外	文様			
2区土壇48	椀	カバノキ科	A			I	I					高台内-刻印?	
	椀	ホオノキ	A	黒	外-絵-赤	I	I					体部外面-不明 高台内-朱印	
	椀	ホオノキ	A	黒		I	II					高台内-刻印、内-焼	
	椀	クルミ	B	黒	内・外-絵-赤	II	II					体部外面-松葉	
	椀	カバノキ科	B	黒	内-絵-赤	I	I					見込-繪垣、穴あき	
	椀	トチノキ	A	黒		II	I					高台内-刻印	
	椀	カバノキ科	A	黒		I	I						
	椀	クリ	B	赤		I	I	朱+ベンガラ					
	椀	ブナ	A	赤		I	I	朱+ベンガラ					
	椀	シオジ	B	赤		X	X	朱+ベンガラ					
	椀	ケヤキ	A	赤		X	X	朱					
	椀	クリ	B	赤		I	I	朱+ベンガラ					
	椀	トチノキ	A	黒	外-絵-赤	I	II						体部外面-記号
	椀	クルミ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱					体部外面-草花 内-漆樹液溜め(再利用)
	椀	ホオノキ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ					体部外面-不明
	椀	ブナ	B	黒	内・外-絵-紋-赤	II	II	朱+ベンガラ					見込-不明、体部外面-丸に五ツ葉
	椀	広散孔材	B	黒	内・外-絵-赤	II	II	朱					見込-橘、体部外面-橘樹
	椀	カバノキ科	A	黒	外-絵-赤	I	II	朱					体部外面-景色
	椀	カバノキ科	B	黒	外-絵-紋-赤	I	II	朱					体部外面-三ツ星
	椀	カバノキ科	B	黒	外-絵-赤	I	II	朱					体部外面-丸に草花
椀	広葉樹材	B	黒	内・外-絵-赤	II	II						体部外面-依 引っ掻き技法	
椀	トチノキ	A	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ					体部外面-草花	
椀	クルミ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ					体部外面-草花	
椀	ブナ	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ					体部外面-終?、口縁-焼	
椀	トチノキ	A	黒		I	I							
椀	クリ	B	赤		I	I	朱+ベンガラ					内・外面に赤褐色系漆を上に重ね塗り	
椀	ケヤキ	B	赤褐色		XII		朱					体部外面-不明	
椀	クルミ		黒	内-絵-赤	II							体部外面-不明	
椀	カバノキ科	A	黒	内・外-絵-赤	II								
椀	ケヤキ	B	赤		V		朱						
椀	ブナ	B	赤		I		朱+ベンガラ						
椀	クリ	B	赤		I		朱+ベンガラ						

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考
				内	外	内	外	内	外	文様		
2区土壙48	椀	クリ	B	赤	黒	I	I	朱+ベンガラ				
	椀	ケヤキ	B	赤	黒	I	I	朱				
	椀	シオジ	A	赤	赤	V	V	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ			(根来手)
	椀	シオジ	A	赤	赤	X	XI	朱	朱			体部外面-草花 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城
	椀	ケヤキ	B	赤	赤	V	V	朱	朱			(根来手)
	椀	ケヤキ	A	赤	赤	X	X	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ			
	合子蓋	ヒノキ	-	黒	黒	I	I					
	樽蓋板	スギ	-	透漆	透漆	-	-					木133
	板物	スギ	-	透漆	透漆	-	-					木94
	刷毛	ヒノキ	-	透漆	透漆	-	-					木87
	刷毛	ヒノキ	-	透漆	透漆	-	-					木84
	椀	シオジ	B	赤	赤	X	X	朱	朱			木85
	椀	クリ	B	赤	黒	I	II	朱		朱		木152 内-焼
	椀	バラ科	B	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		朱		木158 体部外面-草花 高台内-刻印
椀	バラ科	A	赤	黒	I	I	朱		朱		木156 体部外面-丸に樹木	
2区土壙49	椀	クリ	B	赤	黒	I	I	朱				高台内-刻印
	椀	ブナ	B	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ		朱		体部外面-梅花?
	椀	クリ	B	黒	黒	I	I			朱		高台内-朱印
	椀	ケヤキ	B	黒	黒	II	II			朱		高台内-山水? 穴あき
	椀	クリ	B	黒	黒	II	II			朱		体部内-外面-山水? 穴あき
	椀	トチノキ	A	黒	黒	I	II			朱		見込-丸に一文字 高台内-刻印
	椀	クリ	B	黒	黒	I	II			朱		見込-体部外面-鳥?
	椀	シオジ	B	赤	赤	V	VI	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		体部外面-不明
	椀	ケヤキ	A	赤	赤	X	X	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	黒		体部外面-草花 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城
	椀	トチノキ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		(根来手)
	椀	ケヤキ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		体部外面-花 引っ掻き技法
	椀	ブナ	B	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		体部外面-松
	椀	ブナ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		体部外面-草花 高台内-刻印
	椀	トチノキ	A	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		引っ掻き技法
椀	ブナ	B	赤	黒	I	II	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		体部外面-葉 高台内-刻印	
椀	ケヤキ	A	黒	黒	I	I	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱		体部外面-梅花	

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考
				文様		内	外	内	外	文様		
				内	外							
2区土壘49	椀	クルミ	A	黒	外-絵-赤	I	II			朱		体部外面-雁 見込-松?
	椀	ケヤキ	A	黒	内・外-絵-赤	II	II			朱		体部外面-草花 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城
	椀	シオジ	B	赤	外-絵-黒	X	XI	朱	朱	黒		体部外面-亀甲に五ツ星 引っ掻き技法、類例：大坂城・ 堺・姫路城
	椀	シオジ	B	赤	外-紋・絵-黒	X	XI	朱	朱	黒		体部外面-分銅 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城
	椀	シオジ	A	赤	外-紋-黒	X	XI	朱	朱	黒		体部外面-三巴 体部外面-松?、高台内-「上」 高台内-刻印
	椀	ホオノキ	B	赤	外-絵・紋-赤			朱+ベンガラ		朱		体部外面-刻印
	椀	カツラ	A	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱	朱		体部外面-松?、高台内-「上」 高台内-刻印
	椀	ブナ	B	赤	外-絵・紋-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱	朱		体部外面-梅花 高台内-刻印
	椀	広葉孔材	A	赤	黒		I	朱	朱	朱		高台内-刻印
	椀	シオジ	B	赤	黒		I	朱+ベンガラ		朱		高台内-刻印・朱印
	椀	広散孔材	A	赤	黒		I	朱+ベンガラ		朱		高台内-刻印
	椀	カツラ	A	赤	黒		I	朱+ベンガラ		朱		高台内-刻印
	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	朱		朱		体部外面-松?
	椀	ブナ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱	朱		体部外面-草花?
	椀	ブナ	A	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ	朱	朱	体部外面-草花? 体部外面-二重丸に笹、高台内 -不明、内-焼
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵・紋-赤	I	II	朱	朱	朱	底部・体部内面-不明 高台内-刻印
	椀	ブナ	A	赤	黒	内-模様-黒	II	I	朱		朱+ベンガラ	体部外面-草花
	椀	ブナ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-橘、引っ掻き技法
	椀	ホオノキ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱	朱	朱	体部外面-不明 高台内-刻印
	椀	ケヤキ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	I	朱+ベンガラ		朱	体部外面-不明
椀	広散孔材	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-松、鶴 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城	
椀	ブナ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	I	朱+ベンガラ		朱	体部外面-丸に橘 高台内-刻印	
椀	シオジ	B	赤	黒	外-紋-黒	X	XI	朱	朱	黒	木154	体部外面-松、鶴 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城
椀	シオジ	B	赤	黒	外-絵・紋-黒	X	XI	朱	朱	黒	木147	体部外面-丸に橘 高台内-刻印

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考	
				内	外	内	外	内	外	文様			
2区土壙49	椀	コナラ節	B	黒	内-絵-赤	II	I			朱		見込-不明	
	椀	クリ	B	黒	内-絵-赤	II	I			朱		見込-不明 高台内-刻印	
	椀	トチノキ	A	赤		I	I	ベンガラ					
	椀	クリ	A	黒	外-絵-赤	I	II			朱+ベンガラ		見込、体部外面-雁 高台内-刻印	
	椀	ケヤキ	B	黒	内-絵-赤	II	I			朱		見込-不明	
	椀	クリ	A	黒		I	I						
	椀	クリ	A	黒		I	I						
	椀	シオジ	A	赤	外-絵-黒	V	VI		朱	朱		高台内-朱印 体部外面-草花 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城	
	椀	シオジ	B	赤	外-絵-黒	X	XI	朱	朱			体部外面-草花 引っ掻き技法、 類例：大坂城・堺・姫路城	
	椀	ケヤキ	A	赤	赤	V	V	朱	朱				
	椀	シオジ	B	赤	赤	X	X	朱	朱				
	椀	シオジ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-扇に松	
	椀	ブナ	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	体部外面-鶴・草花？	
	椀	コナラ節	B	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	体部外面-不明	
	椀	ホオノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-草花	
	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	朱+ベンガラ				
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-紋-赤	I	II	朱		朱	体部外面-二重丸に笹	
	椀	クルミ	B	赤	黒	外-絵-紋-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-不明 引っ掻き技法	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-紋-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-丸に梅鉢	
	椀	ブナ	A	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-宝袋	
椀	ブナ	-	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-竹		
椀	ブナ	-	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	体部外面-終？ 引っ掻き技法		
椀	コナラ節	-	黒	黒	外-絵-赤	I	II			朱	体部外面-三ツ星		
椀	トチノキ	A	黒	黒	外-絵-赤	I	II			朱	体部外面-不明		
椀	ケヤキ	B	黒	黒	外-絵-紋-赤	I	II			朱	体部外面-丸に亀甲に三ツ葉		
椀	ブナ	B	赤	黒		I	I	朱+ベンガラ			高台内-刻印、内-焼		
椀	ブナ	A	赤	黒		I	I	朱					
椀	ブナ	B	赤	黒		I	I	朱					
椀	ブナ	A	赤	黒		I	I	朱+ベンガラ					
椀	カツラ	A	赤	黒		I	I	朱+ベンガラ					
椀	クリ	-	赤	黒		I	I	朱+ベンガラ			高台内-刻印		

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考
				内	外	内	外	内	外	文様		
2区土壘49	椀	ブナ	B	黒			I	I				高台のみ
	椀	トチノキ	A	黒	内-絵-赤	II	I			朱+ベンガラ		見込-不明
	椀	ケヤキ	-	黒		I	I					見込-不明
	椀	ケヤキ	A	黒	内・外-絵-赤	VI	VI			朱		見込・体部外面-不明
	椀	ブナ	A	黒	内-絵-赤	II	I			朱		見込-不明
	椀	ハンノキ	A	黒	内-絵-赤	II	I			朱+ベンガラ		見込-不明
	椀	クリ	A	黒		I	I					
	椀	クルミ	A	赤	外-絵-赤	I	II		朱+ベンガラ	朱		体部外面-不明
	椀	クルミ	A	赤		I	I		朱+ベンガラ			
	椀	ヒノキ	B	赤		I	I		朱			内-焼
	椀	ブナ	A	赤		I	I		朱+ベンガラ			
	椀	ブナ	A	赤		I	I		朱+ベンガラ			
	椀	ブナ	A	赤		I	I		朱+ベンガラ			
	椀	広散孔材	A	赤		I	I		朱			(根来手)
	椀	シオジ	B	赤		X	X					
	椀	クリ	A	赤		I	I		朱+ベンガラ			
	椀	ブナ	B	赤		I	I		朱+ベンガラ			見込・体部外面-不明
	椀	クルミ	A	黒		II	II			朱		
	椀	コナラ節	A	黒		I	I					
	椀	シオジ	B	赤		X	X		朱			(根来手)
椀	シオジ	B	赤		X	X		朱+ベンガラ	朱+ベンガラ		(根来手)	
椀	ケヤキ	B	赤		VII	VII		朱	朱		布着せ補強、正当な根来塗	
椀	シオジ	A	赤		X	X		朱+ベンガラ	朱+ベンガラ		(根来手)	
椀	シオジ	-	赤		X	X		朱	朱		体部外面-不明 引っ掻き技法、 類例：大坂城・塀・姫路城	
椀	ホオノキ	B	黒		I	I						
合子	ホオノキ	C	黒		I	I					木153	
樽蓋板	スギ	-	透漆	透漆		-					木99	
板物	ヒノキ	A	黒		VI	VI						
板物	ヒノキ	-	赤褐	赤褐	V	V		ベンガラ	ベンガラ		木105	
板物	ヒノキ	-	-	黒	-	I						
板物	スギ	-	透漆	透漆	-	-						
板物	ヒノキ	-	黒	透漆	I	I					木97	
板物	ヒノキ	-	濃紅	黒	V	-		朱潤み				
板物	針葉樹	-	黒	黒	I	I					木107	

遺構	器型	樹種	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用顔料			遺物番号	備考
				内	外	内	外	内	外	文様		
2区土壙49	板物	ヒノキ	-	黒		I	I				木108	
	板物	ヒノキ	-	赤		V	V	朱+ベンガラ				
	板物	ヒノキ	-	赤		V	V	朱+ベンガラ				
	板物	ヒノキ	-	透漆		-	-				木106	
	板物	ヒノキ	-	黒		I	I					
	板物	不明	-	黒		I	I				木98	
	板物	針葉樹	-	-		-	-					
	板物	不明	-	黒		I	I					
2区井戸50	椀	クリ	B	黒	内・外-絵-赤	II	II			朱	木139	見込-橘、体部内面-一文字二星、体部外面-橘、一文字二星高台内-刻印・朱印
	椀	クリ	A	黒	内・外-絵-赤	II	II			朱		見込-菊花?、体部外面-不明高台内-刻印・朱印
	椀	広散孔材	B	赤	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱+ベンガラ		体部外面-松
2区土壙51	板物	ヒノキ	-	透漆		-	-				木109	
	椀	ブナ	A	黒	外-紋-銀	I	II			Ag	木140	体部外面-太丸に花菱
	椀	トチノキ	A	赤		I	I	ベンガラ				
	椀	トチノキ	A	赤		I	I	ベンガラ				内-焼
	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-茶	I	II	ベンガラ		As+S+ベンガラ		体部外面-松・草花
	椀	トチノキ	A	茶		I	I	ベンガラ(うるみ)	ベンガラ(うるみ)			
	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-茶	I	II	ベンガラ		As+S+ベンガラ		体部外面-不明
2区土壙67	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-茶	I	II	ベンガラ		As+S+ベンガラ		体部外面-草花?
	椀	ケヤキ	B	赤		X	X	ベンガラ				
	椀	トチノキ	A	赤	外-絵-銀	I	II	ベンガラ		Ag		体部外面-葉に丸
2区土壙174	椀	トチノキ	A	赤		I	ベンガラ					
2区土壙189	板物	スギ	-	赤		I	ベンガラ					

石 24

(上欠) 元信(壬戌)口(以下欠)

石 25

妙法(以下欠)

石 26

寛文九己酉年

(上欠) 妙善靈位

十二月廿九日

石 29

(上欠) 兵衛

石 30

(上欠) 大(下欠)

石 31

(前面)

妙法

慈父道順 妙唱禪定尼

悲母妙順 西岸淨生靈

(右側面)

元禄十五壬午年十月三日

石18

宗円 享保八癸卯  
二月二日  
妙法〔善力〕 享保七壬寅  
七月十五日

石19

〔前面〕  
信了宗達 寛光宗智  
妙法 恵光妙智 貞応妙恵

〔左側面〕

土佐屋五兵衛

※「土佐屋」の文字を削った跡がある。

石20

〔前面〕

妙法信尼

〔左側面〕

天保九戌年十二月十九日

塩屋藤兵衛

娘登羽事

石21

寛文元年辛丑曆  
南無妙法蓮華經 寿清〔浄力〕  
二月十日 妙寿〔浄力〕  
逆修

石22

寛永四年□月□日 寛永□年九月廿□  
宗円〔浄力〕 寛永□二月廿七日  
南無妙法蓮華經 妙慶〔浄力〕  
妙円〔浄力〕 寛永□四月廿四日  
寛永十七年四月十六日 妙□〔浄力〕

石23

〔前面〕

元禄四辛未年

喜見院妙空□尼

六月二十一日

〔右側面〕

吉田喜右衛門  
施主 同閑悦〔浄力〕

石10

(前面)

妙法 夏岳院了然居士

(右側面)

文化五辰年五月十四日

(左側面)

俗名 肥後高野左太夫

石11

五月

南無妙法蓮華經 妙永靈位

廿三日

石12



南無妙□<sup>(送)</sup>  
(以下文字見えず)

□□□□十月□日

石14

元和五年

妙法蓮華經 妙知童女

正月廿三日

※一石五輪塔。「妙法蓮華經」はそれぞれ空、風、火、水、地輪部に刻す。

石15

寛永元年

(上欠) 蓮華經 童子法泉靈

五月二日

※一石五輪塔。風空輪欠。

石16

寛永□□

道久靈位

三月一日

南無妙法蓮華經

寛永十□□

妙久靈□□

七月□□

石17

寛文十一年

南無妙法蓮華經 為妙興童女

亥三月十三日

墓石積文

石5

(前面)

宗順 妙空  
本法宗理 各靈  
妙法 本室妙理

妙宗 妙香

(右側面)

元文改元<sub>丙辰</sub>天 向嶋

七月廿五日 大和屋

石6

(前面)

妙法 春利童子

(右側面)

宝永七<sub>庚寅</sub>年

(左側面)

二月二十七日

石7

(前面)

妙法 是則妙進

(右側面)

天明二<sub>寅</sub>年十月廿一日

(左側面)

紀州 坂口文藏母

石8

(前面)

十月廿日 五月十三日

妙法

淨円 宗徳 妙林<sub>七月三日</sub> 各靈  
妙薫 妙徳 妙寿<sub>正月二日</sub> 妙貞<sub>四月十一日</sub>

(右側面)

施主 加祢

石9

元禄十七<sub>申</sub>三月

妙法

如幻(以下欠)  
妙幻(以下欠)  
宝永五子□

木216

小林□

麻二郎(カ)

□

木218

明和八卯年

(テリシ)  
本光了信居士

八月二日

※キリークは阿弥陀如来の種子なので、宗派的には合わないと思われる。

木219

(上欠)

□(禪カ)定

□(方カ)仏

※横材。木175と同じく「深入禪定 見十方仏」と思われる。

木220

六

木221

□□

倉山(カ)

木222

(表)

(上欠)

□□  
□□

□衛門

(裏)

庄南村

□□□  
御馳走奉

木223

□

※一文字か。判読できず。

木224

納豆

妙福寺

木225

納豆

妙福寺

木195

微妙浄 (下欠)

※横材。『法華経』提婆達多品の偈「微妙浄法身 具相三十二」の一部か。

木196

(上欠)

□ 定

方 仏

※横材。『法華経』安樂行品の偈「深入禅定 見十方仏」の一部か。木175参照。

木200

□

(上欠)

云

木201

※墨痕あるが判読できず。上部は鬚題目の線か。

木202

□ 罪福相

※『法華経』提婆達多品の偈「深達罪福相 遍照於十方」。木182参照。

木203

大白□

木204

天下太平

増に兼ぬ

南無釈迦牟尼仏 鬼子母神

天明元辛丑年  
山城之国伏見

南無妙法蓮華経

壹千寺参詣

南無 (多字) 如来 (下巻) 刹女

竹中町大□屋豊□

国土安穩

四月二十四日

※納経札か。上端部の「遊行無畏」「如獅子王」は『法華経』安樂行品の偈。

木205

※墨痕あるが判読不能。

木206

□ 節

□ □

□ 土

※横材。二行目から三行目にかけて斜めの墨線(上の方にあった題目のひげか)。二行目と三行目の間に縦の墨線。三行目「土」は下の横面の右端から下に線を伸ばす。

木186

(上欠)

□来世

□保廿乙卯年

妙法蓮華經

惠光妙智靈

十一月朔日

□作仏

※横材。

木187

前

木188

(上欠) □ □ (下欠)

※横材。

木189

前

木190

□と可□

木191

※横材で上の方に曲線がある。題目のひげか。

木192

(上欠)

証大

享保十九甲寅年

□為妙玉靈尼

十一月廿三日

菩提

※横材。

木193

(上欠)

保十五戌天

□院妙閑□

月十三日

※横材。一行目「保」は「享保」。

木194

(上欠か) 仏 (下欠か)

※横材。

木178

(上欠)

於未來世

□ 蓮華經 本室妙經信女

□ 得作仏 (須之)

木179

諸法從本來 常自寂滅相

仏子行道已 來世得作仏

※『法華經』方便品の偈。

木180

(上欠か) 仏果菩□

木181

※題目のひげと思われる曲線あり。横材か。

木182

(下欠)  
偏照於十方

※横材。『法華經』提婆達多品の偈「深達罪福相 遍照於十方」。

木183

(表)

□ 身成仏

久遠法界衆□  
平等利潤□

(裏)

□ 無多宝如来

□ 証大井 (菩提)

木184

□ 井 (菩提)

□ 屋六兵衛

木185

(上欠)

來世

延享元甲子天

□ 蓮華經 新寂持院 (カ) 慶信女 (妙)

八月九日

得作仏

※横材。「甲子」は板に木の節があつて墨が乗つていないため一部しか読めないが、年号から推定。また「妙」は扁のみ見える。

木170

(上欠)

□入禅

無妙法蓮

□十方仏

※横材。下端部は文字が消えている。

木171

(上)

□  
□  
□□□

※右下隅に墨痕あるが判読不能。材は縦目だが横になって出土。転用材か。

木172

四郎九□□□  
(兵衛カ)

山 定 (記号)

木173

上行所伝

妙法

※上行は『法華経』從地涌出品に登場する上行菩薩の略。日蓮は自らを上行菩薩の再誕とした。

木174

□

□□□

□日

※横材。

木175

深入禅定

見十方仏

※横材。『法華経』安樂行品の偈。

木176

前

※横材。

木177

□月□

□

□蓮華経

□□井(音)

※横材。下部左側に墨線二本あり。

1区出土木製品墨書の積文

木82

深達罪

※横材。『法華經』提婆達多品の偈「深達罪福相 遍照於十方」。

木161

□ □

⊕ 枕 □ □ 大橋(カ)

※右の行の上は「一」のような線、下は「入」のような字。

木162

□ □ □  
(源カ)

木163

※墨痕あるが判読不能。

木164

□

□ □ □ □ □  
(兵衛カ)

木165

⌒上 □

木166

□ □ □

木167

□ □ □ □ □  
(無カ) (妙カ)  
(上欠)

□道(仏カ)

※横材。一行目の第三字は「法」に見えない。一行目と二行目の間に題目のひげと思われる線がある。

木168

□ □ □ □ □  
(行カ)  
(上欠)

□ □

※横材。

木169

安

※墨で囲った中に「安」と書く。材に対して斜め。

积 文

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと							
書名	伏見城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-27							
編著者名	大立目一・櫻井みどり・能芝妙子・山口 眞・山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 たけなかつちやう ほんち 竹中町640番地	26100	1172	34度 55分 59秒	135度 45分 51秒	2005年6月 3日～2006 年9月1日	4,435㎡	総合庁舎 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伏見城跡	城跡	古墳時代後期～ 室町時代前期	なし	土師器・瓦器・灰釉陶 器・輸入陶磁器・瓦				
		室町時代後期	溝・土壙・井戸・ 柱穴など	土師器・瓦器・焼締陶 器・国産施釉陶器・輸 入陶磁器・ガラス製品		集落を発見した。		
		桃山時代	土壙・井戸・竈・ 柱穴・段差など	土師器・瓦器・焼締陶 器・国産施釉陶器・輸 入陶磁器・瓦・土製品 ・木製品・漆器		城下町の遺構が明 らかとなった。		
		江戸時代	墓地・溝・土壙・ 井戸・竈・柱穴など	土師器・瓦器・焼締陶 器・国産施釉陶磁器・ 輸入陶磁器・瓦・土製 品・木製品・漆器・銭 貨・金属製品・骨製品 ・石製品・ガラス製品 ・水晶製品		墓地の全容を明ら かにした。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27

## 伏見城跡

発行日 2007年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961